

基本計画書

基本計画									
事項	記入欄						備考		
計画の区分	研究科の専攻の設置								
フリガナ設置者	コリウカクイノクホジシキョウシヨウカク 国立大学法人 九州大学								
フリガナ大学の名称	キョウシヨウカク 九州大学 (Kyushu University)								
大学本部の位置	福岡市西区元岡744								
大学の目的	九州大学は、教育基本法（平成18年法律第120号）の精神に則り、学術の中心として広く知識を授けるとともに、深く専門の学芸を教授研究し、知的、道徳的及び応用的能力を展開させることを目的とする。								
新設学部等の目的	<p>九州大学大学院芸術工学府では、その前身となる九州芸術工科大学の創設以来、現代社会において、技術の独走によって技術と人間の関係に歪みが生じることのないように、人間の特性を科学的に把握しながら、技術を真に人類の福祉と人間生活の充実に資するものとする、との理念に基づき教育・研究を進めてきた。この理念を一言で表すならば「技術の人間化」であり、「技術の人間化」を実現するための研究分野として欧米における“Design”にあたる学問分野である「芸術工学」が創設された。九州芸術工科大学においては、「高次のデザイナー」を育成するため文系、理系、芸術系などの区別にとられない学部教育、大学院教育を行う伝統が形成され、現在に受け継がれている。</p> <p>一方、近年、デザインの領域、デザイナーの役割が拡大している。芸術工学が設立した時期のデザインは形や色など「モノ」の意匠的成果を目的としていたが、近年は「モノ」が使われることを想定したユーザーエクスペリエンス（UX）や「モノ」を介するサービス、「モノ」の使われ方・仕組みという「コト」の側面、さらに、「モノ」が使われることで実現されるかもしれない将来の社会の在り方などの「ビジョン」さえもデザインの概念に含まれるようになってきている。このことが社会からのデザインに対するニーズの変化にも反映し、デザインに関連する多くの企業への調査によれば、デザイン領域の変化に対応するために「領域を横断する能力を持つ人材」、「社会変化に柔軟に対応し、将来の姿・仕組みを構想できる人材」といった新たなデザイン人材が求められている。</p> <p>加えて、デザインの学問領域でも新たな潮流が生まれている。例えば、エネルギー問題や地球環境に対する危機が社会問題化したことに対応して、自然環境との共生を目指す「トランジション・デザイン」や、資本主義が限界を迎えているという認識のもとオルタナティブな世界を模索する「スペキュラティブ・デザイン」など、デザイン学の扱う領域の拡大深化が続いている。</p> <p>このような中でデザイン学を先導すべき大学の果たす役割が問われており、「技術の人間化」という理念を掲げる芸術工学府がその本来の目的を果たすためには、多方面にわたる社会の変化に対応するデザインを実践するプロフェッショナル、デザイン学を先導する研究者の育成が求められている。</p> <p>デザイン領域の拡大、社会の変化に合わせて、さまざまな問題に適切に対処しうる人材を育てるために、修士課程では芸術工学専攻とデザインストラテジー専攻を統合した1専攻とし、その中に6つのコース（ストラテジックデザイン、環境設計、音響設計、人間生活デザイン、メディアデザイン、未来共生デザイン）を設け、社会の求める諸分野においてデザインを実践するプロフェッショナルを養成する。博士後期課程は特定の分野にとられない先導的な研究者を育成するため、芸術工学専攻とデザインストラテジー専攻を統合して1専攻とする。</p>								
新設学部等の概要	新設学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	開設時期及び開設年次	所在地	
	大学院芸術工学府 (Graduate School of Design) (修士課程) 芸術工学専攻 (Department of Design)	年	人	年次人	人	修士 (芸術工学) (Master of Design) 修士 (デザイン ストラテジー) (Master of Design Strategy)	令和4年4月 第1年次	福岡県福岡市南区 塩原4丁目9番1号	

	(博士後期課程) 芸術工学専攻 (Department of Design)	3	30	-	90	博士 (芸術工学) (Doctor of Philosophy in Design) 博士 (工学) (Doctor of Engineering)	令和4年4月 第1年次	福岡県福岡市南区 塩原4丁目9番1号	[基礎となる学部] 芸術工学部芸術工学科
	計	5	150	-	330				
同一設置者内における変更状況 (定員の移行, 名称の変更等)		<p>芸術工学府 芸術工学専攻 (廃止) 修士課程 (△92) 博士後期課程 (△25) デザインストラテジー専攻 (廃止) 修士課程 (△28) 博士後期課程 (△5) ※令和4年4月学生募集停止</p> <p>芸術工学府 芸術工学専攻 修士課程 (120) (令和4年4月事前伺い) 博士後期課程 (30) (令和4年4月事前伺い)</p> <p>マス・フォア・イノベーション連係学府 (研究科等連係課程基本組織) 博士前期課程 (12) 博士後期課程 (14)</p>							
教育課程	新設学部等の名称	開設する授業科目の総数				卒業要件単位数			
		講義	演習	実験・実習	計				
	芸術工学府 芸術工学専攻 (修士課程)	67 科目	108 科目	3 科目	178 科目	40 単位			
	芸術工学府 芸術工学専攻 (博士後期課程)	0 科目	5 科目	0 科目	5 科目	10 単位			
教	学部等の名称		専任教員等					兼任教員等	
			教授	准教授	講師	助教	計	助手	
	新設分	芸術工学府 (修士課程)	人	人	人	人	人	人	人
		芸術工学専攻 (博士後期課程)	19 (22)	35 (35)	3 (3)	20 (20)	77 (80)	0 (0)	7 (7)
		芸術工学専攻	19 (23)	34 (35)	3 (3)	11 (11)	67 (72)	0 (0)	3 (3)
		計	19 (23)	35 (35)	3 (3)	20 (20)	77 (81)	0 (0)	7 (7)
	既設分	人文学府							
		人文基礎専攻 修士課程	7 (7)	9 (9)	2 (2)	0 (0)	18 (18)	0 (0)	7 (7)
		人文基礎専攻 博士後期課程	7 (7)	9 (9)	2 (2)	0 (0)	18 (18)	0 (0)	0 (0)
		歴史空間論専攻 修士課程	5 (5)	6 (6)	2 (2)	0 (0)	13 (13)	0 (0)	22 (22)
		歴史空間論専攻 博士後期課程	6 (6)	6 (6)	2 (2)	0 (0)	14 (14)	0 (0)	0 (0)
		言語・文学専攻 修士課程	8 (8)	5 (5)	2 (2)	0 (0)	15 (15)	0 (0)	14 (14)
		言語・文学専攻 博士後期課程	8 (8)	6 (6)	2 (2)	0 (0)	16 (16)	0 (0)	0 (0)
地球社会統合科学府									
地球社会統合科学専攻 修士課程	28 (28)	27 (27)	6 (6)	4 (4)	65 (65)	0 (0)	10 (10)		
地球社会統合科学専攻 博士後期課程	30 (30)	26 (26)	6 (6)	0 (0)	62 (62)	0 (0)	6 (6)		

員

組

人間環境学府							
都市共生デザイン専攻 修士課程	4 (4)	3 (3)	0 (0)	3 (3)	10 (10)	0 (0)	14 (14)
都市共生デザイン専攻 博士後期課程	5 (5)	3 (3)	0 (0)	3 (3)	11 (11)	0 (0)	1 (1)
人間共生システム専攻 修士課程	4 (4)	4 (4)	1 (1)	0 (0)	9 (9)	0 (0)	4 (4)
人間共生システム専攻 博士後期課程	7 (7)	7 (7)	1 (1)	0 (0)	15 (15)	0 (0)	0 (0)
行動システム専攻 修士課程	4 (4)	9 (9)	3 (3)	0 (0)	16 (16)	0 (0)	4 (4)
行動システム専攻 博士後期課程	6 (6)	9 (9)	2 (2)	0 (0)	17 (17)	0 (0)	0 (0)
教育システム専攻 修士課程	14 (14)	9 (9)	1 (1)	0 (0)	24 (24)	0 (0)	3 (3)
教育システム専攻 博士後期課程	8 (8)	9 (9)	1 (1)	0 (0)	18 (18)	0 (0)	0 (0)
空間システム専攻 修士課程	4 (4)	8 (8)	0 (0)	3 (3)	15 (15)	0 (0)	14 (14)
空間システム専攻 博士後期課程	4 (4)	8 (8)	0 (0)	3 (3)	15 (15)	0 (0)	1 (1)
実践臨床心理学専攻 専門職学位課程	4 (4)	3 (3)	0 (0)	0 (0)	7 (7)	0 (0)	3 (3)
法学府							
法政理論専攻 修士課程	26 (26)	18 (18)	0 (0)	0 (0)	44 (44)	0 (0)	21 (21)
法政理論専攻 博士後期課程	35 (35)	18 (18)	0 (0)	0 (0)	53 (53)	0 (0)	5 (5)
法務学府							
実務法学専攻 専門職学位課程	12 (12)	1 (1)	0 (0)	0 (0)	13 (13)	2 (2)	48 (48)
経済学府							
経済工学専攻 修士課程	9 (9)	8 (8)	2 (2)	0 (0)	19 (19)	0 (0)	4 (4)
経済工学専攻 博士後期課程	9 (9)	8 (8)	2 (2)	0 (0)	19 (19)	0 (0)	4 (4)
経済システム専攻 修士課程	12 (12)	10 (10)	2 (2)	0 (0)	24 (24)	0 (0)	5 (5)
経済システム専攻 博士後期課程	12 (12)	11 (11)	2 (2)	0 (0)	25 (25)	0 (0)	6 (6)
産業マネジメント専攻 専門職学位課程	7 (7)	5 (5)	1 (1)	2 (2)	15 (15)	0 (0)	8 (8)
理学府							
物理学専攻 修士課程	13 (13)	16 (16)	1 (1)	10 (10)	40 (40)	0 (0)	12 (12)
物理学専攻 博士後期課程	13 (13)	16 (16)	1 (1)	10 (10)	40 (40)	0 (0)	6 (6)
化学専攻 修士課程	17 (17)	18 (18)	2 (2)	16 (16)	53 (53)	0 (0)	12 (12)
化学専攻 博士後期課程	17 (17)	18 (18)	2 (2)	16 (16)	53 (53)	0 (0)	5 (5)
地球惑星科学専攻 修士課程	12 (12)	16 (16)	0 (0)	7 (7)	35 (35)	0 (0)	8 (8)
地球惑星科学専攻 博士後期課程	12 (12)	16 (16)	0 (0)	7 (7)	35 (35)	0 (0)	1 (1)
数理学府							
数理学専攻 修士課程	32 (32)	22 (22)	0 (0)	17 (17)	71 (71)	0 (0)	18 (18)
数理学専攻 博士後期課程	32 (32)	22 (22)	0 (0)	17 (17)	71 (71)	0 (0)	2 (2)
システム生命科学府							
システム生命科学専攻 博士課程	31 (31)	24 (24)	4 (4)	25 (25)	84 (84)	0 (0)	17 (17)
医学系学府							
医学専攻 博士課程	47 (47)	37 (37)	14 (14)	21 (21)	119 (119)	0 (0)	5 (5)
医科学専攻 修士課程	46 (46)	40 (40)	12 (12)	22 (22)	120 (120)	0 (0)	5 (5)

織

の

保健学専攻 修士課程	15 (15)	6 (6)	9 (9)	7 (7)	37 (37)	0 (0)	48 (48)
保健学専攻 博士後期課程	15 (15)	5 (5)	1 (1)	0 (0)	21 (21)	0 (0)	0 (0)
医療経営・管理学専攻 専門職学位課程	8 (8)	3 (3)	2 (2)	2 (2)	15 (15)	0 (0)	4 (4)
歯学府							
歯学専攻 博士課程	19 (19)	12 (12)	15 (15)	37 (37)	83 (83)	0 (0)	30 (30)
薬学府							
創薬科学専攻 修士課程	15 (15)	9 (9)	2 (2)	0 (0)	26 (26)	0 (0)	34 (34)
創薬科学専攻 博士後期課程	6 (6)	2 (2)	1 (1)	5 (5)	14 (14)	0 (0)	0 (0)
臨床薬学専攻 博士課程	9 (9)	7 (7)	1 (1)	5 (5)	22 (22)	0 (0)	0 (0)
工学府							
材料工学専攻 修士課程	7 (4)	5 (0)	0 (0)	0 (0)	12 (4)	0 (0)	3 (3)
材料工学専攻 博士後期課程	7 (4)	5 (0)	0 (0)	0 (0)	12 (4)	0 (0)	0 (0)
応用化学専攻 修士課程	14 (5)	18 (0)	0 (0)	0 (1)	32 (6)	0 (0)	8 (8)
応用化学専攻 博士後期課程	14 (5)	4 (0)	0 (0)	0 (1)	18 (6)	0 (0)	8 (8)
化学工学専攻 修士課程	7 (3)	5 (2)	0 (0)	0 (0)	12 (5)	0 (0)	6 (6)
化学工学専攻 博士後期課程	7 (3)	1 (2)	0 (0)	0 (0)	8 (5)	0 (0)	0 (0)
機械工学専攻 修士課程	21 (20)	14 (13)	0 (0)	16 (15)	51 (48)	0 (0)	10 (10)
機械工学専攻 博士後期課程	19 (18)	14 (13)	0 (0)	16 (15)	49 (46)	0 (0)	0 (0)
水素エネルギーシステム専攻 修士課程	9 (9)	7 (4)	0 (0)	5 (5)	21 (18)	0 (0)	18 (18)
水素エネルギーシステム専攻 博士後期課程	9 (9)	7 (4)	0 (0)	5 (5)	21 (18)	0 (0)	12 (12)
航空宇宙工学専攻 修士課程	9 (5)	7 (6)	0 (0)	5 (8)	21 (19)	0 (0)	12 (12)
航空宇宙工学専攻 博士後期課程	9 (5)	5 (4)	0 (0)	0 (0)	14 (9)	0 (0)	0 (0)
量子物理学専攻 修士課程	8 (10)	8 (9)	0 (0)	9 (8)	25 (27)	0 (0)	15 (15)
量子物理学専攻 博士後期課程	7 (9)	7 (8)	0 (0)	0 (0)	14 (17)	0 (0)	2 (2)
船舶海洋工学専攻 修士課程	8 (8)	3 (3)	0 (0)	0 (0)	11 (11)	0 (0)	4 (4)
船舶海洋工学専攻 博士後期課程	8 (8)	3 (3)	0 (0)	0 (0)	11 (11)	0 (0)	0 (0)
地球資源システム工学専攻 修士課程	4 (3)	5 (4)	0 (0)	6 (7)	15 (14)	0 (0)	6 (6)
地球資源システム工学専攻 博士後期課程	7 (6)	7 (7)	0 (0)	0 (0)	14 (13)	0 (0)	0 (0)
共同資源工学専攻 修士課程	3 (3)	4 (4)	0 (0)	0 (0)	7 (7)	0 (0)	7 (7)
土木工学専攻 修士課程	12 (4)	10 (0)	0 (0)	0 (0)	22 (4)	0 (0)	6 (6)
土木工学専攻 博士後期課程	11 (4)	12 (0)	0 (0)	0 (0)	23 (4)	0 (0)	0 (0)
システム情報科学府							
情報理工学専攻 修士課程	20 (6)	24 (2)	0 (0)	0 (4)	44 (12)	0 (0)	19 (19)
情報理工学専攻 博士後期課程	18 (6)	21 (2)	0 (0)	0 (4)	39 (12)	0 (0)	0 (0)
電気電子工学専攻 修士課程	16 (5)	10 (1)	0 (0)	0 (2)	26 (8)	0 (0)	26 (26)
電気電子工学専攻 博士後期課程	15 (5)	5 (1)	0 (0)	0 (2)	20 (8)	0 (0)	0 (0)

概	総合理工学府							
	総合理工学専攻 修士課程	47 (25)	44 (25)	0 (0)	24 (20)	115 (70)	0 (0)	27 (27)
	総合理工学専攻 博士後期課程	46 (25)	43 (25)	0 (0)	0 (20)	89 (70)	0 (0)	10 (10)
	生物資源環境科学府							
	資源生物学専攻 修士課程	16 (16)	24 (24)	0 (0)	18 (18)	58 (58)	0 (0)	0 (0)
	資源生物学専攻 博士後期課程	16 (16)	25 (25)	0 (0)	18 (18)	59 (59)	0 (0)	0 (0)
	環境農学専攻 修士課程	17 (17)	21 (21)	0 (0)	15 (15)	53 (53)	0 (0)	0 (0)
	環境農学専攻 博士後期課程	17 (17)	21 (21)	0 (0)	15 (15)	53 (53)	0 (0)	0 (0)
	農業資源経済学専攻 修士課程	4 (4)	4 (4)	0 (0)	2 (2)	10 (10)	0 (0)	0 (0)
	農業資源経済学専攻 博士後期課程	4 (4)	4 (4)	0 (0)	3 (3)	11 (11)	0 (0)	0 (0)
	生命機能科学専攻 修士課程	22 (22)	14 (14)	0 (0)	15 (15)	51 (51)	0 (0)	0 (0)
	生命機能科学専攻 博士後期課程	20 (20)	12 (12)	0 (0)	12 (12)	44 (44)	0 (0)	4 (4)
	統合新領域学府							
	ユーザー感性学専攻 修士課程	8 (8)	3 (3)	1 (1)	2 (2)	14 (14)	0 (0)	18 (18)
	ユーザー感性学専攻 博士後期課程	4 (4)	2 (2)	0 (0)	0 (0)	6 (6)	0 (0)	0 (0)
	オートモーティブサイエンス専攻 修士課程	11 (11)	7 (7)	0 (0)	0 (0)	18 (18)	0 (0)	38 (38)
	オートモーティブサイエンス専攻 博士後期課程	11 (11)	9 (9)	0 (0)	0 (0)	20 (20)	0 (0)	4 (4)
	ライブラリーサイエンス専攻 修士課程	5 (5)	6 (6)	0 (0)	0 (0)	11 (11)	0 (0)	12 (12)
	ライブラリーサイエンス専攻 博士後期課程	3 (3)	5 (5)	0 (0)	0 (0)	8 (8)	0 (0)	0 (0)
	基幹教育院	0 (0)	5 (5)	0 (0)	11 (11)	16 (16)	0 (0)	40 (40)
計	1164 (1019)	994 (838)	110 (110)	439 (490)	2707 (2437)	0 (0)	726 (726)	
要	合計	1183 (1042)	1029 (873)	113 (113)	459 (490)	2784 (2518)	2 (2)	733 (733)
教員以外の職員の概要	職 種	専 任		兼 任		計		
	事 務 職 員	人		人		人		
		1,087 (1087)		0 (0)		1,087 (1087)		
	技 術 職 員							
		2,041 (2041)		0 (0)		2,041 (2041)		
	図 書 館 専 門 職 員							
	68 (68)		0 (0)		68 (68)			
そ の 他 の 職 員								
	31 (31)		0 (0)		31 (31)			
計	3,227 (3227)		0 (0)		3,227 (3227)			

校 地 等	区 分	専 用	共 用	共用する他の 学校等の専用	計	大学全体			
	校 舎 敷 地	2,254,620㎡	㎡	㎡	2,254,620㎡				
	運 動 場 用 地	196,368㎡	㎡	㎡	196,368㎡				
	小 計	2,450,988㎡	㎡	㎡	2,450,988㎡				
	そ の 他	72,902,583㎡	㎡	㎡	72,902,583㎡				
合 計	75,353,571㎡	㎡	㎡	75,353,571㎡					
校 舎		専 用	共 用	共用する他の 学校等の専用	計	大学全体			
		657,243㎡ (657,243㎡)	㎡ (㎡)	㎡ (㎡)	657,243㎡ (657,243㎡)				
教室等	講義室	演習室	実験実習室	情報処理学習施設	語学学習施設	大学全体			
	316室	352室	114室	14室 (補助職員 人)	3室 (補助職員 人)				
専 任 教 員 研 究 室		新設学部等の名称		室 数					
		芸術工学府		83 室					
図書・ 設備	新設学部等の名称	図書 〔うち外国書〕 冊	学術雑誌 〔うち外国書〕 種	電子ジャーナル 〔うち外国書〕	視聴覚資料 点	機械・器具 点	標本 点	大学全体	
		4,202,696 [1,812,778] (4,202,696 [1,812,778])	76,859 [34,117] (76,859 [34,117])	51,597 [51,580] (51,597 [51,580])	9,784 (9,784)	97 (97)	7,434,882 (7,434,882)		
	計	4,202,696 [1,812,778] (4,202,696 [1,812,778])	76,859 [34,117] (76,859 [34,117])	51,597 [51,580] (51,597 [51,580])	9,784 (9,784)	97 (97)	7,434,882 (7,434,882)		
図書館		面積	閲覧座席数		収 納 可 能 冊 数		大学全体		
		46,365㎡	3,121 席		5,363,972 冊				
体育館		面積	体育館以外のスポーツ施設の概要						
		12,019㎡	野 球 場 1 面 4 0 0 ㎡ ト ラ ッ ク 1 面						
経 費 の 見 積 り 及 び 維 持 方 法 の 概 要	区 分	開設前年度	第1年次	第2年次	第3年次	第4年次	第5年次	第6年次	
	教員1人当り研究費等		—	—	—	—	—	—	
	共同研究費等		—	—	—	—	—	—	
	図書購入費	—	—	—	—	—	—	—	
	設備購入費	—	—	—	—	—	—	—	
	学生1人当り 納付金	第1年次	第2年次	第3年次	第4年次	第5年次	第6年次		
	— 千円	— 千円	— 千円	— 千円	— 千円	— 千円			
学生納付金以外の維持方法の概要		—							
既 設 大 学 等 の 状 況	大 学 の 名 称九州大学 (Kyushu University)								
	学 部 等 の 名 称	修業 年限	入学 定員	編入学 定 員	収容 定員	学位又 は称号	定 員 超過率	開 設 年 度	所 在 地
	共創学部 共創学科	4 年	105 人	-	420 人	学士 (学術)	1.02 倍	平成30年度	福岡県福岡市西区 元岡744番地
	文学部 人文学科	4 年	151 人	-	604 人	学士 (文学) 学士 (学術)	1.03 倍	平成12年度	福岡県福岡市西区 元岡744番地
	教育学部	4 年	46 人	-	184 人	学士 (教育学) 学士 (学術)	1.07 倍	昭和24年度	福岡県福岡市西区 元岡744番地
	法学部	4 年	189 人	-	756 人	学士 (法学) 学士 (学術)	1.05 倍	昭和24年度	福岡県福岡市西区 元岡744番地
	経済学部 経済・経営学科	4 年	141 人	3年次 10 人	584 人	学士 (経済学) 学士 (学術)	1.04 倍	平成12年度	福岡県福岡市西区 元岡744番地
	経済工学科	4 年	85 人	10 人	360 人		1.05 倍	昭和52年度	

理学部					学士（理学）	1.06		福岡県福岡市西区	
物理学科	4	55		220	学士（学術）	1.05	昭和24年度	元岡744番地	
化学科	4	62		248		1.04	昭和24年度		
地球惑星科学科	4	45	3年次	180		1.09	平成2年度		
数学科	4	50	5	210		1.07	昭和24年度		
生物学科	4	46		184		1.07	昭和24年度		
医学部			-					福岡県福岡市東区	令和元年度入学生定員減 (△1人)
医学科	6	110		664	学士（医学）	1.08	昭和24年度	馬出3丁目1番1号	
生命科学科	4	12		48	学士（生命医科学）	1.00	平成19年度		
保健学科	4	134		536	学士（保健学）	1.03	平成14年度		
歯学部			-					福岡県福岡市東区	
歯学科	6	53		318	学士（歯学）	0.99	昭和42年度	馬出3丁目1番1号	
薬学部			-					福岡県福岡市東区	
創薬科学科	4	49		196	学士（創薬科学）	1.03	平成18年度	馬出3丁目1番1号	
臨床薬学科	6	30		180	学士（薬学）	1.02	平成18年度		
工学部			-					福岡県福岡市西区	
電気情報工学科	4	153		153	学士（工学）	1.01	令和3年度	元岡744番地	
材料工学科	4	53		53	学士（学術）		令和3年度		
応用化学科	4	72		72			令和3年度		
化学工学科	4	38		38			令和3年度		
融合基礎工学科	4	57		57			令和3年度		
機械工学科	4	135		135			令和3年度		
航空宇宙工学科	4	29		29			令和3年度		
量子物理工学科	4	38		38			令和3年度		
船舶海洋工学科	4	34		34			令和3年度		
地球資源システム工学	4	34		34			令和3年度		
土木工学科	4	77		77			令和3年度		
建築学科	4	58		58			令和3年度		
建築学科	4	-		-		-			令和3年より学生募集停止
電気情報工学科	4	-		-		-			令和3年より学生募集停止
物質科学工学科	4	-		-		-			令和3年より学生募集停止
地球環境工学科	4	-		-		-			令和3年より学生募集停止
エネルギー科学科	4	-		-		-			令和3年より学生募集停止
機械航空工学科	4	-		-		-			令和3年より学生募集停止
芸術工学部					学士（芸術工学）			福岡県福岡市南区	
芸術工学科	4	187		374	学士（学術）	1.02	令和2年度	塩原4丁目9番1号	令和2年より学生募集停止
環境設計学科	4	-		-		-			令和2年より学生募集停止
工業設計学科	4	-		-		-			令和2年より学生募集停止
画像設計学科	4	-		-		-			令和2年より学生募集停止
音響設計学科	4	-		-		-			令和2年より学生募集停止
芸術情報設計学科	4	-		-		-			令和2年より学生募集停止
農学部			-					福岡県福岡市西区	
生物資源環境学科	4	226		904	学士（農学）	1.04	平成10年度	元岡744番地	
【大学院】									
人文科学府			-		修士（文学）			福岡県福岡市西区	
人文基礎専攻					博士（文学）			元岡744番地	
修士課程	2	16		32		0.59	平成12年度		
博士後期課程	3	7		21		0.52			
歴史空間論専攻							平成12年度		
修士課程	2	20		40		0.55			
博士後期課程	3	9		27		0.55			
言語・文学専攻							平成12年度		
修士課程	2	20		40		0.70			
博士後期課程	3	9		27		1.03			

地球社会統合科学府 地球社会統合科学専攻 修士課程 博士後期課程	2 3	60 35	-	120 105	修士(学術) 修士(理学) 博士(学術) 博士(理学)	0.57 0.56	平成26年度	福岡県福岡市西区 元岡744番地
人間環境学府 都市共生デザイン専攻 修士課程 博士後期課程 人間共生システム専攻 修士課程 博士後期課程 行動システム専攻 修士課程 博士後期課程 教育システム専攻 修士課程 博士後期課程 空間システム専攻 修士課程 博士後期課程 実践臨床心理学専攻 専門職学位課程	2 3 2 3 2 3 2 3 2 3 2 3 2 3 2	20 5 11 9 17 10 19 9 28 7 30	-	40 15 22 27 34 30 38 27 56 21 60	修士(人間環境学) 修士(文学) 修士(教育学) 修士(心理学) 修士(工学) 博士(人間環境学) 博士(文学) 博士(教育学) 博士(心理学) 博士(工学)	1.20 0.66 0.67 0.88 1.08 0.96 0.55 0.47 1.49 0.37 0.95	平成12年度 平成12年度 平成12年度 平成12年度 平成17年度 平成12年度 平成17年度	福岡県福岡市西区 元岡744番地
法学府 法政理論専攻 修士課程 博士後期課程	2 3	72 17	-	134 51	修士(法学) 博士(法学)	0.44 0.25	平成22年度	福岡県福岡市西区 元岡744番地
法務学府 実務法学専攻 専門職学位課程	3	45	-	135	法務博士(専門職)	0.85	平成16年度	福岡県福岡市西区 元岡744番地
経済学府 経済工学専攻 修士課程 博士後期課程 経済システム専攻 修士課程 博士後期課程 産業マネジメント専攻 専門職学位課程	2 3 2 3 2 3	20 10 27 14 45	-	40 30 54 42 90	修士(経済学) 博士(経済学) 経営修士(専門職)	0.95 0.36 0.92 0.37 0.96	平成12年度 平成15年度 平成15年度	福岡県福岡市西区 元岡744番地
理学府 物理学専攻 修士課程 博士後期課程 化学専攻 修士課程 博士後期課程 地球惑星科学専攻 修士課程 博士後期課程	2 3 2 3 2 3	41 14 62 19 41 14	-	82 42 124 57 82 42	修士(理学) 博士(理学)	1.07 0.47 1.00 0.62 1.05 0.59	平成20年度 平成20年度 平成12年度	福岡県福岡市西区 元岡744番地

数理学府 数理学専攻 修士課程 博士後期課程	2 3	54 20	-	108 60	修士(数理学) 修士(技術数理学) 修士(数理学) 修士(機能数理学)	1.06 0.56	平成12年度	福岡県福岡市西区 元岡744番地
システム生命科学府 システム生命科学専攻 博士課程	5	54	-	270	修士(システム生命科学) 修士(理学) 修士(工学) 修士(情報科学) 博士(システム生命科学) 博士(理学) 博士(工学) 博士(情報科学)	1.35	平成15年度	福岡県福岡市西区 元岡744番地
医学系学府 医学専攻 博士課程 医科学専攻 修士課程 保健学専攻 修士課程 博士後期課程 医療経営・管理学専攻 専門職学位課程	4 2 2 3 2	107 20 27 10 20	-	428 40 54 30 40	修士(医科学) 修士(看護学) 修士(保健学) 博士(医学) 博士(看護学) 博士(保健学) 医療経営・管理学修士(専門職)	1.10 0.60 1.27 0.63 0.90	平成20年度 平成15年度 平成19年度 平成21年度 平成13年度	福岡県福岡市東区 馬出3丁目1番1号
歯学府 歯学専攻 博士課程	4	43	-	172	博士(歯学) 博士(臨床歯学) 博士(学術)	0.84	平成12年度	福岡県福岡市東区 馬出3丁目1番1号
薬学府 創薬科学専攻 修士課程 博士後期課程 臨床薬学専攻 博士課程	2 3 4	55 12 5	-	110 36 20	修士(創薬科学) 博士(創薬科学) 博士(臨床薬学)	0.88 1.41 0.75	平成22年度 平成24年度 平成24年度	福岡県福岡市東区 馬出3丁目1番1号
工学府 材料工学専攻 修士課程 博士後期課程 応用化学専攻 修士課程 博士後期課程 化学工学専攻 修士課程 博士後期課程 機械工学専攻 修士課程 博士後期課程 水素エネルギーシステム専攻 修士課程 博士後期課程 航空宇宙工学専攻 修士課程 博士後期課程 量子物理工学専攻 修士課程 博士後期課程 船舶海洋工学専攻 修士課程 博士後期課程 地球資源システム工学専攻 修士課程 博士後期課程 共同資源工学専攻 修士課程	2 3 2 3 2 3 2 3 2 3 2 3 2 3 2 3 2 3 2 3 2 3 2 3	43 10 68 18 30 8 73 16 35 9 30 10 30 10 25 8 20 8 10	-	43 10 68 18 30 8 135 48 65 27 60 34 30 10 25 8 40 24 20	修士(工学) 博士(工学)	1.09 0.80 1.13 1.00 1.16 0.12 1.30 0.89 1.00 0.99 1.26 0.34 0.76 0.30 1.12 0.37 1.20 1.33 1.40	令和3年度 令和3年度 令和3年度 平成22年度 平成22年度 平成12年度 令和3年度 令和3年度 令和3年度 平成29年度 平成29年度	福岡県福岡市西区 元岡744番地
								平成29年度入学定員減 (△3人)(博士後期課程)
								令和3年より名称変更
								令和3年より名称変更

土木工学専攻						令和3年度	
修士課程	2	52		52		1.25	
博士後期課程	3	16		16		1.25	
物質創造工学専攻							令和3年より学生募集停止
修士課程	2	-		-		-	
博士後期課程	3	-		-		-	
物質プロセス工学専攻							令和3年より学生募集停止
修士課程	2	-		-		-	
博士後期課程	3	-		-		-	
材料物性工学専攻							令和3年より学生募集停止
修士課程		-		-		-	
博士後期課程		-		-		-	
化学システム工学専攻							令和3年より学生募集停止
修士課程	2	-		-		-	
博士後期課程	3	-		-		-	
建設システム工学専攻							令和3年より学生募集停止
修士課程	2	-		-		-	
博士後期課程	3	-		-		-	
都市環境システム工学専攻							令和3年より学生募集停止
修士課程	2	-		-		-	
博士後期課程	3	-		-		-	
海洋システム工学専攻							令和3年より学生募集停止 (名称変更)
修士課程	2	-		-		-	
博士後期課程	3	-		-		-	
エネルギー量子工学専攻							令和3年より学生募集停止 (名称変更)
修士課程	2	-		-		-	
博士後期課程	3	-		-		-	
芸術工学府			-				
芸術工学専攻					修士(芸術工学) 修士(デザインストラ テジー)	平成15年度	福岡県福岡市南区 塩原4丁目9番1号
修士課程	2	92		184	博士(芸術工学)	1.19	
博士後期課程	3	25		75	博士(工学)	0.68	
デザインストラテジー専攻							
修士課程	2	28		56		1.17	平成18年度
博士後期課程	3	5		15		1.06	平成20年度
システム情報科学府			-				
情報理工学専攻					修士(情報科学)		
修士課程	2	105		105	修士(理学)	1.02	令和3年度
博士後期課程	3	29		29	修士(工学)	0.58	
電気電子工学専攻					博士(情報科学)		令和3年度
修士課程	2	65		65	博士(理学)	1.36	
博士後期課程	3	16		16	博士(工学)	0.43	
情報学専攻					博士(学術)		平成21年度
修士課程	2	-		-		-	
博士後期課程	3	-		-		-	
情報知能工学専攻							平成21年度
修士課程	2	-		-		-	
博士後期課程	3	-		-		-	
電気電子工学専攻							平成21年度
修士課程	2	-		-		-	
博士後期課程	3	-		-		-	

総合理工学府			-		修士 (理学)		令和3年度	福岡県春日市春日公園6丁目1番地	
総合理工学専攻					修士 (工学)				
修士課程	2	172		172	修士 (学術)	1.24			
博士後期課程	3	62		62	博士 (理学)	0.64			令和3年より学生募集停止
量子プロセス理工学専攻					博士 (工学)				
修士課程	2	-		-	博士 (学術)	-			
博士後期課程	3	-		-					令和3年より学生募集停止
物質理工学専攻									
修士課程	2	-		-					
博士後期課程	3	-		-					令和3年より学生募集停止
先端エネルギー理工学専攻									
修士課程	2	-		-					
博士後期課程	3	-		-					令和3年より学生募集停止
環境エネルギー工学専攻									
修士課程	2	-		-					
博士後期課程	3	-		-					令和3年より学生募集停止
大気海洋環境システム学専攻									
修士課程	2	-		-					
博士後期課程	3	-		-					令和3年より学生募集停止
生物資源環境科学府			-		修士 (農学)			福岡県福岡市西区元岡744番地	
資源生物科学専攻					博士 (農学)		平成22年度		平成30年度入学生定員増(16人)
修士課程	2	66		132		1.04			(7人)
博士後期課程	3	26		78		0.61			平成30年度入学生定員減(△9人)
環境農学専攻							平成22年度		(△6人)
修士課程	2	66		132		0.96			
博士後期課程	3	21		63		0.48			
農業資源経済学専攻							平成22年度		
修士課程	2	13		26		0.80			
博士後期課程	3	5		15		0.66			
生命機能科学専攻							平成22年度		平成30年度入学生定員減(△9人)(修士課程)
修士課程	2	99		198		0.96			平成30年度入学生定員増(13人)(博士後期課程)
博士後期課程	3	25		75		0.60			
生物産業創成専攻							平成22年度		平成30年より学生募集停止
博士後期課程	3	-		-		-			
統合新領域学府			-		修士 (感性学)			福岡県福岡市西区元岡744番地	
ユーザー感性学専攻					修士 (芸術工学)				
修士課程	2	30		60	修士 (工学)	0.76	平成21年度		
博士後期課程	3	4		12	修士 (オートモーティブサイエンス)	0.33	平成23年度		
オートモーティブサイエンス専攻					修士 (ライブラリーサイエンス)		平成21年度		
修士課程	2	21		42	修士 (学術)	0.78			
博士後期課程	3	7		21	博士 (感性学)	0.56			
ライブラリーサイエンス専攻					博士 (芸術工学)				
修士課程	2	10		20	博士 (工学)	0.30	平成23年度		
博士後期課程	3	3		9	博士 (オートモーティブサイエンス)	0.11	平成25年度		
					博士 (ライブラリーサイエンス)				
					博士 (学術)				

<p>附属施設の概要</p>	<p>○附属病院 名 称：九州大学病院 目 的：患者の診療を通じて医学、歯学の教育と研究を行うこと。 所 在 地：福岡市東区馬出3-1-1 設置年月：昭和24年5月 規 模 等：土地面積313,745㎡ (病院地区：九州大学病院、医学部、歯学部、薬学部、生体防御医学研究所) 校舎等敷地88,043㎡（九州大学病院） 病床数1,275床、診療科37科</p> <p>○農場 名 称：九州大学農学部附属農場(高原農業実験実習場) 目 的：農学に関する教育と研究を行うこと。 所 在 地：(高原農業実験実習場)大分県竹田市久住町久住字4045-4) 設置年月：大正10年4月 規 模 等：土地面積168,171㎡</p> <p>○演習林 名 称：九州大学農学部附属演習林 目 的：林学及び林産学に関する教育と研究を行うこと。 所 在 地：(福岡演習林)福岡県糟屋郡篠栗町津波黒394 (宮崎演習林)宮崎県東臼杵郡椎葉村大河内949 (北海道演習林)北海道足寄郡足寄町北五条1-85 (早良実習場)福岡県福岡市西区生の松原1-23-2 設置年月：大正11年5月 規 模 等：土地面積（全演習林の合計）71,425,335㎡</p> <p>○薬用植物園 名 称：九州大学薬学府附属薬用植物園 目 的：薬学に関する教育と研究を行うこと。 所 在 地：福岡県糟屋郡篠栗町津波黒394(九州大学農学部附属演習林内) 設置年月：昭和49年4月 規 模 等：土地面積26,800㎡</p>	
----------------	---	--

国立大学法人九州大学 設置申請等に関する組織の移行表

令和3年度	入学 定員	編入学 定員	収容 定員	令和4年度	入学 定員	編入学 定員	収容 定員	変更の事由
九州大学				九州大学				
共創学部				共創学部				
共創学科	105	—	420	共創学科	105	—	420	
文学部				文学部				
人文学科	151	—	604	人文学科	151	—	604	
教育学部	46	—	184	教育学部	46	—	184	
法学部	189	—	756	法学部	189	—	756	
経済学部		3年次		経済学部		3年次		
経済・経営学科	141	10	584	経済・経営学科	141	10	584	
経済工学科	85	10	360	経済工学科	85	10	360	
理学部				理学部				
物理学科	55	—	220	物理学科	55	—	220	
化学科	62	—	248	化学科	62	—	248	
地球惑星科学科	45	3年次	180	地球惑星科学科	45	3年次	180	
数学科	50	5	210	数学科	50	5	210	
生物科学科	46	—	184	生物科学科	46	—	184	
医学部				医学部				
医学科	110	—	660	医学科	110	—	660	
生命科学科	12	—	48	生命科学科	12	—	48	
保健学科	134	—	536	保健学科	134	—	536	
歯学部				歯学部				
歯学科	53	—	318	歯学科	53	—	318	
薬学部				薬学部				
創薬科学科	49	—	196	創薬科学科	49	—	196	
臨床薬学科	30	—	180	臨床薬学科	30	—	180	
工学部				工学部				
電気情報工学科	153	—	612	電気情報工学科	153	—	612	
材料工学科	53	—	212	材料工学科	53	—	212	
応用化学科	72	—	288	応用化学科	72	—	288	
化学工学科	38	—	152	化学工学科	38	—	152	
融合基礎工学科	57	20	268	融合基礎工学科	57	20	268	
機械工学科	135	—	540	機械工学科	135	—	540	
航空宇宙工学科	29	—	116	航空宇宙工学科	29	—	116	
量子物理工学科	38	—	152	量子物理工学科	38	—	152	
船舶海洋工学科	34	—	136	船舶海洋工学科	34	—	136	
地球資源システム工学科	34	—	136	地球資源システム工学科	34	—	136	
土木工学科	77	—	308	土木工学科	77	—	308	
建築学科	58	—	232	建築学科	58	—	232	
芸術工学部				芸術工学部				
芸術工学科	187	—	748	芸術工学科	187	—	748	
農学部				農学部				
生物資源環境学科	226	—	904	生物資源環境学科	226	—	904	
計	2,554	45	10,692	計	2,554	45	10,692	

【大学院】			
人文科学府			
人文基礎専攻			
修士課程	16	—	32
博士後期課程	7	—	21
歴史空間論専攻			
修士課程	20	—	40
博士後期課程	9	—	27
言語・文学専攻			
修士課程	20	—	40
博士後期課程	9	—	27
地球社会統合科学府			
地球社会統合科学専攻			
修士課程	60	—	120
博士後期課程	35	—	105
人間環境学府			
都市共生デザイン専攻			
修士課程	20	—	40
博士後期課程	5	—	15
人間共生システム専攻			
修士課程	11	—	22
博士後期課程	9	—	27
行動システム専攻			
修士課程	17	—	34
博士後期課程	10	—	30
教育システム専攻			
修士課程	19	—	38
博士後期課程	9	—	27
空間システム専攻			
修士課程	28	—	56
博士後期課程	7	—	21
実践臨床心理学専攻			
専門職学位課程	30	—	60
法学府			
法政理論専攻			
修士課程	72	—	144
博士後期課程	17	—	51
法務学府			
実務法学専攻			
専門職学位課程	45	—	135
経済学府			
経済工学専攻			
修士課程	20	—	40
博士後期課程	10	—	30
経済システム専攻			
修士課程	27	—	54
博士後期課程	14	—	42
産業マネジメント専攻			
専門職学位課程	45	—	90
理学府			
物理学専攻			
修士課程	41	—	82
博士後期課程	14	—	42
化学専攻			
修士課程	62	—	124
博士後期課程	19	—	57
地球惑星科学専攻			
修士課程	41	—	82
博士後期課程	14	—	42
数理学府			
数理学専攻			
修士課程	54	—	108
博士後期課程	20	—	60
システム生命科学府			
システム生命科学専攻			
博士課程	54	—	270
医学系学府			
医学専攻			
博士課程	107	—	428
医科学専攻			
修士課程	20	—	40

【大学院】			
人文科学府			
人文基礎専攻			
修士課程	16	—	32
博士後期課程	7	—	21
歴史空間論専攻			
修士課程	20	—	40
博士後期課程	9	—	27
言語・文学専攻			
修士課程	20	—	40
博士後期課程	9	—	27
地球社会統合科学府			
地球社会統合科学専攻			
修士課程	60	—	120
博士後期課程	35	—	105
人間環境学府			
都市共生デザイン専攻			
修士課程	20	—	40
博士後期課程	5	—	15
人間共生システム専攻			
修士課程	11	—	22
博士後期課程	9	—	27
行動システム専攻			
修士課程	17	—	34
博士後期課程	10	—	30
教育システム専攻			
修士課程	19	—	38
博士後期課程	9	—	27
空間システム専攻			
修士課程	28	—	56
博士後期課程	7	—	21
実践臨床心理学専攻			
専門職学位課程	30	—	60
法学府			
法政理論専攻			
修士課程	72	—	144
博士後期課程	17	—	51
法務学府			
実務法学専攻			
専門職学位課程	45	—	135
経済学府			
経済工学専攻			
修士課程	20	—	40
博士後期課程	10	—	30
<small>(うち、研究科等連係課程実施基本組織に割り当てる定員数)</small>			
	(1)		(2)
経済システム専攻			
修士課程	27	—	54
博士後期課程	14	—	42
産業マネジメント専攻			
専門職学位課程	45	—	90
理学府			
物理学専攻			
修士課程	41	—	82
博士後期課程	14	—	42
化学専攻			
修士課程	62	—	124
博士後期課程	19	—	57
地球惑星科学専攻			
修士課程	41	—	82
博士後期課程	14	—	42
数理学府			
数理学専攻			
修士課程	54	—	108
博士後期課程	20	—	60
<small>(うち、研究科等連係課程実施基本組織に割り当てる定員数)</small>			
	(8)		(16)
システム生命科学府			
システム生命科学専攻			
博士課程	54	—	270
医学系学府			
医学専攻			
博士課程	107	—	428
医科学専攻			
修士課程	20	—	40

生物資源環境科学府			
資源生物学専攻			
修士課程	66	—	132
博士後期課程	26	—	78
環境農学専攻			
修士課程	66	—	132
博士後期課程	21	—	63
農業資源経済学専攻			
修士課程	13	—	26
博士後期課程	5	—	15
生命機能科学専攻			
修士課程	99	—	198
博士後期課程	25	—	75
統合新領域学府			
ユーザー感性学専攻			
修士課程	30	—	60
博士後期課程	4	—	12
オートモーティブサイエンス専攻			
修士課程	21	—	42
博士後期課程	7	—	21
ライブラリーサイエンス専攻			
修士課程	10	—	20
博士後期課程	3	—	9
計	2,733	—	6,554

生物資源環境科学府			
資源生物学専攻			
修士課程	66	—	132
博士後期課程	26	—	78
環境農学専攻			
修士課程	66	—	132
博士後期課程	21	—	63
農業資源経済学専攻			
修士課程	13	—	26
博士後期課程	5	—	15
生命機能科学専攻			
修士課程	99	—	198
博士後期課程	25	—	75
統合新領域学府			
ユーザー感性学専攻			
修士課程	30	—	60
博士後期課程	4	—	12
オートモーティブサイエンス専攻			
修士課程	21	—	42
博士後期課程	7	—	21
ライブラリーサイエンス専攻			
修士課程	10	—	20
博士後期課程	3	—	9
<u>マス・フォア・イノベーション</u>			
<u>関係学府</u>			
修士課程	<12>	—	<24>
博士後期課程	<14>	—	<42>
計	2,733	—	6,554
<26> — <66>			

研究科等関係課程実施基本組織の設置
各連係協力学府の定員の内数
各連係協力学府の定員の内数

※ < >は、研究科等関係課程実施基本組織の定員数であり、各連係協力学府の定員の内数

教 育 課 程 等 の 概 要														
(大学院芸術工学府芸術工学府専攻 修士課程)														
科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手	
関連 科目 研究	芸術工学特別研究Ⅰ	1前①～②	4				○		19	35	3	19		兼6
	芸術工学特別研究Ⅱ	1後③～④	4				○		19	35	3	19		兼6
	芸術工学特別研究Ⅲ	2前①～②	4				○		19	35	3	19		兼6
	芸術工学特別研究Ⅳ	2後③～④	4				○		19	35	3	19		兼6
	芸術工学演習	1後④	2				○		19	35	3	19		兼6
	小計（5科目）	—	18	0	0		—		19	35	3	19	0	兼6
コア 科目	シリアスゲームデザイン1	1前①		1			○			1				
	シリアスゲームデザイン2	1前②		1			○			1				
	コネクティッドデザイン	1後③		1			○					1		
	デザインイノベーション	1後④		1			○			1				
	ストラテジック・サービス・デザイン	1後③		1		○	※							兼1 ※演習
	プロデューサー原論	1前①		1		○	※				1			※演習
	デザインマネジメント	1前①		1			○			1				
	デザインマーケティング	1前②		1			○			1				
	デザインプロジェクトマネジメント	1後④		1		○	※			1				※演習
	ブランドビジネスデザイン	1前②		1		○	※			1				※演習
	デザイン産業事情1	1後③		1			○			1				
	デザイン産業事情2	1後④		1			○			1				
	知的財産法1	1前②		1		○				1				
	知的財産法2	1後③		1		○				1				
	デザイン思考	1前①		1			○							兼1
	リーンスタートアップ演習1	1前①		1			○					1		兼1 共同
	リーンスタートアップ演習2	1前②		1			○					1		兼1 共同
	リーンスタートアップ演習3	1後③		1			○					1		兼1 共同
	リーンスタートアップ演習4	1後④		1			○					1		兼1 共同
小計（19科目）	—	0	19	0		—		0	4	1	2	0	兼1	
環境 設計 コース コア 科目	環境化学特論	1後③～④		2		○					1			
	熱環境学特論	1後③～④		2		○						1		
	建築構造学特論	1後③～④		2		○				1				
	環境材料学特論	1後③～④		2		○								兼1
	音響環境学特論	1後③～④		2		○				1				
	音環境評価特論	1前①～②		2		○				1				
	環境心理学特論	1前②		1		○			1					
	建築計画特論	1前①		1		○			1					
	建築構法計画特論	1前②		1		○				1				
	環境保全学特論	1後④		1		○				1				
	景観生態学特論	1前①		1		○				1				
	ランドスケープデザイン特論	1前②		1		○				1				
	日本建築史特論	1後③		1		○				1				
	西洋建築史特論	1後④		1		○				1				

	文化財学特論	1前①～②	2	○			1							
	国際環境政策特論	1前①～②	2	○			1							
	環境人類学特論	1前①～②	2	○			1							
	共生社会デザイン論	1前①	1	○			1							
	環境リスクマネジメント	1前②	1	○			1							
	デザイン哲学	1後③	1	○			1							
	美術史	1後④	1	○			1							
	環境文化特論	1後③～④	2	○			1							
	環境デザインプロジェクトA	1前①～②	2		○		3	7	1	2			兼1	
	環境デザインプロジェクトB	1後③～④	2		○		3	7	1	2			兼1	
	小計 (24科目)	—	0	36	0	—	5	10	1	2	0		兼1	
音響設計 コース コア 科目	聴覚心理学特論	1後③～④	2	○			1							
	聴覚生理学特論	1後③～④	2	○			1							
	時間知覚特論	1後③～④	2	○			1							
	音声生成特論	1前①～②	2	○					1					
	音声情報学特論	1前①～②	2	○	※		1						※演習	
	音響制御特論	1前①～②	2	○			1							
	音響工学特論	1前①～②	2	○				1						
	計算音響学	1後③～④	2	○				1						
	福祉音響学	1後③～④	2	○	※					1				※演習
	音響イメージング特論	1後③～④	2	○				1						
	音響信号処理特論	1前①～②	2	○				1						
	音響環境学特論	1後③～④	2	○				1						
	音響環境評価特論	1前①～②	2	○				1						
	音響芸術特論	1前①～②	2		○			1						
	作曲学特論	1後③～④	2		○					1				
	サウンドデザイン特論	1後③～④	2	※	○			3						共同 ※講義
	民族音楽学特論	1後③～④	2		○			1		1				共同
	音楽社会文化特論	1前①～②	2		○			1						
	聴覚文化論特論	1後③～④	2		○			1						
	言語学特論	1前①～②	2		○			1		1				共同
	音響設計特別講話 輪講	1前①～②	2		○		2	9		3				共同
	小計 (22科目)	—	0	44	0	—	2	9	0	3	0			

人間生活デザインコースコア科目	応用人間工学	1前①		1			○		1													
	生活機能支援科学特論	1前②		1			○					1										
	環境人間工学特論	1前①		1			○	※	1											※演習		
	生理人類学特論	1後④		1			○				1											
	脳・行動生理学特論A	1前①		1			○													兼2 共同		
	脳・行動生理学特論B	1前②		1			○														兼2 共同	
	感性科学特論	1後③		1			○														兼1	
	統計情報学	1前①		1			○			1												
	デザイン認知論	1前②		1			○			1												
	人間情報工学	1前①		1			○						1									
	機能工学デザイン	1前②		1			○	※		1											※演習	
	生体模倣工学	1後③		1			○			1												
	パブリックデザイン	1前①		1			○	※													兼1 ※演習	
	コンテクストデザイン	1前②		1			○						1									
	レジリエンスデザイン	1後④		1			○			1												
	コミュニケーションデザイン論	1前①		1			○				1											
	ライフスケープデザイン	1前①～②		2			○				2		1								兼1	
	人間生活デザイン特論	1前①		2			○			2	3	1	3								兼3 オムニバス	
	小計 (18科目)	—		0	20	0		—		3	5	1	3	0							兼3	
メディアデザインコースコア科目	視覚心理学特論	1前②		1			○		1													
	色彩科学特論	1後③		1			○		1													
	心理学的思考法特別演習	1後④		1			○			1												
	コンピュータサイエンス特論	1前①		1			○					1										
	視覚メディア設計特論	1後④		1			○		1													
	画像情報処理システム設計特論	1後③		1			○				1											
	視覚環境知能設計特論	1後④		1			○				1											
	コンピュータグラフィックス特論	1後③		1			○		1													
	メカニクスデザイン特論	1前①		1			○		1													
	メディアサービス特論	1後③		1			○				1											
	バーチャルリアリティ特論	2前①		1			○		1													
	メディアアート表現	1後④		1			※	○	1												※講義	
	視覚記号特論	1前①		1			※	○	1												※講義	
	グラフィックデザイン特論	1前②		1			○		1			1										
	映像コンテンツデザイン特論	1前②		1			○		1													
	シリアスゲームデザイン1	1前①		1			○				1											
	映像表現史特論	1前①		1			○				1											
	造形芸術特論	1前②		1			○	※	1													※演習
	演劇学特論	1前①		1			○				1											
マルチモーダル・コミュニケーション特論	1前②		1			○	※					2									オムニバス ※演習	
小計 (20科目)	—		0	20	0		—		8	7	0	5	0									

リーンスタートアップ演習1	1前①	1			○				1	兼1 共同
リーンスタートアップ演習2	1前②	1			○				1	兼1 共同
リーンスタートアップ演習3	1後③	1			○				1	兼1 共同
リーンスタートアップ演習4	1後④	1			○				1	兼1 共同
SD特別プロジェクトI	1前①～②	1			○		5	1	2	兼1
SD特別プロジェクトII (ストラテジックデザイン)	1後③～④	1			○		5	1	2	兼1
SD特別プロジェクトIII (ソーシャルデザイン)	1後③～④	2			○		5	1	2	兼1
SD特別プロジェクトIV (アントレプレナー)	1後③～④	2			○		5	1	2	兼1
環境化学特論	1後③～④	2		○				1		
熱環境学特論	1後③～④	2		○					1	
建築構造学特論	1後③～④	2		○			1			
環境材料学特論	1後③～④	2		○						兼1
環境心理学特論	1前②	1		○		1				
建築計画特論	1前①	1		○		1				
建築構法計画特論	1前②	1		○			1			
環境保全学特論	1後④	1		○			1			
景観生態学特論	1前①	1		○			1			
ランドスケープデザイン特論	1前②	1		○			1			
日本建築史特論	1後③	1		○			1			
西洋建築史特論	1後④	1		○			1			
文化財学特論	1前①～②	2		○			1			
国際環境政策特論	1前①～②	2		○			1			
環境人類学特論	1前①～②	2		○		1	1			
環境文化特論	1後③～④	2		○			1			
環境デザインプロジェクトA	1前①～②	2		○		3	7	1	2	兼1
環境デザインプロジェクトB	1後③～④	2		○		3	7	1	2	兼1
ランドスケープデザインプロジェクト	1前①～②	4		○			2			共同
ストラテジックアーキテクトプロジェクトA	1前①～②	4		○		2			1	
ストラテジックアーキテクトプロジェクトB	1後③～④	4		○		2			1	
グローバル・アーキテクト・プロジェクト	2前①～②	4		○		2			1	
アーキテクト・インターンシップI	1通	3		○					1	
アーキテクト・インターンシップII	2通	3		○					1	
建築インターンシップ	2通	4		○					1	
聴覚心理学特論	1後③～④	2		○			1			
聴覚生理学特論	1後③～④	2		○			1			
時間知覚特論	1後③～④	2		○			1			
音声生成特論	1前①～②	2		○					1	
音声情報学特論	1前①～②	2		○	※	1				※演習
音響制御特論	1前①～②	2		○		1				

音響工学特論	1前①～②	2	○			1				
計算音響学	1後③～④	2	○			1				
福祉音響学	1後③～④	2	○	※				1		※演習
音響イメージング特論	1後③～④	2	○			1				
音響信号処理特論	1前①～②	2	○			1				
音響環境学特論	1後③～④	2	○			1				
音環境評価特論	1前①～②	2	○			1				
音響芸術特論	1前①～②	2		○		1				
作曲学特論	1後③～④	2		○				1		
サウンドデザイン特論	1後③～④	2	※	○		3				共同 ※講義
民族音楽学特論	1後③～④	2		○		1		1		共同
音楽社会文化特論	1前①～②	2	○			1				
聴覚文化論特論	1後③～④	2	○			1				
言語学特論	1前①～②	2	○			1		1		共同
音響設計特別講話	1前①～②	2	○			2	9	3		共同
輪講	1前①～②	2		○		2	9	3		
ホール工学技術特論	1後③～④	2	○			1	1			オムニバス
ホール工学技術演習	1前①～②	2		○		1				
応用人間工学	1前①	1		○		1				
生活機能支援科学特論	1前②	1		○				1		
環境人間工学特論	1前①	1	○	※		1				※演習
生理人類学特論	1後④	1		○				1		
脳・行動生理学特論A	1前①	1		○						兼2 共同
脳・行動生理学特論B	1前②	1		○						兼2 共同
感性科学特論	1後③	1		○						兼1
デザイン認知論	1前②	1		○		1			1	
人間情報工学	1前①	1		○						
生体模倣工学	1後③	1		○		1				
リーガルデザイン	1前②	1		○		1				
パブリックデザイン	1前①	1	○	※						兼1 ※演習
コンテクストデザイン	1前②	1		○					1	
コミュニケーションデザイン論	1前①	1		○		1				
ライフスケープデザイン	1前①～②	2		○		2		1		兼1
人間生活デザイン特論	1前①	2	○			2	3	1	3	兼3 オムニバス
視覚心理学特論	1前②	1		○		1				
色彩科学特論	1後③	1		○		1				
心理学的思考法特別演習	1後④	1		○			1			
コンピュータサイエンス特論	1前①	1		○					1	
視覚メディア設計特論	1後④	1		○		1				
画像情報処理システム設計特論	1後③	1		○			1			
視覚環境知能設計特論	1後④	1		○			1			
コンピュータグラフィックス特論	1後③	1		○		1				
メカニクスデザイン特論	1前①	1		○		1				
メディアサービス特論	1後③	1		○			1			
バーチャルリアリティ特論	2前①	1		○		1				

メディアアート表現	1後④	1		※	○	1							※講義
視覚記号特論	1前①	1		※	○	1							※講義
グラフィックデザイン特論	1前②	1			○	1			1				
映像コンテンツデザイン特論	1前②	1			○	1							
映像表現史特論	1前①	1			○		1						
造形芸術特論	1前②	1		○	※	1							※演習
演劇学特論	1前①	1			○		1						
マルチモーダル・コミュニケーション特論	1前②	1		○	※						2		オムニバス ※演習
メディアデザインプレゼンテーション演習	2後③	2			○	8	6				5		
統計情報学	1前①	1			○		1						
時間生物学	1前①	1			○		1						
数理モデリングA	1前①	1			○						1		隔年
数理モデリングB	1前②	1			○						1		隔年
分子生物学	1後③	1		※	○		1						※講義
Curriculum and Management for Design Education	1後③	1			○						1		隔年
Design in General Education	1後③	1			○						1		隔年
バイオマテリアルエンジニアリング	1前②	1		○	※		1						※演習
現代アート実践	1前①	1			○						1		
生命とアート	1前②	1			○		1						
情報編集デザイン	1後③	1			○								兼1
レジリエンスデザイン	1後④	1			○	1							
スペキュラティブデザイン	1前①	1			○	1							隔年
デザイン・シビック	1前②	1			○	1							隔年
サステナブルデザイン	1後③	1			○	1							集中
アート&リサーチ	1前①	1			○		1						
文化政策	1後④	1			○		1						
アーツマネジメント	1後④	1			○						1		
共生社会デザイン論	1前①	1			○	1							
環境リスクマネジメント	1前②	1		○			1						
デザイン哲学	1後③	1		○		1							
美術史	1後④	1		○		1							
イメージ感性論	1前②	1			○	1							
デザインと日本A	1前①	2		○							1		
デザインと日本B	1前②	2		○							1		
アカデミックイングリッシュ	1前①	2		○					1				
インターンシップ I	1前①	1					○	4					兼2
インターンシップ II	1前②	1					○	4					兼2
インターンシップ III	1前①	2					○	4					兼2
芸術工学特別プロジェクト I	1前①	1		○		4							兼2
芸術工学特別プロジェクト II	1前①	1		○		4							兼2
芸術工学特別プロジェクト III	1前①	1		○		4							兼2
芸術工学特別プロジェクト IV	1前①	1		○		4							兼2
芸術工学特別プロジェクト V	1前①	2		○		4							兼2
芸術工学特別プロジェクト VI	1前①	2		○		4							兼2
芸術工学特別プロジェクト VII	1前①	2		○		4							兼2
芸術工学特別プロジェクト VIII	1前①	2		○		4							兼2
小計 (159科目)	—	0	221	0	—	19	35	3	20	0			兼7
合計 (292科目)	—	18	393	0	—	19	35	3	20	0			兼7

学位又は称号	修士 (芸術工学) 修士 (デザインストラテジー)	学位又は学科の分野	工学関係、美術関係、経済関係	
卒業要件及び履修方法			授業期間等	
<p>【修了要件】 修士課程に2年以上在学し、所定の科目を40単位以上の単位を修得し、かつ、必要な研究指導を受けた上で修士論文又は修士作品を提出して、その審査及び最終試験に合格すること。ただし、優れた業績を上げた者については、博士後期課程への進学を前提として修業年限を1年に短縮することができる。</p>			1 学年の学期区分	4 学期
<p>【履修方法】 1. ストラテジックデザインコース (a) 修士研究関連科目 (18単位) <必修科目> 修士研究関連科目 (18単位) (b) ストラテジックデザインコースコア科目 (6単位以上) (c) スタジオプロジェクト科目 (2単位以上) (d) 展開科目 (スタジオプロジェクト科目及び他学府開講科目を含む、但し、既に修得した修士課程の授業科目は除く) (14単位以上)</p>			1 学期の授業期間	8 週
<p>2. 環境設計コース (a) 修士研究関連科目 (18単位) <必修科目> 修士研究関連科目 (18単位) (b) 環境設計コースコア科目 (6単位以上) (c) スタジオプロジェクト科目 (2単位以上) (d) 展開科目 (スタジオプロジェクト科目及び他学府開講科目を含む、但し、既に修得した修士課程の授業科目は除く) (14単位以上)</p>			1 時限の授業時間	9 0 分
<p>3. 音響設計コース (a) 修士研究関連科目 (18単位) <必修科目> 修士研究関連科目 (18単位) (b) 音響設計コースコア科目 (6単位以上) (c) スタジオプロジェクト科目 (2単位以上) (d) 展開科目 (スタジオプロジェクト科目及び他学府開講科目を含む、但し、既に修得した修士課程の授業科目は除く) (14単位以上)</p>				
<p>4. 人間生活デザインコース (a) 修士研究関連科目 (18単位) <必修科目> 修士研究関連科目 (18単位) (b) 人間生活デザインコースコア科目 (6単位以上) (c) スタジオプロジェクト科目 (2単位以上) (d) 展開科目 (スタジオプロジェクト科目及び他学府開講科目を含む、但し、既に修得した修士課程の授業科目は除く) (14単位以上)</p>				
<p>5. メディアデザインコース (a) 修士研究関連科目 (18単位) <必修科目> 修士研究関連科目 (18単位) (b) メディアデザインコースコア科目 (6単位以上) (c) スタジオプロジェクト科目 (2単位以上) (d) 展開科目 (スタジオプロジェクト科目及び他学府開講科目を含む、但し、既に修得した修士課程の授業科目は除く) (14単位以上)</p>				
<p>6. 未来共生デザインコース (a) 修士研究関連科目 (18単位) <必修科目> 修士研究関連科目 (18単位) (b) 未来共生デザインコースコア科目 (6単位以上) (c) スタジオプロジェクト科目 (2単位以上) (d) 展開科目 (スタジオプロジェクト科目及び他学府開講科目を含む、但し、既に修得した修士課程の授業科目は除く) (14単位以上)</p>				

教 育 課 程 等 の 概 要																
(大学院芸術工学府芸術工学府専攻 博士後期課程)																
科目 区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考		
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手			
論文 作成 関連 科目	リサーチ研修Ⅰ	1前①～②	2					○			23	35	3	11	兼3	
	リサーチ研修Ⅱ	1後③～④	2					○			23	35	3	11	兼3	
	小計(2科目)	—	4	0	0			—			19	35	3	11	0	兼3
研究 指導 科目	リサーチプロジェクトⅠ	1前①～②	2					○			23	35	3	11	兼3	
	リサーチプロジェクトⅡ	2前①～②	2					○			20	35	3	11	兼3	
	リサーチプロジェクトⅢ	3前①～②	2					○			19	34	3	11	兼3	
	小計(3科目)	—	6	0	0			—			23	35	3	11	0	兼3
合計(5科目)		—	10	0	0			—			23	35	3	11	0	兼3
学位又は称号	博士(芸術工学) 博士(工学)		学位又は学科の分野					工学関係、美術関係、 経済関係、音楽関係								
卒業要件及び履修方法								授業期間等								
【修了要件】 博士後期課程に定められた期間在学し、所定の科目を10単位以上を修得し、かつ、必要な研究指導を受けた上、博士論文の審査及び最終試験に合格すること。ただし、優れた業績を上げた者については、修業年限を短縮することができる。 【履修方法】 論文作成関連科目4単位(リサーチ研修Ⅰ、Ⅱ)、研究指導科目6単位(リサーチプロジェクトⅠ～Ⅲ)、合計10単位以上を履修すること。								1学年の学期区分			4学期					
								1学期の授業期間			8週					
								1時限の授業時間			90分					

授 業 科 目 の 概 要			
(大学院芸術工学府芸術工学専攻 修士課程)			
区科分目	授業科目の名称	講義等の内容	備考
修士研究関連科目	芸術工学特別研究 I	<p>各自の研究テーマに関係する全般的な知識を習得するとともに、修士論文研究に関わる専門的知識を得ることを目的とする。学生は、研究室における定期的な研究指導(ゼミ)、研究室外での調査研究活動を通じて、自らの関心テーマやその周辺分野・領域の知識を獲得し、研究活動に必要な基礎的な技能や論理的・批判的思考力などを身に付け、修士論文の研究テーマを絞り込んで行く。なお必要場合は、授業時間内での資料・データの収集・整理・分析方法に関する指導や、授業時間外での研究指導教員による個別指導も併せて行う。</p> <p>(1 谷 正和) 環境人類学に関連した研究 (2 伊藤 裕之) 心理学に関連した研究 (3 井上 滋樹) 人間中心のデザイン、社会課題を解決するデザイン、SDGsに関連した研究 (4 伊原 久裕) グラフィックデザインに関連した研究 (5 鶴飼 哲矢) 建築設計・デザイン、都市デザインに関連した研究 (6 大井 尚行) 都市・建築環境学、環境心理学に関連した研究 (7 尾方 義人) インダストリアルデザイン、プロダクトデザイン、デザイン学、デザイン方法に関連した研究 (8 尾本 章) 応用音響工学に関連した研究 (9 包清 博之) ランドスケープ・マネジメント、緑地環境設計に関連した研究 (10 錦木 時彦) 音声情報処理に関連した研究 (11 金 大雄) 映像コンテンツデザインに関連した研究 (12 古賀 徹) 哲学、倫理学、美学、デザイン原論に関連した研究 (13 近藤(笠利) 加代子) 環境政策、環境社会学、環境経済学、社会思想史に関連した研究 (14 須長 正治) 色彩・視覚科学に関連した研究 (15 竹之内 和樹) クリエーティブデザイン、メカニクスデザイン、図形科学に関連した研究 (16 田上 健一) 建築計画・建築設計に関連した研究 (17 鶴野 玲治) コンピュータグラフィクスに関連した研究 (18 知足 美加子) 彫刻に関連した研究 (19 原 健二) 視覚情報処理に関連した研究 (20 前田 享史) 生理人類学、環境人間工学、温熱生理学に関連した研究 (21 村木 里志) 福祉人間工学に関連した研究 (22 矢向 正人) 音楽学、音楽美学に関連した研究 (23 朝廣 和夫) 緑地保全学に関連した研究 (24 麻生 典) 知的財産法に関連した研究 (25 石井 達郎) 映像表現、映像提示デザイン、デジタルコンテンツデザインに関連した研究 (26 伊藤 浩史) 時間生物学、非線形動力学に関連した研究 (27 井上 光平) パターン認識、画像処理、コンピュータビジョンに関連した研究 (28 井上 朝雄) 建築構法計画、建築生産に関連した研究 (29 上田 和夫) 聴覚心理学、聴覚認知心理学、知覚心理学、実験心理学に関連した研究 (30 牛尼 剛聡) サイバー空間デザイン、コンテンツ環境デザインに関連した研究 (31 大島 久雄) 演劇学に関連した研究</p>	

- (32 小野 直樹) デジタル画像の処理と認識に関連した研究
- (33 加藤 悠希) 日本建築史に関連した研究
- (34 河原 一彦) 音響システムの性能評価に関する研究に関連した研究
- (35 齋藤 俊文) コミュニケーション・デザイン研究、ミュージアム研究、映画表現研究(日本映画ペンクラブ会員)、サブカルチャー研究、広告表現研究、クリエイティブディレクション、アート/ソーシャルプロジェクト、Technological Singularity に関連した研究
- (36 鮫島 俊哉) 音響工学に関連した研究
- (37 城 一裕) メディアアート、パーソナルファブリケーションに関連した研究
- (38 杉本 美貴) インダストリアルデザイン、プロダクトデザイン、コンセプチュアルデザイン、日本美に関連した研究
- (39 妹尾 武治) 心理学に関連した研究
- (40 高田 正幸) 音響デザイン学、音響環境学に関連した研究
- (41 高取 千佳) ランドスケープ・エコロジー、都市計画、緑地計画、土地利用計画、都市環境計画・デザインに関連した研究
- (42 田村 良一) デザインマネジメント、デザインシステムに関連した研究
- (43 徳久 悟) サービス・デザイン、イノベーション・マネジメント、メディア・デザインに関連した研究
- (44 中村 美亜) 芸術社会学に関連した研究
- (45 西田 (掘) 紘子) 音楽学 (音楽理論・分析、西洋音楽史、音楽文化) に関連した研究
- (46 早渕 (古木) 百合子) 環境工学に関連した研究
- (47 平松 千尋) 視覚生理心理学に関連した研究
- (48 福島 綾子) 文化財学に関連した研究
- (49 藤 智亮) 設計工学、機能工学に関連した研究
- (50 Hall Michael) 英語、環境リスクマネジメントに関連した研究
- (51 松隈 浩之) デジタル映像デザインに関連した研究
- (52 松前 あかね) 創造性、知識科学、社会心理学、場のデザイン、関係性のデザイン、ソーシャルイノベーションに関連した研究
- (53 丸山 修) 計算生物学、バイオインフォマティクスに関連した研究
- (54 山内 勝也) 心理音響学、騒音環境学に関連した研究
- (55 吉岡 智和) 建築構造に関連した研究
- (56 吉永 幸靖) 画像処理、パターン認識に関連した研究
- (57 Remijn Gerard Bastiaan) 知覚心理学に関連した研究
- (58 今坂 智子) レーザーイオン化質量分析、超短パルス発生、質量分析計の開発に関連した研究
- (59 張 彦芳) ユニバーサルデザイン、ソーシャルデザインに関連した研究
- (60 西村 貴孝) 生理人類学に関連した研究
- (61 秋田 直繁) デザインエンジニアリング、インクルーシブデザイン、インテリアデザインプロダクトデザインに関連した研究
- (62 稲村 徳州) イノベーション手法、イノベーションプロセス、デザインエンジニアリング、デザイン思考に関連した研究
- (63 岩元 真明) 建築デザインに関連した研究
- (64 川本 陽一) 都市環境工学に関連した研究
- (65 工藤 真生) 視覚伝達デザイン、サイン計画、ピクトグラムに関連した研究
- (66 栗山 齊) アート、基礎デザインに関連した研究
- (67 迫坪 知広) 芸術工学に関連した研究

		<p>(68 澤井 賢一) 数理工学に関連した研究</p> <p>(70 関 元秀) 数理・統計モデリングに関連した研究</p> <p>(71 Jamison Daryl Steven) 作曲に関連した研究</p> <p>(72 藤 (北崎) 紀里子) ウェブデザインに関連した研究</p> <p>(73 長津 結一郎) ウェブデザインに関連した研究</p> <p>(74 冬野 美晴) メディアと教育、メディアと言語文化、認知言語学、コーパス言語学、英語教育学に関連した研究</p> <p>(75 村上 泰樹) 聴覚情報処理に関連した研究</p> <p>(76 森本 有紀) コンピュータグラフィックスに関連した研究</p> <p>(77 吉村 理一) 英語学・言語学 (生成文法) / 異文化間コミュニケーション研究に関連した研究</p> <p>(78 Loh Ping Yeap) 人間工学、作業療法学に関連した研究</p> <p>(79 Loh Wei Leong) デザイン教育に関連した研究</p> <p>(80 若宮 幸平) 音声科学に関連した研究</p> <p>(81 樋口 重和) 生理人類学、精神生理学、時間生物学、感性科学に関連した研究</p> <p>(82 平井 康之) インクルーシブデザイン、デザイン思考、オフィスデザイン、プロダクトデザイン、インテリアデザインに関連した研究</p> <p>(83 池田 美奈子) デザイン理論、デザイン史、情報編集デザインに関連した研究</p> <p>(84 曾我部 春香) 公共の場や空間に関わるデザインに関連した研究</p> <p>(86 土屋 潤) 建築材料、仕上材料、景観材料に関連した研究</p> <p>(87 元村 祐貴) 精神生理学 生理人類学 感性科学に関連した研究</p>	
<p>修士研究 関連科目</p>	<p>芸術工学特別研究 II</p>	<p>各自の研究テーマに関係する全般的な知識を習得するとともに、修士論文研究に関わる専門的知識を得ることを目的とする。本授業は芸術工学特別研究 I に引き続き、少人数によるゼミ形式で、修士論文研究に関する発表・討議、経過報告、中間発表会に向けた準備等を行う。テーマ設定の確定を行い、大まかに確定した研究方法により、予備的研究を実施させ、その結果により、研究目的、研究方法が適切であり、しかも妥当性があるかを検討させる。修士論文作成における修正、継続の判断と共に修士論文の執筆を促し、修士論文の完成に向けた指導を行う。</p> <p>(1 谷 正和) 環境人類学に関連した研究</p> <p>(2 伊藤 裕之) 心理学に関連した研究</p> <p>(3 井上 滋樹) 人間中心のデザイン、社会課題を解決するデザイン、SDGsに関連した研究</p> <p>(4 伊原 久裕) グラフィックデザインに関連した研究</p> <p>(5 鶯飼 哲矢) 建築設計・デザイン、都市デザインに関連した研究</p> <p>(6 大井 尚行) 都市・建築環境学、環境心理学に関連した研究</p> <p>(7 尾方 義人) インダストリアルデザイン、プロダクトデザイン、デザイン学、デザイン方法に関連した研究</p> <p>(8 尾本 章) 応用音響工学に関連した研究</p> <p>(9 包清 博之) ランドスケープ・マネジメント、緑地環境設計に関連した研究</p> <p>(10 鏑木 時彦) 音声情報処理に関連した研究</p> <p>(11 金 大雄) 映像コンテンツデザインに関連した研究</p> <p>(12 古賀 徹) 哲学、倫理学、美学、デザイン原論に関連した研究</p> <p>(13 近藤(笠利) 加代子) 環境政策、環境社会学、環境経済学、社会思想史に関連した研究</p> <p>(14 須長 正治) 色彩・視覚科学に関連した研究</p> <p>(15 竹之内 和樹) クリエーティブデザイン、メカニクスデザイン、図形科学に関連した研究</p> <p>(16 田上 健一) 建築計画・建築設計に関連した研究</p> <p>(17 鶴野 玲治) コンピュータグラフィックスに関連した研究</p> <p>(18 知足 美加子) 彫刻に関連した研究</p>	

- (19 原 健二) 視覚情報処理に関連した研究
- (20 前田 享史) 生理人類学、環境人間工学、温熱生理学に関連した研究
- (21 村木 里志) 福祉人間工学に関連した研究
- (22 矢向 正人) 音楽学、音楽美学に関連した研究
- (23 朝廣 和夫) 緑地保全学に関連した研究
- (24 麻生 典) 知的財産法に関連した研究
- (25 石井 達郎) 映像表現、映像提示デザイン、デジタルコンテンツデザインに関連した研究
- (26 伊藤 浩史) 時間生物学、非線形動力学に関連した研究
- (27 井上 光平) パターン認識、画像処理、コンピュータビジョンに関連した研究
- (28 井上 朝雄) 建築構法計画、建築生産に関連した研究
- (29 上田 和夫) 聴覚心理学、聴覚認知心理学、知覚心理学、実験心理学に関連した研究
- (30 牛尼 剛聡) サイバー空間デザイン、コンテンツ環境デザインに関連した研究
- (31 大島 久雄) 演劇学に関連した研究
- (32 小野 直樹) デジタル画像の処理と認識に関連した研究
- (33 加藤 悠希) 日本建築史に関連した研究
- (34 河原 一彦) 音響システムの性能評価に関する研究に関連した研究
- (35 齋藤 俊文) コミュニケーション・デザイン研究、ミュージアム研究、映画表現研究(日本映画ペンクラブ会員)、サブカルチャー研究、広告表現研究、クリエイティブディレクション、アート/ソーシャルプロジェクト、Technological Singularity に関連した研究
- (36 鮫島 俊哉) 音響工学に関連した研究
- (37 城 一裕) メディアアート、パーソナルファブリケーションに関連した研究
- (38 杉本 美貴) インダストリアルデザイン、プロダクトデザイン、コンセプチュアルデザイン、日本美に関連した研究
- (39 妹尾 武治) 心理学に関連した研究
- (40 高田 正幸) 音響デザイン学、音響環境学に関連した研究
- (41 高取 千佳) ランドスケープ・エコロジー、都市計画、緑地計画、土地利用計画、都市環境計画・デザインに関連した研究
- (42 田村 良一) デザインマネジメント、デザインシステムに関連した研究
- (43 徳久 悟) サービス・デザイン、イノベーション・マネジメント、メディア・デザインに関連した研究
- (44 中村 美亜) 芸術社会学に関連した研究
- (45 西田 (掘) 紘子) 音楽学 (音楽理論・分析、西洋音楽史、音楽文化) に関連した研究
- (46 早濑 (古木) 百合子) 環境工学に関連した研究
- (47 平松 千尋) 視覚生理心理学に関連した研究
- (48 福島 綾子) 文化財学に関連した研究
- (49 藤 智亮) 設計工学、機能工学に関連した研究
- (50 Hall Michael) 英語、環境リスクマネジメントに関連した研究
- (51 松隈 浩之) デジタル映像デザインに関連した研究
- (52 松前 あかね) 創造性、知識科学、社会心理学、場のデザイン、関係性のデザイン、ソーシャルイノベーションに関連した研究
- (53 丸山 修) 計算生物学、バイオインフォマティクスに関連した研究
- (54 山内 勝也) 心理音響学、騒音環境学に関連した研究
- (55 吉岡 智和) 建築構造に関連した研究
- (56 吉永 幸靖) 画像処理、パターン認識に関連した研究

- | | |
|--|--|
| | (57 Remijn Gerard Bastiaan) 知覚心理学に関連した研究 |
| | (58 今坂 智子) レーザーイオン化質量分析、超短パルス発生、質量分析計の開発に関連した研究 |
| | (59 張 彦芳) ユニバーサルデザイン、ソーシャルデザインに関連した研究 |
| | (60 西村 貴孝) 生理人類学に関連した研究 |
| | (61 秋田 直繁) デザインエンジニアリング、インクルーシブデザイン、インテリアデザインプロダクトデザインに関連した研究 |
| | (62 稲村 徳州) イノベーション手法、イノベーションプロセス、デザインエンジニアリング、デザイン思考に関連した研究 |
| | (63 岩元 真明) 建築デザインに関連した研究 |
| | (64 川本 陽一) 都市環境工学に関連した研究 |
| | (65 工藤 真生) 視覚伝達デザイン、サイン計画、ピクトグラムに関連した研究 |
| | (66 栗山 齊) アート、基礎デザインに関連した研究 |
| | (67 迫坪 知広) 芸術工学に関連した研究 |
| | (68 澤井 賢一) 数理工学に関連した研究 |
| | (70 関 元秀) 数理・統計モデリングに関連した研究 |
| | (71 Jamison Daryl Steven) 作曲に関連した研究 |
| | (72 藤(北崎) 紀里子) ウェブデザインに関連した研究 |
| | (73 長津 結一郎) ウェブデザインに関連した研究 |
| | (74 冬野 美晴) メディアと教育、メディアと言語文化、認知言語学、コーパス言語学、英語教育学に関連した研究 |
| | (75 村上 泰樹) 聴覚情報処理に関連した研究 |
| | (76 森本 有紀) コンピュータグラフィックスに関連した研究 |
| | (77 吉村 理一) 英語学・言語学(生成文法)／異文化間コミュニケーション研究に関連した研究 |
| | (78 Loh Ping Yeap) 人間工学、作業療法学に関連した研究 |
| | (79 Loh Wei Leong) デザイン教育に関連した研究 |
| | (80 若宮 幸平) 音声科学に関連した研究 |
| | (81 樋口 重和) 生理人類学、精神生理学、時間生物学、感性科学に関連した研究 |
| | (82 平井 康之) インクルーシブデザイン、デザイン思考、オフィスデザイン、プロダクトデザイン、インテリアデザインに関連した研究 |
| | (83 池田 美奈子) デザイン理論、デザイン史、情報編集デザインに関連した研究 |
| | (84 曾我部 春香) 公共の場や空間に関わるデザインに関連した研究 |
| | (86 土屋 潤) 建築材料、仕上材料、景観材料に関連した研究 |
| | (87 元村 祐貴) 精神生理学 生理人類学 感性科学に関連した研究 |

<p>修士研究関連科目</p>	<p>芸術工学特別研究Ⅲ</p>	<p>各自の研究テーマに関係する全般的な知識を習得するとともに、修士論文研究に関わる専門的知識を得ることを目的とする。本授業では、芸術工学特別研究Ⅱに引き続き、少人数によるゼミ形式で、修士論文に関する発表・討議、経過報告、修士論文発表会に向けた準備等を行う。学生は修士論文の執筆・調査を推し進め、指導教員並びに他の学生の意見を聞くことで自らの研究を振り返り、修士論文の完成を目指す。教員は、論文の論旨と執筆の進行状況、文献・資料収集の状況、データの整理の仕方、考察の方法などについて、準備の段階から完成に至る段階まで各段階に応じて助言を行う。</p> <p>(1 谷 正和) 環境人類学に関連した研究</p> <p>(2 伊藤 裕之) 心理学に関連した研究</p> <p>(3 井上 滋樹) 人間中心のデザイン、社会課題を解決するデザイン、SDGsに関連した研究</p> <p>(4 伊原 久裕) グラフィックデザインに関連した研究</p> <p>(5 鶴飼 哲矢) 建築設計・デザイン、都市デザインに関連した研究</p> <p>(6 大井 尚行) 都市・建築環境学、環境心理学に関連した研究</p> <p>(7 尾方 義人) インダストリアルデザイン、プロダクトデザイン、デザイン学、デザイン方法に関連した研究</p> <p>(8 尾本 章) 応用音響工学に関連した研究</p> <p>(9 包清 博之) ランドスケープ・マネジメント、緑地環境設計に関連した研究</p> <p>(10 籀木 時彦) 音声情報処理に関連した研究</p> <p>(11 金 大雄) 映像コンテンツデザインに関連した研究</p> <p>(12 古賀 徹) 哲学、倫理学、美学、デザイン原論に関連した研究</p> <p>(13 近藤(笠利) 加代子) 環境政策、環境社会学、環境経済学、社会思想史に関連した研究</p> <p>(14 須長 正治) 色彩・視覚科学に関連した研究</p> <p>(15 竹之内 和樹) クリエーティブデザイン、メカニクスデザイン、図形科学に関連した研究</p> <p>(16 田上 健一) 建築計画・建築設計に関連した研究</p> <p>(17 鶴野 玲治) コンピュータグラフィクスに関連した研究</p> <p>(18 知足 美加子) 彫刻に関連した研究</p> <p>(19 原 健二) 視覚情報処理に関連した研究</p> <p>(20 前田 享史) 生理人類学、環境人間工学、温熱生理学に関連した研究</p> <p>(21 村木 里志) 福祉人間工学に関連した研究</p> <p>(22 矢向 正人) 音楽学、音楽美学に関連した研究</p> <p>(23 朝廣 和夫) 緑地保全学に関連した研究</p> <p>(24 麻生 典) 知的財産法に関連した研究</p> <p>(25 石井 達郎) 映像表現、映像提示デザイン、デジタルコンテンツデザインに関連した研究</p> <p>(26 伊藤 浩史) 時間生物学、非線形動力学に関連した研究</p> <p>(27 井上 光平) パターン認識、画像処理、コンピュータビジョンに関連した研究</p> <p>(28 井上 朝雄) 建築構法計画、建築生産に関連した研究</p> <p>(29 上田 和夫) 聴覚心理学、聴覚認知心理学、知覚心理学、実験心理学に関連した研究</p> <p>(30 牛尼 剛聡) サイバー空間デザイン、コンテンツ環境デザインに関連した研究</p> <p>(31 大島 久雄) 演劇学に関連した研究</p> <p>(32 小野 直樹) デジタル画像の処理と認識に関連した研究</p> <p>(33 加藤 悠希) 日本建築史に関連した研究</p> <p>(34 河原 一彦) 音響システムの性能評価に関する研究に関連した研究</p>
-----------------	------------------	--

- (35 齋藤 俊文) コミュニケーション・デザイン研究、ミュージアム研究、映画表現研究(日本映画ペンクラブ会員)、サブカルチャー研究、広告表現研究、クリエイティブディレクション、アート/ソーシャルプロジェクト、Technological Singularity に関連した研究
- (36 鮫島 俊哉) 音響工学に関連した研究
- (37 城 一裕) メディアアート、パーソナルファブリケーションに関連した研究
- (38 杉本 美貴) インダストリアルデザイン、プロダクトデザイン、コンセプチュアルデザイン、日本美に関連した研究
- (39 妹尾 武治) 心理学に関連した研究
- (40 高田 正幸) 音響デザイン学、音響環境学に関連した研究
- (41 高取 千佳) ランドスケープ・エコロジー、都市計画、緑地計画、土地利用計画、都市環境計画・デザインに関連した研究
- (42 田村 良一) デザインマネジメント、デザインシステムに関連した研究
- (43 徳久 悟) サービス・デザイン、イノベーション・マネジメント、メディア・デザインに関連した研究
- (44 中村 美亜) 芸術社会学に関連した研究
- (45 西田 (掘) 紘子) 音楽学 (音楽理論・分析、西洋音楽史、音楽文化) に関連した研究
- (46 早瀬 (古木) 百合子) 環境工学に関連した研究
- (47 平松 千尋) 視覚生理心理学に関連した研究
- (48 福島 綾子) 文化財学に関連した研究
- (49 藤 智亮) 設計工学、機能工学に関連した研究
- (50 Hall Michael) 英語、環境リスクマネジメントに関連した研究
- (51 松隈 浩之) デジタル映像デザインに関連した研究
- (52 松前 あかね) 創造性、知識科学、社会心理学、場のデザイン、関係性のデザイン、ソーシャルイノベーションに関連した研究
- (53 丸山 修) 計算生物学、バイオインフォマティクスに関連した研究
- (54 山内 勝也) 心理音響学、騒音環境学に関連した研究
- (55 吉岡 智和) 建築構造に関連した研究
- (56 吉永 幸靖) 画像処理、パターン認識に関連した研究
- (57 Remijn Gerard Bastiaan) 知覚心理学に関連した研究
- (58 今坂 智子) レーザーイオン化質量分析、超短パルス発生、質量分析計の開発に関連した研究
- (59 張 彦芳) ユニバーサルデザイン、ソーシャルデザインに関連した研究
- (60 西村 貴孝) 生理人類学に関連した研究
- (61 秋田 直繁) デザインエンジニアリング、インクルーシブデザイン、インテリアデザインプロダクトデザインに関連した研究
- (62 稲村 徳州) イノベーション手法、イノベーションプロセス、デザインエンジニアリング、デザイン思考に関連した研究
- (63 岩元 真明) 建築デザインに関連した研究
- (64 川本 陽一) 都市環境工学に関連した研究
- (65 工藤 真生) 視覚伝達デザイン、サイン計画、ピクトグラムに関連した研究
- (66 栗山 斉) アート、基礎デザインに関連した研究
- (67 迫坪 知広) 芸術工学に関連した研究
- (68 澤井 賢一) 数理工学に関連した研究
- (70 関 元秀) 数理・統計モデリングに関連した研究
- (71 Jamison Daryl Steven) 作曲に関連した研究

		<p>(72 藤 (北崎) 紀里子) ウェブデザインに関連した研究</p> <p>(73 長津 結一郎) ウェブデザインに関連した研究</p> <p>(74 冬野 美晴) メディアと教育、メディアと言語文化、認知言語学、コーパス言語学、英語教育学に関連した研究</p> <p>(75 村上 泰樹) 聴覚情報処理に関連した研究</p> <p>(76 森本 有紀) コンピュータグラフィックスに関連した研究</p> <p>(77 吉村 理一) 英語学・言語学 (生成文法) / 異文化間コミュニケーション研究に関連した研究</p> <p>(78 Loh Ping Yeap) 人間工学, 作業療法学に関連した研究</p> <p>(79 Loh Wei Leong) デザイン教育に関連した研究</p> <p>(80 若宮 幸平) 音声科学に関連した研究</p> <p>(81 樋口 重和) 生理人類学、精神生理学、時間生物学、感性科学に関連した研究</p> <p>(82 平井 康之) インクルーシブデザイン、デザイン思考、オフィスデザイン、プロダクトデザイン、インテリアデザインに関連した研究</p> <p>(83 池田 美奈子) デザイン理論、デザイン史、情報編集デザインに関連した研究</p> <p>(84 曾我部 春香) 公共の場や空間に関わるデザインに関連した研究</p> <p>(86 土屋 潤) 建築材料、仕上材料、景観材料に関連した研究</p> <p>(87 元村 祐貴) 精神生理学 生理人類学 感性科学に関連した研究</p>	
<p>修士研究関連科目</p>	<p>芸術工学特別研究IV</p>	<p>各自の研究テーマに関係する全般的な知識を習得するとともに、修士論文研究に関わる専門的知識を得ることを目的とする。本授業は、芸術工学特別研究Ⅲに引き続き、少人数によるゼミ形式で、修士論文に関する発表・討議、経過報告、修士論文発表会に向けた準備等を行う。学生は修士論文の執筆完成を目標とし、その方向性を明確にしていく。ディスカッションを通して自らの研究を振り返り、研究および論文内容に修正を加えながら、修士論文を完成させる。教員はこれらの研究および論文作成の全過程において助言および指導を行う。さらに、研究成果を分かりやすくプレゼンテーションする方法についても指導を行う。</p> <p>(1 谷 正和) 環境人類学に関連した研究</p> <p>(2 伊藤 裕之) 心理学に関連した研究</p> <p>(3 井上 滋樹) 人間中心のデザイン、社会課題を解決するデザイン、SDGsに関連した研究</p> <p>(4 伊原 久裕) グラフィックデザインに関連した研究</p> <p>(5 鶯飼 哲矢) 建築設計・デザイン、都市デザインに関連した研究</p> <p>(6 大井 尚行) 都市・建築環境学、環境心理学に関連した研究</p> <p>(7 尾方 義人) インダストリアルデザイン、プロダクトデザイン、デザイン学、デザイン方法に関連した研究</p> <p>(8 尾本 章) 応用音響工学に関連した研究</p> <p>(9 包清 博之) ランドスケープ・マネジメント、緑地環境設計に関連した研究</p> <p>(10 籙木 時彦) 音声情報処理に関連した研究</p> <p>(11 金 大雄) 映像コンテンツデザインに関連した研究</p> <p>(12 古賀 徹) 哲学、倫理学、美学、デザイン原論に関連した研究</p> <p>(13 近藤(笠利) 加代子) 環境政策、環境社会学、環境経済学、社会思想史に関連した研究</p> <p>(14 須長 正治) 色彩・視覚科学に関連した研究</p> <p>(15 竹之内 和樹) クリエーティブデザイン、メカニクスデザイン、図形科学に関連した研究</p> <p>(16 田上 健一) 建築計画・建築設計に関連した研究</p> <p>(17 鶴野 玲治) コンピュータグラフィックスに関連した研究</p> <p>(18 知足 美加子) 彫刻に関連した研究</p> <p>(19 原 健二) 視覚情報処理に関連した研究</p>	

- (20 前田 享史) 生理人類学、環境人間工学、温熱生理学に
関連した研究
- (21 村木 里志) 福祉人間工学に関連した研究
- (22 矢向 正人) 音楽学、音楽美学に関連した研究
- (23 朝廣 和夫) 緑地保全学に関連した研究
- (24 麻生 典) 知的財産法に関連した研究
- (25 石井 達郎) 映像表現、映像提示デザイン、デジタルコンテンツ
デザインに関連した研究
- (26 伊藤 浩史) 時間生物学、非線形動力学に関連した研究
- (27 井上 光平) パターン認識、画像処理、コンピュータビジョンに
関連した研究
- (28 井上 朝雄) 建築構法計画、建築生産に関連した研究
- (29 上田 和夫) 聴覚心理学、聴覚認知心理学、知覚心理学、
実験心理学に関連した研究
- (30 牛尼 剛聡) サイバー空間デザイン、コンテンツ環境デザインに
関連した研究
- (31 大島 久雄) 演劇学に関連した研究
- (32 小野 直樹) デジタル画像の処理と認識に関連した研究
- (33 加藤 悠希) 日本建築史に関連した研究
- (34 河原 一彦) 音響システムの性能評価に関する研究に関連した研究
- (35 齋藤 俊文) コミュニケーション・デザイン研究、ミュージアム
研究、映画表現研究(日本映画ペンクラブ会員)、
サブカルチャー研究、広告表現研究、クリエイティブ
ディレクション、アート/ソーシャルプロジェクト、
Technological Singularity に関連した研究
- (36 鮫島 俊哉) 音響工学に関連した研究
- (37 城 一裕) メディアアート、パーソナルファブリケーションに
関連した研究
- (38 杉本 美貴) インダストリアルデザイン、プロダクトデザイン、
コンセプチュアルデザイン、日本美に関連した研究
- (39 妹尾 武治) 心理学に関連した研究
- (40 高田 正幸) 音響デザイン学、音響環境学に関連した研究
- (41 高取 千佳) ランドスケープ・エコロジー、都市計画、緑地計画、
土地利用計画、都市環境計画・デザインに関連した
研究
- (42 田村 良一) デザインマネジメント、デザインシステムに関連した
研究
- (43 徳久 悟) サービス・デザイン、イノベーション・マネジメント、
メディア・デザインに関連した研究
- (44 中村 美亜) 芸術社会学に関連した研究
- (45 西田 (掘) 紘子) 音楽学(音楽理論・分析、西洋音楽史、
音楽文化)に関連した研究
- (46 早渕 (古木) 百合子) 環境工学に関連した研究
- (47 平松 千尋) 視覚生理心理学に関連した研究
- (48 福島 綾子) 文化財学に関連した研究
- (49 藤 智亮) 設計工学、機能工学に関連した研究
- (50 Hall Michael) 英語、環境リスクマネジメントに関連した研究
- (51 松隈 浩之) デジタル映像デザインに関連した研究
- (52 松前 あかね) 創造性、知識科学、社会心理学、場のデザイン、
関係性のデザイン、ソーシャルイノベーションに
関連した研究
- (53 丸山 修) 計算生物学、バイオインフォマティクスに関連した研究
- (54 山内 勝也) 心理音響学、騒音環境学に関連した研究
- (55 吉岡 智和) 建築構造に関連した研究
- (56 吉永 幸靖) 画像処理、パターン認識に関連した研究

- | | |
|--|--|
| | (57 Remijn Gerard Bastiaan) 知覚心理学に関連した研究 |
| | (58 今坂 智子) レーザーイオン化質量分析、超短パルス発生、質量分析計の開発に関連した研究 |
| | (59 張 彦芳) ユニバーサルデザイン、ソーシャルデザインに関連した研究 |
| | (60 西村 貴孝) 生理人類学に関連した研究 |
| | (61 秋田 直繁) デザインエンジニアリング、インクルーシブデザイン、インテリアデザインプロダクトデザインに関連した研究 |
| | (62 稲村 徳州) イノベーション手法、イノベーションプロセス、デザインエンジニアリング、デザイン思考に関連した研究 |
| | (63 岩元 真明) 建築デザインに関連した研究 |
| | (64 川本 陽一) 都市環境工学に関連した研究 |
| | (65 工藤 真生) 視覚伝達デザイン、サイン計画、ピクトグラムに関連した研究 |
| | (66 栗山 齊) アート、基礎デザインに関連した研究 |
| | (67 迫坪 知広) 芸術工学に関連した研究 |
| | (68 澤井 賢一) 数理工学に関連した研究 |
| | (70 関 元秀) 数理・統計モデリングに関連した研究 |
| | (71 Jamison Daryl Steven) 作曲に関連した研究 |
| | (72 藤(北崎) 紀里子) ウェブデザインに関連した研究 |
| | (73 長津 結一郎) ウェブデザインに関連した研究 |
| | (74 冬野 美晴) メディアと教育、メディアと言語文化、認知言語学、コーパス言語学、英語教育学に関連した研究 |
| | (75 村上 泰樹) 聴覚情報処理に関連した研究 |
| | (76 森本 有紀) コンピュータグラフィックスに関連した研究 |
| | (77 吉村 理一) 英語学・言語学(生成文法)／異文化間コミュニケーション研究に関連した研究 |
| | (78 Loh Ping Yeap) 人間工学、作業療法学に関連した研究 |
| | (79 Loh Wei Leong) デザイン教育に関連した研究 |
| | (80 若宮 幸平) 音声科学に関連した研究 |
| | (81 樋口 重和) 生理人類学、精神生理学、時間生物学、感性科学に関連した研究 |
| | (82 平井 康之) インクルーシブデザイン、デザイン思考、オフィスデザイン、プロダクトデザイン、インテリアデザインに関連した研究 |
| | (83 池田 美奈子) デザイン理論、デザイン史、情報編集デザインに関連した研究 |
| | (84 曾我部 春香) 公共の場や空間に関わるデザインに関連した研究 |
| | (86 土屋 潤) 建築材料、仕上材料、景観材料に関連した研究 |
| | (87 元村 祐貴) 精神生理学 生理人類学 感性科学に関連した研究 |

<p>修士研究関連科目</p>	<p>芸術工学演習</p>	<p>各自の研究テーマに関係する全般的な知識を習得するとともに、修士論文研究に関わる専門的知識を得ることを目的とする。本授業では、系統ごとにコース横断的なグループを形成、研究指導（ゼミ）や研究発表を行う。1年次終了時には、系統別の修士研究中間発表会を開催することにより、同じ系統（方法論）で研究を推進する教員、学生と研究内容を共有し、広い視野に立ち他分野の者と連携して研究を推進できる能力を養成する。また、各種発表に関する自己ならびに他の学生のリハーサル等に参加し、最終的には修士論文発表を行う。</p> <p>(1 谷 正和) 環境人類学に関連した研究</p> <p>(2 伊藤 裕之) 心理学に関連した研究</p> <p>(3 井上 滋樹) 人間中心のデザイン、社会課題を解決するデザイン、SDGsに関連した研究</p> <p>(4 伊原 久裕) グラフィックデザインに関連した研究</p> <p>(5 鶴飼 哲矢) 建築設計・デザイン、都市デザインに関連した研究</p> <p>(6 大井 尚行) 都市・建築環境学、環境心理学に関連した研究</p> <p>(7 尾方 義人) インダストリアルデザイン、プロダクトデザイン、デザイン学、デザイン方法に関連した研究</p> <p>(8 尾本 章) 応用音響工学に関連した研究</p> <p>(9 包清 博之) ランドスケープ・マネジメント、緑地環境設計に関連した研究</p> <p>(10 籀木 時彦) 音声情報処理に関連した研究</p> <p>(11 金 大雄) 映像コンテンツデザインに関連した研究</p> <p>(12 古賀 徹) 哲学、倫理学、美学、デザイン原論に関連した研究</p> <p>(13 近藤(笠利) 加代子) 環境政策、環境社会学、環境経済学、社会思想史に関連した研究</p> <p>(14 須長 正治) 色彩・視覚科学に関連した研究</p> <p>(15 竹之内 和樹) クリエーティブデザイン、メカニクスデザイン、図形科学に関連した研究</p> <p>(16 田上 健一) 建築計画・建築設計に関連した研究</p> <p>(17 鶴野 玲治) コンピュータグラフィクスに関連した研究</p> <p>(18 知足 美加子) 彫刻に関連した研究</p> <p>(19 原 健二) 視覚情報処理に関連した研究</p> <p>(20 前田 享史) 生理人類学、環境人間工学、温熱生理学に関連した研究</p> <p>(21 村木 里志) 福祉人間工学に関連した研究</p> <p>(22 矢向 正人) 音楽学、音楽美学に関連した研究</p> <p>(23 朝廣 和夫) 緑地保全学に関連した研究</p> <p>(24 麻生 典) 知的財産法に関連した研究</p> <p>(25 石井 達郎) 映像表現、映像提示デザイン、デジタルコンテンツデザインに関連した研究</p> <p>(26 伊藤 浩史) 時間生物学、非線形動力学に関連した研究</p> <p>(27 井上 光平) パターン認識、画像処理、コンピュータビジョンに関連した研究</p> <p>(28 井上 朝雄) 建築構法計画、建築生産に関連した研究</p> <p>(29 上田 和夫) 聴覚心理学、聴覚認知心理学、知覚心理学、実験心理学に関連した研究</p> <p>(30 牛尼 剛聡) サイバー空間デザイン、コンテンツ環境デザインに関連した研究</p> <p>(31 大島 久雄) 演劇学に関連した研究</p> <p>(32 小野 直樹) デジタル画像の処理と認識に関連した研究</p> <p>(33 加藤 悠希) 日本建築史に関連した研究</p> <p>(34 河原 一彦) 音響システムの性能評価に関する研究に関連した研究</p>	
-----------------	---------------	---	--

- (35 齋藤 俊文) コミュニケーション・デザイン研究、ミュージアム研究、映画表現研究(日本映画ペンクラブ会員)、サブカルチャー研究、広告表現研究、クリエイティブディレクション、アート/ソーシャルプロジェクト、Technological Singularity に関連した研究
- (36 鮫島 俊哉) 音響工学に関連した研究
- (37 城 一裕) メディアアート、パーソナルファブリケーションに関連した研究
- (38 杉本 美貴) インダストリアルデザイン、プロダクトデザイン、コンセプチュアルデザイン、日本美に関連した研究
- (39 妹尾 武治) 心理学に関連した研究
- (40 高田 正幸) 音響デザイン学、音響環境学に関連した研究
- (41 高取 千佳) ランドスケープ・エコロジー、都市計画、緑地計画、土地利用計画、都市環境計画・デザインに関連した研究
- (42 田村 良一) デザインマネジメント、デザインシステムに関連した研究
- (43 徳久 悟) サービス・デザイン、イノベーション・マネジメント、メディア・デザインに関連した研究
- (44 中村 美亜) 芸術社会学に関連した研究
- (45 西田 (掘) 紘子) 音楽学(音楽理論・分析、西洋音楽史、音楽文化)に関連した研究
- (46 早瀬 (古木) 百合子) 環境工学に関連した研究
- (47 平松 千尋) 視覚生理心理学に関連した研究
- (48 福島 綾子) 文化財学に関連した研究
- (49 藤 智亮) 設計工学、機能工学に関連した研究
- (50 Hall Michael) 英語、環境リスクマネジメントに関連した研究
- (51 松隈 浩之) デジタル映像デザインに関連した研究
- (52 松前 あかね) 創造性、知識科学、社会心理学、場のデザイン、関係性のデザイン、ソーシャルイノベーションに関連した研究
- (53 丸山 修) 計算生物学、バイオインフォマティクスに関連した研究
- (54 山内 勝也) 心理音響学、騒音環境学に関連した研究
- (55 吉岡 智和) 建築構造に関連した研究
- (56 吉永 幸靖) 画像処理、パターン認識に関連した研究
- (57 Remijn Gerard Bastiaan) 知覚心理学に関連した研究
- (58 今坂 智子) レーザーイオン化質量分析、超短パルス発生、質量分析計の開発に関連した研究
- (59 張 彦芳) ユニバーサルデザイン、ソーシャルデザインに関連した研究
- (60 西村 貴孝) 生理人類学に関連した研究
- (61 秋田 直繁) デザインエンジニアリング、インクルーシブデザイン、インテリアデザインプロダクトデザインに関連した研究
- (62 稲村 徳州) イノベーション手法、イノベーションプロセス、デザインエンジニアリング、デザイン思考に関連した研究
- (63 岩元 真明) 建築デザインに関連した研究
- (64 川本 陽一) 都市環境工学に関連した研究
- (65 工藤 真生) 視覚伝達デザイン、サイン計画、ピクトグラムに関連した研究
- (66 栗山 斉) アート、基礎デザインに関連した研究
- (67 迫坪 知広) 芸術工学に関連した研究
- (68 澤井 賢一) 数理工学に関連した研究
- (70 関 元秀) 数理・統計モデリングに関連した研究
- (71 Jamison Daryl Steven) 作曲に関連した研究

- | | | |
|--|--|--|
| | (72 藤 (北崎) 紀里子) ウェブデザインに関連した研究 | |
| | (73 長津 結一郎) ウェブデザインに関連した研究 | |
| | (74 冬野 美晴) メディアと教育、メディアと言語文化、認知言語学、コーパス言語学、英語教育学に関連した研究 | |
| | (75 村上 泰樹) 聴覚情報処理に関連した研究 | |
| | (76 森本 有紀) コンピュータグラフィックスに関連した研究 | |
| | (77 吉村 理一) 英語学・言語学 (生成文法) / 異文化間コミュニケーション研究に関連した研究 | |
| | (78 Loh Ping Yeap) 人間工学、作業療法学に関連した研究 | |
| | (79 Loh Wei Leong) デザイン教育に関連した研究 | |
| | (80 若宮 幸平) 音声科学に関連した研究 | |
| | (81 樋口 重和) 生理人類学、精神生理学、時間生物学、感性科学に関連した研究 | |
| | (82 平井 康之) インクルーシブデザイン、デザイン思考、オフィスデザイン、プロダクトデザイン、インテリアデザインに関連した研究 | |
| | (83 池田 美奈子) デザイン理論、デザイン史、情報編集デザインに関連した研究 | |
| | (84 曾我部 春香) 公共の場や空間に関わるデザインに関連した研究 | |
| | (86 土屋 潤) 建築材料、仕上材料、景観材料に関連した研究 | |
| | (87 元村 祐貴) 精神生理学 生理人類学 感性科学に関連した研究 | |

コア科目	コデス アザト 科イラ 目ンテ ジョ ツ スク	シリアスゲームデザイン1	シリアスゲームとは社会問題の解決を目的に据えたゲームである。本講義では、教育や健康、訓練といった社会的な課題と、デジタルゲームが有する明快なインタフェイス、積極性、持続性を向上させる要素を組み合わせさせたデザインについて理解し、対象とするテーマの先行事例調査や行った上で企画案を作成する。テーマについては各自による選定を基本とするが、あらかじめ用意する場合もある。また、調査は現地に向いてのフィールドワーク実施を原則とする。	
コア科目	コデス アザト 科イラ 目ンテ ジョ ツ スク	シリアスゲームデザイン2	シリアスゲームデザイン1の継続として実施する。1で作成した企画案をもとに、紙ベースからデジタルモックアップ等によるプロトタイピングをおこない、最終的に実際のデジタル機器で利用可能な作品制作をおこなう。作成後、テーマに沿った現場にて実地検証をおこない、改良を繰り返しながら課題解決としてのエビデンスとコンテンツとしての質を社会実装可能な段階まで高めていく。また、制作したものを社会に対してどのような伝えていくかについての考察も併せておこなう。	
コア科目	コデス アザト 科イラ 目ンテ ジョ ツ スク	コネクティッドデザイン	社会や経済、地球環境の激動、それに伴う人々の価値観の多様化など不確実な未来をどう扱うか課題となっているため、デザインにおいてもこれまで以上に分野や領域を超えた発想や活動が求められる。そして、創出した製品・サービスが利益相反（使用価値・経済価値・社会価値）を招くこともあり、コンセプト立案・プロトタイプ・実証実験・社会実装に一貫して関与し、最適化する力が求められる。また、ICT・IoT技術の進展により多くの製品はワンストップサービスに組み込まれることから、マクロ・ミクロ両面の視点でデザイン開発することが重要になってきている。そこで本授業では、コネクティッドデザインの先進事例の概説と演習を通じて、コネクティッドデザインの理解と方法論を修得する。	
コア科目	コデス アザト 科イラ 目ンテ ジョ ツ スク	デザインイノベーション	デザインとは多様な分野の活動や情報を統合、編集、応用し、新たな価値を創造する行為であり、ますます複雑化するこれからの社会でイノベーションをもたらすためには、これまで以上に分野や領域を超えた発想や活動が求められる。さらに、魅力的なデザインやサービスをクリエイイトするだけでなく、それを実際に商品化、実現化しビジネスとして成立させることが必要である。そこで本授業では、イノベーションを起こすために必要となるデザインの実践的な考え方や手法について、デザイン開発現場で実践されている取り組み事例などを用いた講義と、様々な専門家の講演や実践的なワークショップを通じて修得する。	
コア科目	コデス アザト 科イラ 目ンテ ジョ ツ スク	ストラテジック・サービス・デザイン	本講義は、企業、あるいは、自治体が主体となり、顧客あるいは従業員に対して提供するサービスをデザインするために求められるスキルおよびナレッジの提供を目的とする。サービスをデザインする場合、そのデザインの対象は、顧客体験のみならず、顧客体験を成立させるバックエンドのシステム、パートナーで構成されるエコシステム、ビジネスモデルまでをデザインの対象とする。これらをデザインするために必要な理論を、様々なツールやメソッドを用いながら、講義および演習を通じて修得する。	講義8時間 演習8時間
コア科目	コデス アザト 科イラ 目ンテ ジョ ツ スク	プロデューサー原論	プロデューサーとは、民間企業・公共団体等を問わず事業戦略策定や新製品・新サービス開発、流通、販売、広告、財務、法務、施設開発・運営、環境対策等さまざまな領域において、それぞれの目的を達成するために必要なヒト・モノ・カネ・情報を統合し、新たな価値を創造するデザイン能力を兼ね備えたジェネラリスト型人材のことをいう。そして、多様化し複雑化する現在社会において、プロデューサーは最も必要とされている人材の一つである。しかし、各業界で使われているプロデューサーやプロデュースという言葉について明確な役割やスキルなどの定義がない場合が多い。そこで、各業界のプロデューサーや事例を考察しながら、プロデューサーの役割やデザイン能力、技能、行動規範等を理解することに主眼を置き、講義・演習を通じて自らの気づき、意志による選択力、提案力、判断力等を育む。	講義8時間 演習8時間
コア科目	コデス アザト 科イラ 目ンテ ジョ ツ スク	デザインマネジメント	今日、デザインは企業等における価値創造の仕組みとして広くとらえられ、製品やサービスの創出、イノベーションへの応用、企業と市場と社会との関わりにデザインを応用するなど、その対象や役割は拡大している。そこで本科目では、論文・文献、事例などをもとに、企業内デザインの起こりから、その変遷を時系列的に辿りつつ、デザインの対象の広がりや、デザイナーの役割の拡大、今後の展望について理解し、今後のデザインおよびデザイナーに求められるあり方について考察、活用できるようにする。	
コア科目	コデス アザト 科イラ 目ンテ ジョ ツ スク	デザインマーケティング	市場性や競争力のあるデザイン開発のためには、生活者のニーズ、企業の動向、市場の状況などを把握するとともに、デザインの対象はもとより、デザインプロセスなどにも関係する諸要素をシステムとして把握し、上記の目的を達成するための的確なアプローチによりデザインプロセスを展開させていくことが必要である。そこで本科目では、論文・文献、事例などを用いて解説するとともに、簡単な演習などを通して、デザインに関連する調査・分析の考え方や手法を修得し、今後において活用できるようにする。	
コア科目	コデス アザト 科イラ 目ンテ ジョ ツ スク	デザインプロジェクトマネジメント	感性価値を創造し、社会に適用していくためには、(1)社会課題の探索、(2)戦略の創造と選択、(3)実行の三つの要素が重要である。(1)と(2)はプロジェクトマネジメントの立ち上げに相当し、(3)はプロジェクトマネジメントの計画・実行・終結プロセスに相当する。本科目では、プロジェクトマネジメントに関する理論やツール・技法を概説するとともに、プロジェクトの立ち上げから計画・実行・終結といった一連のプロセスについて社会との関わりを体験する演習を通じて、プロジェクトを進める上で有効な主要ツール・技法を修得する。	講義8時間 演習8時間

コア科目	コデ サ ア ザ ト 科 イ ラ 目 ン テ コ ジ ツ ス ク	ブランドビジネスデザイン	企業・事業・地域・製品などのブランド及びブランドビルディングをビジネスに組み込むことで、飽和状態にある顧客ニーズの掘り起こしや商品やサービスの差別化が可能になる。本科目では、それぞれのビジネスレベルに応じたデザイン方法論・戦術を検討し、具体的な事例に基づいた講義・演習を行う。具体的には、ブランドデザインにおける機能的便益性や情緒的便益性にもとづいてデザインを切り口にして、対象となる商品・施設・事業を事例として、具体的なケーススタディやフィールドワークをもとに感性ブランドデザインの方法論やプロセス化を修得する。	講義8時間 演習8時間
コア科目	コデ サ ア ザ ト 科 イ ラ 目 ン テ コ ジ ツ ス ク	デザイン産業事情1	21世紀に入り、デザインの活用のされ方は20世紀の産業型社会とは大きく異なる局面を迎えつつある。本科目では、持続可能な社会の構築を目指すデザイン、既存のメディアを統合する新しいメディアデザインなど、最新のグッドデザイン賞の受賞作や、デザインを主軸にした企業活動、従来とは異なるデザイナーの活動を通して、新たな時代を拓きつつある国内・国外の新しいデザイン動向の事例研究を用いながら講義することにより、時代への対応力とデザインビジネスの創出力を高める。	
コア科目	コデ サ ア ザ ト 科 イ ラ 目 ン テ コ ジ ツ ス ク	デザイン産業事情2	本科目では、デザインによる生活価値の創造を核とするビジネスのスタイル、特に価値を生活者と共有し、その支持をもとに製造者、販売者を組み合わせて自ら事業を実施するスタイルの先行事例として産業界で注目を集めているサービスデザインなどを取り上げ、ビジネスの実現方法を学ぶとともに、生活者との価値共有の仕方、生産者・販売者間の連携ビジネスの仕方、事業としての採算の取り方などについて、講義と具体的な手法を体験する簡単な演習を通じて修得する。	
コア科目	コデ サ ア ザ ト 科 イ ラ 目 ン テ コ ジ ツ ス ク	知的財産法1	知的財産法は、デザインの保護法制として重要のみならず、ビジネスを展開する上でも非常に重要である。 そのため、まずは知的財産法の基礎を習得し、その後実際の登録状況や裁判例について確認していく。経営的に創作を秘密として保護するのか、知的財産権として保護するのかをどのように判断するのか、そうしたクローズ戦略だけでなくオープン戦略についても確認していく。また、裁判例は、どのようなデザインについて保護が欲せられているかが把握できるものであり、非常に重要であることからできる限り詳しく扱う。 知的財産法1では主に意匠法と不正競争防止法を扱う。 なお、特許法は知的財産法の基礎法とも言えることから、できる限り取り扱う。	
コア科目	コデ サ ア ザ ト 科 イ ラ 目 ン テ コ ジ ツ ス ク	知的財産法2	知的財産法は、デザインの保護法制として重要のみならず、ビジネスを展開する上でも非常に重要である。 そのため、まずは知的財産法の基礎を習得し、その後実際の登録状況や裁判例について確認していく。経営的に創作を秘密として保護するのか、知的財産権として保護するのかをどのように判断するのか、そうしたクローズ戦略だけでなくオープン戦略についても確認していく。また、裁判例は、どのようなデザインについて保護が欲せられているかが把握できるものであり、非常に重要であることからできる限り詳しく扱う。 知的財産法2では主に商標法と著作権法を扱う。 なお、特許法は知的財産法の基礎法とも言えることから、できる限り取り扱う。	
コア科目	コデ サ ア ザ ト 科 イ ラ 目 ン テ コ ジ ツ ス ク	デザイン思考	社会における新たな価値の具体的実現のためには、アントレプレナーシップと同時に、多様なステークホルダーを巻き込んだゼロワンのアイデア創造のためのクリエイティブなリテラシーが必要である。本講義では、その優れた技法として注目を集める「デザイン思考」の基礎を学ぶ。課題発見から社会実装のための提案まで、学生のイノベーション実現能力向上を目指すことを授業の目標とする。具体的な学生に身につけさせる知識・能力としては、デザイン思考についての基本的知識、課題発見からアイデア創出→プロトタイプング→評価に至るプロセスに関する技法を能力として身につけさせる。	
コア科目	コデ サ ア ザ ト 科 イ ラ 目 ン テ コ ジ ツ ス ク	リーンスタートアップ演習1	社会における新たな価値の具体的実現のためには、アントレプレナーシップと同時に、課題発見からアイデア創出→プロトタイプング→評価に至るプロセス技法が必要である。本講義では、優れた技法として注目を集める「デザイン思考」の基礎を学び、受講者のイノベーション実現能力向上を目指す。演習1のテーマはデザイン思考の理解で、学生の身につける力は、デザイン思考のプロセスの理解による基礎的理解が中心となる。 (82 平井 康之) 全体の企画、ディレクション、およびメインファシリテーション (62 稲村 徳州) 各チームのファシリテーションを補佐し、デザインプロセスの習得を指導する。	共同
コア科目	コデ サ ア ザ ト 科 イ ラ 目 ン テ コ ジ ツ ス ク	リーンスタートアップ演習2	社会における新たな価値の具体的実現のためには、アントレプレナーシップと同時に、課題発見からアイデア創出→プロトタイプング→評価に至るプロセス技法が必要である。本講義では、優れた技法として注目を集める「デザイン思考」の基礎を学び、受講者のイノベーション実現能力向上を目指す。演習2のテーマはデザイン思考からビジネスモデルへの展開で、学生が身につける能力としては、ビジネスとアントレプレナーシップに関する基礎的理解が中心となる。それらの知識を理解した上で、ビジネスモデルキャンパスなどの演習を行う。 (82 平井 康之) 全体の企画、ディレクション、およびメインファシリテーション (62 稲村 徳州) 各チームのファシリテーションを補佐し、デザインプロセスの習得を指導する。	共同

コア科目	コデス 科イラ 目ンテ コ ジ ツ スク	リーンスタートアップ演習3	社会における新たな価値の具体的実現のためには、アントレプレナーシップと同時に、課題発見からアイデア創出→プロトタイプング→評価に至るプロセス技法が必要である。本講義では、優れた技法として注目を集める「デザイン思考」の基礎を学び、受講者のイノベーション実現能力向上を目指す。演習3のテーマはプロトタイプングである。学生の身につける能力は、ビジネスやアントレプレナーシップの知識をもとに、演習1、2で創造したアイデアを社会実装・起業のためのプロトタイプとして精度を高める実現力である。 (82 平井 康之) 全体の企画、ディレクション、およびメインファシリテーション (62 稲村 徳州) 各チームのファシリテーションを補佐し、デザインプロセスの習得を指導する。	共同
コア科目	コデス アザト 科イラ 目ンテ コ ト ツ スク	リーンスタートアップ演習4	社会における新たな価値の具体的実現のためには、アントレプレナーシップと同時に、課題発見からアイデア創出→プロトタイプング→評価に至るプロセス技法が必要である。本講義では、優れた技法として注目を集める「デザイン思考」の基礎を学び、受講者のイノベーション実現能力向上を目指す。演習4のテーマは、ビジネスの専門的知識から知的財産として活用するまでのメソッドを学び、その方法論を説明する能力を培うことである。それらをもとにプロトタイプングとビジネスモデルを融合した提案をVCや企業へ最終プレゼンテーションする。 (82 平井 康之) 全体の企画、ディレクション、およびメインファシリテーション (62 稲村 徳州) 各チームのファシリテーションを補佐し、デザインプロセスの習得を指導する。	共同
コア科目	コ環 ア境 科設 目計 コ ー ス	環境化学特論	環境中の農薬およびダイオキシン類などの残留性有機汚染物質 (POPs) および食品や洗剤などあらゆる日用品に含まれる香料などの化学物質が健康や成長にもたらす影響は、世界的な関心を集めている。また、近年、爆発物や神経ガス等によるテロ活動が頻発し、安全に関する懸念が高まっている。これらの化学物質を正しく計測することは、それらの環境中での挙動を知り、リスクを評価する上で重要である。本講義では開発中の環境分析法、及びそれに必要な理論、予測方法等について紹介する。	
コア科目	コ環 ア境 科設 目計 コ ー ス	熱環境学特論	現代は地球規模の温暖化(気候変動)と都市部のヒートアイランド現象(都市気候)の2つの異なるスケールの温暖化の影響に晒されている。世界の約50%の人が都市に暮らしており、都市環境を適切に保つ事は重要な課題である。本講義では、気候変動の科学的知見について、理解を深める事を目指す。授業の中では文献を読んで抄録を作成し、発表を行う。またその発表内容に対してディスカッションを行う事で、文献の理解を深めていく。	
コア科目	コ環 ア境 科設 目計 コ ー ス	建築構造学特論	この講義では、鉄筋コンクリート構造の建物が大地震に対し倒壊しない性能を付与するための耐震構造計画、各種構造計算の進め方、さらには既存不適格建築物の耐震改修事例などについて、最新の研究成果に基づき解説する。授業担当教員による解説を主とした形態であり、時折、学生との問答を通じて、関連の知識を深めていく。ただし、特定の課題等に対する自身の意見や考えを取りまとめ、複数の学生の前で発表し、質疑応答をする形式の授業も複数回行う。	
コア科目	コ環 ア境 科設 目計 コ ー ス	環境材料学特論	この講義では、建築の構造材料(木材・コンクリート・鋼材)の基礎的理解を前提に、部位構成材料・機能材料、そして地域資源としての材料について解説する。建築物の設計において建築材料選定の良否は、建築物のデザインのみで無く、居住性、耐久性、安全性などに大きな影響を及ぼす。環境材料学特論では、建築材料の基礎と、建築物における「適材適所」を学ぶ。様々な機能を有する最新の材料や、材料のリサイクルについて知るとともに、地域資源としての材料を活かした建築・景観づくりの事例から持続可能な社会への貢献を考える。	
コア科目	コ環 ア境 科設 目計 コ ー ス	音響環境学特論	音環境デザインを考えると、その物理的な状態と人間がどのように捉えているのかという視点が重要で、これまでに多くの取組みがなされてきた。この授業では、こういった従来の捉え方にとどまらない、音環境に対する様々な視点を紹介する。具体的には、授業の前半に、音環境の物理特性と聞こえや身体的反応といった従来の知見に加え、交通、経済、バリアフリーといったさまざまな視点から音環境を考察した知見を講義形式で紹介する。授業の後半は、音環境評価や音環境デザインに関する研究論文を輪読する形式をとる。	
コア科目	コ環 ア境 科設 目計 コ ー ス	音環境評価特論	音環境の測定および評価の方法について、物理的側面と心理的側面の双方を定量的に評価する手法を学ぶ。物理的測定については、ISO 1996「環境騒音の記述、測定および評価」をはじめとする技術規格によって定められる技術的知見や国際規格の動向および設計思想について解説する。心理的側面については、主観評価法およびサウンドスケープに関する知識を解説する。その上で、授業後半では、具体的な対象について音環境デザインの立案を行う。	

コア科目	環境科設計コース	環境心理学特論	この講義では設計の本質を知り、人間主体の環境デザインを行うために、環境心理学の知見について講義するとともに、最新の間人環境系研究事例を題材とした授業を行う。人間による環境の知覚とそれに基づく環境の設計、さらには場所の認知と記憶、住環境、オフィス環境等のトピックについて事例を紹介しながら解説する。受講生は与えられた課題に対し、教科書を熟読して予習し、授業中にはディスカッションを通してお互いの理解を深める。	
コア科目	環境科設計コース	建築計画特論	現代の住宅地や地域施設は、どのような計画プロセスにより構築されているのか、またそのプロセスに参加するのは誰で、これらは本当に社会的な要請に従って構築されているのか。また、計画者や設計者はどのような役割を果たし、エンドユーザーはどう評価しているのか。 ここでは、現代社会において建築デザイン計画を行う上で必要となる諸条件の分析（調査・分析方法等）とコンパイル（実践的デザイン計画手法等）について、関連文献・研究論文・実際の計画設計事例を通して学習する。	
コア科目	環境科設計コース	建築構法計画特論	この講義では、日本の建築構法計画・建築生産システムがどのような仕組みになっているかを、諸外国の現状と比較しながら学んでいく。 建築の世界で研究者や技術者として活躍する際必要な、その世界の専門家として必要最小限の知識、技術、考え方を習得すること目標とし、建築構法計画・生産システムを取り巻く環境の変化に柔軟に対応できる素養と適応力を身につける。 さらに、建築構法に関連する分野について、国家資格「一級建築士」に要求される水準の学問的知識と実務上の知識を習得することも目指す。	
コア科目	環境科設計コース	環境保全学特論	本授業は講義形式を中心とし、自然の保護と保全、特に農山村、森林環境を中心にテーマを設け進めることとする。これらに関わる法規制、キーワードの説明と共に、植生の調査方法、および、講師の関わるフィールドを事例に講義を進め、学生の理解を深める。また、小研究課題を課し、提案レポートを制作し、発表を行う。都市への人口集中と農山村の過疎化の進行、災害の増加、生産環境、自然環境の課題に対し、学生自らが考えを深め、それぞれの分野で活かす動機となることを本講義の目的とする。	
コア科目	環境科設計コース	景観生態学特論	この講義では、都市部、田園部、森林部それぞれにおいて、生態的プロセスや社会的プロセスが、景観の構造や機能にどのような影響を及ぼしてきたかを理解することを目的とする。そのために、現在、土地利用上の利害対立や生態的基盤の劣化が急速に顕在化しつつあることも踏まえながら、エコロジカル・プランニングに基づいた土地利用計画や地域環境計画の方法論、生態系管理技術などの動向を最新の研究成果にもとづいて学習していく。	
コア科目	環境科設計コース	ランドスケープデザイン特論	豊かな自然の存在する地域では、自然環境を計画的に保全するとともに、ランドスケープの資源として積極的に管理・活用するためのマネジメントが求められる。また、都市や都市周辺の農村地域などでは、人々の日常的な生活行動支援にかかわる緑地・公園などのオープンスペースや諸施設などの構成要素を関連付け、優れたランドスケープとして創出するためのマネジメントが必要となる。そこで本講義では、自然の営みや都市活動と人間との相互依存関係を理解し、様々な生活環境の持続的発展に寄与するランドスケープのあり方について理解を深めてもらう。そのため、基礎的事項を解説するとともに、各種の事例を教材としてとりあげ、計画的課題の設定や調査・分析方法、計画手順、時間管理などについて言及する。	
コア科目	環境科設計コース	日本建築史特論	この講義では、建築史研究の方法論および基礎的技法を学ぶことを目標として、日本建築史・都市史に関する講義および文献・史料の読解等を行う。基本的な用語・概念の理解や歴史的変遷の理解の根底をなす史料や先行研究を読み解き、その解釈の妥当性などを検討する。具体的な対象は、茶室、宮殿、神社、あるいは近代の建築学など、さまざまに設定し、対象によっては建物・町並み等の実地見学や修理工事の見学などを組み込む場合もある。	
コア科目	環境科設計コース	西洋建築史特論	この講義では、西洋の歴史的都市を、古代から現代にいたるまでのプロジェクトの集積ととらえ、それぞれのプロジェクトの基本戦略、手法、理念などを説明する。また、西洋建築史・都市史研究の基本的な手法についても説明する。全球的視野にたつて非西洋との比較・対照も念頭におきながらも、近代建築・近代都市を生み出す母体となった西洋の伝統的な都市・建築について深く学ぶことで、都市や建築についてさまざまな観点から解釈できるようになることを目標とする。	
コア科目	環境科設計コース	文化財学特論	欧州に端を欲する近代保存運動のなかで文化財概念がどのように形成されてきたのかを概観する。それらがどのように現代においては解釈されているのかを理解するため、文化財に関する国際憲章を講読する。アテネ憲章、ベニス憲章、ユネスコ世界遺産条約、オーセンティシティに関する奈良ドキュメント、バラ憲章などを読みながら、文化財保存修復概念の諸相を示す具体事例を紹介しつつ、ディスカッションをおこなう。学外見学をおこなう場合もある。	

コア科目	環境設計コース	国際環境政策特論	本講義では、気候変動における国際枠組みの歴史的経緯と現状、温室効果ガス排出量算定方法論の解説を行う。具体的には、国連気候変動枠組条約における京都議定書からパリ協定への国際枠組みの変遷と国家間意思決定プロセス、また、国際的に削減や提出を求められている二酸化炭素等の温室効果ガスはどのように計算されているのか、排出量の計算方法とそのデータの読み解き方、政策的活用や国際評価について概説する。気候変動における国際的環境政策について、科学と政策の両面から習得することを目的とする。
コア科目	環境設計コース	環境人類学特論	国際協力は多くの場合、世界各国の経済格差（「南北問題」）を背景にして、先進国による発展途上国に対する開発援助という形で行われる。開発援助は第2次世界大戦後、アメリカを中心とする戦勝国によって、世界の貧困を経済発展で解決する目的で始まった。しかし、近年グローバル化が進捗し、多くの発展途上国が世界資本主義体制に組み込まれたことから、開発援助の見直しが必要となってきた。また、別の見方では、グローバル化の進展によって、世界の格差が拡大し、貧困の解消を目的とする開発援助はますます必要になってきたという見方もある。 この授業では、開発援助という国際協力を焦点を当て、「グローバル化した世界における開発援助の在り方」を考えることを目的とし、履修者にはこの「グローバル化した世界における開発援助の在り方」というタイトルで最終レポートの提出を求める。
コア科目	環境設計コース	共生社会デザイン論	人と人、環境と人が持続的に共生していく上での現代社会の課題について検討を加え、それらを解決していく人間行動とそれをはぐくむ社会デザインを明らかにし、それを導くための政策的な課題を述べる。具体的な課題として、有機性資源の循環と自然エネルギーを取り上げる。それらが地域産業として成立できる地域の仕組み作りと企業と市民と自治体の行動と相互の連携について論じるとともに、その環境的社会的経済的影響を明らかにしそれらを大きくしていくための課題を検討する。
コア科目	環境設計コース	環境リスクマネジメント	Students will learn about the importance of environment risk management to provide them with a base to formulate and implement projects with proper risk assessments and action plans to protect individuals, enterprises and society from costly legal actions and damages associated with natural disasters. この授業では、費用のかかる訴訟問題や自然災害に関連する損害から、個人、企業、社会を守るための適切なリスク評価と行動計画を備えたプロジェクトを策定および実施するための基礎を考える環境リスクマネジメントの重要性について学ぶ。
コア科目	環境設計コース	デザイン哲学	真理と倫理と美を実現するデザインが学として成立する基礎について、哲学史における古典的な議論から最新の議論まで取り上げ、未来のデザインのあり方を展望する。新実証主義、サイバネティクス、ポスト構造主義、批判理論、リサーチ・スルー・デザインなどの理論について深く学び、現在自分が取り組んでいるデザイン課題が、学問の歴史やデザイン全体のうちでいかなる位置を占め、いかなる限界と可能性を持つのかを理解できるようにする。
コア科目	環境設計コース	美術史	共生可能な未来社会を考えるアプローチとしての美術史についての講義である。美術における様式の変遷の背後には、社会や産業・社会思想といったより広い、物質的ともいえる制度の変化がある。ルネサンス、バロック、新古典派、ロマン主義の時代の古典的な作品を現代の批評家がどのように論じているかを学ぶと同時に、個々の作品の分析を通じて、作品を支える「制度」を読み解く力、よりよい豊かな未来構築の方法を考える力、現代の社会の在り方をふまえて作品や表現を批評する力を身につける。
コア科目	環境設計コース	環境文化特論	この講義では、地域における環境と文化の関係について、とりわけ芸術を用いた都市再生・地域再生や社会再生の実例を検証しながら社会的関心を高めて行くため、社会に対して働きかける方法について解説する。とくに芸術文化の魅力や力を用いて都市再生・地域再生や社会再生に挑んできたヨーロッパの事例などを多彩に分析検討しながら、ブラウンフィールドが再生されていくダイナミズム、そこから創出される創造都市＝クリエイティブ・シティの原理に関する内容を理解すると同時に、昨今の疲弊する地域社会の再生へ向け実践的な提案プログラムを創出することを目標としている。
コア科目	環境設計コース	環境デザインプロジェクトA	環境デザインに関する方法論や知識を演習を通じて修得し、応用する力を身につけるためのプロジェクト科目である。プロジェクトのテーマは環境設計コースのコア科目をベースに、主に建築学分野に含まれる環境心理学、建築計画、建築構法計画、建築史などの分野から設定され、学生が選択して履修する。初回にその年度に設定されたテーマについての説明を受けた後、選択したテーマごとに別れて調査・制作を行い、最後に合評会が行われる。

コア科目	環境設計コース	環境デザインプロジェクトB	環境デザインに関する方法論や知識を演習を通じて修得し、応用する力を身につけるためのプロジェクト科目である。プロジェクトのテーマは環境設計コースのコア科目をベースに、主に都市・ランドスケープ分野に含まれる環境保全学、景観生態学、空間情報学などの分野から設定され、学生が選択して履修する。初回にその年度に設定されたテーマについての説明を受けた後、選択したテーマごとに別れて調査・制作を行い、最後に合評会が行われる。	
コア科目	音響設計コース	聴覚心理学特論	This is a seminar-style class discussing how human beings perceive, construct, and understand the outer world through the auditory system. Every student has to read through a textbook in English and present summary of the book. ヒトが聴覚を通じていかに外界の様子を知覚、構成、理解するかについてセミナー形式で学び、討論する。英語で書かれた聴覚に関する専門書を一冊読み、その内容について発表を行うことがそれぞれの学生に課される課題である。	
コア科目	音響設計コース	聴覚生理学特論	キーワード: 時間、聴覚、視覚、視聴覚デモンストレーション、知覚実験。 Keywords: time, audition, vision, audio-visual demonstrations, perceptual experiments. 全ての知覚の枠組みを形作る時間について、学生が最近の面白い研究を見つけて発表し、それに関連する視聴覚デモンストレーションの制作あるいは簡易な知覚実験を行い、発表する。 Classes are in English / Japanese.	
コア科目	音響設計コース	時間知覚特論	キーワード: 感覚生理学、聴覚生理学、脳科学、聴覚心理学、EEG、MEG、NIRS、fMRI。 Keywords: sensory physiology, auditory physiology, brain research, auditory perception, EEG, MEG, NIRS, fMRI. 変化の検知やコミュニケーションに重要な役割を果たす聴覚生理学について、最近の面白い研究を見つけて発表する。 Classes are in Japanese / English.	
コア科目	音響設計コース	音声生成特論	音声は、人と人がコミュニケーションを行う際の最も基本的なツールである。その音声を人が発話する際の音声生成の過程について詳しく解説する。具体的には、喉頭部の声帯、声道部の舌、軟口蓋、口唇、顎といった発話器官の役割や、発話器官の運動観測手段、実際の発話運動のようす、それらの運動に対応した音声やその波形、得られた音声の音響分析結果等について解説する。後半では、音声生成に関する論文を輪読することにより理解を深める。	
コア科目	音響設計コース	音声情報学特論	音声言語の構成要素である音韻と韻律の表出過程を、音声生成の音源フィルタ理論に基づいて、音響学ならびに発話機構の生理学・物理学の観点から詳しく解説する。具体的には、呼吸系、喉頭、声道からなる人の発話システムを概観したうえで、声道については音響共鳴によるフォルマントの形成と言語情報の生成について説明する。喉頭に関しては、流体と弾性体の相互作用による声帯の自励振動メカニズムに重点をおき、その発音機構が音声信号に見られる特徴的なスペクトルの生起要因であることを理解させる。さらに、音声を知覚する聴覚系や言語中枢の働きをふまえることで、人の音声コミュニケーションの成立過程を体系的に理解させる。講義で得た知識をより深く身につけるため、授業後半ではグループワークによる音声分析を行う。	講義15時間 演習15時間
コア科目	音響設計コース	音響制御特論	不要な音を付加的な音によって低減する技術である能動制御を題材にして、音の物理的制御手法とそのための信号処理の手法を学ぶ。 まず音場を解析的な視点で考察し、制御の効果が得られる物理的な意味と限界を理解させる。さらに、信号処理を導入した種々の制御方法について、その長所、短所を認識し、個々の事例に対して最も適した制御方法を選択できるようにする。特に、適応的なアルゴリズムに関して、原理と具体的な記述手法に関して示す。 全体を通して、単なる制御のテクニックではなく、これが有効に働く物理的な原理に関しての解説に注力する。	
コア科目	音響設計コース	音響工学特論	音響工学における幾つかの要素技術について、講義形式にて修得してもらう。具体的内容は、 (1) 単一マイクロホン、ダミーヘッドマイクロホン、近接4点法マイクロホンによって、音源信号の録音と、音場の伝送特性 (インパルス応答) の収録を行い、 (2) 高速 1bit AD変換によって、高能率符号化し、 (3) 一般調和解析などを用いた先進的な信号処理によって、雑音や余計な残響を除去した、クリアなドライ音源信号 (響の付いていない音源) を作成し、 (4) 音場の数値計算によって、音場の伝送特性 (インパルス応答) を予測し、 (5) ドライ音源信号と、音場の伝送特性 (インパルス応答) のたたみ込み演算を行い、それを高能率伝送し、 (6) トランスオーラルシステムを用いて個人用の三次元音空間再生を行い、 (7) 近接4点法で抽出された仮想音源分布、または、Kirchhoff-Huygensの公式に基づいた方法によって、多人数用の三次元音空間再生を行う、 という、音場再生技術のend to end、の技術である。	

コア科目	コア響設計目計コース	計算音響学	物理・工学システムの支配方程式たる偏微分方程式 (Partial Differential Equations: PDEs) の数値解析手法を、講義形式にて修得させる。 PDEsを数値的に解くテクニックの"Big Three": 1950s : 有限差分法 (Finite Difference Method: FDM) 1960s : 有限要素法 (Finite Element Method: FEM) 1980s : 境界要素法 (Boundary Element Method: BEM) そして、工学分野ではなぜか忘れさられてしまっている 1970s : Spectral Method について、3次元弾性体、はり、シェル振動場を題材として解説する。	
コア科目	コア響設計目計コース	福祉音響学	高齢化社会が進んでいく中で、我々のQoLを高めることが可能な福祉技術の開発は喫緊の課題である。視覚や運動生理に関する福祉技術は、例えばメガネや車いすなど、我々の日常生活に欠かすことが出来ない。それに比べ、補聴器などの音に関する福祉技術は広く浸透しているとは言えない。本講義では、まず音に関する福祉の諸問題を説明する。そして、なぜ音に関する福祉技術が浸透しないのかを議論することで、どのようにすれば福祉技術を活用することが出来るのかをまとめていく。	講義15時間 演習15時間
コア科目	コア響設計目計コース	音響イメージング特論	音と画像は信号処理の基礎では次元の違いとしてとらえられるが、音と画像のクロスメディア処理などの応用処理では時間と空間の違いや計測手段の違いを考慮する必要がある。特に実空間の画像計測においてはレンズ光学系による次元変換および伝達特性が以後の処理に大きく影響する。本講義では時系列信号処理の基礎を持つものを対象に、画像計測の基礎である撮像光学系の基礎および伝達特性から空間周波数処理などの画像処理の基礎理論や応用について講義する。	
コア科目	コア響設計目計コース	音響信号処理特論	音メディアを用いたコミュニケーションは、人間が有する最も基本的な能力の一つである。さらに、音メディアに基づく情報処理は、ヒューマンインターフェイスに関する学術・技術分野において非常に重要な位置をしめている。本授業では、音メディア処理の基盤技術を修得するため、音声や一般音響信号(騒音や楽音も含む)を取り扱う音響信号処理技術に焦点をあて、その基礎理論や応用に関して解説を行う。 特に、本講義では、音響システムの性能評価の基本となる、インパルス応答の測定手法について、古典的手法と現代的手法を論文の輪読により理解を深める。	
コア科目	コア響設計目計コース	音響環境学特論	音環境デザインを考えると、その物理的な状態と人間がどのように捉えているのかという視点が重要で、これまでに多くの取組みがなされてきた。この授業では、こういった従来の捉え方にとどまらない、音環境に対する様々な視点を紹介する。具体的には、授業の前半に、音環境の物理特性と聞こえや身体の反応といった従来の知見に加え、交通、経済、バリアフリーといったさまざまな視点から音環境を考察した知見を講義形式で紹介する。授業の後半は、音環境評価や音環境デザインに関する研究論文を輪読する形式をとる。	
コア科目	コア響設計目計コース	音環境評価特論	音環境の測定および評価の方法について、物理的側面と心理的側面の双方を定量的に評価する手法を学ぶ。物理的測定については、ISO 1996 「環境騒音の記述、測定および評価」をはじめとする技術規格によって定められる技術的知見や国際規格の動向および設計思想について解説する。心理的側面については、主観評価法およびサウンドスケープに関する知識を解説する。その上で、授業後半では、具体的な対象について音環境デザインの立案を行う。	
コア科目	コア響設計目計コース	音響芸術特論	今日に至るまでの音をその媒体として用いた芸術の実践を、美学と技術の双方の側面から概観する。ペーター・ヴァイベル『Sound Art』等の学術資料に基づき、過去の代表的な作品を調査・分析する。あわせて、それら調査・分析の結果を踏まえた作品の再現をおこない、その制作を通じて音響芸術とは何かということについて各人なりの理解を促す。通常の授業に加え、外部施設の見学、制作した作品の展示、およびゲストによる講評を予定している。	
コア科目	コア響設計目計コース	作曲学特論	世界中でよく知られた現代音楽作品、加えてアンダーグラウンドな、局地的な現代音楽のスタイルをも調査し、ディープ・リスニング、ディスカッション、作曲実践によって、芸術音楽の中で重要なジャンルと作曲家、作品を分析する。様々な解釈概念——例えば、演奏の具現化、政治的(フェミニスト、クィア)な視点、及び美学・精神的なアプローチ——も検討する。ここ30年間で作られたアコースティック楽器のための音楽、またはアコースティック楽器と電子音楽の間の相互影響についても考察する。セミナー形式で学ぶ。Materials in both English and Japanese will be used in this seminar.	
コア科目	コア響設計目計コース	サウンドデザイン特論	サウンドデザインのための、知識・技術・事例を、科学・工学・芸術の側面から総合的に学び、サウンドデザインの実習を実践的に行う。授業の前半では、サウンドデザインの基礎について各担当教員から2週ずつ、それぞれ、視聴覚の科学的知見(レメイン)、工学的技術や規格・法制度(山内)、芸術的な実践の事例(城)について講義を行う。授業7回目以降は、具体的な対象を設定し、学んだ知識・技術・事例を活用したサウンドデザインの実践を行い、成果について相互に講評する。	共同 講義12時間 演習18時間

コア科目	音響設計コース	民族音楽学特論	自国や西洋由来の音楽だけでなく、世界における民族音楽や伝統音楽や民俗芸能について理解し考えるために必要となる概念や研究方法を学び、さまざまな文化や音楽活動の差異や多様性をフラットに理解する態度を身につける。具体的には、世界音楽、パフォーマンスと身体、声と身体、個人と集団、楽器学、フィールドワークの方法、アーカイブなどの観点から近年の理論や研究動向を押さえつつ、研究実践を試み、発表や議論を行う。	共同
コア科目	音響設計コース	音楽社会文化特論	現在の音楽コンテンツの基盤となっている音楽のうち、ヨーロッパに源流をもつ音楽について、コンテンツ面ならびに文化的・社会的・歴史的側面から理解を深める。それをおとして、現今に至るさまざまな音楽作品や音楽活動について、論理的・感性的視点から考える技術を身につける。具体的には以下の通りである（音楽経験は特に必要としない）。 1) 欧米や日本における音楽や楽器の発展を理解する。 2) 映画音楽などさまざまなメディアを通じた音楽の実態を知る。 3) 日本における音楽をめぐる発信・受容や活用方法について理解を深める。	
コア科目	音響設計コース	聴覚文化論特論	この授業では、19世紀から現代に至るまでの聴取の技法・文化の歴史を、主に音を記録・再生するメディアの成立という観点から、具体的な事例を確認し通覧する。音楽を含むある時代における音の文化というものは、その時点に存在している技術により何らかの規定を受けている。一方で、その時代の人々による音の聴き方が技術の変化を促すことにもなる。授業内では、この聴取の技法と文化との密接な関わりを、様々な視聴覚資料やゲストによる講演を通じて考察する。	
コア科目	音響設計コース	言語学特論	日本語や英語をはじめとした諸言語を対象に、音や音楽とのかかわりから「ことば」を科学的・歴史的・社会的・思想的観点から分析する方法を修得する。具体的には、音・音楽と言語の基本特性（音声学や音韻論）を確認したうえで、音と言語、リズムと言語、音楽と言語、統語論や意味論、メディアと言語、言語コミュニケーション論、社会との関係、相互行為分析の近年の研究を概観し、それぞれの履修者が購読しつつ研究実践を試みてプレゼンテーション等を行う。	共同
コア科目	音響設計コース	音響設計特別講話	音響設計に関わる研究教育、技術開発、製品設計、作品制作など、様々な分野の実践的な展開について実例を学ぶ。例えば、著名なコンサートホールの音響設計者、国際的に活躍する録音エンジニア、公共空間の音響環境デザイナー、音声聴覚分野の研究者などをゲスト講師として招聘する。コース担当教員が持ち回りでそれぞれ一～二名のゲストを紹介するこの授業では、オンラインでの実施も積極的に取り込むことで、国内外の第一線で活躍する講師によるレクチャーを実現する。	共同
コア科目	音響設計コース	輪講	論文輪講の発展形の授業形態である。受講者は各自、自分が興味を持つ研究について、既発表の研究論文の紹介を行う。発表の前半は、紹介する研究論文の背景となる事項や論文の理解のために必要な基礎理論などを説明し、後半で論文の内容を要約して発表する。全学生・教員が参加することで、音響設計の中でも専門の異なる人々に対して理解してもらえるような説明力を養うと共に、音響設計に関わる分野間での議論や交流を活性化させる。	
コア科目	人間生活デザイン	応用人間工学	高度テクノロジー社会および少子高齢化社会における人間工学の役割を展望し、人間工学を社会に活かすための実践方法を学ぶ。そのために人間の特性や個々の特性を理解しながら、製品や生活様式の提案につなげるまで、またそれらを科学的に検証するの一連のプロセスについて例を紹介しながら解説する。特に人口高齢化に起因する諸課題に対してテクノロジーにより解決を試みる場合の人間工学的アプローチを取り上げる。	
コア科目	人間生活デザイン	生活機能支援科学特論	1. アシストテクノロジー (Assistive technology) は様々な分野、例えば工学、デザイン学、または運動学、そして生理学、健康科学などから知識が取り入れられ成り立っている。 2. ヒトが人工環境に適応する際の生活・仕事とテクノロジーの利用について、健康の側面からその関連性を解説する。 3. 生理人類学や人間工学の視点から人間と機器が調和する生活環境の実現のために焦点し、それぞれの専門知識と研究方法について知識を高めることを目標とする。	
コア科目	人間生活デザイン	環境人間工学特論	人間を取り巻く環境は、科学技術の発展に伴い変化し、快適かつ安全となる一方で、様々な健康問題を引き起こしている。様々な健康問題を予防するだけでなく、人間にとって真に「健康」、「快適」、「適応的」な環境を構築するためには、ヒトの様々な特性を考慮することは必要不可欠である。本科目では、人間が生物として持つ特性を正しく理解し、その特性のうち特に生理的特性が生活習慣や生活環境にどのような影響を受けるのか？その影響は適応的なのか？について、講義・演習を通して主体的に学ぶ。習得した基礎・専門知識を基に、人にとって健康・快適・適応的な生活環境を研究し、実社会に応用できる能力を身につけることを目的とする。	講義8時間 演習7時間

コア科目	人間生活デザイン	生理人類学特論	人あるいはヒトにとって望ましい生活環境とは何かを理解するためには、生理人類学的観点からのアプローチが必要である。そこで、まずヒトの進化、適応に注目する。進化、適応は生物の宿命であり、適応の是非が生物に生き残りの命運を与えてきた。ある生物種がどんな環境圧にどのように適応し生き残ってきたか、これこそがその生物のアイデンティティであり、その生物の資質を決定する。また同じ視点から文化の形成過程にも目を向け、“生物学的なヒト”及び“文化に生きる人”のアイデンティティや資質を理解していく。このような人・ヒトの理解から、現在そして未来の生活環境のあり方を考える基礎力、そこからデザイン提案に至るまでの応用力を養うことを目的とする。	
コア科目	人間生活デザイン	脳・行動生理学特論A	脳は行動のための器官であり、ヒトの認知、運動、情動、睡眠など多岐にわたる機能をつかさどっている。脳は多数の神経細胞からなる神経回路で構成されており、個々の神経回路や神経核のふるまいがヒトの行動の基盤となっている。本講義では個々の神経細胞、神経回路の基礎的知識から、五感の機能、あらゆる行動に関連する脳と神経のメカニズムまでを学び専門知識を習得するとともに、得られた知識から研究方法の提案に応用できる力を身に付けることを目的とする。	共同
コア科目	人間生活デザイン	脳・行動生理学特論B	脳は行動のための器官であり、ヒトの認知、運動、情動、睡眠など多岐にわたる機能をつかさどっている。脳は多数の神経細胞からなる神経回路で構成されており、個々の神経回路や神経核のふるまいがヒトの行動の基盤となっている。本講義では記憶や情動などの精神機能やその異常である精神疾患の神経メカニズムを学び専門知識を習得するとともに、得られた知識から研究方法の提案に応用できる力を身に付けることを目的とする。	共同
コア科目	人間生活デザイン	感性科学特論	人間性の基盤となる感性を科学的に探究するための方法とその応用について学ぶ。人間生活の中で生じる感性に関わる様々な感覚、感情、行動を脳科学、生理学、心理学、内分泌学などの方法を用いて客観的に明らかにする手法を習得する。また、感性に関わる科学的研究の最新の学術論文や書籍を読み解きながら、これらの研究が社会課題の解決や、モノ作りとどのように関係するかを実例など通して習得し、感性科学をデザインに応用する能力も含めて身に付けることを目的とする。	
コア科目	人間生活デザイン	統計情報学	統計的仮説検定の基礎と実践を学ぶ。まず、統計的仮説検定の仕組みと意義を理解し、その有用性を理解する。その後、次の代表的ケースの具体的検定手法について学ぶ：母分散未知の母平均の検定、対応関係がある2標本の平均の差の検定（t検定、Sign test、Wilcoxon signed-ranks test）、対応関係がない2標本の平均の差の検定（F検定、t検定、Mann-Whitney U-test）、3つ以上の標本の平均の差に関する検定（ANOVA、Kruskal-Wallis test）と多重検定の補正（Bonferroni法）。さらに、ヒトの主観テストのための仮説検定も学ぶ。	
コア科目	人間生活デザイン	デザイン認知論	個や集団の創造性について、認知科学・社会心理学・知識科学の観点から概観し、様々なデザインの文脈へと展開する。また、創造性を促す場やプロセスに焦点をあてた近年のデザイン研究や事例を検討することを通じて、個や集団の創造性のメカニズムを理解する。創造性の多義性を踏まえ、当該授業で扱われる創造性の側面を的確に把握するため、また、応用に繋がる知識へと理解を深めるため、適宜演習をとり入れる。	
コア科目	人間生活デザイン	人間情報工学	本講義では、脳や神経系の挙動を記述する数理モデルについて学ぶ。神経系の数理モデルは、主としてトップダウン的なものとボトムアップ的なものに分類される。トップダウンモデルは人の知覚や行動の特性を模擬し、ボトムアップモデルは生理学的知見をもとにした神経細胞の挙動を表す。ここでは、この双方の概説とともに、それぞれの具体的な数理モデルをいくつか紹介する。これらの数理モデルの理解を通じて人の神経系の情報処理に関する幅広い視点を学ぶとともに、実現象に対する数理的な視点の導入方法、数理的知識の応用力等を習得することを目的とする。	
コア科目	人間生活デザイン	機能工学デザイン	科学技術の発展により生み出されたさまざまな革新的デザインは、人々の生活を豊かにしてきた。これらの革新的デザインを実現するためには、高度な科学技術をモノやサービスに適用するための技術開発能力を身につける必要がある。本科目では、最先端の科学技術の理解に欠かせない工学的専門知識を修得させるとともに、演習を通して、機能・性能・安全を追求したモノやサービスをデザインするために必要な工学的センスを育成する。	講義8時間 演習7時間
コア科目	人間生活デザイン	生体模倣工学	完全な炭素循環型社会を実現している生物の生き残り戦略に学ぶことは、持続可能な社会を実現する強力なアプローチである。最新成果を基に生体模倣工学が如何にしてイノベーションを起こしてきたのかを解説する。更に、生物の構造と機能を観察する、数理的、理論的にモデル化する、人工物で模倣する、という生体模倣工学の3つのプロセスにおいて必要となる知識と各種ツールの活用法を学ぶとともに、プロダクトや建築物の設計演習を通じて、生体模倣工学を実践する方法論について解説する。	

コア科目	人間生活コアデザイン	パブリックデザイン	人々の生活を心身ともに豊かにするための手段としてデザインを位置づけ、その重要性や考え方をパブリックデザイン領域をフィールドに解説する。社会情勢や都市のあり方等の環境変化に伴うこれまでのパブリックデザインの変化や具体事例によるデザイン検討の際の価値の位置付け、多様な立場から見た際の価値の変容などについて説明し、デザインを行うために実施する調査方法についての紹介も行うことで実際のデザインの際に活かせる講義内容とする。簡単な演習を行うことで、パブリックデザインやデザイン価値の創出、調査方法などの理解についての習熟をはかる。	講義13時間 演習2時間
コア科目	人間生活コアデザイン	コンテキストデザイン	コンテキストとは、デザインする対象を取り巻く周囲の文脈や状況や背景であり、それはデザインした事物によって変容するものでもある。本講義では、多くの人が同じように解釈できる意味と人により異なる解釈や異なるものがたりが生まれる余地を意図的に創り出すためのものづくりの方法やユーザーがコンテキストを創造する現象について、プラグマティズムの創始者である哲学者チャールズ・サンダース・パースの記号論の観点から解説する。議論や演習を行うことで、コンテキストをデザインするためのものづくりの方法やあるべき記号過程の連鎖をデザインする方法について理解し、社会実装に応用可能な力を身に着けることを目的とする。	
コア科目	人間生活コアデザイン	レジリエンスデザイン	人間が物理的・心理的負荷を受けた場合にそれを跳ね返そうとする動きが働く。それがレジリエンスであり、それを適切に働かせようとするのがレジリエンスデザインである。これらに関わる人間の行動の観察方法や分析方法を、行動的・物理的・心理的、更には生理的な側面から考える。それらを融合させる具体的な事例を検討し、実験方法のデザインなどを行う。またそれを実施し、仮説を形成し、さらなる本人権の設計を行い、エビデンスを現場でどう作っていくかの評価と設計の関係を学ぶ。	

コア科目	人間生活コアデザイン	コミュニケーションデザイン論	わたしたちを取り巻く、さまざまなメディア表現・文化事象（広告表現、ミュージアム、映像・映画、アート作品、サブカルチャー、その他コンテンツ等）を通じて、社会を支えるコミュニケーションの成り立ちを俯瞰する。広告表現の事例を多くとりあげるが、あくまでひとつの素材に過ぎない。社会を支えるコミュニケーションの有り様を問い直し、コミュニケーションのデザインを考え、人びとの意味活動を考察する。クリエイティブな着想の元、表現が「伝わる」ことの意味を考え、従来の枠にとらわれることなく、モノ・コト・ヒトを再構成・再定義し、広義のデザイン視座を得ることを目指す。	
コア科目	人間生活コアデザイン	ライフスケープデザイン	ライフスケープデザイン領域の将来的な社会での位置づけや役割について、生活の中のあらゆる事象を対象とした各自の気づきや問題提起に基づいた演習を行う。各自の提示するテーマを共有し、ディスカッションを行い、具体的な方向性や結論を導出することで、私たちの生活に近い領域において主体性をもって課題発見をする能力やそれらを他者を巻き込みながら検討・プロジェクト化する能力などを育成する。	
コア科目	人間生活コアデザイン	人間生活デザイン特論	<p>(概要) 生活の在り方を構想し、人間の特性や最新の科学技術を、安心安全で魅力的なライフスケープの創造に向けて応用ないし統合するために必要な導入講義を行う。</p> <p>(オムニバス方式／全8回)</p> <p>(21 村木 里志／1回) 超高齢社会における人間工学の役割</p> <p>(78 LOH PING YEAP／1回) オフィスエルゴノミクス</p> <p>(20 前田 享史／1回) 人間と環境</p> <p>(52 松前 あかね／1回) 個の創造性と社会的創造性</p> <p>(60 西村 貴孝／0.5回) 現生人類の環境適応とその多様性 過去、現在、未来のヒトの健康問題</p> <p>(84 曾我部 春香／0.5回) 社会におけるライフスケープデザインの役割や価値について、パブリックデザインフィールドを中心に解説</p> <p>(87 元村 祐貴／0.5回) 感性と情動の神経科学</p> <p>(68 澤井 賢一／0.5回) 楽器演奏における数理最適化</p> <p>(49 藤 智亮／0.5回) 機能とデザイン</p> <p>(61 秋田 直繁／0.5回) ライフスケープデザインとインテリア・プロダクトデザイン</p> <p>(35 齋藤 俊文／0.5回) ライフスケープデザイン、コミュニケーションのデザイン、クリエイティブディレクション</p> <p>(81 樋口 重和／0.5回) 人の行動と脳科学</p>	オムニバス方式
コア科目	メディアコアデザイン	視覚心理学特論	視覚心理学について、発展的内容を学ぶ。人間の視覚情報処理システムについて、眼や脳の仕組みと、錯視などの視覚現象の対応関係を中心に、実験心理学的観点から解説する。また、受講者は、視覚心理学のメディアデザインへの応用について考えるための資料をもとに、レポートを作成する。本講義を通じて、人間の視覚の能力、特性に関する知識を身に着けるだけでなく、それらに配慮した視覚デザインを自ら考え実践する態度をやしなうことを目指す。	

コア科目	コード スイ コア デザ イン	色彩科学特論	英語で執筆された色彩科学に関するテキストを輪読形式で読んでいき、色彩科学の基礎である色覚、さらに、その応用である色彩工学や色彩デザインに至る知識を修得する。受講者は、担当として割り振られた箇所を前以て予習しておくことが必要となる。年度によってテキストを変えているが、とりわけ、色覚、または色彩情報処理、色彩と芸術や工学との関係に関するものを選んでいく。また、テキストを理解するにあたり、基礎的な数学が必要とされ、学部の「色彩学」、「色彩学演習」を履修していることも望まれる。	
コア科目	コード スイ コア デザ イン	心理学的思考法特別演習	実験心理学の論文を読み解くことで、心理学実験の計画方法を学ぶ。多視点的なモノの見方を心理学を通して身につける。少人数による個別指導と座学を並列して行う。最終的には、オリジナルの心理実験の計画をプレゼンしてもらう。心理学に関連する重要な実験事例、重要な著作物を多数読みながら、心理学の基礎的な理解を高める。毎週、かなりの課題をこなしてもらう。自前の実験計画を全体に発表するなど、授業時間中の課題も多く存在する。毎週のレポートを課す予定である。全体として、大変に厳しくハードな指導となるが、ついてこれれば他大学や他学部の心理を専門にした学科やコースの教育以上のものが得られるはずである。	
コア科目	コード スイ コア デザ イン	コンピュータサイエンス特論	コンピュータ・サイエンスにおけるコンピュータ・グラフィックスおよび周辺分野（ヒューマン・コンピュータ・インタラクション、コンピューター・ビジョン、ユーザー・インターフェース、VR/MR/AR、メディア・アート、その他）において、これらの研究、活用や応用事例、論文の調査方法、学会等のイベント、実装の手段、等を紹介する。年によっては外部から関連する講師を招く。また課題として受講者は、該当分野の論文や応用事例を調査し、発表する。	
コア科目	コード スイ コア デザ イン	視覚メディア設計特論	本講義・演習では、まずコンピュータビジョンの考え方や技法を効果的に活用するため、より上位に位置するコンピュータビジョンの基本戦略について解説する。次に、コンピュータビジョン、コンピュータグラフィックス、画像処理、パターン認識など画像工学に関連する諸分野の英語文献をいくつか輪読・解説し、画像関連分野について理解を深めるとともに、学術文献を正確に読解し、先行研究を批判的に吟味しながら論理的かつ客観的に議論を展開する能力を養う。	
コア科目	コード スイ コア デザ イン	画像情報処理システム設計特論	画像情報を扱うためには様々な画像処理に関する知見が必要である。本授業では、画像情報工学に関する研究をする上で基盤となる種々の画像処理に関して理論的な理解を深める。それらをもとに画像情報工学分野の最近の動向を内外の文献から学ぶ。これらを通して、それぞれの研究分野に関する知識を深めると共に各分野の関連性について考察する。更に、複数の画像処理を実際にプログラミングすることで、様々な情報工学技術の関係とそれら技術のシステム化について理解を進める。	
コア科目	コード スイ コア デザ イン	視覚環境知能設計特論	本演習では、画像処理、パターン認識、ノンフォトリアリスティック（非写実的）レンダリングに関する最近の研究成果を紹介する。また、視覚環境知能設計への活用が期待される最新の関連技術の中から、特に興味深いテーマを選び、それらについても解説・考察するとともに、新規アルゴリズム開発の道を模索する。テーマによっては、プログラミング言語PythonやMATLABなどを用いてアルゴリズムを実装し、より深い理解を目指す。	
コア科目	コード スイ コア デザ イン	コンピュータグラフィックス特論	「空間、物体、光、動き、人、その他をすべてコンピュータの中に再現する技術」として、CGを考え、そのための背景となる基礎理論から映像完成までの流れを、物理学や数学をベースにコンピュータの内部処理の視点から解説していく。全体の構成として、三次元CG技法の概観、最近の研究、映像作品、モデリング、レンダリング、アニメーション、手続き型手法、物理ベースシミュレーション、ノンフォトリアリスティックレンダリング、フォトリアリスティックレンダリング、インタラクティブシステム、など、各種の技術の考え方、最新の研究の紹介を予定している。	
コア科目	コード スイ コア デザ イン	メカニクスデザイン特論	幾何形状や機構が創生する運動、力学的に制御される挙動の基本や方程式での表現、シミュレーションなどを解説するとともに、それらを活用してSTEAMアクティビティを体験する演習を行う。前半では、曲線や曲面の数学的表現をもとにした形と運動の関係、機構の運動、力学的つりあいや姿勢の安定性、力と変形および連続体の運動・相似則や可視化手法などについて講義と演習とでメカニクスデザインの基盤を形成し、参考となる作品の紹介・解説によりその実際の利用について理解を深める。後半では、テーマを選定して、これらの知識を基にクリエイティブデザインを展開するグループワークを行う。	
コア科目	コード スイ コア デザ イン	メディアサービス特論	デジタル技術を応用した先進的なメディア・サービスに関して、それらの背景となる代表的なインターネット技術とAI技術に関して、基本的なアイデアと実現方式について理解し、それらを利用した新しいサービスを開発する演習を行う。前半では、インターネット上のメディアサービスの基盤となるWorld Wide Web (Web) の仕組みを学習し、Webから自動的に情報を取得するクロウリングとスクレイピングについて学ぶ。次に、膨大な情報からユーザーが希望する情報を検索する手法と、ユーザーの志向にあった情報を提供する推薦技術を学習する。次に、AIを利用したメディア・サービスを実現するために必要な機械学習の基礎、深層学習の基礎、畳み込みニューラルネットワーク、再帰的ニューラルネットワーク、トランスフォーマー、敵対的生成ネットワークについて、サンプルプログラムを用いて学習を行う。後半では、学習した内容を利用して、グループごとにサービスをデザインしプロトタイプを開発する演習を行う。	

コア科目	コード スイ コア デザ 目 イン	バーチャルリアリティ特論	バーチャルリアリティとは、人工的に作られた仮想空間が、我々の住んでいる実空間とシームレスに繋がっているようにコンピュータを駆使して仕組ませる技術である。このためには、人間の視覚や聴覚、触覚などの感覚系の仕組みを生理的、心理的に把握し、これらのマルチモーダルな感覚を仮想空間内で提示する方法を検討し、さらに空間内で人間の感覚器官に情報が提示されることから起こる生理・生体・心理的な反応について計測する必要がある。このような人工的な空間が生成されると、その空間内で様々な人間の活動についての研究や人間の欲求への支援が可能になる。バーチャルリアリティが誕生するに至った歴史から、今日までの研究の歩みを説明し、今後どのような展開になるのかを学習する。	
コア科目	コード スイ コア デザ 目 イン	メディアアート表現	本講義・演習では、メディアアートおよびメディア表現技術の歴史を概観し、社会的課題解決を視野にいれ、メディアアート表現の枠組みを問い直し、具現化する力を養う。サウンドデザイン、ウェアラブルコンピュータ、フィジカルコンピューティング、インタラクションデザイン等の動向を理解し、AR（拡張現実）やデバイス表現を応用した社会サービスデザインを実現するためのメディアアート表現スキルを習得する。また、新たな表現内容、技術の考察、開発を志向し、作品制作を行う。	講義5時間 演習10時間
コア科目	コード スイ コア デザ 目 イン	視覚記号特論	本講義・演習では、サインとピクトグラムを対象とし、視覚記号に関するデザインのあり方について考察を深め、その上でデザインとして実装する方法論や思考過程を理解することを目的とする。講義では、哲学・心理学・脳科学・歴史の各分野を横断的に外観し、多角的な視点からデザインを捉え、考えを深め、コンセプトを構築する過程を習得する。演習では、人を対象としたデザインの評価及び調査方法を学び、調査結果とコンセプトを踏まえたサインとピクトグラムデザイン制作を行う。	講義7時間 演習8時間
コア科目	コード スイ コア デザ 目 イン	グラフィックデザイン特論	グラフィックデザインは、印刷メディアからWebなどの電子メディアまで、ほとんどのメディアに不可欠なデザインである。グラフィックデザインは、文字、画像、図、などの視覚的記号を対象としたデザインである。この授業では、メディアデザインにおけるこうしたグラフィックデザインの機能について深く理解し、適切なデザインを遂行する能力の習得を目的として、コミュニケーションデザイン、グラフィック表現、記号作用の3つの観点から多角的に捉えたデザイン記号論を援用しつつ、グラフィックデザインを論じる。	
コア科目	コード スイ コア デザ 目 イン	映像コンテンツデザイン特論	映像作品において、コンテンツとテクニックをきちんと融合させなければ、それぞれの分野をバラバラに見せる作品となり、その結果としてテクニックばかりを誇示するような作品が出来上がってしまうことが多い。本講義では、映画史における初期の表現テクニック、言わば映像的ストーリーテリング（受け手を物語に引き込む語り口）を例として、映画史上でも指折りの印象的な名シーンの数々を取り上げ、鑑賞しながら解説する。映像の基本原則（映像の連続性、空間の同一性、テンポとリズム、視覚と聴覚）やフレーム内方向性の意味（対立、視点移動、時間枠の分離）などの関連知識を深めながら業界屈指の監督たちが、どのようにして形式と機能を融合させ、映画史上最も印象的な場面の数々を作り上げてきたのか、それを分かりやすく解説する。	
コア科目	コード スイ コア デザ 目 イン	シリアスゲームデザイン1	シリアスゲームとは社会問題の解決を目的に据えたゲームである。本講義では、教育や健康、訓練といった社会的な課題と、デジタルゲームが有する明快なインタフェース、積極性、持続性を向上させる要素を組み合わせたデザインについて理解し、対象とするテーマの先行事例調査や行った上で企画案を作成する。企画案をもとに、紙ベースからデジタルモックアップ、実際のデジタル機器で利用可能なプロトタイプを作成をおこなう。作成後、想定される現場にて実地検証をおこない、改良、検証を繰り返しながら社会実装可能な質まで高めていく。また、社会に対してどのような伝えていくかについての考察も併せて実施する。	
コア科目	コード スイ コア デザ 目 イン	映像表現史特論	1億総カメラマン時代と言われる現代において、映像における表現手法に関する知識の習得は重要である。本講義では、写真（静止画）の誕生をはじめ、世界各国における映像表現の歴史を紐解きながら、100年以上の映像の歴史の中で確立されてきた表現手法について解説する。また現代のメディアテクノロジーの進展とともに展開されてきたコンピュータグラフィックスなどのデジタル映像を中心とした芸術表現やコンテンツデザインへの応用について解説する。また「拡張映像表現」と呼ばれるスクリーンやモニタの「枠」を超えた、現代における映像技術の進展による表現技法や、提示技法についても、作例を紹介しながら解説する。	
コア科目	コード スイ コア デザ 目 イン	造形芸術特論	本講義・演習は、現代に求められている造形性や創造性とは何かを問う。現代社会の影響に対して身体的・感情的・実践的に反応し、社会と個人の関係を考える様々な造形芸術のあり方について学ぶ。造形芸術の歴史、創造と脳の関係、身体性やマイノリティーへの視座などを、造形を主軸に概観する。さらに身体性への知識を造形的に発展させるためのワークショップを行う。受講者が創造する立場から芸術作品を理解し、社会や人間への意識を深め、新しい価値観を創造する力を養うよう促す。	講義8時間 演習7時間

コア科目	コメ スイ コ ア デ ザ イ ン	演劇学特論	シェイクスピア受容史研究を主軸として能・狂言・歌舞伎・新劇・大衆演劇・小劇場演劇等の現代日本の多様な演劇形態(俳優・劇作家・演出家・劇団・劇場・演出等)の発達と展開を取り上げ、時代・社会の中で変化する演劇の課題・問題・存在意義について、鈴木忠志・浅利慶太・蜷川幸雄・野田秀樹・栗山民也等の演出家の演劇論・演出方法を事例分析により検討することによって、演劇学研究手法とともに創造的感性や表現・演出方法を習得する。特に近年注目されている地域性を活かして世界に発信していくグローバルな演出手法について焦点をあてるとともに、実際に劇場に足を運び、観劇を体験することによって現代社会における演劇の力や可能性や必要性について立体的・総合的に理解することを目指す。	
コア科目	コメ スイ コ ア デ ザ イ ン	マルチモーダル・コミュニケーション特論	本講義・演習では、人間のコミュニケーションをマルチモーダルコーパスおよびマルチモーダル分析の観点から研究するための先行研究を概観し、分析に必要なソフトウェアの使用方法を実践的に扱う。 (オムニバス方式/全8回) (74 冬野美晴/6回) マルチモーダル分析の入門書(洋書)を輪読し、関連する論文を講読する。ELAN等のマルチモーダル分析に必要なソフトウェアの実習を行う。 (77 吉村理一/2回) モダリティ(Modality)に関する言語学の論文(和洋書)を輪読し、理論言語学の立場からマルチモーダル分析についての理解を深める。	オムニバス方式 講義8時間 演習7時間
コア科目	コ未 ア来 科共 目生 コ ー ス	統計情報学	統計的仮説検定の基礎と実践を学ぶ。まず、統計的仮説検定の仕組みと意義を理解し、その有用性を理解する。その後、次の代表的ケースの具体的検定手法について学ぶ: 母分散未知の母平均の検定、対応関係がある2標本の平均の差の検定(t検定、Sign test、Wilcoxon signed-ranks test)、対応関係がない2標本の平均の差の検定(F検定、t検定、Mann-Whitney U-test)、3つ以上の標本の平均の差に関する検定(ANOVA、Kruskal-Wallis test)と多重検定の補正(Bonferroni法)。さらに、ヒトの主観テストのための仮説検定も学ぶ。	
コア科目	コ未 ア来 科共 目生 コ ー ス	時間生物学	生命現象の中には24時間周期で繰り返しおこる現象が知られており、概日リズムとよばれる。例えば寝起きのリズムやセミが夏の時期に毎朝羽化することがあげられる。概日リズムを扱う学問分野は時間生物学(Chronobiology)と呼ばれている。概日リズムという捉えがたい現象に対して現代の生物学と数理科学がどのように迫ってきたかを眺めることを通して、複雑な現象をどのようにとらえ解析するのか、その技法を学ぶ。	
コア科目	コ未 ア来 科共 目生 コ ー ス	数理モデリングA	社会現象を記述する数理モデルを構築する際の基本理念を学び、数理モデルの具体的構築方法、解析方法、および解析結果の解釈作法を習得する。さらに社会現象を記述した古典的な数理モデルについて知る。具体的には囚人のジレンマと社会的ジレンマ(公共財ゲーム、軍拡競争)、繰り返し囚人のジレンマと人間関係ネットワークモデル、罰則や評判のモデル、持続可能な開発、感染症のモデルなどを取り上げる。大学初年次レベルの数学を前提とし、より高度な数学的手法について授業中に解説する。	隔年
コア科目	コ未 ア来 科共 目生 コ ー ス	分子生物学	核酸やタンパク質等の生体分子の性質を講義で学び、DNA抽出、DNAのPCR増幅、塩基配列決定、ゲノム編集、遺伝子組換え、タンパク質発現等の分子生物学の手法を複数の演習を通じて実践的に習得する。目的の遺伝情報を取り出し、遺伝子多型や後成的変化を解析することで多様性を生み出す生物学的基盤を学ぶ。遺伝子工学や合成生物学的手法から、バイオテクノロジーの原理を理解する。講義と演習を交互におこなうことの相乗効果により、知識と技術の確実な定着を狙う。	講義4時間 演習20時間
コア科目	コ未 ア来 科共 目生 コ ー ス	Design in General Education	Design in Education explore the possibilities of design education as a form of general education. Design in general education has been extensively explained by Nigel Cross in the book Designerly Ways of Knowing. In this subject, students will explore prototype design learning programs for children as a form of general education. Design in Educationは、一般教育の一形態としてのデザイン教育の可能性を探る。一般教育におけるデザインについては、ナイジェル・クロスが著書『Designerly Ways of Knowing』の中で広く解説している。この科目では、一般教育の一形態としての子どもたちのためのプロトタイプデザイン学習プログラムを探る。	隔年
コア科目	コ未 ア来 科共 目生 コ ー ス	生体模倣工学	完全な炭素循環型社会を実現している生物の生き残り戦略に学ぶことは、持続可能な社会を実現する強力なアプローチである。最新成果を基に生体模倣工学が如何にしてイノベーションを起こしてきたのかを解説する。更に、生物の構造と機能を観察する、数理的、理論的にモデル化する、人工物で模倣する、という生体模倣工学の3つのプロセスにおいて必要となる知識と各種ツールの活用法を学ぶとともに、プロダクトや建築物の設計演習を通じて、生体模倣工学を実践する方法論について解説する。	

コア科目	未来 科共 生 コ ー ス	バイオマテリアルエンジニアリング	生体システムは核酸やペプチド、タンパク質からなる高性能な生体分子機械から構成されている。これらの生体分子機械は自然がデザインした機械であり、自発的な形成プロセスを経て作り出される(自己組織化)。近年では、生体分子機械の優れた機能や形成プロセスは工学や医療、デザイン分野でも注目されており、その応用に向けた取り組みがなされている。本講義では、生体分子機械を構築するDNAやRNA、ペプチド、タンパク質の特徴を十分に理解し、これらをベースとした近年のナノテクノロジーおよび自然界のデザインプロセスの基礎を学ぶ。講義の最後には、習得した知識を基に、生体分子機械の将来的な応用についてグループ発表を行う。	講義11時間 演習5時間
コア科目	未来 科共 生 コ ー ス	現代アート実践	近現代のアートを主軸としながら、分野横断的な知見を取り入れ、既存の枠にとらわれない表現のあり方を模索する。近年、目覚ましい発展や変化を遂げている美術やデザインの領域において重要と思われる表現について知識や理解を深め、自身の課題や興味を見つけ出し、それらを独自の方法で表現することを体得する。また、この授業では、作品制作だけでなく、作品をどのような場所でどのように展示するのか、展覧会自体の企画や運営(キュレーション)にも意欲的に取り組むことが求められる。独自の視点から展覧会のあり方を再考し、自身の表現を社会へ向けて発信することを実践的に試みる。	
コア科目	未来 科共 生 コ ー ス	情報編集デザイン	「編集」を「世の中に散在する物事を観察、収集し、独自の視点をもって分類・整理・再構築することにより新たな文脈を見出し価値を作り出す一連の作業」と定義することで、あらゆるものが編集活動の対象となる。この授業では、書籍やウェブサイトなどの従来の編集だけでなく、編集の考え方に基づくサービスデザイン、組織やコミュニティなどのデザイン、キュレーションなどに対象範囲を広げ、成果の表現までを学ぶ。このように広義の編集の方法論を学ぶとともに、応用可能性を追求し、演習を通してそれを実践するためのデザインスキルも身に付け、さらに帰納的に編集理論を理解することで、理論と実践力の両方を活用できるようになることを目標とする。	
コア科目	未来 科共 生 コ ー ス	レジリエンスデザイン	人間が物理的・心理的負荷を受けた場合にそれを跳ね返そうとする動きが働く。それがレジリエンスであり、それを適切に働かせようとするのがレジリエンスデザインである。これらに関わる人間の行動の観察方法や分析方法を、行動的・物理的・心理的、更には生理的な側面から考える。それらを融合させる具体的な事例を検討し、実験方法のデザインなどを行う。またそれを実施し、仮説を形成し、さらなる本人権の設計を行い、エビデンスを現場でどう作っていくかの評価と設計の関係を学ぶ。	
コア科目	未来 科共 生 コ ー ス	サステナブルデザイン	貧困、飢餓、環境保全など、人類が直面している社会的な課題に対しデザインはどのような貢献ができるのだろうか。この授業では、SDGsの目標達成のために取り組まれている経済、社会、環境のバランスのとれた持続可能な開発の国内外の事例を学び、デザインで社会課題を解決するためのワークショップを実施する。課題を解決するためのアイデアの生み出し方、デザイン制作のプロセスを体験することで、学生自らが社会課題を解決するための具体的なスキルを学ぶ。(集中講義方式)	
コア科目	未来 科共 生 コ ー ス	アート&リサーチ	芸術の研究というと、従来は作品の研究、あるいは作品の歴史的背景の研究が主流だったが、近年では、芸術の実践に目を向けた研究が広く行われるようになってきた。本科目では、アートやデザインの実践を研究・評価する際に役立つ方法を学ぶ。アートベースリサーチやアクションリサーチなどの新しい方法、量的研究と質的研究のハイブリッド型(混合研究法)を知ると同時に、アンケートやインタビューといった基本的な技法についても深く理解し、研究目的にあった効果的な方法を実践できるようにする。	
コア科目	未来 科共 生 コ ー ス	アーツマネジメント	アーツマネジメントとは、さまざまなジャンルの芸術実践と社会とのつなぎ手に関わる分野である。地域や社会の諸課題に対して芸術が果たす役割に対して注目が集まっている実情がある。このことを背景にし、この授業では、劇場・音楽堂、美術館、博物館などの芸術の場のみならず、障害者や高齢者などの抱える多様な社会的課題にアートがどのように関わっているのかを概観し、理想的なアーツマネジメントのあり方を検討する。座学のほか、実際のアーツマネジメントの現場に足を運ぶなどの実践的な教員も実施する予定である。	
コア科目	未来 科共 生 コ ー ス	共生社会デザイン論	人と人、環境と人が持続的に共生していく上での現代社会の課題について検討を加え、それらを解決していく人間行動とそれをはぐくむ社会デザインを明らかにし、それを導くための政策的な課題を述べる。具体的な課題として、有機性資源の循環と自然エネルギーを取り上げる。それらが地域産業として成立できる地域の仕組み作りと企業と市民と自治体の行動と相互の連携について論じるとともに、その環境的社会的経済的影響を明らかにしそれらを大きくしていくための課題を検討する。	
コア科目	未来 科共 生 コ ー ス	環境リスクマネジメント	Students will learn about the importance of environment risk management to provide them with a base to formulate and implement projects with proper risk assessments and action plans to protect individuals, enterprises and society from costly legal actions and damages associated with natural disasters. この授業では、費用のかかる訴訟問題や自然災害に関連する損害から、個人、企業、社会を守るための適切なリスク評価と行動計画を備えたプロジェクトを策定および実施するための基礎を考える環境リスクマネジメントの重要性について学ぶこととする。	

コア科目	未来共生コース	デザイン哲学	真理と倫理と美を実現するデザインが学として成立する基礎について、哲学史における古典的な議論から最新の議論まで取り上げ、未来のデザインのあり方を展望する。新実証主義、サイバネティクス、ポスト構造主義、批判理論、リサーチ・スルー・デザインなどの理論について深く学び、現在自分が取り組んでいるデザイン課題が、学問の歴史やデザイン全体のうちでいかなる位置を占め、いかなる限界と可能性を持つのかを理解できるようにする。	
コア科目	未来共生コース	イメージ感性論	写真や映画から音響装置まで、視聴覚文化を横断するイメージについて理解を深めるため、古典ないし最新の理論についての読解や解説から出発し、それらをもとにメディアアートやデザインの作品分析を進める。ここで感性論と呼ぶ分野は、人文学的な立場から人間の身体や感覚に及ぼす作用を考察する立場を指す。それらに関連するテキストを批判的に読解し、具体的なデザインやアートの作品分析へと応用できるようになることが目的である。テキストは日本語ないし英語の文献を想定しているが、受講者の関心に合わせて調整する予定である。	
プロジェクト科目	プロジェクト科目	スタジオプロジェクトI-A	「スタジオプロジェクト科目」は、PBL形式の演習科目であり、演習課題は専門分野を横断したコース横断型としての特色を持つ。その演習を通して、学生は実践的コンテキストにおいて必要とされる複数の専門リテラシーを獲得しつつ、そのなかで自らの専門性をいっそう高める機会を持つ。実践的な課題に専門の異なる学生がグループで関わることによって、専門的な実践能力、問題探求能力、問題解決能力とともに、より高度なコミュニケーション能力の修得をねらいとする。そのため、スタジオプロジェクト科目は、複数のプロジェクトが集合した科目の形態をとっている。スタジオプロジェクトI-Aでは、設計・制作、および社会・文化デザインの方法を中心として、実践的な協働プロジェクトに取り組む。	
プロジェクト科目	プロジェクト科目	スタジオプロジェクトI-B	「スタジオプロジェクト科目」は、PBL形式の演習科目であり、演習課題は専門分野を横断したコース横断型としての特色を持つ。その演習を通して、学生は実践的コンテキストにおいて必要とされる複数の専門リテラシーを獲得しつつ、そのなかで自らの専門性をいっそう高める機会を持つ。実践的な課題に専門の異なる学生がグループで関わることによって、専門的な実践能力、問題探求能力、問題解決能力とともに、より高度なコミュニケーション能力の修得をねらいとする。そのため、スタジオプロジェクト科目は、複数のプロジェクトが集合した科目の形態をとっている。スタジオプロジェクトI-Bでは、デザインの設計・制作、社会や文化デザインの方法に、デザイン科学、デザイン工学の方法を組み合わせた実践プロジェクトを実施する。また説得のためのプレゼンテーション（視覚化）の技術を取得する。	
プロジェクト科目	プロジェクト科目	スタジオプロジェクトII-A	「スタジオプロジェクト科目」は、PBL形式の演習科目であり、演習課題は専門分野を横断したコース横断型としての特色を持つ。その演習を通して、学生は実践的コンテキストにおいて必要とされる複数の専門リテラシーを獲得しつつ、そのなかで自らの専門性をいっそう高める機会を持つ。実践的な課題に専門の異なる学生がグループで関わることによって、専門的な実践能力、問題探求能力、問題解決能力とともに、より高度なコミュニケーション能力の修得をねらいとする。そのため、スタジオプロジェクト科目は、複数のプロジェクトが集合した科目の形態をとっている。スタジオプロジェクトII-Aでは、設計・制作、および社会・文化デザインの方法を中心として、特に、企業や自治体などとの社会的協働研究プロジェクトに取り組む。	
プロジェクト科目	プロジェクト科目	スタジオプロジェクトII-B	「スタジオプロジェクト科目」は、PBL形式の演習科目であり、演習課題は専門分野を横断したコース横断型としての特色を持つ。その演習を通して、学生は実践的コンテキストにおいて必要とされる複数の専門リテラシーを獲得しつつ、そのなかで自らの専門性をいっそう高める機会を持つ。実践的な課題に専門の異なる学生がグループで関わることによって、専門的な実践能力、問題探求能力、問題解決能力とともに、より高度なコミュニケーション能力の修得をねらいとする。そのため、スタジオプロジェクト科目は、複数のプロジェクトが集合した科目の形態をとっている。スタジオプロジェクトII-Bでは、設計・制作、および社会・文化デザインの方法に、デザイン科学やデザイン工学の方法を組み合わせ、特に、企業や自治体などとの社会的協働研究プロジェクトに取り組む。また、セミスターの最後に外部に向けての公開展示を計画する。外部に向けての公開展示を計画する。	

プロ タ ジ エ ク ト 科 目	スタジオプロジェクトIII-A	「スタジオプロジェクト科目」は、PBL形式の演習科目であり、演習課題は専門分野を横断したコース横断型としての特色を持つ。その演習を通して、学生は実践的コンテキストにおいて必要とされる複数の専門リテラシーを獲得しつつ、そのなかで自らの専門性をいっそう高める機会を持つ。実践的な課題に専門の異なる学生がグループで関わることによって、専門的な実践能力、問題探求能力、問題解決能力とともに、より高度なコミュニケーション能力の修得をねらいとする。そのため、スタジオプロジェクト科目は、複数のプロジェクトが集合した科目の形態をとっている。 スタジオプロジェクトIII-Aでは、デザイン科学、デザイン工学の方法を中心として、実践的な協働プロジェクトに取り組む。	
プロ タ ジ エ ク ト 科 目	スタジオプロジェクトIII-B	「スタジオプロジェクト科目」は、PBL形式の演習科目であり、演習課題は専門分野を横断したコース横断型としての特色を持つ。その演習を通して、学生は実践的コンテキストにおいて必要とされる複数の専門リテラシーを獲得しつつ、そのなかで自らの専門性をいっそう高める機会を持つ。実践的な課題に専門の異なる学生がグループで関わることによって、専門的な実践能力、問題探求能力、問題解決能力とともに、より高度なコミュニケーション能力の修得をねらいとする。そのため、スタジオプロジェクト科目は、複数のプロジェクトが集合した科目の形態をとっている。 スタジオプロジェクトIII-Bでは、デザイン科学やデザイン工学の方法に、設計・制作、社会・文化デザインの方法を組み合わせ、実践的協働プロジェクトに取り組む。また、公開のための高度なプレゼンテーション（視覚化）の技術を取得する。	
プロ タ ジ エ ク ト 科 目	スタジオプロジェクトIV-A	「スタジオプロジェクト科目」は、PBL形式の演習科目であり、演習課題は専門分野を横断したコース横断型としての特色を持つ。その演習を通して、学生は実践的コンテキストにおいて必要とされる複数の専門リテラシーを獲得しつつ、そのなかで自らの専門性をいっそう高める機会を持つ。実践的な課題に専門の異なる学生がグループで関わることによって、専門的な実践能力、問題探求能力、問題解決能力とともに、より高度なコミュニケーション能力の修得をねらいとする。そのため、スタジオプロジェクト科目は、複数のプロジェクトが集合した科目の形態をとっている。 スタジオプロジェクトIV-Aでは、デザイン科学やデザイン工学の方法を中心として、特に、企業や自治体などとの社会的協働研究プロジェクトに取り組む。	
プロ タ ジ エ ク ト 科 目	スタジオプロジェクトIV-B	「スタジオプロジェクト科目」は、PBL形式の演習科目であり、演習課題は専門分野を横断したコース横断型としての特色を持つ。その演習を通して、学生は実践的コンテキストにおいて必要とされる複数の専門リテラシーを獲得しつつ、そのなかで自らの専門性をいっそう高める機会を持つ。実践的な課題に専門の異なる学生がグループで関わることによって、専門的な実践能力、問題探求能力、問題解決能力とともに、より高度なコミュニケーション能力の修得をねらいとする。そのため、スタジオプロジェクト科目は、複数のプロジェクトが集合した科目の形態をとっている。 スタジオプロジェクトIV-Bでは、デザイン科学やデザイン工学の方法に、設計・制作、社会・文化デザインの方法を組み合わせ、総合的かつ実践的協働プロジェクトに取り組む。また、セミスターの最後に外部に向けての公開展示を計画する。	
展 開 科 目	機能工学デザイン	科学技術の発展により生み出されたさまざまな革新的デザインは、人々の生活を豊かにしてきた。これらの革新的デザインを実現するためには、高度な科学技術をモノやサービスに適用するための技術開発能力を身につける必要がある。本科目では、最先端の科学技術の理解に欠かせない工学的専門知識を修得させるとともに、演習を通して、機能・性能・安全を追求したモノやサービスをデザインするために必要な工学的センスを育成する。	講義8時間 演習7時間
展 開 科 目	シリアスゲームデザイン1	シリアスゲームとは社会問題の解決を目的に据えたゲームである。本講義では、教育や健康、訓練といった社会的な課題と、デジタルゲームが有する明快なインタフェース、積極性、持続性を向上させる要素を組み合わせデザインについて理解し、対象とするテーマの先行事例調査や行った上で企画案を作成する。テーマについては各自による選定を基本とするが、あらかじめ用意する場合もある。また、調査は現地へ赴いてのフィールドワーク実施を原則とする。	
展 開 科 目	シリアスゲームデザイン2	シリアスゲームデザイン1の継続として実施する。1で作成した企画案をもとに、紙ベースからデジタルモックアップ等によるプロトタイピングをおこない、最終的に実際のデジタル機器で利用可能な作品制作をおこなう。作成後、テーマに沿った現場にて実地検証をおこない、改良を繰り返しながら課題解決としてのエビデンスとコンテンツとしての質を社会実装可能な段階まで高めていく。また、制作したものを社会に対してどのよう伝えていくかについての考察も併せておこなう。	

展開科目	コネクティッドデザイン	社会や経済、地球環境の激動、それに伴う人々の価値観の多様化など不確実な未来をどう扱うか課題となっているため、デザインにおいてもこれまで以上に分野や領域を超えた発想や活動が求められる。そして、創出した製品・サービスが利益相反（使用価値・経済価値・社会価値）を招くこともあり、コンセプト立案・プロトタイプ・実証実験・社会実装に一貫して関与し、最適化する力が求められている。また、ICT・IoT技術の進展により多くの製品はワンストップサービスに組み込まれる事から、マクロ・ミクロ両面の視点でデザイン開発することが重要になってきている。 そこで本授業では、コネクティッドデザインの先進事例の概説と演習を通じて、コネクティッドデザインの理解と方法論を修得する。	
展開科目	デザインイノベーション	デザインとは多様な分野の活動や情報を統合、編集、応用し、新たな価値を創造する行為であり、ますます複雑化するこれからの社会でイノベーションをもたらすためには、これまで以上に分野や領域を超えた発想や活動が求められる。さらに、魅力的なデザインやサービスをクリエイトするだけでなく、それを実際に商品化、実現化しビジネスとして成立させることが必要である。 そこで本授業では、イノベーションを起こすために必要となるデザインの実践的な考え方や手法について、デザイン開発現場で実践されている取り組み事例などを用いた講義と、様々な専門家の講演や実践的なワークショップを通じて修得する。	
展開科目	ストラテジック・サービス・デザイン	本講義は、企業、あるいは、自治体が主体となり、顧客あるいは従業員に対して提供するサービスをデザインするために求められるスキルおよびナレッジの提供を目的とする。サービスをデザインする場合、そのデザインの対象は、顧客体験のみならず、顧客体験を成立させるバックエンドのシステム、パートナーで構成されるエコシステム、ビジネスモデルまでをデザインの対象とする。これらをデザインするために必要な理論を、様々なツールやメソッドを用いながら、講義および演習を通じて修得する。	講義8時間 演習8時間
展開科目	HCIデザイン	本講義演習は、先行研究のリサーチを踏まえたインタラクティブ・システムの企画開発、ならびに、評価手法の習得を目的とする。具体的には、チームを組織し、インタラクティブ・システムをデザインし、HCI分野のトップカンファレンスである国際会議(CHI)向けのポスター用原稿を作成する。この過程で、先行研究のリサーチ、インタラクティブ・システムの企画・設計・開発、英語でのショートペーパー執筆、英語でのポスター作成を学修する。	
展開科目	エクスペリエンス (UX) デザイン	本講義演習は、顧客体験・ユーザ体験・従業員体験など、サービスにおけるタッチポイントごとの体験のデザインを目的として、様々なデザインツール・デザインメソッド・デザインプロセスの習得を目的とする。具体的には、フィールドワークを実施し、コンテキストを理解し、デザイン機会を同定した上で、サービス体験のプロトタイプのデザインおよび評価を行う。この過程で、観察法、インタビュー法、分析法に加えて、各種モデリング手法を学修する。	
展開科目	アート・シンキング	本講義演習は、アーティストならではの認知プロセス(art thinking)を理解し、イノベーションへの応用(Art Thinking)を学ぶ。具体的には、Jacob(2018)らの定義するMetacognition、Use of resource banks、Prolonged research、Problem-creation、User of constraints and generation、Conversation with the work、Delaying Closure、Reflection and evaluation of thematic coherenceといったアーティストの思考プロセスの学習に加えて、実際にアート作品の制作演習を通じて、アーティストの認知プロセスの疑似体験を行う。	
展開科目	インクルーシブデザイン	インクルーシブデザインとは、これまで除外されてきた（エクスクルーード）ユーザー層を包含し（インクルード）、かつビジネスとして成り立つデザインを目指す考え方である。障がいや、人と人の中にある社会の課題ととらえ、日常の「気づき」から発想する方法をとる。本授業では、インクルーシブデザインの概念、方法論、事例の理解と実践力の習得を目的とする。具体的な学生に身につけさせる知識・能力としては、多様なユーザーの理解、社会排除の理解などの課題発見、「ともに」デザインするコデザイン手法の展開能力を想定している。	
展開科目	ソサエタルデザイン	ソサエタルデザインのカタチは多岐にわたっている。本授業は、社会とは直接設計するものではなく、多様な参画者の対話を通じて創発されるものである。超包摂的な社会に向けて参画型のプロセスを通じた戦略的デザイン案の制作を行う。社会に向けて参画型のプロセスや多様な参加者とのコミュニケーション手法などを含めた戦略的なデザインの手法を身につける。 キーワード： デザインを通じた研究（Research through Design）、Inclusive Design、Participatory Design、Strategic Design、Dark matter） （59 張 彦芳） ユニバーサルデザインの視点から、多様な参画のあり方のデザインに関する指導を行う。 （62 稲村 徳州） 人間社会を超えた生態系までを視野に広げたポスト人間中心デザインの視点から指導を行う。	共同

展開科目	ソーシャル・システム・デザイン	本授業は、現代社会の環境、エネルギー、高齢社会、地方都市等の諸問題を解決するための新たな統合的デザイン視点として、社会を複数の機能システムが並列・分散的に存在し、それぞれの各システムが自己生成し、自律しながらも相互に依存、協調しあっている社会、つまり自律分散協調社会システム（以下、社会システム）と定義し、その社会システムの計画・設計手法等を修得する。具体的には、社会から機能システムを発見・抽出・分析する方法論及び持続可能性な社会システムを創造（あるいは再構築）する実践的デザイン方法論やツール、技法等を、事例研究を通じて修得する。	
展開科目	プロデューサー原論	プロデューサーとは、民間企業・公共団体等を問わず事業戦略策定や新製品・新サービス開発、流通、販売、広告、財務、法務、施設開発・運営、環境対策等さまざまな領域において、それぞれの目的を達成するために必要なヒト・モノ・カネ・情報を統合し、新たな価値を創造するデザイン能力を兼ね備えたジェネラリスト型人材のことをいう。そして、多様化し複雑化する現在社会において、プロデューサーは最も必要とされている人材の一つである。しかし、各業界で使われているプロデューサーやプロデュースという言葉について明確な役割やスキルなどの定義がない場合が多い。そこで、各業界のプロデューサーや事例を考察しながら、プロデューサーの役割やデザイン能力、技能、行動規範等を理解することに主眼を置き、講義・演習を通じて自らの気づき、意志による選択力、提案力、判断力等を育む。	講義8時間 演習8時間
展開科目	デザインマネジメント	今日、デザインは企業等における価値創造の仕組みとして広くとらえられ、製品やサービスの創出、イノベーションへの応用、企業と市場と社会との関わりにデザインを応用するなど、その対象や役割は拡大している。そこで本科目では、論文・文献、事例などをもとに、企業内デザインの起こりから、その変遷を時系列的に辿りつつ、デザインの対象の広がりや、デザイナーの役割の拡大、今後の展望について理解し、今後のデザインおよびデザイナーに求められるあり方について考察、活用できるようにする。	
展開科目	デザインマーケティング	市場性や競争力のあるデザイン開発のためには、生活者のニーズ、企業の動向、市場の状況などを把握するとともに、デザインの対象はもとより、デザインプロセスなどにも関係する諸要素をシステムとして把握し、上記の目的を達成するための的確なアプローチによりデザインプロセスを展開させていくことが必要である。そこで本科目では、論文・文献、事例などを用いて解説するとともに、簡単な演習などを通して、デザインに関連する調査・分析の考え方や手法を修得し、今後において活用できるようにする。	
展開科目	デザインプロジェクトマネジメント	感性価値を創造し、社会に適用していくためには、(1)社会課題の探索、(2)戦略の創造と選択、(3)実行の三つの要素が重要である。(1)と(2)はプロジェクトマネジメントの立ち上げに相当し、(3)はプロジェクトマネジメントの計画・実行・終結プロセスに相当する。本科目では、プロジェクトマネジメントに関する理論やツール・技法を概説するとともに、プロジェクトの立ち上げから計画・実行・終結といった一連のプロセスについて社会との関わりを体験する演習を通じて、プロジェクトを進める上で有効な主要ツール・技法を修得する。	講義8時間 演習8時間
展開科目	ブランドビジネスデザイン	企業・事業・地域・製品などのブランド及びブランドビルディングをビジネスに組み込むことで、飽和状態にある顧客ニーズの掘り起こしや商品やサービスの差別化が可能になる。本科目では、それぞれのビジネスレベルに応じたデザイン方法論・戦術を検討し、具体的な事例に基づいた講義・演習を行う。具体的には、ブランドデザインにおける機能的便益性や情緒的便益性にもとづいてデザインを切り口にして、対象となる商品・施設・事業を事例として、具体的なケーススタディやフィールドワークをもとに感性ブランドデザインの方法論やプロセス化を修得する。	講義8時間 演習8時間
展開科目	デザイン産業事情1	21世紀に入り、デザインの活用される方は20世紀の産業型社会とは大きく異なる局面を迎えつつある。本科目では、持続可能な社会の構築を目指すデザイン、既存のメディアを統合する新しいメディアデザインなど、最新のグッドデザイン賞の受賞作や、デザインを主軸にした企業活動、従来とは異なるデザイナーの活動を通して、新たな時代を拓きつつある国内・国外の新しいデザイン動向の事例研究を用いながら講義することにより、時代への対応力とデザインビジネスの創出力を高める。	
展開科目	デザイン産業事情2	本科目では、デザインによる生活価値の創造を核とするビジネスのスタイル、特に価値を生活者と共有し、その支持のもとに製造者、販売者を組み合わせて自ら事業を実施するスタイルの先行事例として産業界で注目を集めているサービスデザインなどを取り上げ、ビジネスの実現方法を学ぶとともに、生活者との価値共有の仕方、生産者・販売者間の連携ビジネスの仕方、事業としての採算の取り方などについて、講義と具体的な手法を体験する簡単な演習を通じて修得する。	
展開科目	知的財産法1	知的財産法は、デザインの保護法制として重要なみならず、ビジネスを展開する上でも非常に重要である。 そのため、まずは知的財産法の基礎を習得し、その後実際の登録状況や裁判例について確認していく。経営的に創作を秘密として保護するのか、知的財産権として保護するのかをどのように判断するのか、そうしたクローズ戦略だけでなくオープン戦略についても確認していく。また、裁判例は、どのようなデザインについて保護が欲せられているかが把握できるものであり、非常に重要であることからできる限り詳しく扱う。 知的財産法1では主に意匠法と不正競争防止法を扱う。 なお、特許法は知的財産法の基礎法とも言えることから、できる限り取り扱う。	

展開科目	知的財産法2	知的財産法は、デザインの保護法制として重要のみならず、ビジネスを展開する上でも非常に重要である。 そのため、まずは知的財産法の基礎を習得し、その後実際の登録状況や裁判例について確認していく。経営的に創作を秘密として保護するのか、知的財産権として保護するのかをどのように判断するのか、そうしたクローズ戦略だけでなくオープン戦略についても確認していく。また、裁判例は、どのようなデザインについて保護が欲せられているかが把握できるものであり、非常に重要であることからできる限り詳しく扱う。 知的財産法2では主に商標法と著作権法を扱う。 なお、特許法は知的財産法の基礎法とも言えることから、できる限り取り扱う。	
展開科目	リーダーシップ論	組織におけるリーダーシップの発露の仕方には、目には見えない構造があり、それを理解することで、いつ、どのような状況で、どのようにして、どんな種類のリーダーシップを発揮できるか（そして、できないか）を意識的に制御したり、予測したりすることができる。 本授業は、この命題にもとづいて、「リーダーシップ」に関する主な理論を解説する。各回の授業では、当該理論や概念に関する理解を深めるために、講師による解説だけではなく、ワークショップやアクティビティ及び受講生グループによるプレゼンテーションを行う。	講義25時間 演習5時間
展開科目	デザイン思考	社会における新たな価値の具体的実現のためには、アントレプレナーシップと同時に、多様なステークホルダーを巻き込んだゼロワンのアイデア創造のためのクリエイティブなリテラシーが必要である。本講義では、その優れた技法として注目を集める「デザイン思考」の基礎を学ぶ。課題発見から社会実装のための提案まで、学生のイノベーション実現能力向上を目指すことを授業の目標とする。具体的な学生に身につけさせる知識・能力としては、デザイン思考についての基本的知識、課題発見からアイデア創出→プロトタイピング→評価に至るプロセスに関する技法を能力として身につけさせる。	
展開科目	リスタートアップ演習1	社会における新たな価値の具体的実現のためには、アントレプレナーシップと同時に、課題発見からアイデア創出→プロトタイピング→評価に至るプロセス技法が必要である。本講義では、優れた技法として注目を集める「デザイン思考」の基礎を学び、受講者のイノベーション実現能力向上を目指す。演習2のテーマはデザイン思考からビジネスモデルへの展開で、学生の身につける力は、ビジネス面の基礎的理解が中心となる。 (82 平井 康之) 全体の企画、ディレクション、およびメインファシリテーション (62 稲村 徳州) 各チームのファシリテーションを補佐し、デザインプロセスの習得を指導する。	共同
展開科目	リスタートアップ演習2	社会における新たな価値の具体的実現のためには、アントレプレナーシップと同時に、課題発見からアイデア創出→プロトタイピング→評価に至るプロセス技法が必要である。本講義では、優れた技法として注目を集める「デザイン思考」の基礎を学び、受講者のイノベーション実現能力向上を目指す。演習2のテーマはデザイン思考からビジネスモデルへの展開で、学生が身につける能力としては、ビジネスとアントレプレナーシップに関する基礎的理解が中心となる。それらの知識を理解した上で、ビジネスモデルキャンパスなどの演習を行う。 (82 平井 康之) 全体の企画、ディレクション、およびメインファシリテーション (62 稲村 徳州) 各チームのファシリテーションを補佐し、デザインプロセスの習得を指導する。	共同
展開科目	リスタートアップ演習3	社会における新たな価値の具体的実現のためには、アントレプレナーシップと同時に、課題発見からアイデア創出→プロトタイピング→評価に至るプロセス技法が必要である。本講義では、優れた技法として注目を集める「デザイン思考」の基礎を学び、受講者のイノベーション実現能力向上を目指す。演習3のテーマはプロトタイピングである。学生の身につける能力は、ビジネスやアントレプレナーシップの知識をもとに、演習1、2で創造したアイデアを社会実装・起業のためのプロトタイプとして精度を高める実現力である。 (82 平井 康之) 全体の企画、ディレクション、およびメインファシリテーション (62 稲村 徳州) 各チームのファシリテーションを補佐し、デザインプロセスの習得を指導する。	共同
展開科目	リスタートアップ演習4	社会における新たな価値の具体的実現のためには、アントレプレナーシップと同時に、課題発見からアイデア創出→プロトタイピング→評価に至るプロセス技法が必要である。本講義では、優れた技法として注目を集める「デザイン思考」の基礎を学び、受講者のイノベーション実現能力向上を目指す。演習4のテーマは、ビジネスの専門的知識から知的財産として活用するまでのメソッドを学び、その方法論を説明する能力を培うことである。それらをもとにプロトタイピングとビジネスモデルを融合した提案をVCや企業へ最終プレゼンテーションする。 (82 平井 康之) 全体の企画、ディレクション、およびメインファシリテーション (62 稲村 徳州) 各チームのファシリテーションを補佐し、デザインプロセスの習得を指導する。	共同

展開科目	SD特別プロジェクトⅠ	本プロジェクトでは、SD特別プロジェクトⅡ～Ⅳの基礎として、民間企業や行政などの協力のもと、幾つかのテーマを提示し、履修学生は希望するテーマを選択、プロジェクト形式で実施する。具体的には、デザイナーとしての基本的な資質に加え、高度デザイン能力として、デザインコンセプトを決める構想力・個別課題対応能力を持ちながら、その企画、生産、知的財産化、流通、販売までのデザインビジネス過程の推進・支援に関する基礎的な能力を育成する。	
展開科目	SD特別プロジェクトⅡ(ストラテジックデザイン)	担当教員がそれぞれテーマを提示し、履修学生は希望するテーマを選択、プロジェクト形式で実施する。選択したテーマに関連する先行研究などの基礎調査、関連領域の基礎的な調査を通じて、問題の洗い出し(課題の探索)を行う。その後、注目すべき問題の絞り込み(課題の定義)を行う。解決策の洗い出し(解決の展開)を行う。その後、解決策の絞り込み(解決の提供)を行う。取り纏めを行い、プレゼンテーション・合評を行うとともに、最終成果物を制作する。	
展開科目	SD特別プロジェクトⅢ(ソーシャルデザイン)	ソーシャルデザインは、これまでのパブリックやコミュニティデザインから、近年その範囲を行政デザインやSDGsまで広げている。本プロジェクトでは、ソーシャルデザインの理解を元に、グループワークによる実践的なプロセスを通じたソーシャルデザインの課題解決策の提案開発を授業の目的とする。具体的には、ソーシャルデザイン担当教員がそれぞれテーマを提示し、履修学生は希望するテーマを選択、プロジェクト形式で実施する。具体的な学生に身につけさせる知識・能力としては、多様なステークホルダーとのワークショップによる課題発見能力から、課題解決策を最終成果物として制作する能力、そして提案のプレゼンテーション能力を想定している。	
展開科目	SD特別プロジェクトⅣ(アントレプレナー)	SD特別プロジェクトⅥは、他部局連携によるプロジェクトベースドラーニングの一環として実施され、外部パートナーの提供する課題に対して、限られた期間の中で、創造的かつ実践性に優れた価値提案を行う方法論を学ぶ。本演習は、九州大学ビジネススクール(QBS)、およびアントレプレナーシップセンター(QREC)の学生とともにプロジェクトを組織し、専攻/専門知識・経験が異なる他者との共創スキルを高めることを目的とする。	
展開科目	環境化学特論	環境中の農薬およびダイオキシン類などの残留性有機汚染物質(POPs)および食品や洗剤などあらゆる日用品に含まれる香料などの化学物質が健康や成長にもたらす影響は、世界的な関心を集めている。また、近年、爆発物や神経ガス等によるテロ活動が頻発し、安全に関する懸念が高まっている。これらの化学物質を正しく計測することは、それらの環境中での挙動を知り、リスクを評価する上で重要である。本講義では開発中の環境分析法、及びそれに必要な理論、予測方法等について紹介する。	
展開科目	熱環境学特論	現代は地球規模の温暖化(気候変動)と都市部のヒートアイランド現象(都市気候)の2つの異なるスケールの温暖化の影響に晒されている。世界の約50%の人が都市に暮らしており、都市環境を適切に保つ事は重要な課題である。本講義では、気候変動の科学的知見について、理解を深める事を目指す。授業の中では文献を読んで抄録を作成し、発表を行う。またその発表内容に対してディスカッションを行う事で、文献の理解を深めていく。	
展開科目	建築構造学特論	この講義では、鉄筋コンクリート構造の建物が大地震に対し倒壊しない性能を付与するための耐震構造計画、各種構造計算の進め方、さらには既存不適格建築物の耐震改修事例などについて、最新の研究成果に基づき解説する。授業担当教員による解説を主とした形態であり、時折、学生との問答を通じて、関連の知識を深めていく。ただし、特定の課題等に対する自身の意見や考えを取りまとめ、複数の学生の前で発表し、質疑応答をする形式の授業も複数回行う。	
展開科目	環境材料学特論	この講義では、建築の構造材料(木材・コンクリート・鋼材)の基礎的理解を前提に、部位構成材料・機能材料、そして地域資源としての材料について解説する。建築物の設計において建築材料選定の良否は、建築物のデザインのみで無く、居住性、耐久性、安全性などに大きな影響を及ぼす。環境材料学特論では、建築材料の基礎と、建築物における「適材適所」を学ぶ。様々な機能を有する最新の材料や、材料のリサイクルについて知るとともに、地域資源としての材料を活かした建築・景観づくりの事例から持続可能な社会への貢献を考える。	
展開科目	環境心理学特論	この講義では設計の本質を知り、人間主体の環境デザインを行うために、環境心理学の知見について講義するとともに、最新の間人環境系研究事例を題材とした授業を行う。人間による環境の知覚とそれに基づく環境の設計、さらには場所の認知と記憶、住環境、オフィス環境等のトピックについて事例を紹介しながら解説する。受講生は与えられた課題に対し、教科書を熟読して予習し、授業中にはディスカッションを通してお互いの理解を深める。	
展開科目	建築計画特論	現代の住宅地や地域施設は、どのような計画プロセスにより構築されているのか、またそのプロセスに参加するのは誰で、これらは本当に社会的な要請に従って構築されているのか。また、計画者や設計者はどのような役割を果たし、エンドユーザーはどう評価しているのか。ここでは、現代社会において建築デザイン計画を行う上で必要となる諸条件のアナリシス(調査・分析方法等)とコンパイル(実践的デザイン計画手法等)について、関連文献・研究論文・実際の計画設計事例を通して学習する。	
展開科目	建築構法計画特論	この講義では、日本の建築構法計画・建築生産システムがどのような仕組みになっているかを、諸外国の現状と比較しながら学んでいく。建築の世界で研究者や技術者として活躍する際必要な、その世界の専門家として必要最小限の知識、技術、考え方を習得すること目標とし、建築構法計画・生産システムを取り巻く環境の変化に柔軟に対応できる素養と適応力を身につける。さらに、建築構法に関連する分野について、国家資格「一級建築士」に要求される水準の学問的知識と実務上の知識を習得することも目指す。	

展開科目	環境保全学特論	本授業は講義形式を中心とし、自然の保護と保全、特に農山村、森林環境を中心にテーマを設け進めることとする。これらに関わる法規制、キーワードの説明と共に、植生の調査方法、および、講師の関わるフィールドを事例に講義を進め、学生の理解を深める。また、小研究課題を課し、提案レポートを制作し、発表を行う。都市への人口集中と農山村の過疎化の進行、災害の増加、生産環境、自然環境の課題に対し、学生自らが考えを深め、それぞれの分野で活かす動機となることを本講義の目的とする。	
展開科目	景観生態学特論	この講義では、都市部、田園部、森林部それぞれにおいて、生態的プロセスや社会的プロセスが、景観の構造や機能にどのような影響を及ぼしてきたかを理解することを目的とする。そのために、現在、土地利用上の利害対立や生態的基盤の劣化が急速に顕在化しつつあることも踏まえながら、エコロジカル・プランニングに基づいた土地利用計画や地域環境計画の方法論、生態系管理技術などの動向を最新の研究成果にもとづいて学習していく。	
展開科目	ランドスケープデザイン特論	豊かな自然の存在する地域では、自然環境を計画的に保全するとともに、ランドスケープの資源として積極的に管理・活用するためのマネジメントが求められる。また、都市や都市周辺の農村地域などでは、人々の日常的な生活行動支援にかかわる緑地・公園などのオープンスペースや諸施設などの構成要素を関連付け、優れたランドスケープとして創出するためのマネジメントが必要となる。そこで本講義では、自然の営みや都市活動と人間との相互依存関係を理解し、様々な生活環境の持続的発展に寄与するランドスケープのあり方について理解を深めてもらう。そのため、基礎的事項を解説するとともに、各種の事例を教材としてとりあげ、計画的課題の設定や調査・分析方法、計画手順、時間管理などについて言及する。	
展開科目	日本建築史特論	この講義では、建築史研究の方法論および基礎的技法を学ぶことを目標として、日本建築史・都市史に関する講義および文献・史料の読解等を行う。基本的な用語・概念の理解や歴史の変遷の理解の根拠をなす史料や先行研究を読み解き、その解釈の妥当性などを検討する。具体的な対象は、茶室、宮殿、神社、あるいは近代の建築学など、さまざまに設定し、対象によっては建物・町並み等の実地見学や修理工事の見学などを組み込む場合もある。	
展開科目	西洋建築史特論	この講義では、西洋の歴史的都市を、古代から現代にいたるまでのプロジェクトの集積ととらえ、それぞれのプロジェクトの基本戦略、手法、理念などを説明する。また、西洋建築史・都市史研究の基本的な手法についても説明する。全球的視野にたつて非西洋との比較・対照も念頭におきながらも、近代建築・近代都市を生み出す母体となった西洋の伝統的な都市・建築について深く学ぶことで、都市や建築についてさまざまな観点から解釈できるようになることを目標とする。	
展開科目	文化財学特論	欧州に端を欲する近代保存運動のなかで文化財概念がどのように形成されてきたのかを概観する。それらがどのように現代においては解釈されているのかを理解するため、文化財に関する国際憲章を講読する。アテネ憲章、ベニス憲章、ユネスコ世界遺産条約、オーセンティシティに関する奈良ドキュメント、バラ憲章などを読みながら、文化財保存修復概念の諸相を示す具体事例を紹介しつつ、ディスカッションをおこなう。学外見学をおこなう場合もある。	
展開科目	国際環境政策特論	本講義では、気候変動における国際枠組みの歴史的経緯と現状、温室効果ガス排出量算定方法論の解説を行う。具体的には、国連気候変動枠組条約における京都議定書からパリ協定への国際枠組みの変遷と国家間意思決定プロセス、また、国際的に削減や提出を求められている二酸化炭素等の温室効果ガスはどのように計算されているのか、排出量の計算方法とそのデータの読み解き方、政策的活用や国際評価について概説する。気候変動における国際的環境政策について、科学と政策の両面から習得することを目的とする。	
展開科目	環境人類学特論	国際協力は多くの場合、世界各国の経済格差（「南北問題」）を背景にして、先進国による発展途上国に対する開発援助という形で行われる。開発援助は第2次世界大戦後、アメリカを中心とする戦勝国によって、世界の貧困を経済発展で解決する目的で始まった。しかし、近年グローバル化が進展し、多くの発展途上国が世界資本主義体制に組み込まれたことから、開発援助の見直しが必要となってきた。また、別の見方では、グローバル化の進展によって、世界の格差が拡大し、貧困の解消を目的とする開発援助はますます必要になってきたという見方もある。 この授業では、開発援助という国際協力に焦点を当て、「グローバル化した世界における開発援助の在り方」を考えることを目的とし、履修者にはこの「グローバル化した世界における開発援助の在り方」というタイトルで最終レポートの提出を求める。	
展開科目	環境文化特論	この講義では、地域における環境と文化の関係について、とりわけ芸術を用いた都市再生・地域再生や社会再生の実例を検証しながら社会的関心を高めて行くため、社会に対して働きかける方法について解説する。とくに芸術文化の魅力や力を用いて都市再生・地域再生や社会再生に挑んできたヨーロッパの事例などを多彩に分析検討しながら、ブラウンフィールドが再生されていくダイナミズム、そこから創出される創造都市＝クリエイティブ・シティの原理に関する内容を理解すると同時に、昨今の疲弊する地域社会の再生へ向け実践的な提案プログラムを創出することを目標としている。	

展開科目	環境デザインプロジェクトA	環境デザインに関する方法論や知識を演習を通じて修得し、応用する力を身につけるためのプロジェクト科目である。プロジェクトのテーマは環境設計コースのコア科目をベースに、主に建築学分野に含まれる環境心理学、建築計画、建築構法計画、建築史などの分野から設定され、学生が選択して履修する。初回にその年度に設定されたテーマについての説明を受けた後、選択したテーマごとに別れて調査・制作を行い、最後に合評会が行われる。	
展開科目	環境デザインプロジェクトB	環境デザインに関する方法論や知識を演習を通じて修得し、応用する力を身につけるためのプロジェクト科目である。プロジェクトのテーマは環境設計コースのコア科目をベースに、主に都市・ランドスケープ分野に含まれる環境保全学、景観生態学、空間情報学などの分野から設定され、学生が選択して履修する。初回にその年度に設定されたテーマについての説明を受けた後、選択したテーマごとに別れて調査・制作を行い、最後に合評会が行われる。	
展開科目	ランドスケープデザインプロジェクト	ランドスケープデザインに関する演習を通じて、調査、計画、設計に関する高度な知見と技術を習得し、応用する力を身につける。自然-都市的な環境における調査(サーベイ)・計画(プランニング)の演習を通して、地域環境の自然的、社会的、空間的、時間的特性と人々の利用行動との関係を基調としたランドスケープの形成プロセスを理解し、ランドスケープの保全・活用・創造に資する里山・都市緑地・都市施設等を総合的に調査・計画・設計する能力を養成する。	共同
展開科目	ストラテジックアーキテクトプロジェクトA	建築設計等の実務経験を有する一級建築士である学内教員が、少人数のスタジオ形式にて実践的プロジェクト等を課題として計画・設計実務演習を行う。特に、建築デザインに関する専門知識や技能を背景に、デザイン領域を融合した先進的な建築プロジェクトに参画し、企画立案・事業計画策定、基本構想、基本設計レベルの設計図書作成を学ぶ。 本科目はJABEE認定(UNESCO-UIA準拠)のグローバル・アーキテクト・プログラムの主要科目および一級建築士試験に関わる実務認定科目である。	
展開科目	ストラテジックアーキテクトプロジェクトB	建築設計等の実務経験を有する一級建築士である学内教員が、少人数のスタジオ形式にて実践的プロジェクト等を課題として実務演習を行う。ストラテジックアーキテクトプロジェクトAで獲得した、建築デザイン実務に関する基礎的専門知識や技能を土台として、さらなる設計図書作成、設計監理の方法等を学ぶ。 本科目はJABEE認定(UNESCO-UIA準拠)のグローバル・アーキテクト・プログラムの主要科目および一級建築士試験に関わる実務認定科目である。	
展開科目	グローバル・アーキテクト・プロジェクト	主に海外のフィールドを対象とした設計演習を行う。実際の敷地と具体的な設計条件を設定し、フィールドリサーチおよびプロポーザル的な検討内容および成果物を要求される設計課題に取り組む。また、海外の交流・連携締結大学を中心として、短期間の国際デザインワークショップ等を共催し、国際的経験と実務的知識等を修得する。演習の指導を担当する教員は設計実務に精通した有資格者(一級建築士)とする。 本科目はJABEE認定(UNESCO-UIA準拠)のグローバル・アーキテクト・プログラムの主要科目である。	
展開科目	アーキテクト・インターンシップⅠ	登録資格である一級建築士資格において実務経験2年に相当する要件として指定されるインターンシップ科目の前半部分である。建築設計を行う一級建築事務所に出向き、建築士の指導の下、プロジェクトマネジメント、建築設計図書の作成、設計・工事監理、工費積算等の建築設計の補助業務を行う。 原則として1年次夏季に履修するものとし、初回に事前ガイダンスが行われた後、3週間(90時間以上)のインターンシップを行い、最後に成果報告会を実施する。	
展開科目	アーキテクト・インターンシップⅡ	登録資格である一級建築士資格において実務経験2年に相当する要件として指定されるインターンシップ科目の後半部分である。建築設計を行う一級建築事務所に出向き、建築士の指導の下、プロジェクトマネジメント、建築設計図書の作成、設計・工事監理、工費積算等の建築設計の補助業務を行う。 原則として2年次夏季に履修するものとし、初回に事前ガイダンスが行われた後、3週間(90時間以上)のインターンシップを行い、最後に成果報告会を実施する。	
展開科目	建築インターンシップ	登録資格である一級建築士資格において実務経験1年に相当する要件として指定されるインターンシップ科目である。建築設計を行う一級建築事務所に出向き、建築士の指導の下、プロジェクトマネジメント、建築設計図書の作成、設計・工事監理、工費積算等の建築設計の補助業務を行う。 原則として2年次夏季に履修するものとし、初回に事前ガイダンスが行われた後、4週間(120時間以上)のインターンシップを行い、最後に成果報告会を実施する。	
展開科目	聴覚心理学特論	This is a seminar-style class discussing how human beings perceive, construct, and understand the outer world through the auditory system. Every student has to read through a textbook in English and present summary of the book. ヒトが聴覚を通じていかに外界の様子を知覚、構成、理解するかについてセミナー形式で学び、討論する。英語で書かれた聴覚に関する専門書を一冊読み、その内容について発表を行うことがそれぞれの学生に課される課題である。	

展開科目	聴覚生理学特論	キーワード:時間、聴覚、視覚、視聴覚デモンストレーション、知覚実験。 Keywords: time, audition, vision, audio-visual demonstrations, perceptual experiments. 全ての知覚の枠組みを形作る時間について、学生が最近の面白い研究を見つけて発表し、それに関連する視聴覚デモンストレーションの制作あるいは簡易な知覚実験を行い、発表する。Classes are in English / Japanese.	
展開科目	時間知覚特論	キーワード:感覚生理学、聴覚生理学、脳科学、聴覚心理学、EEG、MEG、NIRS、fMRI。Keywords: sensory physiology, auditory physiology, brain research, auditory perception, EEG, MEG, NIRS, fMRI。変化の検知やコミュニケーションに重要な役割を果たす聴覚生理学について、最近の面白い研究を見つけて発表する。Classes are in Japanese / English.	
展開科目	音声生成特論	音声は、人と人とがコミュニケーションを行う際の最も基本的なツールである。その音声を人が発話する際の音声生成の過程について詳しく解説する。具体的には、喉頭部の声帯、声道部の舌、軟口蓋、口唇、顎といった発話器官の役割や、発話器官の運動観測手段、実際の発話運動のようす、それらの運動に対応した音声やその波形、得られた音声の音響分析結果等について解説する。後半では、音声生成に関する論文を輪読することにより理解を深める。	
展開科目	音声情報学特論	音声言語の構成要素である音韻と韻律の表出過程を、音声生成の音源フィルタ理論に基づいて、音響学ならびに発話機構の生理学・物理学の観点から詳しく解説する。具体的には、呼吸系、喉頭、声道からなる人の発話システムを概観したうえで、声道については音響共鳴によるフォルマントの形成と言語情報の生成について説明する。喉頭に関しては、流体と弾性体の相互作用による声帯の自励振動メカニズムに重点をおき、その発音機構が音声信号に見られる特徴的なスペクトルの生起要因であることを理解させる。さらに、音声を知覚する聴覚系や言語中枢の働きをふまえることで、人の音声コミュニケーションの成立過程を体系的に理解させる。講義で得た知識をより深く身につけるため、授業後半ではグループワークによる音声分析を行う。	講義15時間 演習15時間
展開科目	音響制御特論	不要な音を付加的な音によって低減する技術である能動制御を題材にして、音の物理的制御手法とそのための信号処理の手法を学ぶ。 まず音場を解析的な視点で考察し、制御の効果が得られる物理的な意味と限界を理解させる。さらに、信号処理を導入した種々の制御方法について、その長所、短所を認識し、個々の事例に対して最も適した制御方法を選択できるようにする。特に、適応的なアルゴリズムに関して、原理と具体的な記述手法に関して示す。 全体を通して、単なる制御のテクニックではなく、これが有効に働く物理的な原理に関しての解説に注力する。	
展開科目	音響工学特論	音響工学における幾つかの要素技術について、講義形式にて修得してもらう。具体的内容は、 (1)単一マイクロホン、ダミーヘッドマイクロホン、近接4点法マイクロホンによって、音源信号の録音と、音場の伝送特性（インパルス応答）の収録を行い、 (2)高速 1bit AD変換によって、高効率符号化し、 (3)一般調和解析などを用いた先進的な信号処理によって、雑音や余計な残響を除去した、クリアなドライ音源信号（響の付いていない音源）を作成し、 (4)音場の数値計算によって、音場の伝送特性（インパルス応答）を予測し、 (5)ドライ音源信号と、音場の伝送特性（インパルス応答）のたたみ込み演算を行い、それを高効率伝送し、 (6)トランスオーラルシステムを用いて個人用の三次元音空間再生を行い、 (7)近接4点法で抽出された仮想音源分布、または、Kirchhoff-Huygensの公式に基づいた方法によって、多人数用の三次元音空間再生を行う、 という、音場再生技術のend to end,の技術である。	
展開科目	計算音響学	物理・工学システムの支配方程式たる偏微分方程式 (Partial Differential Equations: PDEs) の数値解析手法を、講義形式にて修得させる。 PDEsを数値的に解くテクニックの"Big Three": 1950s : 有限差分法 (Finite Difference Method: FDM) 1960s : 有限要素法 (Finite Element Method: FEM) 1980s : 境界要素法 (Boundary Element Method: BEM) そして、工学分野ではなぜか忘れさられてしまっている 1970s : Spectral Method について、3次元弾性体、はり、シェル振動場を題材として解説する。	
展開科目	福祉音響学	高齢化社会が進んでいく中で、我々のQoLを高めることが可能な福祉技術の開発は喫緊の課題である。視覚や運動生理に関する福祉技術は、例えばメガネや車いすなど、我々の日常生活に欠かすことが出来ない。それに比べ、補聴器などの音に関する福祉技術は広く浸透しているとは言えない。本講義では、まず音に関する福祉の諸問題を説明する。そして、なぜ音に関する福祉技術が浸透しないのかを議論することで、どのようにすれば福祉技術を活用することが出来るのかをまとめていく。	講義15時間 演習15時間

展開科目	音響イメージング特論	音と画像は信号処理の基礎では次元の違いとしてとらえられるが、音と画像のクロスメディア処理などの応用処理では時間と空間の違いや計測手段の違いを考慮する必要がある。特に実空間の画像計測においてはレンズ光学系による次元変換および伝達特性が以後の処理に大きく影響する。本講義では時系列信号処理の基礎を持つものを対象に、画像計測の基礎である撮像光学系の基礎および伝達特性から空間周波数処理などの画像処理の基礎理論や応用について講義する。	
展開科目	音響信号処理特論	音メディアを用いたコミュニケーションは、人間が有する最も基本的な能力の一つである。さらに、音メディアに基づく情報処理は、ヒューマンインターフェイスに関する学術・技術分野において非常に重要な位置を占めている。本授業では、音メディア処理の基礎技術を修得するため、音声や一般音響信号(騒音や楽音も含む)を取り扱う音響信号処理技術に焦点をあて、その基礎理論や応用に関して解説を行う。 特に、本講義では、音響システムの性能評価の基本となる、インパルス応答の測定手法について、古典的手法と現代的手法を論文の輪読により理解を深める。	
展開科目	音響環境学特論	音環境デザインを考えると、その物理的な状態と人間がどのように捉えているのかという視点が重要で、これまでに多くの取り組みがなされてきた。この授業では、こういった従来の捉え方にとどまらない、音環境に対する様々な視点を紹介する。具体的には、授業の前半に、音環境の物理特性と聞こえや身体的反応といった従来の知見に加え、交通、経済、バリアフリーといったさまざまな視点から音環境を考察した知見を講義形式で紹介する。授業の後半は、音環境評価や音環境デザインに関する研究論文を輪読する形式をとる。	
展開科目	音環境評価特論	音環境の測定および評価の方法について、物理的側面と心理的側面の双方を定量的に評価する手法を学ぶ。物理的測定については、ISO 1996 「環境騒音の記述、測定および評価」をはじめとする技術規格によって定められる技術的知見や国際規格の動向および設計思想について解説する。心理的側面については、主観評価法およびサウンドスケープに関する知識を解説する。その上で、授業後半では、具体的な対象について音環境デザインの立案を行う。	
展開科目	音響芸術特論	今日に至るまでの音をその媒体として用いた芸術の実践を、美学と技術の双方の側面から概観する。ペーター・ヴァイベル『Sound Art』等の学術資料に基づき、過去の代表的な作品を調査・分析する。あわせて、それら調査・分析の結果を踏まえた作品の再現をおこない、その制作を通じて音響芸術とは何かということについて各人なりの理解を促す。通常の授業に加え、外部施設の見学、制作した作品の展示、およびゲストによる講評を予定している。	
展開科目	作曲学特論	世界中でよく知られた現代音楽作品、加えてアンダーグラウンドな、局地的な現代音楽のスタイルをも調査し、ディーブ・リスニング、ディスカッション、作曲実践によって、芸術音楽の中で重要なジャンルと作曲家、作品を分析する。様々な解釈概念——例えば、演奏の具現化、政治的(フェミニスト、クィア)な視点、及び美学・精神的なアプローチ——も検討する。ここ30年間で作られたアコースティック楽器のための音楽、またはアコースティック楽器と電子音楽の相互影響についても考察する。セミナー形式で学ぶ。Materials in both English and Japanese will be used in this seminar.	
展開科目	サウンドデザイン特論	サウンドデザインのための、知識・技術・事例を、科学・工学・芸術の側面から総合的に学び、サウンドデザインの実習を実践的に行う。授業の前半では、サウンドデザインの基礎について各担当教員から2週ずつ、それぞれ、視聴覚の科学的知見(レメイン)、工学的技術や規格・法制度(山内)、芸術的な実践の事例(城)について講義を行う。授業7回目以降は、具体的な対象を設定し、学んだ知識・技術・事例を活用したサウンドデザインの実践を行い、成果について相互に講評する。	共同 講義12時間 演習18時間
展開科目	民族音楽学特論	自国や西洋由来の音楽だけでなく、世界における民族音楽や伝統音楽や民俗芸能について理解し考えるために必要となる概念や研究方法を学び、さまざまな文化や音楽活動の差異や多様性をフラットに理解する態度を身につける。具体的には、世界音楽、パフォーマンスと身体、声と身体、個人と集団、楽器学、フィールドワークの方法、アーカイブなどの観点から近年の理論や研究動向を押さえて、研究実践を試み、発表や議論を行う。	共同
展開科目	音楽社会文化特論	現在の音楽コンテンツの基盤となっている音楽のうち、ヨーロッパに源流をもつ音楽について、コンテンツ面ならびに文化的・社会的・歴史的側面から理解を深める。それをおして、現今に至るさまざまな音楽作品や音楽活動について、論理的・感性的視点から考える技術を身につける。具体的には以下の通りである(音楽経験は特に必要としない)。 1) 欧米や日本における音楽や楽器の発展を理解する。 2) 映画音楽などさまざまなメディアを通じた音楽の実態を知る。 3) 日本における音楽をめぐる発信・受容や活用方法について理解を深める。	
展開科目	聴覚文化論特論	この授業では、19世紀から現代に至るまでの聴取の技法・文化の歴史を、主に音を記録・再生するメディアの成立という観点から、具体的な事例を確認し通覧する。音楽を含むある時代における音の文化というものは、その時点に存在している技術により何らかの規定を受けている。一方で、その時代の人々による音の聴き方が技術の変化を促すことにもなる。授業内では、この聴取の技法と文化との密接な関わりを、様々な視聴覚資料やゲストによる講演を通じて考察する。	

展開科目	言語学特論	日本語や英語をはじめとした諸言語を対象に、音や音楽とのかかわりから「ことば」を科学的・歴史的・社会的・思想的観点から分析する方法を修得する。具体的には、音・音楽と言語の基本特性（音声学や音韻論）を確認したうえで、音と言語、リズムと言語、音楽と言語、統語論や意味論、メディアと言語、言語コミュニケーション論、社会との関係、相互行為分析の近年の研究を概観し、それぞれの履修者が購読しつつ研究実践を試みてプレゼンテーション等を行う。	共同
展開科目	音響設計特別講話	音響設計に関わる研究教育、技術開発、製品設計、作品制作など、様々な分野の実践的な展開について実例を学ぶ。例えば、著名なコンサートホールの音響設計者、国際的に活躍する録音エンジニア、公共空間の音響環境デザイナー、音声聴覚分野の研究者などをゲスト講師として招聘する。コース担当教員が持ち回りでそれぞれ一〜二名のゲストを紹介するこの授業では、オンラインでの実施も積極的に取り込むことで、国内外の第一線で活躍する講師によるレクチャーを実現する。	共同
展開科目	輪講	論文輪講の発展形の授業形態である。受講者は各自、自分が興味を持つ研究について、既発表の研究論文の紹介を行う。発表の前半は、紹介する研究論文の背景となる事項や論文の理解のために必要な基礎理論などを説明し、後半で論文の内容を要約して発表する。全学生・教員が参加することで、音響設計の中でも専門の異なる人々に対して理解してもらえるような説明力を養うと共に、音響設計に関わる分野間での議論や交流を活性化させる。	
展開科目	ホール工学技術特論	劇場やホールの管理運営に必要な、基本的な工学的知識を学んでもらうことを教育目標とした、講義形式の科目である。 (オムニバス方式／全14回) (36 鮫島 俊哉／7回) 劇場・ホールの歴史から概説し、劇場・ホールを管理運営する場合に必要なと考えられる、音響工学、照明工学、および材料・構造力学の基礎的な事項を説明する。 (8 尾本 章／7回) さらに、履修者数人でグループを構成し、仮想の設計事務所として自分たちが利用したい空間の音響（残響）設計を行う。同時に年度ごとに最新の話題提供や実践的演習項目を設定して実施する。	オムニバス方式
展開科目	ホール工学技術演習	ホールや劇場等、公共文化施設などにおける公演の実施に関して、その運営から音響、照明、舞台機構の実際の運用方法などに関して、インターンシップ形式で学ぶ。 具体的な取り組みの内容は受け入れ先との協議により決定されるが、例としては、実際の公演の準備段階からの参画によって様々な機材の運用方法を学ぶ場合、機材や設備に関する技術的な知見に関する講義を受けながら特定の公演実施までを補助するもの、ホールにおけるバックステージツアーの補助など、マネジメント的側面も含む場合まで、広範囲に設定することができる。	
展開科目	応用人間工学	高度テクノロジー社会および少子高齢化社会における人間工学の役割を展望し、人間工学を社会に活かすための実践方法を学ぶ。そのために人間の特性や個々の特性を理解しながら、製品や生活様式の提案につなげるまで、またそれらを科学的に検証するの一連のプロセスについて例を紹介しながら解説する。特に人口高齢化に起因する諸課題に対してテクノロジーにより解決を試みる場合の人間工学的アプローチを取り上げる。	
展開科目	生活機能支援科学特論	1. アシストテクノロジー (Assistive technology) は様々な分野、例えば工学、デザイン学、または運動学、そして生理学、健康科学などから知識が取り入れられ成り立っている。 2. ヒトが人工環境に適応する際の生活・仕事とテクノロジーの利用について、健康の側面からその関連性を解説する。 3. 生理人類学や人間工学の視点から人間と機器が調和する生活環境の実現のために焦点し、それぞれの専門知識と研究方法について知識を高めることを目標とする。	
展開科目	環境人間工学特論	人間を取り巻く環境は、科学技術の発展に伴い変化し、快適かつ安全となる一方で、様々な健康問題を引き起こしている。様々な健康問題を予防するだけでなく、人間にとって真に「健康」、「快適」、「適応的」な環境を構築するためには、ヒトの様々な特性を考慮することは必要不可欠である。本科目では、人間が生物として持つ特性を正しく理解し、その特性のうち特に生理的特性が生活習慣や生活環境にどのような影響を受けるのか？その影響は適応的なのか？について、講義・演習を通して主体的に学ぶ。習得した基礎・専門知識を基に、人にとって健康・快適・適応的な生活環境を研究し、実社会に応用できる能力を身に付けることを目的とする。	講義8時間 演習7時間
展開科目	生理人類学特論	人あるいはヒトにとって望ましい生活環境とは何かを理解するためには、生理人類学的観点からのアプローチが必要である。そこで、まずヒトの進化、適応に注目する。進化、適応は生物の宿命であり、適応の是非が生物に生き残りの命運を与えてきた。ある生物種がどんな環境圧にどのように適応し生き残ってきたか、これこそがその生物のアイデンティティであり、その生物の資質を決定する。また同じ視点から文化の形成過程にも目を向け、「生物学的なヒト」及び「文化に生きる人」のアイデンティティや資質を理解していく。このような人・ヒトの理解から、現在そして未来の生活環境のあり方を考える基礎力、そこからデザイン提案に至るまでの応用力を養うことを目的とする。	

展開科目	脳・行動生理学特論A	脳は行動のための器官であり、ヒトの認知、運動、情動、睡眠など多岐にわたる機能をつかさどっている。脳は多数の神経細胞からなる神経回路で構成されており、個々の神経回路や神経核のふるまいがヒトの行動の基盤となっている。本講義では個々の神経細胞、神経回路の基礎的知識から、五感の機能、あらゆる行動に関連する脳と神経のメカニズムまでを学び専門知識を習得するとともに、得られた知識から研究方法の提案に応用できる力を身に着けることを目的とする。	共同
展開科目	脳・行動生理学特論B	脳は行動のための器官であり、ヒトの認知、運動、情動、睡眠など多岐にわたる機能をつかさどっている。脳は多数の神経細胞からなる神経回路で構成されており、個々の神経回路や神経核のふるまいがヒトの行動の基盤となっている。本講義では記憶や情動などの精神機能やその異常である精神疾患の神経メカニズムを学び専門知識を習得するとともに、得られた知識から研究方法の提案に応用できる力を身に着けることを目的とする。	共同
展開科目	感性科学特論	人間性の基盤となる感性を科学的に探究するための方法とその応用について学ぶ。人間生活の中で生じる感性に関わる様々な感覚、感情、行動を脳科学、生理学、心理学、内分泌学などの方法を用いて客観的に明らかにする手法を習得する。また、感性に関わる科学的研究の最新の学術論文や書籍を読み解きながら、これらの研究が社会課題の解決や、モノ作りとどのように関係するかを実例など通して習得し、感性科学をデザインに応用する能力も含めて身に着けることを目的とする。	
展開科目	デザイン認知論	個や集団の創造性について、認知科学・社会心理学・知識科学の観点から概観し、様々なデザインの文脈へと展開する。また、創造性を促す場やプロセスに焦点をあてた近年のデザイン研究や事例を検討することを通じて、個や集団の創造性のメカニズムを理解する。創造性の多義性を踏まえ、当該授業で扱われる創造性の側面を的確に把握するため、また、応用に繋がる知識へと理解を深めるため、適宜演習をとり入れる。	
展開科目	人間情報工学	本講義では、脳や神経系の挙動を記述する数理モデルについて学ぶ。神経系の数理モデルは、主としてトップダウン的なものとボトムアップ的なものに分類される。トップダウンモデルは人の知覚や行動の特性を模擬し、ボトムアップモデルは生理学的知見をもとにした神経細胞の挙動を表す。ここでは、この双方の概説とともに、それぞれの具体的な数理モデルをいくつか紹介する。これらの数理モデルの理解を通じて人の神経系の情報処理に関する幅広い視点を学ぶとともに、実現象に対する数理的な視点の導入方法、数理的知識の応用力等を習得することを目的とする。	
展開科目	機能工学デザイン	科学技術の発展により生み出されたさまざまな革新的デザインは、人々の生活を豊かにしてきた。これらの革新的デザインを実現するためには、高度な科学技術をモノやサービスに適用するための技術開発能力を身につける必要がある。本科目では、最先端の科学技術の理解に欠かせない工学的専門知識を修得させるとともに、演習を通して、機能・性能・安全を追求したモノやサービスをデザインするために必要な工学的センスを育成する。	講義8時間 演習7時間
展開科目	生体模倣工学	完全な炭素循環型社会を実現している生物の生き残り戦略に学ぶことは、持続可能な社会を実現する強力なアプローチである。最新成果を基に生体模倣工学が如何にしてイノベーションを起こしてきたのかを解説する。更に、生物の構造と機能を観察する、数理的、理論的にモデル化する、人工物で模倣する、という生体模倣工学の3つのプロセスにおいて必要となる知識と各種ツールの活用法を学ぶとともに、プロダクトや建築物の設計演習を通じて、生体模倣工学を実践する方法論について解説する。	
展開科目	リーガルデザイン	法は社会的関係性を定義し、社会システムを創出する機能をもつ。個人ないし集団は日々無数の法律関係を紡ぎ、社会生活においては法が創出するダイナミクスの影響を絶えず受ける。本科目では、個人ないし集団の行動のデザイン、社会的関係性のデザインという観点から法のメカニズムを概観し、ケーススタディの検討を通じて、人々の行動/関係性やコンモズのあり方をナッジするツールとしての法の可能性を理解する。	
展開科目	パブリックデザイン	人々の生活を心身ともに豊かにするための手段としてデザインを位置づけ、その重要性や考え方をパブリックデザイン領域をフィールドに解説する。社会情勢や都市のあり方等の環境変化に伴うこれまでのパブリックデザインの変化や具体事例によるデザイン検討の際の価値の位置付け、多様な立場から見た際の価値の変容などについて説明し、デザインを行うために実施する調査方法についての紹介も行うことで実際のデザインの際に活かせる講義内容とする。簡単な演習を行うことで、パブリックデザインやデザイン価値の創出、調査方法などの理解についての習熟をはかる。	講義13時間 演習2時間
展開科目	コンテキストデザイン	コンテキストとは、デザインする対象を取り巻く周囲の文脈や状況や背景であり、それはデザインした事物によって変容するものでもある。本講義では、多くの人が同じように解釈できる意味と人により異なる解釈や異なるものがたりが生まれる余地を意図的に創り出すためのものづくりの方法やユーザーがコンテキストを創造する現象について、プラグマティズムの創始者である哲学者チャールズ・サンダース・パースの記号論の観点から解説する。議論や演習を行うことで、コンテキストをデザインするためのものづくりの方法やあるべき記号過程の連鎖をデザインする方法について理解し、社会実装に応用可能な力を身に着けることを目的とする。	

展開科目	コミュニケーションデザイン論	わたしたちを取り巻く、さまざまなメディア表現・文化事象（広告表現、ミュージアム、映像・映画、アート作品、サブカルチャー、その他コンテンツ等）を通じて、社会を支えるコミュニケーションの成り立ちを俯瞰します。広告表現の事例を多くとりあげますが、あくまでひとつの素材に過ぎません。社会を支えるコミュニケーションの有り様を問い直し、コミュニケーションのデザインを考え、人びとの意味活動を考察します。クリエイティブな着想の元、表現が「伝わる」ことの意味を考え、従来の枠にとらわれることなく、モノ・コト・ヒトを再構成・再定義し、広義のデザイン視座を得ることを目指す。	
展開科目	ライフスケープデザイン	ライフスケープデザイン領域の将来的な社会での位置づけや役割について、生活の中のあらゆる事象を対象とした各自の気づきや問題提起に基づいた演習を行う。各自の提示するテーマを共有し、ディスカッションを行い、具体的な方向性や結論を導出することで、私たちの生活に近い領域において主体性をもって課題発見をする能力やそれらを他者を巻き込みながら検討・プロジェクト化する能力などを育成する。	
展開科目	人間生活デザイン特論	<p>(概要) 生活の在り方を構想し、人間の特性や最新の科学技術を、安心安全で魅力的なライフスケープの創造に向けて応用ないし統合するために必要な導入講義を行う。</p> <p>(オムニバス方式／全8回)</p> <p>(21 村木 里志／1回) 超高齢社会における人間工学の役割</p> <p>(78 LOH PING YEAP／1回) オフィスエルゴノミクス</p> <p>(20 前田 享史／1回) 人間と環境</p> <p>(52 松前 あかね／1回) 個の創造性と社会的創造性</p> <p>(60 西村 貴孝／0.5回) 現生人類の環境適応とその多様性 過去、現在、未来のヒトの健康問題</p> <p>(84 曾我部 春香／0.5回) 社会におけるライフスケープデザインの役割や価値について、パブリックデザインフィールドを中心に解説</p> <p>(87 元村 祐貴／0.5回) 感性と情動の神経科学</p> <p>(68 澤井 賢一／0.5回) 楽器演奏における数理最適化</p> <p>(49 藤 智亮／0.5回) 機能とデザイン</p> <p>(61 秋田 直繁／0.5回) ライフスケープデザインとインテリア・プロダクトデザイン</p> <p>(35 齋藤 俊文／0.5回) ライフスケープデザイン、コミュニケーションのデザイン、クリエイティブディレクション</p> <p>(81 樋口 重和／0.5回) 人の行動と脳科学</p>	オムニバス方式
展開科目	視覚心理学特論	視覚心理学について、発展的内容を学ぶ。人間の視覚情報処理システムについて、眼や脳の仕組みと、錯視などの視覚現象の対応関係を中心に、実験心理学的観点から解説する。また、受講者は、視覚心理学のメディアデザインへの応用について考えるための資料をもとに、レポートを作成する。本講義を通じて、人間の視覚の能力、特性に関する知識を身に着けるだけでなく、それらに配慮した視覚デザインを自ら考え実践する態度を養うことを目指す。	
展開科目	色彩科学特論	英語で執筆された色彩科学に関するテキストを輪読形式で読んでいき、色彩科学の基礎である色覚、さらに、その応用である色彩工学や色彩デザインに至る知識を修得する。受講者は、担当として割り振られた箇所を前以て予習しておくことが必要となる。年度によってテキストを変えているが、とりわけ、色覚、または色彩情報処理、色彩と芸術や工学との関係に関するものを選んでいく。また、テキストを理解するにあたり、基礎的な数学が必要とされ、学部の「色彩学」、「色彩学演習」を履修していることも望まれる。	
展開科目	心理学的思考法特別演習	実験心理学の論文を読み解くことで、心理学実験の計画方法を学ぶ。多視点的なモノの見方を心理学を通して身につける。少人数による個別指導と座学を並列して行う。最終的には、オリジナルの心理実験の計画をプレゼンしてもらう。心理学に関連する重要な実験事例、重要な著作物を多数読みながら、心理学の基礎的な理解を高める。毎週、かなりの課題をこなしてもらう。自前の実験計画を全体に発表するなど、授業時間中の課題も多く存在する。毎週のレポートを課す予定である。全体として、大変に厳しくハードな指導となるが、ついてこれれば他大学や他学部の心理を専門にした学科やコースの教育以上のものが得られるはずである。	

展開科目	コンピュータサイエンス特論	コンピュータ・サイエンスにおけるコンピュータ・グラフィックスおよび周辺分野（ヒューマン・コンピュータ・インタラクション、コンピューター・ビジョン、ユーザー・インターフェース、VR/MR/AR、メディア・アート、その他）において、これらの研究、活用や応用事例、論文の調査方法、学会等のイベント、実装の手段、等を紹介する。年によっては外部から関連する講師を招く。また課題として受講者は、該当分野の論文や応用事例を調査し、発表する。	
展開科目	視覚メディア設計特論	本講義・演習では、まずコンピュータビジョンの考え方や技法を効果的に活用するため、より上位に位置するコンピュータビジョンの基本戦略について解説する。次に、コンピュータビジョン、コンピュータグラフィックス、画像処理、パターン認識など画像工学に関連する諸分野の英語文献をいくつか輪読・解説し、画像関連分野について理解を深めるとともに、学術文献を正確に読解し、先行研究を批判的に吟味しながら論理的かつ客観的に議論を展開する能力を養う。	
展開科目	画像情報処理システム設計特論	画像情報を扱うためには様々な画像処理に関する知見が必要である。本授業では、画像情報工学に関する研究をする上で基盤となる種々の画像処理に関して理論的な理解を深める。それらをもとに画像情報工学分野の最近の動向を内外の文献から学ぶ。これらを通して、それぞれの研究分野に関する知識を深めると共に各分野の関連性について考察する。更に、複数の画像処理を実際にプログラミングすることで、様々な情報工学技術の関係とそれら技術のシステム化について理解を進める。	
展開科目	視覚環境知能設計特論	本演習では、画像処理、パターン認識、ノンフォトリアリスティック（非写実的）レンダリングに関する最近の研究成果を紹介します。また、視覚環境知能設計への活用が期待される最新の関連技術の中から、特に興味深いテーマを選び、それらについても解説・考察するとともに、新規アルゴリズム開発の道を模索します。テーマによっては、プログラミング言語PythonやMATLABなどを用いてアルゴリズムを実装し、より深い理解を目指す。	
展開科目	コンピュータグラフィックス特論	「空間、物体、光、動き、人、その他をすべてコンピュータの中に再現する技術」として、CGを考え、そのための背景となる基礎理論から映像完成までの流れを、物理学や数学をベースにコンピュータの内部処理の視点から解説していく。全体の構成として、三次元CG技法の概観、最近の研究、映像作品、モデリング、レンダリング、アニメーション、手続き型手法、物理ベースシミュレーション、ノンフォトリアリスティックレンダリング、フォトリアリスティックレンダリング、インタラクティブシステム、など、各種の技術の考え方、最新の研究の紹介を予定している。	
展開科目	メカニクスデザイン特論	幾何形状や機構が創生する運動、力学的に制御される挙動の基本や方程式での表現、シミュレーションなどを解説するとともに、それらを活用してSTEAMアクティビティを体験する演習を行う。前半では、曲線や曲面の数学的表現をもとにした形と運動の関係、機構の運動、力学的つりあいや姿勢の安定性、力と変形および連続体の運動・相似則や可視化手法などについて講義と演習とでメカニクスデザインの基盤を形成し、参考となる作品の紹介・解説によりその実際の利用について理解を深める。後半では、テーマを選定して、これらの知識を基にクリエイティブデザインを展開するグループワークを行う。	
展開科目	メディアサービス特論	デジタル技術を活用した先進的なメディア・サービスに関して、それらの背景となる代表的なインターネット技術とAI技術に関して、基本的なアイデアと実現方式について理解し、それらを利用した新しいサービスを開発する演習を行う。前半では、インターネット上のメディアサービスの基盤となるWorld Wide Web (Web) の仕組みを学習し、Webから自動的に情報を取得するクローリングとスクレイピングについて学ぶ。次に、膨大な情報からユーザが希望する情報を検索する手法と、ユーザの志向にあった情報を提供する推薦技術を学習する。次に、AIを利用したメディア・サービスを実現するために必要な機械学習の基礎、深層学習の基礎、畳み込みニューラルネットワーク、再帰的ニューラルネットワーク、トランスフォーマー、敵対的生成ネットワークについて、サンプルプログラムを用いて学習を行う。後半では、学習した内容を利用して、グループごとにサービスをデザインしプロトタイプを開発する演習を行う。	
展開科目	バーチャルリアリティ特論	バーチャルリアリティとは、人工的に作られた仮想空間が、我々の住んでいる実空間とシームレスに繋がっているようにコンピュータを駆使して没入させる技術である。このためには、人間の視覚や聴覚、触覚などの感覚系の仕組みを生理的、心理的に把握し、これらのマルチモーダルな感覚を仮想空間内で提示する方法を検討し、さらに空間内で人間の感覚器官に情報が提示されることから起こる生理・生体・心理的な反応について計測する必要がある。このような人工的な空間が生成されると、その空間内で様々な人間の活動についての研究や人間の欲求への支援が可能になる。バーチャルリアリティが誕生するに至った歴史から、今日までの研究の歩みを説明し、今後どのような展開になるのかを学習する。	
展開科目	メディアアート表現	本講義・演習では、メディアアートおよびメディア表現技術の歴史を概観し、社会的課題解決を視野にいれ、メディアアート表現の枠組みを問い直し、具現化する力を養う。サウンドデザイン、ウェアラブルコンピュータ、フィジカルコンピューティング、インタラクションデザイン等の動向を理解し、AR（拡張現実）やデバイス表現を応用した社会サービスデザインを実現するためのメディアアート表現スキルを習得する。また、新たな表現内容、技術の考察、開発を志向し、作品制作を行う。	講義5時間 演習10時間
展開科目	視覚記号特論	本講義・演習では、サインとピクトグラムを対象とし、視覚記号に関するデザインのあり方について考察を深め、その上でデザインとして実装する方法論や思考過程を理解することを目的とする。講義では、哲学・心理学・脳科学・歴史の各分野を横断的に外観し、多角的な視点からデザインを捉え、考えを深め、コンセプトを構築する過程を習得する。演習では、人を対象としたデザインの評価及び調査方法を学び、調査結果とコンセプトを踏まえたサインとピクトグラムデザイン制作を行う。	講義7時間 演習8時間

展開科目	グラフィックデザイン特論	グラフィックデザインは、印刷メディアからWebなどの電子メディアまで、ほとんどのメディアに不可欠なデザインである。グラフィックデザインは、文字、画像、図、などの視覚的記号を対象としたデザインである。この授業では、メディアデザインにおけるこうしたグラフィックデザインの機能について深く理解し、適切なデザインを遂行する能力の習得を目的として、コミュニケーションデザイン、グラフィック表現、記号作用の3つの観点から多角的に捉えたデザイン記号論を援用しつつ、グラフィックデザインを論じる。	
展開科目	映像コンテンツデザイン特論	映像作品において、コンテンツとテクニックをきちんと融合させなければ、それぞれの分野をバラバラに見せる作品となり、その結果としてテクニックばかりを誇示するような作品が出来上がってしまうことが多い。本講義では、映画史における初期の表現テクニック、言わば映像的ストーリーテリング（受け手を物語に引き込む語り口）を例として、映画史上でも指折りの印象的な名シーンの数々を取り上げ、鑑賞しながら解説する。映像の基本原則（映像の連続性、空間の同一性、テンポとリズム、視覚と聴覚）やフレーム内方向性の意味（対立、視点移動、時間枠の分離）などの関連知識を深めながら業界屈指の監督たちが、どのようにして形式と機能を融合させ、映画史上最も印象的な場面の数々を作り上げてきたのか、それを分かりやすく解説する。	
展開科目	映像表現史特論	1億総カメラマン時代と言われる現代において、映像における表現手法に関する知識の習得は重要である。本講義では、写真（静止画）の誕生をはじめ、世界各国における映像表現の歴史を紐解きながら、100年以上の映像の歴史の中で確立されてきた表現手法について解説する。また現代のメディアテクノロジーの進展とともに展開されてきたコンピュータグラフィックスなどのデジタル映像を中心とした芸術表現やコンテンツデザインへの応用について解説する。また「拡張映像表現」と呼ばれるスクリーンやモニタの「枠」を超えた、現代における映像技術の進展による表現技法や、提示技法についても、作例を紹介しながら解説する。	
展開科目	造形芸術特論	本講義・演習は、現代に求められている造形性や創造性とは何かを問う。現代社会の影響に対して身体的・感情的・実践的に反応し、社会と個人の関係を考える様々な造形芸術のあり方について学ぶ。造形芸術の歴史、創造と脳の関係、身体性やマイノリティーへの視座などを、造形を軸に概観する。さらに身体性への知識を造形的に発展させるためのワークショップを行う。受講者が創造する立場から芸術作品を理解し、社会や人間への意識を深め、新しい価値観を創造する力を養うよう促す。	講義8時間 演習7時間
展開科目	演劇学特論	シェイクスピア受容史研究を軸として能・狂言・歌舞伎・新劇・大衆演劇・小劇場演劇等の現代日本の多様な演劇形態(俳優・劇作家・演出家・劇団・劇場・演出等)の発達と展開を取り上げ、時代・社会の中で変化する演劇の課題・問題・存在意義について、鈴木忠志・浅利慶太・嵯川幸雄・野田秀樹・栗山民也等の演出家の演劇論・演出方法を事例分析により検討することによって、演劇学研究手法とともに創造的感性や表現・演出方法を習得する。特に近年注目されている地域性を活かして世界に発信していくグローバルな演出手法について焦点をあてるとともに、実際に劇場に足を運び、観劇を体験することによって現代社会における演劇の力や可能性や必要性について立体的・総合的に理解することを目指す。	
展開科目	マルチモーダル・コミュニケーション特論	本講義・演習では、人間のコミュニケーションをマルチモーダルコーパスおよびマルチモーダル分析の観点から研究するための先行研究を概観し、分析に必要なソフトウェアの使用法を実践的に扱う。 (オムニバス方式／全8回) (74 冬野美晴／6回) マルチモーダル分析の入門書(洋書)を輪読し、関連する論文を講読する。ELAN等のマルチモーダル分析に必要なソフトウェアの実習を行う。 (77 吉村理一／2回) モダリティ(Modality)に関する言語学の論文(和洋書)を輪読し、理論言語学の立場からマルチモーダル分析についての理解を深める。	オムニバス方式 講義8時間 演習7時間
展開科目	メディアデザインプレゼンテーション演習	各教員が特定の研究テーマを設定する。メディアデザインに関連する先行研究や文献資料、フィールドワーク等の調査を行い、研究方法を構築する。研究目的、調査内容、研究方法・計画等をまとめ、中間発表会で発表する。各テーマにおける問題発見・問題解決方法を見出し、自主的に研究を推進する力を養う。研究内容を他者に分かり易く簡潔に説明する能力、および他者からの質問を理解し、的確に答える能力を身に付ける。さらに、他者の発表を理解し、疑問点を的確に表現して質問する能力の育成を目的とする。	
展開科目	統計情報学	統計的仮説検定の基礎と実践を学ぶ。まず、統計的仮説検定の仕組みと意義を理解し、その有用性を理解する。その後、次の代表的ケースの具体的検定手法について学ぶ：母分散未知の母平均の検定、対応関係がある2標本の平均の差の検定(t検定、Sign test、Wilcoxon signed-ranks test)、対応関係がない2標本の平均の差の検定(F検定、t検定、Mann-Whitney U-test)、3つ以上の標本の平均の差に関する検定(ANOVA、Kruskal-Wallis test)と多重検定の補正(Bonferroni法)。さらに、ヒトの主観テストのための仮説検定も学ぶ。	
展開科目	時間生物学	生命現象の中には24時間周期で繰り返しおこる現象が知られており、概日リズムとよばれる。例えば寝起きのリズムやセミが夏の時期に毎朝羽化することがあげられる。概日リズムを扱う学問分野は時間生物学(Chronobiology)と呼ばれている。概日リズムという捉えがたい現象に対して現代の生物学と数理科学がどのように迫ってきたかを眺めることを通して、複雑な現象をどのようにとらえ解析するのか、その技法を学ぶ。	

展開科目	数理モデリングA	社会現象を記述する数理モデルを構築する際の基本理念を学び、数理モデルの具体的構築方法、解析方法、および解析結果の解釈作法を習得する。さらに社会現象を記述した古典的な数理モデルについて知る。具体的には囚人のジレンマと社会的ジレンマ（公共財ゲーム、軍拡競争）、繰り返し囚人のジレンマと人間関係ネットワークモデル、罰則や評判のモデル、持続可能な開発、感染症のモデルなどを取り上げる。大学初年次レベルの数学を前提とし、より高度な数学的手法について授業中に解説する。	隔年
展開科目	数理モデリングB	生命現象を記述する数理モデルを構築する際の基本理念を学び、数理モデルの具体的構築方法、解析方法、および解析結果の解釈作法を習得する。さらに生命現象を記述した古典的な数理モデル・理論について知る。具体的には個体数動態モデル（マルサス成長、ロジスティック成長、被食者・捕食者動態）、生物種多様性の維持機構、外来種侵入のモデル、適応進化と中立進化、女王アリと働きアリの分業を説明する血縁選択理論などを取り上げる。大学初年次レベルの数学を前提とし、より高度な数学的手法について授業で解説する。	隔年
展開科目	分子生物学	核酸やタンパク質等の生体分子の性質を講義で学び、DNA抽出、DNAのPCR増幅、塩基配列決定、ゲノム編集、遺伝子組換え、タンパク質発現等の分子生物学の手法を複数の演習を通じて実践的に習得する。目的の遺伝情報を取り出し、遺伝子多型や後成的変化を解析することで多様性を生み出す生物学的基盤を学ぶ。遺伝子工学や合成生物学的手法から、バイオテクノロジーの原理を理解する。講義と演習を交互におこなうことの相乗効果により、知識と技術の確実な定着を狙う。	講義4時間 演習20時間
展開科目	Curriculum and Management for Design Education	The aim of this subject is to allow students to reflect, explore and plan design education at university level through education theories and case studies. The knowledge and skills obtained from this course will be applicable for students who aspire to explore new possibilities for design education. Students from other specializations are also welcome in this course to explore new possibilities in design education to create the integrative learning of design. この科目の目的は、教育理論やケーススタディを通して、大学レベルでのデザイン教育を考察し、探求し、計画することができるようにすることです。本科目で得られた知識とスキルは、デザイン教育の新たな可能性を探求することを志す学生にも応用可能である。また、本科目では他の専門分野の学生も歓迎し、デザインの統合的な学びを創造するためのデザイン教育の新たな可能性を探る。	隔年
展開科目	Design in General Education	Design in Education explore the possibilities of design education as a form of general education. Design in general education has been extensively explained by Nigel Cross in the book Designerly Ways of Knowing. In this subject, students will explore prototype design learning programs for children as a form of general education. Design in Educationは、一般教育の一形態としてのデザイン教育の可能性を探ります。一般教育におけるデザインについては、ナイジェル・クロスが著書『Designerly Ways of Knowing』の中で広く解説しています。この科目では、一般教育の一形態としての子どもたちのためのプロトタイプデザイン学習プログラムを探る。	隔年
展開科目	バイオマテリアルエンジニアリング	生体システムは核酸やペプチド、タンパク質からなる高性能な生体分子機械から構成されている。これらの生体分子機械は自然がデザインした機械であり、自発的な形成プロセスを経て作り出される（自己組織化）。近年では、生体分子機械の優れた機能や形成プロセスは工学や医療、デザイン分野でも注目されており、その応用に向けた取り組みがなされている。本講義では、生体分子機械を構築するDNAやRNA、ペプチド、タンパク質の特徴を十分に理解し、これらをベースとした近年のナノテクノロジーおよび自然界のデザインプロセスの基礎を学ぶ。講義の最後には、習得した知識を基に、生体分子機械の将来的な応用についてグループ発表を行う。	講義11時間 演習5時間
展開科目	現代アート実践	近現代のアートを主軸としながら、分野横断的な知見を取り入れ、既存の枠にとらわれない表現のあり方を模索する。近年、目覚ましい発展や変化を遂げている美術やデザインの領域において重要と思われる表現について知識や理解を深め、自身の課題や興味を見つけ出し、それらを独自の方法で表現することを体得する。また、この授業では、作品制作だけではなく、作品をどのような場所でのように展示するのか、展覧会自体の企画や運営（キュレーション）にも意欲的に取り組むことが求められる。独自の視点から展覧会のあり方を再考し、自身の表現を社会へ向けて発信することを実践的に試みる。	
展開科目	生命とアート	芸術は、生命としての動物や人間のありかたを古来からその主題とし、それを作品制作の論理のうちに取り入れてきた。また近年では、分子生物学やバイオテクノロジーの進展に伴って、新たな表現の素材や表現の手法を芸術は模索している。そうした表現の理論、歴史と可能性について、実際に作品を制作することを含めて探求する。抽象的な理論と現実の制作、制作する身体を往復することによって、表現者・デザイナー者に固有な知の在り方を探求する。	

展開科目	情報編集デザイン	「編集」を「世の中に散在する物事を観察、収集し、独自の視点をもって分類・整理・再構築することにより新たな文脈を見出し価値を作り出す一連の作業」と定義することで、あらゆるものが編集活動の対象となる。この授業では、書籍やウェブサイトなどの従来の編集だけでなく、編集の考え方に基づくサービスデザイン、組織やコミュニティなどのデザイン、キューレーションなどに対象範囲を広げ、成果の表現までを学ぶ。このように広義の編集の方法論を学ぶとともに、応用可能性を追求し、演習を通してそれを実践するためのデザインスキルも身に付け、さらに帰納的に編集理論を理解することで、理論と実践力の両方を活用できるようになることを目標とする。	
展開科目	レジリエンスデザイン	人間が物理的・心理的負荷を受けた場合にそれを跳ね返そうとする動きが働く。それがレジリエンスであり、それを適切に働かせようとするのがレジリエンスデザインである。これらに関わる人間の行動の観察方法や分析方法を、行動的・物理的・心理的、更には生理的な側面から考える。それらを融合させる具体的な事例を検討し、実験方法のデザインなどを行う。またそれを実施し、仮説を形成し、さらなる本人権の設計を行い、エビデンスを現場でどう作っていくかの評価と設計の関係を学ぶ。	
展開科目	スペキュラティブデザイン	スペキュラティブは思索的なデザインであり先端的なデザインである。スペキュラティブデザインは「未来について考えるきっかけを提供する」ことを目的としている。ビジョン・フィロソフィー・テクノロジー・アウトプットを構成要素として、それらの構成により思索的に提案の文脈をつくる演習を行う。具体的な事例や実践を通し理解を深め、演習的に具体的なスペキュラティブデザイン・ビジョンデザイン。未来強制デザインの実務やその有り様のデザインを行う。	隔年
展開科目	デザイン・シビック	市民・生活者・消費者・当事者あるいはある一人の人のためのデザインとして、当事者は誰なのかから考え、問題発見・問題提議・問題解決のプロセスと構築する。そのための調査方法や表現方法を実践的に学び、具体的な表現を行う。そしてその次の実験や理解評価の方法を考え記述する。以上を実践的なデザイン活動として行う。ソサエタルなデザインとして、社会包摂デザインの方法論として、社会的処方デザインの方法論の構築も目指す。	隔年
展開科目	サステナブルデザイン	貧困、飢餓、環境保全など、人類が直面している社会的な課題に対しデザインはどのような貢献ができるのだろうか？ この授業では、SDGsの目標達成のために取り組まれている経済、社会、環境のバランスのとれた持続可能な開発の国内外の事例を学び、デザインで社会課題を解決するためのワークショップを実施する。課題を解決するためのアイデアの生み出し方、デザイン制作のプロセスを体験することで、学生自らが社会課題を解決するための具体的なスキルを学ぶ。（集中講義方式）	
展開科目	アート&リサーチ	芸術の研究というと、従来は作品の研究、あるいは作品の歴史的背景の研究が主流だったが、近年では、芸術の実践に目を向けた研究が広く行われるようになってきている。本科目では、アートやデザインの実践を研究・評価する際に役立つ方法を学ぶ。アートベースリサーチやアクションリサーチなどの新しい方法、量的研究と質的研究のハイブリッド型（混合研究法）を知ると同時に、アンケートやインタビューといった基本的な技法についても深く理解し、研究目的にあった効果的な方法を実践できるようにする。	
展開科目	文化政策	社会の中で実際にアートやデザインの活動に携わる際には、関連する政策の理解が不可欠である。本授業では、文化政策のしくみや歴史の変遷、海外の状況や日本の現状などを理解し、社会でアートやデザインのプロジェクトを展開する際に必要な知識やスキルを身につける。また、経済的価値以外の価値の概念やプロジェクトの様々な評価方法についても学び、政策と価値創造がどのように結びつくか、価値創造を重視するプロジェクトをどう評価すべきかを考える。	
展開科目	アーツマネジメント	アーツマネジメントとは、さまざまなジャンルの芸術実践と社会とのつなぎ手に関わる分野である。地域や社会の諸課題に対して芸術が果たす役割に対して注目が集まっている実情がある。このことを背景にし、この授業では、劇場・音楽堂、美術館、博物館などの芸術の場のみならず、障害者や高齢者などの抱える多様な社会的課題にアートがどのように関わっているのかを概観し、理想的なアーツマネジメントのあり方を検討する。座学のほか、実際のアーツマネジメントの現場に足を運ぶなどの実践的な教員も実施する予定である。	
展開科目	共生社会デザイン論	人と人、環境と人が持続的に共生していく上での現代社会の課題について検討を加え、それらを解決していく人間行動とそれをはぐくむ社会デザインを明らかにし、それを導くための政策的な課題を述べる。具体的な課題として、有機性資源の循環と自然エネルギーを取り上げる。それらが地域産業として成立できる地域の仕組み作りと企業と市民と自治体の行動と相互の連携について論じるとともに、その環境的社会的経済的影響を明らかにしそれらを大きくしていくための課題を検討する。	
展開科目	環境リスクマネジメント	Students will learn about the importance of environment risk management to provide them with a base to formulate and implement projects with proper risk assessments and action plans to protect individuals, enterprises and society from costly legal actions and damages associated with natural disasters. この授業では、費用のかかる訴訟問題や自然災害に関連する損害から、個人、企業、社会を守るための適切なリスク評価と行動計画を備えたプロジェクトを策定および実施するための基礎を考える環境リスクマネジメントの重要性について学ぶ。	

展開科目	デザイン哲学	真理と倫理と美を実現するデザインが学として成立する基礎について、哲学史における古典的な議論から最新の議論まで取り上げ、未来のデザインのあり方を展望する。新実証主義、サイバネティクス、ポスト構造主義、批判理論、リサーチ・スルー・デザインなどの理論について深く学び、現在自分が取り組んでいるデザイン課題が、学問の歴史やデザイン全体のうちでいかなる位置を占め、いかなる限界と可能性を持つのかを理解できるようにする。	
展開科目	美術史	共生可能な未来社会を考えるアプローチとしての美術史についての講義である。美術における様式の変遷の背後には、社会や産業・社会思想といったより広い、物質的ともいえる制度の変化がある。ルネサンス、バロック、新古典派、ロマン主義の時代の古典的な作品を現代の批評家がどのように論じているかを学ぶと同時に、個々の作品の分析を通じて、作品を支える「制度」を読み解く力、よりよい豊かな未来構築の方法を考える力、現代の社会の在り方をふまえて作品や表現を批評する力を身につける。	
展開科目	イメージ感性論	写真や映画から音響装置まで、視聴覚文化を横断するイメージについて理解を深めるため、古典ないし最新の理論についての読解や解説から出発し、それらをもとにメディアアートやデザインの作品分析を進める。ここで感性論と呼ぶ分野は、人文学的な立場から人間の身体や感覚に及ぼす作用を考察する立場を指す。それらに関連するテキストを批判的に読解し、具体的なデザインやアートの作品分析へと応用できるようになることが目的である。テキストは日本語ないし英語の文献を想定しているが、受講者の関心に合わせて調整する予定である。	
展開科目	デザインと日本A	デザインには国や地域によって個性がある。国際的なデザイン展開を図るためには、自国のデザインの強みを洞察・発信できることが欠かせない。一方で、他国のデザインの強みを知ることは視野を広げ、新しい価値の創出につながる。本科目では、国際的に注目される日本のデザインを取り上げ、その歴史や可能性を解説する。尚、全ての回において主担当教員が担当するが、様々なデザイン対象が網羅できるよう、また旬な話題が提供できるように、芸術工学府教員を中心に共同で講義を行う形式をとる。また、別科目「デザインと日本B」とは授業目的は同じであるが、取り上げるデザイン対象は異なる。	
展開科目	デザインと日本B	デザインには国や地域によって個性がある。国際的なデザイン展開を図るためには、自国のデザインの強みを洞察・発信できることが欠かせない。一方で、他国のデザインの強みを知ることは視野を広げ、新しい価値の創出につながる。本科目では、国際的に注目される日本のデザインを取り上げ、その歴史や可能性を解説する。尚、全ての回において主担当教員が担当するが、様々なデザイン対象が網羅できるよう、また旬な話題が提供できるように、芸術工学府教員を中心に共同で講義を行う形式をとる。また、別科目「デザインと日本A」とは授業目的は同じであるが、取り上げるデザイン対象は異なる。	
展開科目	アカデミックイングリッシュ	学界において国際的に活動・活躍するためには国際言語である英語のスキルが欠かせない。本科目では、将来、研究成果を国際ジャーナルや国際学会 Proceedings に学術論文を投稿することを想定し、英語による論文執筆に必要な基礎ライティングスキルを身に付ける。科学・工学系の学術論文の一般的な構成（題目、抄録、序論、方法、結果、考察、結論、図表など）を例にして、原稿を書く、見直すを繰り返しながら、適切な学術的文章にて論文が書けるよう訓練する。	
展開科目	インターンシップ I	企業、行政機関、公益法人、研究機関等において、1週間程度（30時間以上）の就業体験を行う。これまでに習得した知識・技術を、企業・官公庁・研究機関等の現場で実践し、今後において向上させるべきスキルへの気づきやキャリアに対する新たな視点の修得を図ることを目的とする。主指導教員との相談の上で、研修申請手続きを行う。職務の実態、職場の人間関係、組織の運営等、実社会のさまざまな側面に自ら触れた経験を、その後の学習活動や就職活動に有効に活用できるようにする。	
展開科目	インターンシップ II	インターンシップ I の履修を前提とする。企業、行政機関、公益法人、研究機関等において、1週間程度（30時間以上）の就業体験を行う。これまでに習得した知識・技術を、企業・官公庁・研究機関等の現場で実践し、今後において向上させるべきスキルへの気づきやキャリアに対する新たな視点の修得を図ることを目的とする。主指導教員との相談の上で、研修申請手続きを行う。職務の実態、職場の人間関係、組織の運営等、実社会のさまざまな側面に自ら触れた経験を、その後の学習活動や就職活動に有効に活用できるようにする。	
展開科目	インターンシップ III	企業、行政機関、公益法人、研究機関等において、1週間程度（60時間以上）の就業体験を行う。これまでに習得した知識・技術を、企業・官公庁・研究機関等の現場で実践し、今後において向上させるべきスキルへの気づきやキャリアに対する新たな視点の修得を図ることを目的とする。主指導教員との相談の上で、研修申請手続きを行う。職務の実態、職場の人間関係、組織の運営等、実社会のさまざまな側面に自ら触れた経験を、その後の学習活動や就職活動に有効に活用できるようにする。	

展開科目	芸術工学特別プロジェクトⅠ	人間や社会に対する深い洞察、製品・環境・サービス・テクノロジーなどの多様なデザインと、ビジネスとアントレプレナーシップを統合するストラテジックデザイン等に関する文献調査やフィールドワーク調査、セミナー・ワークショップ等への参加・発表・討議を通して、デザインの社会実装・ビジネスに関わる戦略やそれらを評価・分析して、起業・実践を行うための方法等に関する最新情報を集約し、社会や国内外の現状を理解するための能力を身につける。	
展開科目	芸術工学特別プロジェクトⅡ	環境設計の諸分野の専門的知識や調査・研究手法、実践的な課題の解決や創造的なデザイン、国際的建築家資格の取得に必要な知識等に関する文献調査やフィールドワーク調査、セミナー・ワークショップ等への参加・発表・討議を通して、建築・景観・社会システムのデザイン、サステナブル・デザインを可能とする安全性・健康性・機能性・快適性を実現する技術等に関する国内外の最新情報を集約し、社会や国内外の現状を理解するための能力を身につける。	
展開科目	芸術工学特別プロジェクトⅢ	音響設計の専門家として必要な、音に対する感性と音に関連する文化、環境、情報のいずれかの分野に関する専門知識やそれらの具体的な課題やその解決方法等に関する文献調査やフィールドワーク調査、セミナー・ワークショップ等への参加・発表・討議を通して、人間に適合した音環境の創出する音響設計、音響情報の高品質化、音に関する芸術文化等に関する国内外の最新情報を集約し、社会や国内外の現状を理解するための能力を身につける。	
展開科目	芸術工学特別プロジェクトⅣ	生活の在り方を構想し、安心安全で魅力的な生活の実現のためのモノ・サービス・システム・生活環境を創造するために必要な、人間の特性、科学技術、ライフスケープデザイン等に関する文献調査やフィールドワーク調査、セミナー・ワークショップ等への参加・発表・討議を通して、人間の生理的・形態的・行動的・心理的特性、人間の感性・創造性を踏まえた、安全安心で魅力的なモノ・サービス・システム・生活環境等に関する国内外の最新情報を集約し、社会や国内外の現状を理解するための能力を身につける。	
展開科目	芸術工学特別プロジェクトⅤ	人を知るための視覚や心理、表現を知るための芸術、視覚伝達、コンテンツ、人工環境を知るためのメディアデータサイエンス、インタラクション、コンピュータビジョン、メカニクス、伝達と共有を知るためのコミュニケーション、社会科学に関する文献調査やフィールドワーク調査、セミナー・ワークショップ等への参加・発表・討議を通して、メディアテクノロジーによるデジタルコミュニケーション、データサイエンス、ネットワーク等に関する国内外の最新情報を集約し、社会や国内外の現状を理解するための能力を身につける。	
展開科目	芸術工学特別プロジェクトⅥ	さまざまな生命体が共生する社会を構想するための基盤となる生命情報科学・ライフエンジニアリング・社会科学、またはそれらを創造的に展開させる能力を涵養するアート・デザインの技能、またはそれらを支える思想哲学等に関する文献調査やフィールドワーク調査、セミナー・ワークショップ等への参加・発表・討議を通して、生命情報科学、生命工学、アート・デザイン、デザイン文化等に関する国内外の最新情報を集約し、社会や国内外の現状を理解するための能力を身につける。	
展開科目	芸術工学特別プロジェクトⅦ	海外の大学協定校等との国際共同教育プロジェクトでの文献調査やフィールドワーク調査、セミナー・ワークショップ等への参加・発表・討議を通して、デザインに関連する物事の原理、仕組み、技術等に関する国内外の先端研究を学び、自らの専門性を深化するためのデザインスキルや知識の習得、専門分野における国際的実践力の養成を図る。また、他大学の学生と合同のチームでプロジェクトに取り組むことで、コミュニケーション及びディスカッション能力の向上を図る。	
展開科目	芸術工学特別プロジェクトⅧ	海外の大学協定校等との国際共同教育プロジェクトでの文献調査やフィールドワーク調査、セミナー・ワークショップ等への参加・発表・討議を通して、デザインに関連する物事の原理、仕組み、技術等に関する国内外の先端研究を学び、従来のデザイン領域の枠を超えた広範なデザインスキルや知識の習得、専門分野における国際的実践力の養成を図る。また、他大学の学生と合同のチームでプロジェクトに取り組むことで、コミュニケーション及びディスカッション能力の向上を図る。	

授 業 科 目 の 概 要			
(大学院芸術工学府芸術工学専攻 博士後期課程)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
論文作成関連科目	リサーチ研修 I	<p>自身の研究成果に基づき、国際学術誌への投稿を目指した英語の論文執筆を行うプロセスを演習形式にて学ぶ。主指導教員を中心とする指導教員グループによる共同指導により、論文の構成、英語による記述法だけでなく、既往論文レビューの方法、投稿する雑誌の選択など、研究成果として発表するための一連のプロセスを学ぶ。</p> <p>(1 谷 正和) 環境人類学に関連した研究 (2 伊藤 裕之) 心理学に関連した研究 (3 井上 滋樹) 人間中心のデザイン、社会課題を解決するデザイン、SDGsに関連した研究 (4 伊原 久裕) グラフィックデザインに関連した研究 (5 鶴飼 哲矢) 建築設計・デザイン、都市デザインに関連した研究 (6 大井 尚行) 都市・建築環境学、環境心理学に関連した研究 (7 尾方 義人) インダストリアルデザイン、プロダクトデザイン、デザイン学、デザイン方法に関連した研究 (8 尾本 章) 応用音響工学に関連した研究 (9 包清 博之) ランドスケープ・マネジメント、緑地環境設計に関連した研究 (10 鎗木 時彦) 音声情報処理に関連した研究 (11 金 大雄) 映像コンテンツデザインに関連した研究 (12 古賀 徹) 哲学、倫理学、美学、デザイン原論に関連した研究 (13 近藤(笠利) 加代子) 環境政策、環境社会学、環境経済学、社会思想史に関連した研究 (14 須長 正治) 色彩・視覚科学に関連した研究 (15 竹之内 和樹) クリエーティブデザイン、メカニクスデザイン、図形科学に関連した研究 (16 田上 健一) 建築計画・建築設計に関連した研究 (17 鶴野 玲治) コンピュータグラフィクスに関連した研究 (18 知足 美加子) 彫刻に関連した研究 (19 原 健二) 視覚情報処理に関連した研究 (20 平井 康之) インクルーシブデザイン、デザイン思考、オフィスデザイン、プロダクトデザイン、インテリアデザインに関連した研究 (21 前田 享史) 生理人類学、環境人間工学、温熱生理学に関連した研究 (22 村木 里志) 福祉人間工学に関連した研究 (23 矢向 正人) 音楽学、音楽美学に関連した研究 (24 朝廣 和夫) 緑地保全学に関連した研究 (25 麻生 典) 知的財産法に関連した研究 (26 石井 達郎) 映像表現、映像提示デザイン、デジタルコンテンツデザインに関連した研究 (27 伊藤 浩史) 時間生物学、非線形動力学に関連した研究 (28 井上 光平) パターン認識、画像処理、コンピュータビジョンに関連した研究 (29 井上 朝雄) 建築構法計画、建築生産に関連した研究</p>	

- (30 上田 和夫) 聴覚心理学、聴覚認知心理学、知覚心理学、
実験心理学に関連した研究
- (31 牛尼 剛聡) サイバー空間デザイン、コンテンツ環境デザインに
関連した研究
- (32 大島 久雄) 演劇学に関連した研究
- (33 小野 直樹) デジタル画像の処理と認識に関連した研究
- (34 加藤 悠希) 日本建築史に関連した研究
- (35 河原 一彦) 音響システムの性能評価に関する研究に関連した研究
- (36 齋藤 俊文) コミュニケーション・デザイン研究、ミュージアム
研究、映画表現研究(日本映画ペンクラブ会員)、
サブカルチャー研究、広告表現研究、クリエイティブ
ディレクション、アート/ソーシャルプロジェクト、
Technological Singularity に関連した研究
- (37 鮫島 俊哉) 音響工学に関連した研究
- (38 城 一裕) メディアアート、パーソナルファブリケーションに
関連した研究
- (39 杉本 美貴) インドストリアルデザイン、プロダクトデザイン、
コンセプチュアルデザイン、日本美に関連した研究
- (40 妹尾 武治) 心理学に関連した研究
- (41 高田 正幸) 音響デザイン学、音響環境学に関連した研究
- (42 高取 千佳) ランドスケープ・エコロジー、都市計画、緑地計画、
土地利用計画、都市環境計画・デザインに関連した
研究
- (43 田村 良一) デザインマネジメント、デザインシステムに関連した
研究
- (44 徳久 悟) サービス・デザイン、イノベーション・マネジメン
ト、
メディア・デザインに関連した研究
- (45 中村 美亜) 芸術社会学に関連した研究
- (46 西田 (掘) 紘子) 音楽学(音楽理論・分析、西洋音楽史、
音楽文化)に関連した研究
- (47 早瀬 (古木) 百合子) 環境工学に関連した研究
- (48 平松 千尋) 視覚生理心理学に関連した研究
- (49 福島 綾子) 文化財学に関連した研究
- (50 藤 智亮) 設計工学、機能工学に関連した研究
- (51 Hall Michael) 英語、環境リスクマネジメントに関連した研究
- (52 松隈 浩之) デジタル映像デザインに関連した研究
- (53 松前 あかね) 創造性、知識科学、社会心理学、場のデザイン、
関係性のデザイン、ソーシャルイノベーションに
関連した研究
- (54 丸山 修) 計算生物学、バイオインフォマティクスに関連した研
究
- (55 山内 勝也) 心理音響学、騒音環境学に関連した研究
- (56 吉岡 智和) 建築構造に関連した研究
- (57 吉永 幸靖) 画像処理、パターン認識に関連した研究
- (58 Remijn Gerard Bastiaan) 知覚心理学に関連した研究
- (59 今坂 智子) レーザーイオン化質量分析、超短パルス発生、
質量分析計の開発に関連した研究
- (60 張 彦芳) ユニバーサルデザイン、ソーシャルデザインに
関連した研究
- (61 西村 貴孝) 生理人類学に関連した研究
- (62 川本 陽一) 都市環境工学に関連した研究

		<p>(63 工藤 真生) 視覚伝達デザイン、サイン計画、ピクトグラムに関連した研究</p> <p>(64 栗山 斉) アート、基礎デザインに関連した研究</p> <p>(65 澤井 賢一) 数理工学に関連した研究</p> <p>(66 関 元秀) 数理・統計モデリングに関連した研究</p> <p>(67 Jamison Daryl Steven) 作曲に関連した研究</p> <p>(68 冬野 美晴) メディアと教育、メディアと言語文化、認知言語学、コーパス言語学、英語教育学に関連した研究</p> <p>(69 村上 泰樹) 聴覚情報処理に関連した研究</p> <p>(70 森本 有紀) コンピュータグラフィックスに関連した研究</p> <p>(71 吉村 理一) 英語学・言語学 (生成文法) / 異文化間コミュニケーションに関連した研究</p> <p>(72 Loh Ping Yeap) 人間工学、作業療法学に関連した研究</p> <p>(73 樋口 重和) 生理人類学、精神生理学、時間生物学、感性科学に関連した研究</p> <p>(74 池田 美奈子) デザイン理論、デザイン史、情報編集デザインに関連した研究</p> <p>(75 曾我部 春香) 公共の場や空間に関わるデザインに関連した研究</p>	
<p>論文作成関連科目</p>	<p>リサーチ研修Ⅱ</p>	<p>自身の研究分野とは異なる関連分野の複数教員による共同指導を受けることにより、論文構成、論文の記述法、研究成果発表のプロセスを異なる観点から精査し、論文作成のための技術、既往研究レビューの技術、研究プロポーザルの作成技術等を向上させ、研究成果として発表するためのプロセスの完成度を高める。</p> <p>(1 谷 正和) 環境人類学に関連した研究</p> <p>(2 伊藤 裕之) 心理学に関連した研究</p> <p>(3 井上 滋樹) 人間中心のデザイン、社会課題を解決するデザイン、SDGsに関連した研究</p> <p>(4 伊原 久裕) グラフィックデザインに関連した研究</p> <p>(5 鶴飼 哲矢) 建築設計・デザイン、都市デザインに関連した研究</p> <p>(6 大井 尚行) 都市・建築環境学、環境心理学に関連した研究</p> <p>(7 尾方 義人) インダストリアルデザイン、プロダクトデザイン、デザイン学、デザイン方法に関連した研究</p> <p>(8 尾本 章) 応用音響工学に関連した研究</p> <p>(9 包清 博之) ランドスケープ・マネジメント、緑地環境設計に関連した研究</p> <p>(10 鏑木 時彦) 音声情報処理に関連した研究</p> <p>(11 金 大雄) 映像コンテンツデザインに関連した研究</p> <p>(12 古賀 徹) 哲学、倫理学、美学、デザイン原論に関連した研究</p> <p>(13 近藤(笠利) 加代子) 環境政策、環境社会学、環境経済学、社会思想史に関連した研究</p> <p>(14 須長 正治) 色彩・視覚科学に関連した研究</p> <p>(15 竹之内 和樹) クリエイティブデザイン、メカニクスデザイン、図形科学に関連した研究</p> <p>(16 田上 健一) 建築計画・建築設計に関連した研究</p> <p>(17 鶴野 玲治) コンピュータグラフィックスに関連した研究</p> <p>(18 知足 美加子) 彫刻に関連した研究</p> <p>(19 原 健二) 視覚情報処理に関連した研究</p> <p>(20 平井 康之) インクルーシブデザイン、デザイン思考、オフィスデザイン、プロダクトデザイン、インテリアデザインに関連した研究</p> <p>(21 前田 享史) 生理人類学、環境人間工学、温熱生理学に関連した研究</p>	

- (22 村木 里志) 福祉人間工学に関連した研究
- (23 矢向 正人) 音楽学、音楽美学に関連した研究
- (24 朝廣 和夫) 緑地保全学に関連した研究
- (25 麻生 典) 知的財産法に関連した研究
- (26 石井 達郎) 映像表現、映像提示デザイン、デジタルコンテンツデザインに関連した研究
- (27 伊藤 浩史) 時間生物学、非線形動力学に関連した研究
- (28 井上 光平) パターン認識、画像処理、コンピュータビジョンに関連した研究
- (29 井上 朝雄) 建築構法計画、建築生産に関連した研究
- (30 上田 和夫) 聴覚心理学、聴覚認知心理学、知覚心理学、実験心理学に関連した研究
- (31 牛尼 剛聡) サイバー空間デザイン、コンテンツ環境デザインに関連した研究
- (32 大島 久雄) 演劇学に関連した研究
- (33 小野 直樹) デジタル画像の処理と認識に関連した研究
- (34 加藤 悠希) 日本建築史に関連した研究
- (35 河原 一彦) 音響システムの性能評価に関する研究に関連した研究
- (36 齋藤 俊文) コミュニケーション・デザイン研究、ミュージアム研究、映画表現研究(日本映画ペンクラブ会員)、サブカルチャー研究、広告表現研究、クリエイティブディレクション、アート/ソーシャルプロジェクト、Technological Singularity に関連した研究
- (37 鮫島 俊哉) 音響工学に関連した研究
- (38 城 一裕) メディアアート、パーソナルファブリケーションに関連した研究
- (39 杉本 美貴) インダストリアルデザイン、プロダクトデザイン、コンセプトチュアルデザイン、日本美に関連した研究
- (40 妹尾 武治) 心理学に関連した研究
- (41 高田 正幸) 音響デザイン学、音響環境学に関連した研究
- (42 高取 千佳) ランドスケープ・エコロジー、都市計画、緑地計画、土地利用計画、都市環境計画・デザインに関連した研究
- (43 田村 良一) デザインマネジメント、デザインシステムに関連した研究
- (44 徳久 悟) サービス・デザイン、イノベーション・マネジメント、
- (45 中村 美亜) デザインに関連した研究
芸術社会学に関連した研究
- (46 西田(堀) 紘子) 音楽学(音楽理論・分析、西洋音楽史、音楽文化)に関連した研究
- (47 早瀬(古木) 百合子) 環境工学に関連した研究
- (48 平松 千尋) 視覚生理心理学に関連した研究
- (49 福島 綾子) 文化財学に関連した研究
- (50 藤 智亮) 設計工学、機能工学に関連した研究
- (51 Hall Michael) 英語、環境リスクマネジメントに関連した研究
- (52 松隈 浩之) デジタル映像デザインに関連した研究
- (53 松前 あかね) 創造性、知識科学、社会心理学、場のデザイン、関係性のデザイン、ソーシャルイノベーションに関連した研究
- (54 丸山 修) 計算生物学、バイオインフォマティクスに関連した研究
- (55 山内 勝也) 心理音響学、騒音環境学に関連した研究
- (56 吉岡 智和) 建築構造に関連した研究

		<p>(57 吉永 幸靖) 画像処理、パターン認識に関連した研究</p> <p>(58 Remijn Gerard Bastiaan) 知覚心理学に関連した研究</p> <p>(59 今坂 智子) レーザーイオン化質量分析、超短パルス発生、質量分析計の開発に関連した研究</p> <p>(60 張 彦芳) ユニバーサルデザイン、ソーシャルデザインに関連した研究</p> <p>(61 西村 貴孝) 生理人類学に関連した研究</p> <p>(62 川本 陽一) 都市環境工学に関連した研究</p> <p>(63 工藤 真生) 視覚伝達デザイン、サイン計画、ピクトグラムに関連した研究</p> <p>(64 栗山 齊) アート、基礎デザインに関連した研究</p> <p>(65 澤井 賢一) 数理工学に関連した研究</p> <p>(66 関 元秀) 数理・統計モデリングに関連した研究</p> <p>(67 Jamison Daryl Steven) 作曲に関連した研究</p> <p>(68 冬野 美晴) メディアと教育、メディアと言語文化、認知言語学、コーパス言語学、英語教育学に関連した研究</p> <p>(69 村上 泰樹) 聴覚情報処理に関連した研究</p> <p>(70 森本 有紀) コンピュータグラフィックスに関連した研究</p> <p>(71 吉村 理一) 英語学・言語学 (生成文法) / 異文化間コミュニケーションに関連した研究</p> <p>(72 Loh Ping Yeap) 人間工学、作業療法学に関連した研究</p> <p>(73 樋口 重和) 生理人類学、精神生理学、時間生物学、感性科学に関連した研究</p> <p>(74 池田 美奈子) デザイン理論、デザイン史、情報編集デザインに関連した研究</p> <p>(75 曾我部 春香) 公共の場や空間に関わるデザインに関連した研究</p>	
<p>研究 指導 科目</p>	<p>リサーチ プロジェクト I</p>	<p>博士論文研究推進のために、自己の分野に関連したテーマ設定、調査、分析を行い、主指導教員および指導教員グループでのディスカッションにより、研究の深化を図る。また、自らの研究テーマに基づく調査、解析の結果を整理して、プレゼンテーションの準備を進め、主指導教員や共同研究者とのディスカッションにより研究の深化を図る。</p> <p>(1 谷 正和) 環境人類学に関連した研究</p> <p>(2 伊藤 裕之) 心理学に関連した研究</p> <p>(3 井上 滋樹) 人間中心のデザイン、社会課題を解決するデザイン、SDGsに関連した研究</p> <p>(4 伊原 久裕) グラフィックデザインに関連した研究</p> <p>(5 鶴飼 哲矢) 建築設計・デザイン、都市デザインに関連した研究</p> <p>(6 大井 尚行) 都市・建築環境学、環境心理学に関連した研究</p> <p>(7 尾方 義人) インダストリアルデザイン、プロダクトデザイン、デザイン学、デザイン方法に関連した研究</p> <p>(8 尾本 章) 応用音響工学に関連した研究</p> <p>(9 包清 博之) ランドスケープ・マネジメント、緑地環境設計に関連した研究</p> <p>(10 鎗木 時彦) 音声情報処理に関連した研究</p> <p>(11 金 大雄) 映像コンテンツデザインに関連した研究</p> <p>(12 古賀 徹) 哲学、倫理学、美学、デザイン原論に関連した研究</p> <p>(13 近藤(笠利) 加代子) 環境政策、環境社会学、環境経済学、社会思想史に関連した研究</p> <p>(14 須長 正治) 色彩・視覚科学に関連した研究</p> <p>(15 竹之内 和樹) クリエイティブデザイン、メカニクスデザイン、図形科学に関連した研究</p>	

- (16 田上 健一) 建築計画・建築設計に関連した研究
- (17 鶴野 玲治) コンピュータグラフィクスに関連した研究
- (18 知足 美加子) 彫刻に関連した研究
- (19 原 健二) 視覚情報処理に関連した研究
- (20 平井 康之) インクルーシブデザイン、デザイン思考、
オフィスデザイン、プロダクトデザイン、
インテリアデザインに関連した研究
- (21 前田 享史) 生理人類学、環境人間工学、温熱生理学に関連した
研究
- (22 村木 里志) 福祉人間工学に関連した研究
- (23 矢向 正人) 音楽学、音楽美学に関連した研究
- (24 朝廣 和夫) 緑地保全学に関連した研究
- (25 麻生 典) 知的財産法に関連した研究
- (26 石井 達郎) 映像表現、映像提示デザイン、デジタルコンテンツ
デザインに関連した研究
- (27 伊藤 浩史) 時間生物学、非線形動力学に関連した研究
- (28 井上 光平) パターン認識、画像処理、コンピュータビジョンに
関連した研究
- (29 井上 朝雄) 建築構法計画、建築生産に関連した研究
- (30 上田 和夫) 聴覚心理学、聴覚認知心理学、知覚心理学、
実験心理学に関連した研究
- (31 牛尼 剛聡) サイバー空間デザイン、コンテンツ環境デザインに
関連した研究
- (32 大島 久雄) 演劇学に関連した研究
- (33 小野 直樹) デジタル画像の処理と認識に関連した研究
- (34 加藤 悠希) 日本建築史に関連した研究
- (35 河原 一彦) 音響システムの性能評価に関する研究に関連した研究
- (36 齋藤 俊文) コミュニケーション・デザイン研究、ミュージアム
研究、映画表現研究(日本映画ペンクラブ会員)、
サブカルチャー研究、広告表現研究、クリエイティブ
ディレクション、アート/ソーシャルプロジェクト、
Technological Singularity に関連した研究
- (37 鮫島 俊哉) 音響工学に関連した研究
- (38 城 一裕) メディアアート、パーソナルファブリケーションに
関連した研究
- (39 杉本 美貴) インダストリアルデザイン、プロダクトデザイン、
コンセプチュアルデザイン、日本美に関連した研究
- (40 妹尾 武治) 心理学に関連した研究
- (41 高田 正幸) 音響デザイン学、音響環境学に関連した研究
- (42 高取 千佳) ランドスケープ・エコロジー、都市計画、緑地計画、
土地利用計画、都市環境計画・デザインに関連した
研究
- (43 田村 良一) デザインマネジメント、デザインシステムに関連した
研究
- (44 徳久 悟) サービス・デザイン、イノベーション・マネジメン
ト、
- (45 中村 美亜) メディア・デザインに関連した研究
芸術社会学に関連した研究
- (46 西田 (掘) 紘子) 音楽学(音楽理論・分析、西洋音楽史、
音楽文化)に関連した研究
- (47 早濑 (古木) 百合子) 環境工学に関連した研究
- (48 平松 千尋) 視覚生理心理学に関連した研究
- (49 福島 綾子) 文化財学に関連した研究

		<p>(50 藤 智亮) 設計工学、機能工学に関連した研究</p> <p>(51 Hall Michael) 英語、環境リスクマネジメントに関連した研究</p> <p>(52 松隈 浩之) デジタル映像デザインに関連した研究</p> <p>(53 松前 あかね) 創造性、知識科学、社会心理学、場のデザイン、関係性のデザイン、ソーシャルイノベーションに関連した研究</p> <p>(54 丸山 修) 計算生物学、バイオインフォマティクスに関連した研究</p> <p>(55 山内 勝也) 心理音響学、騒音環境学に関連した研究</p> <p>(56 吉岡 智和) 建築構造に関連した研究</p> <p>(57 吉永 幸靖) 画像処理、パターン認識に関連した研究</p> <p>(58 Remijn Gerard Bastiaan) 知覚心理学に関連した研究</p> <p>(59 今坂 智子) レーザーイオン化質量分析、超短パルス発生、質量分析計の開発に関連した研究</p> <p>(60 張 彦芳) ユニバーサルデザイン、ソーシャルデザインに関連した研究</p> <p>(61 西村 貴孝) 生理人類学に関連した研究</p> <p>(62 川本 陽一) 都市環境工学に関連した研究</p> <p>(63 工藤 真生) 視覚伝達デザイン、サイン計画、ピクトグラムに関連した研究</p> <p>(64 栗山 齊) アート、基礎デザインに関連した研究</p> <p>(65 澤井 賢一) 数理工学に関連した研究</p> <p>(66 関 元秀) 数理・統計モデリングに関連した研究</p> <p>(67 Jamison Daryl Steven) 作曲に関連した研究</p> <p>(68 冬野 美晴) メディアと教育、メディアと言語文化、認知言語学、コーパス言語学、英語教育学に関連した研究</p> <p>(69 村上 泰樹) 聴覚情報処理に関連した研究</p> <p>(70 森本 有紀) コンピュータグラフィックスに関連した研究</p> <p>(71 吉村 理一) 英語学・言語学 (生成文法) / 異文化間コミュニケーションに関連した研究</p> <p>(72 Loh Ping Yeap) 人間工学、作業療法学に関連した研究</p> <p>(73 樋口 重和) 生理人類学、精神生理学、時間生物学、感性科学に関連した研究</p> <p>(74 池田 美奈子) デザイン理論、デザイン史、情報編集デザインに関連した研究</p> <p>(75 曾我部 春香) 公共の場や空間に関わるデザインに関連した研究</p>	
<p>研究 指導 科目</p>	<p>リサーチ プロジェクトⅡ</p>	<p>博士論文研究と関連しつつも直接的には異なる分野において、テーマ設定、調査、分析を行い、指導教員グループ並びに異分野の研究者とのディスカッションにより、研究の深化を図る。また、自らの研究テーマに基づく調査、解析の結果を整理して、プレゼンテーションの準備を進め、主指導教員や共同研究者とのディスカッションにより研究の深化を図る。</p> <p>(1 谷 正和) 環境人類学に関連した研究</p> <p>(2 伊藤 裕之) 心理学に関連した研究</p> <p>(3 井上 滋樹) 人間中心のデザイン、社会課題を解決するデザイン、SDGsに関連した研究</p> <p>(4 伊原 久裕) グラフィックデザインに関連した研究</p> <p>(5 鶴飼 哲矢) 建築設計・デザイン、都市デザインに関連した研究</p> <p>(6 大井 尚行) 都市・建築環境学、環境心理学に関連した研究</p> <p>(7 尾方 義人) インドストリアルデザイン、プロダクトデザイン、デザイン学、デザイン方法に関連した研究</p> <p>(8 尾本 章) 応用音響工学に関連した研究</p>	

- (9 包清 博之) ランドスケープ・マネジメント、緑地環境設計に関連した研究
- (10 鎗木 時彦) 音声情報処理に関連した研究
- (11 金 大雄) 映像コンテンツデザインに関連した研究
- (12 古賀 徹) 哲学、倫理学、美学、デザイン原論に関連した研究
- (13 近藤(笠利) 加代子) 環境政策、環境社会学、環境経済学、社会思想史に関連した研究
- (14 須長 正治) 色彩・視覚科学に関連した研究
- (15 竹之内 和樹) クリエーティブデザイン、メカニクスデザイン、図形科学に関連した研究
- (16 田上 健一) 建築計画・建築設計に関連した研究
- (17 鶴野 玲治) コンピュータグラフィクスに関連した研究
- (18 知足 美加子) 彫刻に関連した研究
- (19 原 健二) 視覚情報処理に関連した研究
- (20 平井 康之) インクルーシブデザイン、デザイン思考、オフィスデザイン、プロダクトデザイン、インテリアデザインに関連した研究
- (21 前田 享史) 生理人類学、環境人間工学、温熱生理学に関連した研究
- (22 村木 里志) 福祉人間工学に関連した研究
- (23 矢向 正人) 音楽学、音楽美学に関連した研究
- (24 朝廣 和夫) 緑地保全学に関連した研究
- (25 麻生 典) 知的財産法に関連した研究
- (26 石井 達郎) 映像表現、映像提示デザイン、デジタルコンテンツデザインに関連した研究
- (27 伊藤 浩史) 時間生物学、非線形動力学に関連した研究
- (28 井上 光平) パターン認識、画像処理、コンピュータビジョンに関連した研究
- (29 井上 朝雄) 建築構法計画、建築生産に関連した研究
- (30 上田 和夫) 聴覚心理学、聴覚認知心理学、知覚心理学、実験心理学に関連した研究
- (31 牛尼 剛聡) サイバー空間デザイン、コンテンツ環境デザインに関連した研究
- (32 大島 久雄) 演劇学に関連した研究
- (33 小野 直樹) デジタル画像の処理と認識に関連した研究
- (34 加藤 悠希) 日本建築史に関連した研究
- (35 河原 一彦) 音響システムの性能評価に関する研究に関連した研究
- (36 齋藤 俊文) コミュニケーション・デザイン研究、ミュージアム研究、映画表現研究(日本映画ペンクラブ会員)、サブカルチャー研究、広告表現研究、クリエイティブディレクション、アート/ソーシャルプロジェクト、Technological Singularity に関連した研究
- (37 鮫島 俊哉) 音響工学に関連した研究
- (38 城 一裕) メディアアート、パーソナルファブリケーションに関連した研究
- (39 杉本 美貴) インダストリアルデザイン、プロダクトデザイン、コンセプチュアルデザイン、日本美に関連した研究
- (40 妹尾 武治) 心理学に関連した研究
- (41 高田 正幸) 音響デザイン学、音響環境学に関連した研究
- (42 高取 千佳) ランドスケープ・エコロジー、都市計画、緑地計画、土地利用計画、都市環境計画・デザインに関連した研究

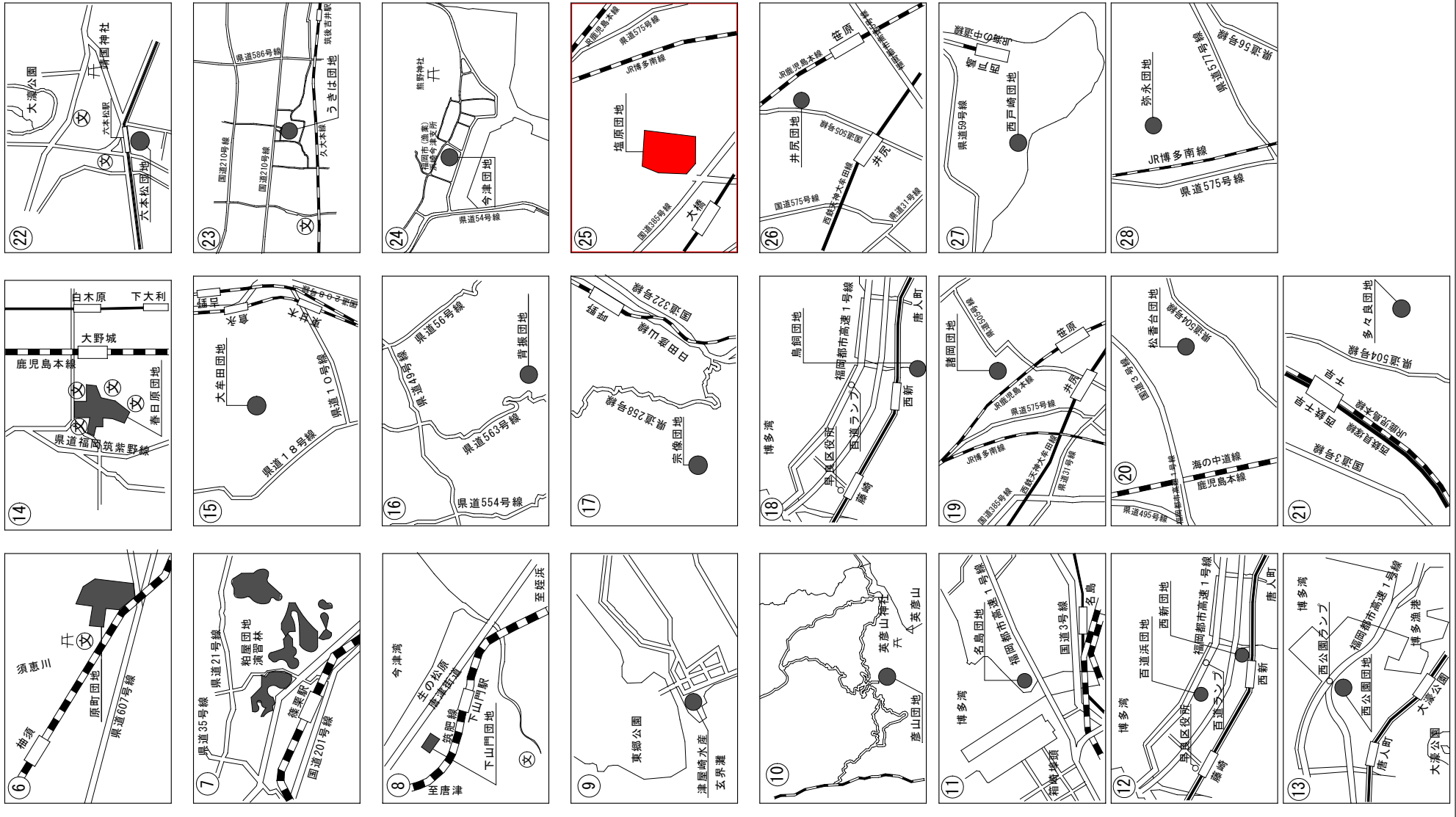
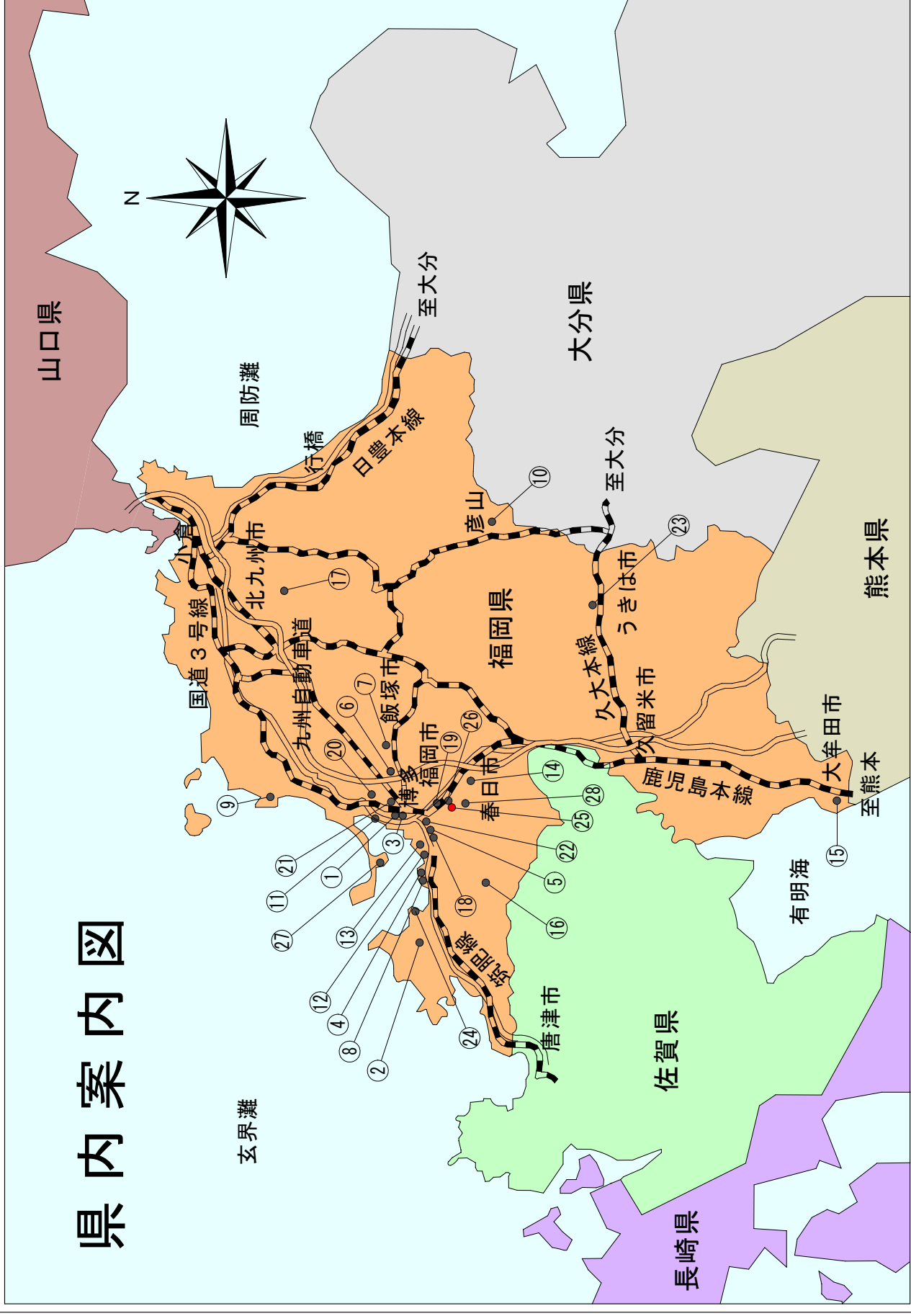
	(43 田村 良一)	デザインマネジメント、デザインシステムに関連した研究
	(44 徳久 悟)	サービス・デザイン、イノベーション・マネジメント、
	(45 中村 美亜)	メディア・デザインに関連した研究 芸術社会学に関連した研究
	(46 西田 (掘) 紘子)	音楽学 (音楽理論・分析、西洋音楽史、 音楽文化) に関連した研究
	(47 早瀬 (古木) 百合子)	環境工学に関連した研究
	(48 平松 千尋)	視覚生理心理学に関連した研究
	(49 福島 綾子)	文化財学に関連した研究
	(50 藤 智亮)	設計工学、機能工学に関連した研究
	(51 Hall Michael)	英語、環境リスクマネジメントに関連した研究
	(52 松隈 浩之)	デジタル映像デザインに関連した研究
	(53 松前 あかね)	創造性、知識科学、社会心理学、場のデザイン、 関係性のデザイン、ソーシャルイノベーションに 関連した研究
	(54 丸山 修)	計算生物学、バイオインフォマティクスに関連した研 究
	(55 山内 勝也)	心理音響学、騒音環境学に関連した研究
	(56 吉岡 智和)	建築構造に関連した研究
	(57 吉永 幸靖)	画像処理、パターン認識に関連した研究
	(58 Remijn Gerard Bastiaan)	知覚心理学に関連した研究
	(59 今坂 智子)	レーザーイオン化質量分析、超短パルス発生、 質量分析計の開発に関連した研究
	(60 張 彦芳)	ユニバーサルデザイン、ソーシャルデザインに 関連した研究
	(61 西村 貴孝)	生理人類学に関連した研究
	(62 川本 陽一)	都市環境工学に関連した研究
	(63 工藤 真生)	視覚伝達デザイン、サイン計画、ピクトグラムに 関連した研究
	(64 栗山 斉)	アート、基礎デザインに関連した研究
	(65 澤井 賢一)	数理工学に関連した研究
	(66 関 元秀)	数理・統計モデリングに関連した研究
	(67 Jamison Daryl Steven)	作曲に関連した研究
	(68 冬野 美晴)	メディアと教育、メディアと言語文化、認知言語学、 コーパス言語学、英語教育学に関連した研究
	(69 村上 泰樹)	聴覚情報処理に関連した研究
	(70 森本 有紀)	コンピュータグラフィックスに関連した研究
	(71 吉村 理一)	英語学・言語学 (生成文法) / 異文化間 コミュニケーションに関連した研究
	(72 Loh Ping Yeap)	人間工学、作業療法学に関連した研究
	(73 樋口 重和)	生理人類学、精神生理学、時間生物学、 感性科学に関連した研究
	(74 池田 美奈子)	デザイン理論、デザイン史、情報編集デザインに 関連した研究
	(75 曾我部 春香)	公共の場や空間に関わるデザインに関連した研究

<p>研究指導科目</p>	<p>リサーチプロジェクトⅢ</p>	<p>リサーチプロジェクトⅠ、リサーチプロジェクトⅡの履修を踏まえて、自己に関連する分野と異なる分野におけるテーマ設定、調査、分析を比較し、主指導教員や指導教員グループとのディスカッションを通して、研究分野の融合・横断を図る。</p> <p>(1 谷 正和) 環境人類学に関連した研究</p> <p>(2 伊藤 裕之) 心理学に関連した研究</p> <p>(3 井上 滋樹) 人間中心のデザイン、社会課題を解決するデザイン、SDGsに関連した研究</p> <p>(4 伊原 久裕) グラフィックデザインに関連した研究</p> <p>(5 鶴飼 哲矢) 建築設計・デザイン、都市デザインに関連した研究</p> <p>(6 大井 尚行) 都市・建築環境学、環境心理学に関連した研究</p> <p>(7 尾方 義人) インダストリアルデザイン、プロダクトデザイン、デザイン学、デザイン方法に関連した研究</p> <p>(8 尾本 章) 応用音響工学に関連した研究</p> <p>(9 包清 博之) ランドスケープ・マネジメント、緑地環境設計に関連した研究</p> <p>(10 鏑木 時彦) 音声情報処理に関連した研究</p> <p>(11 金 大雄) 映像コンテンツデザインに関連した研究</p> <p>(12 古賀 徹) 哲学、倫理学、美学、デザイン原論に関連した研究</p> <p>(13 近藤(笠利) 加代子) 環境政策、環境社会学、環境経済学、社会思想史に関連した研究</p> <p>(14 須長 正治) 色彩・視覚科学に関連した研究</p> <p>(15 竹之内 和樹) クリエーティブデザイン、メカニクスデザイン、図形科学に関連した研究</p> <p>(16 田上 健一) 建築計画・建築設計に関連した研究</p> <p>(17 鶴野 玲治) コンピュータグラフィクスに関連した研究</p> <p>(18 知足 美加子) 彫刻に関連した研究</p> <p>(19 原 健二) 視覚情報処理に関連した研究</p> <p>(20 平井 康之) インクルーシブデザイン、デザイン思考、オフィスデザイン、プロダクトデザイン、インテリアデザインに関連した研究</p> <p>(21 前田 享史) 生理人類学、環境人間工学、温熱生理学に関連した研究</p> <p>(22 村木 里志) 福祉人間工学に関連した研究</p> <p>(23 矢向 正人) 音楽学、音楽美学に関連した研究</p> <p>(24 朝廣 和夫) 緑地保全学に関連した研究</p> <p>(25 麻生 典) 知的財産法に関連した研究</p> <p>(26 石井 達郎) 映像表現、映像提示デザイン、デジタルコンテンツデザインに関連した研究</p> <p>(27 伊藤 浩史) 時間生物学、非線形動力学に関連した研究</p> <p>(28 井上 光平) パターン認識、画像処理、コンピュータビジョンに関連した研究</p> <p>(29 井上 朝雄) 建築構法計画、建築生産に関連した研究</p> <p>(30 上田 和夫) 聴覚心理学、聴覚認知心理学、知覚心理学、実験心理学に関連した研究</p> <p>(31 牛尼 剛聡) サイバー空間デザイン、コンテンツ環境デザインに関連した研究</p> <p>(32 大島 久雄) 演劇学に関連した研究</p> <p>(33 小野 直樹) デジタル画像の処理と認識に関連した研究</p> <p>(34 加藤 悠希) 日本建築史に関連した研究</p>	
---------------	--------------------	--	--

- (35 河原 一彦) 音響システムの性能評価に関する研究に関連した研究
- (36 齋藤 俊文) コミュニケーション・デザイン研究、ミュージアム研究、映画表現研究(日本映画ペンクラブ会員)、サブカルチャー研究、広告表現研究、クリエイティブディレクション、アート/ソーシャルプロジェクト、Technological Singularity に関連した研究
- (37 鮫島 俊哉) 音響工学に関連した研究
- (38 城 一裕) メディアアート、パーソナルファブリケーションに関連した研究
- (39 杉本 美貴) インドストリアルデザイン、プロダクトデザイン、コンセプチュアルデザイン、日本美に関連した研究
- (40 妹尾 武治) 心理学に関連した研究
- (41 高田 正幸) 音響デザイン学、音響環境学に関連した研究
- (42 高取 千佳) ランドスケープ・エコロジー、都市計画、緑地計画、土地利用計画、都市環境計画・デザインに関連した研究
- (43 田村 良一) デザインマネジメント、デザインシステムに関連した研究
- (44 徳久 悟) サービス・デザイン、イノベーション・マネジメント、
メディア・デザインに関連した研究
- (45 中村 美亜) 芸術社会学に関連した研究
- (46 西田(掘) 紘子) 音楽学(音楽理論・分析、西洋音楽史、音楽文化)に関連した研究
- (47 早瀬(古木) 百合子) 環境工学に関連した研究
- (48 平松 千尋) 視覚生理心理学に関連した研究
- (49 福島 綾子) 文化財学に関連した研究
- (50 藤 智亮) 設計工学、機能工学に関連した研究
- (51 Hall Michael) 英語、環境リスクマネジメントに関連した研究
- (52 松隈 浩之) デジタル映像デザインに関連した研究
- (53 松前 あかね) 創造性、知識科学、社会心理学、場のデザイン、関係性のデザイン、ソーシャルイノベーションに関連した研究
- (54 丸山 修) 計算生物学、バイオインフォマティクスに関連した研究
- (55 山内 勝也) 心理音響学、騒音環境学に関連した研究
- (56 吉岡 智和) 建築構造に関連した研究
- (57 吉永 幸靖) 画像処理、パターン認識に関連した研究
- (58 Remijn Gerard Bastiaan) 知覚心理学に関連した研究
- (59 今坂 智子) レーザーイオン化質量分析、超短パルス発生、質量分析計の開発に関連した研究
- (60 張 彦芳) ユニバーサルデザイン、ソーシャルデザインに関連した研究
- (61 西村 貴孝) 生理人類学に関連した研究
- (62 川本 陽一) 都市環境工学に関連した研究
- (63 工藤 真生) 視覚伝達デザイン、サイン計画、ピクトグラムに関連した研究
- (64 栗山 斉) アート、基礎デザインに関連した研究

	(65 澤井 賢一) 数理工学に関連した研究	
	(66 関 元秀) 数理・統計モデリングに関連した研究	
	(67 Jamison Daryl Steven) 作曲に関連した研究	
	(68 冬野 美晴) メディアと教育、メディアと言語文化、認知言語学、コーパス言語学、英語教育学に関連した研究	
	(69 村上 泰樹) 聴覚情報処理に関連した研究	
	(70 森本 有紀) コンピュータグラフィックスに関連した研究	
	(71 吉村 理一) 英語学・言語学 (生成文法) / 異文化間コミュニケーションに関連した研究	
	(72 Loh Ping Yeap) 人間工学、作業療法学に関連した研究	
	(73 樋口 重和) 生理人類学、精神生理学、時間生物学、感性科学に関連した研究	
	(74 池田 美奈子) デザイン理論、デザイン史、情報編集デザインに関連した研究	
	(75 曾我部 春香) 公共の場や空間に関わるデザインに関連した研究	

県内案内図



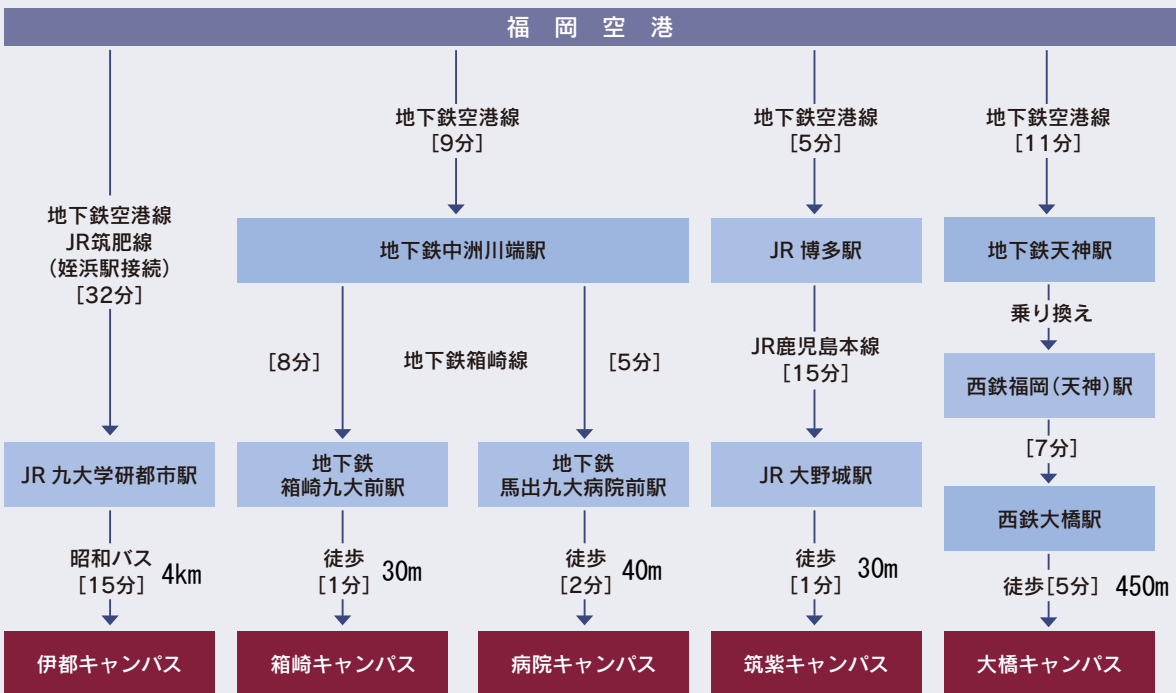
団地番号	団地名	案内図番号
088	六本松	22
096	うきは	23
097	今津	24
101	塩原	25
102	井尻	26
103	西戸崎	27
104	弥永	28

団地番号	団地名	案内図番号
025	西新	12
062	百道浜	12
027	西公園	13
029	春日原	14
035	大牟田	15
051	背振	16
055	宗像	17
057	鳥飼	18
058	諸岡	19
060	松香台	20
061	多々良	21

団地番号	団地名	案内図番号
001	箱崎	1
002	伊都	2
003	馬出	3
004	姪の浜	4
006	田島	5
008	原町	6
009	粕屋	7
010	下山門	8
016	津屋崎水産	9
017	彦山	10
020	名島	11



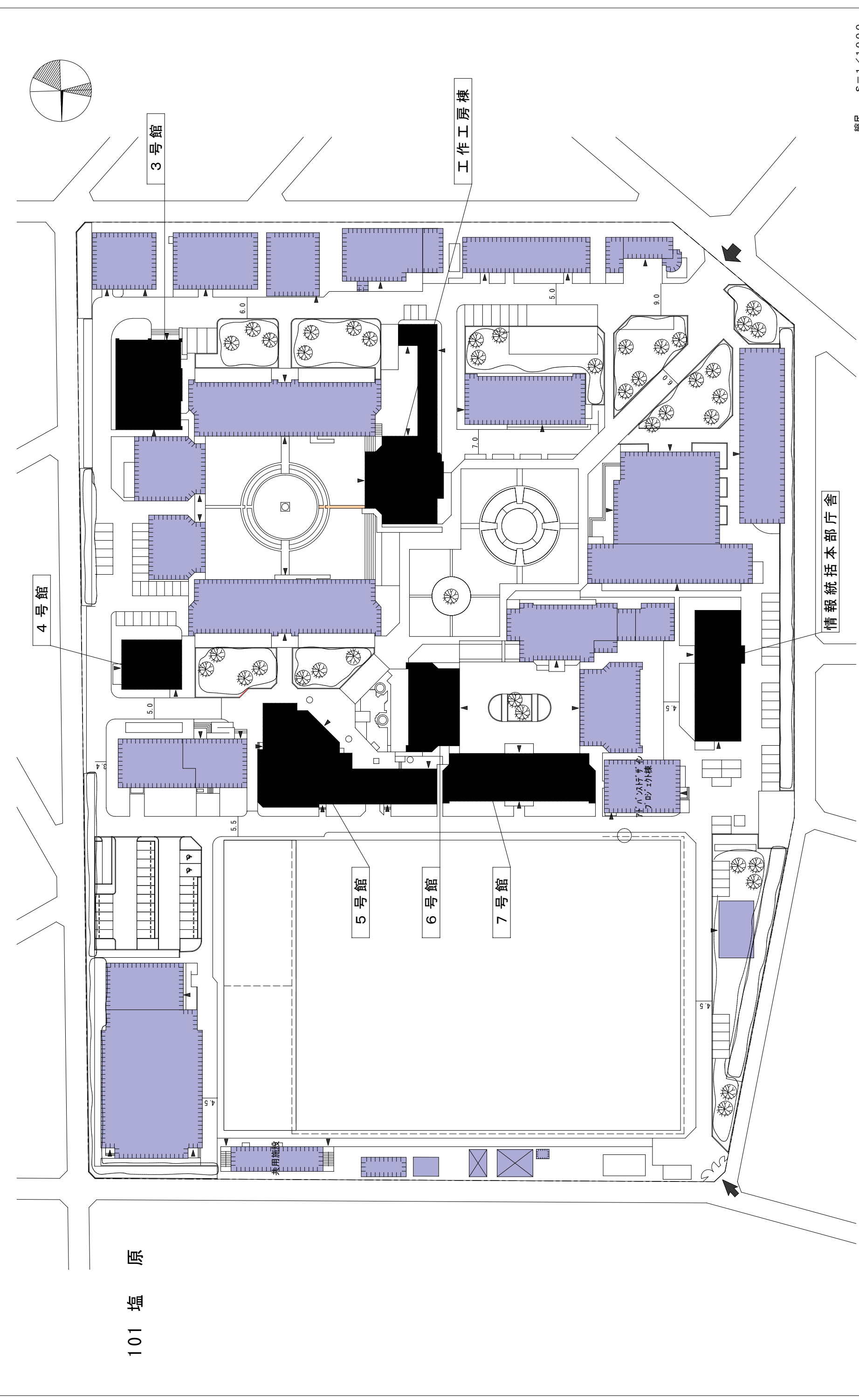
交通アクセス



※所要時間はおおよその時間。
 ※伊都キャンパスへは、博多、天神からの直行バスも運行。
 ※その他のアクセス方法は <http://www.kyushu-u.ac.jp/ja/campus/access/ito/> でご確認ください。

- 歴代総長 / 運営組織
- 役員等 / 経営協議会委員
- 教育研究 評議会評議員
- 沿革
- 伊都キャンパスへの移転
- 学府・研究院制度について
- 大学の組織
- 部局長等
- 教育研究組織
- 学生定員及び在籍学生数
- 入学状況
- 学位取得者数等
- 学部卒業・大学院修了後の進路状況
- 教職員数等
- 社会との連携
- 国際交流
- 収入・支出
- 研究プログラム及び教育プログラムの採択状況
- キャンパスマップ
- その他の地区
- 土地・建物・諸施設
- 案内図

配置図



敷地面積	建築面積	延べ面積	延べ率	容積率	全学生数	学部等名	団地番号	団地名	所在地	学校番号	学校名	作成年度
52,814 m ²	14,596 m ²	41,271 m ²	28.0 %	78.0 %	718 人	芸術工学部・芸術工学府・研究院等	101	塩原	福岡市南区塩原4丁目9番1号	0368	九州大学	R2

九州大学学則（案）

平成16年度九大規則第1号
制定：平成16年 4月 1日
最終改正：令和 4年 3月 日
（令和3年度九大規則第 号）

目次

- 第1章 総則（第1条～第2条の2）
- 第2章 組織等（第3条～第17条）
- 第3章 役員、職員等（第18条～第26条）
- 第4章 役員会、経営協議会、教育研究評議会及び総長選考会議（第27条～第30条）
- 第5章 教授会（第31条）
- 第6章 雑則（第32条）

附則

第1章 総則

（目的等）

第1条 九州大学（以下「本学」という。）は、教育基本法（平成18年法律第120号）の精神に則り、学術の中心として、広く知識を授けるとともに、深く専門の学芸を教授研究し、知的、道徳的及び応用的能力を展開させることを目的とする。【学教法第83条】

2 本学は、前項の目的を実現するための教育研究を行い、その成果を広く社会に提供することにより、社会の発展に寄与するものとする。

（自己評価等）

第2条 本学は、その教育研究水準の向上を図り、本学の目的及び社会的使命を達成するため、本学における教育研究活動等の状況について自ら点検及び評価を行い、その結果を公表するものとする。【学教法第109条】

2 本学は、前項の自己点検・評価及び第三者評価等多様な評価の結果を本学の目標・計画に反映させ、不断の改革に努めるものとする。

（教育研究活動状況の公表）

第2条の2 本学は、教育研究の成果の普及及び活用の促進に資するため、その教育研究活動の状況を公表するものとする。【学教法第113条】

第2章 組織等

（学部）

第3条 本学に、次の表に掲げるとおり、学部及び学科を置く。

【学教法第85条】【大学設置基準第4条】

学 部	学 科
共創学部	共創学科
文学部	人文学科
教育学部	
法学部	
経済学部	経済・経営学科、経済工学科
理学部	物理学科、化学科、地球惑星科学科、数学科、生物学科
医学部	医学科、生命科学科、保健学科

歯学部	歯学科
薬学部	創薬科学科、臨床薬学科
工学部	電気情報工学科、材料工学科、応用化学科、化学工学科、融合基礎工学科、機械工学科、航空宇宙工学科、量子物理工学科、船舶海洋工学科、地球資源システム工学科、土木工学科、建築学科
芸術工学部	芸術工学科
農学部	生物資源環境学科

2 学部又は学科ごとの人材の養成に関する目的その他の教育研究上の目的は、別に規則で定める。**【大学設置基準第2条】**

3 学部又は学科ごとの卒業認定に関する方針、教育課程の編成及び実施に関する方針並びに入学者の受入れに関する方針は、別に定める。

4 各学部の教員組織の編成その他必要な事項は、別に規則で定める。

5 学部の修業年限、教育課程、学生の入学、退学、卒業その他の学生の修学上必要な事項は、九州大学学部通則（平成16年度九大規則第2号）で定める。

（大学院）

第4条 本学に、九州大学大学院（以下「本大学院」という。）を置く。**【学教法第97条】**

2 本大学院は、本学の目的に則り、学術の理論及び応用を教授研究し、その深奥をきわめ、又は高度の専門性が求められる職業を担うための深い学識及び卓越した能力を培い、文化の進展に寄与することを目的とする。**【学教法第99条】**

3 本大学院のうち、学術の理論及び応用を教授研究し、高度の専門性が求められる職業を担うための深い学識及び卓越した能力を培うことを目的とするものは、専門職大学院とする。**【学教法第99条】**

第5条 本大学院に、学校教育法（昭和22年法律第26号）第100条ただし書に規定する研究科以外の教育研究上の基本となる組織として、教育上の目的に応じて組織する学府及び研究上の目的に応じ、かつ、教育上の必要性を考慮して組織する研究院を置く。

【学教法第100条】

第6条 前条の本大学院に置く学府は、次の表の左欄に掲げるとおりとし、当該学府にそれぞれ同表の右欄に掲げる専攻を置く。**【大学院設置基準第6条】**

学 府	専 攻
人文科学府	人文基礎専攻、歴史空間論専攻、言語・文学専攻
地球社会統合科学府	地球社会統合科学専攻
人間環境学府	都市共生デザイン専攻、人間共生システム専攻、行動システム専攻、教育システム専攻、空間システム専攻、実践臨床心理学専攻
法学府	法政理論専攻
法務学府	実務法学専攻
経済学府	経済工学専攻、経済システム専攻、産業マネジメント専攻

理学府	物理学専攻、化学専攻、地球惑星科学専攻
数理学府	数理学専攻
システム生命科学府	システム生命科学専攻
医学系学府	医学専攻、医科学専攻、保健学専攻、医療経営・管理学専攻
歯学府	歯学専攻
薬学府	創薬科学専攻、臨床薬学専攻
工学府	材料工学専攻、応用化学専攻、化学工学専攻、機械工学専攻、水素エネルギーシステム専攻、航空宇宙工学専攻、量子物理工学専攻、船舶海洋工学専攻、地球資源システム工学専攻、共同資源工学専攻、土木工学専攻
芸術工学府	芸術工学専攻
システム情報科学府	情報理工学専攻、電気電子工学専攻
総合理工学府	総合理工学専攻
生物資源環境科学府	資源生物科学専攻、環境農学専攻、農業資源経済学専攻、生命機能科学専攻
統合新領域学府	ユーザー感性学専攻、オートモーティブサイエンス専攻、ライブラリーサイエンス専攻
備考 各学府は、博士課程とする。ただし、医学系学府医科学専攻は修士課程、人間環境学府実践臨床心理学専攻、法務学府実務法学専攻、経済学府産業マネジメント専攻及び医学系学府医療経営・管理学専攻は専門職学位課程（第4条第3項の専門職大学院の課程をいう。以下同じ。）とし、そのうち法務学府実務法学専攻は法科大学院とする。	

- 2 学府又は専攻ごとの人材の養成に関する目的その他の教育研究上の目的は、別に規則で定める。 **【大学院設置基準第1条の2】**
- 3 学府又は専攻ごとの修了認定に関する方針、教育課程の編成及び実施に関する方針並びに入学者の受入れに関する方針は、別に定める。
- 4 博士課程は、専攻分野について、研究者として自立して研究活動を行い、又はその他の高度に専門的な業務に従事するために必要な高度の研究能力及びその基礎となる豊かな学識を養うことを目的とする。 **【大学院設置基準第4条第1項】**
- 5 修士課程は、広い視野に立って精深な学識を授け、専攻分野における研究能力又はこれに加えて高度の専門性が求められる職業を担うための卓越した能力を培うことを目的とする。 **【大学院設置基準第3条第1項】**
- 6 専門職学位課程は、高度の専門性が求められる職業を担うための深い学識及び卓越した能力を培うことを目的とし、そのうち法科大学院にあっては、専ら法曹養成のための教育を行うこ

とをその目的とする。

【専門職大学院設置基準第2条第1項、第18条】

7 各学府の教員組織の編制その他必要な事項は、別に規則で定める。

8 学府の修業年限、教育方法、学生の入学、退学、修了その他の学生の修学上必要な事項は、九州大学大学院通則（平成16年度九大規則第3号）で定める。

第7条 第5条の本大学院に置く研究院は、次に掲げるとおりとする。

- (1) 人文科学研究院
- (2) 比較社会文化研究院
- (3) 人間環境学研究院
- (4) 法学研究院
- (5) 経済学研究院
- (6) 言語文化研究院
- (7) 理学研究院
- (8) 数理学研究院
- (9) 医学研究院
- (10) 歯学研究院
- (11) 薬学研究院
- (12) 工学研究院
- (13) 芸術工学研究院
- (14) システム情報科学研究院
- (15) 総合理工学研究院
- (16) 農学研究院

(基幹教育院)

第7条の2 本学に、本学の学生として共通に期待される学びの基幹を育成するための全学組織として、基幹教育院を置く。

2 基幹教育院の内部組織その他必要な事項は、別に定める。

(高等研究院)

第7条の3 本学に、高度な研究活動の推進と展開を通じて人材を育成し、その研究成果を広く社会に還元するための全学的組織として、高等研究院を置く。

2 高等研究院の内部組織その他必要な事項は、別に定める。

(附置研究所)

第8条 本学に、研究所を附置する。

2 前項の研究所（以下「附置研究所」という。）は、次の表の左欄に掲げるとおりとし、当該附置研究所の目的は、それぞれ同表の右欄に定めるとおりとする。

【学教法第96条】

附置研究所	目的
生体防御医学研究所	生体防御医学に関する学理及びその応用の研究
応用力学研究所	力学に関する学理及びその応用の研究
先導物質化学研究所	物質化学に関する先導的な総合研究
マス・フォア・インダストリ研究所	数学の産業応用及びその学理研究

3 各附置研究所の内部組織その他必要な事項は、別に規則で定める。

(国際研究所)

第8条の2 本学に、カーボンニュートラル・エネルギー国際研究所を置く。

2 カーボンニュートラル・エネルギー国際研究所は、カーボンニュートラル・エネルギー研究

に関する基礎科学を創出するとともに、環境調和型で持続可能な社会の実現に向けた課題の解決に貢献することを目的とする。

3 カーボンニュートラル・エネルギー国際研究所の内部組織その他必要な事項は、別に規則で定める。

(病院)

第9条 医学部及び歯学部に、これらに附属する共用の教育研究施設として、医学部・歯学部附属病院を置き、九州大学病院（以下「病院」という。）と称する。 【大学設置基準第39条】

2 病院の内部組織その他必要な事項は、別に規則で定める。

(附属図書館)

第10条 本学に、附属図書館を置く。 【大学設置基準第36条】

2 附属図書館の内部組織その他必要な事項は、別に規則で定める。

第11条 削除

(情報基盤研究開発センター)

第12条 本学に、研究、教育等に係る情報化を推進するための実践的調査研究、基盤となる設備等の整備及び提供その他専門的業務を行う全国共同利用施設として、情報基盤研究開発センターを置く。

2 情報基盤研究開発センターは、前項の業務のほか、本学における情報基盤に係るシステム開発を行う。

3 情報基盤研究開発センターの内部組織その他必要な事項は、別に規則で定める。

(教育関係共同利用拠点)

第12条の2 第7条の2に規定する基幹教育院は、学校教育法施行規則（昭和22年文部省令第11号。以下「学教法施行規則」という。）第143条の2第2項の規定により、文部科学大臣の認定を受けた教育関係共同利用拠点として他大学の利用に供するものとする。

(共同利用・共同研究拠点)

第12条の3 次の表に掲げる附置研究所等は、学教法施行規則第143条の3第2項の規定により、文部科学大臣の認定を受けた共同利用・共同研究拠点としてそれぞれ学術研究の発展に資するものとする。

附置研究所等	共同利用・共同研究拠点
生体防御医学研究所	多階層生体防御システム研究拠点
応用力学研究所	応用力学共同研究拠点
先導物質化学研究所	物質・デバイス領域共同研究拠点
マス・フォア・インダストリ研究所	産業数学の先進的・基礎的共同研究拠点
情報基盤研究開発センター	学際大規模情報基盤共同利用・共同研究拠点

(エネルギー研究教育機構)

第12条の4 本学に、エネルギー分野における高度な研究及び教育活動を推進するための全学的組織として、エネルギー研究教育機構を置く。

2 エネルギー研究教育機構の内部組織その他必要な事項は、別に定める。

(アジア・オセアニア研究教育機構)

第12条の5 本学に、アジア・オセアニア地域における社会的課題の解決、課題の発掘及び提示に向けた研究教育活動を推進するための全学的組織として、アジア・オセアニア研究教育機構を置く。

2 アジア・オセアニア研究教育機構の内部組織その他必要な事項は、別に定める。

(学内共同教育研究センター)

第13条 本学に、次に掲げるいずれかの機能を担い、本学の教員その他の者が共同して教育研究活動を行う組織として、学内共同教育研究センターを置く。【学教法第96条】

- (1) 主に教育又は研究活動を支援すること。
- (2) 主に教育又は研究を推進すること。
- (3) その他全学業務を推進すること。

2 学内共同教育研究センターは、次の表の左欄に掲げるとおりとし、そのうち設置期間を定める学内共同教育研究センターの当該設置期間の満了する日は、それぞれ同表右欄のとおりとする。

学内共同教育研究センター	設置期間の満了する日
実験生物環境制御センター	
熱帯農学研究センター	
アイソトープ統合安全管理センター	
中央分析センター	
留学生センター	
総合研究博物館	
システムL S I 研究センター	令和13年3月31日
国際宇宙天気科学・教育センター	令和4年3月31日
韓国研究センター	
医療系統合教育研究センター	
超伝導システム科学研究センター	令和5年3月31日
未来デザイン学センター	
グローバルイノベーションセンター	
超顕微解析研究センター	
環境安全センター	
西部地区自然災害資料センター	
大学文書館	
ロバート・ファン／アントレプレナーシップ・センター	

アドミッションセンター	
水素エネルギー国際研究センター	
未来化学創造センター	令和7年3月31日
鉄鋼リサーチセンター	令和7年3月31日
低温センター	
加速器・ビーム応用科学センター	
稲盛フロンティア研究センター	令和4年3月31日
グリーンテクノロジー研究教育センター	令和5年3月31日
シンクロトロン光利用研究センター	
先端医療オープンイノベーションセンター	令和7年3月31日
極限プラズマ研究連携センター	令和6年3月31日
有体物管理センター	
分子システム科学センター	令和5年3月31日
日本エジプト科学技術連携センター	令和6年3月31日
プラズマナノ界面工学センター	令和6年3月31日
EUセンター	令和6年3月31日
環境発達医学研究センター	令和13年3月31日
ユスス&椎木ソーシャル・ビジネス研究センター	令和3年9月30日
医用生体工学研究センター	令和8年3月31日
次世代燃料電池産学連携研究センター	令和4年3月31日
科学技術イノベーション政策教育研究センター	令和8年3月31日
先端素粒子物理研究センター	令和5年3月31日
分子システムデバイス産学連携教育研究センター	令和6年3月31日
水素材料先端科学研究センター	令和5年3月31日
アジア埋蔵文化財研究センター	令和5年3月31日

キャンパスライフ・健康支援センター	
五感応用デバイス研究開発センター	令和5年10月31日
持続可能な社会のための決断科学センター	
サイバーセキュリティセンター	
数理・データサイエンス教育研究センター	令和4年3月31日
植物フロンティア研究センター	令和5年3月31日
最先端有機光エレクトロニクス研究センター	令和6年3月31日
都市研究センター	令和6年3月31日
次世代接着技術研究センター	令和6年3月31日
先進電気推進飛行体研究センター	令和12年3月31日
ネガティブエミッションテクノロジー研究センター	令和8年3月31日
ラーニングアナリティクスセンター	令和8年3月31日

3 各学内共同教育研究センターの内部組織その他必要な事項は、別に規則で定める。
(先導的研究センター)

第13条の2 本学に、先導的に研究を行う拠点として、先導的研究センターを置く。

2 先導的研究センターは、次の表の左欄に掲げるとおりとし、各先導的研究センターの設置期間の満了する日は、それぞれ同表右欄のとおりとする。

先導的研究センター	設置期間の満了する日
ヒトプロテオーム研究センター	令和5年3月31日
次世代経皮吸収研究センター	令和4年3月31日
確率解析研究センター	令和4年3月31日
多重ゼータ研究センター	令和4年3月31日
大気物理統合解析センター	令和4年3月31日

3 各先導的研究センターの内部組織その他必要な事項は、別に規則で定める。
(学部等の附属施設)

第14条 次の表の左欄に掲げる学部、学府、研究院、附置研究所等に、それぞれ同表の右欄に掲げる附属の教育施設又は研究施設を置く。 **【大学設置基準第39条】**

学 部 等	附 属 施 設
-------	---------

理学部	天草臨海実験所
農学部	農場、演習林
人間環境学府	総合臨床心理センター
工学府	ものづくり工学教育研究センター
システム情報科学府	電気エネルギーシステム教育研究センター
薬学府	薬用植物園
生物資源環境科学府	水産実験所
比較社会文化研究院	浅海底フロンティア研究センター
人間環境学研究院	環境建築R & Eセンター
理学研究院	地震火山観測研究センター
医学研究院	胸部疾患研究施設、心臓血管研究施設、脳神経病研究施設、ヒト疾患モデル研究センター、総合コホートセンター、プレジジョンメディスン研究センター
歯学研究院	オーラルヘルス・ブレインヘルス・トータルヘルス研究センター
薬学研究院	産学官連携創薬育薬センター
工学研究院	環境工学研究教育センター、アジア防災研究センター、国際教育支援センター、小分子エネルギーセンター、次世代蓄エネルギーデバイス研究センター
芸術工学研究院	応用知覚科学研究センター、応用生理人類学研究センター、環境設計グローバル・ハブ、SDGsデザインユニット、社会包摂デザイン・イニシアティブ
システム情報科学研究院	光・量子プロセス研究開発センター
農学研究院	生物的防除研究施設、遺伝子資源開発研究センター、国際農業教育・研究推進センター、イノベティブバイオアーキテクチャーセンター、昆虫科学・新産業創生研究センター、アクアバイオリソース創出センター
生体防御医学研究所	トランスオミクス医学研究センター、システム免疫学統合研究センター
応用力学研究所	大気海洋環境研究センター、高温プラズマ理工学研究センター、自然

	エネルギー統合利用センター
カーボンニュートラル・エネルギー国際研究所	次世代冷媒物性評価研究センター
情報基盤研究開発センター	汎オミクス計測・計算科学センター

- 2 各附属施設の内部組織その他必要な事項は、当該学部等の長が、別に定める。
(情報統括本部)
- 第15条 本学に、全学的な情報支援を行うための組織として、情報統括本部を置く。
- 2 情報統括本部の目的は、次に掲げるとおりとする。
- (1) 全学的な情報基盤の整備
- (2) 情報技術を用いた教育研究及び大学運営に関わる業務の総合的な支援
- 3 情報統括本部の構成その他必要な事項は、別に規則で定める。
(統合移転推進本部)
- 第15条の2 本学に、統合移転事業及び伊都キャンパスの整備計画を推進するための組織として、統合移転推進本部を置く。
- 2 統合移転推進本部の構成その他必要な事項は、別に規則で定める。
(基金本部)
- 第15条の3 本学に、九州大学基金による支援助成事業及び基金強化事業（以下「基金事業」という。）を推進するための組織として、基金本部を置く。
- 2 基金本部の構成その他必要な事項は、別に規則で定める。
(広報本部)
- 第15条の4 本学に、広報戦略の策定及び広報活動の推進を図るための組織として、広報本部を置く。
- 2 広報本部の構成その他必要な事項は、別に規則で定める。
(グローバル化推進本部)
- 第15条の5 本学に、全学的なグローバル化を推進するための組織として、グローバル化推進本部を置く。
- 2 グローバル化推進本部の構成その他必要な事項は、別に規則で定める。
(学術研究・産学官連携本部)
- 第15条の6 本学に、全学の学術研究及び産学官連携を推進するための組織として、学術研究・産学官連携本部を置く。
- 2 学術研究・産学官連携本部の構成その他必要な事項は、別に定める。
(教育改革推進本部)
- 第15条の7 本学に、教育課程及び教育方法等の改善、高大接続・入試改革等の教育改革並びにキャリア教育の開発等を推進するための組織として、教育改革推進本部を置く。
- 2 教育改革推進本部の構成その他必要な事項は、別に定める。
(推進室等)
- 第16条 本学に、特定の重要事項を企画、推進又は支援する組織として、推進室等を置く。
- 2 前項の推進室等は、次の表の左欄に掲げるとおりとし、当該推進室等の目的は、それぞれ同表の右欄に定めるとおりとする。

推進室等	目的
社会連携推進室	社会連携（産学官連携を除く。）の推進を支援すること。

国際戦略企画室	国際戦略の企画・立案等を行うこと。
SHAREオフィス	全学的なグローバル化の推進を支援すること。
インスティテューショナル・リサーチ室	大学運営の基礎となる情報の調査・収集・分析及び提供により、大学の意思決定を支援すること。
キャンパス計画室	キャンパス計画の推進を支援すること。
環境安全衛生推進室	安全衛生の推進を支援すること。
ハラスメント対策推進室	ハラスメントの防止及び対策の推進を支援すること。
男女共同参画推進室	男女共同参画の推進を支援すること。
情報環境整備推進室	情報環境整備の推進を支援すること。
統合移転事業推進室	統合移転事業及び伊都キャンパスの整備計画に係る企画・立案を行うこと。
法務統括室	法務機能の強化に係る企画・立案を行うこと。
基金事業推進室	基金事業の実施に係る企画・立案を行うこと。
同窓生連携推進室	同窓生との連携に関すること。
広報戦略推進室	広報戦略に基づく広報活動の推進を支援すること。
跡地処分統括室	移転跡地処分のリスクマネジメントに係る企画・立案等を行うこと。
総長支援室	総長の指示に基づく大学全体の戦略等に係る企画・立案・調整・情報収集を行うこと。
危機管理室	危機管理及び危機発生時の対応に関すること。

3 前項の各推進室等の内部組織その他必要な事項は、別に定める。

(伊都診療所)

第16条の2 本学に、伊都診療所（以下「診療所」という。）を置く。

2 診療所の内部組織その他必要な事項は、別に定める。

(事務組織)

第17条 本学に、庶務、会計、施設及び学生の厚生補導等に関する事務を処理させるため事務局を置く。

2 本学の学部、学府等に、その事務を処理させるため事務部を置く。ただし、必要がある場合は、数個の学部等の事務を併せて処理する事務部を置く。

3 前2項に規定する事務組織のほか、本学に、内部監査を実施させるとともに、監事監査の事務を補助させるため監査室を置く。

4 前3項の事務組織の内部組織その他必要な事項は、別に規則で定める。

【大学設置基準第41条、第42条】

(技術部)

第17条の2 本学の学部、学府、研究院、基幹教育院、附置研究所等に、教育研究に関する技術的な支援を行わせるため、技術部を置くことができる。

2 前項の技術部の内部組織その他必要な事項は、別に定める。

第3章 役員、職員等 (役員)

第18条 国立大学法人法（平成15年法律第112号。以下「法人法」という。）第10条の規定に基づき、本学に、役員として、学長（「総長」と称する。）、理事8人以内及び監事2人を置く。 【法人法第10条】

第19条 総長は、校務をつかさどり、所属職員を統督するとともに、本学を代表し、その業務を総理する。 【学教法第92条】【法人法第11条】

2 総長は、この規則その他の総長が定める規則等において理事又は職員に委任する業務について報告を求め、必要な措置を命じ、又はその措置を自ら行うことができる。

第20条 理事は、総長の定めるところにより、総長を補佐して本学の業務を掌理し、総長に事故があるときはその職務を代理し、総長が欠員のときはその職務を行う。 【法人法第11条】

第21条 監事は、本学の業務を監査する。この場合において、監事は、監査報告を作成しなければならない。

2 監事は、いつでも、役員（監事を除く。）及び職員に対して事務及び事業の報告を求め、又は本学の業務及び財産の状況を調査することができる。 【法人法第11条】

(職員)

第22条 本学に、教員、事務職員、技術職員、高度専門職員その他必要な職員を置く。

2 前項の教員は、教授、准教授、講師、助教、准助教及び助手（「教務助手」と称する。）とする。

3 教授、准教授、講師、助教及び教務助手の職務は学校教育法（昭和22年法律第26号）第92条の定めるところによるものとし、准助教の職務は教授及び准教授の職務を助けることとする。 【学教法第92条】

(副学長)

第23条 本学に、総長の定めるところにより、総長を助け、命を受けて校務をつかさどるため、副学長若干人を置く。

2 副学長は、理事のうちから総長が指名する者が兼ねる。

3 前項の規定にかかわらず、総長が特に必要と認めた場合は、職員のうちから総長が指名する者が副学長を兼ねることができるものとする。 【学教法第92条】

(副理事)

第24条 本学に、総長の定めるところにより、理事の職務を助けるため、副理事若干人を置く。

2 副理事は、教授その他の職員のうちから総長が指名する。

(総長補佐)

第24条の2 本学に、総長の定めるところにより、総長が命ずる特定の事項を担当し、総長を助けるため、総長補佐若干人を置くことができる。

2 総長補佐は、教授その他の職員のうちから総長が指名する。

(部局長等)

第25条 学部、学府、研究院、基幹教育院、附置研究所、カーボンニュートラル・エネルギー国際研究所、病院、附属図書館及び情報基盤研究開発センター（以下「部局」という。）に長（以下「部局長」という。）を置く。

2 部局長は、当該部局の業務を掌理する。

3 各部局に、副部局長を置くことができる。

4 副部局長は、部局長の定めるところにより、部局長を補佐して部局の業務を処理し、部局長に事故があるときはその職務を代理し、部局長が欠員のときはその職務を行う。

5 部局長及び副部局長の任命手続その他必要な事項は、別に規則で定める。

6 学科及び専攻に、それぞれ学科長又は専攻長を置くことができる。

7 学科長及び専攻長の任命手続その他必要な事項は、別に定めるものとする。

(センター長等)

第26条 学内共同教育研究センターに長(以下「センター長」という。)を置く。

- 2 センター長は、当該学内共同教育研究センターの業務を掌理する。
- 3 各学内共同教育研究センターに、副センター長を置くことができる。
- 4 副センター長は、センター長の定めるところにより、センター長を補佐して当該学内共同教育研究センターの業務を処理し、センター長に事故があるときはその職務を代理し、センター長が欠員のときはその職務を行う。
- 5 センター長及び副センター長の任命手続その他必要な事項は、別に規則で定める。

第26条の2 先導的研究センターに長(以下「センター長」という。)を置く。

- 2 センター長は、当該先導的研究センターの業務を掌理する。
- 3 各先導的研究センターに、副センター長を置くことができる。
- 4 副センター長は、センター長の定めるところにより、センター長を補佐して当該先導的研究センターの業務を処理し、センター長に事故があるときはその職務を代理する。
- 5 センター長及び副センター長の任命手続その他必要な事項は、別に規則で定める。

(所長)

第26条の3 診療所に、所長を置く。

- 2 所長は、診療所の業務を掌理する。
- 3 所長は、本学の教員のうちから総長が指名する。

第4章 役員会、経営協議会、教育研究評議会及び総長選考会議
(役員会)

第27条 本学に、法人法第11条第3項各号に規定する事項を審議するため、総長及び理事で構成する役員会を置く。【法人法第11条】

- 2 役員会の議事の手続その他必要な事項は、別に規則で定める。
- (経営協議会)

第28条 本学に、法人法第20条の規定に基づき、本学の経営に関する重要事項を審議する機関として、経営協議会を置く。【法人法第20条】

- 2 経営協議会の議事の手続その他必要な事項は、別に規則で定める。
- (教育研究評議会)

第29条 本学に、法人法第21条の規定に基づき、本学の教育研究に関する重要事項を審議する機関として、教育研究評議会を置く。【法人法第21条】

- 2 教育研究評議会の議事の手続その他必要な事項は、別に規則で定める。
- (総長選考会議)

第30条 本学に、法人法第12条第2項から第6項までの規定に基づき、総長選考会議(以下「選考会議」という。)を置く。【法人法第12条】

- 2 選考会議の組織に関し必要な事項は、別に規則で定める。
- 第5章 教授会

第31条 部局(病院及び附属図書館を除く。)に、教授会を置く。【学教法第93条】

- 2 教授会の組織、審議事項、議事の手続その他必要な事項は、九州大学教授会通則(平成16年度九大規則第8号)で定める。

第6章 雑則
(雑則)

第32条 この規則に定めるもののほか、本学の目的を達成するために必要な事項は、別に規則で定める。

附 則

- 1 この規則は、平成16年4月1日から施行する。
- 2 法人法附則第16条第1項の規定に基づき本学に置かれる九州大学医療技術短期大学部(以下「短期大学部」という。)は、平成16年4月1日に短期大学部に在学する学生が短期大学部に在学しなくなる日において、廃止する。
- 3 前項の短期大学部に在学する学生の教育課程の履修その他当該学生の教育に必要な事項につ

いては、九州大学医療技術短期大学部学則（昭和46年4月8日施行）等の規定によるものとする。

- 4 法人法附則第17条の規定に基づき、平成15年9月30日に当該大学に在学する者が在学しなくなる日までの間存続するものとされた九州芸術工科大学に在学する者（以下「在学者」という。）の卒業又は大学院の課程修了のため必要となる教育は、九州大学芸術工学部（以下「芸術工学部」という。）又は九州大学大学院芸術工学府（以下「芸術工学府」という。）において行うものとする。
- 5 前項の在学者の教育課程の履修その他当該学生の教育に必要な事項については、九州芸術工科大学学則（平成5年4月1日施行）等の規定によるものとする。ただし、これによることができない事項については、総長又は芸術工学部若しくは芸術工学府の教授会が定めるところによる。
- 6 第12条の3に規定する附置研究所等は、文部科学大臣の認定期間である平成34年3月31日までの間存続するものとする。
- 7 第13条第1項に規定する宙空環境研究センターは、平成24年3月31日まで存続するものとする。
- 8 第14条第1項に規定する工学研究院附属の環境システム科学研究センターは平成20年3月31日まで、生体防御医学研究所附属の感染防御研究センターは平成23年3月31日まで、応用力学研究所附属の力学シミュレーション研究センター及び炉心理工学研究センターは平成19年3月31日まで存続するものとする。
- 9 法人法等関係法令又はこの学則等に基づき定める諸規則等のほか、承継的、定型的又は簡易な事項で総長が必要と認めるものについては、当分の間、総長が定めるところにより、廃止前の国立学校設置法（昭和24年法律第150号）に基づき設置された九州大学の諸規則等の規定を適用又は準用するものとする。

附 則（平成16年度九大規則第193号）

- 1 この規則は、平成17年4月1日から施行する。
- 2 人間環境学府発達・社会システム専攻は、改正後の第6条第1項の規定にかかわらず、平成17年3月31日に当該専攻に在学する者が在学しなくなる日までの間、存続するものとする。

附 則（平成17年度九大規則第4号）

- 1 この規則は、平成17年7月15日から施行し、平成17年7月1日から適用する。
- 2 改正後の第13条第1項に規定するデジタルメディシン・イニシアティブ及びアジア総合政策センターは、平成22年6月30日まで存続するものとする。

附 則（平成17年度九大規則第23号）

この規則は、平成17年11月7日から施行する。

附 則（平成17年度九大規則第30号）

- 1 この規則は、平成18年4月1日から施行する。
- 2 薬学部総合薬学科は、改正後の第3条第1項の規定にかかわらず、平成18年3月31日に当該学科に在学する者が在学しなくなる日までの間、存続するものとする。

附 則（平成18年度九大規則第2号）

この規則は、平成18年6月1日から施行する。

附 則（平成18年度九大規則第25号）

この規則は、平成18年10月1日から施行する。

附 則（平成18年度九大規則第37号）

- 1 この規則は、平成19年4月1日から施行する。
- 2 改正後の第14条第1項に規定する応用力学研究所附属の東アジア海洋大気環境研究センター及び高温プラズマ力学研究センターは、平成29年3月31日まで存続するものとする。
- 3 改正後の第22条第2項に規定する准助教の職種は、平成19年4月1日に当該職に在職する者が在職しなくなる日において、廃止する。

附 則（平成19年度九大規則第27号）

この規則は、平成19年11月1日から施行する。

附 則（平成19年度九大規則第31号）

この規則は、平成19年12月26日から施行する。

附 則（平成19年度九大規則第58号）

- 1 この規則は、平成20年4月1日から施行する。
- 2 理学府基礎粒子系科学専攻、分子科学専攻、凝縮系科学専攻及び生物科学専攻並びに医学系学府機能制御医学専攻、生殖発達医学専攻、病態医学専攻、臓器機能医学専攻、分子常態医学専攻及び環境社会医学専攻は、改正後の九州大学学則（以下「新規則」という。）第6条第1項の規定にかかわらず、平成20年3月31日に当該専攻に在学する者が在学しなくなる日までの間、存続するものとする。
- 3 新規則第14条第1項に規定する工学研究院附属の循環型社会システム工学研究センターは、平成30年3月31日まで存続するものとする。

附 則（平成20年度九大規則第1号）

この規則は、平成20年4月17日から施行し、平成20年4月1日から適用する。

附 則（平成20年度九大規則第9号）

この規則は、平成20年10月1日から施行する。

附 則（平成20年度九大規則第37号）

- 1 この規則は、平成21年4月1日から施行する。
- 2 システム情報科学府情報理学専攻、知能システム学専攻、情報工学専攻、電気電子システム工学専攻及び電子デバイス工学専攻は、この規則による改正後の九州大学学則（以下「新学則」という。）第6条第1項の規定にかかわらず、平成21年3月31日に当該専攻に在学する者が在学しなくなる日までの間、存続するものとする。

附 則（平成21年度九大規則第1号）

この規則は、平成21年5月1日から施行する。

附 則（平成21年度九大規則第5号）

この規則は、平成21年6月1日から施行する。

附 則（平成21年度九大規則第12号）

この規則は、平成21年8月1日から施行し、第13条第1項にシンクロトロン光利用研究センターを加える改正規定は、平成21年7月1日から適用する。

附 則（平成21年度九大規則第20号）

- 1 この規則は、平成21年10月1日から施行する。
- 2 この規則による改正後の九州大学学則第36条の6の規定は、平成21年9月1日から適用する。

附 則（平成21年度九大規則第33号）

この規則は、平成21年11月1日から施行する。

附 則（平成21年度九大規則第49号）

- 1 この規則は、平成22年4月1日から施行する。
- 2 法学府基礎法学専攻、公法・社会法学専攻、民刑事法学専攻、国際関係法学専攻及び政治学専攻並びに薬学府医療薬科学専攻（修士課程）及び創薬科学専攻（修士課程）並びに工学府機械科学専攻及び知能機械システム専攻並びに生物資源環境科学府生物資源開発管理学専攻、植物資源科学専攻、生物機能科学専攻、動物資源科学専攻、農業資源経済学専攻、生産環境科学専攻、森林資源科学専攻及び遺伝子資源工学専攻は、この規則による改正後の九州大学学則（以下「新規則」という。）第6条第1項の規定にかかわらず、平成22年3月31日に当該専攻に在学する者が在学しなくなる日までの間、存続するものとする。

- 3 九州大学学則（平成16年度九大規則第1号）附則第6項の規定にかかわらず、生体防御医学研究所附属の感染防御研究センターは、廃止する。

附 則（平成22年度九大規則第1号）

この規則は、平成22年4月28日から施行し、平成22年4月1日から適用する。

附 則（平成22年度九大規則第6号）

この規則は、平成22年7月1日から施行する。

- 附 則（平成 22 年度九大規則第 12 号）
- 1 この規則は、平成 22 年 8 月 1 日から施行する。ただし、第 13 条第 1 項に「応用知覚研究センター」を加える改正規定は同年 9 月 1 日から施行する。
 - 2 この規則による改正後の九州大学学則第 13 条第 1 項に規定する「応用知覚研究センター」は、平成 24 年 3 月 31 日まで存続するものとする。

附 則（平成 22 年度九大規則第 30 号）
この規則は、平成 22 年 10 月 1 日から施行する。

附 則（平成 22 年度九大規則第 45 号）
この規則は、平成 22 年 12 月 1 日から施行する。

附 則（平成 22 年度九大規則第 47 号）
この規則は、平成 22 年 12 月 1 日から施行する。

附 則（平成 22 年度九大規則第 74 号）
この規則は、平成 23 年 1 月 1 日から施行する。

附 則（平成 22 年度九大規則第 78 号）
この規則は、平成 23 年 2 月 1 日から施行する。

附 則（平成 22 年度九大規則第 81 号）
この規則は、平成 23 年 4 月 1 日から施行する。

附 則（平成 23 年度九大規則第 1 号）
この規則は、平成 23 年 5 月 1 日から施行する。

附 則（平成 23 年度九大規則第 4 号）
この規則は、平成 23 年 6 月 1 日から施行する。

附 則（平成 23 年度九大規則第 8 号）
 - 1 この規則は、平成 23 年 7 月 1 日から施行する。
 - 2 この規則による改正後の九州大学学則第 14 条第 1 項に規定する「システム情報科学府附属の高度 ICT 人材教育開発センター」は、平成 32 年 3 月 31 日まで存続するものとする。

附 則（平成 23 年度九大規則第 10 号）
この規則は、平成 23 年 8 月 1 日から施行する。

附 則（平成 23 年度九大規則第 12 号）
この規則は、平成 23 年 10 月 1 日から施行する。

附 則（平成 23 年度九大規則第 68 号）
この規則は、平成 23 年 11 月 1 日から施行する。

附 則（平成 23 年度九大規則第 72 号）
この規則は、平成 24 年 1 月 1 日から施行する。

附 則（平成 23 年度九大規則第 80 号）
 - 1 この規則は、平成 24 年 4 月 1 日から施行する。
 - 2 この規則の施行前に設置された「薬学府医療薬科学専攻（博士後期課程）」及び「創薬科学専攻（博士後期課程）」は、この規則による改正後の九州大学学則第 6 条第 1 項の規定にかかわらず、平成 24 年 3 月 31 日に当該専攻に在学する者が在学しなくなる日までの間、存続するものとする。

附 則（平成 24 年度九大規則第 11 号）
この規則は、平成 24 年 10 月 1 日から施行する。

附 則（平成 24 年度九大規則第 29 号）
この規則は、平成 24 年 12 月 1 日から施行する。ただし、第 25 条に係る改正規定は、平成 25 年 4 月 1 日から施行する。

附 則（平成 24 年度九大規則第 36 号）
この規則は、平成 25 年 1 月 1 日から施行する。

附 則（平成 24 年度九大規則第 37 号）
この規則は、平成 25 年 2 月 1 日から施行する。

附 則（平成 24 年度九大規則第 42 号）

この規則は、平成25年3月1日から施行する。

附 則（平成24年度九大規則第45号）

1 この規則は、平成25年4月1日から施行する。

2 この規則による改正後の九州大学学則第14条第1項に規定する自然エネルギー統合利用センターは、平成35年3月31日まで存続するものとする。

附 則（平成25年度九大規則第2号）

この規則は、平成25年5月1日から施行する。

附 則（平成25年度九大規則第8号）

この規則は、平成25年6月3日から施行し、平成25年4月1日から適用する。

附 則（平成25年度九大規則第10号）

この規則は、平成25年7月1日から施行する。

附 則（平成25年度九大規則第16号）

この規則は、平成25年8月1日から施行する。ただし、知的財産本部の名称及び目的に係る改正規定は、平成25年9月1日から施行する。

附 則（平成25年度九大規則第40号）

この規則は、平成25年11月1日から施行する。

附 則（平成25年度九大規則第47号）

この規則は、平成25年12月1日から施行する。ただし、第14条第1項の表に薬学研究院の項を加える改正規定は、平成26年1月1日から施行する。

附 則（平成25年度九大規則第51号）

この規則は、平成26年1月1日から施行する。

附 則（平成25年度九大規則第76号）

この規則は、平成26年1月27日から施行する。

附 則（平成25年度九大規則第78号）

この規則は、平成26年3月1日から施行する。

附 則（平成25年度九大規則第83号）

1 この規則は、平成26年4月1日から施行する。

2 比較社会文化学府は、この規則による改正後の九州大学学則第6条第1項の規定にかかわらず、平成26年3月31日に当該学府に在学する者が在学しなくなる日までの間、存続するものとする。

附 則（平成26年度九大規則第2号）

この規則は、平成26年4月30日から施行し、この規則による改正後の九州大学学則の規定は、平成26年4月1日から適用する。

附 則（平成26年度九大規則第6号）

この規則は、平成26年8月1日から施行する。

附 則（平成26年度九大規則第11号）

この規則は、平成26年10月1日から施行する。ただし、第13条第1項の表に係る改正規定は、平成27年4月1日から施行する。

附 則（平成26年度九大規則第60号）

この規則は、平成26年12月1日から施行する。

附 則（平成26年度九大規則第70号）

この規則は、平成27年1月22日から施行する。

附 則（平成26年度九大規則第76号）

1 この規則は、平成27年4月1日から施行する。

2 九州大学高等教育機構規則（平成18年度九大規則第3号）は、廃止する。

附 則（平成26年度九大規則第77号）

この規則は、平成27年4月1日から施行する。

附 則（平成26年度九大規則第120号）

この規則は、平成27年4月1日から施行する。

附 則 (平成27年度九大規則第2号)

この規則は、平成27年6月1日から施行する。

附 則 (平成27年度九大規則第9号)

この規則は、平成27年10月1日から施行する。

附 則 (平成27年度九大規則第21号)

この規則は、平成27年12月1日から施行する。

附 則 (平成27年度九大規則第23号)

この規則は、平成28年1月1日から施行する。

附 則 (平成27年度九大規則第26号)

この規則は、平成28年2月1日から施行する。

附 則 (平成27年度九大規則第31号)

この規則は、平成28年3月1日から施行する。

附 則 (平成27年度九大規則第34号)

1 この規則は、平成28年4月1日から施行する。

2 この規則による改正後の九州大学学則第14条第1項に規定する次世代冷媒物性評価研究センターは、平成33年3月31日まで存続するものとする。

附 則 (平成28年度九大規則第3号)

この規則は、平成28年6月1日から施行する。

附 則 (平成28年度九大規則第8号)

この規則は、平成28年7月1日から施行する。

附 則 (平成28年度九大規則第14号)

この規則は、平成28年7月29日から施行する。

附 則 (平成28年度九大規則第20号)

この規則は、平成28年10月1日から施行する。

附 則 (平成28年度九大規則第65号)

この規則は、平成28年12月1日から施行する。

附 則 (平成28年度九大規則第69号)

この規則は、平成29年1月1日から施行する。

附 則 (平成28年度九大規則第76号)

この規則は、平成29年2月1日から施行する。

附 則 (平成28年度九大規則第81号)

この規則は、平成29年3月1日から施行する。

附 則 (平成28年度九大規則第85号)

この規則は、平成29年4月1日から施行する。ただし、第14条第1項の表中のオーラルヘルス・ブレインヘルス・トータルヘルス研究センターを加える規定は、平成28年4月1日から適用する。

附 則 (平成29年度九大規則第1号)

この規則は、平成29年5月1日から施行する。

附 則 (平成29年度九大規則第5号)

この規則は、平成30年4月1日から施行する。

附 則 (平成29年度九大規則第8号)

この規則は、平成29年10月1日から施行する。

附 則 (平成29年度九大規則第23号)

この規則は、平成29年11月1日から施行する。

附 則 (平成29年度九大規則第40号)

この規則は、平成30年1月1日から施行する。

附 則 (平成29年度九大規則第48号)

この規則は、平成30年2月1日から施行する。

附 則 (平成29年度九大規則第67号)

- 1 この規則は、平成30年4月1日から施行する。
- 2 生物資源環境科学府生物産業創成専攻は、この規則による改正後の九州大学学則第6条第1項の規定にかかわらず、平成30年3月31日に当該専攻に在学する者が在学しなくなる日までの間、存続するものとする。
 - 附 則（平成30年度九大規則第1号）
この規則は、平成30年5月1日から施行し、平成30年4月1日から適用する。
 - 附 則（平成30年度九大規則第11号）
この規則は、平成30年7月1日から施行する。ただし、第13条の2の規定は、平成30年4月1日から適用する。
 - 附 則（平成30年度九大規則第18号）
この規則は、平成30年11月1日から施行する。
 - 附 則（平成30年度九大規則第22号）
この規則は、平成30年10月1日から施行する。
 - 附 則（平成30年度九大規則第49号）
この規則は、平成31年1月1日から施行する。
 - 附 則（平成30年度九大規則第60号）
この規則は、平成31年4月1日から施行する。
 - 附 則（令和元年度九大規則第2号）
この規則は、令和元年8月1日から施行する。
 - 附 則（令和元年度九大規則第4号）
この規則は、令和元年10月1日から施行する。
 - 附 則（令和元年度九大規則第19号）
この規則は、令和元年11月1日から施行する。
 - 附 則（令和元年度九大規則第24号）
- 1 この規則は、令和2年4月1日から施行する。
- 2 芸術工学部環境設計学科、工業設計学科、画像設計学科、音響設計学科及び芸術情報設計学科は、この規則による改正後の九州大学学則第3条第1項の規定にかかわらず、令和2年3月31日に当該学科に在学する者が在学しなくなる日までの間、存続するものとする。
 - 附 則（令和2年度九大規則第5号）
この規則は、令和2年8月1日から施行する。
 - 附 則（令和2年度九大規則第17号）
この規則は、令和2年10月26日から施行し、令和2年10月1日から適用する。
 - 附 則（令和2年度九大規則第35号）
この規則は、令和2年12月1日から施行する。
 - 附 則（令和2年度九大規則第41号）
- 1 この規則は、令和3年4月1日から施行する。
- 2 工学部建築学科、電気情報工学科、物質科学工学科、地球環境工学科、エネルギー科学科及び機械航空工学科、工学府物質創造工学専攻、物質プロセス工学専攻、材料物性工学専攻、化学システム工学専攻、建設システム工学専攻、都市環境システム工学専攻、海洋システム工学専攻及びエネルギー量子工学専攻、システム情報科学府情報学専攻、情報知能工学専攻及び電気電子工学専攻並びに総合理工学府量子プロセス理工学専攻、物質理工学専攻、先端エネルギー理工学専攻、環境エネルギー工学専攻及び大気海洋環境システム学専攻は、この規則による改正後の九州大学学則第3条第1項及び第6条第1項の規定にかかわらず、令和3年3月31日に当該学科又は専攻に在学する者が在学しなくなる日までの間、存続するものとする。
 - 附 則（令和3年度九大規則第1号）
この規則は、令和3年5月1日から施行する。
 - 附 則
- 1 この規則は、令和4年4月1日から施行する。
- 2 芸術工学府芸術工学専攻及びデザインストラテジー専攻は、この規則による改正後の九州大

学学則第6条第1項の規定にかかわらず、令和3年3月31日に当該専攻に在学する者が在学しなくなる日までの間、存続するものとする。

九州大学学則の一部を改正する規則（案）

令和 3 年度 九 大 規 則 第 号
制 定：令和 4 年 3 月 日

工学部及び工学府を改組することに伴い、九州大学学則（平成 1 6 年度九大規則第 1 号）の一部を次のように改正する。

(新)	(旧)																
(略)	(略)																
(大学院)	(大学院)																
第 4 条 本学に、九州大学大学院（以下「本大学院」という。）を置く。	第 4 条 (同左)																
2・3 (略)	2・3 (略)																
第 5 条 本大学院に、学校教育法（昭和 2 2 年法律第 2 6 号）第 1 0 0 条ただし書に規定する研究科以外の教育研究上の基本となる組織として、教育上の目的に応じて組織する学府及び研究上の目的に応じ、かつ、教育上の必要性を考慮して組織する研究院を置く。	第 5 条 (同左)																
第 6 条 前条の本大学院に置く学府は、次の表の左欄に掲げるとおりとし、当該学府にそれぞれ同表の右欄に掲げる専攻を置く。	第 6 条 (同左)																
<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <thead> <tr> <th style="width: 50%; text-align: center;">学 府</th> <th style="width: 50%; text-align: center;">専 攻</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td colspan="2" style="text-align: center;">(略)</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">芸術工学府</td> <td style="text-align: center;">芸術工学専攻</td> </tr> <tr> <td colspan="2" style="text-align: center;">(略)</td> </tr> </tbody> </table>	学 府	専 攻	(略)		芸術工学府	芸術工学専攻	(略)		<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <thead> <tr> <th style="width: 50%; text-align: center;">学 府</th> <th style="width: 50%; text-align: center;">専 攻</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td colspan="2" style="text-align: center;">(略)</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">芸術工学府</td> <td style="text-align: center;">芸術工学専攻、デザイン ストラテジー専攻</td> </tr> <tr> <td colspan="2" style="text-align: center;">(略)</td> </tr> </tbody> </table>	学 府	専 攻	(略)		芸術工学府	芸術工学専攻、デザイン ストラテジー専攻	(略)	
学 府	専 攻																
(略)																	
芸術工学府	芸術工学専攻																
(略)																	
学 府	専 攻																
(略)																	
芸術工学府	芸術工学専攻、デザイン ストラテジー専攻																
(略)																	
2～8 (略)	2～8 (略)																
(略)	(略)																

附 則

- 1 この規則は、令和 4 年 4 月 1 日から施行する。
- 2 芸術工学府芸術工学専攻及びデザインストラテジー専攻は、この規則による改正後の九州大学学則第 6 条第 1 項の規定にかかわらず、令和 4 年 3 月 3 1 日に当該学科に在学する者が在学しなくなる日までの間、存続するものとする。

目次

- 第1章 総則（第1条～第8条）
- 第2章 入学、再入学、転学及び編入学等（第9条～第17条の3）
- 第3章 教育方法等（第17条の4～第26条）
- 第4章 修了要件及び学位授与（第27条～第32条）
- 第5章 退学、留学及び休学（第33条～第36条）
- 第6章 表彰、除籍及び懲戒（第37条～第40条）
- 第7章 検定料、入学料、授業料及び寄宿料（第41条～第45条）
- 第8章 科目等履修生、聴講生、特別聴講学生、研究生及び特別研究学生（第46条～第51条）
- 第9章 専門職大学院の教育方法等（第52条～第58条）

附則

第1章 総則
（趣旨）

第1条 この規則は、九州大学学則（平成16年度九大規則第1号）第6条第8項の規定に基づき、学府の修業年限、教育方法、学生の入学、退学、修了その他の学生の修学上必要な事項を定めるものとする。

（修業年限等）

第2条 博士課程（医学系学府医学専攻、歯学府及び薬学府臨床薬学専攻の博士課程を除く。）の標準修業年限は、5年とする。

【大学院設置基準第4条】

2 医学系学府医学専攻、歯学府及び薬学府臨床薬学専攻の博士課程の標準修業年限は、4年とする。

【大学院設置基準第36条】

3 後期3年の課程のみの博士課程（以下「後期のみの博士課程」という。）の標準修業年限は、3年とする。

【大学院設置基準第4条】

4 博士課程（医学系学府医学専攻、歯学府及び薬学府臨床薬学専攻の博士課程を除く。）は、これを前期2年及び後期3年の課程に区分し、前期2年の課程は、修士課程として取り扱うものとする。

【大学院設置基準第4条】

5 前項の規定にかかわらず、システム生命科学府の博士課程にあつては、この区分を設けないものとする。

6 第4項の前期2年及び後期3年の課程並びに前項の課程は、それぞれ「修士課程」及び「博士後期課程」並びに「一貫制博士課程」という。

7 修士課程の標準修業年限は、2年とする。

【大学院設置基準第3条】

8 前項の規定にかかわらず、修士課程においては、主として実務の経験を有する者に対して教育を行う場合であつて、教育研究上の必要があり、かつ、昼間と併せて夜間その他の特定の時間又は時期において授業又は研究指導を行う等の適切な方法により教育上支障を生じないときは、各学府規則の定めるところにより、専攻又は学生の履修上の区分に応じ、標準修業年限を1年以上2年未満とすることができる。

【大学院設置基準第3条】

第3条 専門職学位課程（法務学府実務法学専攻（以下「法科大学院」という。）を除く。）の標準修業年限は、2年とする。

【専門職大学院設置基準第2条】

2 法科大学院の標準修業年限は、3年とする。

【専門職大学院設置基準第18条】

(在学期間の限度)

第4条 九州大学大学院（以下「本大学院」という。）における同一学府の在学期間の限度は、修士課程は4年、博士後期課程及び後期のみの博士課程は6年、一貫制博士課程は10年とする。

2 医学系学府医学専攻、歯学府及び薬学府臨床薬学専攻の博士課程は、8年とする。

第5条 専門職学位課程（法科大学院を除く。）における在学期間の限度は4年とし、法科大学院における在学期間の限度は6年とする。

(定員)

第6条 各学府の学生の定員は、別表第1、別表第2及び別表第3のとおりとする。

(学年及び学期)

第7条 学年は4月1日に始まり、翌年3月31日に終る。

【学教法規則第163条】

2 学期の区分は、各学府規則において定める。

3 前項に定める各学期は、2つの授業期間に区分することができる。

【大学院設置基準第15条、大学設置基準第23条】

(休業日)

第8条 休業日（授業を行わない日）は、次のとおりとする。

日曜日及び土曜日

国民の祝日に関する法律（昭和23年法律第178号）に規定する休日

九州大学記念日 5月11日

別に定める春季、夏季及び冬季の各休業日

2 臨時の休業日は、その都度定める。

3 前2項の休業日において、特に必要がある場合には、授業を行うことがある。

第2章 入学、再入学、転学及び編入学等

(入学の時期)

第9条 学生の入学の時期は、学年の始めとする。ただし、特に必要があり、かつ、教育上支障がないと認めるときは、学期の始めに入学させることができる。

【学教法規則第163条】

(修士課程、一貫制博士課程及び専門職学位課程の入学資格)

第10条 修士課程、一貫制博士課程及び専門職学位課程に入学することのできる者は、次の各号のいずれかに該当する者とする。

(1) 学校教育法（昭和22年法律第26号）第83条に定める大学を卒業した者

(2) 学校教育法第104条第7項の規定により学士の学位を授与された者

(3) 外国において学校教育における16年の課程を修了した者

(4) 外国の学校が行う通信教育における授業科目を我が国において履修することにより当該外国の学校教育における16年の課程を修了した者

(5) 我が国において、外国の大学の課程（その修了者が当該外国の学校教育における16年の課程を修了したとされるものに限る。）を有するものとして当該外国の学校教育制度において位置付けられた教育施設であって、文部科学大臣が指定するものの当該課程を修了した者

(6) 外国の大学その他の外国の学校（その教育研究活動等の総合的な状況について、当該外国の政府又は関係機関の認証を受けた者による評価を受けたもの又はこれに準ずるものとして文部科学大臣が別に指定するものに限る。）において、修業年限が3年以上である課程を修了すること（当該外国の学校が行う通信教育における授業科目を我が国において履修することにより当該課程を修了すること及び当該外国の学校教育制度において位置付けられた教育施設であって前号の指定を受けたものにおいて課程を修了することを含む。）により、学士の学位に相当する学位を授与された者

(7) 専修学校の専門課程（修業年限が4年以上であることその他の文部科学大臣が定める基準を満たすものに限る。）で文部科学大臣が別に指定するものを文部科学大臣が定める日以後

に修了した者

- (8) 文部科学大臣の指定した者
- (9) 学校教育法第102条第2項の規定により大学院に入学した者であって、本大学院の学府において、本大学院の学府における教育を受けるにふさわしい学力があると認められたもの
- (10) 本大学院の学府において、個別の入学資格審査により、大学を卒業した者と同等以上の学力があると認められた者で、22歳に達したもの **【学教法第102条、学教法規則第155条】**

2 前項の規定にかかわらず、次の各号のいずれかに該当する者であって、本大学院の学府の定める単位を優秀な成績で修得したと認めるものを、修士課程、一貫制博士課程及び専門職学位課程に入学させることができる。

- (1) 学校教育法第83条に定める大学に3年以上在学した者
- (2) 外国において学校教育における15年の課程を修了した者
- (3) 外国の学校が行う通信教育における授業科目を我が国において履修することにより当該外国の学校教育における15年の課程を修了した者
- (4) 我が国において、外国の大学の課程（その修了者が当該外国の学校教育における15年の課程を修了したとされるものに限る。）を有するものとして当該外国の学校教育制度において位置付けられた教育施設であって、文部科学大臣が指定するものの当該課程を修了した者

【学教法第102条、学教法規則第159条、第160条】

（博士後期課程及び後期のみ博士課程の入学資格）

第11条 博士後期課程及び後期のみ博士課程に入学することのできる者は、次の各号のいずれかに該当する者とする。

- (1) 修士の学位又は専門職学位を有する者
- (2) 外国において修士の学位又は専門職学位に相当する学位を授与された者
- (3) 外国の学校が行う通信教育における授業科目を我が国において履修し、修士の学位又は専門職学位に相当する学位を授与された者
- (4) 我が国において、外国の大学院の課程を有するものとして当該外国の学校教育制度において位置付けられた教育施設であって、文部科学大臣が指定するものの当該課程を修了し、修士の学位又は専門職学位に相当する学位を授与された者
- (5) 国際連合大学本部に関する国際連合と日本国との間の協定の実施に伴う特別措置法（昭和51年法律第72号）第1条第2項に規定する1972年12月11日の国際連合総会決議に基づき設立された国際連合大学（以下「国際連合大学」という。）の課程を修了し、修士の学位に相当する学位を授与された者
- (6) 外国の学校、第4号の指定を受けた教育施設又は国際連合大学の教育課程を履修し、第27条の2に規定する試験及び審査に相当するものに合格し、修士の学位を有する者と同等以上の学力があると認められた者
- (7) 文部科学大臣の指定した者
- (8) 本大学院の学府において、個別の入学資格審査により、修士の学位又は専門職学位を有する者と同等以上の学力があると認められた者で、24歳に達したもの

【学教法第102条、学教法規則第156条】

（医学系学府医学専攻、歯学府及び薬学府臨床薬学専攻の博士課程の入学資格）

第12条 医学系学府医学専攻、歯学府及び薬学府臨床薬学専攻の博士課程に入学することのできる者は、次の各号のいずれかに該当する者とする。

- (1) 大学の医学、歯学、薬学又は獣医学を履修する課程を卒業した者
- (2) 外国において学校教育における18年の課程を修了した者
- (3) 外国の学校が行う通信教育における授業科目を我が国において履修することにより当該外国の学校教育における18年の課程を修了した者
- (4) 我が国において、外国の大学の課程（その修了者が当該外国の学校教育における18年の課程を修了したとされるものに限る。）を有するものとして当該外国の学校教育制度において

て位置付けられた教育施設であって、文部科学大臣が指定するものの当該課程を修了した者

(5) 外国の大学その他の外国の学校（その教育研究活動等の総合的な状況について、当該外国の政府又は関係機関の認証を受けた者による評価を受けたもの又はこれに準ずるものとして文部科学大臣が別に指定するものに限る。）において、修業年限が5年以上である課程を修了すること（当該外国の学校が行う通信教育における授業科目を我が国において履修することにより当該課程を修了すること及び当該外国の学校教育制度において位置付けられた教育施設であって前号の指定を受けたものにおいて課程を修了することを含む。）により、学士の学位に相当する学位を授与された者

(6) 文部科学大臣の指定した者

(7) 学校教育法第102条第2項の規定により大学院に入学した者であって、本大学院の学府において、本大学院の学府における教育を受けるにふさわしい学力があると認めたもの

(8) 本大学院の学府において、個別の入学資格審査により、大学を卒業した者と同等以上の学力があると認めた者で、24歳に達したもの **【学教法第102条、学教法規則第155条】**

2 前項の規定にかかわらず、次の各号のいずれかに該当する者であって、本大学院の学府の定める単位を優秀な成績で修得したと認めるものを、医学系学府医学専攻、歯学府及び薬学府臨床薬学専攻の博士課程に入学させることができる。

(1) 大学の医学、歯学、薬学又は獣医学を履修する課程に4年以上在学した者

(2) 外国において学校教育における16年の課程を修了した者

(3) 外国の学校が行う通信教育における授業科目を我が国において履修することにより当該外国の学校教育における16年の課程を修了した者

(4) 我が国において、外国の大学の課程（その修了者が当該外国の学校教育における16年の課程を修了したとされるものに限る。）を有するものとして当該外国の学校教育制度において位置付けられた教育施設であって、文部科学大臣が指定するものの当該課程を修了した者

【学教法第102条、学教法規則第159条、第160条】

（入学資格審査）

第13条 第10条第1項第10号、第11条第8号及び前条第1項第8号の入学資格審査の実施方法等については、学府教授会の議を経て各学府長が別に定める。

（入学の出願）

第13条の2 入学を志願する者は、所定の期日までに、入学志願票、所定の入学検定料その他別に定める書類を添えて願出しなければならない。

（入学者選抜）

第14条 前条の入学を志願する者については、入学者選抜を行う。

2 入学者選抜の細部については、学府教授会の議を経て各学府長が別に定める。

第14条の2 本大学院の学府の修士課程を修了し、引き続き博士後期課程及び後期のみの博士課程へ進学を志願する者については前条の規定を準用するものとする。

（入学の手續及び許可）

第14条の3 総長は、第14条第1項の入学者選抜の結果合格した者で、所定の期日までに入学料の納付（入学料の全部若しくは一部の免除又は徴収猶予を受けようとする者にあつては、当該免除又は徴収猶予に係る申請）及び所定の書類の提出を完了したものに入学を許可する。

（再入学）

第14条の4 第33条の規定により退学した後、再び同一学府に入学を志願する者については、選考の上、再入学を許可することがある。

（転学）

第15条 次の各号のいずれかに該当する者が、本大学院に転学を願い出たときは、学期の始めに限り、考査の上、転学を許可することがある。

(1) 他の大学院に在学する者

(2) 我が国において、外国の大学院の課程を有するものとして当該外国の学校教育制度におい

て位置付けられた教育施設であって、文部科学大臣が別に指定するものの当該課程に在学した者（学校教育法第102条第1項に規定する者に限る。）及び国際連合大学の課程に在学した者

2 前項の転学願は、当該大学長又は所属研究科等の長の紹介状を添えて、志望する本大学院の学府の長に提出するものとする。

3 第1項により転学を許可された者が既に履修した授業科目及び修得した単位並びに在学年数の認否は、学府教授会の議を経て学府長がその都度決定する。

第16条 本大学院の学府の学生が、他大学の大学院に転学しようとするときは、学府長を経て、総長に転学願を提出するものとする。

2 総長は、転学の事由が適当であると認めるときは、その転学を許可する。

（転学府及び専攻の変更）

第17条 本大学院の学府に在学する者が、本大学院の他の学府に転学府を願い出たときは、当該他の学府の学府長は、学期の始めに限り、審査の上、許可することがある。

2 前項の規定により本大学院の学府の学生が、他の学府に転学府しようとするときは、指導教員を経て、学府長に転学府願を提出し、当該学府長の許可を得るものとする。

3 第1項により転学府を許可された者が既に履修した授業科目及び修得した単位並びに在学年数の認否は、学府教授会の議を経て学府長がその都度決定する。

4 前項の規定は、専攻を変更する場合に準用する。

（編入学）

第17条の2 第11条各号のいずれかに該当する者が、本大学院の一貫制博士課程を置く学府の第3年次に編入学を願い出たときは、審査の上、許可することがある。

2 前項の編入学について必要な事項は、当該学府規則において別に定める。

（再入学等の手続及び許可）

第17条の3 再入学、転学（第16条の転学を除く。）及び編入学（以下「再入学等」という。）に係る手続及び許可については、第14条の3の規定を準用する。

第3章 教育方法等

（教育課程の編成方針）

第17条の4 総長は、本大学院の学府（専門職大学院を除く。）において、当該学府及び専攻の教育上の目的を達成するために必要な授業科目を開設するとともに学位論文の作成等に対する指導（以下「研究指導」という。）の計画を策定させ、体系的に教育課程を編成するものとする。

2 教育課程の編成に当たっては、専攻分野に関する高度の専門的知識及び能力を修得させるとともに、当該専攻分野に関連する分野の基礎的素養を涵養するよう適切に配慮するものとする。

【大学院設置基準第11条】

（大学院基幹教育）

第17条の5 本大学院に、学府ごとに編成する教育課程のほか、学府共通の課程を置く。

2 前項の課程を大学院基幹教育と称し、当該課程に関し必要な事項は、別に定める。

（卓越大学院プログラム）

第17条の6 本大学院に、卓越大学院プログラムを置く。

2 卓越大学院プログラムに関し必要な事項は、別に定める。

（未来共創リーダー育成プログラム）

第17条の7 本大学院に、未来共創リーダー育成プログラムを置く。

2 未来共創リーダー育成プログラムに関し必要な事項は、別に定める。

（授業及び研究指導）

第18条 本大学院の学府の教育は、授業科目の授業及び研究指導（専門職大学院にあつては、授業科目の授業。以下同じ。）によって行うものとする。

【大学院設置基準第12条】

2 本大学院の学府は、前項の授業科目の授業を、多様なメディアを高度に利用して、当該授業

を行う教室等以外の場所で履修させることができる。

【大学院設置基準第15条、大学設置基準第25条】

3 本大学院の学府は、第1項の授業科目の授業を、外国において履修させることができる。前項の規定により、多様なメディアを高度に利用して、当該授業を行う教室等以外の場所で履修させる場合についても、同様とする。【大学院設置基準第15条、大学設置基準第25条】

4 本大学院の学府の教育に必要な授業科目、単位、研究指導等については、この規則に定めるもののほか、各学府規則において定める。

(単位の計算方法)

第18条の2 各授業科目の単位数は、1単位の授業科目を45時間の学修を必要とする内容をもって構成することを標準とし、授業の方法に応じ、当該授業による教育効果、授業時間外に必要な学修等を考慮して、次の基準により単位数を計算するものとする。

(1) 講義及び演習については、15時間から30時間までの範囲で、各学府規則に定める時間の授業をもって1単位とする。

(2) 実験、実習及び実技については、30時間から45時間までの範囲で、各学府規則に定める時間の授業をもって1単位とする。ただし、芸術等の分野における個人指導による実技の授業については、当該学府規則に定める時間の授業をもって1単位とすることができる。

(3) 一の授業科目について、講義、演習、実験、実習又は実技のうち2以上の方法の併用により行う場合については、その組み合わせに応じ、前2号に規定する基準を考慮して、当該学府規則に定める時間の授業をもって1単位とする。

【大学院設置基準第15条、大学設置基準第21条】

2 前項の規定にかかわらず、学位論文等の授業科目については、これらの学修の成果を評価して単位を授与することが適切と認める場合には、これらに必要な学修等を考慮して、単位数を定めることができる。【大学院設置基準第15条、大学設置基準第21条】

(成績評価基準等の明示等)

第18条の3 学府長は、学生に対して、授業科目の授業及び研究指導の方法及び内容並びに1年間の授業及び研究指導の計画をあらかじめ明示するものとする。

2 学修の成果及び学位論文(専門職大学院にあっては、学修の成果)に係る評価並びに修了の認定に当たっては、客観性及び厳格性を確保するため、学生に対してその基準をあらかじめ明示するとともに、当該基準にしたがって適切に行うものとする。

【大学院設置基準第14条の2】

(教育内容等の改善のための組織的な研修等)

第18条の4 学府長は、当該学府の授業科目の授業及び研究指導の内容及び方法の改善を図るための組織的な研修及び研究を実施するものとする。【大学院設置基準第14条の3】

(授業科目の選定等)

第19条 履修する授業科目の選定は、指導教員の指示に従うものとする。

2 各学府規則で定めるところにより、教育上有益と認めるときは、他の専攻若しくは大学院基幹教育若しくは学部又は学部の課程による授業科目及び単位を指定して、履修させることができる。

3 前項により修得した単位は、第27条から第29条まで、又は第56条の課程修了の要件となる単位に充当することができる。

(試験)

第20条 履修した各授業科目の合格又は不合格は、試験又は研究報告によって認定する。

2 前項の試験は、毎学期末又は毎学年末に行うものとする。ただし、病気その他やむを得ない事由のため、受験できなかった者に対しては、追試験を行うことがある。

(成績)

第21条 各授業科目の成績は、S、A、B、C及びFの5種の評語をもってあらわし、S、A、B及びCを合格とし、Fを不合格とする。

- 2 合格した授業科目については、所定の単位を与える。
- 3 不合格の授業科目については、再試験を受けさせることができる。
(他の大学院における授業科目の履修等)

第22条 学府長は、教育上有益と認めるときは、学生が他の大学院において履修した授業科目について修得した単位を、本大学院の学府における授業科目の履修により修得したものとみなすことができる。【大学院設置基準第15条、大学設置基準28条】

- 2 前項の規定は、学生が、外国の大学院に留学する場合、外国の大学院が行う通信教育における授業科目を我が国において履修する場合、外国の大学院の教育課程を有するものとして当該外国の学校教育制度において位置付けられた教育施設であって、文部科学大臣が別に指定するものの当該教育課程における授業科目を我が国において履修する場合及び国際連合大学の教育課程の授業科目を履修する場合について準用する。

【大学院設置基準第15条、大学設置基準28条】

- 3 学府長は、教育上有益と認めるときは、他の大学院等との協議に基づき、学生が他の大学院等において必要な研究指導を受けることを認めることができる。ただし、修士課程の学生について認める場合には、当該研究指導を受けさせる期間は、1年を超えないものとする。

【大学院設置基準第13条】

(休学期間中の外国の大学院における授業科目の履修)

第23条 学府長は、教育上有益と認めるときは、学生が休学期間中に外国の大学院において履修した授業科目について修得した単位を、本大学院の学府における授業科目の履修により修得したものとみなすことができる。

(他の大学院における授業科目の履修により修得した単位の上限)

第24条 前2条の規定により本大学院の学府において修得したものとみなすことのできる単位数は、第15条、第17条及び第17条の2に規定する転学等の場合を除き、合わせて15単位を超えないものとする。【大学院設置基準第15条、大学設置基準28条】

(入学前の既修得単位の認定)

第25条 学府長は、教育上有益と認めるときは、学生が本大学院の学府に入学する前に大学院において履修した授業科目について修得した単位(大学院設置基準(昭和49年文部省令第28号)第15条の規定により科目等履修生として修得した単位を含む。)を、本大学院の学府に入学した後本大学院の学府における授業科目の履修により修得したものとみなすことができる。【大学院設置基準第15条、大学設置基準30条】

- 2 前項の規定により、各学府において、修得したものとみなすことのできる単位数は、第15条、第17条及び第17条の2に規定する転学等の場合を除き、本大学院において修得した単位以外のものについては、15単位を超えないものとする。

【大学院設置基準第15条、大学設置基準30条】

(本大学院における授業科目の履修により修得したものとみなすことのできる単位の上限)

第25条の2 前2条の規定により本大学院の学府において修得したものとみなすことのできる単位数は、合わせて20単位を超えないものとする。

【大学院設置基準第15条、大学設置基準30条】

(長期にわたる教育課程の履修)

第26条 学生が、職業を有している等の事情により、標準修業年限を超えて一定の期間にわたり計画的に教育課程を履修し課程を修了することを希望する旨を学府長に申し出たときは、学府教授会の議を経て学府長が定めるところにより、その計画的な履修を認めることができる。

【大学院設置基準第15条、大学設置基準第30条の2】

第4章 修了要件及び学位授与

(修士課程の修了要件)

第27条 修士課程の修了要件は、修士課程に2年(2年以外の標準修業年限を定める専攻又は学生の履修上の区分にあつては、当該標準修業年限)以上在学し、各学府規則で定められた授

業科目を履修し、30単位以上を修得し、かつ、必要な研究指導を受けた上、当該修士課程の目的に応じ、修士論文又は特定の課題についての研究の成果の審査及び最終試験に合格することとする。ただし、在学期間に関しては、総長が認めるときは、優れた業績を上げた者については、修士課程に1年以上在学すれば足りるものとする。

【大学院設置基準第16条】

第27条の2 第2条第4項の規定により修士課程として取り扱うものとする博士課程の前期の課程の修了の要件は、当該博士課程の目的を達成するために必要と認められる場合には、各学府規則で定めるところにより、前条に規定する修士論文又は特定の課題についての研究の成果の審査及び最終試験に合格することに代えて、次に掲げる試験及び審査に合格することとすることができる。

- (1) 専攻分野に関する高度の専門的知識及び能力並びに当該専攻分野に関連する分野の基礎的素養であって当該前期の課程において修得し、又は涵養すべきものについての試験
- (2) 博士論文に係る研究を主体的に遂行するために必要な能力であって当該前期の課程において修得すべきものについての審査

【大学院設置基準第16条の2】

(博士課程の修了要件)

第28条 博士課程（医学系学府医学専攻、歯学府及び薬学府臨床薬学専攻の博士課程を除く。以下本条において同じ。）の修了要件は、博士課程に5年（修士課程に2年以上在学し、当該課程を修了した者にあつては、当該課程における2年の在学期間を含む。）以上在学し、各学府規則で定めるところにより、所定の授業科目を履修し、30単位以上の所定の単位を修得し、かつ、必要な研究指導を受けた上、博士論文の審査及び最終試験に合格することとする。ただし、在学期間に関しては、総長が認めるときは、優れた研究業績を上げた者については、博士課程に3年（修士課程に2年以上在学し、当該課程を修了した者にあつては、当該課程における2年の在学期間を含む。）以上在学すれば足りるものとする。

【大学院設置基準第17条】

2 第2条第8項の規定により標準修業年限を1年以上2年未満とした修士課程を修了した者及び第27条ただし書の規定による在学期間をもって修士課程を修了した者の博士課程の修了要件については、前項中「5年（修士課程に2年以上在学し、当該課程を修了した者にあつては、当該課程における2年の在学期間を含む。）」とあるのは「修士課程における在学期間に3年を加えた期間」と、「3年（修士課程に2年以上在学し、当該課程を修了した者にあつては、当該課程における2年の在学期間を含む。）」とあるのは「3年（修士課程における在学期間を含む。）」と読み替えて、同項の規定を適用する。

【大学院設置基準第17条】

3 第1項及び第2項の規定にかかわらず、学校教育法施行規則（昭和22年文部省令第11号）第156条の規定により本大学院の学府への入学資格に関し修士の学位若しくは専門職学位を有する者と同等以上の学力があると認められた者又は専門職学位課程を修了した者が博士後期課程に入学した場合の博士課程の修了要件は、博士後期課程に3年（法科大学院の課程を修了した者にあつては、2年）以上在学し、必要な研究指導を受けた上、博士論文の審査及び最終試験に合格することとする。ただし、在学期間に関しては、総長が認めるときは、優れた研究業績を上げた者については、博士後期課程に1年（標準修業年限が1年以上2年未満の専門職学位課程を修了した者にあつては、3年から当該1年以上2年未満の期間を減じた期間）以上在学すれば足りるものとする。

【大学院設置基準第17条】

4 各学府規則で定めるところにより、前項の修了要件として、更に所定の授業科目を履修し、所定の単位を修得することを加えることができる。

(医学系学府医学専攻、歯学府及び薬学府臨床薬学専攻の博士課程の修了要件)

第29条 医学系学府医学専攻、歯学府及び薬学府臨床薬学専攻の博士課程の修了要件は、医学系学府医学専攻、歯学府及び薬学府臨床薬学専攻の博士課程に4年以上在学し、各学府規則で定めるところにより、所定の授業科目を履修し、30単位以上の所定の単位を修得し、かつ、

必要な研究指導を受けた上、博士論文の審査及び最終試験に合格することとする。ただし、総長が認めるときは、在学期間に関しては、優れた研究業績を上げた者については、医学系学府医学専攻、歯学府及び薬学府臨床薬学専攻の博士課程に3年以上在学すれば足りるものとする。

【大学院設置基準44条】

(大学院における在学期間の短縮)

第29条の2 第25条の規定により学生が本大学院の学府に入学する前に修得した単位(学校教育法第102条第1項の規定により入学資格を有した後、修得したものに限る。)を本大学院の学府において修得したものとみなす場合であって、当該単位の修得により本大学院の修士課程又は博士課程(前期及び後期の課程に区分する博士課程における後期の課程を除く。)の教育課程の一部を履修したと認めるときは、当該単位数、その修得に要した期間その他を勘案して1年を超えない範囲で本大学院の学府が定める期間在学したものとみなすことができる。ただし、この場合においても、修士課程については、当該課程に少なくとも1年以上在学するものとする。

【大学院設置基準18条】

2 前項の規定は、修士課程を修了した者の第28条第1項(第28条第2項の規定により読み替えて適用する場合を含む。以下この項において同じ。)に規定する博士課程における在学期間(第28条第1項の規定により博士課程における在学期間を含む修士課程における在学期間を除く。)については、適用しない。

【大学院設置基準18条】

(後期のみの博士課程の修了要件)

第29条の3 後期のみの博士課程の修了要件は、後期のみの博士課程に3年以上在学し、必要な研究指導を受けた上、博士論文の審査及び最終試験に合格することとする。ただし、総長が認めるときは、在学期間に関しては、優れた研究業績を上げたものについては、後期のみの博士課程に1年(第27条ただし書の規定による在学期間をもって修士課程を修了した者については、当該課程における在学期間を含めて3年)以上在学すれば足りるものとする。

2 各学府規則で定めるところにより、前項の修了要件として、更に所定の授業科目を履修し、所定の単位を修得することを加えることができる。

(学位論文等及び最終試験)

第30条 第27条から前条までの最終試験は、学位論文又は特定の課題についての研究の成果(以下「学位論文等」という。)を中心とし、これに関連のある授業科目について、行うものとする。

第31条 学位論文等及び最終試験の合格又は不合格は、学府教授会において審査する。

2 論文審査及び最終試験の細部については、別に定める。

(学位の授与)

第32条 修士課程、博士課程又は専門職学位課程を修了した者には、九州大学学位規則(平成16年度九大規則第86号)の定めるところにより、学位を授与するものとする。

【学教法第104条、学位規則第2条】

2 前項に規定するもののほか、一貫制博士課程において、第27条及び第27条の2に規定する修了要件を満たした者にも、修士の学位を授与することができる。

第5章 退学、留学及び休学

(退学)

第33条 学生が退学しようとするときは、学府長を経て総長に退学許可願を提出し、その許可を受けなければならない。

(留学)

第34条 外国の大学院等に留学を志願する学生は、学府長に留学願を提出し、その許可を受けなければならない。

2 前項の許可を得て留学した期間は、第27条から第29条まで、又は第56条の課程修了の要件としての在学期間に通算することができる。

(休学)

第35条 疾病又は経済的理由のため2月以上修学できない学生は、学府長の許可を得て、その学年の終りまで休学することができる。

2 前項のほか、特別の事情があると認められたときは、学府長は、休学を許可することができる。

3 疾病のため修学が不相当と認められる学生に対しては、学府長は、休学を命ずることができる。

4 休学期間中に、その事由が消滅したときは、学府長の許可を得て、復学することができる。

5 休学した期間は、在学期間に算入しない。

6 休学期間は、修士課程においては2年を、博士後期課程及び後期のみの博士課程においては3年を、一貫制博士課程においては5年を超えることができない。

7 医学系学府医学専攻、歯学府及び薬学府臨床薬学専攻の博士課程における休学期間は4年を超えることができない。

第36条 専門職学位課程（法科大学院を除く。）における休学期間は2年を超えることができない。

2 法科大学院における休学期間は3年を超えることができない。

第6章 表彰、除籍及び懲戒

（表彰）

第37条 学生に表彰に値する行為があったときは、総長がこれを表彰することがある。

2 表彰に関し必要な事項は、別に定める。

（除籍）

第38条 総長は、学府長の報告により学生が次の各号のいずれかに該当すると認めるときは、当該学生を除籍する。

(1) 欠席が長期にわたるとき。

(2) 成業の見込みがないとき。

(3) 長期間にわたり行方不明のとき。

(4) 第4条又は第5条に規定する在学期間の限度を超えたとき。

(5) 第35条第6項若しくは第7項又は第36条に規定する休学期間の限度を超えてなお復学できないとき。

第39条 総長は、学生が次の各号のいずれかに該当するとき、当該学生を除籍する。

(1) 入学料の一部を免除された者若しくは免除を不許可とされた者又は入学料の徴収を猶予された者若しくは徴収の猶予を不許可とされた者が、所定の期日までに入学料を納付しないとき。

(2) 授業料の納付を怠り、督促を受けてなお納付しないとき。

（懲戒）

第40条 総長は、学生が九州大学（以下「本学」という。）の規則に違反し、又はその本分に反する行為があったときは、当該学生を懲戒する。

2 前項の場合における懲戒は、訓告、停学及び退学とする。

3 懲戒の手續その他懲戒に関し必要な事項は、別に定める。

第7章 検定料、入学料、授業料及び寄宿料

（検定料）

第41条 入学及び再入学等を志願する者は、検定料を納付しなければならない。

（入学料）

第42条 入学及び再入学等に当たっては、入学料を納付しなければならない。

2 入学料の納付が困難な者に対し、その全部若しくは一部を免除し、又は徴収猶予することができる。

3 前項の入学料の免除及び徴収猶予に関し必要な事項は、別に定める。

（授業料）

第43条 各年度に係る授業料は、次の表に掲げる納付区分ごとに、それぞれ授業料の年額の2分の1に相当する額を同表に掲げる納期に納付しなければならない。ただし、当該期の授業料の免除、徴収猶予又は月割分納を申請した者の納期については、この限りでない。

納 付 区 分	納 期
前期（4月1日から9月30日まで）	4月30日まで
後期（10月1日から3月31日まで）	10月31日まで

- 2 休学が前項に定めた授業料納付区分の全期間である場合は、その期間分の授業料を免除する。
- 3 経済的理由により授業料を納付することが困難であると認められ、かつ、学業が優秀と認められる者その他やむを得ない特別の事情があると認められる者については、授業料の全部若しくは一部を免除し、徴収猶予し、又は月割分納を許可することができる。
- 4 前項の授業料の免除、徴収猶予及び月割分納に関し必要な事項は、別に定める。

（寄宿料）

第44条 寄宿舎に入居した者は、所定の期日までに、寄宿料を納付しなければならない。

- 2 前項の規定にかかわらず、特別の事情があると認められる者については、寄宿料を免除することができる。

（検定料、入学料、授業料及び寄宿料の額等）

第45条 検定料、入学料、授業料及び寄宿料の額、徴収方法その他の必要な事項については、国立大学法人九州大学における授業料その他の費用に関する規程（平成16年度九大会規第12号。以下「費用規程」という。）に定める。

第8章 科目等履修生、聴講生、特別聴講学生、研究生及び特別研究学生

（科目等履修生）

第46条 本学の学生以外の者で、学府の授業科目のうち一又は複数履修することを志願する者があるときは、科目等履修生として入学を許可することができる。

【大学院設置基準第15条、大学設置基準31条】

- 2 科目等履修生に関し必要な事項は、別に定める。

（聴講生）

第47条 本学において、学府又は第17条の5第2項に定める大学院基幹教育で開講する特定の授業科目を聴講することを志願する者があるときは、教育研究上支障がない場合に限り、選考の上、聴講生として入学を許可することができる。

- 2 聴講生に関し必要な事項は、別に定める。

（特別聴講学生）

第48条 他の大学院又は外国の大学院の学生で、本学において、学府の開講する特定の授業科目を履修することを志願する者があるときは、当該他の大学院又は外国の大学院との協議に基づき、特別聴講学生として入学を許可することができる。

- 2 特別聴講学生に関し必要な事項は、別に定める。

（研究生）

第49条 学府において、特定の専門事項について研究することを志願する者があるときは、当該学府の教育研究上支障がない場合に限り、選考の上、研究生として入学を許可することができる。

- 2 研究生に関し必要な事項は、別に定める。

（特別研究学生）

第50条 他の大学院又は外国の大学院の学生で、本学の学府又は研究所等において、研究指導を受けることを志願する者があるときは、当該他の大学院又は外国の大学院との協議に基づき、

特別研究学生として研究指導を受けることを認めることがある。

2 特別研究学生に関し必要な事項は、別に定める。

(授業料等)

第51条 科目等履修生、聴講生、特別聴講学生、研究生及び特別研究学生の検定料、入学料及び授業料の額、徴収方法その他の必要な事項については、費用規程に定める。

第9章 専門職大学院の教育方法等

(教育課程)

第52条 総長は、専門職大学院において、その教育上の目的を達成するために専攻分野に応じ必要な授業科目を、産業界等と連携しつつ開設し、体系的に教育課程を編成するものとする。

【専門職大学院設置基準第6条】

(教育課程連携協議会)

第52条の2 専門職大学院に、産業界等との連携により、教育課程を編成し、及び円滑かつ効果的に実施するため、教育課程連携協議会を置く。

2 教育課程連携協議会の任務、組織その他必要な事項は、別に定める。

(授業の方法等)

第53条 専門職大学院においては、その目的を達成し得る実践的な教育を行うよう専攻分野に応じ事例研究、現地調査又は双方向若しくは多方向に行われる討論若しくは質疑応答その他の適切な方法により授業を行うものとする。

【専門職大学院設置基準第8条】

2 第18条第2項の規定により多様なメディアを高度に利用して授業を行う教室等以外の場所で履修させることは、これによって十分な教育効果が得られる専攻分野に関して、当該効果が認められる授業について、行うことができるものとする。

【専門職大学院設置基準第8条】

(履修科目の登録の上限)

第54条 専門職大学院は、学生が各年次にわたって適切に授業科目を履修するため、学生が1年間又は1学期に履修科目として登録することができる単位数の上限を定めるものとする。

【専門職大学院設置基準第12条】

(専門職大学院において修得したものとみなすことのできる単位数の限度)

第55条 第22条(第3項を除く。)、第23条及び第25条第1項の規定により専門職大学院において修得したものとみなすことのできる単位数は、第24条及び第25条第2項の規定にかかわらず、第15条及び第17条の規定の転学等の場合を除き、合わせて専門職大学院が修了要件として定める30単位以上の単位数の2分の1を超えないものとする。

【専門職大学院設置基準第13条、第14条】

2 前項の規定にかかわらず、第22条(第3項を除く。)、第23条、第25条第1項及び第58条第1項の規定により法科大学院において修得したものとみなすことのできる単位数は、第24条及び第25条第2項の規定にかかわらず、第15条及び第17条の規定の転学等の場合を除き、合わせて33単位を超えないものとする。

【専門職大学院設置基準第21条、第22条】

(専門職学位課程の修了要件)

第56条 専門職学位課程(法科大学院を除く。)の修了の要件は、専門職学位課程に2年以上在学し、当該学府規則で定められた授業科目を履修し、30単位以上の修得その他の教育課程の履修により課程を修了することとする。

【専門職大学院設置基準第15条】

2 法科大学院の修了の要件は、法科大学院に3年以上在学し、当該大学院規則で定められた授業科目を履修し、93単位以上の所定の単位を修得することとする。

【専門職大学院設置基準第23条】

3 専門職大学院において、必要と認めるときは、前2項の修了要件としての単位数に、更に単位数を加えることができる。

(専門職学位課程の在学期間の短縮)

第57条 専門職大学院は、第25条第1項の規定により、専門職大学院に入学する前に修得し

た単位(学校教育法第102条第1項の規定により入学資格を有した後、修得したものに限る。)を専門職大学院において修得したものとみなす場合であって当該単位の修得により当該専門職大学院の教育課程の一部を履修したと認めるときは、当該単位数、その修得に要した期間その他を勘案して1年を超えない範囲で専門職大学院が定める期間在学したものとみなすことができる。

【専門職大学院設置基準第16条】

(法科大学院の法学既修者)

第58条 法科大学院は、法科大学院において必要とされる法学の基礎的な学識を有すると認める者(以下「法学既修者」という。)に関しては、第56条第2項に規定する在学期間については1年を超えない範囲で法科大学院が認める期間在学し、同項に規定する単位については、法科大学院が認める単位を修得したものとみなすことができる。

【専門職大学院設置基準第25条】

2 前項の規定により法学既修者について在学したものとみなすことのできる期間は、前条の規定により在学したものとみなす期間と合わせて1年を超えないものとする。

【専門職大学院設置基準第25条】

附 則

- 1 この規則は、平成16年4月1日から施行する。
- 2 平成16年3月31日に本大学院に在学し、平成16年4月1日以降も引き続き在学する者の教育課程の履修その他当該学生の教育に必要な事項については、九州大学大学院学則(昭和50年5月20日施行)等の規定によるものとする。

附 則(平成16年度九大規則第195号)

この規則は、平成17年4月1日から施行する。

附 則(平成17年度九大規則第32号)

この規則は、平成18年4月1日から施行する。

附 則(平成18年度九大規則第39号)

この規則は、平成19年4月1日から施行する。

附 則(平成19年度九大規則第33号)

この規則は、平成19年12月26日から施行する。

附 則(平成19年度九大規則第60号)

この規則は、平成20年4月1日から施行する。

附 則(平成20年度九大規則第39号)

この規則は、平成21年4月1日から施行する。

附 則(平成21年度九大規則第51号)

この規則は、平成22年4月1日から施行する。

附 則(平成22年度九大規則第84号)

この規則は、平成23年4月1日から施行する。

附 則(平成23年度九大規則第82号)

この規則は、平成24年4月1日から施行する。

附 則(平成24年度九大規則第1号)

この規則は、平成24年5月1日から施行し、平成24年3月14日から適用する。

附 則(平成24年度九大規則第30号)

この規則は、平成24年12月1日から施行する。

附 則(平成24年度九大規則第48号)

この規則は、平成25年4月1日から施行する。

附 則(平成25年度九大規則第85号)

- 1 この規則は、平成26年4月1日から施行する。
- 2 この規則による改正後の九州大学大学院通則第55条第2項の規定は、平成26年4月1日に九州大学法務学府実務法学専攻に入学する者から適用し、同年3月31日に同専攻に在学し、

同年4月1日以降も引き続き在学する者については、なお従前の例による。

附 則（平成26年度九大規則第79号）

この規則は、平成27年4月1日から施行する。

附 則（平成27年度九大規則第37号）

この規則は、平成28年4月1日から施行する。

附 則（平成28年度九大規則第4号）

この規則は、平成28年6月1日から施行し、平成28年4月1日から適用する。

附 則（平成28年度九大規則第87号）

この規則は、平成29年4月1日から施行する。

附 則（平成29年度九大規則第69号）

この規則は、平成30年4月1日から施行する。

附 則（平成30年度九大規則第62号）

この規則は、平成31年4月1日から施行する。

附 則（令和元年度九大規則第26号）

この規則は、令和2年4月1日から施行する。

附 則（令和2年度九大規則第6号）

- 1 この規則は、令和2年10月1日から施行する。
- 2 この規則による改正後の九州大学大学院通則（以下「新規則」という。）第10条第1項第2号の規定は、平成31年4月1日から適用する。
- 3 新規則第24条、第25条、第25条の2、第29条の2の規定は、令和2年6月30日から適用する。

附 則（令和2年度九大規則第38号）

この規則は、令和3年1月1日から施行する。

附 則（令和2年度九大規則第43号）

- 1 この規則は、令和3年4月1日から施行する。
- 2 この規則による改正後の九州大学大学院通則第21条及び第56条の規定は、令和3年4月1日に本学に入学する者から適用し、同年3月31日に本学に在学し、同年4月1日以降も引き続き在学する者については、なお従前の例による。

附 則（令和2年度九大規則第43号）

この規則は、令和4年4月1日から施行する。

別表第1 (第6条関係) (修士課程及び博士後期課程)

学 府 名	専 攻 名	学生定員					収 容 定 員
		修士課程		博士後期課程			
		1年次	2年次	1年次	2年次	3年次	
人文科学府	人文基礎専攻	16	16	7	7	7	187 うち修士課程 112 博士後期課程 75
	歴史空間論専攻	20	20	9	9	9	
	言語・文学専攻	20	20	9	9	9	
	計	56	56	25	25	25	
地球社会統合科学府	地球社会統合科学専攻	60	60	35	35	35	225 うち修士課程 120 博士後期課程 105
人間環境学府	都市共生デザイン専攻	20	20	5	5	5	310 うち修士課程 190 博士後期課程 120
	人間共生システム専攻	11	11	9	9	9	
	行動システム専攻	17	17	10	10	10	
	教育システム専攻	19	19	9	9	9	
	空間システム専攻	28	28	7	7	7	
	計	95	95	40	40	40	
法学府	法政理論専攻	72	62	17	17	17	185 うち修士課程 134 博士後期課程 51
経済学府	経済工学専攻	20	20	10	10	10	166 うち修士課程 94 博士後期課程 72
	経済システム専攻	27	27	14	14	14	
	計	47	47	24	24	24	
理学府	物理学専攻	41	41	14	14	14	429

	化学専攻	62	62	19	19	19	うち修士課程 288
	地球惑星科学専攻	41	41	14	14	14	博士後期課程 141
	計	144	144	47	47	47	
数理学府	数理学専攻	54	54	20	20	20	168 うち修士課程 108 博士後期課程 60
医学系学府	医科学専攻	20	20	—	—	—	124 うち修士課程 94 博士後期課程 30
	保健学専攻	27	27	10	10	10	
	計	47	47	10	10	10	
薬学府	創薬科学専攻	55	55	12	12	12	146 うち修士課程 110 博士後期課程 36
工学府	材料工学専攻	43	43	10	10	—	※ 1,193 1,173 うち修士課程 ※ 852 832 博士後期課程 341
	応用化学専攻	68	68	18	18	—	
	化学工学専攻	30	30	8	8	—	
	機械工学専攻	73	73	16	16	16	
	水素エネルギーシステム専攻	35	35	9	9	9	
	航空宇宙工学専攻	30	30	10	10	12	
	量子物理工学専攻	30	30	10	10	—	
	船舶海洋工学専攻	25	25	8	8	—	
	地球資源システム工学専攻	20	20	8	8	8	
	共同資源工学専攻	※ 20 10	※ 20 10	—	—	—	

	土木工学専攻	52	52	16	16	—	
	(物質創造工学専攻)	—	—	—	—	10	
	(物質プロセス工学専攻)	—	—	—	—	9	
	(材料物性工学専攻)	—	—	—	—	7	
	(化学システム工学専攻)	—	—	—	—	10	
	(建設システム工学専攻)	—	—	—	—	8	
	(都市環境システム工学専攻)	—	—	—	—	8	
	(海洋システム工学専攻)	—	—	—	—	8	
	(エネルギー量子工学専攻)	—	—	—	—	10	
	計	※ 426 416	※ 426 416	113	113	115	
芸術工学府	芸術工学専攻	120	—	30	—	—	330 うち修士課程 240 博士後期課程 90
	(芸術工学専攻)	—	92	—	25	25	
	(デザインストラテジー専攻)	—	28	—	5	5	
	計	120	120	30	30	30	
システム情報科学府	情報理工学専攻	105	105	29	29	—	475 うち修士課程 340 博士後期課程 135
	電気電子工学専攻	65	65	16	16	—	
	(情報学専攻)	—	—	—	—	14	
	(情報知能工学専攻)	—	—	—	—	15	
	(電気電子工学専攻)	—	—	—	—	16	
	計	170	170	45	45	45	

総合理工学府	総合理工学専攻	172	172	62	62	—	528
	(量子プロセス理工学専攻)	—	—	—	—	14	うち修士課程 344
	(物質理工学専攻)	—	—	—	—	14	博士後期課程 184
	(先端エネルギー理工学専攻)	—	—	—	—	12	
	(環境エネルギー工学専攻)	—	—	—	—	9	
	(大気海洋環境システム学専攻)	—	—	—	—	11	
	計	172	172	62	62	60	
生物資源環境科学府	資源生物科学専攻	66	66	26	26	26	719
	環境農学専攻	66	66	21	21	21	うち修士課程 488
	農業資源経済学専攻	13	13	5	5	5	博士後期課程 231
	生命機能科学専攻	99	99	25	25	25	
	計	244	244	77	77	77	
統合新領域学府	ユーザー感性学専攻	30	30	4	4	4	164
	オートモーティブサイエンス専攻	21	21	7	7	7	うち修士課程 122
	ライブラリーサイエンス専攻	10	10	3	3	3	博士後期課程 42
	計	61	61	14	14	14	
総計	※ 1,823 1,813	※ 1,813 1,803	571	571	571	※ 5,349 5,329 うち修士課程 ※ 3,636 3,616 博士後期課程 1,713	

(備考)

- 1 () を付した専攻は、学府の改組により、学生募集を停止したものである。

- 2 外国人である学生は、定員外とすることができる。
- 3 工学府共同資源工学専攻及び総計の※付きの数字は、本学及び北海道大学の合計数である。

別表第2（第6条関係）

（一貫制博士課程並びに医学系学府医学専攻、歯学府及び薬学府臨床薬学専攻の博士課程）

学 府 名	専 攻 名	学 生 定 員					収 容 定 員
		博 士 課 程					
		1 年 次	2 年 次	3 年 次	4 年 次	5 年 次	
システム生命科学府	システム生命科学専攻	54	54	54	54	54	270
医学系学府	医学専攻	107	107	107	107	—	428
歯学府	歯学専攻	43	43	43	43	—	172
薬学府	臨床薬学専攻	5	5	5	5	—	20
総 計		209	209	209	209	54	890

（備考） 外国人である学生は、定員外とすることができる。

別表第3（第6条関係）（専門職学位課程）

学 府 名	専 攻 名	学 生 定 員			収 容 定 員
		専 門 職 学 位 課 程			
		1 年 次	2 年 次	3 年 次	
人間環境学府	実践臨床心理学専攻	30	30	—	60
法務学府	実務法学専攻	45	45	45	135
経済学府	産業マネジメント専攻	45	45	—	90
医学系学府	医療経営・管理学専攻	20	20	—	40
総 計		140	140	45	325

（備考） 外国人である学生は、定員外とすることができる。

九州大学大学院通則の一部を改正する規則（案）

令和3年度九大規則第 号

制定：令和4年3月 日

工学府、システム情報科学府及び総合理工学府を改組することに伴い、九州大学大学院通則（平成16年度九大規則第3号）の一部を次のように改正する。

（新）	（旧）
（略）	（略）
<p>（定員）</p> <p>第6条 各学府の学生の定員は、別表第1、別表第2及び別表第3のとおりとする。</p> <p style="text-align: center;">（略）</p> <p>別表第1 <u>（別紙のとおり）</u></p> <p>別表第2・3 （略）</p>	<p>（定員）</p> <p>第6条 （同左）</p> <p style="text-align: center;">（略）</p> <p>別表第1 <u>（別紙のとおり）</u></p> <p>別表第2・3 （略）</p>

附 則

この規則は、令和4年4月1日から施行する。

(別紙)

新

別表第1 (第6条関係) (修士課程及び博士後期課程)

学府名	専攻名	学生定員					収容定員
		修士課程		博士後期課程			
		1年次	2年次	1年次	2年次	3年次	
(略)							
工学府	材料工学専攻	43	<u>43</u>	10	<u>10</u>	—	※ <u>1,193</u> <u>1,173</u> うち修士課程 ※ <u>852</u> <u>832</u> 博士後期課程 <u>341</u>
	応用化学専攻	68	<u>68</u>	18	<u>18</u>	—	
	化学工学専攻	30	<u>30</u>	8	<u>8</u>	—	
	機械工学専攻	73	<u>73</u>	16	16	16	
	水素エネルギーシステム専攻	35	<u>35</u>	9	9	9	
	航空宇宙工学専攻	30	30	10	<u>10</u>	12	
	量子物理工学専攻	30	<u>30</u>	10	<u>10</u>	—	
	船舶海洋工学専攻	25	<u>25</u>	8	<u>8</u>	—	
	地球資源システム工学専攻	20	20	8	8	8	
	共同資源工学専攻	※ 20 10	※ 20 10	—	—	—	
	土木工学専攻	52	<u>52</u>	16	<u>16</u>	—	
	(物質創造工学専攻)	—	—	—	—	10	
	(物質プロセス工学専攻)	—	—	—	—	9	
(材料物性工学専攻)	—	—	—	—	7		

	(化学システム工学専攻)	—	<u>—</u>	—	<u>—</u>	10	
	(建設システム工学専攻)	—	<u>—</u>	—	<u>—</u>	8	
	(都市環境システム工学専攻)	—	<u>—</u>	—	<u>—</u>	8	
	(海洋システム工学専攻)	—	<u>—</u>	—	<u>—</u>	8	
	(エネルギー量子工学専攻)	—	<u>—</u>	—	<u>—</u>	10	
	計	※ 426 416	※ <u>426</u> <u>416</u>	113	<u>113</u>	115	
芸術工学府	芸術工学専攻	<u>120</u>	<u>—</u>	<u>30</u>	<u>—</u>	<u>—</u>	330 うち修士課程 240 博士後期課程 90
	(芸術工学専攻)	<u>—</u>	92	<u>—</u>	25	25	
	(デザインストラテジー専攻)	<u>—</u>	28	<u>—</u>	5	5	
	計	120	120	30	30	30	
システム情報科学府	情報理工学専攻	105	<u>105</u>	29	<u>29</u>	—	475 うち修士課程 340 博士後期課程 135
	電気電子工学専攻	65	<u>65</u>	16	<u>16</u>	—	
	(情報学専攻)	—	<u>—</u>	—	<u>—</u>	14	
	(情報知能工学専攻)	—	<u>—</u>	—	<u>—</u>	15	
	(電気電子工学専攻)	—	<u>—</u>	—	<u>—</u>	16	
	計	170	<u>170</u>	45	45	45	
総合理工学府	総合理工学専攻	172	<u>172</u>	62	<u>62</u>	—	528 うち修士課程 344 博士後期課程 184
	(量子プロセス理工学専攻)	—	<u>—</u>	—	<u>—</u>	14	

	(物質理工学専攻)	—	<u>—</u>	—	<u>—</u>	14	
	(先端エネルギー理工学専攻)	—	<u>—</u>	—	<u>—</u>	12	
	(環境エネルギー工学専攻)	—	<u>—</u>	—	<u>—</u>	9	
	(大気海洋環境システム学専攻)	—	<u>—</u>	—	<u>—</u>	11	
	計	172	<u>172</u>	62	<u>62</u>	60	
総	計	※1,823 1,813	※ <u>1,813</u> <u>1,803</u>	571	571	571	※ <u>5,349</u> <u>5,329</u> うち修士課程 ※ <u>3,636</u> <u>3,616</u> 博士後期課程 1,713

(備考)

1～3 (略)

別表第1 (第6条関係) (修士課程及び博士後期課程)

学府名	専攻名	学生定員					収容定員
		修士課程		博士後期課程			
		1年次	2年次	1年次	2年次	3年次	
(略)							
工学府	材料工学専攻	43	二	10	二	—	※ <u>1,168</u> <u>1,148</u> うち修士課程 ※ <u>825</u> <u>805</u> 博士後期課程 <u>343</u>
	応用化学専攻	68	二	18	二	—	
	化学工学専攻	30	二	8	二	—	
	機械工学専攻	73	<u>62</u>	16	16	16	
	水素エネルギーシステム専攻	35	<u>30</u>	9	9	9	
	航空宇宙工学専攻	30	30	10	<u>12</u>	12	
	量子物理工学専攻	30	二	10	二	—	
	船舶海洋工学専攻	25	二	8	二	—	
	地球資源システム工学専攻	20	20	8	8	8	
	共同資源工学専攻	※ 20 10	※ 20 10	二	二	—	
	土木工学専攻	52	二	16	二	—	
	(物質創造工学専攻)	—	<u>38</u>	—	<u>10</u>	10	
	(物質プロセス工学専攻)	—	<u>30</u>	—	<u>9</u>	9	
	(材料物性工学専攻)	—	<u>33</u>	—	<u>7</u>	7	
(化学システム工学専攻)	—	<u>35</u>	—	<u>10</u>	10		

	(建設システム工学専攻)	—	<u>24</u>	—	<u>8</u>	8	
	(都市環境システム工学専攻)	—	<u>28</u>	—	<u>8</u>	8	
	(海洋システム工学専攻)	—	<u>21</u>	—	<u>8</u>	8	
	(エネルギー量子工学専攻)	—	<u>28</u>	—	<u>10</u>	10	
	計	※ 426 416	※ <u>399</u> <u>389</u>	113	<u>115</u>	115	
芸術工学府							330 うち修士課程 240 博士後期課程 90
	芸術工学専攻	<u>92</u>	92	<u>25</u>	25	25	
	デザインストラ テジー専攻	<u>28</u>	28	<u>5</u>	5	5	
	計	120	120	30	30	30	
システム情報科 学府	情報理工学専攻	105	—	29	—	—	<u>445</u> うち修士課程 <u>310</u> 博士後期課程 135
	電気電子工学専 攻	65	—	16	—	—	
	(情報学専攻)	—	<u>40</u>	—	<u>14</u>	14	
	(情報知能工学 専攻)	—	<u>45</u>	—	<u>15</u>	15	
	(電気電子工学 専攻)	—	<u>55</u>	—	<u>16</u>	16	
	計	170	<u>140</u>	45	45	45	
総合理工学府	総合理工学専攻	172	—	62	—	—	<u>518</u> うち修士課程 <u>336</u> 博士後期課程 <u>182</u>
	(量子プロセス 理工学専攻)	—	<u>37</u>	—	<u>14</u>	14	
	(物質理工学専 攻)	—	<u>37</u>	—	<u>14</u>	14	

	(先端エネルギー ー理工学専攻)	—	<u>34</u>	—	<u>12</u>	12	
	(環境エネルギー ー工学専攻)	—	<u>26</u>	—	<u>9</u>	9	
	(大気海洋環境 システム学専攻)	—	<u>30</u>	—	<u>11</u>	11	
	計	172	<u>164</u>	62	<u>60</u>	60	
総	計	※1,823 1,813	※ <u>1,748</u> <u>1,738</u>	571	571	571	※ <u>5,284</u> <u>5,264</u> うち修士課程 ※ <u>3,571</u> <u>3,551</u> 博士後期課程 1,713

(備考)

1～3 (略)

九州大学学位規則

平成16年度九大規則第86号
施行：平成16年 4月 1日
最終改正：令和 3年 3月 26日
(令和2年度九大規則第61号)

(趣旨)

第1条 この規則は、学位規則(昭和28年文部省令第9号)により定めるように規定されている事項その他九州大学(以下「本学」という。)が授与する学位について必要な事項を定めるものとする。

(学位)

第2条 本学が授与する学位は、学士、修士及び博士とする。

2 本学が授与する専門職学位は、修士(専門職)及び法務博士(専門職)とする。

(学士の学位授与の要件)

第3条 学士の学位授与は、本学の課程を修了し、卒業を認定された者に対し行うものとする。

(修士の学位授与の要件)

第4条 修士の学位授与は、本学大学院の学府の修士課程を修了した者に対し行うものとする。

2 前項に定めるもののほか、修士の学位は、九州大学大学院通則(平成16年度九大規則第3号。以下「大学院通則」という。)第2条第5項に定める一貫制博士課程(以下「一貫制博士課程」という。)において、大学院通則第27条及び第27条の2に規定する修了要件を満たした者に対し授与することができる。

(博士の学位授与の要件)

第5条 博士の学位授与は、本学大学院の学府の博士課程を修了した者に対し行うものとする。

(専門職学位の授与の要件)

第6条 専門職学位の授与は、本学大学院の学府の専門職大学院の課程を修了した者に対し行うものとする。

(修士の学位授与)

第7条 修士の学位授与に関して必要な事項は、各学府規則で定める。

(博士論文の提出)

第8条 博士論文(以下「論文」という。)は、博士後期課程にあつては2年以上(法科大学院の課程を修了した者が博士後期課程に入学した場合にあつては1年以上)、医学系学府医学専攻、歯学府及び薬学府臨床薬学専攻の博士課程(以下「医学系、歯学及び薬学の博士課程」という。)にあつては3年以上、一貫制博士課程にあつては4年以上在学し、各学府規則に定める所要の授業科目の単位を修得し、かつ、必要な研究指導を受けなければ、提出することができない。

2 前項の規定にかかわらず、優れた研究業績を上げた者については、在学期間が博士後期課程にあつては2年、医学系、歯学及び薬学の博士課程にあつては3年、一貫制博士課程にあつては4年に満たなくても論文を提出させることができる。

3 論文は、在学期間中に提出するものとし、その期日は、各学府規則で定める。ただし、博士後期課程、医学系、歯学及び薬学の博士課程又は一貫制博士課程に所定の年限在学し、各学府規則に定める所要の授業科目の単位を修得し、かつ、必要な研究指導を受けた者は、退学の上、別に定める期間内に論文を提出することができる。

4 論文は、論文審査願に、論文目録、論文要旨及び履歴書各1通を添え、当該学府長を経て総長に提出するものとする。

第9条 論文は、1編とし、2通を提出するものとする。ただし、参考として、他の論文を添付することができる。

2 総長は、審査のため必要があるときは、論文の副本又は訳文、模型、標本等の提出を求めることがある。

3 受理した論文は、返還しない。

(論文の審査)

第10条 総長は、論文を受理したときは、学府教授会にその審査を付託するものとする。

2 前項の審査は、論文を受理した後1年以内に終了するものとする。

- 第11条 学府教授会は、前条第1項により付託された論文を審査するため、論文調査委員（以下「調査委員」という。）を定めて、その論文の調査及び最終試験を行わせる。
- 2 調査委員は、3名以上とし、必要に応じ、他の大学院又は研究所等の教員等を加えることができる。
- 第12条 最終試験は、論文を中心とし、これに関連のある授業科目について、口頭又は筆答により行うものとする。
- 第13条 調査委員は、論文調査及び最終試験を終了したときは、調査及び最終試験の結果の要旨を、文書をもって、学府教授会に報告しなければならない。
- 第14条 学府教授会は、前条の報告に基づき、学位を授与すべきか否かを審査する。
- 2 前項の審査は、構成員の3分の2以上が出席し、出席者の3分の2以上の賛成があることを必要とする。
（審査結果の報告）
- 第15条 学府教授会は、前条の審査の結果を文書をもって、総長に報告しなければならない。
（論文提出による博士）
- 第16条 第5条に定めるもののほか、博士の学位授与は、本学大学院の学府の行う論文の審査に合格し、かつ、本学大学院の学府の博士課程を修了した者と同等以上の学力を有することの確認（以下「学力の確認」という。）をされた者に対し行うことができる。
- 2 第8条第3項ただし書に規定する者が、退学の上、同項ただし書に定める期間を経過した後に論文を提出した場合も、前項の例による。
- 3 前2項により博士の学位を請求しようとする者は、学位申請書に、学位論文2通、同目録、論文要旨及び履歴書各1通並びに総長が定める審査手数料を添え、関係学府を経て、総長に提出しなければならない。
- 4 既納の審査手数料は、返還しない。
- 5 第9条の規定は、第3項の規定による学位の請求に準用する。
- 第17条 総長は、前条による論文を受理したときは、学府教授会にその審査を付託するものとする。
- 2 学府教授会は、調査委員を定めて、その論文の調査及び学力の確認を行わせる。
- 3 第10条第2項及び第11条第2項の規定は、前2項の場合に準用する。
- 第18条 論文の調査にあたっては、原則として試験を行う。
- 2 試験は、論文を中心とし、これに関連のある授業科目について、口頭又は筆答により行うものとする。
- 第19条 学力の確認は、試問による。
- 2 試問は、口頭又は筆答によるものとし、専攻分野に関し本学大学院の学府の博士課程を修了した者と同等以上の学力を有し、かつ、研究者として自立して研究活動を行うに必要な高度の研究能力を有するか否かについて行う。この場合、外国語を課すものとし、その種類は、各学府教授会において定める。
- 3 第1項の規定にかかわらず、十分な研究歴と顕著な研究業績を有する者については、試問以外の方法により学力の確認を行うことができる。
- 第20条 前2条の規定による論文の調査及び学力の確認の結果の取扱いについては、第13条から第15条までの規定を準用する。
（専門職学位の授与）
- 第21条 専門職学位の授与に関して必要な事項は、専門職大学院の課程を置く学府の各学府規則で定める。
（学位記の授与）
- 第22条 総長は、第15条（第20条において準用する場合を含む。）の報告を踏まえ、学位を授与すべきか否かを決定し、博士の学位を授与すべき者に学位記を授与し、学位を授与できない者にはその旨を通知する。
- 2 総長は、卒業並びに修士課程及び専門職大学院の課程修了の審査結果の報告を踏まえ、学位を授与すべきか否かを決定し、学士若しくは修士の学位又は専門職学位を授与すべき者に学位記を授与する。
（学位授与の報告等）

第23条 総長は、前条第1項により博士の学位を授与したときは、当該学位を授与した日から3月以内に、所定の様式による学位授与報告書を文部科学大臣に提出するとともに、その論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨をインターネットの利用により公表するものとする。

(学位論文の公表)

第24条 博士の学位を授与された者は、当該博士の学位を授与された日から1年以内に、当該博士の学位の授与に係る論文の全文を公表しなければならない。ただし、当該博士の学位を授与される前に既に公表したときは、この限りでない。

2 前項の規定にかかわらず、博士の学位を授与された者は、やむを得ない事由がある場合には、学府の承認を得て、当該博士の学位の授与に係る論文の全文に代えて、その内容を要約したものを公表することができる。この場合において、当該学府は、その論文の全文を求めに応じて閲覧に供するものとする。

3 博士の学位を授与された者が行う前2項の規定による公表は、インターネットの利用により行うものとする。

4 第1項及び第2項により論文を公表する場合には、本学において審査を受けた学位論文であることを、明記しなければならない。

第25条 本学の学位を授与された者が、学位の名称を用いるときは、「九州大学」と付記しなければならない。ただし、共同教育課程に係る学位にあっては、本学に加え、当該共同教育課程を編成する他の大学の名称を付記しなければならない。

(学位の名称)

第26条 第2条の学位(法務博士(専門職)を除く。)を授与するに当たっては、専攻分野の名称を付記するものとし、学位の名称は、学士にあっては別表第1のとおりとし、修士の学位及び博士の学位にあっては別表第2のとおりとし、専門職学位にあっては、別表第3のとおりとする。

(学位授与の取消)

第27条 本学において学位を授与された者が不正な方法により学位の授与を受けた事実が判明したとき、又は学位の榮譽を汚辱する行為があったときは、総長は、教育研究評議会の議を経て、既に与えた学位を取り消し、学位記を返納させ、かつ、その旨を公表するものとする。

2 教育研究評議会において前項の決定を行うには、構成員の3分の2以上が出席し、出席者の4分の3以上の賛成があることを必要とする。

(学位記等の様式)

第28条 学位記及び学位申請関係書類の様式は、別記様式のとおりとする。

附 則

1 この規則は、平成16年4月1日から施行する。

2 平成16年3月31日に本学に在学し、平成16年4月1日以降も引き続き在学する者(21世紀プログラムの教育を受ける学生を除く。)については、九州大学学位規則(昭和32年11月19日施行)の規定によるものとする。

3 九州大学学則(平成16年度九大規則第1号)附則第4項に規定する者に授与する学位記については、第28条の規定にかかわらず、次の様式によるものとする。

(1) 九州芸術工科大学芸術工学部の課程を修めて卒業した者に授与する学位記の様式

学 位 記		
学 部 印	氏 名	
	年 月 日 生	
本学において九州芸術工科大学芸術工学部〇〇学科所定の課程を修めたことを認める		
年 月 日	九州芸術工科大学教育課程担当 九州大学芸術工学部長	印

本学芸術工学部長の認定により学士（芸術工学）の学位を授与する

大学印

九州大学総長

印

第 号

(2) 九州芸術工科大学大学院の博士前期課程を修めて修士課程を修了した者に授与する学位記の様式

学位記

学府印

氏名
年 月 日生

本学において九州芸術工科大学大学院芸術工学研究科芸術工学専攻の博士前期課程を修めたことを認める

年 月 日

九州芸術工科大学大学院教育課程担当
九州大学大学院芸術工学府長

印

本学大学院芸術工学府長の認定により修士（芸術工学）の学位を授与する

大学印

九州大学総長

印

芸術第 号

(3) 九州芸術工科大学大学院の博士課程を修めて博士課程を修了した者に授与する学位記の様式

学位記

学府印

氏名
年 月 日生

本学において九州芸術工科大学大学院芸術工学研究科芸術工学専攻の博士課程において所定の単位を修得し学位論文の審査及び最終試験に合格したことを認める

年 月 日

九州芸術工科大学大学院教育課程担当
九州大学大学院芸術工学府長

印

本学大学院芸術工学府長の認定により博士（〇〇）の学位を授与する

大学印

九州大学総長

印

芸術甲第 号

4 21世紀プログラムの課程を修了した者に授与する学位の名称は、第26条の規定にかかわらず、学士（学術）とし、学位記については、第28条の規定にかかわらず、次の様式によるものとする。

第 号
学 位 記
氏 名 年 月 日 生
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;">大学印</div>
<p>本学所定の21世紀プログラムの 課程を修めたので本学の卒業を認め 学士（学術）の学位を授与する</p>
年 月 日
九州大学総長
印

No.
KYUSHU UNIVERSITY
hereby confers upon Name Date of Birth:○○ the Degree of Bachelor of Arts and Science having completed the prescribed program of the 21st Century Program (○○) Date
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;">大学印</div>
Name President

5 博士課程（博士課程教育リーディングプログラム）を修了した者に授与する学位の名称は、第28条の規定にかかわらず、次の様式によるものとする。

△博甲第 号
学 位 記
氏 名 年 月 日 生

本学大学院○○学府○○専攻の博士課程（□□□□□□□□
□）において所定の単位を修得し、学位論文の審査及び最終
試験に合格したので博士（○○）の学位を授与する

年 月 日

九州大学

大学印

No.

KYUSHU UNIVERSITY

hereby confers upon
Name

Date of Birth: ○○

the Degree of
Doctor of ○○

having passed the prescribed final examination
and completed a doctoral dissertation
in the Graduate School of ○
(○○)

with additional completion of □□□□
Date

大学印

Name
President

備考 △印の箇所は学府名の略号を記入し、□印の箇所は博士課程教育リーディングプログラムの名称を記入する。

附 則（平成16年度九大規則203号）

この規則は、平成17年4月1日から施行する。

附 則（平成17年度九大規則第55号）

この規則は、平成18年4月1日から施行する。

附 則（平成18年度九大規則第19号）

この規則は、平成18年6月1日から施行する。

附 則（平成18年度九大規則第118号）

この規則は、平成19年4月1日から施行する。

附 則（平成20年度九大規則第74号）

この規則は、平成21年4月1日から施行する。

附 則（平成22年度九大規則第11号）

1 この規則は、平成22年6月15日から施行し、平成22年4月1日から適用する。

2 平成22年3月31日に九州大学大学院薬学府の修士課程に在学し、同年4月1日以降も引き続き在学する者に授与する学位の名称については、この規則による改正後の九州大学学位規則別表第2の規定にかかわらず、なお従前の例による。

附 則（平成22年度九大規則第151号）

この規則は、平成23年4月1日から施行する。

附 則（平成23年度九大規則第113号）

この規則は、平成24年4月1日から施行する。

附 則（平成24年度九大規則第4号）

この規則は、平成24年5月1日から施行し、平成24年3月14日から適用する。

附 則（平成24年度九大規則第35号）

この規則は、平成24年12月1日から施行する。

附 則（平成24年度九大規則第92号）

1 この規則は、平成25年4月1日（以下「施行日」という。）から施行する。

2 この規則による改正後の九州大学学位規則（以下「新規則」という。）第23条の規定は、施行日以後に博士の学位を授与した場合について適用し、同日前に博士の学位を授与した場合については、なお従前の例による。

3 新規則第24条の規定は、施行日以後に博士の学位を授与された者について適用し、同日前に博士の学位を授与された者については、なお従前の例による。

4 新規則別記様式の規定は、施行日以後に授与する学位記について適用し、同日前に授与する学位記については、なお従前の例による。

附 則（平成25年度九大規則第116号）

1 この規則は、平成26年4月1日から施行する。

2 平成26年3月31日までに九州大学大学院比較社会文化学府に入学した者に授与する学位の名称については、この規則による改正後の九州大学学位規則別表第2の規定にかかわらず、なお従前の例による。

附 則（平成26年度九大規則第141号）

この規則は、平成27年4月1日から施行する。

附 則（平成28年度九大規則第54号）

この規則は、平成28年10月1日から施行する。

附 則（平成28年度九大規則第106号）

この規則は、平成29年4月1日から施行する。

附 則（平成29年度九大規則第101号）

1 この規則は、平成30年4月1日から施行する。

2 平成30年3月31日に九州大学に在学し、同年4月1日以降も引き続き在学する者に授与する学位の名称については、この規則による改正後の九州大学学位規則別表第1の規定にかかわらず、なお従前の例による。

附 則（平成30年度九大規則第53号）

この規則は、平成31年1月15日から施行する。

附 則（平成30年度九大規則第87号）

この規則は、平成31年4月1日から施行する。

附 則（令和元年度九大規則第33号）

この規則は、令和2年4月1日から施行する。

附 則（令和2年度九大規則第37号）

この規則は、令和2年12月1日から施行する。

附 則（令和2年度九大規則第61号）

1 この規則は、令和3年4月1日から施行する。

2 この規則による改正後の九州大学学位規則の第5条により博士課程を修了した者に授与する学位記の様式は、令和3年4月1日に本学大学院博士課程に入学する者から適用し、令和3年3月31日に本学大学院博士課程に在学し、同年4月1日以降も引き続き在学する者については、なお従前の例による。

別表第1（学士の学位）

学 部	学 位 の 名 称
共創学部	学士（学術）
文学部	学士（文学）
教育学部	学士（教育学）
法学部	学士（法学）
経済学部	学士（経済学）
理学部	学士（理学）
医学部	学士（医学） 学士（生命医科学） 学士（看護学） 学士（保健学）
歯学部	学士（歯学）
薬学部	学士（創薬科学） 学士（薬学）
工学部	学士（工学）
芸術工学部	学士（芸術工学）
農学部	学士（農学）

別表第2（修士の学位及び博士の学位）

学 府	学 位 の 名 称	
	修 士	博 士
人文科学府	修士（文学）	博士（文学）
地球社会統合科学府	修士（学術） 修士（理学）	博士（学術） 博士（理学）
人間環境学府（臨床実践心理学専攻を除く。）	修士（人間環境学） 修士（文学） 修士（教育学） 修士（心理学） 修士（工学）	博士（人間環境学） 博士（文学） 博士（教育学） 博士（心理学） 博士（工学）
法学府	修士（法学）	博士（法学）

経済学府（産業マネジメント専攻を除く。）	修士（経済学）	博士（経済学）
理学府	修士（理学）	博士（理学）
数理学府	修士（数理学） 修士（技術数理学）	博士（数理学） 博士（機能数理学）
システム生命科学府	修士（システム生命科学） 修士（理学） 修士（工学） 修士（情報科学）	博士（システム生命科学） 博士（理学） 博士（工学） 博士（情報科学）
医学系学府（医療経営・管理学専攻を除く。）	修士（医科学） 修士（看護学） 修士（保健学）	博士（医学） 博士（看護学） 博士（保健学）
歯学府	—————	博士（歯学） 博士（臨床歯学） 博士（学術）
薬学府	修士（創薬科学）	博士（創薬科学） 博士（臨床薬学）
工学府	修士（工学）	博士（工学）
芸術工学府	修士（芸術工学） 修士（デザインストラテジー）	博士（芸術工学） 博士（工学）
システム情報科学府	修士（情報科学） 修士（理学） 修士（工学） 修士（学術）	博士（情報科学） 博士（理学） 博士（工学） 博士（学術）
総合理工学府	修士（理学） 修士（工学） 修士（学術）	博士（理学） 博士（工学） 博士（学術）
生物資源環境科学府	修士（農学）	博士（農学）
統合新領域学府	修士（感性学） 修士（芸術工学） 修士（工学） 修士（オートモーティブサイエンス） 修士（ライブラリーサイエンス） 修士（学術）	博士（感性学） 博士（芸術工学） 博士（工学） 博士（オートモーティブサイエンス） 博士（ライブラリーサイエンス） 博士（学術）

別表第3（専門職学位）

--	--

専 門 職 大 学 院	学 位 の 名 称
人間環境学府実践臨床心理学専攻	臨床心理修士（専門職）
経済学府産業マネジメント専攻	経営修士（専門職）
医学系学府医療経営・管理学専攻	医療経営・管理学修士（専門職）
法科大学院 （法務学府実務法学専攻）	法務博士（専門職）

別記様式

(1) 第3条により本学を卒業した者に授与する学位記の様式

第 号
<p>学 位 記</p> <p style="margin-left: 150px;">氏 名</p> <p style="margin-left: 100px;">年 月 日 生</p>
<div style="border: 1px solid black; width: 80px; height: 25px; margin-left: 20px; display: flex; align-items: center; justify-content: center;"> 大学印 </div>
<p>本学〇〇学部〇〇学科所定の課程を修めたことを認める</p> <p style="text-align: center;">九州大学〇〇学部長</p> <div style="text-align: right; margin-right: 20px;"> <div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 20px; display: flex; align-items: center; justify-content: center;">印</div> </div>
<p>本学〇〇学部長の認定により本学を卒業したことを認め 学士（〇〇）の学位を授与する</p> <p style="text-align: center;">年 月 日</p> <p style="text-align: center;">九州大学総長</p> <div style="text-align: right; margin-right: 20px;"> <div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 20px; display: flex; align-items: center; justify-content: center;">印</div> </div>

No.
<p>KYUSHU UNIVERSITY</p> <p>hereby confers upon</p> <p style="margin-left: 100px;">Name</p> <p style="margin-left: 100px;">Date of Birth: 〇〇</p> <p style="margin-left: 100px;">the Degree of</p> <p style="margin-left: 100px;">Bachelor of 〇〇</p> <p>having completed the prescribed program</p> <p style="margin-left: 100px;">of the School of 〇〇</p> <p style="margin-left: 100px;">(〇〇)</p> <p style="margin-left: 100px;">Date</p>
<div style="border: 1px solid black; width: 100px; height: 15px; margin-left: 20px;"></div> <p style="margin-left: 100px;">Name</p>

大学印	Dean of the School of ○○ Name President
-----	---

(2) 第4条1項により修士課程（共同教育課程を除く。）を修了した者に授与する学位記の様式

△修第	号	
学 位 記		
氏 名		
年 月 日 生		
<p>本学大学院○○学府○○専攻の修士課程を修了したので修士（○○）の学位を授与する</p>		
年 月 日		
九 州 大 学	<table border="1" style="display: inline-table; width: 60px; height: 20px; vertical-align: middle;"> <tr> <td style="text-align: center;">大学印</td> </tr> </table>	大学印
大学印		

No.	
KYUSHU UNIVERSITY	
hereby confers upon	
Name	
Date of Birth: ○○	
the Degree of	
Master of ○○	
having completed the Master's Program	
in the Graduate School of ○○	
(○○)	
Date	
Name	
President	
<table border="1" style="display: inline-table; width: 100px; height: 30px; vertical-align: middle;"> <tr> <td style="text-align: center;">大学印</td> </tr> </table>	大学印
大学印	

備考 △印の箇所は学府名の略号を記入する。

(3) 第4条1項により修士課程（共同教育課程）を修了した者に授与する学位記の様式

△修第	号
学 位 記	
氏 名	
年 月 日 生	

九州大学大学院○○学府及び□□大学大学院◇◇研究科の
◎◎専攻の修士課程を修了したので修士（○○）の学位を授
与する

年 月 日

九 州 大 学

大学印

□ □ 大 学

大学印

No.

KYUSHU UNIVERSITY

hereby confers upon

Name

Date of Birth: ○○

the Degree of

Master of ○○

having completed the Master's Program
in the Graduate School of ○○, Kyushu University
and the Graduate School of △△,□□

(◎◎)

Date

大学印

Name

President of Kyushu University

大学印

Name

President of □□ University

備考1 △印の箇所は学府名の略号を記入する。

2 □印の箇所は共同教育課程を構成する大学（本学を除く。）、◇印の箇所は構成大学の
共同教育課程を編成する研究科の名称を記入する。

3 ◎印の箇所は共同教育課程における専攻の名称を記入する。

(4) 第4条2項により修士課程の修了に相当する要件を満たした者に授与する学位記の様式

△修第 号

学 位 記

氏 名

年 月 日 生

本学大学院○○学府○○専攻において修士課程の修了に相
当する要件を満たしたので修士（○○）の学位を授与する

年	月	日
九	州	大 学
		大学印

		No.
KYUSHU UNIVERSITY		
hereby confers upon		
Name		
Date of Birth: ○○		
the Degree of		
Master of ○○		
having completed the requirement		
for a Master's Qualification		
in the Graduate School of ○		
(○○)		
Date		
大学印	Name President	

備考 △印の箇所は学府名の略号を記入する。

(5) 第5条により博士課程（卓越大学院プログラム及び未来共創リーダー育成プログラムを除く。）を修了した者に授与する学位記の様式

		△博甲第	号
学 位 記			
		氏 名	
		年 月 日 生	
本学大学院○○学府○○専攻の博士課程において所定の単位を修得し学位論文の審査及び最終試験に合格をしたので博士（○○）の学位を授与する			
		年	月 日
九 州 大 学		大学印	

		No.
KYUSHU UNIVERSITY		

hereby confers upon
Name
Date of Birth: ○○
the Degree of
Doctor of ○○
having passed the prescribed final examination
and completed a doctoral dissertation
in the Graduate School of ○
(○○)
Date

大学印

Name
President

備考 △印の箇所は学府名の略号を記入する。

(6) 第5条により博士課程（卓越大学院プログラム）を修了した者に授与する学位記の様式

△博甲第 号

学 位 記

氏 名
年 月 日 生

本学大学院○○学府○○専攻の博士課程（□□□□□□□□）において所定の単位を修得し、学位論文の審査及び最終試験に合格したので博士（○○）の学位を授与する

年 月 日

九 州 大 学

大学印

No.

KYUSHU UNIVERSITY

hereby confers upon
Name
Date of Birth: ○○
the Degree of
Doctor of ○○
having passed the prescribed final examination
and completed a doctoral dissertation
in the Graduate School of ○○
(○○)

with additional completion of □□□□(○○)
Date

Name
President

大学印

備考 △印の箇所は学府名の略号を記入し、□印の箇所は卓越大学院プログラムの名称を記入する。

(7) 第5条により博士課程（未来共創リーダー育成プログラム）を修了した者に授与する学位記の様式

△博甲第 号

学 位 記

氏 名
年 月 日 生

本学大学院○○学府○○専攻の博士課程（□□□□□□□□□）において所定の単位を修得し、学位論文の審査及び最終試験に合格したので博士（○○）の学位を授与する

年 月 日

九 州 大 学

大学印

No.

KYUSHU UNIVERSITY

hereby confers upon
Name
Date of Birth: ○○
the Degree of
Doctor of ○○

having passed the prescribed final examination
and completed a doctoral dissertation
in the Graduate School of ○○
(○○)

with additional completion of □□□□
Date

Name
President

大学印

備考 △印の箇所は学府名の略号を記入し、□印の箇所は未来共創リーダー育成プログラムの名称を記入する。

(8) 第6条により専門職学位課程を修了した者（法科大学院（法務学府実務法学専攻）の専門職学位課程を修了した者を除く。）に授与する学位記の様式

△専第	号
学 位 記	
氏 名	
年 月 日 生	
本学大学院○○学府○○専攻の専門職学位課程を修了した ので修士（専門職）の学位を授与する	
年 月 日	
九 州 大 学	□大学印

No.
KYUSHU UNIVERSITY
hereby confers upon
Name
Date of Birth: ○○
the Degree of
Master of ○○
having completed the Professional Degree Program
in the Graduate School of ○
(○○)
Date
□大学印
Name
President

備考 △印の箇所は学府名の略号を記入する。

(9) 第6条により法科大学院（法務学府実務法学専攻）の専門職学位課程を修了した者に授与する学位記の様式

法専第	号
学 位 記	
氏 名	
年 月 日 生	

本学法科大学院（法務学府実務法学専攻）の専門職学位課程を修了したので法務博士（専門職）の学位を授与する

年 月 日

九州大学

大学印

No.

KYUSHU UNIVERSITY

hereby confers upon

Name

Date of Birth: ○○

the Degree of

Juris Doctor

having completed the Professional Degree Program

in the Law School

(Legal Practice)

Date

大学印

Name

President

(10) 第16条により博士課程を修了した者と同等以上の学力を有することの確認をされた者に授与する学位記の様式

△博乙第 号

学位記

氏名

年 月 日 生

本学に学位論文を提出し所定の審査及び試験に合格したので博士（○○）の学位を授与する

年 月 日

九州大学

大学印

<p>KYUSHU UNIVERSITY</p> <p>hereby confers upon</p> <p>Name</p> <p>Date of Birth: ○○</p> <p>the Degree of</p> <p>Doctor of ○○</p> <p>having submitted a doctoral dissertation and</p> <p>successfully fulfilled all the requirements</p> <p>Date</p>	<p>No.</p>
<div style="border: 1px solid black; width: 100px; height: 30px; display: flex; align-items: center; justify-content: center;"> 大学印 </div>	<p>Name</p> <p>President</p>

備考 △印の箇所は学府名の略号を記入する。

- (11) 学位申請関係書類の様式
- ア 第8条第4項による学位論文審査願様式

	年 月 日
九州大学総長殿	
○○学府○○学専攻 ○○年入学 氏名	
学位論文審査願	
<p>このたび博士の学位を受けたいので、九州大学学位規則第8条により、下記のとおり関係書類を添え、学位論文を提出いたしますから御審査ください。</p>	
記	
1 主論文	1 編 冊 2 通
2 参考論文	編 冊 1 通
3 論文目録	
4 論文要旨	
5 履歴書	

イ 第16条第3項による学位申請書様式

年 月 日																									
九州大学総長殿																									
本籍： 氏名：																									
学位申請書																									
<p>貴学学位規則第16条により、博士の学位を受けたいので、下記のとおり関係書類を添え、学位論文を提出いたします。 なお所定の手数料を納入いたします。</p>																									
記																									
<table style="margin-left: auto; margin-right: auto;"> <tr> <td style="padding-right: 10px;">1</td> <td style="padding-right: 10px;">主論文</td> <td style="padding-right: 10px;">1編</td> <td style="padding-right: 10px;">冊</td> <td>2通</td> </tr> <tr> <td>2</td> <td>参考論文</td> <td>編</td> <td>冊</td> <td>1通</td> </tr> <tr> <td>3</td> <td>論文目録</td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>4</td> <td>論文要旨</td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>5</td> <td>履歴書</td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> </table>	1	主論文	1編	冊	2通	2	参考論文	編	冊	1通	3	論文目録				4	論文要旨				5	履歴書			
1	主論文	1編	冊	2通																					
2	参考論文	編	冊	1通																					
3	論文目録																								
4	論文要旨																								
5	履歴書																								

ウ 添付書類の様式

① 論文目録様式

論 文 目 録		区分 甲乙
氏 名		
<p>主論文 1編〇冊</p> <p style="margin-left: 20px;">題 名</p> <p style="margin-left: 20px;">(印刷公表の方法及びその時期 (未公開の場合は予定を記入))</p> <p>参考論文 〇編〇冊</p> <p style="margin-left: 20px;">題 名</p> <p style="margin-left: 40px;">1</p> <p style="margin-left: 40px;">2 (同上)</p> <p style="margin-left: 40px;">3</p>		
備考		
<p>1 論文題名が外国語の場合は、訳を付すること。</p> <p>2 未公表の論文の場合は、原稿の枚数を記入すること。</p>		

3 参考論文が2以上ある場合は、その題名を列記すること。

② 履歴書様式

履 歴 書		区分	甲乙
(ふりがな) 氏 名 生 年 月 日	年 月 日生	男 女	
本 籍 (都道府県名)		都 道 府 県	
現 住 所	都道 区市 町 番地 府 県 郡 村		
学 歴	年 月 日 年 月 日		
職 歴	年 月 日 年 月 日		
研究歴	年 月 日 年 月 日		
上記のとおり相違ありません。			
	年 月 日	氏	名
備考			
1 学歴は、新制大学卒業以後又は最終学歴を記載すること。			
2 研究歴には研究した事項とその期間を明記すること。なお、学歴又は職歴に記載した期間中に研究歴に当たるものがある場合は、それについても記入すること。			

九州大学教授会通則

平成16年度九大規則第8号
制 定：平成16年 4月 1日
最終改正：令和 3年 4月 27日
(令和3年度九大規則第3号)

(趣旨)

第1条 この規則は、九州大学学則（平成16年度九大規則第1号）第31条第2項の規定に基づき、教授会の組織、審議事項、議事の手続その他必要な事項を定めるものとする。

(構成員)

第2条 各学部の教授会の構成員は、次に掲げる者とする。

(1) 研究院の所属で当該学部の教育研究又は附属教育研究施設を担当する教授

(2) 病院の所属で学部の教育研究を担当する教授

2 各学府の教授会の構成員は、当該学府の教育研究を担当する教授とする。

3 各研究院の教授会の構成員は、当該研究院所属の教授とする。

4 基幹教育院の教授会の構成員は、基幹教育院所属の教授とする。

5 各附置研究所の教授会の構成員は、当該附置研究所所属の教授とする。

6 カーボンニュートラル・エネルギー国際研究所（以下「国際研究所」という。）の教授会の構成員は、国際研究所所属の教授とする。

7 情報基盤研究開発センター（以下「センター」という。）の教授会の構成員は、センター所属の教授とする。

8 教授会には、准教授その他の職員を加えることができる。

(教授会の審議事項等)

第3条 教授会は、総長が次に掲げる事項について決定を行うに当たり意見を述べるものとする。

(1) 学生の入学、卒業及び課程の修了

(2) 学位の授与

(3) 前2号に掲げるもののほか、教育研究に関する重要な事項で、教授会の意見を聴くことが必要なものとして総長が定めるもの

2 教授会は、前項に規定するもののほか、総長及び教授会が置かれる部局の長（以下この項において「総長等」という。）がつかさどる教育研究に関する事項について審議し、及び総長等の求めに応じ、意見を述べることができる。

(議長)

第4条 教授会に議長を置き、当該部局の長をもって充てる。

2 議長は、教授会を主宰する。

(議事)

第5条 教授会は、構成員の2分の1以上が出席しなければ、議事を開き、議決することができない。

2 教授会の議事は、出席した構成員の過半数をもって決し、可否同数のときは、議長の決するところによる。

3 前2項の規定にかかわらず、特に重要な事項の審議については、別段の定めをすることができる。

(構成員以外の者の出席)

第6条 教授会が必要であると認めた場合は、構成員以外の者の出席を求め、意見を聞くことができる。

(代議員会等)

第7条 教授会は、その定めるところにより、教授会の構成員のうちの一部の者をもって構成される代議員会、専門委員会等（次項において「代議員会等」という。）を置くことができる。

2 教授会は、その定めるところにより、代議員会等の議決をもって、教授会の議決とすることができる。

(補則)

第8条 この規則に定めるもののほか、教授会の議事の手続その他その運営に関し必要な事項は、各教授会の議を経て当該部局長が定める。

附 則

この規則は、平成16年4月1日から施行する。

附 則（平成16年度九大規則第246号）

この規則は、平成17年4月1日から施行する。

附 則（平成18年度九大規則第40号）

この規則は、平成19年4月1日から施行する。

附 則（平成23年度九大規則第14号）

この規則は、平成23年10月1日から施行する。

附 則（平成24年度九大規則第32号）

この規則は、平成25年4月1日から施行する。

附 則（平成24年度九大規則第50号）

この規則は、平成25年4月1日から施行する。

附 則（平成25年度九大規則第41号）

この規則は、平成25年11月1日から施行する。

附 則（平成26年度九大規則第14号）

この規則は、平成26年10月1日から施行する。

附 則（平成26年度九大規則第83号）

この規則は、平成27年4月1日から施行する。

附 則（令和3年度九大規則第3号）

この規則は、令和3年5月1日から施行する。

九州大学大学院芸術工学府規則（案）

平成16年度九大規則第131号
制 定：平成16年 4月 1日
最終改正：令和 4年 3月 日
（令和3年度九大規則第 号）

（趣旨）

第1条 この規則は、九州大学大学院通則（平成16年度九大規則第3号。以下「通則」という。）及び九州大学学位規則（平成16年度九大規則第86号）により各学府規則において定めるように規定されている事項その他芸術工学府（以下「本学府」という。）の教育に関し必要と認める事項について定めるものとする。

（教育研究上の目的）

第1条の2 本学府は、技術を人間生活に適切に利用するために、技術の基盤である科学と人間精神の最も自由な発現である芸術とを統合し、技術の進路を計画し、その機能の設計について研究するとともに、人文、社会、自然にまたがる知識と芸術的感性を基盤とする高次の設計家を組織的に養成する。

（コース）

第1条の3 本学府芸術工学専攻修士課程及び博士後期課程に、次のコースを置く。

ストラテジックデザインコース

環境設計コース

人間生活デザインコース

未来共生デザインコース

メディアデザインコース

音響設計コース

（入学考査）

第2条 入学を志願する者に対する考査は、学力検査、出身大学の成績証明書その他本学府の定める資料によって行うものとする。

2 学力検査の方法については、本学府教授会の議を経て、芸術工学府長（以下「本学府長」という。）が定める。

（学期）

第3条 学年を分けて次の2学期とする。

前期 4月1日から9月30日まで

後期 10月1日から翌年3月31日まで

2 前項に定める各学期の授業期間は、別に定める。

（授業及び研究指導）

第4条 本学府の教育は、授業科目の授業及び学位論文の作成等に対する指導（以下「研究指導」という。）によって行うものとする。

（授業科目、単位及び履修方法等）

第5条 授業科目、単位及び履修方法は、修士課程にあつては別表第1、博士後期課程にあつては別表第2の定めるところにより、単位を修得しなければならない。

2 前項に定めるもののほか、臨時に開設する授業科目は、その都度本学府教授会の議を経て、本学府長が別に定める。

3 単位計算の基準は、原則として、講義については15時間をもって1単位、演習については15時間又は30時間をもって1単位、実験及び実習については30時間又は45時間をもって1単位とする。ただし、これによりがたい場合は、本学府教授会の議を経て、本学府長が別に定める。

第6条 学生は、各学期の始めに、履修しようとする授業科目を、指導教員の指示に従って選定し、本学府長に届け出なければならない。

第7条 本学府において、教育上有益と認めるときは、他の専攻若しくは大学院基幹教育若しくは他の学府又は学部の課程による授業科目を履修させることができる。

第8条 各授業科目の単位修得の認定は、本学府教授会の議を経て、本学府長が行う。

(他の大学院における授業科目の履修等)

第9条 本学府長は、本学府教授会の議を経て、教育上有益と認めるときは、他の大学院との協議に基づき、他の大学院の授業科目を履修させることができる。

2 前項の規定により履修した単位は、修士課程及び博士後期課程を通して15単位を限度として、本学府教授会の議を経て、課程修了の要件となる単位として認めることができる。

3 本学府において、教育上有益と認めるときは、他の大学院等との協議の上、本学府長の承認を得て、他の大学院等において必要な研究指導を受けさせることができる。ただし、修士課程の学生について認める場合には、当該研究指導を受けさせる期間は、1年を超えないものとする。

(長期にわたる教育課程の履修)

第9条の2 本学府の学生が、職業を有している等の事情により、標準修業年限を超えて一定の期間にわたり計画的に教育課程を履修し課程を修了することを希望する旨を本学府長に申し出たときは、本学府教授会の議を経て、その計画的な履修を認めることができる。

(修士課程の修了要件)

第10条 本学府の修士課程の修了要件は、修士課程に2年以上在学し、この規則の定めるところにより、40単位以上を修得し、かつ、必要な研究指導を受けた上、修士論文又は修士作品(以下「修士論文等」という。)を提出して、本学府教授会の行う修士論文等の審査及び最終試験に合格することとする。ただし、総長が認めるときは、在学期間に関しては、優れた業績を上げた者については、修士課程に1年以上在学すれば足りるものとする。

(博士課程の修了要件)

第11条 本学府の博士課程の修了要件は、博士課程に5年(修士課程に2年以上在学し、当該課程を修了した者にあつては、当該課程における2年の在学期間を含む。)以上在学し、この規則の定めるところにより、50単位以上(他の学府又は他の大学院の修士課程を修了した者にあつては博士後期課程において10単位以上)を修得し、かつ、必要な研究指導を受けた上、博士論文の審査及び最終試験に合格することとする。ただし、総長が認めるときは、在学期間に関しては、優れた研究業績を上げた者については、博士課程に3年(修士課程に2年以上在学し、当該課程を修了した者にあつては、当該課程における2年の在学期間を含む。)以上在学すれば足りるものとする。

2 大学院設置基準第3条第3項の規定により標準修業年限を1年以上2年未満とした修士課程を修了した者及び前条ただし書の規定による在学期間をもって修士課程を修了した者の博士課程の修了要件については、前項中「5年(修士課程に2年以上在学し、当該課程を修了した者にあつては、当該課程における2年の在学期間を含む。)」とあるのは「修士課程における在学期間に3年を加えた期間」と、「3年(修士課程に2年以上在学し、当該課程を修了した者にあつては、当該課程における2年の在学期間を含む。)」とあるのは「3年(修士課程における在学期間を含む。)」と読み替えて前項の規定を適用する。

3 前2項の規定にかかわらず、学校教育法施行規則(昭和22年文部省令第11号)第156条の規定により大学院への入学資格に関し修士の学位若しくは専門職学位を有する者と同等以上の学力があると認められた者又は専門職学位課程を修了した者が、博士後期課程に入学した場合の博士課程の修了要件は、博士後期課程に3年(法科大学院の課程を修了した者にあつては、2年)以上在学し、この規則の定めるところにより10単位以上を修得し、かつ、必要な研究指導を受けた上、博士論文の審査及び最終試験に合格することとする。ただし、総長が認めるときは、在学期間に関しては、優れた研究業績を上げた者については、博士後期課程に1年(標準修業年限が1年以上2年未満の専門職学位課程を修了した者にあつては、3年から当該1年以上2年未満の期間を減じた期間)以上在学すれば足りるものとする。

(修士論文等の提出及び審査)

第12条 修士論文等は、在学期間中に指導教員を経て、本学府長に提出しなければならない。

2 修士論文等及び最終試験の合格又は不合格は、専攻の行う調査に基づき、本学府教授会が審査する。

3 修士論文等の提出期日その他については、あらかじめ公示する。

(博士論文の提出)

第13条 博士論文は、博士後期課程に2年以上在学し、この規則により履修すべき所要の単位を修得した者又は当該年度末までに修得する見込みの者で、かつ、必要な研究指導を受けた者でなければ提出できない。ただし、本学府教授会の議を経て、本学府長が優れた研究業績を上げたと認めた者は、博士後期課程における在学期間が2年に満たなくても博士論文を提出することができる。

第14条 最終試験は、学位論文を提出した者について行うものとする。

(留学)

第15条 留学を志望する本学府の学生は、書面をもって本学府長に願い出て、その許可を受けなければならない。

2 前項の許可を得て留学した期間は、第10条及び第11条の課程修了の要件としての在学期間に加えることができる。

3 第9条の規定は、本学府の学生が留学する場合について準用する。この場合において、同条中「他の大学院」とあるのは、「外国の大学院」と読み替えるものとする。

(他の大学院における授業科目の履修により修得した単位の上限)

第15条の2 第9条第2項及び前条第3項の規定により課程修了の要件となる単位として認定することができる単位数は、通則第15条、第17条及び第17条の2に規定する転学等の場合を除き、修士課程及び博士後期課程を通して合わせて15単位を限度とする。

(ホールマネジメントエンジニア育成プログラム)

第15条の3 劇場、ホール等の文化施設(以下「施設」という。)の音響、照明、舞台機構等に関する工学的知識及び文化芸術に関する知識を備えた施設の総合的管理運営能力を有する人材を育成するため、本学府修士課程にホールマネジメントエンジニア育成プログラム(以下この条において「プログラム」という。)を置く。

2 プログラムの授業科目、単位、履修方法等は、本学府教授会の議を経て、本学府長が別に定める。

3 プログラムの授業科目の所定の単位を修得した者には、プログラム修了証を授与する。

(グローバル・アーキテクト・プログラム)

第15条の4 建築・環境設計に関する工学的知識及び文化芸術に関する知識を備えた、総合的な設計能力を有する人材を育成するため、本学府修士課程にグローバル・アーキテクト・プログラム(以下この条において「プログラム」という。)を置く。

2 プログラムの授業科目、単位、履修方法等は、本学府教授会の議を経て、本学府長が別に定める。

3 プログラムの授業科目の所定の単位を修得した者には、プログラム修了証を授与する。

(クリエイティブ・リーダーシップ・プログラム)

第15条の5 創造的思考力に基づく社会・文化の長期的なビジョンを構想でき、深い人間・環境理解に基づく価値提案を实践でき、提案しようとする価値を社会実装するために多様な他者への共感力・協働力を備え、イノベーション・プロジェクトを遂行する能力を持つ高度デザイン人材を育成するため、本学府修士課程にクリエイティブ・リーダーシップ・プログラム(以下この条において「プログラム」という。)を置く。

2 プログラムの授業科目、単位、履修方法等は、本学府教授会の議を経て、本学府長が別に定める。

3 プログラムの授業科目の所定の単位を修得した者には、プログラム修了証を授与する。

(科目等履修生)

第16条 科目等履修生として入学を志願できる者は、九州大学科目等履修生等規則(平成16年度九大規則第91号)第2条第2項に定めるところによる。

第17条 科目等履修生として入学を志願する者は、所定の願書に履修しようとする授業科目名を記載し、履歴書及び検定料を添えて、本学府長に願い出なければならない。

2 本学府長は、学生の授業に支障がないときは、前項の願い出があった者について選考の上、

学年又は学期の始めに入学を許可することができる。

第18条 科目等履修生の履修した授業科目については、成績評価を行い、合格とされた者について、本学府教授会の議を経て、所定の単位を与える。

第19条 本学府長は、科目等履修生の修得した単位について、所要の証明書を交付することができる。

(雑則)

第20条 この規則その他の規則等に定めるもののほか、本学府の校務について必要な事項は、本学府教授会の議を経て、本学府長が別に定める。

附 則

この規則は、平成16年4月1日から施行する。

附 則 (平成17年度九大規則第2号)

- 1 この規則は、平成17年6月17日から施行する。
- 2 改正後の九州大学大学院芸術工学府規則別表第2の規定は、平成17年度に本学府の博士後期課程に入学又は進学する者から適用し、平成17年3月31日に本学府の博士後期課程に在学し、同年4月1日以降も引き続き在学する者については、なお従前の例による。
- 3 改正後の九州大学大学院芸術工学府規則別表第3の規定は、平成17年度に本学府の修士課程に入学する者から適用し、平成17年3月31日に本学府の修士課程に在学し、同年4月1日以降も引き続き在学する者については、なお従前の例による。

附 則 (平成17年度九大規則第84号)

- 1 この規則は、平成18年4月1日から施行する。
- 2 改正後の九州大学大学院芸術工学府規則別表第1の芸術工学専攻に係る部分の規定は、平成18年度に本学府芸術工学専攻の修士課程に入学する者から適用し、平成18年3月31日に本学府芸術工学専攻の修士課程に在学し、同年4月1日以降も引き続き在学する者については、なお従前の例による。
- 3 改正後の九州大学大学院芸術工学府規則別表第2の規定は、平成18年度に本学府の博士後期課程に入学又は進学する者から適用し、平成18年3月31日に本学府の博士後期課程に在学し、同年4月1日以降も引き続き在学する者については、なお従前の例による。

附 則 (平成19年度九大規則第22号)

この規則は、平成19年7月20日から施行する。

附 則 (平成19年度九大規則第49号)

この規則は、平成19年12月26日から施行する。

附 則 (平成19年度九大規則第100号)

- 1 この規則は、平成20年4月1日から施行する。
- 2 改正後の九州大学大学院芸術工学府規則は、平成20年度に本学府に入学又は進学する者から適用し、平成20年3月31日に本学府に在学し、同年4月1日以降も引き続き在学する者については、なお従前の例による。

附 則 (平成20年度九大規則第99号)

- 1 この規則は、平成21年4月1日から施行する。
- 2 この規則による改正後の九州大学大学院芸術工学府規則は、平成21年度に本学府に入学する者から適用し、平成21年3月31日に本学府に在学し、同年4月1日以降も引き続き在学する者については、なお従前の例による。

附 則 (平成21年度九大規則第102号)

- 1 この規則は、平成22年4月1日から施行する。
- 2 この規則による改正後の九州大学大学院芸術工学府規則は、平成22年度に本学府に入学する者から適用し、平成22年3月31日に本学府に在学し、同年4月1日以降も引き続き在学する者については、なお従前の例による。

附 則 (平成22年度九大規則第116号)

- 1 この規則は、平成23年4月1日から施行する。
- 2 この規則による改正後の九州大学大学院芸術工学府規則は、平成23年度に本学府に入学す

る者から適用し、平成23年3月31日に本学府に在学し、同年4月1日以降も引き続き在学する者については、なお従前の例による。

附 則（平成23年度九大規則第134号）

- 1 この規則は、平成24年4月1日から施行する。
- 2 この規則による改正後の九州大学大学院芸術工学府規則は、平成24年度に本学府に入学する者から適用し、平成24年3月31日に本学府に在学し、同年4月1日以降も引き続き在学する者については、なお従前の例による。

附 則（平成24年度九大規則第116号）

- 1 この規則は、平成25年4月1日から施行する。
- 2 この規則による改正後の九州大学大学院芸術工学府規則は、平成25年度に本学府に入学する者から適用し、平成25年3月31日に本学府に在学し、同年4月1日以降も引き続き在学する者については、なお従前の例による。

附 則（平成25年度九大規則第71号）

この規則は、平成25年12月26日から施行し、平成25年12月1日から適用する。

附 則（平成25年度九大規則第146号）

- 1 この規則は、平成26年4月1日から施行する。
- 2 この規則による改正後の九州大学大学院芸術工学府規則は、平成26年4月1日に本学府に入学する者から適用し、平成26年3月31日に本学府に在学し、同年4月1日以降も引き続き在学する者については、なお従前の例による。

附 則（平成26年度九大規則第172号）

- 1 この規則は、平成27年4月1日から施行する。
- 2 この規則による改正後の九州大学大学院芸術工学府規則別表第1及び別表第2の規定は、平成27年4月1日に本学府に入学する者から適用し、平成27年3月31日に本学府に在学し、同年4月1日以降も引き続き在学する者については、なお従前の例による。

附 則（平成27年度九大規則第75号）

- 1 この規則は、平成28年4月1日から施行する。
- 2 この規則による改正後の九州大学大学院芸術工学府規則は、平成28年4月1日に本学府に入学する者から適用し、平成28年3月31日に本学府に在学し、同年4月1日以降も引き続き在学する者については、なお従前の例による。

附 則（平成28年度九大規則第138号）

- 1 この規則は、平成29年4月1日から施行する。
- 2 この規則による改正後の九州大学大学院芸術工学府規則別表第1、別表第2及び別表第3の規定は、平成29年4月1日に本学府に入学する者から適用し、平成29年3月31日に本学府に在学し、同年4月1日以降も引き続き在学する者については、なお従前の例による。

附 則（平成29年度九大規則第131号）

- 1 この規則は、平成30年4月1日から施行する。
- 2 この規則による改正後の九州大学大学院芸術工学府規則は、平成30年4月1日に本学府に入学する者から適用し、平成30年3月31日に本学府に在学し、同年4月1日以降も引き続き在学する者については、なお従前の例による。

附 則（平成30年度九大規則第116号）

- 1 この規則は、平成31年4月1日から施行する。
- 2 この規則による改正後の九州大学大学院芸術工学府規則は、平成31年4月1日に本学府に入学する者から適用し、平成31年3月31日に本学府に在学し、同年4月1日以降も引き続き在学する者については、なお従前の例による。

附 則（令和元年度九大規則第67号）

- 1 この規則は、令和2年4月1日から施行する。
- 2 この規則による改正後の九州大学大学院芸術工学府規則は、令和2年4月1日に本学府に入学する者から適用し、令和2年3月31日に本学府に在学し、同年4月1日以降も引き続き在

学する者については、なお従前の例による。

附 則（令和2年度九大規則第31号）

この規則は、令和2年11月1日から施行する。

附 則（令和2年度九大規則第107号）

- 1 この規則は、令和3年4月1日から施行する。
- 2 この規則による改正後の九州大学大学院芸術工学府規則は、令和3年4月1日に本学府に入学する者から適用し、令和3年3月31日に本学府に在学し、同年4月1日以降も引き続き在学する者については、なお従前の例による。

附 則

- 1 この規則は、令和4年4月1日から施行する。
- 2 この規則による改正後の九州大学大学院芸術工学府規則は、令和4年4月1日に本学府に入学する者から適用し、令和4年3月31日に本学府に在学し、同年4月1日以降も引き続き在学する者については、なお従前の例による。

別表第1 (修士課程)

芸術工学専攻

一 履修方法

次に掲げる要件を満たす40単位以上修得しなければならない。

- (1) 修士研究関連科目 18単位
- (2) スタジオプロジェクト科目 2単位
- (3) 所属コースのコア科目 6単位
- (4) 展開科目 14単位

二 授業科目

修士研究関連研究科目

授業科目	単位数	最低修得単位数
芸術工学特別研究Ⅰ	4単位	18単位
芸術工学特別研究Ⅱ	4単位	
芸術工学特別研究Ⅲ	4単位	
芸術工学特別研究Ⅳ	4単位	
芸術工学演習	2単位	

スタジオプロジェクト科目

授業科目	単位数	最低修得単位数
スタジオプロジェクトⅠ-A	2単位	2単位
スタジオプロジェクトⅠ-B	2単位	
スタジオプロジェクトⅡ-A	2単位	
スタジオプロジェクトⅡ-B	2単位	
スタジオプロジェクトⅢ-A	2単位	
スタジオプロジェクトⅢ-B	2単位	
スタジオプロジェクトⅣ-A	2単位	
スタジオプロジェクトⅣ-B	2単位	

コア科目

コース	授業科目	単位数	最低修得単位数
ストラテジックデザインコース	シリアスゲームデザイン1	1単位	6単位
	シリアスゲームデザイン2	1単位	
	コネクティッドデザイン	1単位	
	デザインイノベーション	1単位	
	ストラテジック・サービス・デザイン	1単位	
	プロデューサー原論	1単位	
	デザインマネジメント	1単位	
	デザインマーケティング	1単位	
	デザインプロジェクトマネジメント	1単位	
	ブランドビジネスデザイン	1単位	
	デザイン産業事情1	1単位	
	デザイン産業事情2	1単位	
	知的財産法1	1単位	
	知的財産法2	1単位	
デザイン思考	1単位		

	リーンスターアップ演習 1 リーンスターアップ演習 2 リーンスターアップ演習 3 リーンスターアップ演習 4	1 単位 1 単位 1 単位 1 単位	
環境設計コース	環境化学特論 熱環境学特論 建築構造学特論 環境材料学特論 音響環境学特論 音環境評価特論 環境心理学特論 建築計画特論 建築構法計画特論 環境保全学特論 景観生態学特論 ランドスケープデザイン特論 日本建築史特論 西洋建築史特論 文化財学特論 国際環境政策特論 環境人類学特論 共生社会デザイン論 環境リスクマネジメント デザイン哲学 美術史 環境文化特論 環境デザインプロジェクトA 環境デザインプロジェクトB	2 単位 2 単位 2 単位 2 単位 2 単位 2 単位 1 単位 1 単位 1 単位 1 単位 1 単位 1 単位 1 単位 1 単位 1 単位 2 単位 2 単位 2 単位 1 単位 1 単位 1 単位 1 単位 2 単位 2 単位 2 単位	6 単位
人間生活デザインコース	応用人間工学 生活機能支援科学特論 環境人間工学特論 生理人類学特論 脳・行動生理学特論A 脳・行動生理学特論B 感性科学特論 統計情報学 デザイン認知論 人間情報工学 機能工学デザイン 生体模倣工学 パブリックデザイン コンテクストデザイン レジリエンスデザイン コミュニケーションデザイン論 ライフスケープデザイン 人間生活デザイン特論	1 単位 1 単位 1 単位 1 単位 1 単位 1 単位 1 単位 1 単位 1 単位 1 単位 1 単位 1 単位 1 単位 1 単位 1 単位 1 単位 1 単位 2 単位 2 単位	6 単位
未来共生デザインコース	統計情報学 時間生物学	1 単位 1 単位	6 単位

	音響芸術特論	2単位	
	作曲学特論	2単位	
	サウンドデザイン特論	2単位	
	民族音楽学特論	2単位	
	音楽社会文化特論	2単位	
	聴覚文化論特論	2単位	
	言語学特論	2単位	
	音響設計特別講話	2単位	
	輪講	2単位	

展開科目

コース	授業科目	単位数	最低修得単位数
ストラテジックデザインコース	機能工学デザイン	1単位	14単位 ※
	HCIデザイン1	2単位	
	エクスペリエンス (UX) デザイン	1単位	
	アート・シンキング	1単位	
	インクルーシブデザイン	1単位	
	ソサエタルデザイン	1単位	
	ソーシャル・システム・デザイン	1単位	
	リーダーシップ論	2単位	
	SD特別プロジェクトI	2単位	
	SD特別プロジェクトII (ストラテジックデザイン)	2単位	
SD特別プロジェクトIII (ソーシャルデザイン)	2単位		
SD特別プロジェクトIV (アントレプレナー)	2単位		
環境設計コース	ランドスケープデザインプロジェクト	4単位	
	ストラテジックアーキテクトプロジェクトA	4単位	
	ストラテジックアーキテクトプロジェクトB	4単位	
	グローバル・アーキテクト・プロジェクト	4単位	
	アーキテクト・インターンシップI	3単位	
	アーキテクト・インターンシップII	3単位	
建築インターンシップ	4単位		
人間生活デザインコース	リーガルデザイン	1単位	
未来共生デザインコース	数理モデリングB	1単位	
	Curriculum and Management for Design Education	1単位	
	生命とアート	1単位	
	スペキュラティブデザイン	1単位	
	デザイン・シビック	1単位	
	文化政策	1単位	
メディアデザインコース	メディアデザインプレゼンテーション演習	2単位	
音響設計コース	ホール工学技術特論	2単位	
	ホール工学技術演習	2単位	

共通	デザインと日本A	2単位	
	デザインと日本B	2単位	
	アカデミックイングリッシュ	2単位	
	インターンシップⅠ	1単位	
	インターンシップⅡ	1単位	
	インターンシップⅢ	2単位	
	芸術工学特別プロジェクトⅠ	1単位	
	芸術工学特別プロジェクトⅡ	1単位	
	芸術工学特別プロジェクトⅢ	1単位	
	芸術工学特別プロジェクトⅣ	1単位	
	芸術工学特別プロジェクトⅤ	2単位	
	芸術工学特別プロジェクトⅥ	2単位	
	芸術工学特別プロジェクトⅦ	2単位	
芸術工学特別プロジェクトⅧ	2単位		
(備考)			
※ 展開科目は、次の(1)～(4)に掲げる授業科目の単位を含むことができる。			
(1) スタジオプロジェクト科目のうち、最低修得単位数を超えて修得する授業科目			
(2) 所属コースのコア科目のうち、最低修得単位数を超えて修得する授業科目			
(3) 所属コース以外のコア科目			
(4) 本学他学府の授業科目			

別表第2 (博士後期課程)

芸術工学専攻

一 履修方法

次に掲げる要件を満たす10単位以上修得しなければならない。

- (1) 論文作成関連科目 4単位
(2) 研究指導科目 6単位

二 授業科目

区分	授業科目	単位数	最低修得単位数
論文作成関連科目	リサーチ研修Ⅰ	2単位	10単位
	リサーチ研修Ⅱ	2単位	
研究指導科目	リサーチプロジェクトⅠ	2単位	
	リサーチプロジェクトⅡ	2単位	
	リサーチプロジェクトⅢ	2単位	

九州大学大学院芸術工学府規則の一部を改正する規則（案）

令和 3 年度九大規則第 号
制 定：令和 4 年 3 月 日

九州大学大学院芸術工学府規則（平成 16 年度九大規則第 131 号）の一部を次のように改正する。

(新) (略)	(旧) (略)
<p>(コース) 第 1 条の 3 本学府芸術工学専攻修士課程及び博士後期課程に、次のコースを置く。 <u>ストラテジックデザインコース</u> <u>環境設計コース</u> <u>人間生活デザインコース</u> <u>未来共生デザインコース</u> <u>メディアデザインコース</u> <u>音響設計コース</u></p> <p style="text-align: center;">(略)</p> <p>(授業科目、単位及び履修方法等) 第 5 条 授業科目、単位及び履修方法は、修士課程にあつては別表第 1、博士後期課程にあつては別表第 2 の定めるところにより、単位を修得しなければならない。</p> <p>2・3 (略)</p> <p style="text-align: center;">(略)</p> <p>(修士課程の修了要件) 第 10 条 本学府の修士課程の修了要件は、修士課程に 2 年以上在学し、この規則の定めるところにより、40 単位以上を修得し、かつ、必要な研究指導を受けた上、修士論文又は修士作品（以下「修士論文等」という。）を提出して、本学府教授会の行う修士論文等の審査及び最終試験に合格することとする。ただし、総長が認めるときは、在学期間に関しては、優れた業績を上げた者については、修士課程に 1 年以上在学すれば足りるものとする。</p> <p style="text-align: center;">(博士課程の修了要件) 第 11 条 本学府の博士課程の修了要件は、博士課程に 5 年（修士課程に 2 年以上在学し、当該課程を修了した者にあつては、当該課程における 2 年の在学期間を含む。）</p>	<p>(コース) 第 1 条の 3 本学府芸術工学専攻修士課程及び博士後期課程に、次のコースを置く。 <u>デザイン人間科学コース</u> <u>コミュニケーションデザイン科学コース</u> <u>環境・遺産デザインコース</u> <u>コンテンツ・クリエイティブデザインコース</u></p> <p><u>2 本学府芸術工学専攻博士後期課程に、国際コース（英語による授業等により学位取得可能な教育課程をいう。）として、デザイン人間科学国際コースを置く。</u></p> <p style="text-align: center;">(略)</p> <p>(授業科目、単位及び履修方法等) 第 5 条 授業科目、単位及び履修方法は、修士課程にあつては別表第 1、博士後期課程にあつては別表第 2 のとおりとし、別表第 3 の定めるところにより、単位を修得しなければならない。</p> <p>2・3 (略)</p> <p style="text-align: center;">(略)</p> <p>(修士課程の修了要件) 第 10 条 本学府の修士課程の修了要件は、修士課程に 2 年以上在学し、この規則の定めるところにより、<u>芸術工学専攻においては 30 単位以上、デザインストラテジー専攻においては 40 単位以上</u>を修得し、かつ、必要な研究指導を受けた上、修士論文又は修士作品（以下「修士論文等」という。）を提出して、本学府教授会の行う修士論文等の審査及び最終試験に合格することとする。ただし、総長が認めるときは、在学期間に関しては、優れた業績を上げた者については、修士課程に 1 年以上在学すれば足りるものとする。</p> <p style="text-align: center;">(博士課程の修了要件) 第 11 条 本学府の博士課程の修了要件は、博士課程に 5 年（修士課程に 2 年以上在学し、当該課程を修了した者にあつては、当該課程における 2 年の在学期間を含む。）</p>

<p>以上在学し、この規則の定めるところにより、<u>50単位以上</u>（他の学府又は他の大学院の修士課程を修了した者にあつては博士後期課程において10単位以上）を修得し、かつ、必要な研究指導を受けた上、博士論文の審査及び最終試験に合格することとする。ただし、総長が認めるときは、在学期間に関しては、優れた研究業績を上げた者については、博士課程に3年（修士課程に2年以上在学し、当該課程を修了した者にあつては、当該課程における2年の在学期間を含む。）以上在学すれば足りるものとする。</p> <p>2・3 （略）</p> <p style="text-align: center;">（略）</p> <p style="text-align: center;"><u>（クリエイティブ・リーダーシップ・プログラム）</u></p> <p><u>第15条の5 創造的思考力に基づく社会・文化の長期的なビジョンを構想でき、深い人間・環境理解に基づく価値提案を実践でき、提案しようとする価値を社会実装するために多様な他者への共感力・協働力を備え、イノベーション・プロジェクトを遂行する能力を持つ高度デザイン人材を育成するため、本学府修士課程にクリエイティブ・リーダーシップ・プログラム（以下この条において「プログラム」という。）を置く。</u></p> <p><u>2 プログラムの授業科目、単位、履修方法等は、本学府教授会の議を経て、本学府長が別に定める。</u></p> <p><u>3 プログラムの授業科目の所定の単位を修得した者には、プログラム修了証を授与する。</u></p> <p style="text-align: center;">（略）</p> <p>別表第1・2 <u>（別紙のとおり）</u></p>	<p>以上在学し、この規則の定めるところにより、<u>芸術工学専攻においては40単位以上</u>（他の専攻若しくは学府又は他の大学院の修士課程を修了した者にあつては博士後期課程において10単位以上）、<u>デザインストラテジー専攻においては50単位以上</u>（他の専攻若しくは学府又は他の大学院の修士課程を修了した者にあつては博士後期課程において10単位以上）を修得し、かつ、必要な研究指導を受けた上、博士論文の審査及び最終試験に合格することとする。ただし、総長が認めるときは、在学期間に関しては、優れた研究業績を上げた者については、博士課程に3年（修士課程に2年以上在学し、当該課程を修了した者にあつては、当該課程における2年の在学期間を含む。）以上在学すれば足りるものとする。</p> <p>2・3 （略）</p> <p style="text-align: center;">（略）</p> <p style="text-align: center;">（略）</p> <p>別表第1・2 <u>（別紙のとおり）</u></p> <p>別表第3</p>
--	--

附 則

- 1 この規則は、令和4年4月1日から施行する。
- 2 この規則による改正後の九州大学大学院芸術工学府規則は、令和4年4月1日に本学府に入学する者から適用し、令和4年3月31日に本学府に在学し、同年4月1日以降も引き続き在学する者については、なお従前の例による。

新

別表第 1 (修士課程)

芸術工学専攻

一 履修方法

次に掲げる要件を満たす 40 単位以上修得しなければならない。

- (1) 修士研究関連科目 18 単位
- (2) スタジオプロジェクト科目 2 単位
- (3) 所属コースのコア科目 6 単位
- (4) 展開科目 14 単位

二 授業科目

修士研究関連研究科目

授業科目	単位数	最低修得 単位数
芸術工学特別研究Ⅰ	4 単位	18 単位
芸術工学特別研究Ⅱ	4 単位	
芸術工学特別研究Ⅲ	4 単位	
芸術工学特別研究Ⅳ	4 単位	
芸術工学演習	2 単位	

スタジオプロジェクト科目

授業科目	単位数	最低修得 単位数
スタジオプロジェクトⅠ-A	2 単位	2 単位
スタジオプロジェクトⅠ-B	2 単位	
スタジオプロジェクトⅡ-A	2 単位	
スタジオプロジェクトⅡ-B	2 単位	
スタジオプロジェクトⅢ-A	2 単位	
スタジオプロジェクトⅢ-B	2 単位	
スタジオプロジェクトⅣ-A	2 単位	
スタジオプロジェクトⅣ-B	2 単位	

コア科目

コース	授業科目	単位数	最低修得 単位数
ストラテジックデザインコース	シリアスゲームデザイン1	1 単位	6 単位
	シリアスゲームデザイン2	1 単位	
	コネクティッドデザイン	1 単位	
	デザインイノベーション	1 単位	
	ストラテジック・サービス・デザイン	1 単位	
	プロデューサー原論	1 単位	
	デザインマネジメント	1 単位	
	デザインマーケティング	1 単位	
	デザインプロジェクトマネジメント	1 単位	
	ブランドビジネスデザイン	1 単位	
	デザイン産業事情1	1 単位	
	デザイン産業事情2	1 単位	
	知的財産法1	1 単位	

	知的財産法 2 デザイン思考 リーンスタートアップ演習 1 リーンスタートアップ演習 2 リーンスタートアップ演習 3 リーンスタートアップ演習 4	1 単位 1 単位 1 単位 1 単位 1 単位 1 単位	
環境設計コース	環境化学特論 熱環境学特論 建築構造学特論 環境材料学特論 音響環境学特論 音環境評価特論 環境心理学特論 建築計画特論 建築構法計画特論 環境保全学特論 景観生態学特論 ランドスケープデザイン特論 日本建築史特論 西洋建築史特論 文化財学特論 国際環境政策特論 環境人類学特論 共生社会デザイン論 環境リスクマネジメント デザイン哲学 美術史 環境文化特論 環境デザインプロジェクトA 環境デザインプロジェクトB	2 単位 2 単位 2 単位 2 単位 2 単位 2 単位 1 単位 1 単位 1 単位 1 単位 1 単位 1 単位 1 単位 1 単位 1 単位 2 単位 2 単位 2 単位 1 単位 1 単位 1 単位 1 単位 1 単位 2 単位 2 単位 2 単位	6 単位
人間生活デザインコース	応用人間工学 生活機能支援科学特論 環境人間工学特論 生理人類学特論 脳・行動生理学特論A 脳・行動生理学特論B 感性科学特論 統計情報学 デザイン認知論 人間情報工学 機能工学デザイン 生体模倣工学 パブリックデザイン コンテキストデザイン レジリエンスデザイン コミュニケーションデザイン論 ライフスケープデザイン 人間生活デザイン特論	1 単位 1 単位 1 単位 1 単位 1 単位 1 単位 1 単位 1 単位 1 単位 1 単位 1 単位 1 単位 1 単位 1 単位 1 単位 1 単位 1 単位 2 単位 2 単位	6 単位

未来共生デザインコース	統計情報学 時間生物学 数理モデリング A 分子生物学 Design in General Education 生体模倣工学 バイオマテリアルエンジニアリング 現代アート実践 情報編集デザイン レジリエンスデザイン サステイナブルデザイン アート&リサーチ アーツマネジメント 共生社会デザイン論 環境リスクマネジメント デザイン哲学 イメージ感性論	1 単位 1 単位 1 単位 1 単位 1 単位 1 単位 1 単位 1 単位 1 単位 1 単位 1 単位 1 単位 1 単位 1 単位 1 単位	6 単位
メディアデザインコース	視覚心理学特論 色彩科学特論 心理学的思考法特別演習 コンピュータサイエンス特論 視覚メディア設計特論 画像情報処理システム設計特論 視覚環境知能設計特論 コンピュータグラフィックス特論 メカニクスデザイン特論 メディアサービス特論 バーチャルリアリティ特論 メディアアート表現 視覚記号特論 グラフィックデザイン特論 映像コンテンツデザイン特論 シリアスゲームデザイン 1 映像表現史特論 造形芸術特論 演劇学特論 マルチモーダル・コミュニケーション特論	1 単位 1 単位 1 単位 1 単位 1 単位 1 単位 1 単位 1 単位 1 単位 1 単位 1 単位 1 単位 1 単位 1 単位 1 単位 1 単位 1 単位 1 単位 1 単位	6 単位
音響設計コース	聴覚心理学特論 聴覚生理学特論 時間知覚特論 音声生成特論 音声情報学特論 音声制御特論 音響工学特論 計算音響学 福祉音響学 音響イメージング特論 音響信号処理特論	2 単位 2 単位 2 単位 2 単位 2 単位 2 単位 2 単位 2 単位 2 単位 2 単位 2 単位	6 単位

	音響環境学特論	2 単位	
	音環境評価特論	2 単位	
	音響芸術特論	2 単位	
	作曲学特論	2 単位	
	サウンドデザイン特論	2 単位	
	民族音楽学特論	2 単位	
	音楽社会文化特論	2 単位	
	聴覚文化論特論	2 単位	
	言語学特論	2 単位	
	音響設計特別講話	2 単位	
	輪講	2 単位	

展開科目

コース	授業科目	単位数	最低修得 単位数
ストラテジックデザインコース	機能工学デザイン	1 単位	1 4 単位 ※
	H C I デザイン 1	2 単位	
	エクスペリエンス (U X) デザイン	1 単位	
	アート・シンキング	1 単位	
	インクルーシブデザイン	1 単位	
	ソサエタルデザイン	1 単位	
	ソーシャル・システム・デザイン	1 単位	
	リーダーシップ論	2 単位	
	S D 特別プロジェクト I	2 単位	
	S D 特別プロジェクト II (ストラテジックデザイン)	2 単位	
S D 特別プロジェクト III (ソーシャルデザイン)	2 単位		
S D 特別プロジェクト IV (アントレプレナー)	2 単位		
環境設計コース	ランドスケープデザインプロジェクト	4 単位	
	ストラテジックアーキテクトプロジェクト A	4 単位	
	ストラテジックアーキテクトプロジェクト B	4 単位	
	グローバル・アーキテクト・プロジェクト	4 単位	
	アーキテクト・インターンシップ I	3 単位	
	アーキテクト・インターンシップ II	3 単位	
	建築インターンシップ	4 単位	
人間生活デザインコース	リーガルデザイン	1 単位	
未来共生デザインコース	数理モデリング B	1 単位	
	Curriculum and Management for Design Education	1 単位	
	生命とアート	1 単位	
	スペキュラティブデザイン	1 単位	
	デザイン・シビック	1 単位	
	文化政策	1 単位	
	メディアデザインプレゼンテーション演習	2 単位	
メディアデザインコース	メディアデザインプレゼンテーション演習	2 単位	

音響設計コース	ホール工学技術特論 ホール工学技術演習	2単位 2単位	
共通	デザインと日本A デザインと日本B アカデミックイングリッシュ インターンシップⅠ インターンシップⅡ インターンシップⅢ 芸術工学特別プロジェクトⅠ 芸術工学特別プロジェクトⅡ 芸術工学特別プロジェクトⅢ 芸術工学特別プロジェクトⅣ 芸術工学特別プロジェクトⅤ 芸術工学特別プロジェクトⅥ 芸術工学特別プロジェクトⅦ 芸術工学特別プロジェクトⅧ	2単位 2単位 2単位 1単位 1単位 2単位 1単位 1単位 1単位 1単位 2単位 2単位 2単位 2単位	
(備考)			
<p>※ 展開科目は、次の(1)～(4)に掲げる授業科目の単位を含むことができる。</p> <p>(1) スタジオプロジェクト科目のうち、最低修得単位数を超えて修得する授業科目</p> <p>(2) 所属コースのコア科目のうち、最低修得単位数を超えて修得する授業科目</p> <p>(3) 所属コース以外のコア科目</p> <p>(4) 本学他学府の授業科目</p>			

別表第2 (博士後期課程)

芸術工学専攻

一 履修方法

次に掲げる要件を満たす10単位以上修得しなければならない。

- (1) 論文作成関連科目 4単位
(2) 研究指導科目 6単位

二 授業科目

区分	授業科目	単位数	最低修得単位数
論文作成関連科目	リサーチ研修Ⅰ	2単位	10単位
	リサーチ研修Ⅱ	2単位	
研究指導科目	リサーチプロジェクトⅠ	2単位	
	リサーチプロジェクトⅡ	2単位	
	リサーチプロジェクトⅢ	2単位	

別表第 1 (修士課程)
芸術工学専攻

コース	講座等	授 業 科 目	単位数	必修・選択の別
デ ザ イ ン 人 間 科 学	生理人類学	環境人間工学特論	2 単位	選択
		福祉人間工学特論	2 単位	選択
		生活機能支援科学特論	2 単位	選択
		視覚生理学特論	2 単位	選択
デ ザ イ ン 人 間 科 学	知覚心理学	聴覚生理学特論	2 単位	選択
		音声情報学特論	2 単位	選択
		生理人類学特論	2 単位	選択
		視覚心理学特論	2 単位	選択
デ ザ イ ン 人 間 科 学	知覚心理学	音響環境評価特論	2 単位	選択
		デザイン心理評価法	2 単位	選択
		視覚環境理解システム設計特論	2 単位	選択
		心理学的思考法特別演習	2 単位	選択
デ ザ イ ン 人 間 科 学	知覚心理学	聴覚心理学特論	2 単位	選択
		時間知覚特論	2 単位	選択
		色彩科学特論	2 単位	選択
		認知心理学特論	2 単位	選択
デ ザ イ ン 人 間 科 学	生体情報数理学	コンピュータグラフィックス特論	2 単位	選択
		情報統計学特論	1 単位	選択
		機械学習特論	1 単位	選択
		数理・データ科学特論 A	1 単位	選択
デ ザ イ ン 人 間 科 学	生体情報数理学	数理・データ科学特論 B	1 単位	選択
		生物モデリング特論	2 単位	選択
		ヒューマンインタフェース特論	2 単位	選択
		バーチャルリアリティ特論	2 単位	選択
デ ザ イ ン 人 間 科 学	コース内共通科目	デザイン人間科学特論 A	2 単位	必修
		デザイン人間科学特論 B	2 単位	必修
		科学英語特論演習	2 単位	選択
		インターンシップ	2 単位	選択
		デザイン人間科学特別演習 I	4 単位	必修
		デザイン人間科学特別演習 II	4 単位	必修
		芸術工学特別研修 1	1 単位	選択
		芸術工学特別研修 2	1 単位	選択
		芸術工学特別研修 3	1 単位	選択
		芸術工学特別研修 4	1 単位	選択
		芸術工学特別研修 5	1 単位	選択
		芸術工学特別研修 6	1 単位	選択

		芸術工学特別研修 7 芸術工学特別研修 8 芸術工学特別研修 9 芸術工学特別研修 10 芸術工学特別研修 11 芸術工学特別研修 12 芸術工学特別研修 13 芸術工学特別研修 14 芸術工学特別研修 15 芸術工学特別研修 16 芸術工学特別研修 17 芸術工学特別研修 18 芸術工学特別研修 19 芸術工学特別研修 20	1 単位 1 単位 1 単位 1 単位 2 単位 2 単位 2 単位 2 単位 2 単位 2 単位 2 単位 2 単位 2 単位 2 単位	選択 選択 選択 選択 選択 選択 選択 選択 選択 選択 選択 選択 選択 選択
コ ミ ュ ニ ケ ー シ ョ ン デ ザ イ ン 科 学	視聴覚情報融合	音響環境評価特論 多次元システム解析・構成特論 視覚記号特論 西洋近代美術史特論 演劇学特論 ネットワークサービス特論 情報統計学特論 機械学習特論	2 単位 2 単位 2 単位 2 単位 2 単位 2 単位 1 単位 1 単位	選択 選択 選択 選択 選択 選択 選択 選択
	音響情報伝達	音響環境制御特論 音声情報学特論 音響信号処理特論 統計工学特論 生物モデリング特論 聴覚生理学特論 メカニクスデザイン特論	2 単位 2 単位 2 単位 2 単位 2 単位 2 単位 2 単位	選択 選択 選択 選択 選択 選択 選択
	画像情報伝達	視覚環境理解システム設計特論 画像情報伝達システム設計特論 視覚メディア設計特論 視覚環境知能設計特論 コンピュータグラフィックス特論	2 単位 2 単位 2 単位 2 単位 2 単位	選択 選択 選択 選択 選択
	ホールマネジメントエンジニアリング	文化政策特論 アートマネジメント特論 ホール工学技術特論 ホール工学技術演習 ホールマネジメントエンジニアリングプロジェクトⅠ ホールマネジメントエンジニアリングプロジェクトⅡ ホールマネジメントエンジニアリングプロジェクトⅢ	2 単位 2 単位 2 単位 2 単位 2 単位 2 単位 2 単位	選択 選択 選択 選択 選択 選択 選択

		ホールマネジメントエンジニアリングプロジェクトⅣ	2単位	選択
コース内共通科目		視聴覚情報融合PBL	2単位	選択
		音響情報伝達PBL	2単位	選択
		画像情報伝達PBL	2単位	選択
		視聴覚情報融合特論・演習	2単位	選択
		音響情報伝達特論・演習	2単位	選択
		画像情報伝達特論・演習	2単位	選択
		インターンシップ	2単位	選択
		コミュニケーションデザイン科学特別演習Ⅰ	4単位	必修
		コミュニケーションデザイン科学特別演習Ⅱ	4単位	必修
		芸術工学特別研修1	1単位	選択
		芸術工学特別研修2	1単位	選択
		芸術工学特別研修3	1単位	選択
		芸術工学特別研修4	1単位	選択
		芸術工学特別研修5	1単位	選択
		芸術工学特別研修6	1単位	選択
		芸術工学特別研修7	1単位	選択
		芸術工学特別研修8	1単位	選択
		芸術工学特別研修9	1単位	選択
		芸術工学特別研修10	1単位	選択
		芸術工学特別研修11	2単位	選択
		芸術工学特別研修12	2単位	選択
		芸術工学特別研修13	2単位	選択
		芸術工学特別研修14	2単位	選択
		芸術工学特別研修15	2単位	選択
		芸術工学特別研修16	2単位	選択
		芸術工学特別研修17	2単位	選択
	芸術工学特別研修18	2単位	選択	
	芸術工学特別研修19	2単位	選択	
	芸術工学特別研修20	2単位	選択	
環境	遺産理論	自然・森林遺産論	2単位	選択
		田園・都市景観論	2単位	選択
		都市・建築遺産論	2単位	選択
		メディア環境思想特論	2単位	選択
		文化政策特論	2単位	選択
	環境・遺産マネジメント	ランドスケープマネジメント	2単位	選択
		都市・建築遺産マネジメント	2単位	選択
		ツーリズムマネジメント	2単位	選択
		持続社会マネジメント	2単位	選択
		国際協力マネジメント	2単位	選択
	ヘリテージ・マネジメント	2単位	選択	
	アジア近現代建築論	2単位	選択	

遺産デザイン		デザイン教育マネジメント ストラテジックプロジェクト史 プロジェクトマネジメント 森林景観生態学特論 国際環境政策評価論 アートマネジメント特論	2単位 2単位 2単位 2単位 2単位 2単位	選択 選択 選択 選択 選択 選択
	環境デザインテクノロジー	生産システムデザイン 防災システムデザイン デザイン心理評価法 統計工学特論 環境化学特論 建築デザイン 次世代建築空間 次世代都市空間 地域熱環境工学	2単位 2単位 2単位 2単位 2単位 2単位 2単位 2単位 2単位	選択 選択 選択 選択 選択 選択 選択 選択 選択
	コース内共通科目	環境・遺産デザインプロジェクトⅠ 環境・遺産デザインプロジェクトⅡ 環境・遺産デザインプロジェクトⅢ インターンシップ 建築設計インターンシップ グローバル・アーキテクト・プロジェクト アーキテクトインターンシップ1 アーキテクトインターンシップ2 環境・遺産デザイン特別演習Ⅰ 環境・遺産デザイン特別演習Ⅱ 芸術工学特別研修1 芸術工学特別研修2 芸術工学特別研修3 芸術工学特別研修4 芸術工学特別研修5 芸術工学特別研修6 芸術工学特別研修7 芸術工学特別研修8 芸術工学特別研修9 芸術工学特別研修10 芸術工学特別研修11 芸術工学特別研修12 芸術工学特別研修13 芸術工学特別研修14 芸術工学特別研修15 芸術工学特別研修16 芸術工学特別研修17 芸術工学特別研修18 芸術工学特別研修19 芸術工学特別研修20	3単位 3単位 3単位 2単位 4単位 4単位 3単位 3単位 4単位 4単位 1単位 1単位 1単位 1単位 1単位 1単位 1単位 1単位 1単位 1単位 1単位 2単位 2単位 2単位 2単位 2単位 2単位 2単位 2単位 2単位 2単位 2単位 2単位	選択 選択 選択 選択 選択 選択 選択 選択 必修 必修 選択

コ ン テ ン ツ ・ ク リ エ ー テ ィ ブ デ ザ イ ン	芸術表現学	現代造形特論 先端芸術表現特論 造形解析特論 メディア環境思想特論 西洋近代美術史特論 西洋音楽史特論 音楽・伝統芸能コンテンツ特論 比較メディア文化特論 演劇学特論 現代芸術特論 アートマネジメント特論 文化政策特論 視覚心理学特論	2単位 2単位 2単位 2単位 2単位 2単位 2単位 2単位 2単位 2単位 2単位 2単位 2単位	選択 選択 選択 選択 選択 選択 選択 選択 選択 選択 選択 選択 選択
	デジタルコン テンツデザイン	先端メディア芸術表現 メディアアート特論 バーチャルリアリティ特論 ネットワークサービス特論 コンピュータグラフィックス特論 映像コンテンツデザイン特論 コンテンツ知的財産論Ⅰ コンテンツ知的財産論Ⅱ インタラクティブデザイン	2単位 2単位 2単位 2単位 2単位 2単位 2単位 2単位 2単位	選択 選択 選択 選択 選択 選択 選択 選択 選択
	クリエイティブ デザイン	視覚記号特論 プロダクトデザイン特論 プロダクトデザインメソッド特論 メカニクスデザイン特論 グラフィックデザイン特論 インクルーシブデザイン パブリックデザイン 情報編集デザイン論 オートモーティブデザイン	2単位 2単位 2単位 2単位 2単位 2単位 2単位 2単位 2単位	選択 選択 選択 選択 選択 選択 選択 選択 選択
	コース内共通科目	芸術表現学プロジェクト デジタルコンテンツデザインプロ ジェクト クリエイティブデザインプロジ ェクト プレゼンテーション特別演習 インターンシップ コンテンツ・クリエイティブデザ イン特別演習Ⅰ コンテンツ・クリエイティブデザ イン特別演習Ⅱ 芸術工学特別研修1 芸術工学特別研修2	2単位 2単位 2単位 2単位 2単位 2単位 4単位 4単位 1単位 1単位	選択 選択 選択 選択 選択 選択 必修 必修 選択 選択

	芸術工学特別研修 3	1 単位	選択
	芸術工学特別研修 4	1 単位	選択
	芸術工学特別研修 5	1 単位	選択
	芸術工学特別研修 6	1 単位	選択
	芸術工学特別研修 7	1 単位	選択
	芸術工学特別研修 8	1 単位	選択
	芸術工学特別研修 9	1 単位	選択
	芸術工学特別研修 1 0	1 単位	選択
	芸術工学特別研修 1 1	2 単位	選択
	芸術工学特別研修 1 2	2 単位	選択
	芸術工学特別研修 1 3	2 単位	選択
	芸術工学特別研修 1 4	2 単位	選択
	芸術工学特別研修 1 5	2 単位	選択
	芸術工学特別研修 1 6	2 単位	選択
	芸術工学特別研修 1 7	2 単位	選択
	芸術工学特別研修 1 8	2 単位	選択
	芸術工学特別研修 1 9	2 単位	選択
	芸術工学特別研修 2 0	2 単位	選択

デザインストラテジー専攻

区 分	授 業 科 目	単位数	必修・選択の別
デザインビジネス科目	プロデューサー原論 デザインイノベーション ブランドビジネスデザイン プロジェクトマネジメント コミュニケーション・デザイン論 デザインマネジメント コンテンツ知的財産論Ⅰ コンテンツ知的財産論Ⅱ プレゼンテーション サステイナブルデザイン ソーシャルデザイン デザインコンサルタント デザイン産業事情 デザインベンチャー	2 単位 2 単位 2 単位 2 単位 2 単位 2 単位 2 単位 2 単位 2 単位 2 単位 2 単位 2 単位 2 単位 2 単位	選択 選択 選択 選択 選択 選択 選択 選択 選択 選択 選択 選択 選択 選択
ストラテジックアーキ テクト科目	建築デザイン 次世代都市空間 ストラテジックプロジェクト史 パブリックデザイン 機能工学デザイン 次世代建築空間 情報編集デザイン論 インクルーシブデザイン プロダクトデザイン特論 プロダクトデザインメソッド特論 メカニクスデザイン特論	2 単位 2 単位 2 単位 2 単位 2 単位 2 単位 2 単位 2 単位 2 単位 2 単位 2 単位	選択 選択 選択 選択 選択 選択 選択 選択 選択 選択 選択

		まちづくりデザイン	2単位	選択		
ストラテジックエクスペリエンス科目		インタラクティブデザイン リスニングデザイン デジタル映像デザイン 国際コミュニケーションA 国際コミュニケーションB 映像コンテンツデザイン特論 視覚記号特論 グラフィックデザイン特論 先端メディア芸術表現 アートマネジメント特論	2単位 2単位 2単位 2単位 2単位 2単位 2単位 2単位 2単位 2単位	選択 選択 選択 選択 選択 選択 選択 選択 選択 選択		
専攻内共通科目	プロジェクト科目	ストラテジックアーキテクトプロジェクトA	4単位	選択		
		ストラテジックアーキテクトプロジェクトB	4単位	選択		
		ストラテジックエクスペリエンスプロジェクトA	4単位	選択		
		ストラテジックエクスペリエンスプロジェクトB	4単位	選択		
		ストラテジックデザイン思考特論	4単位	選択		
		グローバルデザインプロジェクト	2単位	選択		
		デザインストラテジープロジェクトA	4単位	必修		
		デザインストラテジープロジェクトB	4単位	必修		
				インターンシップ	2単位	選択
				アーキテクトインターンシップ1	3単位	選択
		アーキテクトインターンシップ2	3単位	選択		
		グローバル・アーキテクト・プロジェクト	4単位	選択		
		芸術工学特別研修1	1単位	選択		
		芸術工学特別研修2	1単位	選択		
		芸術工学特別研修3	1単位	選択		
		芸術工学特別研修4	1単位	選択		
		芸術工学特別研修5	1単位	選択		
		芸術工学特別研修6	1単位	選択		
		芸術工学特別研修7	1単位	選択		
		芸術工学特別研修8	1単位	選択		
		芸術工学特別研修9	1単位	選択		
		芸術工学特別研修10	1単位	選択		
		芸術工学特別研修11	2単位	選択		
		芸術工学特別研修12	2単位	選択		
		芸術工学特別研修13	2単位	選択		
		芸術工学特別研修14	2単位	選択		
		芸術工学特別研修15	2単位	選択		

	芸術工学特別研修 1 6	2 単位	選択
	芸術工学特別研修 1 7	2 単位	選択
	芸術工学特別研修 1 8	2 単位	選択
	芸術工学特別研修 1 9	2 単位	選択
	芸術工学特別研修 2 0	2 単位	選択

別表第 2 (博士後期課程)

芸術工学専攻

修士課程と共通開設の授業科目

コース	講座等	授 業 科 目	単位数	必修・選択の別
デ ザ イ ン 人 間 科 学	生理人類学	環境人間工学特論	2 単位	選択
		福祉人間工学特論	2 単位	選択
		生活機能支援科学特論	2 単位	選択
		視覚生理学特論	2 単位	選択
		聴覚生理学特論	2 単位	選択
		音声情報学特論	2 単位	選択
		生理人類学特論	2 単位	選択
知覚心理学	視覚心理学特論 音響環境評価特論 デザイン心理評価法 視覚環境理解システム設計特論 心理学的思考法特別演習 聴覚心理学特論 時間知覚特論 色彩科学特論 認知心理学特論	2 単位	選択	
		2 単位	選択	
		2 単位	選択	
		2 単位	選択	
		2 単位	選択	
		2 単位	選択	
		2 単位	選択	
		2 単位	選択	
		2 単位	選択	
生体情報数理学	コンピュータグラフィックス特論 情報統計学特論 機械学習特論 数理・データ科学特論 A 数理・データ科学特論 B 生物モデリング特論 ヒューマンインタフェース特論 バーチャルリアリティー特論	2 単位	選択	
		1 単位	選択	
		1 単位	選択	
		1 単位	選択	
		1 単位	選択	
		2 単位	選択	
		2 単位	選択	
		2 単位	選択	
コース内共通科目	デザイン人間科学特論 A デザイン人間科学特論 B 科学英語特論演習 インターンシップ 芸術工学特別研修 1 芸術工学特別研修 2 芸術工学特別研修 3	2 単位	選択	
		2 単位	選択	
		2 単位	選択	
		2 単位	選択	
		1 単位	選択	
		1 単位	選択	
		1 単位	選択	

		芸術工学特別研修 4 芸術工学特別研修 5 芸術工学特別研修 6 芸術工学特別研修 7 芸術工学特別研修 8 芸術工学特別研修 9 芸術工学特別研修 10 芸術工学特別研修 11 芸術工学特別研修 12 芸術工学特別研修 13 芸術工学特別研修 14 芸術工学特別研修 15 芸術工学特別研修 16 芸術工学特別研修 17 芸術工学特別研修 18 芸術工学特別研修 19 芸術工学特別研修 20	1 単位 1 単位 1 単位 1 単位 1 単位 1 単位 1 単位 2 単位 2 単位 2 単位 2 単位 2 単位 2 単位 2 単位 2 単位 2 単位 2 単位	選択 選択 選択 選択 選択 選択 選択 選択 選択 選択 選択 選択 選択 選択 選択 選択 選択
コ ミ ュ ニ ケ ー シ ョ ン デ ザ イ ン 科	視聴覚情報融合	音響環境評価特論 多次元システム解析・構成特論 視覚記号特論 西洋近代美術史特論 演劇学特論 ネットワークサービス特論 情報統計学特論 機械学習特論	2 単位 2 単位 2 単位 2 単位 2 単位 2 単位 1 単位 1 単位	選択 選択 選択 選択 選択 選択 選択 選択
	音響情報伝達	音響環境制御特論 音声情報学特論 音響信号処理特論 統計工学特論 生物モデリング特論 聴覚生理学特論 メカニクスデザイン特論	2 単位 2 単位 2 単位 2 単位 2 単位 2 単位 2 単位	選択 選択 選択 選択 選択 選択 選択
	画像情報伝達	視覚環境理解システム設計特論 画像情報伝達システム設計特論 視覚メディア設計特論 視覚環境知能設計特論 コンピュータグラフィックス特論	2 単位 2 単位 2 単位 2 単位 2 単位	選択 選択 選択 選択 選択
	コース内共通科目	視聴覚情報融合 PBL 音響情報伝達 PBL 画像情報伝達 PBL 視聴覚情報融合特論・演習 音響情報伝達特論・演習 画像情報伝達特論・演習 インターンシップ	2 単位 2 単位 2 単位 2 単位 2 単位 2 単位 2 単位	選択 選択 選択 選択 選択 選択 選択

学		芸術工学特別研修 1	1 単位	選択
		芸術工学特別研修 2	1 単位	選択
		芸術工学特別研修 3	1 単位	選択
		芸術工学特別研修 4	1 単位	選択
		芸術工学特別研修 5	1 単位	選択
		芸術工学特別研修 6	1 単位	選択
		芸術工学特別研修 7	1 単位	選択
		芸術工学特別研修 8	1 単位	選択
		芸術工学特別研修 9	1 単位	選択
		芸術工学特別研修 1 0	1 単位	選択
		芸術工学特別研修 1 1	2 単位	選択
		芸術工学特別研修 1 2	2 単位	選択
		芸術工学特別研修 1 3	2 単位	選択
		芸術工学特別研修 1 4	2 単位	選択
		芸術工学特別研修 1 5	2 単位	選択
		芸術工学特別研修 1 6	2 単位	選択
		芸術工学特別研修 1 7	2 単位	選択
		芸術工学特別研修 1 8	2 単位	選択
		芸術工学特別研修 1 9	2 単位	選択
		芸術工学特別研修 2 0	2 単位	選択
環 境 ・ 遺 産 デ ザ イ ン	遺産理論	自然・森林遺産論 田園・都市景観論 都市・建築遺産論 メディア環境思想特論	2 単位 2 単位 2 単位 2 単位	選択 選択 選択 選択
	環境・遺産マネジメント	ランドスケープマネジメント 都市・建築遺産マネジメント ツーリズムマネジメント 持続社会マネジメント 国際協力マネジメント ヘリテージ・マネジメント ストラテジックプロジェクト史 プロジェクトマネジメント 森林景観生態学特論 国際環境政策評価論 アートマネジメント特論	2 単位 2 単位 2 単位 2 単位 2 単位 2 単位 2 単位 2 単位 2 単位 2 単位 2 単位	選択 選択 選択 選択 選択 選択 選択 選択 選択 選択 選択
	環境デザインテクノロジー	生産システムデザイン 防災システムデザイン デザイン心理評価法 統計工学特論 環境化学特論 建築デザイン 次世代建築空間 次世代都市空間 地域熱環境工学	2 単位 2 単位 2 単位 2 単位 2 単位 2 単位 2 単位 2 単位 2 単位	選択 選択 選択 選択 選択 選択 選択 選択 選択

	コース内共通科目	環境・遺産デザインプロジェクトⅠ 環境・遺産デザインプロジェクトⅡ 環境・遺産デザインプロジェクトⅢ インターンシップ 芸術工学特別研修1 芸術工学特別研修2 芸術工学特別研修3 芸術工学特別研修4 芸術工学特別研修5 芸術工学特別研修6 芸術工学特別研修7 芸術工学特別研修8 芸術工学特別研修9 芸術工学特別研修10 芸術工学特別研修11 芸術工学特別研修12 芸術工学特別研修13 芸術工学特別研修14 芸術工学特別研修15 芸術工学特別研修16 芸術工学特別研修17 芸術工学特別研修18 芸術工学特別研修19 芸術工学特別研修20	3単位 3単位 3単位 2単位 1単位 1単位 1単位 1単位 1単位 1単位 1単位 1単位 1単位 1単位 1単位 2単位 2単位 2単位 2単位 2単位 2単位 2単位 2単位 2単位 2単位 2単位 2単位 2単位	選択 選択
コン テ ン ツ ・ ク リ エ ー テ ィ	芸術表現学	現代造形特論 造形解析特論 メディア環境思想特論 西洋近代美術史特論 西洋音楽史特論 音楽・伝統芸能コンテンツ特論 比較メディア文化特論 演劇学特論 現代芸術特論 アートマネジメント特論 視覚心理学特論	2単位 2単位 2単位 2単位 2単位 2単位 2単位 2単位 2単位 2単位 2単位	選択 選択 選択 選択 選択 選択 選択 選択 選択 選択 選択
	デジタルコンテ ンツデザイン	先端メディア芸術表現 メディアアート特論 バーチャルリアリティ特論 ネットワークサービス特論 コンピュータグラフィックス特論 映像コンテンツデザイン特論 コンテンツ知的財産論Ⅰ コンテンツ知的財産論Ⅱ インタラクティブデザイン	2単位 2単位 2単位 2単位 2単位 2単位 2単位 2単位 2単位	選択 選択 選択 選択 選択 選択 選択 選択 選択
ィ	クリエイティブ	視覚記号特論	2単位	選択

科 学 国 際		Advanced Color Science	2 単位	選択
	生体情報数理学	Advanced Computational Statistics Advanced Machine Learning Mathematical Modeling in Biology Advanced Mathematical and Data Sciences A Advanced Mathematical and Data Sciences B	1 単位 1 単位 2 単位 1 単位 1 単位	選択 選択 選択 選択 選択
	コース内共通科目	Advanced Human Science A Advanced Human Science B Advanced Scientific English Human SciencePracticum 1 Human SciencePracticum 2 Human SciencePracticum 3 Human SciencePracticum 4 Human SciencePracticum 5 Human SciencePracticum 6 Human SciencePracticum 7 Human SciencePracticum 8 Human SciencePracticum 9 Human SciencePracticum 1 0 Human SciencePracticum 1 1 Human SciencePracticum 1 2 Human SciencePracticum 1 3 Human SciencePracticum 1 4 Human SciencePracticum 1 5 Human SciencePracticum 1 6 Human SciencePracticum 1 7 Human SciencePracticum 1 8 Human SciencePracticum 1 9 Human SciencePracticum 2 0	2 単位 2 単位 2 単位 1 単位 1 単位 1 単位 1 単位 1 単位 1 単位 1 単位 1 単位 1 単位 1 単位 1 単位 2 単位 2 単位 2 単位 2 単位 2 単位 2 単位 2 単位 2 単位 2 単位 2 単位	選択 選択

博士後期課程においては、修士課程と共通開設の授業科目のうちから、4 単位以上修得しなければならない。

博士後期課程独自の授業科目

コース	授 業 科 目	単位数	必修・選択の別
デザイン 人間科学	デザイン人間科学特別研修 デザイン人間科学プロジェクト研究 I デザイン人間科学プロジェクト研究 II デザイン人間科学特別演習 III	2 単位 2 単位 2 単位 2 単位	選択 選択 選択 選択

コミュニケーションデザイン科学	コミュニケーションデザイン科学特別研修	2単位	選択
	コミュニケーションデザイン科学プロジェクト研究Ⅰ	2単位	選択
	コミュニケーションデザイン科学プロジェクト研究Ⅱ	2単位	選択
	コミュニケーションデザイン科学特別演習Ⅲ	2単位	必修
環境・遺産デザイン	環境・遺産デザイン特別研修	2単位	選択
	環境・遺産デザインプロジェクト研究	4単位	選択
	環境・遺産デザイン特別演習Ⅲ	2単位	選択
コンテンツ・クリエイティブデザイン	コンテンツ・クリエイティブデザイン特別演習Ⅲ	4単位	必修
	コンテンツ・クリエイティブデザインプロジェクト研究	2単位	選択
	コンテンツ・クリエイティブデザイン特別研修	2単位	選択
デザイン人間科学国際	Human Science Training	2単位	選択
	Human Science Project Study Ⅰ	2単位	選択
	Human Science Project Study Ⅱ	2単位	選択
	Human Science Seminar Ⅲ	2単位	選択
6単位以上を修得しなければならない。			

デザインストラテジー専攻

修士課程と共通開設の授業科目

区 分	授 業 科 目	単位数	必修・選択の別
デザインビジネス科目	プロデューサー原論	2単位	選択
	デザインイノベーション	2単位	選択
	ブランドビジネスデザイン	2単位	選択
	プロジェクトマネジメント	2単位	選択
	コミュニケーション・デザイン論	2単位	選択
	デザインマネジメント	2単位	選択
	コンテンツ知的財産論Ⅰ	2単位	選択
	コンテンツ知的財産論Ⅱ	2単位	選択
	プレゼンテーション	2単位	選択
	サステイナブルデザイン	2単位	選択
	ソーシャルデザイン	2単位	選択
	デザインコンサルタント	2単位	選択
	デザイン産業事情	2単位	選択
	デザインベンチャー	2単位	選択
ストラテジックアーキテ	建築デザイン	2単位	選択

クト科目	次世代都市空間 ストラテジックプロジェクト史 パブリックデザイン 機能工学デザイン 次世代建築空間 情報編集デザイン論 インクルーシブデザイン プロダクトデザインメソッド特論 メカニクスデザイン特論 まちづくりデザイン	2単位 2単位 2単位 2単位 2単位 2単位 2単位 2単位 2単位 2単位	選択 選択 選択 選択 選択 選択 選択 選択 選択 選択
ストラテジックエクスペリエンス科目	インタラクティブデザイン リスニングデザイン デジタル映像デザイン 国際コミュニケーションA 国際コミュニケーションB 映像コンテンツデザイン特論 視覚記号特論 グラフィックデザイン特論 先端メディア芸術表現	2単位 2単位 2単位 2単位 2単位 2単位 2単位 2単位 2単位	選択 選択 選択 選択 選択 選択 選択 選択 選択
専攻内共通科目	芸術工学特別研修1 芸術工学特別研修2 芸術工学特別研修3 芸術工学特別研修4 芸術工学特別研修5 芸術工学特別研修6 芸術工学特別研修7 芸術工学特別研修8 芸術工学特別研修9 芸術工学特別研修10 芸術工学特別研修11 芸術工学特別研修12 芸術工学特別研修13 芸術工学特別研修14 芸術工学特別研修15 芸術工学特別研修16 芸術工学特別研修17 芸術工学特別研修18 芸術工学特別研修19 芸術工学特別研修20	1単位 1単位 1単位 1単位 1単位 1単位 1単位 1単位 1単位 1単位 2単位 2単位 2単位 2単位 2単位 2単位 2単位 2単位 2単位 2単位	選択 選択 選択 選択 選択 選択 選択 選択 選択 選択 選択 選択 選択 選択 選択 選択 選択 選択 選択 選択
<p>博士後期課程においては、共通開設授業科目のうちから、4単位以上修得しなければならない。 (履修注意) 修士課程との共通開設科目のうち、2単位は研究指導教員の認める範囲で芸術工学府他専攻から修得することができる。</p>			

博士後期課程独自の授業科目

授 業 科 目	単位数	必修・選択の別
デザインストラテジー・リサーチ研修	2単位	選択
デザインストラテジー・リサーチプロジェクトA	2単位	選択
デザインストラテジー・リサーチプロジェクトB	2単位	選択
デザインストラテジー・リサーチプロジェクトC	2単位	選択
6単位以上を修得しなければならない。		

別表第3

芸術工学専攻 履修単位数表

課 程	コース	区 分	必 修	選 択	
修士課程	デザイン人間科学	コース内共通科目	12		
		講座内科目		6	
		他講座科目		6	
		自由科目		6	
		計	12	18	
		合 計	30		
	コミュニケーション科学	コース内共通科目	8	4	
		講座内科目		6	
		他講座科目		4	
		自由科目		8	
		計	8	22	
		合 計	30		
			コース内共通科目	8	

	環境・遺産デザイン	講座内科目		6
		他講座科目		6
		自由科目		10
		計	8	22
		合計	30	
	コンテンツデザイン・クリエイター	コース内共通科目	8	4
		講座内科目		4
		他講座科目		6
		自由科目		8
		計	8	22
		合計	30	
博士後期課程	修士課程と共通開設の授業科目		4	
	博士後期課程独自の授業科目		6	
	計		10	
	合計	10		
<p>(履修注意)</p> <p>自由科目は、芸術工学専攻修士課程の授業科目（各コースの特別演習Ⅰ及びⅡを除く。）からの選択履修とする。ただし、研究指導教員が必要と認める場合は、本学府の他の専攻若しくは他の学府又は芸術工学部の授業科目から、デザイン人間科学コースにおいては2単位、コミュニケーションデザイン科学コースにおいては4単位、環境・遺産デザインコースにおいては6単位（うち芸術工学部の科目は4単位まで）、コンテンツ・クリエイティブデザインコースにおいては6単位まで選択履修することができる。</p>				

デザインストラテジー専攻 履修単位数表

課程	区分	必修	選択
	専攻内共通科目	8	4

修士課程	専門科目		16
	自由科目		12
	計	8	32
	合計	40	
博士後期課程	修士課程と共通開設の授業科目		4
	博士後期課程独自の授業科目		6
	計		10
	合計	10	
<p>(履修注意)</p> <p>1 専門科目は、デザインビジネス科目から8単位以上、ストラテジックアーキテクト科目及びストラテジックエクスペリエンス科目から8単位以上のあわせて16単位以上の選択履修とする。</p> <p>2 自由科目は、デザインストラテジー専攻修士課程の授業科目からの選択履修とする。ただし、研究指導教員が必要と認める場合は、本学府の他の専攻若しくは他の学府又は芸術工学部の授業科目から6単位まで選択履修することができる。</p> <p>3 博士後期課程における修士課程と共通開設の授業科目については、研究指導教員が必要と認める場合、本学府の他の専攻の授業科目から2単位まで選択履修することができる。</p>			

設置の趣旨等を記載した書類

九州大学芸術工学府

目 次

1. 設置の趣旨及び必要性	1
2. 専攻・コースの特色	6
3. 学府、専攻及び学位の名称	10
4. 教育課程の編成の考え方及び特色	11
5. 学府教育のための教員組織の編成の考え方及び特色	23
6. 教育方法、履修指導、研究指導の方法及び修了要件	26
7. 入学者選抜の概要	40
8. 基礎となる学部との関係	46
9. 施設、設備等の整備計画	47
10. 管理運営	49
11. 自己点検・評価	51
12. 情報の公表	53
13. 教育内容等の改善を図るための組織的な研修等	54

1. 設置の趣旨及び必要性

(1) 設置の趣旨及び必要性

【歴史・経緯】

大学院芸術工学府、大学院芸術工学研究院、芸術工学部は、その前身となる九州芸術工科大学の創設以来、現代社会において、技術の独走によって技術と人間との関係に歪みが生ずることのないように、人間の特性を科学的に把握しながら、技術を真に人類の福祉と人間生活の充実に資するものとする、との理念に基づいて教育・研究を進めてきた。この理念を一言で表すならば「技術の人間化」であり、「技術の人間化」を実現するための研究分野として欧米における“Design”にあたる学問分野である「芸術工学」が創設された。

このような観点から、九州芸術工科大学においては、「高次のデザイナー」を育成するため文系、理系、芸術系などの区別にとらわれない学部教育、大学院教育を行う伝統が形成された。特に大学院に関しては、平成 11 (1999) 年の大幅な改組、平成 15 (2003) 年の九州大学との統合を経て、平成 18 (2006) 年には芸術工学専攻に加えて、デザインストラテジー専攻を設置し 2 専攻体制となり、令和 2 (2020) 年 4 月 1 日現在で 42 年の歴史を数えるに至っている。この間、デザインの諸分野で卒業生・修了生が社会で活躍しており、社会的評価を見ても、理念に合った活躍ぶりである。また、デザインストラテジー専攻は経営・事業におけるビジネスセンスと、それを具現化する能力等を結びつけるデザインプロデュース能力を持つ人材の育成を目的として、平成 18 (2006) 年に設置されて以来、デザインストラテジストを輩出し、令和元 (2019) 年度には経済産業省の「高度デザイン人材の養成」に関する調査の対象プログラムとなるなどの評価を受けている。現状では、芸術工学専攻がデザインの個別分野における計画・設計を、またデザインストラテジー専攻がビジネスにおけるデザインの戦略的活用を主な目的として、全体で「技術の人間化」を実現するべく活動を行っている。

【社会からのニーズの変化・デザインの変化】

一方、平成 11 (1999) 年、平成 18 (2006) 年の改組以降、デザインの領域、デザイナーの役割も拡大している。芸術工学が成立した時期のデザインは形や色など「モノ」の意匠的成果を目的としていたが、近年は「モノ」が使われることを想定したユーザーエクスペリエンス (UX) や「モノ」を介するサービスや「モノ」の使われ方・仕組みという「コト」の側面もデザインの領域に含まれるようになった。さらに、そのような「モノ」が使われることで実現されるかもしれない将来の社会の在り方などの「ビジョン」さえもデザインの概念に含まれるようになった。

そのことが社会からのデザインに対するニーズの変化にも反映し、デザインに関連する多くの企業への調査によれば、デザイン領域の変化に対応するためには、新たなデザイン人材が求められているといわれている。その求められている人材とは、「社会を支えるシステムのあるべき姿を探るための将来像を示す」(日立)、「従来の枠を超える、領域にとらわれない」(パナソニック)、「デザインの枠自体がなくなり、モノからシステムや環境をデザインの主体とする」(ダイキン)、「商品デザインから、事業創出、研究開発、ブランディングまで広げる」(ソニー)、というような領域を横断する能力を持つ人材であり、「人や社会、技術を理解し、人の経験や行動原理をベースに未来ビジョンを描き、それを実現する仕組みを考え、必要なサービス、商品や空間を総合的にデザインする」(富士通)、「30 年先からの未来技術、生活文化を想像し、未来に生じる価値観や価値の源泉となる物事を見極めるため

のスペキュラティブデザイナー」(デンソー)、という社会変化に柔軟に対応し将来の姿・仕組みを構想できる人材である。また、経済産業省の研究会は平成 27 (2015) 年度にデザイナーに期待される能力も多様化・高度化していると指摘し、令和元 (2019) 年の「高度デザイン人材育成」の研究会では、高度デザイン人材とは、あるべき未来を構想し、事業課題を創造的に解決できる人材であり、この人材は狭義のデザインスキル保持者ではなく、デザインとビジネス、テクノロジーのスキルが結合した人材を指す、と定義している。

このような社会におけるデザインニーズに変化に加えて、デザインの学問領域でも新たな潮流が生まれている。例えば、エネルギー問題や地球環境に対する危機が社会問題化したことに対応して、自然環境との共生を目指す「トランジション・デザイン」や、資本主義が限界を迎えているという認識のもとオルタナティブな世界を模索する「スペキュティブ・デザイン」など、デザイン学の扱う領域の拡大深化が続いている。その中でデザイン学を先導すべき大学の果たす役割が問われている。「技術の人間化」という理念を掲げる芸術工学府がその本来の目的を果たすには、多方面にわたる社会の変化に対応するデザインを実践するプロフェッショナル、デザイン学を先導する研究者の育成が求められていると言える。

【改組の方向性】

このようなデザイン領域の拡大、社会の変化に合わせて、さまざまな問題に適切に対処しうる人材を育てるために、学府組織の在り方を総合的に検討した結果、修士課程では芸術工学専攻とデザインストラテジー専攻を統合した1専攻とし、その中に6つのコースを設け、社会の求める諸分野においてデザインを実践するプロフェッショナルを養成することとした。博士後期課程は特定の分野にとらわれない先導的な研究者を育成するため、コースを設けない1専攻とするとの結論を得た。この組織案は、学部段階で培われた芸術工学の強い軸足を持った学生に多様なテーマを与え、領域融合型の学習と専門性の高い学習との双方を可能とし、「芸術工学」の基本となる様々な領域が独自性を保ちながら同居して種々の場面で協力することを、組織としてさらに柔軟に実現しうる体制である。

これまでデザインストラテジー専攻はデザインを社会実装するための戦略を中心とした人材養成、芸術工学専攻は「モノ」のデザインを重視した人材養成を行ってきた。修士課程の新しい専攻では、1) 分野に関わらずデザインの社会実装に向けて高度の実務を統括するストラテジックデザインコース、2) デザインの主要分野における最先端の研究(環境設計、音響設計、人間生活デザイン、メディアデザインのそれぞれのコース)、3) 時代の要請に応えるための新しいデザイン分野を扱う未来共生デザインコースのそれぞれにおいて目的が明確なカリキュラムを提供するとともに、個別のデザイン分野、拡大するデザイン領域、明確な社会実装のための戦略がこれまで以上に横断融合できる体制を構築することで、総合的な学問である芸術工学の実践を可能にする。特に、ストラテジックデザインコースはデザインの全ての分野をカバーし、その成果を実装する戦略により、個別のデザイン分野をつなぐとともに、社会とデザインをつなぐ役割を持つ。

この教育組織の中でそれぞれの学生は所属するコースが提供する専門性の軸を修得しつつ、それを基軸としてそれぞれの志向・興味・能力に従って多様な研究を展開できる。例えば、モノ(音響設計)を中心として学修し「モノのデザイン」のためにビジョンを学修する者や、ビジネス(ストラテジックデザイン)の視点を重視しビジネスからバックキャストでモノやコトのデザインを修得する者など

多様である。

博士後期課程では、デザイン学の学問領域の拡大深化に対応し、既存の分野を越境できる先導的な研究者を育成するため、デザインストラテジー専攻と芸術工学専攻を統合した1専攻とする。2専攻を芸術工学専攻1専攻に統合することで、コースの垣根を取り払い、個々の学生の研究の自由度を向上させ、そのプラットフォームの上で、創造性あふれる研究を指導推進する体制とする。したがって、研究指導は個別コースの分野に限定されるのではなく、複数の異なる専門性を持つ教員が指導グループを形成してすすめる。これまで以上にデザインの総合性が様々な研究に反映され、新しい社会が求めるデザイン分野を開拓創造する研究者を育成する。(図1参照)

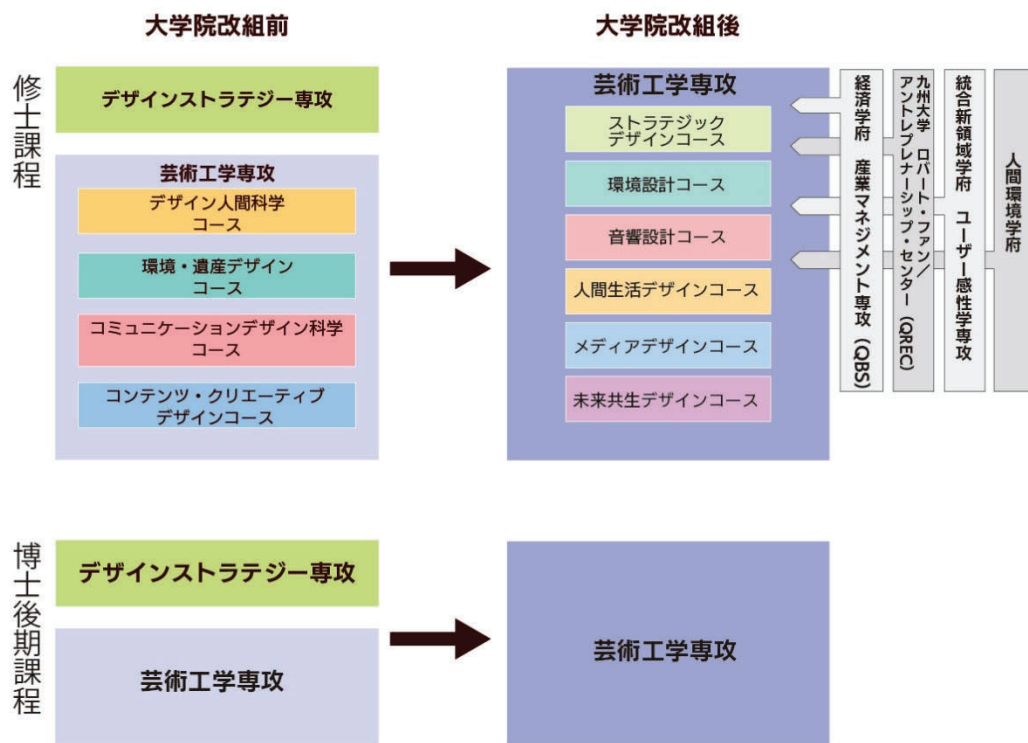


図1：大学院コース概念図（2専攻から1専攻への移行）

（2）改組の概要：養成する人材像と学位授与の方針

【修士課程】

1) 養成する人材像

新しい芸術工学専攻が教育する学生は、それぞれが学部において培った専門分野をベースにしつつ、広く他分野のディシプリンを体験しながら、各自が目指す設計（デザイン）の基盤を広げ、深化する。換言すると、新専攻の養成する人材像は、人類が直面する課題に真摯に向き合うため、科学技術と芸術的感性を融合する「技術の人間化」の理念を継承しつつ、「モノ・コト・ビジョン」へ拡大する新しいデザイン領域に対する意識と人文、社会、自然にまたがる広い知識を基盤とする「高次のデザイナ

一」である。

なお、上記の専攻に共通する人材育成像に加えて、修士課程各6コースが養成する専門性は以下の通りである。

○ ストラテジックデザインコース

デザインの社会実装・ビジネスに関わる戦略を把握・構想・実践し、それらを評価・分析して、起業・実践を行うための方法論を構築できる能力。

○ 環境設計コース

様々な環境の価値を評価し、その環境を将来へ継承するための建築・景観・社会システムのデザイン、サステナブル・デザインを可能とする安全性・健康性・機能性・快適性を実現する技術。

○ 音響設計コース

音に関する芸術工学的感性、人間に適合した音環境の創出する音響設計、音響情報の高品質化、音に関する芸術文化の創造を実現する能力。

○ 人間生活デザインコース

生活の在り方を俯瞰的に捉え構想し、人間の生理的・形態的・行動的・心理的特性、人間の感性を踏まえ安全安心で魅力的な生活の在り方を創造する能力。

○ メディアデザインコース

様々なメディアに関わる課題を発見し、論理的思考力をもって分析し、革新的なメディア表現やメディアプロジェクトを創出する能力。

○ 未来共生デザインコース

生命、アート&デザイン、文化の各分野の知識と方法論を身につけ、未来社会のビジョンを描き、それを実現するためのデザインスキル。

2) 学位授与の方針

本専攻において提供する教育課程を通して「芸術工学」の基本・基礎を十分に理解し、社会的な要請に応え、創造性あふれる高次のデザインの能力を修得した者に「修士(芸術工学)」の学位を授与する。所属コースにかかわらず、特にデザイン実務の専門知識、アントレプレナーシップに関する専門知識を学び、デザインビジネスの方法論を修得した者に「修士(デザインストラテジー)」を授与する。

【博士後期課程】

1) 養成する人材像

新専攻の養成する人材像は、工学や技術に関する科学的知識、人間や社会に対する理解、芸術の持つ創造性から構成する芸術工学の総合性を基盤とし、国際的にも通用するデザイン学の新しい潮流を先導し、指導的立場に立つ学識を持つ研究者である。

2) 学位授与の方針

科学技術と人間の最も自由な発現である芸術を融合させた学問分野としての「芸術工学」に関する十分な専門的知識と特に優れた技術を獲得することで成果を達成し、自ら新しい課題を設定、解決す

る国際的水準の独自性のある研究成果を挙げた者に対して、「博士（芸術工学）」の学位を授与する。
また、デザインに関する研究のうち、特に技術等に関する研究が工学的に見て十分な成果を達成した
と認められる者に対しては、「博士（工学）」の学位を授与する。

2. 専攻・コースの特色

改組後の芸術工学府は、「技術の人間化」を実践する学府として、修士課程では次世代のデザイン教育を先取りしバージョンアップした高次のデザイナー、博士後期課程ではデザイン分野を先導する研究者の育成を目的とする教育内容を再編成する。この教育課程の特色は、(1) 拡大を続ける新しいデザイン領域にも対応したコースを設定すること、(2) デザインの総合性をさらに進め、社会的要請の高い横断的なデザインを可能にするカリキュラムを提供すること、(3) 一方で、専門性に特化したサーティフィケート・プログラムを提供すること、(4) 学生の文化的多様性を高めるため、授業・手続の英語併用を進め留学生が日本語の修得を前提とせず学位を取得できる体制を構築する計画、さらに、(5) 博士後期課程における幅広い分野が高度に融合しつつ専門性を深化させる研究の推進、があげられる。

(1) 拡大するデザイン領域への対応：6つの専門性を有する「コース」の設定

改組後の修士課程は、令和2(2020)年度から実施している学部改組と同様に、変貌拡大を続けるデザイン人材に対する社会的ニーズに対応しながら、芸術工学の理念を具現化するために、工学や技術に関する科学的な知識、人間や社会に対する深い洞察や、社会の状況に的確に対応できる豊かな教養を持ち、国際的にも通用する広い視野と学識を有する創造性あふれる「高次のデザイナー」の育成に資するコース編成とする。

従来の芸術工学専攻は「モノ」のデザインを重視した人材養成、デザインストラテジー専攻はデザインを社会実装するための戦略を中心として人材養成を行ってきたが、新しい学府ではそれらの教育を継承しつつ、1専攻に統合し、その中に「モノ」、「コト」、「ビジョン」をデザインの対象とする拡大したデザイン領域を包摂するストラテジックデザインコース、環境設計コース、音響設計コース、人間生活デザインコース、メディアデザインコース、未来共生デザインコースという6つのコースを配置する。これらのコースは分担して、1) デザインの社会実装に向けて高度の実務を統括する領域、2) デザインの主要分野における最先端の研究領域、3) 時代の要請に応えるための新しい領域、のそれぞれにおいて目的を明確にしたカリキュラムを提供するとともに個別のデザイン分野、拡大するデザイン領域、明確な社会実装のための戦略がこれまで以上に横断融合できる体制の中で総合的な学問である芸術工学の修得を可能にする。

新しい専攻におけるカリキュラムは、「モノ」のデザインに加え、仕組みやサービス、デザイン戦略という「コト」の比重の高いデザインを明示的に扱い、さらに、あるべき未来、あるかもしれない未来の「ビジョン」のデザインを加え、拡大するデザイン領域をカバーする構成である。特に「ビジョン」のデザインは独立した分野というよりは、様々なデザイン課題に含まれる様相であるので、多くの科目の内容に含まれている。その中でも改組後に新しく設定する科目のうち、特に未来のビジョンを強調する科目としては「スペキュラティブ・デザイン」、「デザイン・シビック」「レジリエンス・デザイン」「共生社会デザイン論」「デザイン哲学」「ソサエタルデザイン」などが挙げられる。

上記の1)の領域である現在急速に社会的ニーズの高まる「デザイン経営」やデザインの社会実装についてはストラテジックデザインコースが担う。同時に、ストラテジックデザインコースは、他の

5 コースで扱われる個別のデザイン分野の成果を社会に実装するための共通の戦略とデザイン実務を担当しており、専攻全体の教育研究の要となる。主に2) にあたるデザインの主要分野における最先端の教育研究は環境設計、音響設計、人間生活デザイン、メディアデザインのそれぞれのコースが担当する。さらに、3) の従来明示的にデザインの対象となっていなかった将来の持続的・包摂的な社会・環境の在り方、ゲノム情報や生命工学など生物・生態系を対象とするデザインなどの教育研究は未来共生デザインコースが主に担当する。

つまり、これまでのデザインストラテジー専攻で育成していた人材を「A」、芸術工学専攻で養成していた人材を「B」とすると、今回の改組により育成する人材は「A+」、「B+」となり、また、新たな人材「C」も養成することとなる。A+、B+の「+」のイメージは、それぞれ「社会実装までをより明確に意識した」デザイナーや「先端的なデザインの明確なイメージを持った」デザインストラテジスト等を想定している。また、Cはこれまでデザインの範疇に入っていなかったような「コト」や「ビジョン」の要素の割合が高いデザイン（デザイン経営、サービス、現在実在しない目標）や新しいデザイン対象（「ウェット」なデザイン、など）のデザイナー等を想定しており、全体として、「拡大するデザイン領域に対するデザインセンスを持つ」人材、高次のデザイナーの育成を目標としている。（図2参照）

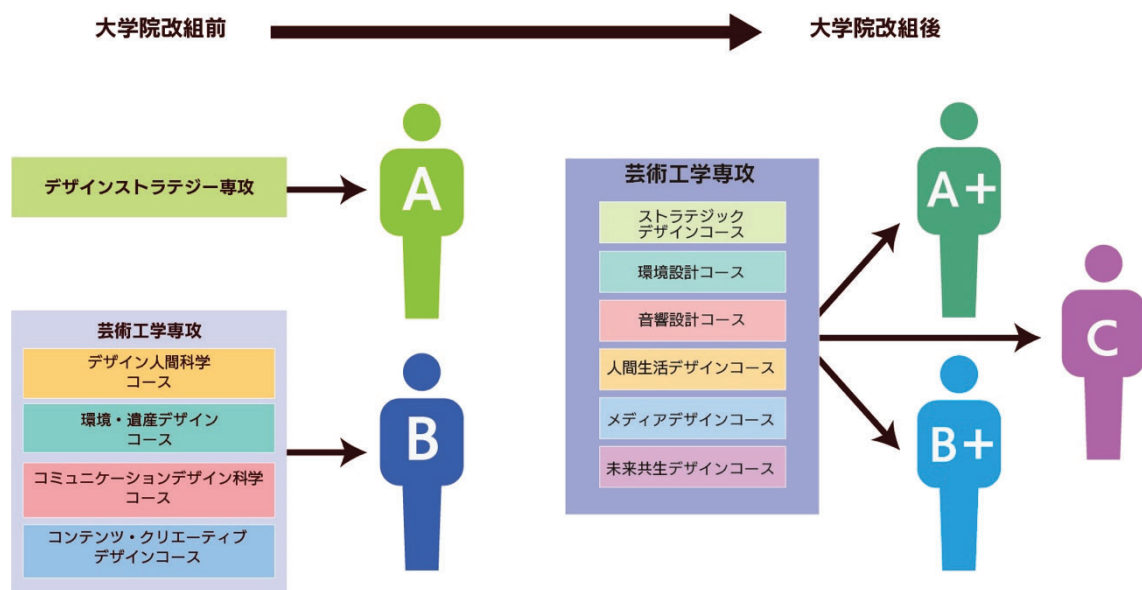


図2：修士課程における1専攻6コースの養成人材像

（2）横断的なデザインの修得：カリキュラムにおける「系統」の設定と横断的科目

デザインに対する課題は現実社会から発せられるため、ほとんどの場合「分野横断的」である。デザイン的営為が社会に対して有効であるためには、デザイン教育も横断的である必要がある。このため、この6つのコースにおいてはそれぞれの専門性を深化させる一方で、コース間の障壁を下げて分野横断的な教育の見通しを良くするために、それぞれのコースで設定する科目を、大きく4つの「系統」に分類することとした。

現状では芸術工学府における科目は、それぞれのコースにおいて、科学系・工学系・制作系・文化系といった分類が緩やかに行われて配置されていた。今回の改組では、現状の分類に加え、最近の社会課題に対応するためには不可避である社会デザインの観点も取り入れ、全コースの科目をそれぞれ「Ⅰ. デザイン科学系統」、「Ⅱ. デザイン工学系統」、「Ⅲ. 設計・制作系統」それに「Ⅳ. 文化・社会デザイン系統」の4系統に明確に分類した。デザインに対するアプローチの方法論による分類とすることもできる。

元来、コースに所属する学生はそれぞれのコースの中で4つの系統に属する科目を履修することが前提となっており、これにより専門性の中での多様性を確保することができる。さらに、系統を明確にすることで、異なる専門性においても同じ系統の科目、つまり同様の方法論を有する科目を明確に認識し、履修することが可能となり、これによって専門性に関する多様性も担保することが可能になる。同じ系統に属する学生は、芸術工学演習と称する科目で定期的に研究進捗の報告会を持つなど、制度的にも多様性を担保する。さらに、コース間の障壁が低くなるように、少ない必修科目の設定、コース間共通科目の配置、分野横断を推進する科目群による単位履修の推進、といった特色を持つカリキュラムを構築する。コースと系統は、カリキュラムを構成する縦軸と横軸である。カリキュラムの具体的な構成については、後述の「4. 教育課程の編成の考え方及び特色」において示す。

加えて、専門性、方法論の双方の多様性を包含する特色ある授業として、コース横断型のデザインプロジェクト演習科目である「スタジオプロジェクト科目」を各系統で提供し、実践的な演習課題により「モノ」、「コト」、「ビジョン」の要素を総合するデザインを学ぶ。学生はこのスタジオプロジェクト科目を必ず2単位は修得するものとする（ただし、最大で16単位修得することも可能）。修士課程におけるカリキュラムの系統分け、スタジオプロジェクト科目の詳細に関しては4.（2）カリキュラムの体系性の説明において再掲する。

（3）サーティフィケート・プログラム

新学府では総合的なデザインを学べるとともに、特定のスキル、資格に特化した以下のようなサーティフィケート・プログラムを用意していることも特色の一つである。修了要件を満たした学生にはそれぞれのプログラム修了証を交付する。

1) ホールマネジメントエンジニア育成プログラム

劇場・音楽堂などの公共施設を主たる対象とし、ハードとしてのホール機能の理解と、そこで上演されるコンテンツの芸術文化の理解、加えてそれを実際に企画運用するための企画・実践能力を兼ね備えた人材の育成を目指す。

2) グローバル・アーキテクト・プログラム

芸術工学科に開設しているアーキテクト・プログラムの4年間と合わせて6年間の国際標準の建築設計教育を提供するものである。日本技術者教育認定機構（JABEE）の建築系学士修士課程プログラムとして認定されており、UNESCO-UIA が求める建築設計・計画系に特化された国際要求基準（UNESCO-UIA 建築教育憲章）に準拠した教育プログラムとして開設された。

3) クリエイティブリーダーシップ・プログラム

本プログラムは、芸術工学府、九州大学ビジネススクール（QBS、経済学府産業マネジメント専攻）、九州大学ロバート・ファン/アントレプレナーシップ・センター（QREC）との連携により運営する、デザイン、アート、ビジネス、リーダーシップの4要件からなる「高度デザイン人材」の育成を目的としたプログラムである。

（4）留学生獲得の促進

創造的、革新的なデザインを生み出すには価値観の多様性が重要な一因となるため、学府を構成する学生の文化的背景をさらに多様にし、日常的に違う価値観に触れる機会を担保することが重要となるため、改組後はさらなる留学生獲得を進めていく。そのための取り組みとして、現状では博士後期課程デザイン人間科学コースのみに国際コースを設置しているが、修士課程の全てのコース及び博士後期課程にて、後の「教育課程の編成」で述べるように、科目の英語対応を進め、日本語の修得が学位取得の条件とならないような仕組みを構築する。入試においても外国人特別入学試験を廃止し、全受験者を対象とする入学試験に一本化する。これらの仕組みによって、国際コースの設置によらず、留学生の獲得を促進する。

（5）博士後期課程における融合的研究の推進

博士後期課程においても、1専攻化を実施し、デザイン学の総合性を担保する高度で融合的な研究が実施できる体制を整える。まず、研究指導体制は個別の研究室に閉じることなく、明示的に複数教員による研究指導体制を構築する。その際、これまでの2専攻4コース体制では分野間の垣根が高い傾向があったものの、1専攻化することによりこれまで以上に異なる専門分野を持つ教員が常時指導に加わる体制が取りやすくなる。そのことによって、これまで以上にデザインの総合性を担保した研究が推進され、芸術工学を通してデザインの領域を先導する指導的立場の研究者を養成する。

3. 学府、専攻及び学位の名称

(1) 学府及び専攻の名称

芸術工学府／芸術工学専攻 (Graduate School of Design / Department of Design)

本学府の前身である九州芸術工科大学の設立時より、従来の工学や芸術では解決できない分野、人間性を契機とする科学技術と芸術の総合による一つの独自性を持った専門分野、科学技術と人間の最も自由な発現である芸術を融合させた学問分野として、「芸術工学」を用いており、これを学府及び専攻の名称とする。

(2) 学位の名称

修士 (芸術工学) : Master of Design

修士 (デザインストラテジー) : Master of Design Strategy

博士 (芸術工学) : Doctor of Philosophy in Design

博士 (工学) : Doctor of Engineering

(3) 英語名称について

本学府における「芸術工学」は、芸術 (art) と科学技術 (technology)、あるいは工学 (engineering) がそれぞれ単独に存在するのではなく、設計、人文・社会科学等の複合的な領域にまでまたがるものであり、設立時より使用している広義的な設計という意味を包含する “Design” を英語名称とする。

4. 教育課程の編成の考え方及び特色

(1) カリキュラム編成の基本方針

【修士課程】

デザインに対する課題は現実社会から発せられるため、ほとんどの場合「分野横断的」である。デザインの営為が社会に対して有効であるためには、デザイン教育も横断的である必要がある。このため、この6つのコースはそれぞれの専門性を深化させる一方で、コース間の障壁を下げて分野横断的な教育実践を可能とするため、少ない必修科目の設定、コース間共通科目の配置、分野横断を推進する科目群による単位履修制度とした。

さらに、特色ある授業として、コース横断型のデザインプロジェクト演習科目である「スタジオプロジェクト科目」を提供し、実践的な演習課題により「モノ」、「コト」、「ビジョン」の要素を総合するデザインを学ぶ。学生はこのスタジオプロジェクト科目を必ず2単位は修得するものとする（ただし、最大で16単位修得することも可能）。

修士課程において、授業は座学、ワークショップ、フィールド演習など多様な形態をとる。全ての授業科目はコースごとではなく専攻として提供され、各コースはその中からコース科目を設定する。そのため、各コースに所属する学生は、後に述べるように、コースの指定する科目（修士研究関連科目、コースコア科目）によって分野の軸を形成しつつ、研究の志向に従って全専攻科目（展開科目）から自らの専門性を構築することができる。

加えて、各コースの科目を方法論別に「Ⅰ. デザイン科学系統」、「Ⅱ. デザイン工学系統」、「Ⅲ. 設計・制作系統」、「Ⅳ. 文化・社会デザイン系統」の4系統に分類する。「デザイン科学系統」及び「デザイン工学系統」で提供される授業は、主に、積み上げを前提とした座学形式の科目や科学・工学に関する実験科目で構成される。「設計・制作系統」で提供される授業の多くは、具体的な課題を実施するプロジェクト中心の形態である。「文化・社会デザイン系統」では、デザインが成立する価値の基盤となる文化的、社会的コンテキストの理解や社会の仕組みのデザインであり、座学、実験、演習とともに具体的な課題に基づく「プロジェクト」で構成される。系統を設定することで、学生が専門性の異なる他コースの科目を履修する際に、方法論を手がかりとして選択することで体系的に学ぶことが可能となる。また方法論的に近接する分野で構成されたグループが明確になり、専門性は異なるが、方法論が類似した分野横断的な修士研究指導を行う枠組みの構成が可能となる。

また、世界に通用する高次のデザイナーを育成するため、さらには優秀な留学生を受け入れるために、英語による授業を充実させるのみならず、多様性を包摂する柔軟性に富み、国際通用性のある学術リテラシーを涵養する、日本人にとっても留学生にとっても魅力ある教育課程を編成する。全ての講義・スタジオ・演習科目（一部の科目は除く）において英語対応とする。留学生は英語の科目のみで必要な単位を修得することができる。日本人学生にとっては高次のデザイナーとしての国際通用性が涵養される。

講義科目については、英語のみで提供する科目、同一内容を英語と日本語にて隔年開講する科目等によって構成される。スタジオプロジェクト科目、演習科目での使用言語については、多様な文化的背景の学生が混在し共同で課題に取り組むことを前提とし、課題の狙いと受講者の属性を踏まえて、学生は英語での指導を選択できる。

また専門分野の国際的実践力を養うために、海外大学協定校と共同して行われる国際プロジェクト（英語にて実施、遠隔形態も含む）や、海外の大学院学生を招聘して行われる教育プログラムとも連携し、単位として認定する仕組み（「芸術工学特別プロジェクト」科目の設置）を取り入れる。

以下、それぞれのコースに特化したカリキュラムの特色を示す。

○ ストラテジックデザインコース

- ・人間や社会に対する深い洞察、製品・環境・サービス・テクノロジーなどの多様なデザインと、ビジネスとアントレプレナーシップを統合するストラテジックデザインを修得させるための科目を配置する。
- ・本コースでは九州大学ビジネススクール（QBS、経済学府産業マネジメント専攻）、九州大学ロバート・ファン/アントレプレナーシップ・センター（QREC）との連携によるビジネス、アントレプレナーシップに関するリテラシー科目などを修得させる。

○ 環境設計コース

- ・環境設計の諸分野の専門的知識や調査・研究手法を修得させるための教育科目を配置し、並行して、実践的な課題の解決や創造的なデザインの手法を修得させるための演習科目を配置する。
- ・学部の教育と連続して、国際的建築家資格に対応した建築設計教育プログラムも行う。

○ 音響設計コース

- ・音響設計の専門家として必要な、音に対する感性と音に関連する文化、環境、情報のいずれかの分野についての専門知識を修得、深化させる。
- ・具体的な課題に取り組む科目としてコース内の演習授業群を設置し、挑戦的な姿勢と実装を志向する創造的実践力を涵養する。

○ 人間生活デザインコース

- ・生活の在り方を構想し、安心安全で魅力的な生活の実現のためのモノ・サービス・システム・生活環境を創造するために必要な、人間の特性、科学技術、ライフスケープデザインに関する教育科目を配置し専門知識を深化させる。

○ メディアデザインコース

- ・メディアデザインを役割、構造、機能の点から理解、探求、展開する。
- ・人を知るための視覚や心理、表現を知るための芸術、視覚伝達、コンテンツ、人工環境を知るためのメディアデータサイエンス、インタラクション、コンピュータビジョン、メカニクス、伝達と共有を知るためのコミュニケーション、社会科学、などを重視し、科目を構成している。

○ 未来共生デザインコース

- ・さまざまな生命体が共生する社会を構想するための基盤となる生命情報科学、ライフエンジニアリング、社会科学の知識と、さらにそれらを創造的に展開させる能力を涵養するアート・デザインの技能、それらを支える思想哲学を修得させるためのコースコア科目を配置する。

【博士後期課程】

博士後期課程では、学部段階で培われた芸術工学の強い土台、修士課程で修得した領域融合型の学

習と専門性の高い学習及び様々な領域との協力などの経験を基礎として、さらに自らの研究分野に関連した卓越した専門知識と技能を獲得するためのカリキュラムを提供する。このカリキュラムは、修士課程と同様に、デザインに対する課題は現実社会から発せられるため、ほとんどの場合「分野横断的」である。本課程においては、デザイン学の分野をリードする指導的立場の研究者を養成することを目的として大学院教育を行い、その内容は主に独自の研究を遂行するためのものとなる。この博士研究も、より融合的、横断的である方がデザイン学の総合性を発揮するものとなる。このため、後述するように（「6. 教育方法、履修指導、研究指導の方法及び修了要件」）、博士後期課程の研究指導は一つの研究室を越えた複数指導体制を構築し、分野横断的な研究を指導、推進する。

博士後期課程では、上記のような単位化しない博士論文研究指導のほか、博士論文作成に必要な調査・実験・考察などを自ら能動的に行える能力を身に付けさせるための「論文作成関連科目」と、指導教員グループにより研究指導を行う「研究指導科目」の2つの科目群で教育課程を編成する。

これらの科目は全て英語対応とし、優秀な外国人留学生を獲得できるようにする。このことは日本人にとっても大きなメリットであり、外国人留学生と共に講義を受け、英語で討議することにより、国際通用性のある学術リテラシーが涵養される。

（2）カリキュラムの体系性の説明

【修士課程】

1) カリキュラムを構成する科目群：「系統」

カリキュラム全体の目的は修士研究に向けて学生に専門性を獲得させることにあるが、デザイン領域における「専門性」は多岐にわたる。また、新しいデザイン領域を開拓・先導する能力は、研究分野の枠を超えた知識や方法論の修得に加え、異分野融合の挑戦・実践から養成される。そのため、それぞれの学生の方向性、能力、興味に合わせて履修科目に一定の「カスタマイズ」をする必要がある。それぞれのコースが持つ分野としての軸は担保しつつ、1 専攻コース制の利点を最大限生かし、柔軟な科目履修を可能にするカリキュラム編成を構築する。

そのための一つの指針となるものが、「系統」という考え方である。全コースとも、開設する科目を学問の領域別、あるいはデザイン教育・研究の方法論別に「Ⅰ. デザイン科学系統」、「Ⅱ. デザイン工学系統」、「Ⅲ. 設計・制作系統」、「Ⅳ. 文化・社会デザイン系統」の4つにグループ化して配置する。これは学生が自分の所属するコースの中に多様な方法論の科目が存在することを認識し、デザインの総合性を理解し、バランスよく修得するための目安となる。系統の枠組みの中には、各コースが提供する講義科目、演習科目、さらにコースをまたいで実施する「芸術工学演習」が配置される。「芸術工学演習」は、系統ごとに同じ方法論という観点から修士研究の研究指導を行う際の枠組みである。なお、全開設科目がどの様に系統に分類されるかを添付の参考図1に示している。

各コースが開設する科目には、明確には系統に属さない共通系の科目もある。修士研究関連科目やスタジオプロジェクト科目、さらにはサーティフィケート・プログラムに関連した科目などがこれに対応する。

2) 学生の履修方法：必要修得単位数と、コア科目・展開科目

修了認定のために必要な単位数は40単位とする。この40単位の内訳は、「①修士研究関連科目」18

単位、各コースの専門性の基軸をなし、各系統に配置される「②コースコア科目」6 単位、共通系の「③スタジオプロジェクト科目」2 単位、学生がそれぞれの専門性や強みを獲得するその他の科目「④展開科目」14 単位から構成される（図 3 参照）。以下それぞれについて詳述する。なお、全開設科目を示した科目の詳細を参考図 1 として添付している。

芸術工学府 芸術工学専攻 修士課程						
科目事例	ストラテジック デザイン コース	環境設計 コース	音響設計 コース	人間生活 デザイン コース	メディア デザイン コース	未来共生 デザイン コース
デザイン 科学系統	環境化学特論		コースコア科目			
	熟環境学特論		コースコア科目			
	聴覚心理学特論			コースコア科目		
	時間知覚特論			コースコア科目		
	応用人間工学			コースコア科目		
	生理人類学特論			コースコア科目		
	視覚心理学特論				コースコア科目	
	色彩科学特論				コースコア科目	
	時間生物学					コースコア科目
	分子生物学					コースコア科目
ほか						
デザイン 工学系統	環境構造学特論		コースコア科目			
	環境心理学特論		コースコア科目			
	音声情報学特論			コースコア科目		
	音響工学特論			コースコア科目		
	人間情報工学			コースコア科目		コースコア科目
	機能工学デザイン	コースコア科目			コースコア科目	
	コンピュータグラフィックス特論				コースコア科目	
	バーチャルリアリティ特論				コースコア科目	
	生体模倣工学					コースコア科目
	ほか					
設計・ 制作系統	デザインインベーション	コースコア科目				
	インクルーシブデザイン	コースコア科目				
	環境計画特論		コースコア科目			
	ランドスケープデザイン特論		コースコア科目			
	サウンドデザイン特論			コースコア科目		
	音響芸術特論			コースコア科目		
	パブリックデザイン			コースコア科目		
	コンテクストデザイン			コースコア科目		
	メディアアート表現				コースコア科目	
	映像コンテンツデザイン特論				コースコア科目	
生命とアート					コースコア科目	
スペキュラティブデザイン					コースコア科目	
ほか						
文化・ 社会デザイン 系統	知的財産論Ⅰ、Ⅱ	コースコア科目				
	デザインマネジメント	コースコア科目				
	日本建築史特論		コースコア科目			
	文化財学特論		コースコア科目			
	音楽社会文化特論			コースコア科目		
	民俗音楽学特論			コースコア科目		
	コミュニケーションデザイン論			コースコア科目		
	ライフスケープデザイン			コースコア科目		
	演劇学特論				コースコア科目	
	マルチモーダルコミュニケーション特論				コースコア科目	
アーツマネジメント					コースコア科目	
デザイン哲学					コースコア科目	
ほか						
スタジオプロジェクト科目 2 単位選択必修	スタジオプロジェクト科目群					
展開科目 14 単位	専攻内科目					
	芸術工学特別プロジェクト、コースの指定する他部局開設科目など					
修士研究関連科目 18 単位 2 単位必修	芸術工学演習					
16 単位必修	芸術工学特別研究Ⅰ～Ⅳ					

図 3：各科目区分の性質と位置づけ（全開設科目を示した詳細は添付の参考図 1 を参照）

① 修士研究関連科目 18 単位（必修）

修士研究関連科目は個々の大学院生と指導教員（もしくは指導教員グループ）によって進められる継続的な研究活動を含む科目であり、研究室における定期的な研究指導「ゼミ」に限らず、研究室外での調査研究活動、研究成果の学内発表、学会発表、研究論文、修士論文の執筆など一連の研究活動を包含するものであり、大学院生の教育の中核をなすものである（図 3）。これらは添付の参考図 1 では、共通系科目に分類されている。

このうち、2 単位は芸術工学演習とし、上記の系統ごとにコース横断的なグループを形成し、他コースに属しながら同じ系統、つまり同じ方法論で研究を推進する教員、学生と研究内容を共有し、広い視野に立ち他分野の者と連携して研究を推進できる能力を養成するための研究発表、ゼミなどを行う。また第 1 年次終了時に各系統に配置された「芸術工学演習」の一環として、系統別の修士研究中間発表会を開催する。これにより、前述したカリキュラムの基本方針や特色である分野横断的教育を実現する。

② コースコア科目（コース指定のコア科目から 6 単位を選択）

芸術工学府において開設される科目は、全学生が所属コースに拘らず履修することができる。その中で、コースごとの専門的特色を表すものとして、コースがいくつかの科目を「コア科目」として指定する。各コースが指定するコア科目は、全系統にわたって配置されており、さらに講義、演習を問わず配置される（図 3）。参考図 1 においては、各コースが指定するコア科目にコースごとのマーカーで色付けしている。

学生はこの「コア科目」から少なくとも 6 単位を修得し、修士研究関連科目と合わせて、コースに応じた各学生の専門性の軸を形成する。

③ スタジオプロジェクト科目（2 単位選択必修）

デザインの総合性を理解し、分野横断的なデザインを修得する「スタジオプロジェクト科目」は選択必修科目として提供される（「4. 教育課程の編成の考え方及び特色（3）特色ある授業」で詳述）。参考図 1 では共通系科目に配置されている。

学生はスタジオプロジェクト科目を必ず 2 単位は修得するものとし、学生の興味に応じて 2 単位以上修得することも可能である。2 単位を超えて履修されたスタジオプロジェクト科目単位は「展開科目」の単位に算入する。

④ 展開科目（専攻内で開講される全科目及び専攻が指定した他部局科目から 14 単位）

学生は、自らの興味と指導教員の指導の下、自らの専門性をさらに構築・展開するため、他部局から提供される科目も含め全専攻科目から幅広く履修することができる。これを展開科目と呼び、14 単位を修得することが必要である。各コースは、多くの科目をコア科目に指定しているが、修了に必要な 6 単位以上を履修した場合、これを展開科目として位置づけることができる。

【博士後期課程】

1) カリキュラムを構成する科目群

カリキュラム全体の目的は博士論文作成に向けて学生に高度な専門性を獲得させることにある。そのため博士後期課程では修士課程で修得した知識・技能を基盤としつつ、さらなる学術的深化を進め、また独立した研究者として必要な専門知識を修得するための「①論文作成関連科目」4単位及び博士論文作成のための高度な技能を修得するための「②研究指導科目」6単位からなる計10単位を修得させる。

現行の2専攻4コースを1専攻に統合することで、従来は所属する専攻やコース内の提供科目に履修が限定されていたが、それぞれの学生の専門性、能力、興味に合わせてより広範な分野での履修が可能となる。また、博士研究の集大成となる「③博士論文研究」を設定している。(図4参照)

①論文作成関連科目 4単位

論文作成関連科目では、博士論文作成に必要な調査分析、演習、中間発表及び指導教員や関連専門分野の研究者とのディスカッションを学生に課すことで、自ら能動的に調査・実験・考察・応用できる能力を身に付けさせるとともに、研究の深化を図る。本科目では、研究企画セミナーを年4回程度開催し、本学府博士後期課程で学ぶ日本人学生及び留学生が、専攻やコースを超えて集い、英語で相互に研究発表及び研究討議を行う。異なる研究を深く理解し合うことで研究交流を促すとともに、異分野における研究課題や研究手法の特徴を学び、芸術工学研究に関する幅広い知識と技能を身に付けさせることで、研究の深化、並びに広範囲への横断化を図る。

②研究指導科目 6単位

研究指導科目では、主指導教員及び副指導教員から構成された3～5名の「指導教員グループ」が学生の履修指導を行い、博士論文作成のために必要な基盤能力を育成する。

従来は、主指導教員1名のみで指導することが多かったが、研究内容に応じて適切な「指導教員グループ」を構成することを必須とすることで、学生個々で異なる専門領域周辺の高度な専門性も身に付けさせる。また、学生が自らの研究を遂行する上で必要となる知識や技能を補完するため、指導教員による指導の下に履修した他学府等の授業科目を、研究指導科目として単位認定することができるものとする。

③博士論文研究

博士論文研究は本学府として単位化をしてはいないが、博士論文研究を行って論文を提出し、審査に合格することを修了要件としている。博士論文研究は、学部及び大学院教育課程の集大成である。上記科目区分の授業を通して学んだ内容を基に、多角的な視点から課題を捉え自ら能動的に調査・考察・応用するとともに、特定した課題を独創的手法により解決していくプロセスを実践的に修得する。

芸術工学府 芸術工学専攻 博士後期課程		
論文作成関連科目	4単位	年4回程度の研究企画セミナーの開催
研究指導科目	6単位	指導教員による指導の下に履修した授業科目（他学府科目含む）
博士論文研究		博士論文
博士課程学位		博士（芸術工学） または 博士（工学）

図4：博士後期課程の各科目区分の性質と位置づけ

（3）特色ある授業

1) スタジオプロジェクト科目

①概要

スタジオプロジェクト科目は新しい時代に求められるデザインを実現するための新専攻のカリキュラムを代表する科目群である。異なる志向をもち、異なる専門分野を学ぶ学生同士が協働して新たな価値創出や課題解決に取組み、共に学ぶことで、拡大し流動化するデザイン領域に対応する創造性を育むことは修士課程におけるデザイン教育の狙いであり、特色である。

「スタジオプロジェクト科目」は、PBL形式の演習科目であり、演習課題は専門分野を横断したコース横断型としての特色を持つ。その演習を通して、学生は実践的コンテキストにおいて必要とされる複数の専門リテラシーを獲得しつつ、そのなかで自らの専門性をいっそう高める機会を持つ。実践的な課題に専門の異なる学生がグループで関わることによって、専門的な実践能力、問題探求能力、問題解決能力とともに、より高度なコミュニケーション能力の修得を狙いとする。

スタジオプロジェクト科目は、複数のプロジェクトの集合体の形式をとる。スタジオプロジェクトにおける「スタジオ」とは、プロジェクトの企画立案や実践などを行う「作業場」の意味を持つ。「スタジオ」は共同で運営され、その成果物は展示などの形で学内外に公開されることを基本原則とする。プロジェクトは、原則としてコースをまたがった複数教員によって立案、実施する。

②方式

基本ユニットを2単位とし、1クォーターを2ユニット（4単位）で構成する。1 Semesterでは4ユニット（8単位）となり、1年間で最大16単位修得できる。学生はスタジオプロジェクト科目を2単位以上修得するものとする。

使用言語は、英語もしくは日本語のバイリンガル形式であり、毎週決まった曜日の午後の時間帯に開講する。また、開講形態の特徴としては、ユニットを組み合わせることで、異なる長さのプロジェクトを実施できる点がある。すなわち、Semesterを通して実施する長期プロジェクト（図5のプロジェクトA、A'、及びB、B'）、1クォーター2ユニットで完結する標準的な中期プロジェクト（図5のプロジェクトC、C'）、1ユニットのみを用いた短期集中型プロジェクト（図5のプロジェクト

D、D'）など、プロジェクトの性質によって適切な長さを設定できる。

プロジェクトの内容は、共同研究などのコミッションベースの実践的なものから、教員個人の研究ベースプロジェクト、実験演習型のプロジェクト、学内共同プロジェクトなど多様であり、形式としては、Problem-Based Learning 形式と Project-Based Learning 形式の2種類がある。前者の事例（後述）としては、ストラテジックデザインコースが中心となって企画する企業や行政などの外部組織が参画する共同プロジェクトなどが想定され、後者としてはSDGs 関係やデジタルアート、建築関係のコンペティションへの出品を目標としたプロジェクトなどが想定される。後者については、継続して実施可能な形態として、積極的にプロジェクト化する。



図5：スタジオプロジェクト科目のプロジェクト構成の基本パターン

③運営

(i) プロジェクト立案と配置計画

プロジェクトの計画立案は、年度ごとに行われ、提案を基にスタジオプロジェクト科目運営 WG（仮称）がプロジェクト全体を統括し、配置計画を行う。運営については、次の基本方針に則して実施し、WG の主体はストラテジックデザインコースが担う。プロジェクトは、まず系統ごとに複数の研究室で立案し、案を WG がとりまとめ、全体の配置、調整を行う。全教員の参加を基本原則とするが、分担するプロジェクトの単位数によって隔年担当等の調整も可能とする。

(ii) プロジェクトの時間の確保

スタジオプロジェクト科目の開講のために、時間割上、毎週半日程度の時間帯を確保し、この時間帯には、学府として演習科目のみの開講とする。そのうえで開講時期については、プロジェクトごとに運営管理を行い、必要な総時間数を確保する。

プロジェクト開講形態と内容を以下の2種類に分けて、適切な時間割計画を立て、可能な限り学生のプロジェクト選択の幅を確保する。

- ・確実に複数コースから受講（指導）できるようにプロジェクト用の曜日と時間帯を設定し

たコマに開講されるもの

・集中講義の形態をとり、希望者により具体的な開講日（教員指導日）が調整されるもの

(iii) プロジェクトの選択

複数のプロジェクトが平行して実施されることから、学期の初頭に、オープンスタジオを開設する。履修希望者はこの時期にプロジェクトを企画するスタジオを訪問し、履修すべきプロジェクトを決定する。

ユニットをまたいで連続したプロジェクトについては、履修制限を設ける必要があることから、どのクォーターでも履修可能にするために、各クォーターには最低ひとつの完結型プロジェクトを配置する。また、プロジェクトの履修については、指導教員の指導に加えて、人数制限のあるプロジェクトの場合には、希望調査を行い決定する。

(iv) 評価

成績評価と質の保証については、中間発表会、報告会をスタジオプロジェクト科目全体で企画運営し、質の担保を図る。また評価については共通のルーブリックを作成し、評価に用いる。

2) 学生の専門性を構築するサーティフィケート・プログラム

以下のサーティフィケート・プログラムは特定の職能に結びつく履修プログラムであり、修了要件を満たした学生にはプログラム修了証（サーティフィケート）を交付する。

①ホールマネジメントエンジニア育成（HME）プログラム

本学では、平成 19(2007)年度から平成 23(2011)年度にわたって、科学技術振興調整費「地域再生人材創出拠点の形成プログラム」による「ホールマネジメントエンジニア育成ユニット」を設置、ホール・音楽堂などの公共施設を主たる対象とし、ハードとしてのホール機能の十分な理解と、そこで上演されるコンテンツの芸術文化の理解、加えてそれを実際に企画運用するための企画・実践能力を兼ね備えた人材の育成を行ってきた。事業期間終了後も、現芸術工学府芸術工学専攻コミュニケーションデザイン科学コースに、ホールマネジメントエンジニアリング講座を設置し、この講座に所属の教員が主体となって、新たなカリキュラムを編成、「ホールマネジメントエンジニア(HME)育成プログラム」として運営を行っている。

改組後も、本プログラムは継続して運用することとし、ホールマネジメントエンジニアリングプロジェクト（スタジオプロジェクト科目の枠組みで実施される）を始めとする必修科目 14 単位を含む 20 単位の修得を修了要件とする。（図 6 参照）

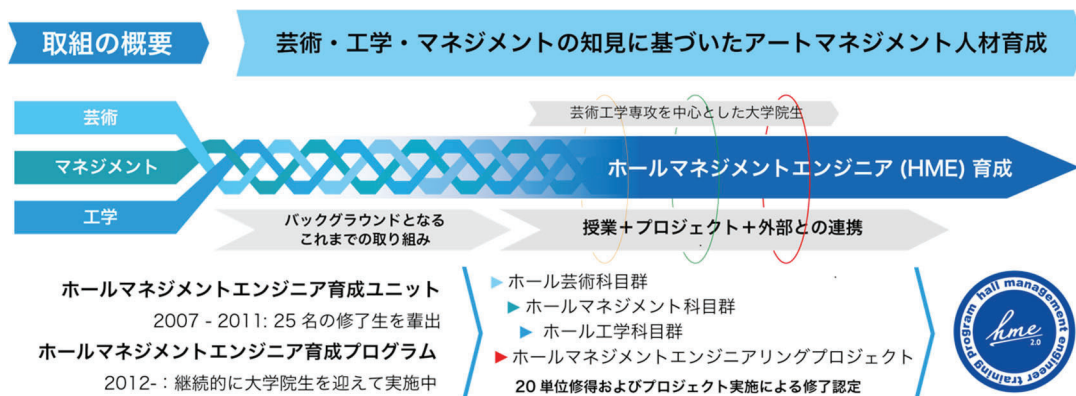


図6：ホールマネジメントエンジニア（HME）育成プログラム

②グローバル・アーキテクト・プログラム

本プログラムは、国際的な建築家資格を目指す学生向けに、大学院芸術工学府に開設され、芸術工学府に開設しているアーキテクト・プログラムの4年間と合わせた計6年間の国際標準の建築設計教育を提供するものである。アーキテクト・プログラムの前身となる芸術工学部環境設計学科の課程と合わせて日本技術者教育認定機構（JABEE）により建築系学士修士課程プログラムとして認定されており、UNESCO-UIAが求める建築設計・計画系に特化された国際要求基準（UNESCO-UIA 建築教育憲章）に準拠した教育プログラムとして開設し、修了要件を満たした学生にはプログラム修了証を交付する。

本プログラムでは、芸術工学研究院の部局内センターである「環境設計グローバル・ハブ」で培われた国際的な研究ネットワークを活用し、PBL型（課題解決型）設計演習科目であるスタジオプロジェクト科目にて海外の大学と連携した国際ワークショップやスタジオ等を実施する。このようなスタジオプロジェクト科目を中心に、コースの専門性の軸となるコースコア科目及びインターンシップ科目からカリキュラムを構成し、国際標準の建築設計教育を行う。（図7参照）

国際的建築家教育の枠組み

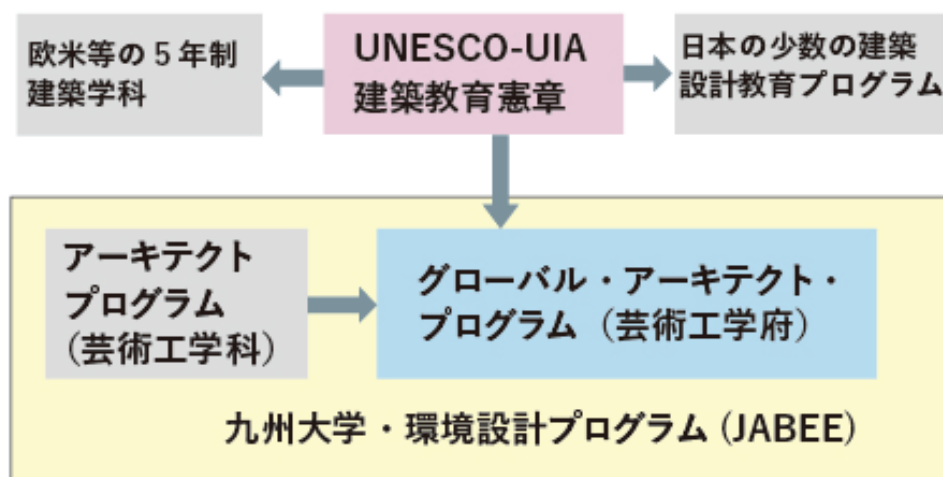


図7：グローバル・アーキテクト・プログラム

③クリエイティブ・リーダーシップ・プログラム

本プログラムは、デザイン、アート、ビジネス、リーダーシップの4要件からなる「高度デザイン人材」の育成を目的としたプログラムである。具体的には、創造的思考力にもとづく社会・文化の長期的なビジョンを構想でき、深い人間・環境理解に基づく価値提案を実践でき、提案しようとする価値を社会実装するために多様な他者への共感力・協働力を備え、イノベーション・プロジェクトを遂行する能力を持つ人材の育成を目指す。

このような能力の養成にあたって、デザイン・アートに代表されるクリエイティビティに関する領域については、芸術工学府の貢献が可能である。しかしながら、ビジネス・マネジメント、さらには、アントレプレナーシップの領域については、芸術工学府単独では専攻学生に対して十分な教育を提供することが困難な状況にある。したがって、ビジネス・マネジメント領域については九州大学ビジネススクール（QBS、経済学府産業マネジメント専攻）、アントレプレナーシップ領域については九州大学ロバート・ファン/アントレプレナーシップ・センター（QREC）との連携により、これを実現する。

プログラム修了要件は、芸術工学府ストラテジックデザインコース、QBS、QREC の提供する所定の講義演習科目に加えて、3部局横断プロジェクトの履修である。（図8参照）

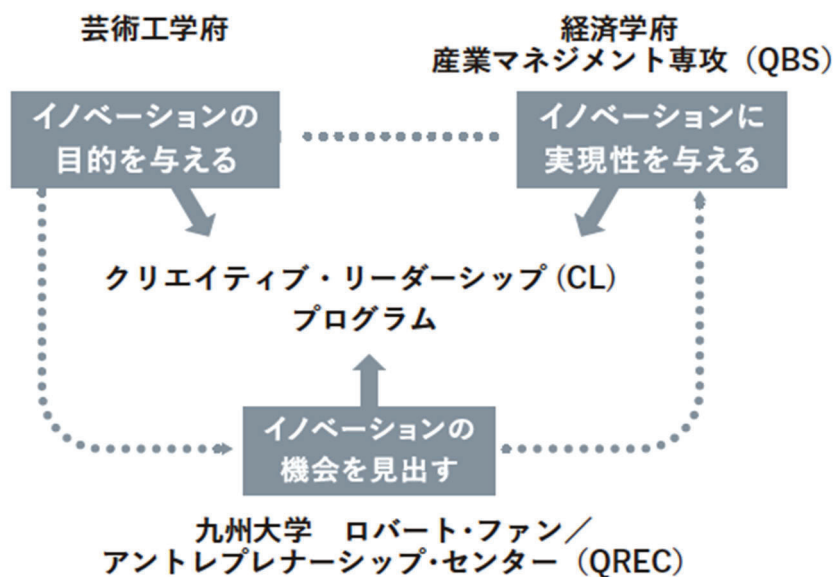


図8：クリエイティブ・リーダーシップ・プログラム

3) 企業、自治体及び非営利法人（NPO）等との連携教育

本学府ではこれまでも、専攻教育科目において、企業、自治体及び非営利法人（NPO）等と連携した教育を行ってきた。企業等の担当者による実際の現場でより必要とされる専門領域についての講義のほか、企業や社会が実際に抱える問題について学生と企業等の担当者が共同で課題解決に取り組むプロジェクト型の授業を行っている。例えば、企業等が資料や情報を提供、学生がそれらを基にフィールド調査を実施し、最後に企業等の担当者から学生のアイデアに対し助言や評価を行ったりする共同

ワークショップなどである。これらの体験により、学生はより実践的な仕事の知識や技術、社会人としてのコミュニケーション能力や課題解決能力を身に付けることができる。また、学生ならではの視点による斬新な発想、アイデアが企業等に評価され、実際に一部の商品や活動に取り入れられた事例もある。

上記のスタジオプロジェクト科目では、コースを特定せず教員と学生が様々な分野横断的な演習課題に取り組むが、その中でもストラテジックデザインコースが中心となって、より体系的に企業・自治体などの組織連携を教育課程に取り込んでいく予定である。現在新カリキュラムの準備の一環として、九州大学ビジネススクール（QBS、経済学府産業マネジメント専攻）及び九州大学ロバート・ファン/アントレプレナーシップ・センター（QREC）と連携し、トヨタ九州、JR九州、西鉄、トヨタ九州、IDEOの協力を受けて合同科目を実施している。その授業では、社会課題をテーマにデザインからビジネスプランまでをチームで行い、授業の最後には投資家へのプレゼンテーションが設定されている。令和3（2021）年度はパナソニックから2名の社会人が受講生として参加する。

また、自治体との連携科目の事例としては、SDGs 未来都市に選ばれている福岡県福津市と協力し、令和2（2020）年度には子育て行政サービスデザインの共同研究も開始した。同年12月には子育て世代包括支援センター開所に合わせ「福津市子育てマップ」を発表し、サービスデザインとして社会実装されている。このプロジェクトは「2040年の子育て」をテーマにフィンランドのアールト大学との国際連携で運営されており、今後、「スタジオプロジェクト科目」として開設する予定である。

さらに、分野融合的なデザイン課題として、九州大学病院アジア遠隔医療開発センター（TEMDEC）と共同で「医療とデザインを融合した教育プログラムの開発」プロジェクトを令和3（2021）年度からスタートする。これは、医療とデザインの融合に特化した教育プログラム開発の試みであり、デザインと医療の両方を理解する人材を育てることが目的である。改組後はスタジオプロジェクト科目の主幹的テーマの一つとしてコース横断的に教育プログラムを実施する。

5. 学府教育のための教員組織の編成の考え方及び特色

(1) 教員組織の編成の考え方

教員の組織編成においては、九州大学の学部・学府研究院制度を前提として、主に芸術工学研究院所属の教員が芸術工学府の教育を担当するという考え方に基づき、研究院におけるそれぞれの専門分野における専門性と、これまでの教育実績を十分に考慮した上で、教員個々の適正や希望も尊重して編成した。

なお、各コースに配置された教員は、所属コースの教育組織の企画運営及びコースに所属する学生の指導を主に行うが、担当以外のコースの教育についても担当し、修士論文の複数指導体制の下、教育指導については学府全体で臨むものとする。

ストラテジックデザインコースのデザインとビジネス、アントレプレナーシップを融合する教育課程については、九州大学ビジネススクール（QBS、経済学府産業マネジメント専攻）及び九州大学ロバート・ファン/アントレプレナーシップ・センター（QREC）の教員が参画し教育にあたる。これらの他部局教員によって提供される科目は学府学生全てに関わっており、デザインとビジネス、アントレプレナーシップがさらに融合できる体制となっている。

また、統合新領域学府ユーザー感性学専攻の教員が兼担として関連する科目を提供する。このユーザー感性学のプログラムは、将来的に、人間環境学研究院と共同して研究科等連係課程に改組する予定であり、このプログラムを担当する教員は芸術工学府の教育を兼担する。

さらに、人間環境学府、総合理工学府との3部局連携により建築系の共同教育プログラムを設置準備中である。このプログラム（仮称：九州大学大学院人間環境学研究院附属環境建築 R&E センター）は従来の大学院教育を越えた総合的な社会実装に関する教育を計画しており、すでにプレイベントとしてウィンタースクールを2020年12月に開催した。芸術工学府改組後、このセンターの提供する科目は展開科目として修得できる予定である。

この他にも、芸術工学研究院には、応用知覚科学研究センター、応用生理人類学研究センター、ソーシャルアートラボ、環境設計グローバル・ハブ、SDGs デザインユニットという5つの附属施設があり、それぞれの研究活動に他部局の教員が参画し、有機的な研究活動を続けている。これらの他部局教員は単独で科目を担当することはないものの、個別の講義や専門に関連する分野で修士研究あるいは博士研究の研究指導で芸術工学府の教育にも関わっている。

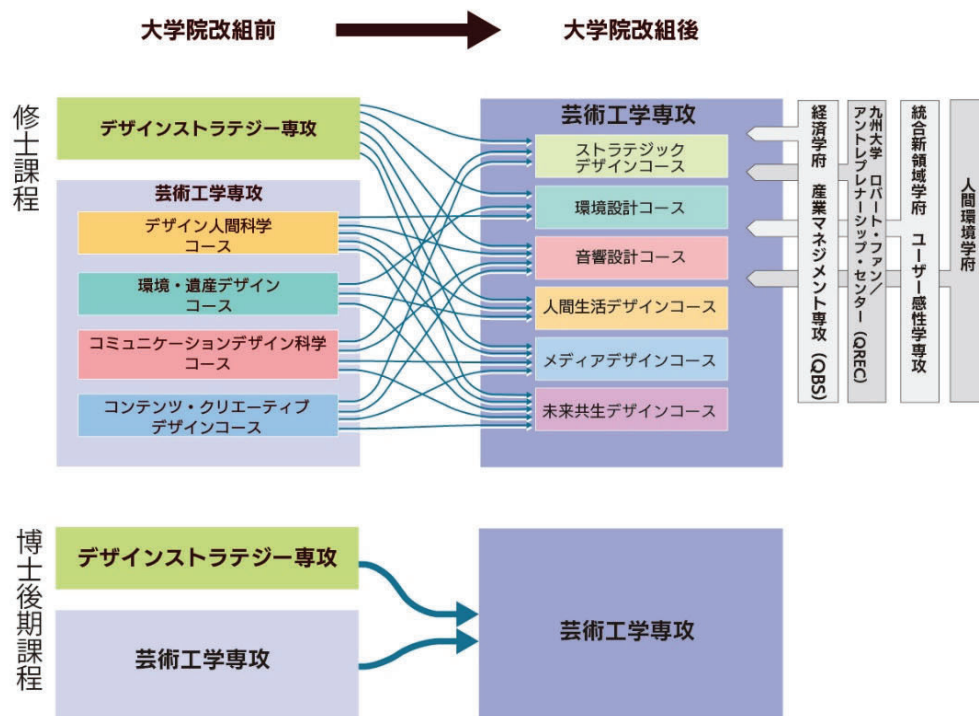


図9：学府教育のための教員組織の編成

(2) 教員の年齢構成

芸術工学府芸術工学専攻では、開設年度（令和4（2022）年4月1日）における修士課程の専任教員は79名であり、うち教授18名、准教授39名、講師3名、助教19名となっている。完成年度（令和6（2024）年4月1日）における専任教員は74名であり、うち教授14名、准教授38名、講師3名、助教19名である。博士後期課程においては、開設年度（令和4（2022）年4月1日）における専任教員は71名であり、うち教授19名、准教授38名、講師3名、助教11名となっている。完成年度（令和7（2025）年4月1日）の専任教員は66名であり、うち教授15名、准教授37名、講師3名、助教11名である。

専任教員の年齢構成については、修士課程では完成年度（令和6（2024）年4月1日）時点で、30代8名、40代が24名、50代が30名、60代が12名となっている。また、博士後期課程では、完成年度（令和7（2025）年4月1日）時点で、30代が5名、40代が19名、50代が27名、60代が15名となっている。

なお、芸術工学府芸術工学専攻修士課程においては完成年度までに5名の教員が、博士後期課程においては完成年度までに6名の教員が、定年により退職となる予定であるが、他の専任教員で十分に対応可能であるため、教育研究上の支障はない。

(3) 教員組織編成の特色

本学府の中心となる学問分野となる「芸術工学」は、芸術、科学技術、人間・人文科学だけにとどまらず、社会や自然にもまたがる幅広い分野を包括しているため、教員組織は様々な専門分野の教員から構成されている。

6. 教育方法、履修指導、研究指導の方法及び修了要件

(1) 専攻のディプロマ・ポリシー

芸術工学府 芸術工学専攻におけるディプロマ・ポリシーは、以下の通りである。

【修士課程】

芸術工学専攻において養成する人材像は、九州大学教育憲章に定める教育の目的と4つの原則（人間性の原則、社会性の原則、国際性の原則、専門性の原則）を踏まえ、人類が直面する課題に真摯に向き合うため、科学技術と芸術的感性を融合する「技術の人間化」の理念を継承しつつ、「モノ・コト・ビジョン」へ拡大する新しいデザイン領域に対する意識と人文、社会、自然にまたがる広い知識を基盤とする「高次のデザイナー」である。さらに以下に示す各コースで掲げる教育課程を通して「芸術工学」の基本・基礎を十分に理解しながら学修目標を達成し、実社会において指導的立場を果たし得る能力を修得した者に**修士（芸術工学）**の学位を授与する。また本専攻において、所属コースにかかわらず、アントレプレナーシップやデザイン実務に関する専門知識を修得し、特にデザインとビジネスに関する修士研究に取り組んだ者に**修士（デザインストラテジー）**を授与する。

《学修目標》

- A. （主体的な学び・協働） デザインに関わる深い専門的知識と豊かな教養を背景とし、自ら問題を見出し、創造的・批判的に吟味・検討しながら、幅広い分野の課題に実践的に取り組むことができる。
- B. （知識・理解） 芸術工学の基盤となる具体的知識や概念、考え方、方法について十分に理解し、コースごとの専門性にとどまらない普遍的なデザインのリテラシー、方法論を説明することができる。
- B. （知識・理解 - デザインストラテジー） アントレプレナーシップやデザイン実務に関する専門知識について理解し、説明することができる。
- C. （知識・理解）
 - C-1. （適用・分析：知識・理解の応用） 課題解決のために、芸術工学分野の専門的知識を統合して、分析、解釈し、制御あるいは構成することができる。
 - C-2. （創造・評価：新しい知見の創出） 異分野との協働を通して、専門知識を総合的に活用しながら、社会の複合的な課題を提起し、解決のための実践的な方向性を示すことができる。
- D. （実践：知識・理解の実践的場面での活用） 芸術工学に対する鋭い感性と、他分野との融合も視野に入れた高度な専門的知識を兼ね備え、総合的な設計能力をもって、科学技術と芸術的感性の融合を推進し、グローバルな世界で豊かな生活の実現に貢献することができる。
- D. （実践：知識・理解の実践的場面での活用 - デザインストラテジー） デザインの社会実装やビジネスに関わる戦略を把握・構想・実践し、それらを評価・分析しながら、起業・社会的実践を行うための方法論を構築できる。

以下、コースごとに養成する人材像と、学修目標を示す。

○ ストラテジックデザインコース

『高次のデザイン教育』という理念・目標に基づき、デザインストラテジーに関わる多様な関係性と方向性を的確に把握・構想・実践できるストラテジック・デザイナー、それらを評価・分析できるデザイン・リサーチャー、ビジネス知識やアントレプレナーシップも踏まえた起業・実践を行うための方法論を構築できるイノベーション・リード、それらの専門性を有する人材を養成する。

《学修目標》

- A. (主体的な学び・協働) 社会、経済、産業、及び人間・環境に関わる深い専門的知識を拝啓とし、自ら問題を見出し、創造的・批判的に吟味・検討しながら、幅広い分野の課題に実践的に取り組むことができる能力を有する。
- B. (知識・理解) デザイン実務におけるコンセプト構想、実際の企画、生産、知財化、流通、販売するまでの高度な専門的知識、さらにリーダーシップやチーム・コミュニケーションといったアントレプレナーシップに関する高度な専門的知識を有し、十分に理解した上でその方法論を説明する能力を有する。
- C-1. (知識・理解の応用) デザインを主題とするビジネスの基礎から知的財産として活用する能力、さらに社会、経済、産業との関わりから新しいデザインニーズを開拓し、解法に結びつける方法論、ビジネス知識やアントレプレナーシップも踏まえた、起業・実践を行うための方法論を構築できる高次の設計能力を有する。
- C-2. (新しい知見の創出) デザインストラテジーとは異なる分野との協働を通して、専門知識を総合的に活用しながら、社会の複合的な課題を提起し、解決のための実践的な方向性を示す能力を有する。
- D. (知識・理解の実践的場面での活用) デザインの社会実装やビジネスに関わる戦略を把握・構想・実践し、それらを評価・分析しながら、起業・社会的実践につながる方法論を構築できる能力を有する。

○ 環境設計コース

国内外をフィールドとした実践的な教育により、多様な環境の価値評価能力を持ち、環境設計の国際ネットワークを支える人材を養成する。また、環境の価値を評価し将来へ継承するためにサステナブルな建築・景観・社会システムをデザインする専門性を修得し、環境の維持向上に貢献する人材を養成する。さらに、人間と環境の関係を踏まえたサステナブル・デザインを可能とする安全性・健康性・機能性・快適性を実現するプロセスについて修得し、技術面から環境設計を支える人材を養成する。

《学修目標》

- A. (主体的な学び・協働) 多様化する環境に関する諸問題に対しての深い専門的知識を背景とし、自ら問題を見出し、創造的・批判的に吟味・検討しながら、幅広い分野の課題に実践的に取り組むことができる能力を有する。
- B. (知識・理解) 建築、都市、地域、ランドスケープに関する高度な専門的知識を有し、概念、考え方、方法論について十分に理解して説明する能力を有する。

- C-1. (知識・理解の応用) 課題解決のために、環境を読み解く力、社会調査スキル、科学的思考力、表現能力、分析する力等を高い水準で統合して、構成する高次の設計能力を有する。
- C-2. (新しい知見の創出) 環境設計の分野にとどまらず、異なる分野との協働を通して、専門知識を総合的に活用しながら、社会の複合的な課題を提起し、解決のための実践的な方向性を示す能力を有する。
- D. (知識・理解の実践的場面での活用) 時間、空間、他者、自然に対する想像力を持ち、他分野との融合も視野に入れた高度な専門的知識を兼ね備え、総合的な設計能力をもって、人間を取り巻く環境をより良いものにするための設計・計画・制度立案等に関する先駆的・実践的な能力を有する。

○ 音響設計コース

音に関する芸術工学的感性を持ち、音響設計に関連する芸術、科学、技術的な側面を統合して、人間に適合した音環境の創出、音響情報の高品質化、音に関する芸術文化の創造を実現する高次の設計家を養成する。

《学修目標》

- A. (主体的な学び・協働) 音に関連する芸術、科学、技術の全ての分野にわたる深い専門的知識を背景とし、自ら問題を見出し、創造的・批判的に吟味・検討しながら、幅広い分野の課題に実践的に取り組むことができる能力を有する。
- B. (知識・理解) 音響設計の専門家として必要な音に対する感性と、音響デザイン科学、音響デザイン工学、音文化学の各分野についての高度な専門的知識を有し、概念、考え方、方法論について十分に理解して説明する能力を有する。
- C-1. (知識・理解の応用) 課題解決のために、音に関連する芸術、科学、技術的な側面を統合しながら、異分野の知識を取り入れながら人間に適合した音環境の創出、音響情報の高品質化を実現するためなどの高次の設計能力を有する。
- C-2. (新しい知見の創出) 音響設計の分野にとどまらず、異なる分野との協働を通して、専門知識を総合的に活用しながら、社会の複合的な課題を提起し、解決のための実践的な方向性を示す能力を有する。
- D. (知識・理解の実践的場面での活用) 音に対する鋭い感性と、他分野との融合も視野に入れた高度な専門的知識を兼ね備え、総合的な設計能力をもって、音の適正な評価、人間に適合した音環境の創出、音響情報の高品質化などの推進に貢献する能力を有する。

○ 人間生活デザインコース

人間の特性や高度な科学技術を基盤に、生活の在り方を俯瞰的に捉え構想し、その実現に向けて応用することができる人材。具体的には、人間の生理的・形態的・行動的・心理的特性、人間の感性や創造性を踏まえ生活の在り方の創造に向けて応用かつ統合できる人材、安全安心で魅力的な生活を実現するための最先端の科学的知見を有する人材を養成する。

《学修目標》

- A. (主体的な学び・協働) 人間の特性を科学的に探究するための深い専門的知識を背景とし、生

活の在り方の創造に向け応用するために自ら問題を見出し、創造的・批判的に吟味・検討しながら、幅広い分野の課題に実践的に取り組むことができる能力を有する。

- B. (知識・理解) 人間の特性及び科学技術に関する先端の学際的な知識を有し、生活の在り方の創造に応用するために、それらの概念、考え方、方法論について十分に理解して説明する能力を有する。
- C-1. (知識・理解の応用) 課題解決のために、人間に関する最先端の科学的知見を理解・解釈しながら、統計的・数理的推論に基づいて情報を分析し、生活の在り方を構想・定義して、その実現に向け応用かつ統合することができる高次の設計能力を有する。
- C-2. (新しい知見の創出) 人間生活に関わる科学や感性の分野にとどまらず、異分野の研究者・技術者との協働を通して、専門知識を総合的に活用しながら、社会の複合的な課題を提起し、解決のための実践的な方向性を示す能力を有する。
- D. (知識・理解の実践的場面での活用) 広く人間生活に関わる鋭い感性と、他分野との融合も視野に入れた高度な専門的知識を兼ね備え、総合的な設計能力をもって、創造的な生活の在り方を構想・定義しながらその実現に向けて実践できる能力を有する。

○ メディアデザインコース

急激な技術革新が進む現代のさまざまなメディアに関わる課題を自ら発見し、論理的思考力をもって客観的に課題を分析し、先鋭的かつ独自の視点で課題解決に取り組み、革新的なメディア表現の創出やメディアプロジェクトの新たな方向性の提示を行うことのできるクリエイター及び高度な技術者を養成する。

《学修目標》

- A. (主体的な学び・協働) メディアに関する表現、技術、文化、人間の心理及びコミュニケーションの分野にわたる深い専門的知識を背景とし、自ら問題を見出し、創造的・批判的に吟味・検討しながら、幅広い分野の課題に実践的に取り組むことができる能力を有する。
- B. (知識・理解) メディアに関する数理科学、人間の心理及びコミュニケーション、芸術と文化、表現方法等の各分野についての高度な専門的知識を有し、概念、考え方、方法論について十分に理解して説明する能力を有する。
- C-1. (知識・理解の応用) 独自の視点をもって次世代のメディアコンテンツを創生する表現能力や、プログラミング等の関連技能を有する。また情報を収集・分析する高度な専門性を持ちながら、幅広い分野にわたる内容を包含する論理的思考力を持ち、研究を推進する高次の設計能力を有する。
- C-2. (新しい知見の創出) メディアの分野にとどまらず、異分野の研究者・技術者との協働を通して、専門知識を総合的に活用しながら、社会の複合的な課題を提起し、解決のための実践的な方向性を示す能力を有する。
- D. (知識・理解の実践的場面での活用) メディアを通じた表現に対する鋭い感性と、他分野との融合も視野に入れた高度な専門的知識を兼ね備え、総合的な設計能力をもって、革新的なメディア表現の創出や、メディアプロジェクトを実践できる能力を有する。

○ 未来共生デザインコース

生命情報科学、生命工学、アート・デザイン、デザイン文化の各分野の知識と方法論を身につけ、多面的で創造性に富んだアプローチで未来社会のビジョンを描き、それを実現するために、斬新な手法で設計、計画し、実装に導くデザインスキルを持つ挑戦的なマインドの人材を養成する。

《学修目標》

- A. (主体的な学び・協働) 人間を含めた多様な生命体や生命情報、それらを取り巻く環境と人間社会の関係に関する深い専門的知識を背景とし、共生できる新しい未来を切り拓くために自ら問題を見出し、創造的・批判的に吟味・検討しながら、幅広い分野の課題に実践的に取り組むことができる能力を有する。
- B. (知識・理解) 生命情報科学、生命工学、アート・デザイン、デザイン文化に対する高度な専門的知識を有し、あらゆる生命体と環境、社会の望ましい共生関係を構想し、実現するための方法論について十分に理解して説明する能力を有する。
- C-1. (知識・理解の応用) 先端的な生命情報科学、生命工学の動向を把握し、創造的に応用できる能力を持ち、あらゆる生命体が共生できる未来社会像を構想し、それを実現・実践するために必要な、具体的なものやこと、さらに異分野の視点からも実践的な各種システムをデザインできる高次の設計能力を有する。
- C-2. (新しい知見の創出) 生命科学、生命工学、アート・デザイン、デザイン文化などの分野にとどまらず、さらに幅広く異なる分野との協働を通して、専門知識を総合的に活用しながら、社会の複合的な課題を提起し、解決のための実践的な方向性を示す能力を有する。
- D. (知識・理解の実践的場面での活用) 生命科学、生命工学、アート、デザインに対する鋭い感性と、さらに他分野との融合も視野に入れた高度な専門的知識を兼ね備え、総合的な設計能力をもって、より良い未来を構想し、その実現に貢献することができる能力を有する。

【博士後期課程】

「芸術工学」に関する十分な専門的知識と特に優れた技術を獲得することで成果を達成し、自ら新しい課題を設定、解決する国際的水準の独自性のある研究成果を挙げた者に対して、「博士(芸術工学)」の学位を授与する。

《学修目標》

- A. (主体的な学び・協働) 芸術工学及びデザイン学の領域及び関連分野を含む諸科学の全般にわたる深い専門的知識と豊かな教養を背景とし、自ら問題を見出し、創造的・批判的に吟味・検討しながら、幅広い分野の課題に実践的に取り組み、デザイン学領域を先導していくことができる。
- B. (知識・理解) 芸術工学及びデザイン学領域に関する卓越した専門的知識及び技能を有し、すぐれた学問的素養と卓越した論理的思考力、柔軟な想像力や豊かな表現力を兼ね備え、自らの専門性にとどまらない普遍的なデザインへのアプローチ手法、方法論を十分に説明することができる。
- C. (能力)
 - C-1. (適用・分析：知識・理解の応用) 様々な種類の課題解決のために、芸術工学分野の深

い専門的知識を統合して、さらに異なる分野、社会、人々と協働しながら、問題を分析、解釈し、制御あるいは構成することができる。

C-2. (創造・評価：新しい知見の創出) 専門知識を総合的に活用しながら、社会の複合的な課題を提起し、主体的・積極的に研究を遂行して、解決のための実践的な方向性を示すことができる。

D. (実践：知識・理解の実践的場面での活用) 芸術工学及びデザイン学に対する鋭い感性と、他分野との融合も視野に入れた高度な専門的知識を兼ね備え、総合的な設計能力をもって、科学技術と芸術的感性の融合を推進し、グローバルな世界で豊かな生活の実現に貢献することができる。

また、デザインに関する研究のうち、その成果の中で特に技術等に関する研究が工学的に見て十分な成果を達成したと指導教員グループが認める者に対しては、「博士（工学）」の学位を授与する。

(2) 専攻のカリキュラム・ポリシー

芸術工学府 芸術工学専攻におけるカリキュラム・ポリシーは、以下の通りである。

【修士課程】

デザインに対する課題は現実社会から発せられるため、ほとんどの場合「分野横断的」である。デザインの営為が社会に対して有効であるためには、デザイン教育も横断的である必要がある。このため、芸術工学専攻内の6つのコースはそれぞれの専門性を深化させる一方で、コース間の障壁を下げ、分野横断的な教育実践を可能とするため、少ない必修科目の設定、コース間共通科目の配置、分野横断を推進する科目群の配置、という考えに沿った単位履修制度とした。また特に芸術工学府は、その母体となる芸術工学部と同様に、実験・実習等の演習系科目を通して、自ら体験し、実践することを教育方法の中での重要な方針として掲げており、教育課程の編成に当たっても、この考え方を継承拡大している。

各コースで開講される科目は「2. (2) 横断的なデザインの修得：カリキュラムにおける「系統」の設定と横断的科目、4. (1) カリキュラム編成の基本方針及び図3、同(2)カリキュラムの体系的説明」において示したとおり、「Ⅰ. デザイン科学系統」、「Ⅱ. デザイン工学系統」、「Ⅲ. 設計・制作系統」、「Ⅳ. 文化・社会デザイン系統」の4系統に分類され、全体を通して総合的なデザイン教育研究を可能にする。この4つの系統は、図3に示すようにコースが提供する専門性を縦方向に並べると、これらを一貫する「横串」となり、コース間の連携融合のための制度となる。系統は以下のように性格づけできる。

- I. デザイン科学系統：デザインに関連する物事の原理、仕組みを追求する
- II. デザイン工学系統：デザインに関連する技術を開発する
- III. 設計・制作系統：具体的な形、仕組み、やり方を作る
- IV. 文化・社会デザイン系統：デザインに関連する文化・社会のあり方を研究する

これら4つの系統には、それぞれ「講義」、「演習」また「共通」の性格を持つ専門科目が配置され

る。主として「講義」、「演習」の科目を通して、自らの専門分野にとらわれずに、学修目標A（主体的な学び・協働）及びB（知識・理解）に対応する項目を修得し、さらに幅広く「共通」の性格を持つ科目によって幅広い領域への関心や意欲、課題に取り組む態度を修得、さらに問題解決のための実践的な能力や技能を修得する。これは学修目標C（能力：適応・分析、創造・評価）並びにD（実践：知識・理解の実践的場面での活用）に対応する。

各コースにおけるカリキュラム・ポリシーを以下に示す。

○ ストラテジックデザインコース

ストラテジックデザインコースでは、設計制作系に配置されるアート・シンキング、ソサエタルデザインなどの科目を通して新しい価値の提案、社会実装に関して学び（学修目標A）、文化・社会デザイン系のデザインマネジメント、デザインマーケティングなどの科目で基礎的な内容から実務にまで至る知識と理解能力を修得する（学修目標B）。さらに各系統に配置される演習科目、コース共通の科目であるスタジオプロジェクトや芸術工学演習などを通して、デザイン・リサーチ、イノベーション・リードなどに関する能力や技能を（学修目標C-1、C-2）、実践的に修得する（学修目標D）。

○ 環境設計コース

環境設計コースでは、文化・社会デザイン系科目に配置される環境人類学特論、設計・制作系の景観生態学特論などの科目を通して多様な環境の諸問題に関して学び（学修目標A）、デザイン科学系の熱環境学特論や設計・制作系のランドスケープデザイン特論、建築計画特論などの科目で環境設計に必要な知識と理解能力を修得する（学修目標B）。さらに各系統に配置される演習科目、コース共通の科目であるスタジオプロジェクトや芸術工学演習などを通して、総合的な環境設計に関する能力や技能を（学修目標C-1、C-2）実践的に修得する（学修目標D）。

○ 音響設計コース

音響設計コースでは、メディアアート特論などの設計・制作系の科目や聴覚文化論などの文化・社会デザイン系の科目を通して音に関する幅広いトピックへの関心を広げ（学修目標A）、学士課程の教育と修士課程での高度で実践的な教育・研究へのシームレスな接続を行うために、修士課程の研究に必要な知識・理解能力を聴覚心理学などデザイン科学系の科目や、音響工学特論などのデザイン工学系の科学を通して修得する（学修目標B）。さらに各系統に配置される演習科目、コース共通の科目であるスタジオプロジェクトや芸術工学演習などを通して、音響設計に関する能力や様々な技能を（学修目標C-1、C-2）実践的に修得する（学修目標D）。

○ 人間生活デザインコース

人間生活デザインコースでは、デザイン科学系の応用人間工学、環境人間工学特論などの科目を通して人間の特性、生活のあり方などを学び（学修目標A）、デザイン工学系のデザイン認知論、人間情報工学などの科目で人間に関わる先端的科学技術を修得する（学修目標B）。さらに各系統に配

置される演習科目、コース共通の科目であるスタジオプロジェクトや芸術工学演習などを通して、人間生活の科学的なデザインに関する能力や様々な技能を（学修目標C-1、C-2）実践的に修得する（学修目標D）。

○ メディアデザインコース

メディアデザインコースでは、設計・制作系のメディアアート表現やデザイン科学系の視覚心理学特論、色彩科学特論などの科目を通して表現技術や人間に心理、コミュニケーションの方法論に関して学び（学修目標A）、デザイン工学系の視覚メディア設計特論、画像情報伝達システム設計特論、また文化・社会デザイン系のマルチモーダルコミュニケーション特論などでメディアに関する数理や表現方法などの知識、理解能力を修得する（学修目標B）。さらに各系統に配置される演習科目、コース共通の科目であるスタジオプロジェクトや芸術工学演習などを通して、各種メディアコンテンツの創生に関する能力や様々な技能を（学修目標C-1、C-2）実践的に修得する（学修目標D）。

○ 未来共生デザインコース

未来共生デザインコースでは、デザイン科学系の分子生物学、時間生物学などの履修を通して生命体、生命情報とそれを取りまく環境や人間社会の関係に関して学び（学修目標A）、デザイン工学系の人間情報工学、設計・制作系のバイオアートや文化・社会デザイン系のアーツマネジメント、共生社会デザイン論などで生命体と環境、社会の望ましい共生関係を築くための方法論を修得する（学修目標B）。さらに各系統に配置される演習科目、コース共通の科目であるスタジオプロジェクトや芸術工学演習などを通して、あらゆる生命体が共生できる未来社会像を構想し実現・実践する能力や様々な技能を（学修目標C-1、C-2）実践的に修得する（学修目標D）。

【博士後期課程】

芸術工学府のもうひとつの重要な教育上の使命は、デザイン分野を先導する博士の研究者の養成である。

このため博士後期課程では、デザインに関する修士課程レベルの知識、技術を基盤としつつ学術的に深化を進め、大学院の教育課程の集大成である博士論文を執筆し、アカデミック、企業など、所属を問わずデザイン分野で世界を先導する研究者を養成するためのカリキュラムを構成する。現在も拡大を続けているデザイン分野に対応した教育として、「研究指導科目」により諸科学の全般にわたる広く深い知識を提供する（学修目標A、B）。「論文作成科目」では自らが研究を企画し、そのために必要な調査分析の計画案を他の学生教員と共有することから、狭い専門性に閉じることをないようにコースの垣根をなくして自らの問題解決能力と創造的能力を高めるために自主性を重んじた履修システムを構築する（学修目標B、C）。さらに、その批判的検証が実際の博士論文研究につながり、独立した研究者としての経験と能力を涵養することになる（学修目標B、C、D）。

また企業の研究所に勤務する社会人や優秀な留学生など幅広く優秀な学生を受け入れるため、全ての講義において英語対応とし、国際通用性のある学術リテラシーを涵養し、所属する学生の将来へ向けたネットワーク構築も可能にする魅力ある教育課程を編成する。異分野の学生と研究討議を行う機

会を確保するためにセミナーへの参加を義務付けるなど、専門外の考え方と課題解決法の学びとコミュニケーション力の向上により他者との協働能力も育成する。

（3）本学府の教育方法、履修指導の考え方

カリキュラム・ポリシーに基づいた修士課程、博士後期課程における具体的な教育方法の考え方について示す。

【修士課程】

1) 教育方法の考え方と授業科目

芸術工学府は、その母体となる芸術工学部と同様に、実験・実習等の演習系科目を通して、自ら体験し、実践することを教育方法の方針として掲げており、教育課程の編成に当たっても、この考え方を継承拡大している。

再編後の教育課程においては、枠組みとして実習科目やワークショップ形式の授業を多く取り入れたカリキュラム構成となっている。特に、PBL (Problem-Based Learning 並びに Project-Based Learning) 系の教育科目については、大学院開設当初から着実に取り組んできた実績があるため、長年の実績と経験に基づいた授業を、改組後の新学府においても引き継ぎ発展させることを基本方針とする。

2) 主要な授業科目の実施方法と配当年次

芸術工学府における主要な授業科目は、4.(2)「カリキュラムの体系性の説明(修士課程)」に示す通り、「修士研究関連科目」、「コースコア科目」、「スタジオプロジェクト科目」、「展開科目」によって構成される。それぞれの実施方法としては、講義を中心とした座学系とPBLをはじめとした実習系がバランスよく配置されていることが特徴である。

また、通常の授業科目とは別に、2年間にわたる修士研究を実施する。芸術工学府のデザイン対象、及び方法論の系統は多岐にわたる。このため、修士研究の推進方法も、文献調査、実験、シミュレーションなどのいわゆる理系の専門分野に対応した内容から、綿密で幅広い現場での調査に基づくもの、過去の文献調査によるもの、作品制作を通して考察を行うものなど、幅広い形態が考えられる。いずれの形態に対してもその質を保証できるように、以下(4)「履修指導の方法」で詳述の複数指導体制を基本とする。

【博士後期課程】

1) 教育方法の考え方

博士後期課程では、講義等の科目の履修以上に、学生自らが主体的に研究を進めていく必要がある。特に、デザイン学分野では、急激に変革する社会に対し、新たな価値の創出が求められており、より柔軟な発想が求められる。このような若手研究者の自由で革新的発想や研究を支えるために、博士後期課程では以下の方針でその教育を実施する。

まず、学生の個別研究を推進するため、従来型の一指導教員追尾型ではなく、複数指導体制として、1研究室の枠にとどまらない融合的な個別研究を推進する。そのための複数・多分野からなる最適な

「指導教員グループ」による指導体制を整える。指導教員グループは博士後期課程への出願のための事前相談の際に、受験者の研究志望に合わせた専門性を持つ暫定教員グループを形成する（7.（2）参照）。その学生が合格した場合、入学後、博士後期課程学生と指導教員が相談のうえ、正式な複数指導教員グループを組織する。研究の進展に合わせて指導教員の変更・追加も可能とし、部局が柔軟に対応する。そのような研究環境の下、教科教育ではなく実際の研究を推進する。デザイン学の専門領域ではその実学的側面を多分に備えていることから、実践を行うための方法論を構築することが求められる。また、学際的特徴から、学術的専門分野を超える範囲においても必要とされる人材、社会の課題の多様化に対応できる人材の育成を目指す。

2) 主要な授業科目の実施方法

主要な授業科目は、4.（2）「カリキュラムの体系性の説明（博士後期課程）」に示す通り、「論文作成関連科目」、「研究指導科目」である。これに加えて、単位化はしていないが博士後期課程の主要な要素である博士論文研究がある。これらの科目及び研究活動が複数指導の下、有機的に関連していることが特徴である。

博士論文研究では、それまで大学院生が通過してきた学部及び大学院教育をまとめ、授業や多角的な視点から課題を設定し、自ら研究を遂行する過程を学ぶ。そして、学位論文にそれらの研究活動をまとめることで、修了後、独立した研究者として活動する能力を醸成する。

研究対象、方法、形式は、修士研究よりもさらに専門化するとともに多様化することが期待されるが、多分野の教員による複数指導により、いずれの形態に対してもその質を保証できる体制をとる。

（4）研究指導の方法

【修士課程】

1) 異なるコースと共同での修士研究中間報告

2年間にわたる修士研究の中で、1年次修了時に芸術工学演習の一環として修士研究の中間発表会を開催する。芸術工学府は、デザインの対象に対応した6コースが縦軸となり、横軸としてデザイン科学系統、デザイン工学系統、設計・制作系統、文化・社会デザイン系統の方法論別の系統が配置されていることが特徴である。この中間発表会は、横軸である各系統別に開催される。これによって、例えば音響設計とメディアデザインのように、異なるデザイン対象でありながら、研究方法において同様な専門性を有する教員や学生から幅広い批評を得る機会を設ける。また2年次修了時、修士研究の最終的な評価は、コースごとに行い、質の保証を確実に行うものとする。

2) 複数の教員による修士論文指導

芸術工学府の学生に対しては、上述の中間報告を終えた2年次進級時に、主指導教員とともに、副指導教員を1～2名割り当てる。このときの考え方として、主指導教員とは異なる専門性を有する副指導教員により、専門性の幅を広げる方向性を担保することとする。

なお、副指導教員は、芸術工学府の教員に限定せず、他学府、国内外を問わず他大学からも割り当て可能とする。具体的な割り当ては学生の資質・希望を勘案して主指導教員との協議によって定める。

学生は、2年次の各クォーターに1回以上、副指導教員へ進捗を報告し、指導を受けることとする。この指導は必ずしも対面によらず、オンライン形式も含んだ形も可能とする。学生は指導を受けた記録を残し、主指導教員と共有し、その後の修士研究推進に活用する。

3) 修士学位論文審査の方針

修士論文調査委員会を組織して審査を行う。この委員会は主指導教員及び副指導教員をそれぞれ主査、副査とし、その他各「系統」における芸術工学演習の一環として実施される中間発表時の評価者等で構成する。また、学術面のみならずデザインの社会への展開の観点からの評価を受ける趣旨から、学外の企業等でデザイン実践を行う関係者からアドバイスをもらう機会も確保し、必要に応じて調査委員会への参画も進める。

【博士後期課程】

1) 研究指導體制

研究指導體制としては、博士後期課程を1専攻とすることによって学府全体で臨む体制とすることを基本思想とし、それぞれの学生に対して「研究指導グループ（主指導教員＋副指導教員による3～5名で構成）」を構築する。副指導教員は主指導教員とは別の専門性を持つ教員を当て、学生の研究が分野融合的になるように進める。さらに、下述するように、学生の研究の進展に合わせて必要とされる指導教員を追加変更することも可能とする。この仕組みによって、従来実施されてきたような主指導教員1名＋副指導教員2名といった固定的かつ既存・隣接の専門領域の枠組みにとらわれない、領域横断的指導を可能とし、研究を実質的に深化・機能させることができる。

前述のように、デザインの対象及び方法論の系統は多岐にわたり、実験・物理モデル構築や数式処理・解析などの理工系、綿密で幅広い現場・フィールドでの調査、史料・文献調査、作品制作を通じたの理論、これらの横断研究など幅広い形式が考えられる。いずれの形式の観点からみた場合でも、「研究指導グループ」により博士後期課程における研究の質を保証することが可能となる。

この「研究指導グループ」の教員は、入学後、正式な指導教員として学務専門委員会が承認する。また、その後の研究の深化・拡大に伴い、「研究指導グループ」全員の同意を得て追加・変更可能とする。この際も学務専門員委員会の承認事項とする。これは、研究が極端な蛸壺化に陥ることを防ぎ、かつ、指導の透明性・客観性を担保するものである。

また、九州大学他部局、及び国内外の他大学・他研究機関の研究者をこの「研究指導グループ」に加えることを容易にするため、オンライン指導等を積極的に活用する。他大学・他研究機関の研究者・専門家の研究指導資格審査にあたっては、主指導教員の発議や博士後期課程学生の希望により、同じく「研究指導グループ」の同意を経て学務専門委員会等で審議する。審議の結果、指導が認められた場合は、費用を大学が負担する。

2) 研究経過・到達状況の把握

博士後期課程においては、自らの研究を展開し研究者として自立して研究活動を行う能力と、その基礎となる豊かな学識を養うことが求められている。そのような能力向上を、学生と指導教員グループが共に確認するため、「博士後期課程研究経過報告」の実施を行うこととする。これにより、研究の

到達状況を把握・分析し、指導教員グループは研究状況を把握して的確な指導を行う。

学生は毎年1回以上、研究経過発表を実施する。研究経過発表とは、関連学会等における口頭発表、学術雑誌への論文投稿、コンペティション等への出品、企画書の作成などの制作である。なお、学外における発表が見込めない場合、学内において「研究指導グループ」を含む第三者が聴講する形態の「学内公開発表会」を計画・実施し、そこで自身の研究を発表することとする。

上記の研究経過発表の状況を「研究経過報告書」にまとめ、発表方法に応じて表1に示す資料を添えて、指導教員グループが確認の上、学府長に提出する。

表1：発表方法と添付資料

研究経過発表	添付書類
関連学会・国際会議等における発表	梗概集
学術雑誌への論文投稿	投稿論文の写し、または論文概要
上2項以外の制作・研究業績(作品、演奏、ディレクション、著書など)	報告書(制作・研究業績など)
「学内公開発表会」による研究状況の発表	報告書(配布資料・発表スライドなど)

3) 博士学位論文審査の方針(学位授与要件について以下参照)

「研究指導グループ(主指導教員+副指導教員による3~5名で構成)」とは別途、博士学位論文等調査委員会を設置し、委員会により論文審査を行う。また、他大学・他研究機関の専門家との連携により、国内外を含む外部論文審査員の参画を推進する。

さらに、博士論文予備審査は、より質の高い研究論文とするため、所定の単位履修修了以前にも可能とする。具体的には、参考論文等の投稿・審査が完了している場合、博士後期課程在籍3年目当初(4月期入学であれば在籍3年目の4月)での予備審査を行い、最終論文提出までの修正期間を確保し、より完成度を高めるものとする。

また、国内外を含む外部論文審査員の参画を鑑み、予備審査・本審査ともオンライン審査等を推進する。外部論文審査員は従来通り、学務専門委員会及び教授会での審議を経て決定する。オンライン審査は、一定のセキュリティを確保した上で、専攻共通のルールを構築する。

(5) 修了要件

【修士課程】

本学府修士課程の修了要件は以下のとおりである。

1. 表2の各区分で設ける必要単位数を修得し、全体として専攻教育として開講する科目の履修による40単位を修得すること。
2. 修士論文あるいは修士作品を提出し、修士論文等調査委員会による最終試験に合格すること。

修士論文等調査委員会による最終試験では、修士論文等の精査と口頭発表及び口頭試問により学力の確認が行われ、修士学生の芸術工学に関する知識、理解、表現・討議力を総合的に評価し、可否を判定する。

表 2：専攻教育科目 40 単位（科目区分ごとの最低修得単位数）

専攻・コース 科目区分	芸術工学府 芸術工学専攻					
	ストラテ ジックデ ザイン	環境設計	音響設計	人間生活 デザイン	メディア デザイン	未来共生 デザイン
修士研究関連科目	18 単位					
コースコア科目	6 単位					
スタジオプロジェク ト科目	2 単位					
展開科目	14 単位					

【博士後期課程】

本学府博士後期課程の修了要件は、専攻教育として開講する科目の履修による 10 単位の修得であり、各区分で設ける必要単位数は次のとおりである。

表 3：専攻教育科目 10 単位（科目区分ごとの最低修得単位数）

専攻 科目区分	芸術工学府 芸術工学専攻	
	論文作成関連科目	4 単位
研究指導科目	6 単位	

上記の単位を修得し、予備審査を経て、学位を請求することができる。学位の請求には、学位論文のほか、査読を受けた参考論文 1 編以上あるいは学術的意義と受賞等の社会的評価を受けた参考作品 1 作品以上を提出する。博士後期課程の教育課程を経ない学位請求（「論文博士」）のためには参考論文 3 編あるいは参考作品 3 作品を必要とする。学位請求を受け、学府長は博士論文調査委員会を組織し、博士論文調査委員会が論文の調査及び最終試験により学位請求者の学力の確認を行い、学府代議員会の議を経て、総長が学位の授与を決定する。

さらに、従来の論文業績を根拠とする学位に加えて、高度なデザイン実践成果とその理論化による研究成果に対する「作品系」学位の審査基準を定めた。この学位審査においては、従来の参考論文に代わり査読論文と同等に客観的評価を受けた作品を参考作品として提出することを認め、学位論文と総合的に審査することで、学位を授与することも可能とする。

（6）履修科目の年間登録上限

修士課程修了の要件として修得すべき単位数について、学生が各年度の 1 学期において履修科目として登録できる総単位数の上限を 24 単位とする。ただし、前年度において修得した単位の 8 割以上

の成績が B（基準を超えて優秀）以上である者は、学府長に願い出て許可を得ることで、登録単位数の上限を超えて履修科目の登録を認めるものとする。

（7）研究の倫理審査体制の具体的内容等

研究実施に当たっての倫理審査については、人を対象とする生命科学・医学系研究、遺伝子治療等臨床研究のそれぞれに規程を設け、それぞれ研究を開始する前に、各部局に設置された倫理審査委員会の審査を受け、許可されたものについて研究を実施することとしている。

また、研究活動上の不正行為（捏造、改ざん、盗用等）を防止し、適正な研究活動を推進することを目的として、「国立大学法人九州大学の適正な研究活動に関する規程」を制定し、本学における研究者の研究活動上の責務、研究倫理教育の実施、不正行為の防止、不正行為に関する申立て等への対応、不正行為が行われた場合の措置等を規定し、研究不正等に全学的に対応する体制を整備している。

具体的には、同規程に基づき、不正行為に関する申立て等に対応するための「研究不正申立窓口」、申立て内容の合理性及び調査可能性等についての予備調査と予備調査後の本調査において不正行為が行われたか否かの判定を行う「九州大学適正な研究活動推進委員会」、本調査を行うための「研究不正調査部会」が設置されている。

加えて、研究活動の不正行為を事前に防止するための「研究倫理教育の実施に関する要項」も定めており、各部長を研究倫理教育責任者とし、研究者等に対して全学的に共通の教材による e-learning システムを活用した研究倫理教育を実施している。本研究倫理教育では、受講後に実施するテストで一定の点数を超えた場合のみ受講を修了したものとし、研究者に求められる倫理規範を修得させる体制を整備している。

7. 入学者選抜の概要

(1) 専攻のアドミッション・ポリシー

1) 九州大学が求める学生

九州大学では、九州大学教育憲章の理念と目的を達成するために、高等学校等における基礎的教科・科目の普遍的履修を基盤とし、大学における総合的な教養教育や専門基礎教育を受け、自ら学ぶ姿勢を身に付け、さらに進んで自ら問いを立て、創造的・批判的に吟味・検討し、他者と協働し、幅広い視野で問題解決にあたる力を持つアクティブ・ラーナーへと成長する学生を求めている。

2) 本学府のアドミッション・ポリシー

【修士課程】

芸術工学専攻修士課程では、九州大学が求める学生像を踏まえ、本学府の理念である「技術の人間化」に基づき、技術を人間生活に適切に利用するための道筋を設計でき、指導的立場を果たし得る「高次のデザイナー」の養成を目的としており、本専攻での就学を目指す学生には次のことが求められている。

- ・芸術工学に関連する高度な専門知識を修得し、社会の課題を発見・提起でき、かつ解決・実践する力を修得するために、人文、社会、自然にまたがる知識、論理的な思考能力、芸術的感性を有する。
- ・広い視野に立って異なる専門領域や価値観・文化が異なる者と協力・連携しながら課題解決へ向かう力を修得するために必要な、国際性、多様性に対する好奇心・配慮、豊かな寛容性と柔軟性を有する。
- ・自らの強み、経験、専門的知識を有効的に活用し、新しいデザイン領域を開拓・先導するために必要な自己・社会分析力、柔軟な思考力・対応力、創造的意欲、行動力を有する。

これらに加えて、各コースにおいて次のような学生を求めるものとする。

○ ストラテジックデザインコース

- ・社会・文化の長期的なビジョンへの関心を有する。
- ・人間理解・環境理解にもとづく創造的思考力を有する。
- ・多様な他者へ共感し、価値共創の推進の志向を有する。
- ・価値提案を社会実装可能な人材との協働への関心を有する。
- ・グローバルに活躍できるコミュニケーション能力を有する。

○ 環境設計コース

- ・多様化する環境に関する諸問題に対して、空間の広がりや、歴史性をふまえて、問題を解決するためにどのような提案をすべきか、自ら判断する強い意欲を有する。
- ・建築、都市、地域、ランドスケープ等に関する高度な専門知識を修得するために必要な基礎的

な専門知識と学力を有する。

- ・環境を読み解く力、社会調査スキル、科学的思考力、表現能力、分析する力を修得するために必要な環境や事物を専門的に観察する能力、創造的な感性を有する。

○ 音響設計コース

- ・音響学の基礎についてその原理を理解しており、その理論によって、自然科学の現象を説明する能力を有する。
- ・音響設計の専門家として必要な音に対する感性と、音文化学、音響環境工学、音響情報科学といった音響に関わる代表的な分野についての専門的知識を有する。
- ・音響設計に関わる諸課題を解決するため、それらを統合して応用する能力を有する。
- ・音に関する文化、環境、情報の視点からデザイン対象に多面的にアプローチし、音に関わる新しいデザインの分野を切り開く力を有する。

○ 人間生活デザインコース

- ・生活者としての人間に興味を持ち、その特性を生理的、形態的、行動的、心理的に明らかにするための基盤を有する。
- ・人間の感性や創造性に興味を持ち、そのプロセスの可視化やデザイン応用に興味を有する。
- ・人間の生活を安全安心で魅力的なものにするための理工学的な知識を有する。
- ・生活者としての人間の特性と最新の科学技術を基に、様々な社会問題の解決や価値創造に意欲を有する。

○ メディアデザインコース

- ・メディアとコミュニケーションに関わるデザインと芸術的表現の研究及び創造的実践を行う人物。論理的思考能力を背景にした、美的感性を持つ高度なクリエイター、芸術文化の研究への志向を有する。
- ・メディアとコミュニケーションに関わるデザイン、コンテンツ創成に関する高度な表現能力を有する。
- ・先導的なコンテンツやものづくり設計の背景となるメディアテクノロジーの研究及びコンテンツ創造の能力を有する。
- ・メディアとコミュニケーションに関わるデザインの知識、数理科学的知識、人間の心理に関する高度な研究を行う能力を有する。

○ 未来共生デザインコース

- ・他者、動植物、過去や未来の世代など、これまで視野に入りにくかった存在と共に豊かに生きていくことを志向する。
- ・そのための装置や作品、制度、技術、考え方をづくりあげていくために、学部課程でそれぞれ培った基礎的な能力に立脚しながら、自らの追求を他者に分かりやすく説明し、他分野の知見や技能と効果的にコミュニケーションをとることを通じて、新たなデザインの可能性を切り開

いていく意欲を持つ。

- ・そのために必要とされる芸術、人文、社会、科学の基礎的知識を備え、調査や思考、創造や表現の基本的能力を備える。

【博士後期課程】

博士後期課程では、九州大学が求める学生像を踏まえ、本学府の理念である「技術の人間化」に基づき、技術を人間生活に適切に利用するための道筋を設計でき、指導的立場を果たし得る研究者の養成を目的とし、修士課程入学希望者に求める上記の態度や資質に加え、次のことが求められている。

- ・卓越した論理力と思考力を有し、自らが課題を発見し、それらを解決しうる高い能力を有する。
- ・専門分野及び隣接分野における学術研究に対する高い関心と目的意識、かつ、倫理観を身に付ける姿勢を有する。
- ・世界が抱える課題に関心を持ち、国際的水準の研究の推進と国際的な場で研究成果を発信できる外国語能力を備えている。

芸術工学府芸術工学専攻修士課程及び博士後期課程における、ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、並びにアドミッション・ポリシーまで俯瞰した表を、参考図2に示している。

（２）入学者選抜の概要

上記アドミッション・ポリシーに基づいて、入学者選抜を以下のように行う。

修士課程と博士後期課程に共通して、面接試験は対面形式を基本とするが、オンライン形式も導入し、海外の志願者が来日せず受験できる仕組みを設ける。さらに出願書類及び面接の言語は日本語と英語を選択できるようにし、留学生が受験しやすい入試制度を整備する。

また、修士課程の入学時期は4月（以下、春入学）のみであったが、改組後は10月入学（以下、秋入学）を導入する。博士後期課程は従来通り、春及び秋入学を維持する。なお、春入学及び秋入学に対応する入試方式とそのスケジュールを図10に示している。

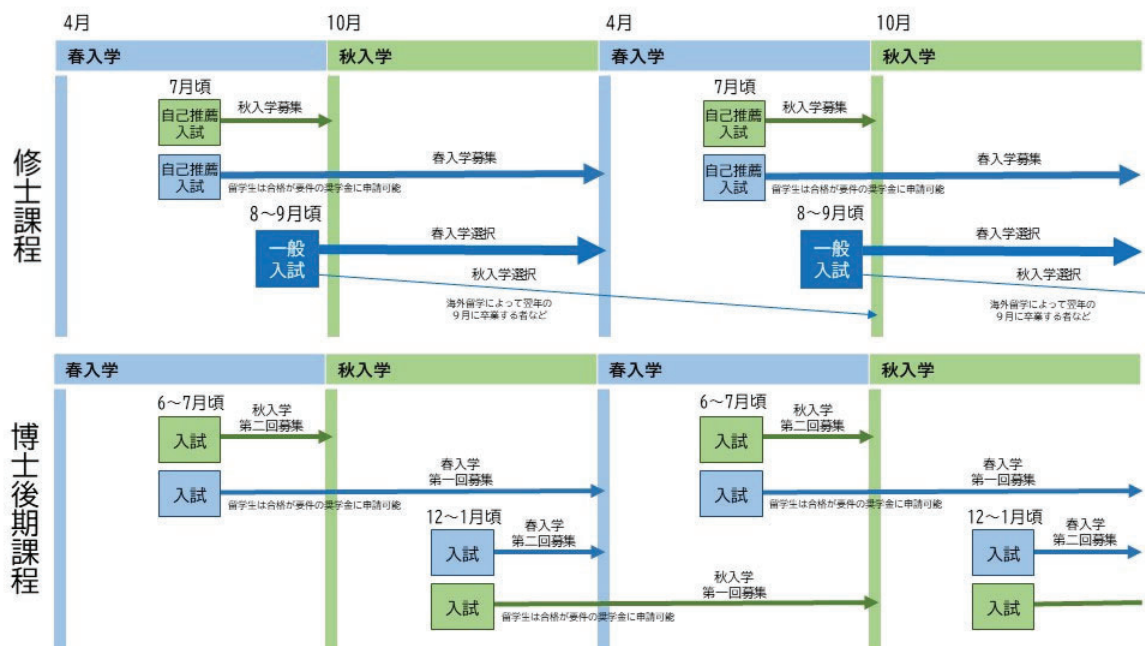


図 10：春入学及び秋入学に対応する入試の方式とスケジュール

【修士課程】

修士課程における入学者選抜の実施方法として、養成する人材像や入学者の受入方針を踏まえた上で、自己推薦入試及び一般入試により以下のとおり選抜することとする。

1) 自己推薦入試

本試験では、学士課程を含む入学前までの経歴において有意義な学習・研究・創作活動等に取り組み、将来のデザイン分野を先導できる基本的資質を備えた個性（一芸に秀でた能力、文化的背景など）豊かな者を選抜することを目的として、書類選考・面接により試験を実施する。

第一次の書類選抜では、英語（外部英語試験の成績）、学業成績（GPA）、自己推薦書、志望理由書により選抜する。外部英語試験の成績により英語能力のレベルの確認、学業成績により狭い専門領域の知識でなく、基礎学力を公平に評価する。自己推薦書では、特筆すべき実績（受賞、優秀な学業成績、活動実績等）の記載から強みを評価する。志望理由書では、芸術工学府との適性を確認する。第二次選抜では面接を行い、書類審査では評価が難しい点（論理的思考能力、説明・表現力）を中心に評価を行う。なお、オンライン面接を導入し、来日せずに受験可能な仕組みを整えることで、留学生が受験しやすい入試制度とする。

2) 一般入試

本試験では、一定水準の英語能力、基礎学力を持つ者を選抜することを目的として、従来の一般選抜と同じく、英語（外部英語試験の成績）、専門科目試験（コース内共通）、総合面接により試験を実施する。外部英語試験の成績では、国際的な感覚と海外の学生や研究者と協働して課題に取り

組むことができる英語コミュニケーション能力を評価し、専門科目試験では希望するコースの専門領域に関わる基礎知識を評価する。ただし、総合面接では、コースのアドミッション・ポリシーを踏まえ、ポートフォリオなどを用いた創作力を評価する新しい形態の面接を取り入れる。

3) 留学生及び社会人の受験者の確保

自己推薦入試、一般入試のいずれの方式においても、英語のみでの受験を可とすることで、留学生と日本人学生は同じ試験を受験する。従来の入試制度では、留学生のために外国人留学生入試（専門試験、面接）を設けていたが、新しい制度では異なる2つの方式にて受験できる。また秋入学にも対応する受験制度を設けるとともに、合格を要件とする奨学金を獲得しやすい入試スケジュールになっており、留学生がより受験・入学しやすくなる。さらに様々な国から留学生が集まるよう、芸術工学部局に設置している芸工インターナショナルオフィスが中心となって海外広報活動を展開するとともに、芸術工学府独自の留学生向け奨学金制度を検討している。

社会人は自己推薦入試を受験することになる。従来は社会人入試においては、官公庁、企業又は教育機関等の職員としての実務経験が出願資格となっているが、自己推薦入試は実務経験だけでなく、大学卒業後の多様な経験や活動も評価の対象に含めている。社会人入試によって出願資格を限定するよりも、志願者が自己推薦する内容に対して評価する形式の方が社会人にとっては受験しやすい。さらに募集人員においても、従来は社会人入試は若干名と限られていたが、自己推薦入試には大きな枠（総募集人員の約35%）を設けており、さらに秋入学も選択でき、優秀な社会人をより多く集めやすい仕組みにもなっている。

【博士後期課程】

1) 入試の方法

博士後期課程では、これまで設けていた選抜区分（一般選抜、社会人選抜、留学生選抜）を一本化する。また、入学試験を年2回（6～7月頃、12～1月頃）実施し、春入学及び秋入学を指定して受験できる制度を全面的に導入する（現在は芸術工学府デザイン人間科学国際コース博士後期課程のみ導入）。これにより優秀な海外からの留学生や実務経験が豊富な社会人学生に対応する。

選抜は書類選考と面接試験（口頭試問）により実施する。

書類選考では学業成績、英語成績証明書、修士学位論文（修士課程修了見込みの者は研究経過報告書）、博士研究計画書、研究・業務実績書、ポートフォリオ等を用いる。

面接試験では、これまでの研究成果及びこれからの研究計画等について説明させる。そして、芸術工学に関連する専門知識のほか、人文、社会、自然にまたがる知識や、論理的な思考能力、芸術的感性、自己・社会分析力、柔軟な思考力・対応力、創造的意欲、行動力等を総合的に評価する。面接試験は、志願者が研究指導を希望する「指導教員グループ」から構成された面接委員による質疑によって行われる。

志願者には出願前に主指導希望教員と相談するよう指示し、研究計画の実現可能性や希望指導教員の研究の専門性や方向性を確認することを求める。一方、主指導希望教員はその機会を通して志願者の研究能力を確認するとともに研究計画を精査し、指導可能かどうかを判断する。これにより、「6. 教育方法、履修指導、研究指導の方法及び修了要件（4）研究指導の方法」で記載した「指

導教員グループ」による研究指導体制を事前に準備し、円滑に研究が開始できる体制につなげる。

2) 事前相談と仮指導教員グループの形成

博士後期課程での高度な専門性と自立した研究者を育成する使命責任を果たすため、入学者選抜試験の方法は提出された書類や限られた時間による面接審査だけにとどめず、指導担当予定者と志願者の間で事前の研究計画と研究指導体制等の確立を行う必要がある。

入学志願者は事前に指導希望教員と連絡をとり、博士後期課程での担当と指導の相談を行う。その際、必要に応じて研究活動実績リスト、研究計画などを提示する。

相談を受けた教員はこれらの書類を確認、志願者との相談を行い、入学志願者の研究推進能力、資質、計画の実現可能性などを確認する。指導可能であると判断できた場合、あるいは若干の研究計画修正等によって指導可能となると判断できた場合は、在学予定期間での研究計画を立てルートマップを作り、志願者とともに検討を行う。

また、出願のための研究計画書等へのアドバイス等を行う。同時に研究の専門性や方向性に合わせて在学中の責任を負う指導教員グループを仮組織し、これらの情報を共有する。指導教員グループ構成の際には在職可能期間等も考慮し、少なくとも1名以上の主指導予定者が学位論文審査時まで引き継がれているようにする。指導可能性の判断及び仮指導教員グループの構成の後、志願者は出願を行う。以上の事前準備のため、志願者は出願締切日の少なくとも1ヶ月以上前に指導希望教員と連絡をとることが望ましい。

(3) 募集人員

【修士課程】

修士課程では、試験ごとの各コースにおける募集人員の目安を以下のとおりとする。

表4：修士課程における各コースの募集人員

コース 試験区分	芸術工学府 芸術工学専攻					
	ストラテジックデザイン	環境設計	音響設計	人間生活デザイン	メディアデザイン	未来共生デザイン
自己推薦入試	7	7	7	7	7	7
一般入試	13	13	13	13	13	13

【博士後期課程】

博士後期課程は、これまでの2専攻を1専攻に統合し、一般、社会人、留学生といった試験区分も一本化するため、募集人員は専攻全体で30名とする。専攻全体における募集人員の調整については、博士後期課程を構成する専任教員からなる学府内学務委員会において行う。

8. 基礎となる学部との関係

九州大学芸術工学部は、日本初のデザイン教育の拠点として誕生して以来、デザインの分野をリードし続ける教育機関としてこれまで発展してきた。しかし、近年、デザインの対象がユーザーエクスペリエンス（UX）やサービス、ビジネスモデル、社会システム等の仕組みへと広がり、さらに、現状の課題に対する解決に限らず、将来のあり得る、また、そうありたい社会のビジョン、「未来はこうもあり得るのではないか」という「問い」の創造までをデザイン概念が含むようになってきた。そういった「モノ」から「コト」、さらに「ビジョン」へ拡大するデザイン領域に対応できる人材の育成を可能にするため、令和2（2020）年4月に学部の改組を行い、これまでの芸術工学のアイデンティティを継承しつつ、新しい対象や分野融合的なデザインにも柔軟に対応できる組織とした。

芸術工学府においても、学部と同様に新しいデザイン領域に対応する人材の輩出を可能とするため、現行の2専攻を1専攻に統合、専攻内にはこれまでの芸術工学で培ってきたデザインの専門性を継承するコースと、拡大し流動化するデザイン領域に対応するコースを緩やかに置き、学生が学部で修得した専門性をより深めることも、専門性を基に広い視野で俯瞰的かつ横断的な知識とスキルを得ることもできる柔軟な教育組織を構築し、従来のデザイン領域の枠を超える広範なスキルと知識をもつ、高次のデザイナー及び芸術工学を先導する研究者の育成を目指す。

9. 施設、設備等の整備計画

(1) 校地、運動場の整備状況

芸術工学府のある大橋キャンパス内には、芸術工学図書館、キャンパスライフ・健康支援センター（健康相談室、学生相談室）、外国人留学生・研究者サポートセンター、食堂・売店等の福利厚生施設が充実している。また、大橋キャンパスの近くには、学生寄宿舍（井尻寮）が設けられている。運動場については、大橋キャンパス内に設置されている多目的グラウンド、体育館、テニスコートを主に使用する。このほか大橋キャンパスには課外活動施設（サークル棟）が整備されている。学生が休息するスペースとしては、課外活動施設（サークル棟）、食堂、建物によっては休憩スペース（リフレッシュルーム）が整備されている。

(2) 校舎等施設の整備状況

教室については、本学府の特色ある教育を展開できるよう、現在の3号館・4号館・5号館・7号館等を中心として、次のような形で整備されている。

1) 講義室・演習室

3号館	321号室	(54名規模)
	322号室	(117名規模)
	323号室	(30名規模)
4号館	411号室	(61名規模)
5号館	511号室	(210名規模)
	512号室	(81名規模)
	521号室	(88名規模)
	524号室	(130名規模)
	525号室	(147名規模)
	531号室	(78名規模)
	532号室	(54名規模)
	533号室	(54名規模)
	共同製図室	(111名規模)
	7号館	ワークショップ室
シアタールーム		(16名規模)

2) アクティブ・ラーニング・スペース

グループで議論しあう協働学習を支える設備として、大橋キャンパス内の学修支援施設（デザインコモン）2階に、可動式の椅子や机などを利用可能なアクティブ・ラーニング・スペース（50名規模・1室）が整備されている。また、学生によるグループプロジェクトや研究・教育活動を支援するためのコワーキングスペースである「デザインステーション」を大橋キャンパス内の複数箇所

に整備し、グループワークに適したデスク、チェア、可動式ホワイトボードを設置している。(2号館2階スペース、3号館1階スペース、3号館3階305号室、7号館1階スペース)

3) 実験室・研究室

問題や課題の解決に向けた研究に取り組むための活動スペースとして、実験・研究室が整備されている。また、教員の研究室についても、大橋キャンパスの既存施設の中で、教員団としてまとまりを形成できる位置に確保し、演習室を近接させて、教員と学生の日常的なコミュニケーションがスムーズに図られるよう整備されている。

(3) 図書等の資料及び図書館の整備

1) 図書資料の整備状況

九州大学附属図書館の全蔵書は、図書約420万冊、学術雑誌約83,300冊、アクセス可能な電子ブック約238,000タイトル、アクセス可能な電子ジャーナル約108,000タイトルを所蔵し、各種データベースサービスを提供している。データベースや電子ジャーナルは、学外からもアクセス可能となっている。そのうち、芸術工学図書館には、図書約188,000冊、学術雑誌約3,000冊が収蔵されている。長年にわたる計画的な図書資料の収集・整備により、芸術工学府の教育研究領域に関する図書・学術雑誌類は充実している状況にあり、現在も年間で図書が約1,700冊、学術雑誌約520冊を受け入れる等、更なる充実を図っている。

2) 図書館の整備状況

芸術工学図書館は、主に芸術工学系の学生・教職員へのサービスを行い、ビデオ室・ステレオ室等、芸術工学関係の多様な資料に応じた施設を備えている。また、平成28(2016)年度より、1階にアクティブ・ラーニング・スペースを設置し、可動式の椅子と机、壁面ホワイトボード、大型ディスプレイ、可動式電源を利用できることとなった。このエリアでは学修のための対話やディスカッションが可能となっている。

10. 管理運営

(1) 九州大学における管理体制

本学では、教学面の管理運営における重要事項の審議等については、主に「教育研究評議会」により行っている。教育研究評議会は、総長が議長となり、理事、副学長、各部局・センター・施設の長、病院長及び附属図書館長等により構成され、①中期目標についての意見に関する事項、②中期計画及び年度計画に関する事項、③学則その他の教育研究に係る重要な規則の制定又は改廃に関する事項、④教員人事に関する事項、⑤教育課程の編成に関する方針に係る事項、⑥学生の円滑な修学等を支援するために必要な助言、指導その他の援助に関する事項、⑦学生の入学、卒業又は課程の修了その他学生の在籍に関する方針及び学位の授与に関する方針に係る事項、⑧教育及び研究の状況について自ら行う点検及び評価に関する事項、⑨その他教育研究に関する重要事項等について審議を行っている。また、教育研究評議会の下に、以下のとおり専門委員会等を置き、それぞれが専門とする事項について調査、審議又は企画を行っている。(表4参照)

表4：教育研究評議会に置く専門委員会等

事 項	委員会の名称
入学試験の実施に関する事。	入学試験実施委員会
入学者の選抜に関する事。	入学者選抜研究委員会
大学教育に関する事。	教育企画委員会
基幹教育の企画及び立案に関する事。	基幹教育委員会
学生の支援に関する事。	学生支援委員会
国際交流に関する事。	国際交流専門委員会
情報政策に関する事。	情報政策委員会
実験動物の飼養保管及び動物実験に関する事。	動物実験委員会
研究用微生物の安全管理に関する事。	研究用微生物安全管理委員会
放射線等障害の防止に関する事。	放射線等障害防止委員会
遺伝子組換え実験に関する事。	遺伝子組換え実験安全委員会
適正な研究活動の推進に関する事。	適正な研究活動推進委員会

また、平成29(2017)年11月からは、教育課程の改善や教育方法の向上、高大接続・入試改革など、全学的な教育改革を組織的に推進するために、学内に分散する複数の教育支援センターを再編成し、教育の質の向上を図る教学マネジメント組織として「教育改革推進本部 (The University Education Innovation Initiative)」を設置した。総長のリーダーシップの下、全学的な教育改革の方針・計画などの企画・立案等を行う組織として、教育改革を進める上で必要な「企画・評価」、「教育方法・教材開発」、「アドミッション」、「キャリアサポート」の4つの部門を置き、教育ビッグデータの分析・可視化・活用を担う「ラーニングアナリティクス」部門をエンジンとして、エビデンスに基づく教育

改革を進めるほか、各部門・部局の壁を越えて全学的に重点的に取り組むべき教育改革を「教育改革推進プロジェクト」と位置づけ、戦略的な教育の質向上に取り組んでいる。

（２）芸術工学府における管理運営体制

１）副学府長

学府長がイニシアティブを十分に発揮できる体制を構築し、学府ガバナンスを円滑に行うため、学府長を補佐・支援する学府長指名の副学府長を４名置く。副学府長は、危機管理の観点から、学府長の補佐の役割に加え、学府長に事故がある場合の職務の代理や学府長が欠けた場合に職務を代行することができる仕組みとなっている。また、学府長、副学府長が一体となった部局運営体制を構築するため、副学府長は学府長の推薦に基づき、総長が任命する。

２）教授会及び代議員会

芸術工学府では、大学院の教学面の管理運営に関する事項については、教授会にて審議等を行っている。教授会は、学府長を議長として学府を担当する専任の教授及び准教授から構成され、①学生の入学及び課程の修了に関する事項、②学位の授与に関する事項、③教育課程の編成に関する事項、④組織の再編に関する事項、⑤学府担当教員の選考に関する事項、⑥非常勤講師の委嘱に関する事項、⑦学生の休学、退学、除籍、表彰、懲戒等に関する事項、⑧外国人留学生及び研究生等に関する事項、⑨学府教育に係る自己点検・評価に関する事項等について、原則４月、７月、１０月、１月に審議を行っている。なお、教授会には、教授会の運営を円滑に行うため、学府長、副学府長、その他の教育・研究組織の長等で構成された代議員会を置き、上記事項の審議等を代議員会に委ね、代議員会の議決をもって教授会の議決とできることとしている。

また、教授会が学府長候補者を推薦することができる仕組みを設けているが、大学運営上、重要な職であることから、役員会において候補者から部局の運営方針等についてのヒアリングを行い、役員会の議を経て、総長が任命することとなっている。

３）常設の専門委員会

教育課程の編成、学生の在籍に関する事項、学生の賞罰、学位の授与に関する方針に係る事項、自ら行う点検及び評価に関する事項、外国人留学生及び研究生等の受入れ等に関する事項、学生の厚生補導等を審議する専門の委員会として、学府長、副学府長、芸術工学府の講座を担当する教員のうち博士後期課程の研究指導資格を有する者（専攻、コースごとに各１名）、芸術工学部の芸術工学科の学科目を担当する教員（コースごとに各１名）からなる学務専門委員会を設置し、教学面の適切な管理運営を期した体制を整備している。学務専門委員会には、教授会における審議事項の一部を委託し、学務専門委員会の議決をもって教授会の議決とできることとしている。

1 1. 自己点検・評価

(1) 全学の自己点検・評価

全学的な自己点検・評価について、九州大学学則第2条において、「教育研究水準の向上を図り、本学の目的及び社会的使命を達成するため、本学における教育研究活動等の状況について自ら点検及び評価を行い、その結果を公表する」こと、及び「自己点検・評価及び第三者評価等多様な評価の結果を本学の目標・計画に反映させ、不断の改革に努める」ことを定め、学則第33条で大学評価に関する重要事項を審議する組織として、大学評価委員会を置くことを定めている。

大学評価委員会は、①本学の教育及び研究、組織及び運営並びに施設及び設備の評価、②国立大学法人評価、③認証評価、④教員の教育・研究等活動の評価、⑤各部局の評価活動の総括、⑥大学評価に係る報告書の作成及び公表、⑦教員活動進捗・報告システム(Q-RADeRS)の運用等に関することを任務とし、総長を委員長とし、理事、副学長、各部局の長、事務局長で構成している。

全教員を対象とする教員活動評価も実施しており、教員活動評価では、①教員自身の教育研究活動の把握と改善向上と、②部局の将来構想における諸施策への活用を目的に、全学での基本的枠組みを設定し、部局の特性に配慮した実施体制や実施方法を定め、部局ごとに実施している。

また、教育・研究活動の継続的な改善を行っていくためには、改善に役立つための評価活動の質の向上を進めると同時に、効率的・効果的な評価体制の構築も必要であるため、九州大学では、多様かつ大量の必要データを処理・管理する情報処理システムの開発・運用を行っている。①大学経営や将来計画に関する基礎資料を収集、②自己点検・評価及び第三者評価への基礎資料、③教員が教員活動評価のために毎年度提出する報告書への活用、④国際交流や社会貢献推進のための情報公開への活用、⑤学内外からの教育研究活動に関する調査への対応の5つを目的に掲げ運用している「大学評価情報システム」をはじめ、中期目標・計画の達成を念頭に置きながら、年度計画の自己点検・評価や根拠資料の収集・保管、さらには次年度計画の立案までの一連の業務をサポートする「中期目標・中期計画進捗管理システム」等を運用し、全学的な評価活動の質の向上と、効率的・効果的な評価体制の構築を図っている。

さらに、平成28(2016)年4月には、学内の様々なデータを一元的に収集、管理し、組織としての管理・運営機能の強化を図ることを目的に、これまで本学における点検・評価活動に対する支援や、学内外への情報の提供等の業務を担っていた大学評価情報室を、インスティテューショナル・リサーチ(IR)室として発展的に改組し、現状把握や改善事項への対応を迅速に行える体制の強化を図っている。

九州大学では、国立大学法人評価、大学機関別認証評価等の評価において、上記の組織体制のもと点検・評価を行うとともに、評価結果の分析を行い、課題や改善点を整理した上で学内に対応を促す等、評価を適切に改善につなげる取組を推進している。

(2) 芸術工学府の自己点検・評価

芸術工学府では、中期目標期間における全学的な方針である「自己点検・評価体制に関する基本方針」と、「年度計画の自己点検・評価に係る実施要領」に基づく本学部内の自己点検・評価を行う組

織として、研究・評価専門委員会を設置している。

当該委員会を中心に、大学の中期目標・中期計画を踏まえた上で、教育面においても研究面においても、グローバル化の推進に関する目標計画を多く立てており、将来構想として目指す「世界的デザイン教育研究連携におけるリーダーシップの確立」、「デザイン教育における先進性、先導性の推進」、「新しい社会の在り方に関するデザイン研究の推進」、「多様な業績評価基準の確立」、「キャンパスの高度機能化」に係る取り組みを含んだ中期目標・中期計画を策定するとともに、学生の受入れに関する事項、教育内容及び方法に関する事項、学修成果に関する事項について、点検・評価を行っている。

12. 情報の公表

(1) 大学としての情報の公表

九州大学では、インターネット上に大学のホームページを開設し、大学としての基本方針である「教育憲章」や「学術憲章」をはじめ、中期目標・中期計画等今後の大学の取組に関する情報を発信するとともに、カリキュラム、カリキュラムマップ、シラバス、授業科目のナンバリング、定員、学生数、教員数や学内規則等、大学の基本情報を公開しており、具体的な公表項目の内容と、公開しているホームページのアドレスは以下のとおりである。

- ① 大学の教育研究上の目的に関すること
- ② 教育研究上の基本組織に関すること
- ③ 教員組織、教員の数並びに各教員が有する学位及び業績に関すること
- ④ 入学者に関する受入れ方針及び入学者の数、収容定員及び在学する学生の数、卒業又は修了した者の数並びに進学者数及び就職者数その他進学及び就職等の状況に関すること
- ⑤ 授業科目、授業の方法及び内容並びに年間の授業の計画に関すること
- ⑥ 学修の成果に係る評価及び卒業又は修了の認定に当たっての基準に関すること
- ⑦ 校地・校舎等の施設及び設備その他の学生の教育研究環境に関すること
- ⑧ 授業料、入学料その他の大学が徴収する費用に関すること
- ⑨ 大学が行う学生の修学、進路選択及び心身の健康等に係る支援に関すること

上記①～⑨ <http://www.kyushu-u.ac.jp/ja/university/publication/education/>

⑩その他

- a. 中期目標・中期計画、自己点検・評価報告書、認証評価の結果等
<http://hyoka.ofc.kyushu-u.ac.jp/hyoka-home/index.html>
- b. 学内規則
<http://www.kyushu-u.ac.jp/ja/university/information/rule/rulebook/>
- c. 学部・学府等の設置関係の書類
<http://www.kyushu-u.ac.jp/ja/university/publication/establish/>

1 3. 教育内容等の改善を図るための組織的な研修等

(1) 全学的な取組

九州大学では、教育データに基づく教育改革の PDCA サイクルを確立させ、各学府等との連携により、全学的な教育改革を推進し、教育の国際的な通用性を高めることを目的とする全学組織として「教育改革推進本部」を設置している。同本部では、全学的な FD 活動を実施するとともに、各部局と連携して、各部局の FD 活動の支援を恒常的に行っている。

全学的な FD 活動では、全学的な教育課題等に関する内容を中心に、部局の FD 活動では、部局ごとの特性に応じた教育課題を取り上げて実施しており、FD を企画する際には、教職員を対象としたアンケートや、学生を対象とした授業評価アンケートの結果を活用している。また、新採用となった教員等を対象に本学の将来の展望等について理解を深め、教育者・研究者としての資質と大学の構成員としての自覚を高める初任教員研修をはじめ、学習支援システム講習会、メンタルヘルス講習会、電子教材開発・著作権講習会、バリアフリー講習会等、教育活動の全般にわたる FD 活動を実施している。これらの活動を通じて全学的な教育課題等に関する啓発や、課題の共有が図られ、カリキュラム、シラバス、教育手法、成績評価方法等の改善につながっている。

また、FD 活動以外にも、全学的な職務関連研修を実施するほか、大学職員に必要な知識・技能を修得させ、必要な能力及び資質を向上させるために、以下の取組を実施している。

- ・コンプライアンスを確保するため、本学の体制・取組、非違行為の概要等を学び、コンプライアンスの重要性の認識と理解を深める「職員コンプライアンス研修」
- ・研究費不正を防止するための「研究費の運営・管理に係るコンプライアンス教育」(e-ラーニング)
- ・近年の不正競争防止法の諸改正等を受け、秘密情報の漏えい等を事前に防止し、適正な秘密管理を図る「大学における営業秘密管理 e-ラーニング研修」
- ・国の方針や大学への要請等について理解を深め、職員個人の資質向上はもとより、組織として業務を円滑に遂行するための職員間における連帯意識の醸成を図る「学務事務研修」
- ・ビジネスライティングの基本的なルールと相手や状況に合わせた表現方法を学修し、留学生及び外国人研究者への対応能力及び海外の大学等との E メールや文書による調整能力を涵養する「職員英語ビジネスライティング研修」等

(2) 芸術工学府の取組

芸術工学府では、全学的な FD 活動を踏まえ、学務専門委員会が学府内の FD に関する企画・実施を担当している。

学務専門委員会は、年度ごとにテーマを定め教育関連の FD 企画を立案している。近年は、「グローバル化と英語による教育力」、「ルーブリックの作成」、「成績不振学生への指導」、「英語で授業を行う際の注意点」、「デザイン教育の質保証」、「教育支援システムの活用」をテーマとして FD を実施しており、改組後も引き続き教育の質の向上及び学生支援の充実に資する企画を実施する。

設置の趣旨等を記載した書類（資料） （別添資料目次）

【参考図 1】	修士課程全科目	1
【参考図 2】	3 ポリシー（修士課程および博士後期課程）	2
【資料 1】	国立大学法人九州大学教員の定年に関する規程	3
【資料 2】	入学から修了までのスケジュール表	4
【資料 3】	履修モデル	7
【資料 4】	研究の倫理審査体制に関する規程 九州大学人を対象とする生命科学・医学系研究に関する規程 九州大学遺伝子治療等臨床研究に関する規程 国立大学法人九州大学の適正な研究活動に関する規程 研究倫理教育の実施に関する要項	23
【資料 5】	大学院学生の研究室内の見取図	39
【資料 6】	基礎となる学部との関係図	40

ディプロマ・ポリシー：コースの教育課程を通して「芸術工学」の基本・基礎を十分に理解しながら以下の学修目標を達成し、実社会において指導的立場を果たし得る能力を修得する

- A) **主体的な学び・協働**：デザインに関わる深い専門的知識と豊かな教養を背景とし、自ら問題を見出し、創造的・批判的に吟味・検討しながら、幅広い分野の課題に実践的に取り組むことができる。
- B) **知識・理解**：芸術工学の基盤となる具体的知識や概念、考え方、方法について十分に理解し、コースごとの専門性にとどまらない普遍的なデザインのリテラシー、方法論を説明することができる。
アントレプレナーシップやデザイン実務に関する専門知識を理解して説明することができる。
- C-1, C-2) **知識・理解の応用と新しい知見の創出**：異分野との協働を通して、専門知識を活用しながら、社会の複合的な問題を提起しながら、解決のための実践的な方向性を示すことができる。
- D) **知識・理解の実践的場面の活用**：芸術工学に対する感性と、他分野との融合も視野に入れ、総合的な設計能力でグローバルな世界での豊かな生活の実現に貢献することができる。
デザインの社会実装・ビジネス戦略の実践・評価・分析を通して起業や実践を行うための方法論を構築できる。

自コースのマーカーが付された科目以外は、展開科目となる



芸術工学府 開設科目	I. デザイン科学系統	<p>講義</p> <p>環境化学特論 熱環境学特論 聴覚心理学特論 聴覚生理学特論 時間知覚特論 音声生成特論</p> <p>演習</p> <p>応用人間工学 生活機能支援科学特論 環境人間工学特論 生理人類学特論 脳・行動生理学特論A, B 感性科学特論 統計情報学 視覚心理学特論 色彩科学特論 心理学的思考法特別演習 コンピュータサイエンス特論 時間生物学 数理モデリングA, B 分子生物学</p> <p>共通</p> <p>芸術工学演習（デザイン科学系統） → 系統別 修士論文中間審査</p>	講義・演習	自らの分野にとらわれず専門性を深化させ	学修目標 A)・B) の達成に対応
	II. デザイン工学系統	<p>講義</p> <p>ITとスマート行政+社会 サーバサイドプログラミング メカニカルエンジニアリング 建築構造学特論 環境材料学特論 環境心理学特論 音声情報学特論 音響制御特論 音響Looking forward to seeing you! 音響イメージング特論 音響信号処理特論 音響環境学特論 音環境評価特論</p> <p>演習</p> <p>デザイン認知論 人間情報工学 機能工学デザイン 生体模倣工学 リーガルデザイン 視覚メディア設計特論 視覚環境知能設計特論 画像情報伝達システム設計特論 コンピュータグラフィックス特論 メカニクスデザイン特論 メディアサービス特論 バーチャルリアリティ特論 Curriculum and Management for Design Education (隔年開講) Design in General Education (隔年開講) 生体模倣工学 バイオマテリアルエンジニアリング</p> <p>共通</p> <p>芸術工学演習（デザイン工学系統） → 系統別 修士論文中間審査</p>			
	III. 設計・制作系統	<p>講義</p> <p>建築計画特論 建築構法計画特論 環境保全学特論 景観生態学特論 ランドスケープデザイン特論</p> <p>演習</p> <p>シリアスゲームデザイン1,2 コネクティッドデザイン デザインイノベーション ストラテジック・サービス・デザイン HCIデザイン1,2 エクスペリエンス (UX) デザイン アート・シンキング インクルーシブデザイン ソサエタルデザイン ソーシャル・システム・デザイン 音響芸術特論 作曲学特論 サウンドデザイン特論 パブリックデザイン コンテキストデザイン レジリエンスデザイン メディアアート表現 視覚記号特論 グラフィックデザイン特論 映像コンテンツデザイン特論 映像表現史特論 造形芸術特論 現代アート実践 生命とアート 情報編集デザイン スペキュラティブデザイン (隔年) デザイン・シビック (隔年) サスティナブルデザイン</p> <p>共通</p> <p>芸術工学演習（設計・制作系統） → 系統別 修士論文中間審査</p>			
	IV. 文化・社会デザイン系統	<p>講義</p> <p>知的財産法1,2 日本建築史特論 西洋建築史特論 文化財学特論 環境政策特論 環境人類学特論 環境文化特論 音楽社会文化特論 聴覚文化論特論 言語学特論 環境リスクマネジメント デザイン哲学 美術史</p> <p>演習</p> <p>プロデューサー原論 デザインマネジメント デザインマーケティング デザインプロジェクトマネジメント ブランドビジネスデザイン デザイン産業事情1, 2 (QBS)リーダーシップ論 (QREC)デザイン思考 (QREC)リンスターアップ演習1-4 民族音楽学特論 コミュニケーションデザイン論 ライフスケープデザイン 演劇学特論 アート&リサーチ 文化政策 マルチモーダル・コミュニケーション特論 アーツマネジメント 共生社会デザイン論 イメージ感性論</p> <p>共通</p> <p>芸術工学演習（文化・社会デザイン系統） → 系統別 修士論文中間審査</p>			
	共通系科目	<p>コース内で複数の系統に関連する科目・サーティフィケートプログラムに係る科目など</p> <p>SD特別プロジェクトI-VI 環境デザインプロジェクトA,B ランドスケープデザインプロジェクト ストラテジックアーキテクトプロジェクトA, B グローバル・アーキテクト・プロジェクト アーキテクト・インターンシップ, II 建築インターンシップ 音響設計特別講話 輪講 ホール工学技術特論 ホール工学技術演習 ホールマネジメントエンジニアリングプロジェクトI-IV 人間生活デザイン特論 メディアデザインプレゼンテーション演習</p> <p>修士研究関係科目・スタジオプロジェクト科目・その他</p> <p>芸術工学特別研究 I-VI 芸術工学プレゼンテーション演習 スタジオプロジェクトI-A, B スタジオプロジェクトII-A, B スタジオプロジェクトIII-A, B スタジオプロジェクトIV-A, B デザインと日本A, B アカデミックイングリッシュ インターンシップ-III 芸術工学特別プロジェクトI-III 設置の趣旨等を記載した書類(資料)-1</p>			

芸術工学府 芸術工学専攻 修士課程

▶ 育成する人材像

科学技術と芸術的感性を融合する「技術の人間化」という「芸術工学」の理念を継承しつつ、「モノ・コト・ビジョン」へ拡大する新しいデザイン領域に対する意識と人文、社会、自然にまたがる広い知識を基盤とする「高次のデザイナー」

▶ ディプロマ・ポリシー

- ・芸術工学の基本・基礎を十分に理解し、学修目標を達成 → **修士（芸術工学）**
- ・実社会において指導的立場を果たし得る能力を修得した者
- ・アントレプレナーシップやデザイン実務に関する専門知識を修得 → **修士（デザインストラテジー）**
- ・デザインとビジネスに関する修士研究に取り組んだ者

《学修目標》

- A) 主体的な学び・協働**
デザインに関わる深い専門的知識と豊かな教養を背景とし、自ら問題を見出し、創造的・批判的に吟味・検討しながら、幅広い分野の課題に実践的に取り組むことができる。
- B) 知識・理解**
芸術工学の基盤となる具体的知識や概念、考え方、方法について十分に理解し、コースごとの専門性ととどまらない普遍的なデザインのリテラシー、方法論を説明することができる。
アントレプレナーシップやデザイン実務に関する専門知識を理解して説明することができる。
- C-1, C-2) 知識・理解の応用（適用・分析）と新しい知見の創出（創造・評価）**
異分野との協働を通して、専門知識を総合的に活用しながら、社会の複合的な課題を提起し、解決のための実践的な方向性を示すことができる。
- D) 知識・理解の実践的場面での活用**
芸術工学に対する感性と他分野との融合も視野に入れた高度な専門的知識と総合的な設計能力で、グローバルな世界での豊かな生活の実現に貢献。デザインの社会実装、ビジネス戦略の実践・評価・分析を通して起業や実践を行うための方法論を構築できる。

▶ カリキュラム・ポリシー

- ・分野横断的なデザイン教育を実現するためのコース間の障壁を下げた科目群による教育実践
- ・少ない必修単位と、コース内、コース間における共通の性質を持つ科目の配置
- ・総合的なデザイン教育を実現する4つの系統

- デザイン科学系統**：デザインに関連する物事の原理、仕組みを追求
- デザイン工学系統**：デザインに関連する技術を開発
- 設計・制作系統**：具体的な形、仕組み、やり方を作る
- 文化・社会デザイン系統**：デザインに関連する文化・社会のあり方を研究



▶ アドミッション・ポリシー

- ・芸術工学に関連する高度な専門知識を修得し、社会の課題を発見・提起でき、かつ解決・実践する力を修得するために、人文、社会、自然にまたがる知識、論理的な思考能力、芸術的感性を有する。
- ・広い視野に立って異なる専門領域や価値観・文化が異なる者と協力・連携しながら課題解決へ向かう力を修得するために必要な、国際性、多様性に対する好奇心・配慮、豊かな寛容性と柔軟性を有する。
- ・自らの強み、経験、専門的知識を有効的に活用し、新しいデザイン領域を開拓・先導するために必要な自己・社会分析力、柔軟な思考力・対応力、創造的意欲、行動力を有する。

芸術工学府 芸術工学専攻 博士後期課程

▶ 育成する人材像

工学や技術に関する科学的知識、人間や社会に対する理解、芸術の持つ創造性から構成する芸術工学の総合性を基盤とし、国際的にも通用するデザイン学の新しい潮流を先導し、指導的立場に立つ学識を持つ研究者

▶ ディプロマ・ポリシー

- ・芸術工学に関する専門的知識を十分に理解し、学修目標を達成 → **博士（芸術工学）**
- ・新しい課題を設定して解決する国際的水準の独自性のある成果 → **博士（工学）**
- ・特に技術等に関する研究が工学的にみて十分な成果である場合

《学修目標》

- A) 主体的な学び・協働**
デザイン学領域及び関連分野を含む諸科学の全般にわたって広く深い知識と高い関心を有し、デザイン学領域を先導していく意欲がある。
- B) 知識・理解**
デザイン学領域に関する卓越した専門的知識及び技能を有し、すぐれた学問的素養と卓越した論理的思考力、柔軟な想像力や豊かな表現力を兼ね備え、自らの専門性ととどまらない普遍的なデザインへのアプローチ手法、方法論を十分に説明することができる。
- C-1, C-2) 知識・理解の応用（適用・分析）と新しい知見の創出（創造・評価）**
芸術工学分野の深い専門的知識を統合し、さらに異分野との協働を通して、問題を分析・解釈・制御・構成できる。さらに社会の複合的な課題を定義し、その問題解決のための実践的な方向性を示すことができる。
- D) 知識・理解の実践的場面での活用**
芸術工学に対する感性と他分野との融合も視野に入れた高度な専門的知識と総合的な設計能力で、グローバルな世界での豊かな生活の実現に貢献。

▶ カリキュラム・ポリシー

- ・デザインに関する修士課程レベルの知識、技術を基盤としつつ学術的に深化を進める
- ・大学院課程の集大成である博士論文を執筆する
- ・アカデミック、企業など、所属を問わずデザイン分野で世界を先導する研究者を養成するためのカリキュラム

研究指導科目

- ・拡大を続けるデザイン分野に対応し、諸科学の全般にわたる広く深い知識を提供

論文作成科目

- ・自らが研究を企画し、必要な調査分析の計画案を他の学生教員と共有する

狭い専門性に閉じることのないようにコースの垣根を無くし、自らの問題解決能力と創造的能力を高めるために自主性を重んじた履修システム

▶ アドミッション・ポリシー

- ・卓越した論理力と思考力を有し、自らが課題を発見し、それらを解決しうる高い能力を有する。
- ・専門分野及び隣接分野における学術研究に対する高い関心と目的意識、かつ、倫理観を身に付ける姿勢を有する。
- ・世界が抱える課題に関心を持ち、国際的水準の研究の推進と国際的な場で研究成果を発信できる外国語能力を備えている。

国立大学法人九州大学教員の定年に関する規程

平成16年度九大就規第12号
 施行：平成16年4月1日
 最終改正：平成27年3月30日
 （平成26年度九大就規第13号）

第1条 この規程は、国立大学法人九州大学就業通則（平成16年度九大就規第1号）第15条第1項の規定に基づき、国立大学法人九州大学に勤務する教員の定年について定めるものとする。

第2条 教員の定年は、65歳とする。

2 定年による退職の日は、定年に達した日以後における最初の3月31日とする。

第3条 前条第1項の規定にかかわらず、次の各号のいずれかに該当する者の定年は、70歳とする。

- (1) 文化勲章又はノーベル賞を授与された者
- (2) 総長が前号に掲げる賞に相当すると認める賞を授与された者

附 則

1 この規程は、平成16年4月1日から施行する。

2 第2条第1項の規定にかかわらず、生年月日が次表の左欄に掲げる年月日に該当する教員の定年は、同表右欄に掲げる年齢とする。

生年月日	定年年齢
昭和16年4月2日～昭和22年4月1日	63歳
昭和22年4月2日～昭和24年4月1日	64歳

附 則（平成26年度九大就規第13号）

この規程は、平成27年4月1日から施行する。

入学から修了までのスケジュール（芸術工学専攻・修士課程）

1年次	項目	指導内容等	備考
4月	指導教員の決定 研究題目届の提出	研究テーマの検討	
4月	履修ガイダンス（年間分） 履修登録	履修指導	
4～8月	研究指導 （芸術工学特別研究Ⅰ）	修士論文の研究テーマの絞り込み	
4～8月	前期授業履修	コースコア科目、スタジオプロジェクト科目等	
10月	履修登録	履修指導	
10～2月	研究指導 （芸術工学特別研究Ⅱ）	修士論文研究に関する発表・討議、経過報告、中間発表会に向けた準備等	
10～2月	後期授業履修	コースコア科目、スタジオプロジェクト科目等	
2月～	研究中間発表	研究発表の指導 芸術工学演習	コースによっては2年次春学期に実施
2年次	内容	指導内容	備考
4月	履修ガイダンス（年間分） 履修登録	履修指導	
4～8月	研究指導 （芸術工学特別研究Ⅲ）	論文の論旨と執筆の進行状況、文献・資料収集の状況、データの整理の仕方、考察の方法などについて、準備の段階から完成に至る段階まで各段階に応じて助言	
4～8月	前期授業履修	コースコア科目、スタジオプロジェクト科目等	
10～2月	研究指導 （芸術工学特別研究Ⅳ）	修士論文に関する発表・討議、経過報告、修士論文発表会に向けた準備等	
10～2月	後期授業履修	コースコア科目、スタジオプロジェクト科目等	
1月	修士論文審査申請	修士論文審査委員の選出（論文審査委員会）	
2月	最終発表会	修士論文審査会（発表）	
3月	修了合否判定	単位修得状況及び論文審査結果より合否判定・修士学位授与の判定	
3月	修士課程修了 学位記授与		

入学から修了までのスケジュール（芸術工学専攻・博士後期課程）

1年次	項目	指導内容等	備考
4月	指導教員の決定 研究題目届の提出	研究テーマの検討	
4月	履修ガイダンス（年間分） 履修登録	履修指導	
4月～	研究指導 （リサーチプロジェクトⅠ）	博士論文研究推進のために、自己の分野に関連したテーマ設定、調査、分析を行い、主指導教員および指導教員グループでのディスカッションにより、研究の深化を図る。また、自らの研究テーマに基づく調査、解析の結果を整理して、プレゼンテーションの準備を進め、主指導教員や共同研究者とのディスカッションにより研究の深化を図る。	
年4回程度	研究企画セミナー	日本人学生及び留学生が、専攻やコースを超えて集い、英語で相互に研究発表及び研究討議を行う。	
	中間発表会		時期は研究室により異なる。
2月	研究経過報告書の提出	学会発表、論文投稿状況等の確認	
2年次	内容	指導内容等	備考
4月	履修ガイダンス（年間分） 履修登録	履修指導	
4月～	研究指導 （リサーチプロジェクトⅡ）	博士論文研究と関連しつつも直接的には異なる分野において、テーマ設定、調査、分析を行い、指導教員グループ並びに異分野の研究者とのディスカッションにより、研究の深化を図る。また、自らの研究テーマに基づく調査、解析の結果を整理して、プレゼンテーションの準備を進め、主指導教員や共同研究者とのディスカッションにより研究の深化を図る。	
年4回程度	研究企画セミナー	日本人学生及び留学生が、専攻やコースを超えて集い、英語で相互に研究発表及び研究討議を行う。	
	中間発表会		時期は研究室により異なる
2月	研究経過報告書の提出	学会発表、論文投稿状況等の確認	

3年次	内容	指導内容等	備考
4月	履修ガイダンス（年間分） 履修登録	履修指導	
4月～	研究指導 （リサーチプロジェクトⅢ）	自己に関連する分野と異なる分野におけるテーマ設定、調査、分析を比較し、主指導教員や指導教員グループとのディスカッションを通して、研究分野の融合・横断を図る。	
年4回程度	研究企画セミナー	日本人学生及び留学生が、専攻やコースを超えて集い、英語で相互に研究発表及び研究討議を行う。	
10月	博士論文予備審査申請	予備審査委員の選出（予備審査委員会）	
11月	博士論文予備審査実施		
12月	博士論文予備審査結果通知		
1月	博士論文審査申請	論文受理 論文調査委員の選出（論文調査委員会）	
1月～2月	博士論文審査	論文調査委員会による論文調査及び最終試験の実施	
3月	修了合否判定	単位修得状況及び論文審査結果より合否判定・博士学位授与の判定	
3月	博士後期課程修了 学位記授与		

【履修モデル①】

対象コース	ストラテジックデザインコース		学 位	修士（デザインストラテジー）		
養成する人材像	デザインストラテジーに関わる多様な関係性と方向性を的確に把握・構想・実践、それらを評価・分析でき、さらにビジネス知識やアントレプレナーシップも踏まえた価値提案を実践できる人材					
活躍が期待される分野	企業、行政などにおけるストラテジック・デザイナー、デザイン・リサーチャー					
年次 科目区分	系統等	修士課程 1 年次		修士課程 2 年次		修得 単位数
		前期	後期	前期	後期	
修士研究関連科目 (18)		芸術工学特別研究 I 4	芸術工学特別研究 II 4 芸術工学演習 2	芸術工学特別研究 III 4	芸術工学特別研究 IV 4	18
コア科目 (6)	科学系 工学系 設計・制作系 文化・社会デザイン系 コース共通系	プロデューサー原論 1 デザインマネジメント 1 デザインマーケティング 1 知的財産法 I 1	デザイン産業事情 I 1 デザイン産業事情 II 1			6
展開科目 (16)	科学系 工学系 設計・制作系 文化・社会デザイン系 コース共通系 芸術工学府共通系	シリアスゲームデザイン I 1 シリアスゲームデザイン II 1 (QREC) デザイン思考 1 (QBS) リーダーシップ論 2 SD特別プロジェクト III (ストラテジックデザイン) 2	コネクティッドデザイン 1 SD特別プロジェクト IV (ストラテジックデザイン) 2	(QREC) リーンスタートアップ演習 I 1 (QREC) リーンスタートアップ演習 II 1 SD特別プロジェクト V (ソーシャルデザイン) 2 スタジオプロジェクト I-A 2		16
修得単位数		15	11	10	4	40
学位論文指導		(研究題目決定) → (中間発表) → (学位論文作成)・(学位取得)				

【修了要件】40単位以上（コア科目：6単位以上、展開科目：16単位以上、修士研究関連科目：18単位以上）

【履修モデル②】

対象コース	環境設計コース（ランドスケープ）				学 位	修士（芸術工学）						
養成する人材像	環境の価値を評価し将来へ継承するためにサステナブルな建築・景観・社会システムをデザインする専門性を修得し、環境の維持向上に貢献しうる人材											
活躍が期待される分野	建築・造園・都市計画・文化振興・環境政策等の行政職、建築・造園・景観等のデザイナー											
科目区分	年 次	系統等	修士課程 1 年次				修士課程 2 年次		修得 単位数			
			前期		後期		前期			後期		
修士研究関連科目（18）			芸術工学特別研究Ⅰ	4	芸術工学特別研究Ⅱ	4	芸術工学特別研究Ⅲ	4	芸術工学特別研究Ⅳ	4	18	
コア科目（6）		科学系									6	
		工学系										
		設計・制作系	景観生態学特論	1								
		文化・社会デザイン系	ランドスケープデザイン特論	1								
展開科目（16）		文化・社会デザイン系	環境人類学特論	2							16	
		コース共通系	環境デザインプロジェクトA	2								
		科学系										
		工学系										
		設計・制作系			環境保全学特論	1					16	
		文化・社会デザイン系			デザイン哲学	1	国際環境政策特論	2				
		コース共通系	ランドスケープデザインプロジェクト	4	環境デザインプロジェクトB	2	文化財学特論	2				
		芸術工学府共通系			スタジオプロジェクトⅣ-B	2	スタジオプロジェクトⅠ-A	2			40	
		修得単位数		14		12		10		4		
学位論文指導			(研究題目決定)		→ (中間発表)		→ (学位論文作成)・(学位取得)					

【修了要件】40単位以上（コア科目：6単位以上、展開科目：16単位以上、修士研究関連科目：18単位以上）

【履修モデル③】

対象コース	環境設計コース（建築設計）	学 位	修士（芸術工学）
養成する人材像	環境の価値を評価し将来へ継承するためにサステナブルな建築・景観・社会システムをデザインする専門性を修得し、環境の維持向上に貢献しうる人材		
活躍が期待される分野	建築・造園・都市計画・文化振興・環境政策等の行政職、建築・造園・景観等のデザイナー		

科目区分	年 次	系統等	修士課程 1 年次		修士課程 2 年次		修得 単位数
			前期	後期	前期	後期	
修士研究関連科目（18）			芸術工学特別研究Ⅰ 4	芸術工学特別研究Ⅱ 4 芸術工学演習 2	芸術工学特別研究Ⅲ 4	芸術工学特別研究Ⅳ 4	18
コア科目（6）		科学系					6
		工学系					
		設計・制作系	建築計画特論 1				
			景観生態学特論 1 建築構法計画特論 1				
		文化・社会デザイン系		日本建築史特論 1			
コース共通系	環境デザインプロジェクトA 2						
展開科目（16）		科学系					16
		工学系	環境心理学特論 1				
		設計・制作系					
		文化・社会デザイン系		西洋建築史特論 1			
		コース共通系	ストラテジックアーキテクト プロジェクトA 4	ストラテジックアーキテクト プロジェクトB 4	グローバル・アーキテクト・プロジェクト 4		
芸術工学府共通系			スタジオプロジェクトⅠ-A 2				
修得単位数			14	12	6	8	40
学位論文指導			（研究題目決定） → （中間発表） → （学位論文作成）・（学位取得）				

【修了要件】40単位以上（コア科目：6単位以上、展開科目：16単位以上、修士研究関連科目：18単位以上）

【履修モデル④】

対象コース		音響設計コース（展開型）				学 位		修士（芸術工学）				
養成する人材像		音に関する芸術工学的感性を持ち、音響設計に関連する芸術、科学、技術的な側面を統合して、音に関する芸術文化の創造を実現する高次の設計家										
活躍が期待される分野		実演芸術家、文化振興・環境政策等の行政職、放送・音楽関連業の音響デザイナー										
科目区分	年 次	系統等	修士課程 1 年次				修士課程 2 年次				修得 単位数	
			前期		後期		前期		後期			
修士研究関連科目（18）			芸術工学特別研究Ⅰ	4	芸術工学特別研究Ⅱ	4	芸術工学特別研究Ⅲ	4	芸術工学特別研究Ⅳ	4	18	
コア科目（6）		科学系									6	
		工学系										
		設計・制作系										
		文化・社会デザイン系										
		コース共通系	輪講	2	ホール工学技術特論	2						
			音響設計特別講話	2								
展開科目（16）		科学系									16	
		工学系	音響信号処理特論	2								
		設計・制作系	リーガルデザイン	1								
			造形芸術特論	1	メディアアート表現	1	生命とアート	1	現代アート実践	1		
		文化・社会デザイン系					アート&リサーチ	1				
		コース共通系										
芸術工学府共通系	スタジオプロジェクトⅠ-A	2	スタジオプロジェクトⅢ-A	2	スタジオプロジェクトⅠ-B	2	スタジオプロジェクトⅢ-B	2				
修得単位数			14		11		9		6	40		
学位論文指導			(研究題目決定) → (中間発表) → (学位論文作成)・(学位取得)									

【修了要件】40単位以上（コア科目：6単位以上、展開科目：16単位以上、修士研究関連科目：18単位以上）



【履修モデル⑤】

対象コース		音響設計コース（深化型）		学 位		修士（芸術工学）	
養成する人材像		音に関する芸術工学的感性を持ち、音響設計に関連する芸術、科学、技術的な側面を統合して、人間に適合した音環境の創出を実現する高次の設計家					
活躍が期待される分野		電機・自動車工業・建築・放送・音響通信機器等の企業の音響技術者、研究者					
科目区分	年 次	系統等	修士課程 1 年次		修士課程 2 年次		修得 単位数
			前期	後期	前期	後期	
修士研究関連科目（18）			芸術工学特別研究Ⅰ 4	芸術工学特別研究Ⅱ 4 芸術工学演習 2	芸術工学特別研究Ⅲ 4	芸術工学特別研究Ⅳ 4	18
コア科目（6）		科学系					6
		工学系	音環境評価特論 2				
		設計・制作系					
		文化・社会デザイン系					
展開科目（16）		科学系		聴覚生理学特論 2 時間知覚特論 2			16
			工学系	音響制御特論 2	音響環境学特論 2		
		音響信号処理特論 2					
		音響工学特論 2					
		設計・制作系					
		文化・社会デザイン系	音楽社会文化特論 2				
コース共通系							
芸術工学府共通系				スタジオプロジェクトⅠ-B 2			
修得単位数			18	12	6	4	40
学位論文指導			(研究題目決定) → (中間発表) → (学位論文作成)・(学位取得)				

【修了要件】40単位以上（コア科目：6単位以上、展開科目：16単位以上、修士研究関連科目：18単位以上）

【履修モデル⑥】

対象コース	人間生活デザインコース（縦断型）	学 位	修士（芸術工学）
養成する人材像	人間の特性や高度な科学技術を基盤に、生活の在り方を俯瞰的に捉え構想し、その実現に向けて応用することができる人材。具体的には、人間の生理的・形態的・行動的・心理的特性、人間の感性や創造性を踏まえ生活の在り方の創造に向けて応用かつ統合できる人材、安全安心で魅力的な生活を実現するための最先端の科学的知見を有する人材		
活躍が期待される分野	家電・自動車・家具などのメーカー、空間・建築・都市計画関連、情報関連、官公庁などの行政機関など		

科目区分	年 次	系統等	修士課程 1 年次		修士課程 2 年次		修得 単位数
			前期	後期	前期	後期	
修士研究関連科目（18）			芸術工学特別研究Ⅰ 4	芸術工学特別研究Ⅱ 4 芸術工学演習 2	芸術工学特別研究Ⅲ 4	芸術工学特別研究Ⅳ 4	18
コア科目（6）		科学系	応用人間工学 1	生理人類学特論 1			6
		工学系	生活機能支援科学特論 1				
		設計・制作系	環境人間工学特論 1				
		文化・社会デザイン系					
		コース共通系	人間生活デザイン特論 2				
展開科目（16）		科学系	脳・行動生理学特論A 1	感性科学特論 1			16
		工学系	脳・行動生理学特論A 1				
		設計・制作系	デザイン認知論 1				
		文化・社会デザイン系	機能工学デザイン 1				
		コース共通系		レジリエンスデザイン 1	パブリックデザイン 1		
		芸術工学府共通系	芸術工学特別プロジェクトⅠ 1	芸術工学特別プロジェクトⅡ 1	芸術工学特別プロジェクトⅢ 1	芸術工学特別プロジェクトⅣ 1	
			スタジオプロジェクトⅠ-A 2		スタジオプロジェクトⅠ-B 2		
修得単位数			17	10	8	5	40
学位論文指導			（研究題目決定）  （中間発表）  （学位論文作成）・（学位取得）				

【修了要件】40単位以上（コア科目：6単位以上、展開科目：16単位以上、修士研究関連科目：18単位以上）

【履修モデル⑦】

対象コース	人間生活デザインコース（横断型：感性・行動科学）				学 位	修士（芸術工学）					
養成する人材像	ヒトの脳と行動や感性の関係を理解し、人の行動や感性の関係を科学的に探究し、人間生活を豊かにすることに資することのできる人材										
活躍が期待される分野	感性科学分野の研究職										
科目区分	年 次	系統等	修士課程 1 年次				修士課程 2 年次		修得 単位数		
			前期		後期		前期	後期			
修士研究関連科目（18）			芸術工学特別研究Ⅰ	4	芸術工学特別研究Ⅱ	4	芸術工学特別研究Ⅲ	4	芸術工学特別研究Ⅳ	4	18
コア科目（6）		科学系	脳・行動生理学特論A	1	感性科学特論	1					6
			脳・行動生理学特論B	1	生理人類学特論	1					
		工学系									
		設計・制作系									
		文化・社会デザイン系									
		コース共通系	人間生活デザイン特論	2							
展開科目（16）		科学系	統計情報学	1							16
			視覚心理学特論	1							
		工学系	デザイン認知論	1			人間情報工学	1			
							環境心理学特論	1			
		文化・社会デザイン系	コミュニケーションデザイン論Ⅰ	1	デザイン哲学	1	イメージ感性論	1			
		コース共通系									
芸術工学府共通系	芸術工学特別プロジェクトⅠ	1	芸術工学特別プロジェクトⅡ	1	芸術工学特別プロジェクトⅢ	1	芸術工学特別プロジェクトⅣ	1			
	スタジオプロジェクトⅠ-A	2			スタジオプロジェクトⅠ-B	2					
修得単位数			15		10		10		5	40	
学位論文指導			（研究題目決定） → （中間発表） → （学位論文作成）・（学位取得）								

【修了要件】40単位以上（コア科目：6単位以上、展開科目：16単位以上、修士研究関連科目：18単位以上）

【履修モデル⑧】

対象コース	人間生活デザインコース（クロス型：創造性研究）	学 位	修士（芸術工学）
養成する人材像	創造の主体・客体・場・過程に関わる人的特性を捕足・モデル化し、構想・定義した生活の在り方の創造へと架橋できる人材		
活躍が期待される分野	創造性分野の研究職の他、教員、コンサルタント、ファシリテーター、調停等非訟分野の専門職など、望ましい生活の在り方を当事者らとともに構想・定義し、人や関係性の科学的特性を踏まえつつ、その実現に向けた当事者らの創造性や行動が発現するよう働きかける役割（ナッジデザイン）が期待される分野		

科目区分	年 次	系統等	修士課程 1 年次		修士課程 2 年次		修得 単位数
			前期	後期	前期	後期	
修士研究関連科目（18）			芸術工学特別研究Ⅰ 4	芸術工学特別研究Ⅱ 4 芸術工学演習 2	芸術工学特別研究Ⅲ 4	芸術工学特別研究Ⅳ 4	18
コア科目（6）		科学系	脳・行動生理学特論A 1	感性科学特論 1			6
		工学系	デザイン認知論 1				
			人間情報工学 1				
		設計・制作系					
		文化・社会デザイン系					
コース共通系	人間生活デザイン特論 2						
展開科目（16）		科学系	脳・行動生理学特論B 1				16
			統計情報学 1				
		工学系	リーガルデザイン 1				
		設計・制作系	コンテキストデザイン 1	レジリエンスデザイン 1	スペキュラティブデザイン 1		
					デザイン・シビック 1		
		文化・社会デザイン系			アート&リサーチ 1		
		コース共通系					
芸術工学府共通系	芸術工学特別プロジェクトⅠ 1 スタジオプロジェクトⅠ-A 2	芸術工学特別プロジェクトⅡ 1	芸術工学特別プロジェクトⅢ 1 スタジオプロジェクトⅠ-B 2	芸術工学特別プロジェクトⅣ 1			
修得単位数		16	9	10	5	40	
学位論文指導		（研究題目決定） → （中間発表） → （学位論文作成）・（学位取得）					

【修了要件】40単位以上（コア科目：6単位以上、展開科目：16単位以上、修士研究関連科目：18単位以上）

【履修モデル⑨】



対象コース	メディアデザインコース（ディレクター）	学 位	修士（芸術工学）
養成する人材像	論理的な思考能力と美的感性の涵養を通じて、先導的なメディアテクノロジーの応用および芸術文化の創造に関わる、国際的視野を持った高度なクリエイターや研究者		
活躍が期待される分野	番組ディレクター、CMディレクター		

科目区分	年 次	系統等	修士課程 1 年次		修士課程 2 年次		修得単位数
			前期	後期	前期	後期	
修士研究関連科目（18）			芸術工学特別研究Ⅰ 4	芸術工学特別研究Ⅱ 4 芸術工学演習 2	芸術工学特別研究Ⅲ 4	芸術工学特別研究Ⅳ 4	18
コア科目（6）		科学系					6
		工学系		メディアサービス特論 1	バーチャルリアリティ特論 1		
		設計・制作系	視覚記号特論 1 グラフィックデザイン特論 1	メディアアート表現 1			
		文化・社会デザイン系	マルチモーダル・コミュニケーション特論 1				
		コース共通系					
展開科目（16）		科学系					16
		工学系	メカニクスデザイン特論 1	コンピュータグラフィックス特論 1			
		設計・制作系	映像コンテンツデザイン特論 1 映像表現史特論 1		造形芸術特論 1		
		文化・社会デザイン系			演劇学特論 1		
		コース共通系	芸術工学特別プロジェクトⅠ 1	芸術工学特別プロジェクトⅡ 1	芸術工学特別プロジェクトⅢ 1	芸術工学特別プロジェクトⅣ 1	
		芸術工学府共通系	スタジオプロジェクトⅠ-A 2	インターンシップⅠ 1	インターンシップⅡ 1 スタジオプロジェクトⅠ-B 2		
修得単位数			13	11	11	5	40
学位論文指導			（研究題目決定） → （中間発表） → （学位論文作成）・（学位取得）				

【修了要件】40単位以上（コア科目：6単位以上、展開科目：16単位以上、修士研究関連科目：18単位以上）

【履修モデル⑩】

対象コース	メディアデザインコース（情報デザイン分野）	学 位	修士（芸術工学）
養成する人材像	論理的な思考能力と美的感性の涵養を通じて、先導的なメディアテクノロジーの応用および芸術文化の創造に関わる、国際的視野を持った高度なクリエイターや研究者		
活躍が期待される分野	情報デザイン分野（ネットワークエンジニア、UXデザイナー、サイエンスコミュニケーター、ビジュアルジャーナリストなどの分野で活躍するデザイナー、エンジニア、ディレクター、教育者）		

科目区分	年 次	系統等	修士課程 1 年次		修士課程 2 年次		修得 単位数
			前期	後期	前期	後期	
修士研究関連科目（18）			芸術工学特別研究Ⅰ 4	芸術工学特別研究Ⅱ 4 芸術工学演習 2	芸術工学特別研究Ⅲ 4	芸術工学特別研究Ⅳ 4	18
コア科目（6）		科学系	コンピュータサイエンス特論 1				6
		工学系		メディアサービス特論 1 コンピュータグラフィックス特論 1			
		設計・制作系	視覚記号特論 1 グラフィックデザイン特論 1	メディアアート表現 1			
		文化・社会デザイン系 コース共通系					
展開科目（16）		科学系					16
		工学系		視覚メディア設計特論 1 画像情報処理システム設計特論 1	バーチャルリアリティ特論 1	メカニクスデザイン特論 1	
		設計・制作系					
		文化・社会デザイン系 コース共通系					
		芸術工学府共通系	芸術工学特別プロジェクトⅠ 1 デザインと日本A 2 デザインと日本B 2	芸術工学特別プロジェクトⅡ 1 スタジオプロジェクトⅢ-A 2	芸術工学特別プロジェクトⅡ 1 スタジオプロジェクトⅠ-A 2	芸術工学特別プロジェクトⅣ 1	
修得単位数		12	14	9	5	40	
学位論文指導		（研究題目決定）  （中間発表）  （学位論文作成）・（学位取得）					

【修了要件】40単位以上（コア科目：6単位以上、展開科目：16単位以上、修士研究関連科目：18単位以上）

【履修モデル⑪】

対象コース	メディアデザインコース（研究者、開発者）	学 位	修士（芸術工学）
養成する人材像	論理的な思考能力と美的感性の涵養を通じて、先導的なメディアテクノロジーの応用および芸術文化の創造に関わる、国際的視野を持った高度なクリエイターや研究者		
活躍が期待される分野	メディアコミュニケーション研究者、開発者、プロジェクトマネージャー		

科目区分	年 次	系統等	修士課程 1 年次		修士課程 2 年次		修得 単位数
			前期	後期	前期	後期	
修士研究関連科目（18）			芸術工学特別研究Ⅰ 4	芸術工学特別研究Ⅱ 4 芸術工学演習 2	芸術工学特別研究Ⅲ 4	芸術工学特別研究Ⅳ 4	18
コア科目（6）		科学系	視覚心理学特論 1 コンピュータサイエンス特論 1	色彩科学特論 1			6
		工学系	メカニクスデザイン特論 1	視覚メディア設計特論 1 コンピュータグラフィックス特論 1			
		設計・制作系					
		文化・社会デザイン系					
		コース共通系					
展開科目（16）		科学系				心理学的思考法特別演習 1	16
		工学系		メディアサービス特論 1 視覚メディア設計特論 1 画像情報処理システム設計特論 1	バーチャルリアリティ特論 1		
		設計・制作系		メディアアート表現 1			
		文化・社会デザイン系					
		コース共通系					
芸術工学府共通系		芸術工学特別プロジェクトⅠ 1	芸術工学特別プロジェクトⅡ 1	芸術工学特別プロジェクトⅡ 1	芸術工学特別プロジェクトⅣ 1	40	
		アカデミックイングリッシュ 2	インターンシップⅠ 1	インターンシップⅡ 1			
		スタジオプロジェクトⅠ-A 2					
修得単位数		12	15	7	6		
学位論文指導		（研究題目決定） → （中間発表） → （学位論文作成）・（学位取得）					

【修了要件】40単位以上（コア科目：6単位以上、展開科目：16単位以上、修士研究関連科目：18単位以上）

【履修モデル⑫】

対象コース	未来共生デザインコース（科学系）		学 位	修士（芸術工学）			
養成する人材像	生命情報科学、生命工学、アート・デザイン、デザイン文化の各分野の知識と方法論を身につけ、多面的で創造性に富んだアプローチで未来社会のビジョンを描き、それを実現するために、斬新な手法で設計、計画し、実装に導くデザインスキルを持つ挑戦的なマインドの人材						
活躍が期待される分野	生命・情報分野に関わる研究者、技術者、政策・行政職、アーティスト等						
科目区分	年 次	系統等	修士課程 1 年次		修士課程 2 年次		修得 単位数
			前期	後期	前期	後期	
修士研究関連科目（18）			芸術工学特別研究Ⅰ 4	芸術工学特別研究Ⅱ 4 芸術工学演習 2	芸術工学特別研究Ⅲ 4	芸術工学特別研究Ⅳ 4	18
コア科目（6）		科学系	時間生物学 1	分子生物学 1			6
			統計情報学 1				
			数理モデリングA 1				
		工学系	バイオマテリアルエンジニアリング 1	生体模倣工学 1			
		設計・制作系					
文化・社会デザイン系							
コース共通系							
展開科目（16）		科学系			数理モデリングB 1		16
		工学系			脳・行動生理学特論A 1		
		設計・制作系	現代アート実践 1	サステナブルデザイン 1	人間情報工学 1	スペキュラティブデザイン 1	
			生命とアート 1	情報編集デザイン 1			
		文化・社会デザイン系	共生社会デザイン論 1		アート&リサーチ 1		
			環境リスクマネジメント 1				
		コース共通系					
芸術工学府共通系	芸術工学特別プロジェクトⅠ 1 スタジオプロジェクトⅠ-A 2	芸術工学特別プロジェクトⅤ 2					
修得単位数		15	12	9	4	40	
学位論文指導		(研究題目決定) → (中間発表) → (学位論文作成)・(学位取得)					

【修了要件】40単位以上（コア科目：6単位以上、展開科目：16単位以上、修士研究関連科目：18単位以上）

【履修モデル⑬】

対象コース	未来共生デザインコース（文化政策系）	学 位	修士（芸術工学）
養成する人材像	生命情報科学、生命工学、アート・デザイン、デザイン文化の各分野の知識と方法論を身につけ、多面的で創造性に富んだアプローチで未来社会のビジョンを描き、それを実現するために、斬新な手法で設計、計画し、実装に導くデザインスキルを持つ挑戦的なマインドの人材		
活躍が期待される分野	芸術表現を用いて社会的課題に取り組む、アーティスト、デザイナー、研究者、政策・行政職、活動家等		

科目区分	年 次	系統等	修士課程 1 年次		修士課程 2 年次		修得 単位数
			前期	後期	前期	後期	
修士研究関連科目（18）			芸術工学特別研究Ⅰ 4	芸術工学特別研究Ⅱ 4 芸術工学演習 2	芸術工学特別研究Ⅲ 4	芸術工学特別研究Ⅳ 4	18
コア科目（6）		科学系					6
		工学系					
		設計・制作系	現代アート実践 1	情報編集デザイン 1 サステナブルデザイン 1			
		文化・社会デザイン系	アート&リサーチ 1 共生社会デザイン論 1	アーツマネジメント 1			
展開科目（16）		科学系					16
		工学系		Design in General Education 1			
		設計・制作系		インクルーシブデザイン 1 メディアアート表現 1	ソサエタルデザイン 1		
		文化・社会デザイン系	イメージ感性論 1	文化政策 1	プロデューサー原論 1 知的財産法Ⅰ 1		
		コース共通系					
		芸術工学府共通系	スタジオプロジェクトⅠ-A 2 スタジオプロジェクトⅠ-B 2	芸術工学特別プロジェクトⅤ 2		スタジオプロジェクトⅡ-A 2	
		修得単位数		12	15	9	4
学位論文指導			(研究題目決定) → (中間発表) → (学位論文作成)・(学位取得)				

【修了要件】40単位以上（コア科目：6単位以上、展開科目：16単位以上、修士研究関連科目：18単位以上）

【履修モデル⑭】

対象コース	未来共生デザインコース（デザイン実践系）	学 位	修士（芸術工学）					
養成する人材像	生命情報科学、生命工学、アート・デザイン、デザイン文化の各分野の知識と方法論を身につけ、未来社会のビジョンを描き、それを実装するために自ら実践の現場に立ち、ディレクションできる知識とスキルを持つデザイン専門人材							
活躍が期待される分野	企業や自治体のビジョンデザイナー、社会デザイナー、社会起業家、アーティスト等							
科目区分	年 次	系統等	修士課程 1 年次		修士課程 2 年次		修得 単位数	
			前期	後期	前期	後期		
修士研究関連科目（18）			芸術工学特別研究Ⅰ 4	芸術工学特別研究Ⅱ 4 芸術工学演習 2	芸術工学特別研究Ⅲ 4	芸術工学特別研究Ⅳ 4	18	
コア科目（6）		科学系	統計情報学 1				6	
		工学系		生体模倣工学 1				
		設計・制作系		情報編集デザイン 1				
				レジリエンスデザイン 1				
		文化・社会デザイン系	アート&リサーチ 1	アーツマネジメント 1				
コース共通系								
展開科目（16）		科学系					16	
		工学系						
		設計・制作系	生命とアート 1	メディアアート表現 1	デザイン・シビック 1			
			スペキュラティブデザイン 1					
			現代アート実践 1					
		文化・社会デザイン系						
		コース共通系						
芸術工学府共通系	スタジオプロジェクトⅠ-A 2		スタジオプロジェクトⅣ-A 2	スタジオプロジェクトⅡ-A 2				
		スタジオプロジェクトⅠ-B 2	スタジオプロジェクトⅣ-B 2	インターンシップⅠ 1				
修得単位数		13	15	8	4	40		
学位論文指導		(研究題目決定) → (中間発表)		(学位論文作成) ・ (学位取得)				

【修了要件】40単位以上（コア科目：6単位以上、展開科目：16単位以上、修士研究関連科目：18単位以上）

【履修モデル⑮】

学位	博士（芸術工学）
----	----------

養成する人材像	科学技術と芸術的感性を融合させた学問分野としての「芸術工学」に関する十分な専門的知識を持ち、自ら新しい課題を設定、解決する国際的水準の研究能力を持つ研究者
活躍が期待される分野	大学等の研究機関や企業の研究施設における芸術工学の分野をリードする研究

年次 科目区分	博士後期課程 1 年次		博士後期課程 2 年次		博士後期課程 3 年次		修得 単位数
	前期	後期	前期	後期	前期	後期	
論文作成関連科目 (4)	リサーチ研修Ⅰ 2	リサーチ研修Ⅱ 2					4
研究指導科目 (6)	リサーチプロジェクトⅠ 2		リサーチプロジェクトⅡ 2		リサーチプロジェクトⅢ 2		6
博士論文研究	(研究題目決定) → (中間発表)		→ (中間発表) →		(中間発表) → (学位論文作成)・(学位取得)		
修得単位数	4	2	2		2		10

【修了要件】10単位以上（論文作成関連科目：4単位以上、研究指導科目：6単位以上）および博士論文研究

【履修モデル⑬】

学位	博士（工学）
----	--------

養成する人材像	科学技術と芸術的感性を融合させた学問分野としての「芸術工学」に関する十分な専門的知識とデザインに関連する高度な工学的知識を持ち、自ら新しい課題を設定、解決する国際的水準の技術的研究能力を持つ研究者
活躍が期待される分野	大学等の研究機関や企業の研究施設における芸術工学に関連する技術、工学の分野をリードする研究

年次 科目区分	博士後期課程 1 年次		博士後期課程 2 年次		博士後期課程 3 年次		修得 単位数
	前期	後期	前期	後期	前期	後期	
論文作成関連科目 (4)	リサーチ研修 I 2	リサーチ研修 II 2					4
研究指導科目 (6)	リサーチプロジェクト I 2		リサーチプロジェクト II 2		リサーチプロジェクト III 2		6
博士論文研究	(研究題目決定) → (中間発表)		→ (中間発表) →		(学位論文作成) ・ (学位取得)		
修得単位数	4	2	2		2		10

【修了要件】 10単位以上（論文作成関連科目：4単位以上、研究指導科目：6単位以上）および博士論文研究

九州大学人を対象とする生命科学・医学系研究に関する規程

令和3年度九大規程第48号

制定：令和3年6月30日

(趣旨)

第1条 九州大学(以下「本学」という。)において実施する人を対象とする生命科学・医学系研究(以下「生命・医学系研究」という。)に関する取扱いは、関係法令、人を対象とする生命科学・医学系研究に関する倫理指針(令和3年文部科学省・厚生労働省・経済産業省告示第1号。以下「指針」という。)その他別に定めのあるもののほか、この規程の定めるところによる。

(定義)

第2条 この規程における用語の意義は、指針において定めるところによる。

(基本方針)

第3条 本学において生命・医学系研究を実施する者は、次に掲げる事項を基本方針として、研究を進めなければならない。

- (1) 社会的及び学術的意義を有する研究を実施すること。
- (2) 研究分野の特性に応じた科学的合理性を確保すること。
- (3) 研究により得られる利益及び研究対象者への負担その他の不利益を比較考量すること。
- (4) 独立した公正な立場にある倫理審査委員会の審査を受けること。
- (5) 研究対象者への事前の十分な説明を行うとともに、自由な意思に基づく同意を得ること。
- (6) 社会的に弱い立場にある者への特別な配慮をすること。
- (7) 研究に利用する個人情報等を適切に管理すること。
- (8) 研究の質及び透明性を確保すること。

(総長の責務及び権限等の委任)

第4条 総長は、本学における生命・医学系研究が適正に実施されるよう、必要な監督を行うことについての責任を有する。

2 総長は、生命・医学系研究の円滑かつ機動的な実施のため、指針に定める「研究機関の長」の権限及び事務について、次に掲げる事項を除き、当該生命・医学系研究を実施する部局長(九州大学病院の患者を対象とする生命・医学系研究にあつては、病院長。以下「部局長」という。)に委任するものとする。ただし、総長が自らその権限及び事務を行うことを妨げない。

- (1) 指針第5の2の(7)
- (2) 指針第6の3の(3)
- (3) 指針第18及び19
- (4) 指針第20の2の(1)から(5)、(8)及び(9)

(部局長の責務)

第5条 部局長は、当該部局における生命・医学系研究の実施に関する統括的な責任を有し、実施を許可した研究が適正に実施されるよう監督しなければならない。

- 2 部局長は、当該研究がこの指針及び研究計画書に従い、適正に実施されていることを必要に応じて確認するとともに、研究の適正な実施を確保するために必要な措置をとらなければならない。
- 3 部局長は、研究の実施に携わる関係者に、研究対象者の生命、健康及び人権を尊重して研究を実施することを周知徹底しなければならない。
- 4 部局長は、実施している又は過去に実施した生命・医学系研究について、指針に適合していないことを知った場合には、速やかに倫理審査委員会の意見を聴き、必要な対応を行うとともに、不適合の程度が重大であるときは、その対応の状況・結果を総長に報告しなければならない。

(研究者等の基本的責務)

第6条 研究者等は、法令、指針等を遵守し、当該研究の実施について倫理審査委員会の審査及び研究機関の長の許可を受けた研究計画書に従って、適正に研究を実施しなければならない。

2 研究者等は、研究の実施に先立ち、研究に関する倫理並びに当該研究の実施に必要な知識及び技術に関する教育・研修を受けなければならない。また、研究期間中も適宜継続して、教育・研修を受けなければならない。

(研究の適正な実施)

第7条 生命・医学系研究を実施しようとする場合には、その業務を統括する者として、研究責任者を定めなければならない。

2 研究責任者は、生命・医学系研究の実施に当たり、あらかじめ研究計画書を作成しなければならない。また、研究計画書の内容と異なる研究を実施しようとするときは、あらかじめ研究計画書を変更しなければならない。

3 研究責任者は、研究の実施の適否について、倫理審査委員会の意見を聴いた後に、その結果及び当該倫理審査委員会に提出した書類、その他部局長が求める書類を部局長に提出し、当該研究の実施について、許可を受けなければならない。

4 研究責任者は、指針及びこの規程に基づき、生命・医学系研究を統括し、研究者等に必要な指導を行う等、第13条により定められた手順書等に従って、生命・医学系研究の適正な管理に当たらなければならない。

5 総長は、研究の実施の適正性若しくは研究結果の信頼を損なう若しくはそのおそれのある事実を知り、又は情報を得た場合には、国立大学法人九州大学の適正な研究活動に関する規程（平成21年度九大就規第14号）に基づき取り扱うものとする。

(多機関共同研究)

第8条 多機関共同研究を実施する研究責任者は、当該多機関共同研究として実施する研究に係る業務を代表するため、当該研究責任者の中から、研究代表者を選任しなければならない。

2 本学に所属する研究代表者は、多機関共同研究を実施しようとする場合には、各共同研究機関の研究責任者の役割及び責任を明確にした上で一の研究計画書を作成又は変更しなければならない。

3 前項で規定する研究代表者は、原則として、多機関共同研究に係る研究計画書について、一の倫理審査委員会による一括した審査を求めるものとする。

(研究結果の説明)

第9条 研究者等は、研究対象者等からインフォームド・コンセントを受ける際には、研究により得られた結果等の説明に関する方針を説明し、理解を得なければならない。その上で、研究対象者等が当該研究により得られた結果等の説明を希望しない場合には、その意思を尊重しなければならない。

2 研究者等は、研究対象者の同意がない場合には、研究対象者の研究により得られた結果等を研究対象者以外の人に対し、説明してはならない。

3 前2項の規定に関わらず、研究責任者が、第13条により定められた手順書等に従って必要と判断したときは、その結果等を研究対象者等に説明することができる。

(倫理審査委員会)

第10条 部局長は、生命・医学系研究実施の可否等を審査するため、その諮問機関として、倫理審査委員会を設置しなければならない。ただし、当該部局において倫理審査委員会を設置することが困難な場合には、他の部局に設置された倫理審査委員会をもってこれに代えることができる。

2 倫理審査委員会は、部局長が合同で設置することができる。

3 部局長は、倫理審査委員会を設置した場合、速やかに総長へ報告するとともに、指針で定め

るところにより倫理審査委員会報告システム（以下「システム」という。）で公表しなければならない。

- 4 倫理審査委員会は、学際的かつ多元的な視点から、様々な立場からの委員によって、公正かつ中立的な審査を行えるよう、適切に構成され、かつ、運営されなければならない。
- 5 研究責任者は、第1項の規定にかかわらず、指針第17の4の（1）に基づいて設置された学外の倫理審査委員会に審査を依頼することができる。
- 6 倫理審査委員会は、他の研究機関が実施する生命・医学系研究について審査を行うことができる。
- 7 部局長は、指針で定めるところにより、倫理審査委員会の開催状況及び審査の概要についてシステムで公表した場合は、速やかに公表事項を総長に報告するものとする。

（個人情報の保護及び権限等の委任）

第11条 総長は、指針第18及び第19に定める個人情報の保護に関する措置についての権限及び事務を九州大学個人情報管理規程（平成16年度九大規程第160号。以下「個人情報管理規程」という。）に規定する個人情報保護管理者に委任するものとする。

- 2 前項の規定により委任を受けた者は、指針及び個人情報管理規程に基づき、その取り扱う個人情報の適切な管理のために必要な措置を講じなければならない。
- 3 第1項の規定により委任を受けた者は、指針に基づき、死者について特定の個人を識別することができる情報についても前項と同様、適切な管理のために必要な措置を講じなければならない。

（保有個人情報の開示等に係る請求の取扱い）

第12条 総長は、研究対象者等から、保有する個人情報の開示、訂正及び利用停止等に係る請求があった場合は、指針及び九州大学個人情報開示等取扱規程（平成16年度九大規程第161号）に基づき取り扱うものとする。

（手順書）

第13条 部局長は指針に従い、次に掲げる事項について手順書を定めるものとする。

- (1) 人体から取得された試料及び情報等の保管に関すること。
- (2) 侵襲を伴う研究を実施しようとする場合において、重篤な有害事象が発生した際に研究者等が実施すべき事項に関すること。
- (3) その他必要な事項に関すること。

（指針及びこの規程の遵守）

第14条 生命・医学系研究に従事するすべての者は、指針及びこの規程を遵守しなければならない。

（雑則）

第15条 この規程に定めるもののほか、この規程の実施に関し必要な事項は、部局長が別に定める。

附 則

- 1 この規程は、令和3年6月30日から施行する。
- 2 九州大学人を対象とする医学系研究に関する規程（平成26年度九大規程第112号）及び九州大学ヒトゲノム・遺伝子解析研究に関する規程（平成16年度九大規程第162号）は、廃止する。
- 3 この規程の施行の際、現に廃止前の九州大学人を対象とする医学系研究に関する規程又は九州大学ヒトゲノム・遺伝子解析研究に関する規程により実施中の生命・医学系研究については、指針において定められた範囲において、なお従前の例によることができる。

九州大学遺伝子治療等臨床研究に関する規程

平成27年度九大規程第39号
制定：平成27年10月30日
最終改正：平成29年5月30日
(平成29年度九大規程第18号)

(趣旨)

第1条 九州大学（以下「本学」という。）において実施する遺伝子治療等臨床研究に関する取扱いは、関係法令、遺伝子治療等臨床研究に関する指針（平成27年厚生労働省告示第344号。以下「指針」という。）その他別に定めのあるもののほか、この規程の定めるところによる。

(定義)

第2条 この規程における用語の意義は、指針において定めるところによる。

(総長の責務及び権限等の委任)

第3条 総長は、本学における遺伝子治療等臨床研究の実施に関する最終的な責任を有する。

2 総長は、遺伝子治療等臨床研究の円滑かつ機動的な実施のため、指針に定める「研究機関の長」の権限及び事務について、次に掲げる事項を除き、当該遺伝子治療等臨床研究を実施する部局長（九州大学病院の患者を対象とする遺伝子治療等臨床研究にあっては、病院長）（以下「部局長」という。）に委任するものとする。ただし、総長が自らその権限及び事務を行うことを妨げない。

- (1) 指針第十六の二の6
- (2) 指針第十六の三の4
- (3) 指針第二十七及び二十八
- (4) 指針第二十九の二の1から5、8及び9

(部局長の責務)

第4条 部局長は、当該部局における遺伝子治療等臨床研究の実施に関する統括的な責任を有し、実施を許可した研究が適正に実施されるよう監督しなければならない。

- 2 部局長は、研究者に、被験者の生命、健康及び人権を尊重して研究を実施することを周知徹底しなければならない。
- 3 部局長は、指針第十六の四の3、4及び三十一の四の3に基づき厚生労働大臣へ報告する場合、当該報告の内容について、総長にも報告しなければならない。

(研究責任者の責務)

第5条 遺伝子治療等臨床研究を実施しようとする場合には、その業務を統括する者として、研究責任者を定めなければならない。

- 2 研究責任者は、遺伝子治療等臨床研究の実施に当たり、あらかじめ研究計画書を作成し、部局長の許可を得なければならない。研究計画書を変更しようとする場合も同様とする。
- 3 研究責任者は、指針及びこの規程に基づき、遺伝子治療等臨床研究を統括し、研究者に必要な指導を行う等遺伝子治療等臨床研究の適正な管理に当たらなければならない。

(倫理審査委員会)

第6条 部局長は、遺伝子治療等臨床研究実施の可否等を審査するため、その諮問機関として、委員会を設置しなければならない。ただし、当該部局において委員会を設置することが困難な場合には、他の部局に設置された委員会をもってこれに代えることができる。

- 2 委員会は、部局長が合同で設置することができる。
- 3 部局長は、委員会を設置した場合、速やかに総長へ報告するとともに、指針で定めるところにより倫理審査委員会報告システム（以下「システム」という。）で公表しなければならない。
- 4 委員会は、学際的かつ多元的な視点から、様々な立場からの委員によって、公正かつ中立的な審査を行えるよう、適切に構成され、かつ、運営されなければならない。
- 5 部局長が必要と認める場合には、第1項の規定にかかわらず、指針第二十一の四の1に基づ

いて設置された学外の倫理審査委員会に審査を依頼することができる。

- 6 委員会は、他の研究機関が実施する遺伝子治療等臨床研究について審査を行うことができる。
- 7 部局長は、指針で定めるところにより、委員会の開催状況及び審査の概要についてシステムで公表した場合は、速やかに公表事項を総長に報告するものとする。

(個人情報の保護及び権限等の委任)

第7条 総長は、指針第二十七及び第二十八に定める個人情報の保護に関する措置についての権限及び事務を九州大学個人情報管理規程（平成16年度九大規程第160号。以下「個人情報管理規程」という。）に規定する個人情報保護管理者に委任するものとする。

- 2 前項の規定により委任を受けた者は、指針及び個人情報管理規程に基づき、その取り扱う個人情報の適切な管理のために必要な措置を講じなければならない。
- 3 第1項の規定により委任を受けた者は、指針に基づき、死者について特定の個人を識別することができる情報についても前項と同様、適切な管理のために必要な措置を講じなければならない。

(保有個人情報の開示等に係る請求の取扱い)

第8条 総長は、本人等から、保有する個人情報の開示、訂正及び利用停止等に係る請求があった場合は、指針及び九州大学個人情報開示等取扱規程（平成16年度九大規程第161号）に基づき取り扱うものとする。

(指針及びこの規程の遵守)

第9条 遺伝子治療等臨床研究に従事するすべての者は、指針及びこの規程を遵守しなければならない。

(雑則)

第10条 この規程に定めるもののほか、この規程の実施に関し必要な事項は、部局長が別に定める。

附 則

- 1 この規程は、平成27年11月1日から施行し、平成27年10月1日から適用する。
- 2 九州大学遺伝子治療臨床研究に関する規程（平成21年度九大規程第95号）は、廃止する。
- 3 この規程の施行の際現に廃止前の九州大学遺伝子治療臨床研究に関する規程等の規定によつてした手続その他行為であつて、この規程に相当の規定があるものについては、当該規程に基づき手続等を行ったものとみなす。

附 則（平成29年度九大規程第18号）

この規程は、平成29年5月30日から施行する。

国立大学法人九州大学の適正な研究活動に関する規程

平成 21 年度九大就規第 14 号
施行：平成 21 年 12 月 1 日
最終改正：令和 3 年 5 月 27 日
(令和 3 年度九大就規第 4 号)

国立大学法人九州大学研究不正防止規程(平成 18 年度九大就規第 10 号)の全部を改正する。
(目的)

第 1 条 この規程は、国立大学法人九州大学(以下「本学」という。)における研究者の研究活動上の責務、研究倫理教育の実施、不正行為の防止、不正行為に関する申立て等への対応、不正行為が行われた場合の措置その他必要な事項を定めることにより、本学における適正な研究活動を推進することを目的とする。

(定義)

第 2 条 この規程において、次の各号に掲げる用語の意義は、当該各号の定めるところによる。

(1) 研究者 次に掲げる者をいう。

- イ 教員、学生その他の本学において研究に従事する者
- ロ 本学において研究指導を受ける者
- ハ 本学の施設設備を利用する者
- ニ イからハまでに掲げる者であった者

(2) 不正行為 次に掲げる研究活動上の行為(故意によるものではないことが根拠をもって明らかにされたものを除く。)をいう。

- イ 捏造 存在しないデータ、研究結果等を作成すること。
- ロ 改ざん 研究資料・機器・過程を変更する操作を行い、データ、研究活動によって得られた結果等を真正でないものに加工すること。
- ハ 盗用 他者のアイディア、分析・解析方法、データ、研究結果、論文又は用語を、当該者の了解又は適切な表示なく流用すること。
- ニ その他 虚偽の記述等又はイ、ロ若しくはハに準ずる行為
- ホ 上記の行為の証拠隠滅又は立証妨害をすること。

(3) 競争的研究費等 文部科学省又は文部科学省が所管する独立行政法人から配分される競争的資金を中心とした公募型資金をいう。

(4) 研究機関 競争的研究費等、国立大学法人及び文部科学省所管の独立行政法人に対する運営費交付金、私学助成等の基盤的経費その他の文部科学省の予算の配分又は措置により、所属する研究者が研究活動を行っている全ての機関をいう。

(5) 配分機関 研究機関に対して、競争的研究費等の配分をする機関をいう。

(研究者の責務)

第 3 条 研究者は、本学が定めた研究者のための行動基準(以下「行動基準」という。)、この規程及び関係法令等に従い、適正な研究活動を行わなければならない。

2 研究者は、研究データを一定期間保存し、必要な場合に開示しなければならない。

3 保存又は開示する研究データの内容、保存期間、保存方法及び開示方法等については、データの性質や研究分野の特性を踏まえ、総長が別に定める。

(研究責任者及び監督者の責務)

第 4 条 研究代表者として研究を総括する立場にある者(以下「研究責任者」という。)及び研究者を監督する地位にある者(以下「監督者」という。)は、行動基準、この規程及び関係法令等に従い、適正な研究活動を保持し、不正行為が起こらない健全な研究環境の形成に努めなければならない。

(総長の責務)

第 5 条 総長は、研究者、研究責任者、監督者及び第 7 条に規定する研究倫理教育責任者に対し、

行動基準、この規程及び関係法令等の周知徹底を図るとともに、適正な研究活動を行うための必要な措置を講ずるものとする。

(研究担当理事の責務)

第6条 研究担当理事は、本学における不正行為の防止及び不正行為があった場合の措置等について統括する。

2 研究担当理事が旅行、疾病その他事故等により、その職務を行うことができないときは、総長は、その期間中、その職務を代行させるため、理事のうちから代理者を指名するものとする。

3 研究担当理事は、行動基準に基づき、研究倫理教育その他具体的な対策を策定するとともに、その実施状況を確認し総長に報告するものとする。

(研究倫理教育責任者)

第7条 不正行為を事前に防止し、適正な研究活動を推進するため、研究者に求められる倫理規範を修得等させるための教育（以下「研究倫理教育」という。）を実施する責任者として、各部局に研究倫理教育責任者を置き、各部局の長をもって充てる。

2 研究倫理教育責任者は、研究担当理事の指示に基づき、当該部局における研究活動に関わる全ての研究者に対し、定期的に研究倫理教育を行わなければならない。

3 各部局に、研究倫理教育責任者を補佐するため、研究倫理教育副責任者を複数人置くことができる。

4 研究倫理教育の内容、実施方法等については、研究担当理事が別に定める。

(窓口の設置)

第8条 不正行為に関する申立て若しくは相談又は学会等からの指摘（以下「申立て等」という。）に対応するため、事務局及び部局事務部に研究不正申立窓口（以下「申立窓口」という。）を置く。

2 前項に定めるもののほか、申立てに対応するため、学外の機関等に窓口（以下「学外窓口」という。）を置く。

3 申立窓口及び学外窓口の名称、場所、連絡先、受付の方法等を学内外に公表するものとする。

4 申立窓口及び学外窓口の職員等は、申立て等の事案が自己との利害関係を持つものである場合、当該事案に関与してはならない。

(申立ての方法)

第9条 申立ては、原則として当該申立てを行う者（以下「申立者」という。）の氏名を明らかにした上で、次に掲げる事項を明示した書面等により行わなければならない。

(1) 不正行為を行った疑いがある研究者（以下「被申立者」という。）の氏名

(2) 不正行為の態様及び事案の内容

(3) 不正行為とする科学的・合理的な理由

2 前項の規定にかかわらず、匿名による申立てがあった場合は、当該申立ての内容によっては前項の申立てがあったものとみなし、受け付ける場合がある。

3 第1項及び第2項により申立てがあった事案が、本学が調査を行うべき研究機関に該当しない場合、調査すべき研究機関又は配分機関に当該申立てを回付することができる。また、本学以外の研究機関又は配分機関から回付された申立ては、第1項の申立てがあったとみなすことができる。

4 申立窓口又は学外窓口が受け付けたか否かを申立者が知り得ない方法による申立てがなされた場合は、当該申立者（匿名の申立者を除く。ただし、調査結果が出る前に申立者の氏名が判明した後は顕名による申立者として取り扱う。）に、申立てを受け付けたことを通知するものとする。

5 申立ての意思を明示しない相談を受けた申立窓口はその内容を確認又は精査し、相当の理由があると認めた場合は、相談した者に対して申立ての意思があるかを確認するものとする。

6 不正行為が行われようとしている又は不正行為を求められているという内容の申立て又は相

談を受け付けた申立窓口はその内容を確認又は精査し、研究担当理事に報告するものとする。
なお、学外窓口が当該申立てを受けた場合は、本学において確認又は精査し、研究担当理事に報告するものとする。

- 7 研究担当理事は、相当の理由があると認めた場合は、被申立者に警告を行うことができる。
- 8 申立窓口の責任者は、研究担当理事に申立内容について報告（以下「申立報告」という。）を行うものとする。
- 9 研究担当理事は、申立報告を受けて、申立内容の合理性及び調査可能性等について調査を行う必要がないと認める場合には、その理由を付して、申立者又は指摘を行った研究機関等にその旨を通知するものとする。
- 10 研究担当理事は、前項の通知を行ったときは、総長及び九州大学適正な研究活動推進委員会（以下「委員会」という。）に報告するものとする。

（申立者及び被申立者の取扱い）

第10条 申立てを受け付けるときは、個室での面談、電話、電子メール等を申立窓口の担当職員以外は見聞できないように、適切な方法により、申立内容及び申立者の秘密を守るための方策を講じなければならない。

- 2 申立窓口又は学外窓口に寄せられた申立者、被申立者、申立内容及び調査内容は、調査結果の公表まで、申立者及び被申立者の意に反して調査関係者以外に漏らしてはいけない。
- 3 調査に当たっては、申立者が了承した場合を除き、不正行為に対応する委員会の委員以外の者や被申立者に申立者が特定されないように配慮しなければならない。
- 4 公表するまでに申し立てされた事案が漏えいした場合、申立者及び被申立者の了解を得て、当該事案について公に説明することができる。ただし、申立者又は被申立者の責により漏えいした場合は、この限りでない。
- 5 本学は、悪意（被申立者を陥れるため、又は被申立者が行う研究を妨害するためなど、専ら被申立者に何らかの損害を与えること及び被申立者が所属する研究機関に不利益を与えることを目的とする意思。以下同じ。）に基づく申立てであることが判明しない限り、単に申立てしたことをもって、申立者に対し、解雇、降格、減給その他不利益な取扱いを行わない。
- 6 本学は、相当な理由なしに、単に申立てがなされたことのみをもって、被申立者の研究活動を部分的又は全面的に制限したり、解雇、降格、減給その他不利益な取扱いを行わない。

（申立ての受付によらないものの取扱い）

第11条 第9条第5項による申立ての意思を明示しない相談について、申立ての意思表示がなされない場合においても、本学の判断により当該相談の調査を行うことができる。

- 2 学会等の科学コミュニティや報道により不正行為の疑いが指摘された場合は、第9条第1項の申立てがあったとみなすことができる。
- 3 本学に所属する研究者が不正行為の疑いをインターネット上に掲載されている（不正行為を行ったとする研究者・グループ、不正行為の態様等、研究不正の内容が明示され、かつ、不正とする科学的な合理性のある理由が示されている場合に限る。）場合は、第9条第1項の申立てがあったとみなすことができる。

（予備調査）

第12条 研究担当理事は、申立報告を受けて、申立内容の合理性及び調査可能性等について調査を行う必要があると認める場合には、適正な研究活動推進委員会委員長（以下「委員長」という。）に対し、必要な調査（以下「予備調査」という。）の実施及び適切な対応を指示するものとする。

- 2 予備調査は、委員会の委員のうち委員長が指名する委員が行うものとする。
- 3 委員長は、予備調査のため必要と認める場合は、前項の委員以外の者を加えることができる。
- 4 予備調査は、申立内容の合理性及び調査可能性等について調査するものとする。
- 5 予備調査は、原則として申立受理日又は第9条第2項、第11条第1項、第2項及び第3項

により申立てがあったとみなした日から原則30日以内に終了するものとする。

6 委員長は、予備調査の結果を速やかに研究担当理事に報告するものとする。

(不正行為が明らかな場合等の取扱い)

第12条の2 前条の規定にかかわらず、研究担当理事は、申立報告の内容について不正行為の事実が明らか又は不正行為の蓋然性が極めて高いと認める場合は、予備調査を経ずに、次条に規定する本格的な調査を実施することができるものとする。

(本調査の要否の決定)

第13条 研究担当理事は、申立報告又は第12条第6項の予備調査の報告を受けて、本格的な調査(以下「本調査」という。)が必要か否かについて速やかに決定するものとする。

2 研究担当理事は、本調査を行う必要がないと認める場合には、総長及び委員会に報告するとともに、理由を付して申立者に通知するものとする。この場合、予備調査に係る資料等を保存し、当該事案に係る配分機関等及び申立者の求めに応じ開示するものとする。

3 研究担当理事は、第12条第6項の予備調査の結果の報告を受けて、本調査を行う必要があると認める場合は、委員長に対し、必要な調査の実施を指示するものとする。

4 研究担当理事は、前項により本調査の実施を決定した場合は、申立者、被申立者及び被申立者の所属する部局等の長に通知するとともに、当該事案に係る配分機関等及び文部科学省に報告するものとする。被申立者が本学以外の研究機関に所属している場合は、当該研究機関にも通知するものとする。

(調査部会)

第14条 委員長は、本調査を実施し対策を検討するため、委員会の下に研究不正調査部会(以下「調査部会」という。)を置くものとする。

2 調査部会は、次に掲げる委員をもって組織する。ただし、調査対象となる事案について、特別な事情があると委員長が認める場合には、この限りでない。

(1) 委員会委員である理事、副学長又は副理事のうち総長が指名する者

(2) 関連する部局等の長のうち委員長が指名する者

(3) 委員会の委員のうち委員長が指名する者

(4) 調査対象となる事案の研究分野の学内外の研究者

(5) 弁護士等の学外の有識者

(6) その他委員長が必要と認めたる者

3 前項第5号の委員の数は、調査部会の委員の半数以上でなければならない。

4 調査部会の全ての委員は、調査を公正に行うため、調査対象となる事案の申立者及び被申立者と直接の利害関係を有しない者でなければならない。

5 部会長は、第2項第1号の委員をもって充てる。ただし、委員長が特別な事情があると認める場合は、第2項第3号の委員をもって充てることができるものとする。

(本調査)

第15条 委員長は、調査部会を設置したときは、委員の氏名及び所属を申立者及び被申立者に通知するものとする。

2 申立者及び被申立者は、委員について異議がある場合は、前項の通知を受け取った日の翌日から1週間以内に理由を添えて委員長に異議申立てをすることができる。

3 委員長は、前項の異議が妥当なものと判断した場合は、当該異議に係る委員を交代するものとし、その旨を申立者及び被申立者に通知するものとする。

4 本調査は、当該調査の実施を決定した日から原則30日以内に開始するものとする。

第16条 本調査においては、調査対象となる事案に係る研究活動に関する論文や実験・観察ノート、生データ等の各種資料の精査、関係者からの聴取などにより必要な調査を行うものとする。

2 委員長は、調査部会からの意見を受け、必要と認める場合は次の措置をとることができる。

- (1) 調査対象となる研究活動の一時停止
- (2) 調査対象となる事案に関連する機器、実験記録・資料等の保全
- (3) その他委員長が必要と認めた措置

- 3 本調査においては、被申立者に対し、弁明の機会を与えなければならない。ただし、申立者が悪意に基づく申立てを行った疑いがあると調査部会が認める場合には、申立者に対しても、弁明の機会を与えなければならない。
- 4 研究者は、自身の研究活動に係る不正行為が申し立てられた場合であって、当該不正行為の疑惑を晴らそうとする場合には、自己の責任において、当該研究活動の適正等を科学的根拠を示して説明しなければならない。
- 5 不正行為が行われた可能性を調査するために、調査部会が再実験等により再現性を示すことを被申立者に求める場合又は被申立者自らの意思によりそれを申し出て調査部会がその必要性を認める場合には、合理的に必要と判断される範囲内において、当該再実験等に要する期間及び機会を与えるものとする。この場合においては、調査部会の指導・監督の下に行うものとする。
- 6 当該事案に係る配分機関等からの求めがあった場合、本調査の終了前であっても、調査の中間報告を当該配分機関等に提出するものとする。
- 7 本調査は、本調査開始後、原則150日以内に終了するものとし、調査結果について、委員会に報告するものとする。

(証拠の保全)

第17条 研究担当理事は、申立て等が他機関において行われた研究活動に係る事案である場合、当該機関に対し、申立て等がなされた事案に係る研究活動に関して、証拠となるような資料等を保全するよう依頼するものとする。

- 2 研究担当理事は、他機関において申立て等がなされた事案が本学において行われた研究活動である場合、当該他機関からの依頼に応じ、申立て等がなされた事案に係る研究活動に関して、証拠となるような資料等を保全する措置をとるものとする。

(認定等)

第18条 委員会は、調査部会による本調査の結果を受けた日から30日以内に不正行為等が行われたか否かを認定しなければならない。ただし、調査の過程において、第16条第4項の再実験を行うなど調査に時間を要した場合は、この限りではない。

- 2 前項の認定は、調査により得られた物的・科学的証拠、関係者の証言、被申立者の自認等の諸証拠を総合的に判断して行わなければならない。
- 3 委員会は、不正行為が行われたと認定した場合は、その内容、不正行為に関与した者とその関与の度合、不正行為と認定された研究活動に係る論文等の各著者の当該論文等及び当該研究活動における役割等その他必要な事項について認定するものとする。
- 4 委員会は、不正行為が行われなかったと認定した場合には、第16条第2項の措置を速やかに解除しなければならない。
- 5 委員会は、不正行為が行われなかったと認定した場合であって、調査部会の調査の過程で申立てが悪意に基づくものであると判明した場合は、併せてその旨の認定を行うものとする。
- 6 委員長は、認定結果を取りまとめ、研究担当理事に報告するものとする。
- 7 研究担当理事は、認定結果を確認の上、総長に報告する。
- 8 総長は、認定結果を申立者、被申立者（被申立者以外で不正行為に関与したと認定された者を含む。以下同じ。）及び被申立者の所属する部局等の長に通知するものとする。被申立者が本学以外の研究機関に所属している場合は、当該研究機関にも通知するものとする。
- 9 総長は、認定結果を当該事案の配分機関等及び文部科学省に報告するものとする。
- 10 総長は、必要と認める場合には、認定結果を調査対象に係る研究の関連論文掲載機関及び関連教育研究機関等に通知するものとする。

1 1 総長は、不正行為が行われなかったと認定された場合は、被申立者の教育研究活動の正常化及び名誉回復のために、十分な措置をとるものとする。

(不服申立て)

第19条 不正行為を行ったと認定された被申立者又は悪意に基づく申立てを行ったと認定された申立者は、当該認定に関して不服があるときは、認定に係る通知を受け取った日の翌日から30日以内に書面をもって不服申立てをすることができるものとする。ただし、不服申立てが行える期日内であっても、同一理由による不服申立てを繰り返すことはできない。

2 不服申立てが行われた場合は、研究担当理事が、委員長に対し、再調査の可否に係る審査を指示するものとする。

3 研究担当理事は、不服申立ての趣旨が、新たに専門性を要する判断が必要と判断した場合は、委員会の委員の交代若しくは追加、又は委員会に代えて他の者に審査をさせるものとする。

4 研究担当理事は、不服申立てが行われた場合は、申立者（第18条第5項による認定の場合は、被申立者。以下同じ。）及び被申立者（第18条第5項による認定の場合は、申立者。以下同じ。）の所属する部局等の長に通知するとともに、当該事案に係る配分機関等及び文部科学省に報告するものとする。

5 委員長は、不服申立ての趣旨、理由等を勘案し、再調査を行う必要があると判断したときは、委員会は速やかに再調査を開始するものとする。

6 委員会は、当該再調査を速やかに解決するために、不服申立てを行った者等に協力を要請するものとする。

7 前項の協力要請にもかかわらず、不服申立てを行った者からの協力を得られないときは、委員会は、再調査を打ち切ることができる。

8 委員長は、不服申立ての趣旨が委員会又は調査部会の構成等に関する場合で、その理由が妥当なものとして判断したときは、委員の交代等を行うものとする。

9 不服申立てが行われた場合で、再調査を行う必要がないと委員長が判断したときは、研究担当理事及び総長に報告するものとする。

10 総長は、再調査を行わない理由を付して、不服申立てを行った者及びその所属する部局等の長に通知するとともに、当該事案の配分機関等及び文部科学省に報告するものとする。不服申立てを行った者が認定に伴う各措置の先送りを主な目的とすると委員会が判断するときは、以後の不服申立てを受け付けないことができる。

(不服申立てに係る再調査)

第20条 委員長は、不服申立てがあった場合で、再調査を行う必要があると判断したときは、研究担当理事及び総長に報告するものとする。

2 総長は、再調査を行うことについて、不服申立てを行った者及びその所属する部局等の長に通知するとともに、当該事案の配分機関等及び文部科学省に報告するものとする。

3 委員長は、再調査が開始された日から原則50日以内（第18条第5項による認定の場合は原則30日以内）に不服申立てに係る認定の全部又は一部を取り消すか否かを決定しなければならない。

4 委員長は、認定結果を取りまとめ、研究担当理事に報告するものとする。

5 研究担当理事は、認定結果を確認の上、総長に報告するものとする。

6 総長は、認定結果を申立者、被申立者及び被申立者の所属する部局等の長に通知するとともに、当該事案の配分機関等及び文部科学省に通知するものとする。

7 総長は、必要と認める場合は、認定結果を調査対象に係る研究の関連論文掲載機関及び関連教育研究機関等に通知するものとする。

(公表)

第21条 不正行為等に関する公表は、総長が行うものとする。

2 不正行為が行われたと認定した場合は、調査結果を速やかに公表するものとする。

3 公表する調査結果の内容は、不正行為を行った研究者の氏名、不正行為の内容その他の必要な事項とする。

4 前項に掲げる公表する調査結果の内容のうち、合理的な理由のため公表を控える必要があると認めた場合はこの限りでない。

第22条 不正行為が行われなかったと認定した場合は、原則として、当該認定に係る公表は行わない。ただし、認定前に当該事案が外部に漏洩していた場合又は論文等に故意によるものではない誤りがあった場合は、不正行為が行われなかったことその他の必要な事項を公表するものとする。

2 申立てが悪意に基づき行われたと認定した場合は、原則として、当該申立者の氏名その他の必要な事項を公表するものとする。

(調査への協力)

第23条 申立者、被申立者その他の関係者は、調査に対し、誠実に協力しなければならない。

(秘密保持)

第24条 申立窓口担当者、学外窓口担当者、委員会の委員その他の関係者は、その職務上知り得た情報を他に漏らしてはならない。

(不正行為等に対する措置)

第25条 不正行為が行われたと認定した場合又は申立てが悪意に基づき行われたと認定した場合で、処分又は研究環境の改善を行うことが必要であると認められたときは、総長は、必要な措置を講ずるものとする。

2 不正行為への関与が認定された者及び関与まではしていないが不正行為が認定された論文等の内容について責任を負うと認定された者に対し、総長は、不正行為と認定された論文等の取り下げを勧告するものとする。

附 則

この規程は、平成21年12月1日から施行する。

附 則 (平成22年度九大就規第14号)

この規程は、平成22年12月1日から施行する。

附 則 (平成26年度九大就規第23号)

1 この規程は、平成27年4月1日から施行する。

2 この規程の施行前になされた研究不正の申立ての取扱いについては、なお従前の例による。ただし、この規程の施行の際にこの規程による改正前の国立大学法人九州大学研究不正への対応に関する規程に規定されていた九州大学研究不正防止委員会及び研究不正調査委員会の業務は、それぞれ、この規程による改正後の国立大学法人九州大学の適正な研究活動に関する規程に規定される九州大学適正な研究活動推進委員会及び研究不正調査部会が承継するものとする。

附 則 (平成27年度九大就規第8号)

この規程は、平成27年12月1日から施行する。

附 則 (平成28年度九大就規第19号)

この規程は、平成28年12月1日から施行する。

附 則 (令和3年度九大就規第4号)

この規程は、令和3年6月1日から施行する。

研究倫理教育の実施に関する要項

実施：平成27年4月1日

最終改正：平成31年1月18日

1 趣旨

この要項は、国立大学法人九州大学の適正な研究活動に関する規程（平成21年度九大就規第14号。以下「適正な研究活動規程」という。）第7条第4項に基づき、本学の研究倫理教育の内容及び実施方法等について必要な事項を定めるものとする。

2 研究倫理教育

(1) 研究者を対象とした研究倫理教育

- ① 研究に従事する研究者等に対し、全学的に共通の教材による研究倫理教育（以下「研究者共通教育」という。）を実施する。
- ② 各部局において、研究分野等の特性に応じた研究倫理教育（以下「分野別教育」という。）を実施する。

(2) 学生を対象とした研究倫理教育

- ① 学部学生には、学年等に応じた必要な研究倫理教育を実施する。
- ② 大学院生には、学年等に応じた必要な研究倫理教育を実施するとともに、研究者共通教育を実施する。

3 研究者共通教育

(1) 受講対象者

- ① 受講義務者 受講を必須とし、受講管理が必要な者。
 - ア 教員（特定有期教員等を含む。）
 - イ 研究推進職
 - ウ 技術職員・医療職員のうち研究活動を行う者
 - エ 学術研究員
 - オ 研究補助者（テクニカルスタッフ、研究補助者として雇用する学生、技術補佐員等）
 - カ ア、ウ及びエ以外の身分で、本学において科学研究費助成事業へ申請する者
 - キ 日本学術研究振興会特別研究員のうちSPD、PD、RPD及び外国人特別研究員の身分の者
 - ク 大学院生
 - ケ その他、研究担当理事又は研究倫理教育責任者が必要と認める者

- ② 受講推奨者 受講を推奨するが、受講管理の必要のない者。
- ア 共同研究等により本学において一定期間研究活動を行う学外者
 - イ 学部学生（特に研究室配属後の学部学生）
 - ウ 不正行為に係る申立窓口責任者
 - エ 研究支援関係部署の事務職員
 - オ その他、研究担当理事又は研究倫理教育責任者が必要と認める者

(2) 教育内容等

- ① 教育内容は、研究者等に求められる倫理規範を十分に修得させるものであり、かつ、研究分野によらない共通のものとする。
- ② 教材は、一般財団法人公正研究推進協会（APRIN）（以下「APRIN」という）が作成している「責任ある研究行為ダイジェスト」を使用する。ただし、今後、文部科学省の通知等を踏まえ、必要に応じ見直す。

(3) 受講方法等

- ① 受講対象者は、APRIN の e-learning システム（eAPRIN）により受講する。
- ② 受講義務者は、当該教材を受講後にテストを実施し、一定の点数を超えた場合に受講を修了したとみなす。一定の点数は、当分の間 80 点以上とする。
- ③ 受講義務者は、受講を修了した場合、同システムから発行される受講修了証を所属部局の研究倫理教育責任者に提出する。
- ④ 各部局の研究倫理教育責任者は、受講義務者から提出された受講修了証に基づき受講管理を行うものとし、受講状況を定期的に研究担当理事に報告する。

(4) 受講時期

- ① 受講義務者は、原則 3 年度ごとに受講する。教材等の見直しを行った場合や文部科学省等からの通知等により、受講時期を変更する場合がある。ただし、平成 27 年度については、受講義務者は全員受講するものとする。
- ② 年度途中で採用された教員や昇任した教員等については、着任及び昇任後速やかに受講する。ただし、昇任した教員で昇任した年度に既に受講した者は受講を免除できる。

(5) 他機関からの採用者等に係る研究倫理教育の取扱いについて

本学採用前に在籍していた研究機関等（以下「研究機関等」という。）において、以下の研究倫理教育を採用年度を含め 3 年度以内に受講した者については、本学における研究者共通教育を受けたこととみなす。

ただし、決定に当たっては、教材から出力される受講修了証又は研究機関等が発行する受講証明書を提出させ確認するものとする。

また、当該採用者についての次の受講年度は、修了証等に記載の受講年度後3年度目とする。

(対象教材等)

① eAPRIN の次の教材

ア「責任ある研究行為ダイジェスト」

イ「責任ある研究行為：基盤編」の基本コースである次の単元を全て受講した場合

- ・責任ある研究行為について
- ・研究における不正行為
- ・データの扱い
- ・オーサーシップ
- ・盗用
- ・公的研究資金の取り扱い

② 「科学の健全な発展のために－誠実な科学者の心得－」（日本学術振興会テキスト）

本教材については、研究機関等が教材として導入していること、かつ、受講後の理解度を測るテスト等の結果をもって研究機関等が受講を証明できることを条件とする。

4 分野別教育

- (1) 研究倫理教育責任者は、研究者共通教育に加え、当該部局の研究分野の特性に応じた教育を実施する。受講対象者、教育内容、実施方法等については、各部局で決定する。
- (2) 研究倫理教育責任者は、部局において実施した分野別教育について、定期的に研究担当理事に報告する。

5 学生を対象とした研究倫理教育

学生を対象とした研究倫理教育の実施等については、この要項に定めるもののほか、教育担当理事が必要に応じて別途定める。

6 実施

この要項は、平成27年4月1日から実施する。

附 記

この要項は、平成28年4月1日から実施する。

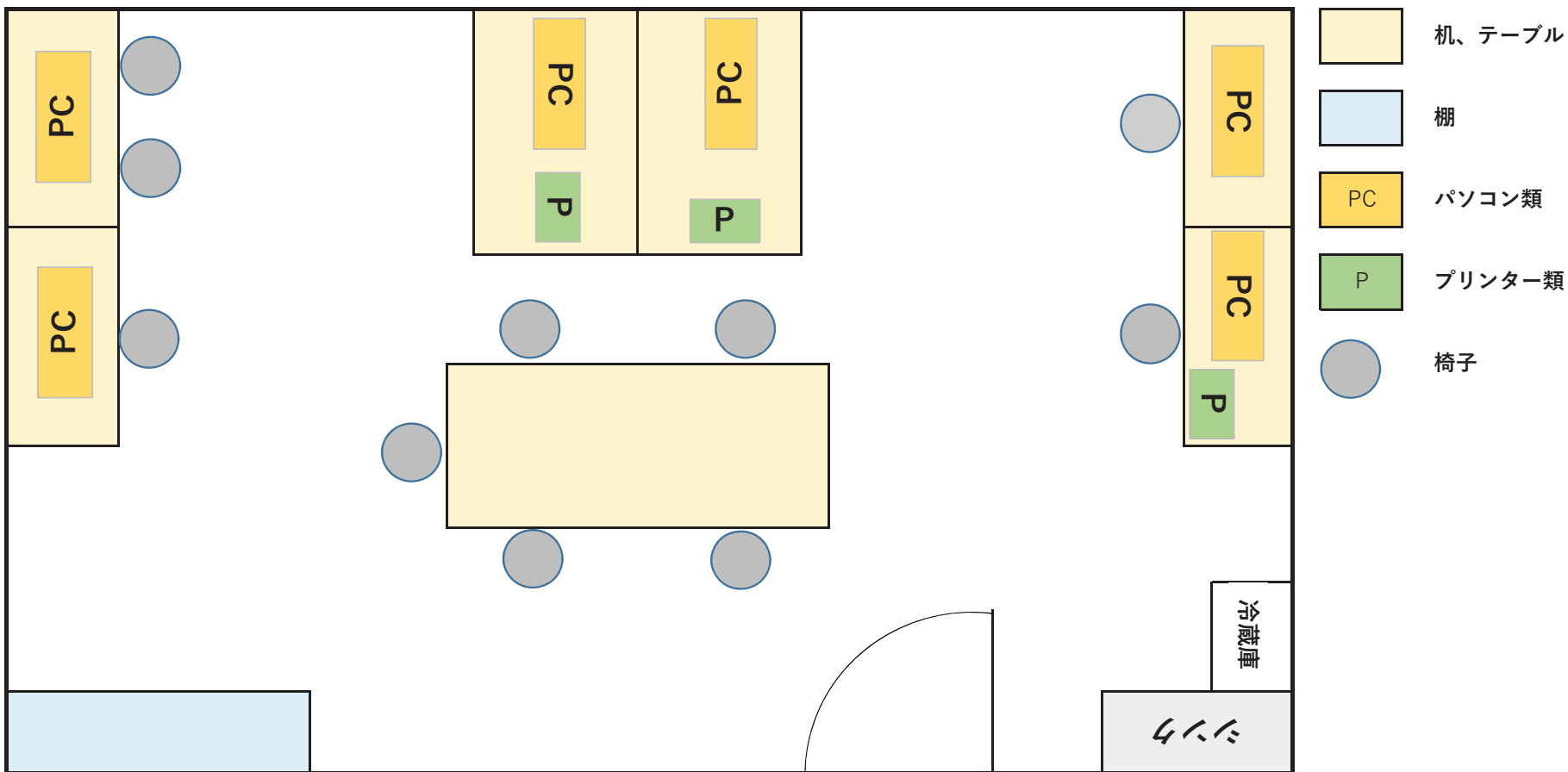
附 記

この要項は、平成29年4月1日から実施する。

附 記

この要項は、平成31年1月18日から実施する。

2号館 2階 208

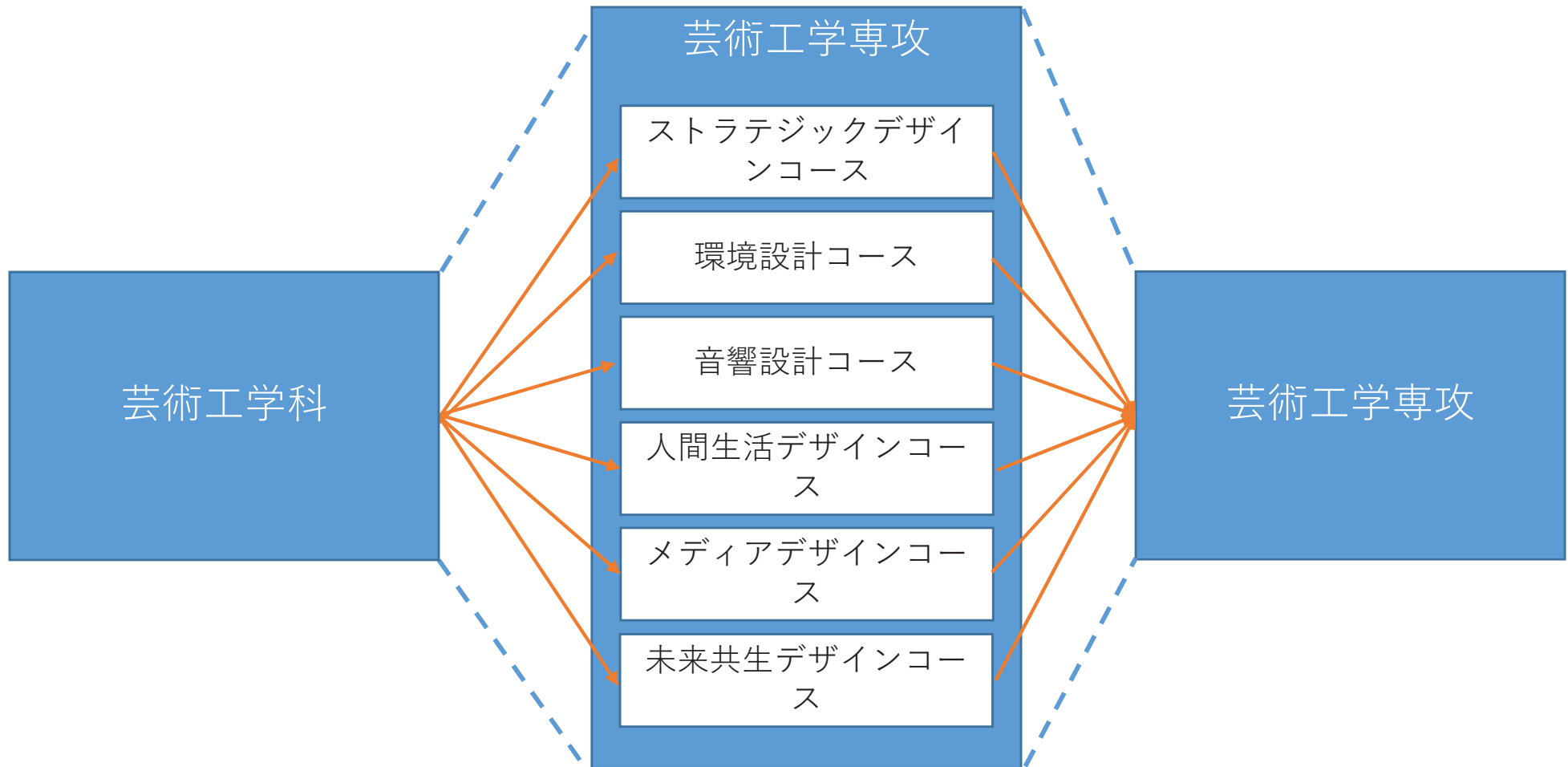


改組後における芸術工学部と芸術工学府との関係性 (学士課程と修士課程と博士後期課程)

学部 (学士課程)

大学院 (修士課程)

大学院 (博士後期課程)



学生の確保の見通し等を記載した書類（目次）

1. 学生の確保の見通し及び申請者としての取組状況	
(1) 学生の確保の見通し	・・・ 1
(2) 学生確保に向けた具体的な取組状況	・・・ 7
2. 人材需要の動向等社会の要請	
(1) 人材の養成に関する目的その他の教育研究上の目的	・・・ 8
(2) 社会的・地域的な人材需要の動向等を踏まえた客観的な根拠	・・・ 9

学生の確保の見通し等を記載した書類

1. 学生の確保の見通し及び申請者としての取組状況

(1) 学生の確保の見通し

ア. 定員充足の見込み

九州大学大学院芸術工学府は、修士課程及び博士後期課程に既設の芸術工学専攻とデザインストラテジー専攻の2専攻を、令和4年4月より芸術工学専攻の1専攻に統合し、「デザイン領域の拡大」や「社会の変化」に対応しうる、デザインの専門分野に特化した人材、これからの社会の動きを理解してデザインの方向性をリードする人材、分野横断的な人材、個別のデザインの成果を社会実装する人材などを育成するための新しいデザイン教育を実施する。さらに修士課程には、社会の求める諸分野においてデザインを実践するプロフェッショナルを養成するための6コースを置く。

改組後の芸術工学専攻修士課程の入学定員は、現行の芸術工学専攻とデザインストラテジー専攻の入学定員を合わせた120名とし(表1参照)、博士後期課程の入学定員も同様に現行の2専攻の入学定員を合わせた30名とする(表2参照)。

表1：修士課程の入学定員



既設の芸術工学府（修士課程）			新設する芸術工学府（修士課程）	
専攻	入学定員		専攻	入学定員
芸術工学専攻	92	芸術工学専攻	120	
デザインストラテジー専攻	28			

表2：博士後期課程の入学定員

既設の芸術工学府（博士後期課程）			新設する芸術工学府（博士後期課程）	
専攻	入学定員		専攻	入学定員
芸術工学専攻	25	芸術工学専攻	30	
デザインストラテジー専攻	5			

修士課程における現行の2専攻制での過去9年間(平成24(2012)年度から令和2(2020)年度まで)の志願者倍率は、学府全体では平均1.60倍となっている。同様に、過去9年間(平成24(2012)年度から令和2(2020)年度まで)の入学者数については、一度、平成27(2015)年度に定員を満たさなかったことがあったものの、次年度には改善され、学府全体の定員充足率は平均1.17となっている。外国人留学生については、志願者数、入学者数共に、平成28(2016)年度より増加傾向にあり、令和2年度には志願者数、入学者数の約3割が外国人留学生となっている。また、過去9年間(平成24(2012)年度から令和2(2020)年度)の推移をみた場合、年度により入学者数の変動はあるものの、毎年度30名程度の外国人留学生の入学が見込まれる。

以上の結果を踏まえて、修士課程においては十分に定員(120名)を確保できる見込みがあると考えられる。

博士後期課程については、現行の2専攻制での過去9年間（平成24（2012）年度から令和2（2020）年度まで）の志願者倍率は学府全体で平均0.73倍、定員充足率については学府全体の平均は0.86となっており、必ずしも高いとは言えない。

つまり、新たな博士後期課程で定員（30名）を充足するためには、年間の入学者を5名程度増加させる必要があるが、以下のような理由で、今回の改組を実施することでほぼ定員を満たす入学増加が見込まれると考えられる。

まず、平成31（2019）年3月29日の経済産業省による「高度デザイン人材」育成の提言に現れているように、研究機関のみならず、現代社会における多様で複雑な諸課題を解決するためには、領域横断的問題解決能力を持ち、自らデザイン研究をリードする指導的な研究人材が求められており、その需要は、今後、高まっていくものと思われる。そして、そのような分野を先導する研究者を育成する博士後期課程への進学者も一定数増えると期待されることがあげられる。実際に、企業向けに行ったアンケート調査では、「芸術工学府の修了生を採用する場合、どのような知識・能力を持つことを期待するか」という質問に対し、最も期待する知識・能力と回答されたのは「企画・開発力」であり、次に期待する知識・能力とされたのは「複数分野にまたがる知識」と「課題解決能力」であった。また、芸術工学府の卒業生及び修了生に対するアンケート調査においても「これからの芸術工学府の学生には、どのような知識・能力が必要か」という質問を行ったところ、最も期待する知識・能力と回答されたのは「複数分野にまたがる知識」であり、次に期待する知識・能力とされたのは「課題解決能力」であった。

次に、現行体制では英語を使用する課程がデザイン人間科学国際コースに限られていたところ、新専攻では国際コースを一般コースに統合し、専攻全体で全科目の英語対応、書類の英語化など日本語能力を必要とせず課程を修了できる体制を整える。そのため、日本語能力によって制限がかかっていた留学生の出願条件が緩和できることとなり、博士後期課程への留学生の進学が一定数増えることが期待されることがあげられる。

具体的に述べると、現在、英語で学位を取れる課程は、芸術工学専攻の4コースのうちデザイン人間科学国際コースの1コースのみであり、過去11年間（平成22（2010）年度から令和2（2020）年度）でデザイン人間科学国際コースには32名の入学者があった。今回の改組で、英語で学位を取れる課程がデザイン人間科学国際コースの1コースのみから現状のデザインストラテジー専攻を含む学府全体（芸術工学専攻4コース+デザインストラテジー専攻）に広がるため、単純な計算はできないものの、5倍間口が広がることになる。デザイン人間科学国際コースで毎年実施している海外におけるリクルーティングには常に100名を超える参加があり、その中には研究テーマが合致しないために、出願をあきらめた学生も一定数いると考えられ、芸術工学府で英語により実施できる研究テーマの幅が広がることによる入学者の増が見込まれる。

このことは、芸術工学府の教員に対する海外からの問い合わせを見ても、英語のみで博士学位が取得できる課程に潜在的な需要があることがわかる。教員への聞き取り調査では、過去2～3年のうちに10名が英語のみの学位取得についての問い合わせを受けたと答えており、デザイン人間科学国際コースのみの現状では条件に合うコースがないため出願を見合わせたり、最近の問い合わせでは制度が変わることを期待して待っていたりするという状態である。

さらに、これまで芸術工学府が開催したワークショップ、短期コース、シンポジウムなどの国際交流プログラムに参加した海外の大学に所属する（していた）学生に英語のみで学位を取得できる課程についてアンケートを依頼したところ104名から回答があった。この中で、入試も含めて日本語能力を問わない学位課程に進学したいかを聞いたところ、104名中50名（48.1%）が「ぜひ進学したい」、20名（19.2%）が「条件が整えば進学したい」、22名（21.2%）が「進学に関心がある」と答えており、潜在的な関心の高さがうかがわれる。

以上のことから、高度なデザイン研究者のニーズの拡大、英語のみによる学位の取得可能性による留学生の増加などが見込まれることから、博士後期課程においても定員（30名）を確保できる見込みである。

イ. 定員充足の根拠となる客観的なデータの概要

○過去9年間における志願者倍率及び定員充足率

[修士課程]

修士課程における現行の2専攻制での過去9年間（平成24（2012）年度から令和2（2020）年度まで）の志願者倍率は、学府全体では1.21倍から1.93倍の間で推移し、平均1.60倍となっている。（図1参照）

同様に、過去9年間（平成24（2012）年度から令和2（2020）年度まで）の定員充足率は学府全体で0.94から1.26の間で推移し、平均は1.17となっている。（図2参照）

【芸術工学府】

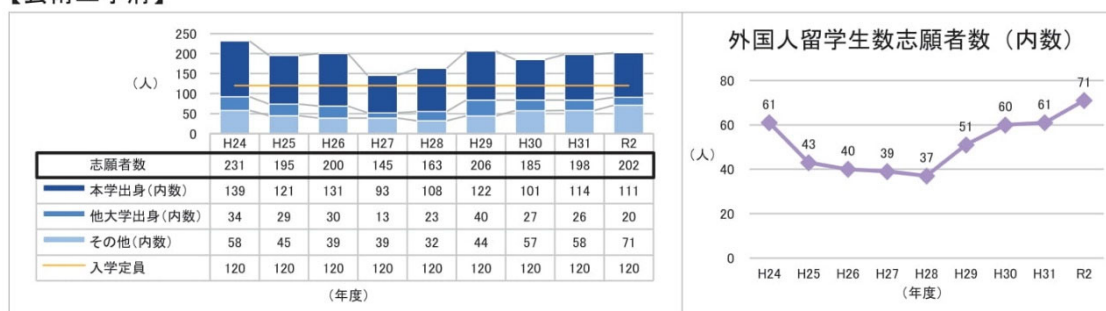


図1 芸術工学府修士課程入学者選抜試験の志願状況推移
（「九州大学 IR データ集 2020 年度版」より）

【芸術工学府】

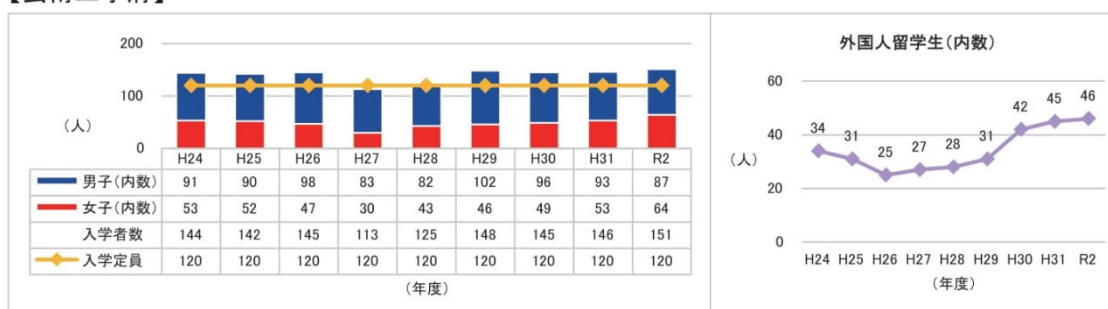


図2 芸術工学府修士課程入学者数推移
（「九州大学 IR データ集 2020 年度版」より）

[博士後期課程]

博士後期課程における現行の2専攻制での過去9年間（平成24（2012）年度から令和2（2020）年度まで）の志願者倍率は、学府全体で0.43倍から0.93倍の間で推移し、平均0.73倍となっている。（図3参照）

同様に、過去9年間（平成24（2012）年度から令和2（2020）年度まで）の定員充足率は学府全体で0.63から1.07の間で推移し、平均は0.86となっている。（図4参照）

【芸術工学府】

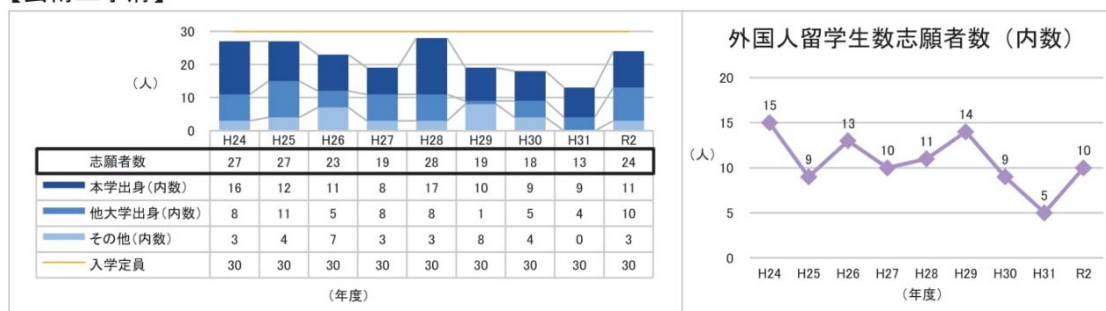


図3 芸術工学府博士後期課程入学者選抜試験の志願状況推移
（「九州大学 IR データ集 2020 年度版」より）

【芸術工学府】

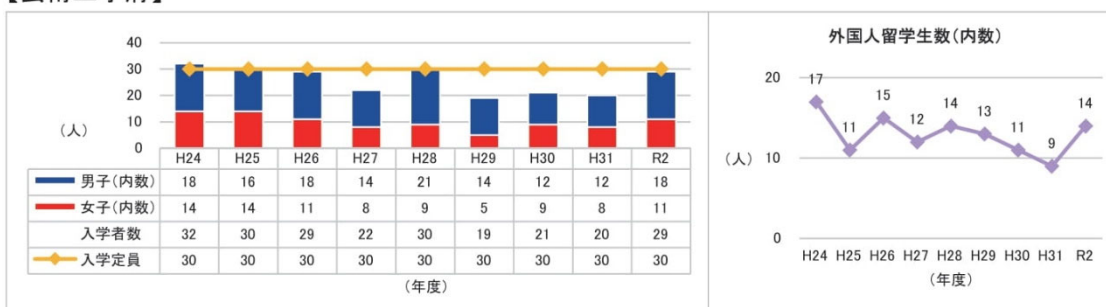


図4 芸術工学府博士後期課程入学者数推移
（「九州大学 IR データ集 2020 年度版」より）

○在學生に対するアンケート調査

今回の芸術工学府の改組計画の検討にあたって、資料1のとおり構想している芸術工学府の概要を示し、同学府に在籍する大学院生（修士課程学生308名、博士後期課程学生88名）及び他学府の大学院生（修士課程学生30名、博士後期課程学生4名）を対象に改組後の芸術工学府に関するアンケート調査を行ったところ、91名（修士課程学生75名、博士後期課程学生16名）から回答が得られた。

「新しい芸術工学専攻の特色に魅力があるか」という質問に対して、「魅力がある」と回答した者が16名（17.6%）、「やや魅力がある」と回答した者が46名（50.5%）で、約7割弱の学生が改組後の新しい芸術工学府に魅力を感じている。

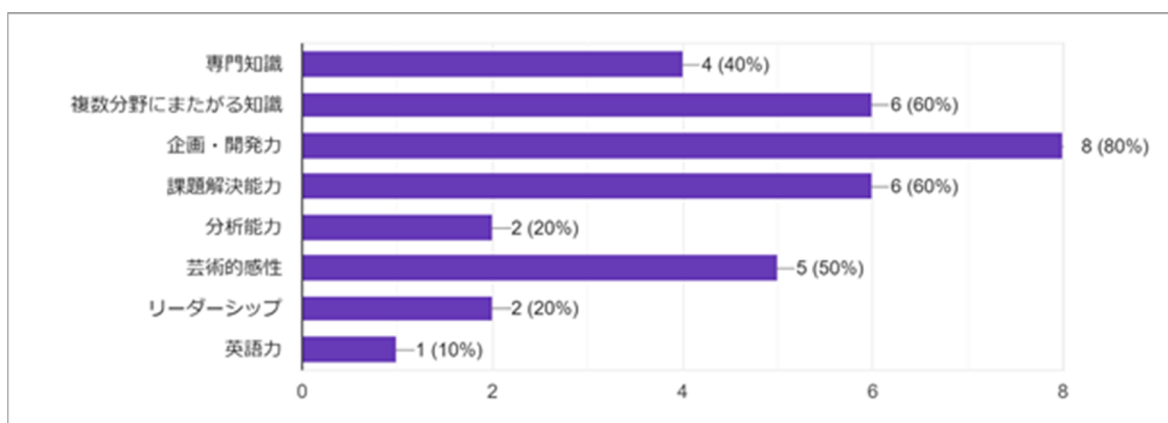
	回答数	割合
魅力がある	16	17.6%
やや魅力がある	46	50.5%
どちらでもない	13	14.3%
あまり魅力がない	10	11.0%
全く魅力がない	6	6.6%
計	91	100.0%

○企業に対するアンケート調査

今回の芸術工学府の改組計画の検討にあたって、資料1のとおり構想している芸術工学府の概要を示し、芸術工学府の卒業生・修了生を採用した実績のある企業を対象に改組後の芸術工学府に関するアンケート調査を行ったところ、11社から回答が得られた。

「芸術工学府の修了生を採用する場合、どのような知識・能力を期待するか」という質問（複数回答可）に対して、最も期待されているのが「企画・開発力」（8社）であり、次に期待されているのが「複数分野にまたがる知識」（6社）と「課題解決能力」（6社）であるとの結果が得られた。

改組後の芸術工学専攻では、分野横断的な教育実践のもと幅広い分野の課題に取り組むことで、デザインに関わる深い専門的知識を修得し、これらを活用した柔軟な発想で様々な課題に取り組む人材、更に新しいモノやコトの企画・開発を実施できる人材を育成することとしており、企業からの期待に合致していると考えられる。

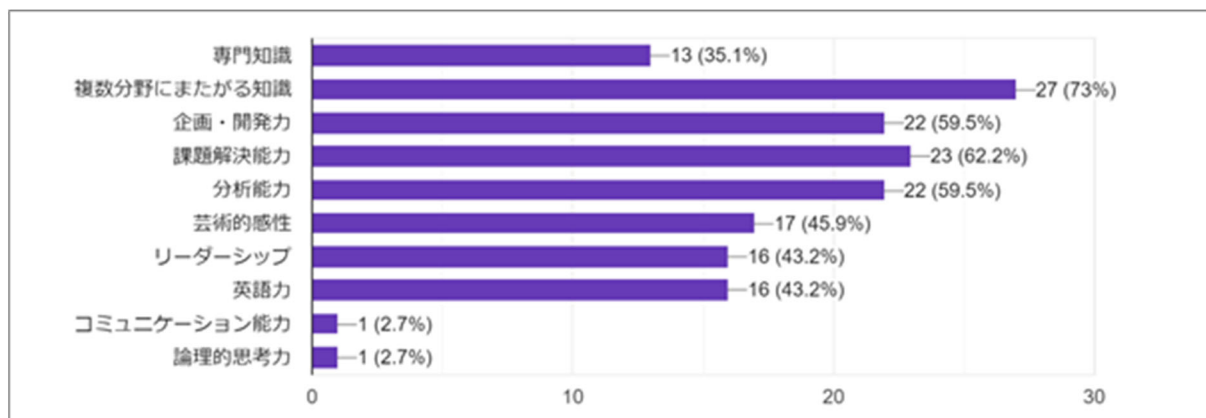


○卒業生・修了生に対するアンケート調査

今回の芸術工学府の改組計画の検討にあたって、資料1のとおり構想している芸術工学府の概要を示し、芸術工学府の卒業生・修了生を対象に改組後の芸術工学府に関するアンケート調査を行ったところ、37名から回答が得られた。

「これからの芸術工学府の学生には、どのような知識・能力が必要か」という質問（複数回答可）に対して、最も期待されているのが「複数分野にまたがる知識」（27名）であり、次に期待されているのが「課題解決能力」（23名）であるとの結果が得られた。

改組後の芸術工学専攻では芸術工学に対する鋭い感性の涵養と、他分野との融合によって幅広く高度な専門的知識を修得させることを目標としている。このため、カリキュラムの学修においては、スタジオプロジェクト科目を始めとする幅広い領域の融合を図る演習系科目で自ら体験し、実践することを重視した構成としており、様々な課題に取り組み、解決する能力を養成することが期待でき、本アンケート結果の方向性に合致していると考えられる。



○デザイン人間科学国際コースにおけるリクルート活動の実績

芸術工学専攻デザイン人間科学国際コース（平成 22（2010）年度設置）では、平成 23（2011）年度から毎年度、アジア諸国の大学で留学生獲得のためのリクルーティング（大学院説明会、サマーセミナー等）を実施している。それらに参加した学生が当該コースの入学試験を受けた、またはコースに入学した実績は、表 3 のとおりである。

表 3：デザイン人間科学国際コース受験者数及び入学者数（平成 23 年度～令和 2 年度）

人数	年度	H23	H24	H25	H26	H27	H28	H29	H30	R01	R02	計
受験者		3	2	1	4	1	4	7	4	4	7	37
入学者数		3	2	1	4	1	4	5	4	2	6	32
	うちセミナー等参加者	0	1	1	0	0	3	2	4	2	5	18

○海外の大学に在籍する学生に対するアンケート調査

今回の芸術工学府の改組計画の検討にあたって、これまで芸術工学府が開催したワークショップ、短期コース、シンポジウムなどの国際交流プログラムに参加した海外の大学に所属する（していた）学生に対しアンケート調査を行ったところ、104 名から回答が得られた。

「入学試験や授業等を全て英語で行い、日本語能力を問わず博士学位が修得できる制度を導入した場合、芸術工学府の博士後期課程に進学したいと思うか」という質問に対して、「ぜひ進学したい」と回答した者が 50 名（48.1%）、「条件があれば進学する」と回答した者が 20 名（19.2%）であり、約 7 割の学生が改組後の新しい芸術工学府に進学したいと考えている。

	回答数	割合
ぜひ進学したい	50	48.1%
条件があれば進学する	20	19.2%
進学に関心がある	23	22.1%
進学しない	11	10.6%
計	104	100.0%

ウ. 学生納付金の設定の考え方

本学の学生納付金は 817,800 円（入学料：282,000 円、授業料年額：535,800 円）であり、「国立大学等の授業料その他費用に関する省令」第二条に定める標準額と同額に設定している。

(2) 学生確保に向けた具体的な取組状況

九州大学では、芸術工学府の認知度向上を図り、学生確保につなげるため、様々な取組を行うことを予定している。

ア. 大学院説明会の開催

大学院設置認可申請手続きと並行して、主に学内の学部学生及び修士学生を対象とした大学院説明会を開催する。改組を予定している令和 4（2022）年度は、平成 30（2018）年度に設置された本学共創学部から初めての卒業生が輩出される年度でもあるため、改組後の芸術工学府が当該学部の大学院進学の受け皿となることが大いに期待される。なお、説明会はオープン参加とし、学外者の参加も受け付け、広く改組後の芸術工学府への理解を深めてもらう機会とする。

イ. オープンキャンパス及び施設公開

本学では毎年 8 月に大学全体でのオープンキャンパスを開催しており、芸術工学府では、コース紹介、実験室等の見学、模擬授業、進学相談、ガイドツアー、学生作品の展示などを行っている。いずれも参加者から好評を得ており、学生確保のための PR には絶好の機会となっている。

また、芸術工学府のキャンパス（福岡市南区大橋）では、毎年 5 月下旬に地域の小・中・高校生や一般市民を対象とする施設公開イベント「デザインの本物体験」を開催しており、例年 1,500 名を超える参加がある。同イベントでは、リサイクルアートや親子でのゲームプログラミング等のものづくり体験や、無響室といった特殊な実験室公開等を通じて、本学府独自の教育内容を分かりやすく紹介する内容で構成し、幅広い層に芸術工学部の魅力を紹介するまたとない機会となっており、オープンキャンパス以上に持続的な効果が期待できる。

ウ. Web サイトや SNS を通じた情報提供

芸術工学府の Web サイトに、今回の改組構想に関する内容を掲載したチラシを PDF データで公開し、理念や概要等について紹介する。加えて、改組構想に関するより具体的な情報を適切な時期に、大学 Web サイトや学部・学府の Web サイトで順次公開し、受験者や保護者に対して周知を行う。留学生向けには、英語の Web サイトを作成する。

また、大学や学府が持つ Facebook、Twitter といった SNS アカウントを通じて、新しい芸

術工学府の概要や魅力を発信していくこととする。特に教員の専門分野や新しい学府の教育内容をわかりやすく紹介することで、効果的な情報提供を図っていく。SNS は大学院を受験する世代に多く利用されている情報発信ツールであり、高い効果が得られる。

エ. 広報媒体による情報提供

今回の改組構想に関する内容を、進学情報誌や新聞広告等に掲載し、広く国内外にアピールを行い、新専攻の概要と学生募集の内容につき周知を図る。

また、改組の理念や概要、以前の学府から変わった部分を分かりやすく説明した小冊子を作成し、学内や大学院入学者の出身大学へ配布することで、学生向けに広く周知を行う。留学生向けには英語のパンフレットを作成し、学内の国際担当部署や大学の海外オフィスに配置する。

オ. 海外の大学におけるリクルート活動

現行の学府では、海外における人材発掘の取組として、カンボジア、ラオス、ブルネイ、東ティモール、インドネシア、フィリピンの大学を年 1 回程度訪問し、博士後期課程国際コースの広報・リクルート活動を実施してきた。その結果、平成 22 (2010) 年度から平成 25 (2013) 年度までの 4 年間には 7 名、平成 26 (2014) 年度から平成 29 (2017) 年度までの 4 年間には 18 名というように、国際コースにおける入学者数を増加させてきた。これらリクルート活動は全学に占める外国人留学生の割合増大にも大きく貢献している。改組後は、国際コースを統合して大学院全体を国際化し、日本語の修得が学位取得の条件とならないような教育体制とするため、今後は芸術工学府全体の広報・リクルート活動をアジア中心に展開し、海外からの優秀な人材獲得を図る。

2. 人材需要の動向等社会の要請

(1) 人材の養成に関する目的その他の教育研究上の目的 (概要)

デザインの領域や、デザイナーの役割が変化し、以前は形や色など「モノ」の意匠的成果を目的としていたデザインに、近年は「モノ」が使われることを想定したユーザーエクスペリエンス (UX) や「モノ」を介するサービスや「モノ」の使われ方・仕組みという「コト」の側面もデザインの領域に含まれるようになった。さらに、そのような「モノ」が使われることで実現されるかもしれない将来の社会の在り方などの「ビジョン」さえもデザインの概念に含まれるようになった。このようなデザイン領域の変化に対応するため、「領域を横断する能力を持つ人材」、「社会変化に柔軟に対応し将来の姿・仕組みを構想できる人材」といった新たなデザイン人材の育成が求められている。

また、社会全般では、高度情報化、国際化、高付加価値を伴う産業の進展、生活の質の重視、エネルギー問題の深刻化、有害物質の増加と多様化、地球環境に対する危機の先鋭化、文化・伝統の軽視、高齢化などの急激な変化が続いており、その中で大学の果たすべき役割が問われている。芸術工学府が掲げる「技術の人間化」という理念のその本来の目的を果たすためには、多方面にわたる社会の変化に対応するような対策が必要である。

新しい芸術工学専攻では、学生それぞれが学部において培った専門分野をベースにしつつ、広く他分野のディシプリンを体験しながら、各自が目指す設計 (デザイン) の基盤を多様化、あるいは深化させることを可能とする教育研究を実施することにより、「技術の人間化」の理念を継承しつつ、「モノ・コト・ビジョン」へ拡大するデザイン領域に対する意識・知識を持ち、人類が直面する課題に真摯に向き合う責任意識と人文、社会、自然にまたがる知識と芸術的感性を基盤とする「高次のデザイナー」であり、「芸術工学」の基本・基礎を十分に理解し、社会的な要請に応え、創造性あふれる指導的立場を果たし得る能力をもつ人材の育成を図る。

(2) 上記(1)が社会的、地域的な人材需要の動向等を踏まえたものであることの客観的な根拠

芸術工学府の改組構想の検討にあたって、人材需要の社会的なニーズを明らかにするため、政府・企業等が公開している関連情報を基に、芸術工学府の役割と求められる人材像についてデータを収集した(資料2)。

ア. 政府の動向

○平成31(2019)年1月22日 文部科学省 中央教育審議会大学分科会

「2040年を見据えた大学院教育のあるべき姿 ～社会を先導する人材の育成に向けた体質改善の方策～(審議まとめ)【官①】

同資料では、「Society 5.0等に向けた社会の変化の中で、大学院は、知の生産、価値創造を先導する『知のプロフェッショナル』の育成を中心的に担うことが期待される存在である」とし、2040年度の社会の需要に応じていくためにも早急に「大学院教育の体質改善」が必要であり、「人材養成目的に即した教育研究組織の柔軟な見直し」、「学修課題を複数の科目等を通して体系的に履修し、基礎的素養と専門知識の応用力等を培うコースワークの充実」、「高度・広範な専門的能力と高度の汎用的能力、職業社会で活用可能な実践的研究能力の育成等」、「博士後期課程における研究指導體制の強化」、「リカレント教育の充実」等に取り組むことが重要性であると述べられている。

○平成30(2018)年11月26日 文部科学省 中央教育審議会答申

「2040年に向けた高等教育のグランドデザイン(答申)【官②】

同資料では、「2040年に向けた高等教育のグランドデザイン」の中で、2040年に必要とされる人材像を「予測不可能な時代を生きる人材像」、高等教育の目指すべき姿を「学修者本位の教育への転換」としている。また、「多様性と柔軟性が確保された教育体制」として、「多様な学生」、「多様な教員」、「多様で柔軟な教育プログラム」等の重要性が述べられている。

○平成29(2017)年6月27日

文部科学省 大学における工学系教育の在り方に関する検討委員会

「大学における工学系教育の在り方について(中間まとめ)【官③】

同報告書では、各大学の工学系学部・大学院が輩出すべき人材像を「社会における工学の価値を理解し、自律的に学ぶ姿勢を具備するとともに、原理・原則を理解する力、構想力、アイデア創出能力、問題発見能力、課題設定能力、モデル化能力、課題解決・遂行能力を持つ人材」としている。また、「スペシャリストとしての専門の深い知識と同時に、分野の多様性を理解し、他者との協調の下、異分野との融合・学際領域の推進も見据えることができるジェネラリストとしての幅広い知識・俯瞰的視野を持つ人材」を育成することも重要であると述べている。

○平成31(2019)年3月29日 経済産業省 高度デザイン人材研究会

「高度デザイン人材育成の在り方に関する調査研究報告書(概要版)【官④】

同報告書では、あるべき未来を構想し、事業課題を創造的に解決する高度なデザインの重要性が高まっていること、デザイン(D)のスキルと、ビジネス(B)、テクノロジー(T)のスキルが結合した「高度デザイン人材」を求められていることが述べられている。また、「高度デザイン人材」を「デザインを基軸にして、リーダーシップを持ってビジネスの中核に立てる人材」と定義、「高度デザイン人材」の具体像を類型化し、各人材に必要なマインドやスキル、

カリキュラム等述べている。

○平成 29 (2017) 年 3 月 14 日 経済産業省

「第 4 次産業革命におけるデザイン等のクリエイティブの重要性及び施策検討に係る調査研究報告書」【官⑤】

同報告書では、デザインの定義を「狭義のデザイン」、「広義のデザイン」、「経営のデザイン」の 3 階層に分類し、企業が自社の製品・サービスについて、実際に「広義のデザイン」の視点で検討する場合、高度デザイン人材が必要となると述べられている。また、高度デザイン人材の能力は、専門性よりも横断的な基礎力に紐付いており、高校生までの基礎的な学習が有効であり、大学生・大学院生では、企業のリアルなニーズの下でクリエイティブの重要性を認識する取組みの必要性が述べられている。具体的には、芸術系学生・社会科学系・理工学系など多様な学問領域の学生が、企業や各種団体が行う実際の開発プロジェクト、インターンシップ、製品・サービス開発のワークショップを一緒に行い、実際の取組みを通じてクリエイティブの重要性を認識することが重要とされている。

イ. 企業等の動向

企業等の人材需要の動向として、以下の企業等で具体的な動向・意向が示されている。

○株式会社日立製作所【産①】

同社研究開発サイト「研究領域-デザイン」の中で「人の行動プロセスを洞察し、社会が直面している課題を理解しながら、人々が潜在的に期待している将来の姿をビジョンとして描き、その効果をわかりやすく見える化して共感を得る。そして、お客さまや地域の方々との協創により新たな価値を創っていくことが、デザインの役割と考えています。」と示している。加えて、「ビジョンデザイン」をデザイン基盤の一つとし、「社会を支えるシステムの運営には複雑に問題が絡み合っていて、ひとつの会社があるべき姿を示せるものではなくてきている、社会を支えるシステムのあるべき姿やその中で役割を探っていくために、議論のたたき台としての将来像を示すのがビジョンデザインです。」と述べている。

○ダイキン工業株式会社【産②】

同社 Web サイトに掲載されている、デザイン誌『AXIS』編集長へのインタビュー記事の中で、「モノからコトのデザインになってきました。私たちはよく“デザインが溶けていく”と言うのですが、デザインの枠自体がなくなってきています。以前はいわゆるモノのデザインみたいなものがあつたのですが、だんだんモノのかたちさえなくなって、デザインの主体はシステムや環境になってきています。」「逆に言うとデザイナーの領域は、以前よりもかえって広がっていると思います。もうモノだけではなくてトータルに環境も含めて関わることができる。というかやらざるをえない状況だと思います。大学での教育も、単純に絵を描いていけばいいというわけではなくて、川上から川下までどのようにしてトータルで考えていくことができるかが課題になっています。」と述べられている。

○ソニー株式会社【産③】

同社 Web サイト「ソニーのデザインリサーチプロジェクト『DESIGN VISION』」には、「技術の進展や世界の情勢がめまぐるしく変化していくなかで、社会における企業のあり方や使命について考え、新たな方向性を導くには、どうすればいいか。「DESIGN VISION」はこの問題に対し、デザインの力を活用して世の中の潮流や感性価値の動向をいち早く捉え、領域や部門を超えて新たな視点やヒントを提示するために、クリエイティブセンター内で発足したブ

プロジェクトです。」と示されている。また、同サイト内に、「デザイン領域を広げる『DESIGN VISION』の展望として、「デザインリサーチで得られたビジョンを、どのように具体的なアクションへとつなげていくか。デザイナー自らが体験の中から紡いだストーリーを、新たなプロダクトやサービス、コミュニケーションなど、具体的なデザインワークへと落とし込んでいく道筋が求められます。」と述べられている。

○富士通株式会社【産④】

同社 Web サイト「FUJITSU Co-creating Program Experience Design Service」では、「FEATURE（特徴）」を「テクノロジーによる解決にとどまらないデザイン思考をベースにした共創デザインサービス」とし、その「Process」として「人や社会、技術を理解し、人の経験や行動原理をベースにビジョンを描き、それを実現する仕組みを考え、必要なサービスやプロダクト、空間まで一貫して開発する総合的なデザイン活動を実践」、「ユーザーにとってのより良いエクスペリエンスに関わる全てのデザイン要素を、総合的かつ一貫して考え、新たなビジネスを描くデザイン活動を Human Centric Experience Design（HXD）と呼び、そのためのデザイン方法論を構築」していると述べている。

○LINE 株式会社【産⑤】

同社 Web サイト、2020 年度の採用情報に「LINE が求める人材像」として、「本質課題の解決のためのより良いアイデアを生み出し続け、挑戦を楽しむことができる人」と示している。また、同社のデザイン組織に求められることは、「問題を解決するためのより良いデザインを追求すること、そして、普遍的なデザインの解決策を提示することです。」とも述べられている。

○NEC 株式会社【産⑥】

同社が Web サイト上で連載している「business leaders square wisdom」のインタビュー記事「日本を変える『デザインの力』とは。未来を創造するための処方箋」にて、「近年注目されているのが、「デザイン」の活用である。ここでいう「デザイン」とは「モノのデザイン」ではなく、ユーザー視点で課題を解決し、仕組みや枠組みを作る「コトのデザイン」のことだ。」と述べられている。

また、「デザインが得意とするのは、『見えないことを見えるようにする』ことです。まだ顕在化していない課題を見つけて1つのパッケージにし、多くの企業が参画できるようにすることが、デザインが果たすべき重要な役割の1つ。デザイン的な発想を持つ人間が、貧困や感染症などさまざまな問題に光を当て、企業が持つ IP（Intellectual Property：知的財産）を再利用して、人を救うために役立てる。デザインの力を利用して、より一層 SDGs 的な考え方を実装していくことが、今は求められているのです」とも述べられている。

以上のように、政府や企業等が示す将来像や人材需要の動向の中で、拡大するデザイン領域に対する意識・知識を持ち、人類が直面する課題に真摯に向き合う責任意識と人文、社会、自然にまたがる知識と芸術的感性を基盤とする「高次のデザイナー」として、次の時代に活躍できる人材を育成することが強く求められており、社会的な人材需要は十分にあると判断できる。

学生の確保の見通しを記載した書類（資料）

（ 別 添 資 料 目 次 ）

【資料 1】	九州大学大学院芸術工学府改組概要パンフレット・・・・・・・・・・	1
【資料 2】	芸術工学部改組根拠資料（政府関連と産業界関連の公開情報）・・・	5
【資料 3】	九州大学大学院芸術工学府改組に関するアンケート	
資料 3-1	学部生向け・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	18
資料 3-2	大学院生向け・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	20
資料 3-3	卒業生・修了生向け・・・・・・・・・・・・・・・・・・	22
資料 3-4	企業向け・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	24
資料 3-5	海外の大学に在籍する学生向け・・・・・・・・・・	26

2022年4月

九州大学大学院芸術工学府が 新しくなります [構想中]

「モノ」から「コト」へ、さらに「ビジョン」へ

地球環境問題の顕在化、格差や貧困の拡大の問題、新型コロナウイルス感染流行によって浮き彫りとなったこれまでとは異なる社会の形へのシフトなど、私たちはいま地球レベルの課題に直面しています。

こうした事態に対応するためには、従来の改良型・課題解決型の思考だけでなく、大胆に価値観を転換し、あるべき未来のビジョンを模索し、そこから個別の技術のありかたを思考することが不可欠です。

こうした社会的な変化に伴い、デザイン領域、デザイナーの役割も大きく変化しています。

デザインの対象は「モノ」から「コト」へ、さらに「ビジョン」へと拡大し、現状の課題解決に限らず、将来のあり得る、またそうありたい社会のビジョン、「未来はこうもあり得るのではないか」という問いの創造までをデザイン概念が含むようになりました。

以上のデザインの拡張と変容をふまえて、想定する対象を人間そのものから人間を含む地球へと広げ、各分野の先端を縦割り型で追求する体制からビジョンのイニシアティブに基づき、モノやコトの具体性を追求し、社会変革を実現する新たな教育組織の構築に挑戦します。



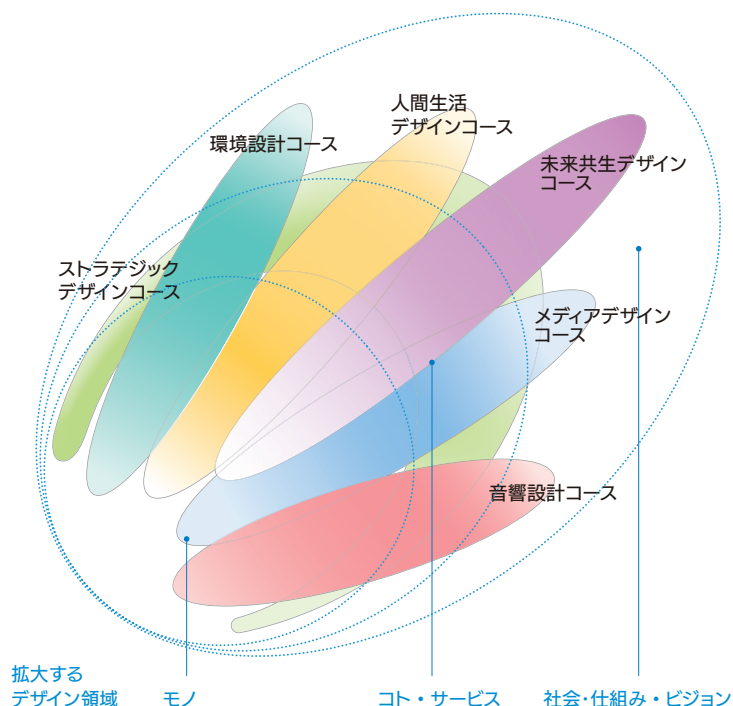
新しい専攻、新しいデザイン教育

育成する人材像

改組後の九州大学大学院芸術工学府では、「個別のデザイン分野」、「拡大するデザイン領域」、
「明確な社会実装のための戦略」——これらがいっそう横断融合できるカリキュラムを提供することにより、
領域を横断する能力を持ち、社会変化に柔軟に対応、将来の姿や仕組みを構想し、
それを実現に導くことのできる「高次のデザイナー」を育成します。

芸術工学府・芸術工学専攻の特色

1. 拡大するデザイン領域へ対応します。
2. デザインの総合化を促進し、社会的要請の高い横断的デザインを可能とするカリキュラムを提供します。
3. 専門に特化したサーティフィケート・プログラムを提供します。
4. 学生の文化的多様性を高めるため、国際化を推進します。
5. 博士後期課程の高度の融合的研究を推進します。



カリキュラムの特色

<修士課程>

●新しい社会の構想から具体的な社会実践までを一本化し、よりよくデザインを活用するために現行の芸術工学専攻とデザインストラテジー専攻の2専攻を1専攻に統合します。

●すべての授業科目をコースごとではなく専攻として提供し、コースの指定する科目によって分野の軸を形成しつつ、研究の志向に従って全専攻科目（展開科目）から自らの専門性を構築できるカリキュラムを導入します。

●特色ある授業として、コース横断型のデザインプロジェクト演習科目である「スタジオプロジェクト科目」を提供し、実践的な演習課題により「モノ」、「コト」、「ビジョン」の要素を総合するデザインを学びます。

●英語による授業を充実させ、多様性を包摂する柔軟性に富み、国際通用性のある学術リテラシーを涵養します。

<博士後期課程>

●学生の自由な意志を尊重し、柔軟な運用を図るために、芸術工学専攻とデザインストラテジー専攻を統合した1コース制を採用します。

●従来型の一指導教員追尾型ではなく、博士課程院生個々の視点を尊重し、また、意欲を引き出し、自信を与えるために、自由で柔軟な博士課程院生みずからの個別研究を推進します。

●研究の質を担保し、幅広い知的基盤を獲得する体系的な教育機能と、先端的・専門的学術研究機能の両者を備えた環境を構築するために、複数・多分野から最適な指導教員グループによる体制を整えます。

1 専攻6 コース編成によるカリキュラム

		ストラテジック デザインコース	環境設計 コース	人間生活デザイン コース	未来共生デザイン コース	メディアデザイン コース	音響設計 コース
コース コア 科目	デザイン科学系統		環境化学特論 熱環境学特論 ほか	応用人間工学 生理人類学特論 ほか	時間生物学 分子生物学 ほか	視覚心理学特論 色彩科学特論 ほか	聴覚心理学特論 時間知覚特論 ほか
	デザイン工学系統	機能工学デザイン ほか	環境構造学特論 環境心理学特論 ほか	人間情報工学 デザイン認知論 機能工学デザイン ほか	人間情報工学 生体模倣工学 ほか	コンピュータ グラフィックス特論 バーチャルリアリティ 特論 ほか	音声情報学特論 音響工学特論 ほか
	設計・制作系統	デザインイノベーション インクルーシブデザイン ほか	環境計画特論 ランドスケープデザイン 特論 ほか	パブリックデザイン コンテキストデザイン レジリエンスデザイン ほか	生命とアート スペキュラティブ デザイン ほか	メディアアート表現 映像コンテンツ デザイン特論 ほか	サウンドデザイン特論 音響芸術特論 ほか
	文化・社会デザイン系統	知的財産論Ⅰ、Ⅱ デザインマネジメント ほか	日本建築史特論 文化財学特論 ほか	コミュニケーション デザイン論 ライフスケープ デザイン ほか	アーツマネジメント デザイン哲学 ほか	演劇学特論 マルチモーダル コミュニケーション特論 ほか	音楽社会文化特論 民俗音楽学特論 ほか
スタジオ プロジェクト科目	コース横断実践型 プロジェクト科目			スタジオプロジェクト科目群			
展開科目				専攻開設科目			
				芸術工学特別プロジェクト科目、他学府開設科目など			
修士研究関連科目	系統ごとに開設			芸術工学演習			
				芸術工学特別研究Ⅰ～Ⅳ			
サーティフィケート・プログラム		サーティフィケート・プログラム	サーティフィケート・プログラム	サーティフィケート・プログラム	サーティフィケート・プログラム	サーティフィケート・プログラム	サーティフィケート・プログラム
修士課程学位		修士（芸術工学）			修士（デザインストラテジー）		

ストラテジックデザインコース

芸術工学専攻とデザインストラテジー専攻の一本化により、デザイン × ビジネスによる社会実装までを扱います。

具体的には、製品・環境・サービスなど多様なデザイン専門知識をもとに、ビジネス、アントレプレナーシップを統合するデザインストラテジーを学べるだけでなく、QBS・QREC 連携科目、企業・自治体連携による実践的な授業を履修できます。これらにより、企業や組織でのデザイン・マネジメント、未来型経済社会のデザイン戦略構築能力を習得できます。

環境設計コース

人間周囲の環境すなわち建築・都市・地域・ランドスケープを主な対象として、高度な調査・研究と創造的なデザインの実践を行います。

空間的・時間的な広がりや社会の多様性を念頭に、現代において顕在化する諸問題に真摯に向き合うとともに、人間と環境の関係のありかたを根源的に考察し、国際的な建築家教育課程として認定された内容（グローバル・アーキテクト・プログラム）を含む、より豊かな環境デザインの実現に寄与する教育が提供されます。

人間生活デザインコース

人間の特性や高度な科学技術に基づくモノ・サービス・システム・生活環境の創造について学び、研究することができます。

具体的には、生活の在り方を構想し、感性・創造性を含む、人間の生理的・形態的・行動的・心理的特性の探求や工学的方法論の適用、ライフスケープデザインに関する教育科目を通じて、専門知識・スキルを深化させることができます。

修了後は、安心・安全で魅力的な生活（ヒューマンライフ）の実現に貢献することが期待されます。

未来共生デザインコース

生命体や他者、環境と共生する「あってほしい未来」を構想し、それを実現するもの・こと・しぐみをデザインします。

生命情報科学、生命工学、アート・デザイン、文化や社会に関する授業を履修し、学外のアーティストや NPO の実践者、様々な生活者とともに考え実践する演習を通じて、これからの社会に対するヴィジョンを構想し、対立し異なるものとともに活かす提案を具体的にかたちにする能力を身に付けることができます。

メディアデザインコース

人と人、感性と表現、感覚と空間、仮想と現実をつなぐメディアコミュニケーションデザインの未来を創造します。

科学的知識と思考力、美的感性、創造力、表現力の涵養を通じて、最先端のメディアテクノロジーによるデジタルコミュニケーション、データサイエンス、ネットワークから、人間の視覚科学、心理学、芸術表現、人間社会コミュニケーションなど「繋ぐ」「伝える」「共有する」メディアデザインの探求と実践を行うことができます。

音響設計コース

音に関連する芸術、科学、技術の幅広い分野を対象として、総合的な課題解決能力を身につけます。

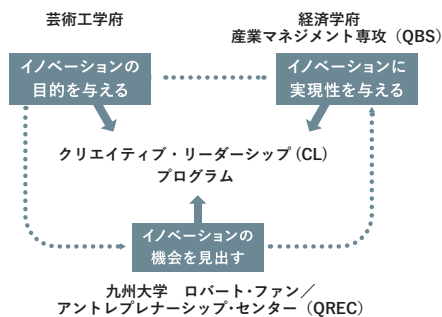
専門科目や演習科目を通じて、音に関する芸術工学的感性、人間に適合した音環境を創出する音響設計、音響情報の高品質化、音に関する芸術文化の創造を実現する能力などについて、専門知識を修得、深化させます。

音に関する文化、環境、情報の視点からデザイン対象に多面的にアプローチし、音に関わる新しいデザインの分野を切り開く力を身につけます。

専門に特化したサーティフィケート・プログラム

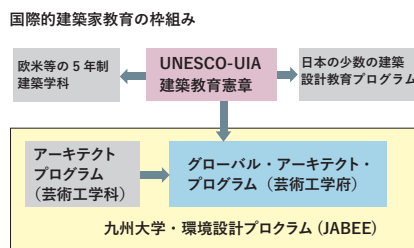
クリエイティブリーダーシッププログラム

本プログラムは、デザイン、アート、ビジネス、リーダーシップの4要件からなる「高度デザイン人材」の育成を目的としたプログラムです。具体的には、創造的的思考力にもとづく社会・文化の長期的なビジョンを構想でき、深い人間・環境理解にもとづく価値を提案でき、提案しようとする価値を社会に実装するために多様な他者への共感力・協働力を備え、イノベーション・プロジェクトを遂行する能力を持つ人材の育成を目指します。



グローバル・アーキテクトプログラム

Accredited by UNESCO-UIA Validation Council
このプログラムは、建築・環境設計に関する工学的知識及び文化芸術に関する知識を備えた、総合的設計能力を有する人材を育成するものです。芸術工学科のアーキテクトプログラムの修了と合わせ、「UNESCO-UIA 建築教育憲章」に基づく国際的な建築家教育課程としての認証を受けている、日本では数少ないプログラムのひとつです。

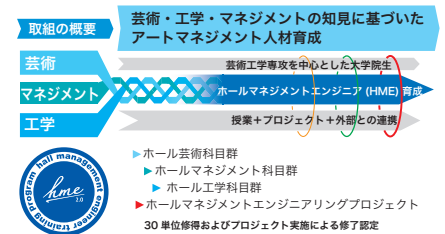


ホールマネジメント・エンジニア育成プログラム

本プログラムでは、劇場・音楽堂等の公共施設を主たる対象とし、ハードとしてのホール機能の理解と、そこで上演されるコンテンツの芸術文化の理解、加えてそれを実際に企画運用するための企画・実践能力を兼ね備えた人材の育成を目指します。

ホールマネジメントエンジニア育成ユニット
2007 - 2011: 25名の修了生を輩出

ホールマネジメントエンジニア育成プログラム
2012- : 継続的に大学院生を迎えて実施中



入試

【修士課程】

- 留学生入試、社会人入試を廃止し、自己推薦入試と一般入試の2つの入試を実施する。
- いずれの入試も英語での受験が可能。
- 定員：各コース 20名 合計 120名

自己推薦入試

- 書類選考
- 面接

一般入試

- 専門科目試験
- 面接

【博士後期課程】

- 入学時期は年2回（4月・10月）。
- 試験区分（一般入試、社会人入試、国際コース入試）を一本化して実施。
- 志願者は入試出願時に希望する予定主指導教員を指定。
- 試験科目：面接（対面面接またはオンライン面接。英語での面接も可）。
- 定員：30名

お問い合わせ

九州大学芸術工学部事務部総務課
〒815-8540 福岡市南区塩原 4-9-1
Tel: 092-553-4442
Email: gkjimubu@design.kyushu-u.ac.jp

令和 3(2021)年 2 月 4 日現在

学府改組の根拠資料

芸術工学府の改組の根拠となる資料について、政府関連と産業界関連の公開情報から集めた。

前半:政府関連の根拠資料(番号:官 01~12) 後半:産業界の根拠資料(番号:産 01~06)

官 01	
タイトル	文部科学省 「2040 年を見据えた大学院教育のあるべき姿 ～社会を先導する人材の育成に向けた体質改善の方策～」(平成 31 年 1 月 22 日)
URL	https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/houkoku/1412988.htm
資料名	「2040 年を見据えた大学院教育のあるべき姿 ～社会を先導する人材の育成に向けた体質改善の方策～」(審議まとめ)(要旨)(PDF 資料)
キーワード	知のプロフェッショナル、大学院教育の改善方策
抜粋	<p>【p.1】 1. 2040 年頃に直面する社会の変化と「知のプロフェッショナル」</p> <p>Society 5.0 等に向けた社会の変化の中で、大学院は、知の生産、価値創造を先導する「知のプロフェッショナル」の育成を中心的に担うことが期待される存在である。</p> <p>【p. 2】 3. 大学院教育の改善方策 ②各課程に共通して求められる教育の在り方</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学修課題を複数の科目等を通して体系的に履修し、基礎的素養と専門知識の応用力等を培うコースワークの充実が必要である。 ・専門的知識と普遍的なスキル・リテラシー等を身に付けさせるための取組が期待される。 ・俯瞰的な視点や国際的な感覚を養い、切磋琢磨を促すための取組が重要と考えられる。 <p>【p. 4】 3. 大学院教育の改善方策 ④学位授与の在り方</p> <ul style="list-style-type: none"> ・円滑な学位授与、研究指導体制等の強化、学位審査の透明性・公平性の確保を引き続き図っていくことが必要。 <p>【p. 6】 3. 大学院教育の改善方策 ⑦リカレント教育の充実</p> <ul style="list-style-type: none"> ・高度専門職業人を養成する大学院におけるリカレント教育は極めて重要な課題となっている。 ・学位を授与しない短期のプログラムなど、社会人の多様なニーズに対応する教育プログラムには大きな社会の期待があることにも留意すべきである。

官 02	
タイトル	文部科学省 2040 年に向けた高等教育のグランドデザイン(答申)(中教審第 211 号) (平成 30 年 11 月 26 日)
URL	https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1411360.htm
資料名	「2040 年に向けた高等教育のグランドデザイン(答申)」【概説】(PDF 資料)
キーワード	2040 年の展望、高等教育のグランドデザイン

<p>抜粋</p>	<p>I. 2040 年の展望と高等教育が目指すべき姿－学修者本位の教育への転換－</p> <p>【p.1】 1. 2040 年に必要とされる人材と高等教育の目指すべき姿 (2040 年に必要とされる人材)</p> <p>予測不可能な時代の到来を見据えた場合、専攻分野についての専門性を有するだけではなく、思考力、判断力、俯瞰力、表現力の基盤の上に、幅広い教養を身に付け、高い公共性・倫理性を保持しつつ、時代の変化に合わせて積極的に社会を支え、論理的思考力を持って社会を改善していく資質を有する人材が多く誕生し、変化を受容し、ジレンマを克服しつつ、更に新しい価値を創造しながら、様々な分野で多様性を持って活躍していることが必要である。</p> <p>(高等教育の目指すべき姿)</p> <p>2040 年に必要とされる人材を養成していくためには、個々人の可能性を最大限に伸長する教育」に転換することが期待される。</p> <p>【p.2】 2. 2040 年頃の社会変化の方向 (Society5.0、第4次産業革命が目指す社会)</p> <p>第4次産業革命とも言われる、AI、ビッグデータ、Internet of Things (IoT)、ロボティクス等の先端技術が高度化してあらゆる産業や社会生活に取り入れられることで、日本の強みとリソースを最大限活用して、誰もが活躍でき、様々な社会課題を解決できる、日本ならではの持続可能でインクルーシブな経済社会システムである Society5.0(超スマート社会)の実現に向けた取組が加速している。また、同時に、資源や物ではなく、知識を共有、集約することで、様々な社会課題を解決し、新たな価値が生み出される社会である知識集約型社会の到来が予想されている。</p> <p>【p.3】 3. 2040 年を見据えた高等教育と社会の関係 (研究力の強化と社会との関係)</p> <p>多様で卓越した新しい「知」は、未知のものへ挑戦する全ての学術研究の中で生み出され、イノベーションの創出や科学技術の発展に大きく資するものであり、学術研究の成果を社会的・経済的価値の創造に結び付け、社会からのニーズに応えていくことは高等教育の役割の一つである。</p> <p>II. 教育研究体制－多様性と柔軟性の確保－</p> <p>【p.4】</p> <p>高等教育は「多様な価値観を持つ多様な人材が集まることにより新たな価値が創造される場」＝「多様な価値観が集まるキャンパス」になることが必要である。なお、高等教育機関には「多様性」と「柔軟性」が求められるとともに、高等教育機関で学ぶ学生や、教育研究を行う教員は、組織に縛られることなく、その「流動性」を確保していくことが重要である。</p> <p>【p.4】 1. 多様な学生</p> <p>今後、高等教育機関は、18 歳で入学する日本人を主な対象として想定するという従来のモデルから脱却し、社会人や留学生を積極的に受け入れる体質転換を進める必要がある。</p> <p>【p.5】 2. 多様な教員</p> <p>学部・研究科等の組織の枠を越えて教員が共同で教育研究を行えるような仕組みを構築するとともに、学外資源の活用という観点から実務家や、多様な視点からの教育研究という観点か</p>
-----------	---

	<p>ら若手、女性、外国籍など様々な人材が教員として登用できるような制度等の在り方を検討する必要がある。</p> <p>【p.5】 3. 多様で柔軟な教育プログラム (文理横断、学修の幅を広げる教育)</p> <p>分野を越えた専門知の組合せが必要とされる時代であり、一般教育・共通教育においても従来の学部・研究科等の組織の枠を越えた幅広い分野からなる文理横断的なカリキュラムが必要となるとともに、専門教育においても従来の専攻を越えた幅広くかつ深いレベルの教育が求められる。特に、専門教育については、専門知の組合せの種類が大幅に増えることを踏まえ、主専攻・副専攻制の活用など、学生の学修の幅を広げるようなカリキュラムの工夫が求められる。</p> <p>(多様で柔軟な教育プログラム)</p> <p>各大学等が多様な教育プログラムの提供を実現するため、時代の変化に応じ、従来の学部・研究科等の組織の枠を越えて、迅速かつ柔軟なプログラム編成ができるようにすることが必要である。</p>
--	--

官 03	
タイトル	文部科学省 「大学における工学系教育の在り方について(中間まとめ)」 (平成 29 年 6 月 27 日)
URL	https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2017/06/27/1387312_01.pdf
資料名	大学における工学系教育の在り方に関する検討委員会 「大学における工学系教育の在り方について(中間まとめ)」(PDF 資料)
キーワード	工学系教育
抜粋	<p>【p.3】 4. 輩出すべき人材像</p> <ul style="list-style-type: none"> ・社会における工学の価値を理解し、自律的に学ぶ姿勢を具備するとともに、原理・原則を理解する力、構想力、アイデア創出能力、問題発見能力、課題設定能力、モデル化能力、課題解決・遂行能力を持つ人材育成が必要であることを前提とする。 ・輩出すべき人物像についても、短期、中期、長期の戦略への対応を意識した人材育成に向けた教育が必要であり、一人の学生にすべてを教えるのではなく、人材のダイバーシティを確保することが必要である。 ・スペシャリストとしての専門の深い知識と同時に、分野の多様性を理解し、他者との協調の下、異分野との融合・学際領域の推進も見据えることができるジェネラリストとしての幅広い知識・俯瞰的視野を持つ人材を育成することも重要である。 ・情報通信技術の進展により、様々なサービスが提供される中、製造業と非製造業の橋渡しができる人材や、システム同士がデータによりリアルタイムに連携する仕組み(System of Systems)やサイバー空間上に精緻なモデルを組み上げ高精度な実証、予測、最適化を可能とするデジタルツイン機能を代表とする「バーチャル空間」と「リアル空間」の融合等を俯瞰的に把握できる人材を育成することが必要である。

	<p>【p.5】 6. 学部・大学院の教育体制の改革</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教員が専門とする研究分野の内容を中心とした教育を重視するのではなく、学部・大学院における学位プログラム制の積極的導入により、学生が主体的に学べる環境を確立し、幅広い分野の知識と深い専門知識の修得が可能となる体制の構築が必要である。 <p>【p.7】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・卒業研究や修了研究を積極的に活用する場合でも、1人の教員による指導では偏りも懸念されることから、学生の視野を広げるためにも複数の教員による指導体制が望ましい。また、研究テーマの設定については、学士、修士、博士でそれぞれの濃淡は異なると考えられるが、テーマの妥当性を考慮しつつ、学生の自主性・主体性も重視することが重要である。
--	--

官 04	
タイトル	経済産業省 高度デザイン人材研究会 報告書（平成 31 年 3 月 29 日）
URL	https://www.meti.go.jp/shingikai/economy/kodo_design/20190329_report.html
資料名	高度デザイン人材育成の在り方に関する調査研究報告書【概要】(PDF 資料)
キーワード	高度デザイン人材、デザイン、ビジネス
抜粋	<p>【p.2】 1. 高度デザイン人材育成の在り方に関する調査研究)の意義と狙い</p> <ul style="list-style-type: none"> ・経済のグローバル化や情報通信技術の急速な進歩により、既存のビジネスモデルの崩壊が進行中、あるべき未来を構想し、事業課題を創造的に解決する高度なデザインの重要性が高まっている。 ・産業界は、デザイン(D)のスキルと、ビジネス(B)、テクノロジー(T)のスキルが結合した「高度デザイン人材」を求めている。 ・「高度デザイン人材」の具体像を類型化し、各人材に必要なマインドやスキル、カリキュラム等をガイドラインとしてまとめ産業界及び大学等における高度デザイン人材の育成(カリキュラム編成、授業科目開設等)を促進。 ・経済産業省と特許庁が公表した『「デザイン経営」宣言』にも見られるようにデジタル・トランスフォーメーション(デジタルによる変革)の進展によってデジタルやモバイルとは直接的関連のなかった業種・領域においても、デザイナーの必要性は高まっている。 <p>【p.8】 7. 高度デザイン人材に求められる能力</p> <p>高度デザイン人材の定義</p> <p>「デザインを基軸にしてリーダーシップを持ってビジネスの中核に立てる人材」</p> <p>高度デザイン人材に必要な資質</p> <p>デザインスキル、デザイン哲学、アート、リーダーシップ(アントレプレナーシップ)、ビジネス</p>

官 05	
タイトル	経済産業省 第 4 次産業革命クリエイティブ研究会 報告書（平成 29 年 3 月 14 日）
URL	http://www.meti.go.jp/report/whitepaper/data/20170314002.html
資料名	第 4 次産業革命におけるデザイン等のクリエイティブの重要性及び施策検討に係る調査研究報告書(PDF 資料)

キーワード	デザイン・クリエイティブの定義、クリエイティブの発揮に必要なスキル・人材像、教育機関での育成
抜粋	<p>【p. i】(2) デザイン・クリエイティブの定義と本調査での射程</p> <p>「デザイン」や「クリエイティブ」の定義については、時代や場面によって流動的であり諸論ある。今回は、デザインは行為であり、クリエイティブは能力であると捉え、以下の内容を調査の前提とした本調査では、一般に説明されるデザインの定義を以下のとおり3階層に分類した。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 狭義のデザイン: 意匠(製品やパッケージの装飾)、ユーザーインターフェースなど主に表層的な姿を対象とする。従来から主に(日本語としての)デザインと認知されている領域である。 2) 広義のデザイン: ユーザー体験(UX=User eXperience)を含む製品・サービス全体を対象とする。製品やサービスの提供者側だけでなく、ユーザーまで含めた価値創造プロセス全体が領域である。 3) 経営のデザイン: 製品やサービスの提供を通じた価値創造をするために必要となるビジネスモデル、エコシステム、会社組織、マネジメントなどを対象とする。企業におけるコーポレート業務も対従業員サービスとしてこの階層に含まれる。 <p>【p. ii】(4) 調査結果 2: クリエイティブの発揮に必要なスキル・人材像の検討</p> <p>自社の製品・サービスについて、実際に「広義のデザイン」の視点で検討する場合、高度デザイン人材が必要となる。本調査では、企業に必要な高度デザイン人材像とその人材を育成する方法について検討した。</p> <p>アンケートからは9割以上の企業が差異化価値を生み出す源泉としての高度デザイン人材の必要性を認識しており、この人材に求めるスキルは、ユーザーの持つ潜在的な課題を発見する能力や、コミュニケーションスキルが多く挙げられた。こうした人材は、現状でも企業内に存在している。「高度デザイン人材」や「クリエイティブ人材」という名称・肩書きで呼ばれているわけではなく、必ずしもデザイン部門にいるわけでもない。採用時においてどの程度重視しているかについては、約半数の回答企業で特に高度デザイン人材を意識して採用しておらず、多くの場合において現状では高度デザイン人材は採用後にOJTを中心に育成されていることが見えてくる。</p> <p>高度デザイン人材の能力については先天的なものと後天的なものがあるものの、後者の要素が強く、大学・企業等で意図的に育成できることも明らかとなった。また、クリエイティブは個々の人材に帰属するだけではなく、相互の「関係性」から組織的に発揮される面もあり、それを発揮するための「場」づくりも必要であるとの発見も得ることができた。</p> <p>そこで、企業で活躍できる高度デザイン人材やその人材が活躍してクリエイティブを発揮する「場」をどのように育成・醸成することが出来るのかを調査した。この点について企業・高等教育機関など有識者へのヒアリングと、実際の企業における育成施策についてアンケートを行い、以下のような方法で人材育成を行うべきことが分かった。</p> <p>【p. ii】(教育機関での育成: 就職するまで)</p> <p>高度デザイン人材の能力は専門性よりも横断的な基礎力に紐付いており、高校生までの基礎的な学習が有効である。また、大学生・大学院生では、企業のリアルなニーズのもとでクリエイティブの重要性を認識する取組みも必要となる。具体的には、芸術系学生・社会科学系・理工学系など多様な学問領域の学生が、企業や各種団体が行う実際の開発プロジェクト、インターンシップ、製品・サービス開発のワークショップを一緒に行い、実際の取組みを通じてクリ</p>

	<p>エイティブの重要性を認識することが重要である。こうした取り組みによって、表面的なスキルセット(手法)を頭で理解するだけでなく、高度デザイン人材に必要なマインドセットを獲得することが出来ると考える。高度デザイン人材へのマインドセット(考え方)を獲得した大学生・大学院生が、クリエイティブファームや一般企業に就職し、それぞれの立場でプロジェクト活動を通じてクリエイティブを発揮していく。</p>
--	--

官 06	
タイトル	高等教育における国立大学の将来像
URL	http://www.janu.jp/news/files/20180126-wnew-future_vision_final3.pdf
資料名	<p>高等教育における国立大学の将来像(最終まとめ)、概要(平成 30 年 1 月 26 日、一般社団法人国立大学協会、PDF 資料)</p> <p>高等教育における国立大学の将来像(最終まとめ)(平成 30 年 1 月 26 日、一般社団法人国立大学協会、PDF 資料)</p>
キーワード	流動性の向上、地域・産業界とも連携、主体的学習を含む実践活動・課外活動の充実、文理融合、超スマート社会、サイバー空間とフィジカル空間を融合
抜粋	<p>【p.2】 高等教育における国立大学の将来像(最終まとめ)、概要</p> <p>■教育 学部・大学院教育においては、学士・修士・博士などの学位に着目したプログラムの体系的整備と学生の大学間の流動性の向上、大学間や地域・産業界とも連携した教養教育や学生の主体的学習を含む実践活動・課外活動の充実を推進する。</p> <p>■産学連携・地域連携 教育面においては、インターンシップなどにより学生に幅広い学びの場を提供し、キャリア意識とアントレプレナーシップ(起業家精神)の形成を図るとともに、産業界や地域との共同による教育プログラムを開発する。</p> <p>企業・産業 国立大学の将来像 横断的な課題について、大学・研究機関のネットワークと企業群が共同して、文理融合によりオープン・イノベーションにつながる研究を推進する体制を構築し、その支援のための基金を創設することも検討する。</p> <p>【p.15】 高等教育における国立大学の将来像(最終まとめ)</p> <p>3.産業構造 今日、Society 5.0、超スマート社会、第4次産業革命などと言われるように、IoT や AI 技術によるサイバー空間とフィジカル空間を融合させて人間の様々な ニーズに応える新たな社会を構築することが課題とされている。その中で、産業 形態が大規模集積型から遠隔分散型へとパラダイムシフトしていくことが想定され、まさに地方創生を牽引していくことが期待されている。また、人口減少社会が到来する中で、一人ひとりの能力向上による生産性向上と働き方改革、誰もが意欲を持って多様な形で活躍できる社会の実現が求められている。将来の高等教育の在り方を考える際には、これらの変化を念頭に置くことが重要である。</p>

官 07	
タイトル	理工系人材育成に関する産学官円卓会議（平成 29 年 5 月 22 日）
URL	https://www.meti.go.jp/policy/innovation_corp/entaku/entaku_010.html
資料名	文部科学省高等教育局専門教育課・経済産業省産業技術環境局大学連携推進室 理工系人材育成に関する産学官円卓会議 第 10 回資料(PDF 資料)
キーワード	多様な分野の科目を学べる学科、社会人向けプログラムの開発・提供、数理・データサイエンスに係る教育強化拠点
抜粋	<p>理工系人材育成に関する産学官円卓会議人材需給ワーキンググループ取りまとめ</p> <p>【p.7】大学等への講座、指導方法等に関する要望 技術系職種において、「多様な分野の科目を学べる学科」に対するニーズが高く、また「企業等との共同研究、より実践的で実社会に貢献できる研究」、「大学に入ってから専門を決められる仕組み」、「自分の専門以外の専門をサブコースとして学べる仕組み」に対するニーズが高い。</p> <p>【p.23】大学等における社会人の学び直しの促進 大学において、企業や社会人のニーズに応じて特別なプログラムの開発・提供ではなく、通常の学生向けプログラムを社会人にも提供する形が多い。キャリアアップだけでなくキャリアチェンジの観点も踏まえると、成長分野や産業界が人材を必要とする分野について、業界団体・企業と大学・高等専門学校においてテーマ・期間・教育内容・教育方法を検討し、協働して社会人向けプログラムの開発・提供を推進していくことが求められる。</p> <p>【p.24】未来の産業創造・社会変革に対応した人材育成 第四次産業革命や「超スマート社会」(Society5.0)といった産業創造・社会変革に対応した人材育成に向けては、その中心を担う大学における工学系教育への期待が高まっている。このため、今後の工学系教育における学部・大学院の教育体制・教育課程の在り方、産学連携教育の在り方等について検討を行い、かかる人材育成の実現に向けた取組を進めることが期待されている。また、大学の数理・データサイエンスに係る教育強化拠点を活用して、全学的な数理・データサイエンス教育を実施するための標準カリキュラム・教材の作成を実施し、全国の大学へ展開・普及させることが重要である。これらにより、我が国の産業活動を活性化させるために必要な数理・データサイエンスの基礎的素養を持ち課題解決や価値創出につなげられる人材育成が期待される。</p>

官 08	
タイトル	新時代を見据えた国立大学改革（平成 27 年 9 月 18 日）
URL	http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2015/10/01/1362382_2.pdf
資料名	文部科学省高等教育局 新時代を見据えた国立大学改革 (日本学術会議幹事会における文部科学省説明資料)(PDF 資料)
キーワード	震災の経験を活かした防災対策、地球温暖化等の環境問題への対応、高齢化と人口減少の克服、活力ある地方の創生、能動的学習、変化する社会へ対応

<p>抜粋</p>	<p>【p.1】 国立大学に求められている社会的役割</p> <p>我が国は、世界規模で急激に変化する社会の中で、いくつかの大きな課題に直面している。世界における日本の競争力強化、産業の生産性向上、我が国発の科学技術イノベーションの創出、グローバル化を担う人材の育成、震災の経験を活かした防災対策、地球温暖化等の環境問題への対応、今後ますます進行する高齢化と人口減少の克服、活力ある地方の創生、そして、こうした現代社会に飛び立っていく若者の育成。</p> <p>【p.2】 国立大学に求められている社会的役割</p> <p>各大学において、学生に身に付けさせるべき資質・能力を明確にし、それに基づく学位授与の方針(ディプロマ・ポリシー)や教育課程の編成の方針(カリキュラム・ポリシー)が適切に設定されてきたか、能動的学習(アクティブ・ラーニング)、科目番号制(ナンバリング)の導入や教育課程の体系化等を通じて全学的な教学マネジメントを確立するとともに、学修成果の把握、厳格な成績評価に取り組むなど、特色ある教育研究を行う体制がとられてきたか、という観点から、現在行っている教育内容・方法やその基盤となる組織のあり方等を点検し、変化する社会の中で学生が生涯を通じて活躍することができる力を養うことができる教育を目指していく必要がある。</p>
-----------	--

<p>官 09</p>	
<p>タイトル</p>	<p>産業競争力とデザインを考える研究会-報告書 (平成 30 年 5 月 23 日)</p>
<p>URL</p>	<p>http://www.meti.go.jp/report/whitepaper/data/20180523001.html</p>
<p>資料名</p>	<p>産業競争力とデザインを考える研究会報告書『「デザイン経営」宣言』+ 報告書別冊『「デザイン経営」の先行事例』</p>
<p>キーワード</p>	<p>※各企業のデザイン経営に対する取り組みと考え方がまとめられている。 発明とイノベーションをつなぐデザイン、高度デザイン人材の育成、デザイン経営、ブランド力、イノベーション力、ウォーターフォール型からアジャイル型</p>
<p>抜粋</p>	<p>【P12】産業競争力とデザインを考える研究会報告書『「デザイン経営」宣言』より 企業・大学等において、事業課題を創造的に解決できる人材(高度デザイン人材)の育成を推進する。企業においては、ビジネス系・テクノロジー系人材がデザイン思考を、デザイン系人材がビジネス・テクノロジーの基礎を身につけるための研修などを実施するとともに、専門領域の異なる人材同士が創造的に課題を解決するプロジェクトやワークショップなどを導入する。</p> <p>【p2-10】報告書別冊『「デザイン経営」の先行事例』より</p> <ul style="list-style-type: none"> ・技術者・マーケター・デザイナーが共創しながら新領域のイノベーションにチャレンジ。 (パナソニック株式会社) ・イノベーションを起こすという観点で、製品ごとの担当制をやめ、多様なバックグラウンドのメンバーでチームを組むようにした(株式会社イトーキ) ・製品開発にデザイナーが企画段階から携わり、エンジニアと協働することで、エンドユーザーの視点を取り入れることに成功している(ソニー株式会社) ・かつては製品を開発する際には機能を考えるところから始めていたものを、まずは製品のデザインを提案するスタンスに変わった。(TOTO 株式会社) ・デザイナーは顧客インサイト等のより潜在的な課題の発見・掘り起こしと、それらの課題をどう解

	<p>決めるのかをデザインすることが求められている。(NEC)</p> <p>・大学でデザイン+工学的教育といったハイブリッド教育を受けている人を探している (株式会社 日立製作所)</p>
--	---

官 10	
タイトル	内閣府「Society 5.0」
URL	http://www8.cao.go.jp/cstp/society5_0/index.html
資料名	第5期科学技術基本計画(PDF ファイル)
キーワード	超スマート社会(Society5.0)、分野横断的な連携、イノベーション、社会実装
抜粋	<p>【p.1】はじめに</p> <p>人々に豊かさをもたらす「超スマート社会」を未来の姿として提起し、新しい価値やサービス、ビジネスが次々と生まれる仕組み作りを強化する。国際協調の中にも戦略性を持って科学技術イノベーションを活用し、国内外の課題の解決を図る。</p> <p>【p.13】「超スマート社会」における競争力向上と基盤技術の強化</p> <p>①競争力向上に必要となる取組</p> <p>新しい価値やサービスを生み出す事業の創出や、新しい事業モデルを構築できる人材、データ解析やプログラミング等の基本的知識を持ちつつビッグデータや AI 等の基盤技術を新しい課題の発見・解決に活用できる人材などの強化を図る。</p> <p>【p.47】科学技術イノベーションと社会の関係深化</p> <p>研究者等と社会の多様なステークホルダーとをつなぐ役割を担う人材である科学コミュニケーター等が活躍し、双方向の対話・協働においても能動的な役割を担うことが期待される</p>

官 11	
タイトル	首相官邸政策会議 持続可能な開発目標(SDG's)推進本部「SDG's アクションプラン 2018」
URL	http://www.kantei.go.jp/jp/singi/sdgs/pdf/actionplan2018.pdf
資料名	2019年に日本の「SDG's モデル」の発信を目指して
キーワード	破壊的イノベーション、次世代エンパワーメント
抜粋	<p>I .SDGs と連動する「Society 5.0」の推進</p> <p>II .SDGs を原動力とした地方創生, 強靱かつ環境に優しい魅力的なまちづくり</p> <p>III.SDGs の担い手として 次世代・女性のエンパワーメント</p>

官 12	
タイトル	国際連合広報 持続可能な開発目標(SDGs)
URL	https://www.mofa.go.jp/mofaj/files/000101402.pdf
資料名	我々の世界を変革する:持続可能な開発のための 2030 アジェンダ
キーワード	グローバル・シチズンシップ、イノベーション、計画を実施するための政府やコミュニティとの協働
抜粋	<p>【p. 7】</p> <p>地域社会のつながりと安全の確保の他、イノベーションと雇用を促進するための都市や人間の居住地の更新、計画を実施するために地方政府やコミュニティと協働する。</p>

	<p>【p. 7】 文化間の理解、寛容、相互尊重、グローバル・シチズンシップとしての倫理、共同の責任を促進することを約束する。我々は、世界の自然と文化の多様性を認め、すべての文化・文明は持続可能な開発に貢献するばかりでなく、重要な成功への鍵であると認識する。</p> <p>【p. 19】目標 8 ディーセントワーク 8.2 高付加価値セクターや労働集約型セクターに重点を置くこと等により、多様化、技術向上及びイノベーションを通じた高いレベルの経済生産性を達成する。</p> <p>【p. 20】目標 9 包摂的かつ持続可能な産業化の促進及びイノベーションの推進 2030 年までにイノベーションを促進させることや 100 万人当たりの研究開発従事者 数を大幅に増加させ、また官民研究開発の支出を拡大させるなど、開発途上国をはじめとするすべての国々の産業セクターにおける科学研究を促進し、技術能力を向上させる。</p>
--	---

産業界の根拠資料(産 01～05)

産 01	
タイトル	日立グループ 研究開発 「研究領域 デザイン」
URL	https://www.hitachi.co.jp/rd/research/design/index.html
資料名	日立グループ Web サイト「研究領域ーデザイン」
キーワード	ビジョンデザイン、Society 5.0、QOL
抜粋	<p>■生活者の QoL を向上させる社会イノベーションデザイン</p> <p>「人の行動プロセスを洞察し、社会が直面している課題を理解しながら、人々が潜在的に期待している将来の姿をビジョンとして描き、その効果をわかりやすく見える化して共感を得る。そして、お客さまや地域の方々との協創により新たな価値を創っていくことが、デザインの役割と考えています。デザインの力により生活家電から社会システムソリューションまで幅広くユーザーエクスペリエンスを創造し、人々の QoL を向上することをミッションとしています。」</p> <p>■ビジョンデザイン</p> <ul style="list-style-type: none"> ・新しい社会システムのあり方を考えるための問題提起 <p>「社会を支えるシステムの運営には複雑に問題が絡み合っていて、ひとつの会社があるべき姿を示せるものではなくなってきました。」「社会を支えるシステムのあるべき姿やその中で役割を探っていくために、議論のたたき台としての将来像を示すのがビジョンデザインです。」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・人間だけでは出来ない、技術ならではの人への寄り添い方 <p>「ビジョンデザインでは、新しい技術が意図せずにもたらしてしまうかもしれない問題や、新しい技術だけでは解決できない問題にも目を向けていきます。」</p>

産 02	
タイトル	DAIKIN design 「デザインはもっと社会の幅広い領域で挑戦できる」
URL	https://www.daikin.co.jp/design/2017/11/entry-24.html

資料名	DAIKIN design 「Inspire」
キーワード	モノからコトのデザイン
抜粋	<p>「モノからコトのデザインになってきました。」</p> <p>「デザインの枠自体がなくなってきています。」</p> <p>「以前はいわゆるモノのデザインみたいなものがあつたのですが、だんだんモノのかたちさえなくなって、デザインの主体はシステムや環境になってきています。」</p> <p>「逆に言うとなデザイナーの領域は、以前よりもかえって広がっていると思います。もうモノだけではなくてトータルに環境も含めて関わることができる。というかやらざるをえない状況だと思います。大学での教育も、単純に絵を描いていればいいというわけではなくて、川上から川下までどのようにしてトータルで考えていくことができるかが課題になっています。」</p>

産 03	
タイトル	ソニーのデザインリサーチプロジェクト 「DESIGN VISION」
URL	https://www.sony.co.jp/SonyInfo/design/stories/designvision/
資料名	SONY design 「Stories デザインが生まれるまでのストーリー」
キーワード	モノからコトのデザイン、ビジョン
抜粋	<ul style="list-style-type: none"> ・ソニークリエイティブセンターのデザインリサーチプロジェクト <p>「技術の進展や世界の情勢がめまぐるしく変化していくなかで、社会における企業のあり方や使命について考え、新たな方向性を導くには、どうすればいいか。「DESIGN VISION」はこの問題に対し、デザインの力を活用して世の中の潮流や感性価値の動向をいち早く捉え、領域や部門を超えて新たな視点やヒントを提示するために、クリエイティブセンター内で発足したプロジェクトです。」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・デザイン領域を広げる「DESIGN VISION」の展望 <p>「デザインリサーチで得られたビジョンを、どのように具体的なアクションへとつなげていくか。デザイナー自らが体験の中から紡いだストーリーを、新たなプロダクトやサービス、コミュニケーションなど、具体的なデザインワークへと落とし込んでいく道筋が求められます。」</p>

産 04	
タイトル	富士通株式会社 「FUJITSU Co-creating Program Experience Design Service」
URL	https://www.fujitsu.com/jp/services/business-application-services/business-consulting/co-creating-program/design-services/
資料名	「FUJITSU Co-creating Program Experience Design Service」
キーワード	デザイン思考、テクノロジー、ビジョン計画を実施するための政府やコミュニティとの協働
抜粋	<p>■FEATURE(特徴)</p> <p>「テクノロジーによる解決にとどまらないデザイン思考をベースにした共創デザインサービス」</p> <p>■Process</p> <p>「人や社会、技術を理解し、人の経験や行動原理をベースにビジョンを描き、それを実現する仕</p>

	<p>組みを考え、必要なサービスやプロダクト、空間まで一貫して開発する総合的なデザイン活動を実践している」、「ユーザーにとってのより良いエクスペリエンスに関わる全てのデザイン要素を、総合的かつ一貫して考え、新たなビジネスを描くデザイン活動を Human Centric Experience Design (HXD)と呼び、そのためのデザイン方法論を構築している」</p>
--	--

産 05	
タイトル	LINE 株式会社 「2020 年デザイン職の求人情報」
URL	https://linecorp.com/ja/career/newgrads/design/
資料名	LINE 株式会社 採用情報について
キーワード	UI デザイン、プロモーションデザイン、デザインガイド
抜粋	<p>■UI デザイナー</p> <p>「LINE が提供する様々なモバイルアプリや Web サイトにおける UI デザイン・プロモーションデザイン、そのデザインガイドなどを企画・制作します。ユーザーにより価値のある体験を提供し、デザイン観点での課題解決およびプロダクトの成長に貢献する業務を行います。」</p> <p>■求める人材像(インタビュー)</p> <p>「LINE のデザイン組織に求められることは、問題を解決するためのより良いデザインを追求すること、そして、普遍的なデザインの解決策を提示することです。」</p> <p>「大きな役割としては、もちろんデザインをつくること、そしてそのデザインによってサービスや事業、そしてユーザーの課題を解決し、LINE のミッションである「CLOSING THE DISTANCE」をデザインの力で推進していくことが求められます。」</p> <p>「ただ美しいもの、斬新なものをつくる人ではなく、課題を解決するために誰よりもユーザー視点に立ちより良いアイデアを生み出し続ける人がデザイナーです。」</p> <p>「事業領域ごとに、サービスや事業の環境を深く理解することで、これから訪れる変化をキャッチアップし、デザイナーの立場から事業やサービスをリードすることを求めています。色々な事業部と協業する中でもリーダーシップを発揮して、個人としても挑戦しながら、事業・サービスとしての挑戦も率いてくれることを期待しています。」</p>

産 06	
タイトル	NEC 株式会社 「business leaders square wisdom」
URL	https://wisdom.nec.com/ja/series/design/2020042801/index.html
資料名	NEC 株式会社 「business leaders square wisdom」 「日本を変える「デザインの力」とは。未来を創造するための処方箋」
キーワード	デザイン思考
抜粋	<p>■デザイン思考によって真の課題を掘り起こしていく</p> <p>「近年注目されているのが、「デザイン」の活用である。ここでいう「デザイン」とは「モノのデザイン」ではなく、ユーザ視点で課題を解決し、仕組みや枠組みを作る「コトのデザイン」のことだ。」</p> <p>「多様な考え方や哲学を束ねるために、デザインは非常に有効です。散在している人の思いや考えを束ねて、映像や絵を描いたり、インタフェースを作ったりしながら、具体的な形を見せて、1 つの方向に向かわせることができるからです。第四次産業革命の時代だからこそ、哲学や思</p>

考も含めたデザインが必要で、『僕らはこの時代にあって、こういう課題感を持ち、こういう風に動いていくんだ』という枠組みを作らないといけない。そのためにはデザインがわかる人を入れるか、もしくは必要なスキルセットを身につけることが重要だと考えています」

「デザインが得意とするのは、『見えないことを見えるようにする』ことです。まだ顕在化していない課題を見つけて 1 つのパッケージにし、多くの企業が参画できるようにすることが、デザインが果たすべき重要な役割の 1 つ。デザイン的な発想を持つ人間が、貧困や感染症などさまざまな問題に光を当て、企業が持つ IP (Intellectual Property: 知的財産) を再利用して、人を救うために役立てる。デザインの力を利用して、より一層 SDGs 的な考え方を実装していくことが、今は求められているのです」

「今は人間中心でデザインを考える、人間中心設計 (Human Centered Design: HCD) が主流になっています。人を中心に据えた時、このテクノロジーや仕組みは本当に必要なのか。そのことを、もう一度因数分解して評価する時代が到来しつつある気がします」

新しい芸術工学府（修士課程）に関するアンケート調査【学部生用】

【アンケート回答締切：2021年2月12日（金）】

芸術工学府を2022年4月から新しい教育課程に再編する予定です（構想中）。
 修士課程は現在の2専攻5コース制から1専攻6コース制に、博士後期課程は
 2専攻5コース制から1専攻1コース制に変更となります。別途配布している
 パンフレットにその概要が記載されていますので、内容を確認いただき、
**あなたが大学院に進学するとした場合、以下のアンケートにご回答お願い
 いたします。**なお、アンケートは右のQRコードもしくはこちらのフォームから
 もご回答いただけます。



Q1. あなたの所属・学年・学生区分を教えてください（該当するものに✓を付けてください）。

- a. 所属 環境設計学科 工業設計学科 画像設計学科
 音響設計学科 芸術情報設計学科
- b. 学年 学部2年 学部3年 学部4年
- c. 学生区分 一般学生 留学生 社会人

Q2. 新しい芸術工学府 芸術工学専攻の4つの特色の魅力度について、5段階でお答えください。
 （該当するものに✓を付けてください）

1 2 3 4 5
 魅力がある ○ — ○ — ○ — ○ — ○ 全く魅力はない

Q2で回答した理由などがあればお書きください（自由記述）。

[]

Q3. 再編後の修士課程では、以下のようなカリキュラム上の特色が生まれます。それぞれについて
 魅力を感じるかどうか、またその理由を教えてください（該当するものに✓を付けてください）。

- a. 「モノ」のデザインを重視してきた従来の「芸術工学府」とデザインを社会実装するための戦略を
 中心としてきた「デザイン戦略専攻」を統合し、全体として「拡大するデザイン領域に対
 するデザインセンスを持つ」人材、高次のデザイナーの育成するためのカリキュラムを構築します。

1 2 3 4 5
 魅力がある ○ — ○ — ○ — ○ — ○ 全く魅力はない

Q3-aで回答した理由などがあればお書きください（自由記述）。

[]

- b. 6コースを設置して専門性を深化させる一方で、分野横断的な教育実践を可能とするため、コース
 間の障壁が低くなるよう、少ない必修科目の設定、コース間共通科目の配置、分野横断を推進する
 科目群による単位履修制度を構築します。

1 2 3 4 5
 魅力がある ○ — ○ — ○ — ○ — ○ 全く魅力はない

Q3-bで回答した理由などがあればお書きください（自由記述）。

[]

- c. 特色ある授業として、コース横断型のデザインプロジェクト演習科目である「スタジオプロ
 ジェクト科目」を提供し、実践的な演習課題により「モノ」、「コト」、「ビジョン」の要素を
 総合するデザインを学ぶことができます。

1 2 3 4 5
 魅力がある ○ — ○ — ○ — ○ — ○ 全く魅力はない

Q3-cで回答した理由などがあればお書きください（自由記述）。

[]

- d. 入試も授業履修も論文作成も全て（受験から修了まで）、英語で行うことが選択できるよう
 なります。それにより、一段と国際色豊かな学生が入学する可能性が増します。

1 2 3 4 5
 魅力がある ○ — ○ — ○ — ○ — ○ 全く魅力はない

Q3-dで回答した理由などがあればお書きください（自由記述）。

[]

Q4. 再編後の芸術工学府修士課程は1専攻6コース制となります。あなたが進学するとしたら、
 もっとも進学したいコースはどこですか？（該当するものに✓を付けてください）。

- ストラテジックデザインコース 環境設計コース 人間生活デザインコース
 未来共生デザインコース メディアデザインコース 音響設計コース
 その他（ ）

Q4で回答したコースに魅力を感じる理由をお書きください（自由記述）。

[]

Q5. 上記以外にも進学を検討したいコースがあればお答えください（複数選択可、該当するものに
 ✓を付けてください）。

- ストラテジックデザインコース 環境設計コース 人間生活デザインコース
 未来共生デザインコース メディアデザインコース 音響設計コース
 特になし（ ）

Q5で回答したコースに魅力を感じる理由をお書きください（複数ある場合はそれぞれの理由を
 お書きください）。

[]

Q6. 再編後の芸術工学府では専門に特化したサーティフィケート・プログラム（履修プログラム）を実施します。それぞれについて魅力を感じるかどうか、またその理由を教えてください（該当するものに✓を付けてください）。

a. 「クリエイティブリーダーシッププログラム」は、デザイン、アート、ビジネス、リーダーシップの4要件からなる「高度デザイン人材」の育成を目的としたプログラムです。

1 2 3 4 5
魅力がある ○ — ○ — ○ — ○ — ○ 全く魅力はない

Q6-a で回答した理由などがあればお書きください（自由記述）。

[]

b. 「グローバル・アーキテクト・プログラム」は、建築・環境設計に関する工学的知識及び文化芸術に関する知識を備えた、総合的設計能力を有する人材の育成を目的としたプログラムです。

1 2 3 4 5
魅力がある ○ — ○ — ○ — ○ — ○ 全く魅力はない

Q6-b で回答した理由などがあればお書きください（自由記述）。

[]

c. 「ホールマネジメントエンジニア育成プログラム」は、ハードとしてのホール機能の理解と、そこで上演されるコンテンツの芸術文化の理解、加えてそれを実際に企画運用するための企画・実践能力を兼ね備えた人材の育成を目的としたプログラムです。

1 2 3 4 5
魅力がある ○ — ○ — ○ — ○ — ○ 全く魅力はない

Q6-c で回答した理由などがあればお書きください（自由記述）。

[]

Q7. 再編後の修士課程では、一般入試、留学生入試、社会人入試を統合します。日本語・英語の両方で「自己推薦入試（書類選考＋面接）」及び「一般入試（専門科目試験＋面接）」を実施し、異なった文化的・社会的背景もつ多様な人材の受入れをはかります。このような仕組みに魅力を感じるかどうか、またその理由を教えてください。（該当するものに✓を付けてください）。

1 2 3 4 5
魅力がある ○ — ○ — ○ — ○ — ○ 全く魅力はない

Q7 で回答した理由などがあればお書きください（自由記述）。

[]

Q8. 芸術工学府 芸術工学専攻（修士課程）の再編に対してご意見・ご要望がございましたら、ご自由にお書きください。

[]

アンケートは以上です。ご協力ありがとうございました。なお、ご回答いただいた情報は統計的に処理を行い、そのままの形や個人が特定できる形で公表することは一切ございません。アンケートにつきご不明な点がございましたら、下記担当係あてにご連絡ください。

【問合せ先】九州大学芸術工学部事務部 総務課 企画・広報係（大橋キャンパス管理棟2階）
TEL：092-553-4442 / E-mail：gkjimubu@design.kyushu-u.ac.jp

2021. 1. 27

新しい芸術工学府に関するアンケート調査【大学院生用】

【アンケート回答締切：2021年2月12日（金）】

芸術工学府を2022年4月から新しい教育課程に再編する予定です（構想中）。修士課程は現在の2専攻5コース制から1専攻6コース制に、博士後期課程は2専攻5コース制から1専攻1コース制に変更となります。別途配布しているパンフレットにその概要が記載されていますので、内容を確認いただき、あなたが大学院に進学するとの想定の上で、以下のアンケートにご回答をお願いします。なお、アンケートは右のQRコードもしくはこちらのフォームからご回答いただけます。



- Q1. あなたの所属と学年を教えてください。（該当するものに✓を付けてください）。
a. 所属 □ デザイン人間科学（国際コース含む） □ コミュニケーションデザイン科学 □ 環境・遺産デザイン □ コンテンツ・クリエイティブデザイン □ デザインストラテジー専攻
b. 学年 □ 修士1年 □ 修士2年 □ 博士後期課程1年 □ 博士後期課程2年 □ 博士後期課程3年
c. 学生区分 □ 一般学生 □ 留学生 □ 社会人

Q2. 新しい芸術工学府 芸術工学専攻の4つの特色の魅力度について、5段階でお答えください。（該当するものに✓を付けてください。）

1 2 3 4 5
魅力がある ○ — ○ — ○ — ○ — ○ 全く魅力はない

Q2で回答した理由などがあればお書きください（自由記述）。

[]

A. 修士課程

Q3. 再編後の修士課程では、以下のようなカリキュラム上の特色が生まれます。それぞれについて魅力を感じるかどうか、またその理由を教えてください（該当するものに✓を付けてください）。

- a. 「モノ」のデザインを重視してきた従来の「芸術工学府」とデザインを社会実装するための戦略を中心としてきた「デザインストラテジー専攻」を統合し、全体として「拡大するデザイン領域に対するデザインセンスを持つ」人材、高次のデザイナーの育成するためのカリキュラムを構築します。

1 2 3 4 5
魅力がある ○ — ○ — ○ — ○ — ○ 全く魅力はない

Q3-aで回答した理由などがあればお書きください（自由記述）。

[]

- b. 6コースを設置して専門性を深化させる一方で、分野横断的な教育実践を可能とするため、コース間の障壁が低くなるよう、少ない必修科目の設定、コース間共通科目の配置、分野横断を推進する科目群による単位履修制度を構築します。

1 2 3 4 5
魅力がある ○ — ○ — ○ — ○ — ○ 全く魅力はない

Q3-bで回答した理由などがあればお書きください（自由記述）。

[]

- c. 特色ある授業として、コース横断型のデザインプロジェクト演習科目である「スタジオプロジェクト科目」を提供し、実践的な演習課題により「モノ」、「コト」、「ビジョン」の要素を総合するデザインを学ぶことができます。

1 2 3 4 5
魅力がある ○ — ○ — ○ — ○ — ○ 全く魅力はない

Q3-cで回答した理由などがあればお書きください（自由記述）。

[]

- d. 入試も授業履修も論文作成も全て（受験から修了まで）、英語で行うことが選択できるようになります。それにより、一段と国際色豊かな学生が入学する可能性が増します。

1 2 3 4 5
魅力がある ○ — ○ — ○ — ○ — ○ 全く魅力はない

Q3-dで回答した理由などがあればお書きください（自由記述）。

[]

Q4. 再編後の芸術工学府修士課程は1専攻6コース制となります。あなたが進学するとしたら、もっとも進学したいコースはどこですか？（該当するものに✓を付けてください）。

- ストラテジックデザインコース □ 環境設計コース □ 人間生活デザインコース □ 未来共生デザインコース □ メディアデザインコース □ 音響設計コース □ その他（ ）

Q4で回答したコースに魅力を感じる理由をお書きください（自由記述）。

[]

Q5. 上記以外にも進学を検討したいコースがあればお答えください（複数選択可、該当するものに✓を付けてください）。

- ストラテジックデザインコース □ 環境設計コース □ 人間生活デザインコース □ 未来共生デザインコース □ メディアデザインコース □ 音響設計コース □ 特になし（ ）

Q5で回答したコースに魅力を感じる理由をお書きください（複数ある場合はそれぞれの理由をお書きください）。

[]

Q6. 再編後の芸術工学府では専門に特化したサーティフィケート・プログラム（履修プログラム）を実施します。それぞれについて魅力を感じるかどうか、またその理由を教えてください（該当するものに✓を付けてください）。

a. 「クリエイティブリーダーシッププログラム」は、デザイン、アート、ビジネス、リーダーシップの4要件からなる「高度デザイン人材」の育成を目的としたプログラムです。

1 2 3 4 5
魅力がある ○ — ○ — ○ — ○ — ○ 全く魅力はない

Q6-a で回答した理由などがあればお書きください（自由記述）。

[]

b. 「グローバル・アーキテクト・プログラム」は、建築・環境設計に関する工学的知識及び文化芸術に関する知識を備えた、総合的設計能力を有する人材の育成を目的としたプログラムです。

1 2 3 4 5
魅力がある ○ — ○ — ○ — ○ — ○ 全く魅力はない

Q6-b で回答した理由などがあればお書きください（自由記述）。

[]

c. 「ホールマネジメントエンジニア育成プログラム」は、ハードとしてのホール機能の理解と、そこで上演されるコンテンツの芸術文化の理解、加えてそれを実際に企画運用するための企画・実践能力を兼ね備えた人材の育成を目的としたプログラムです。

1 2 3 4 5
魅力がある ○ — ○ — ○ — ○ — ○ 全く魅力はない

Q6-c で回答した理由などがあればお書きください（自由記述）。

[]

Q7. 再編後の修士課程では、一般入試、留学生入試、社会人入試を統合します。日本語・英語の両方で「自己推薦入試（書類選考+面接）」及び「一般入試（専門科目試験+面接）」を実施し、異なった文化的・社会的背景もつ多様な人材の受入れを図ります。このような仕組みに魅力を感じるかどうか、5段階でお答えください。（該当するものに✓を付けてください）。

1 2 3 4 5
魅力がある ○ — ○ — ○ — ○ — ○ 全く魅力はない

Q7 で回答した理由などがあればお書きください（自由記述）。

[]

Q8. 芸術工学府 芸術工学専攻（修士課程）の再編に対してご意見・ご要望がございましたら、ご自由にお書きください。

[]

B. 博士後期課程

Q9. 再編後の博士後期課程は、以下のようなカリキュラム上の特色が生まれます。それぞれについて魅力を感じるかどうか、またその理由を教えてください（該当するものに✓を付けてください）。

a. 学生の自由な意志を尊重し、柔軟な運用を図るために、芸術工学専攻とデザインストラテジー専攻を統合した1専攻1コース制を採用します。

1 2 3 4 5
魅力がある ○ — ○ — ○ — ○ — ○ 全く魅力はない

Q9-a で回答した理由などがあればお書きください（自由記述）。

[]

b. 研究の質を担保し、幅広い知的基盤を獲得する体系的な教育機能と、先端的・専門的学術研究機能の両者を備えた環境を構築するために、複数・多分野から最適な指導教員グループによる体制を整えます。

1 2 3 4 5
魅力がある ○ — ○ — ○ — ○ — ○ 全く魅力はない

Q9-b で回答した理由などがあればお書きください（自由記述）。

[]

Q10. 再編後の博士後期課程では、社会人、留学生など多様な人材を受け入れるために、従来の入試区分（一般選抜、社会人選抜、留学生選抜）を一本化して実施する予定です。このような仕組みに魅力を感じるかどうか、またその理由を教えてください。（該当するものに✓を付けてください）。

1 2 3 4 5
魅力がある ○ — ○ — ○ — ○ — ○ 全く魅力はない

Q10 で回答した理由などがあればお書きください（自由記述）。

[]

Q11. 芸術工学府 芸術工学専攻（博士後期課程）の再編に対してご意見・ご要望がございましたら、ご自由にお書きください。

[]

アンケートは以上です。ご協力ありがとうございました。なお、ご回答いただいた情報は統計的に処理を行い、そのままの形や個人が特定できる形で公表することは一切ございません。アンケートにつきご不明な点がありましたら、下記担当係あてにご連絡ください。

【問合せ先】九州大学芸術工学部事務部 総務課 企画・広報係（大橋キャンパス管理棟2階）
TEL : 092-553-4442 / E-mail : gkjimubu@design.kyushu-u.ac.jp

九州大学大学院芸術工学府改組に関するアンケート【卒業生・修了生向け】

【アンケート回答締切：2021年2月12日（金）】

芸術工学府を2022年4月から新しい教育課程に再編する予定です(構想中)。別途配布しているパンフレットにその概要が記載されていますので、ご一読いただき、以下の質問にご回答いただきますよう、よろしくお願いいたします。なお、アンケートは右のQRコードもしくは[こちらのフォーム](#)からもご回答いただけます。



Q1. あなた自身についてお伺いします。

a. あなたが卒業・修了した専攻、コース、学科等をご記入願います。

(.....)

b. 卒業(修了)年度を西暦または和暦でご記入ください。

芸術工学部(.....)年 / 大学院芸術工学府(.....)年

c. 現在のあなたの主たる業種をお選びください。(該当するものに✓を付けてください。)

農業、林業 漁業 鉱業、採石業、砂利採取業 建設業 製造業

電気・ガス・熱供給・水道業 情報通信業 運輸業、郵便業

卸売業、小売業 金融業、保険業 不動産業、物品賃貸業

学術研究、専門、技術サービス業 宿泊業、飲食サービス業

生活関連サービス業、娯楽業 教育、学修支援業 医療、福祉

複合サービス事業 サービス業 公務

その他(.....)

Q2. 新たな芸術工学府では、拡大するデザイン領域に対応する力、課題解決能力、横断的な知識及び芸術的感性を基盤とする「高次のデザイナー」の育成をはかります。このような人材の需要度について5段階でお答えください。(該当するものに✓を付けてください。)

1 2 3 4 5
需要がある ○ — ○ — ○ — ○ — ○ 全く需要はない

Q3. 「新しい専攻、新しいデザイン教育」における4つの特色の魅力度について、5段階でお答えください。(該当するものに✓を付けてください。)

1 2 3 4 5
魅力がある ○ — ○ — ○ — ○ — ○ 全く魅力がない

Q4. 芸術工学府(修士課程)のカリキュラム上の特色の魅力度について、5段階でお答えください。(該当するものに✓を付けてください。)

1 2 3 4 5
魅力がある ○ — ○ — ○ — ○ — ○ 全く魅力がない

(裏面に続く)

Q5. 芸術工学府（博士後期課程）のカリキュラム上の特色の魅力度について、5段階でお答えください。（該当するものに✓を付けてください。）

1 2 3 4 5
魅力がある ○ — ○ — ○ — ○ — ○ 全く魅力がない

Q6. 芸術工学府で開設する専門に特化したサーティフィケート・プログラム（履修プログラム）のうち、「クリエイティブリーダーシッププログラム」についてお聞きします。デザインとビジネスを融合した実践的な教育プログラムに対する興味について、5段階でお答えください。（該当するものに✓を付けてください。）

1 2 3 4 5
興味がある ○ — ○ — ○ — ○ — ○ 全く興味がない

Q7. 芸術工学府では、試験区分（一般入試、社会人入試、国際コース入試）を一本化し、異なった文化的・社会的背景もつ多様な人材の受入れと、将来のデザイン分野を先導できる基本的資質を備えた個性（一芸に秀でた能力など）豊かな者の選抜をはかります。このような入試制度の魅力度について5段階でお答えください。（該当するものに✓を付けてください。）

1 2 3 4 5
魅力がある ○ — ○ — ○ — ○ — ○ 全く魅力がない

Q8. これからの芸術工学府の学生には、どのような知識・能力が必要だと思われませんか？（該当するものに✓を付けてください。）

- 専門知識 複数分野にまたがる知識 企画・開発能力 課題解決能力
 分析能力 芸術的感性 リーダーシップ 英語力
 その他（.....）

Q9. 芸術工学府について、ご要望・ご期待等がございましたらご記入ください。（自由記述）

[]

アンケートは以上です。ご協力ありがとうございました。なお、ご回答いただいた情報は統計的な処理を行い、そのままの形や企業名が特定できる形で公表することは一切ございません。アンケートにつきご不明な点がありましたら、下記担当係あてにご連絡ください。

【問合せ先】九州大学芸術工学部事務部 総務課 企画・広報係（大橋キャンパス管理棟2階）
TEL：092-553-4442 / E-mail：gkjimubu@design.kyushu-u.ac.jp

2021. 1. 27

九州大学大学院芸術工学府改組に関するアンケート【企業向け】

【アンケート回答締切：2021年2月12日（金）】

芸術工学府を2022年4月から新しい教育課程に再編する予定です(構想中)。別途配布しているパンフレットにその概要が記載されていますので、ご一読いただき、以下の質問にご回答いただきますよう、よろしくお願いいたします。なお、アンケートは右のQRコードもしくは[こちらのフォーム](#)からもご回答いただけます。



Q1. 貴社の概要についてお伺いします。

a. 貴社（機関）名 (.....)

b. 本社（機関）所在地 (.....)

c. 貴社の主たる業種をお選びください。（該当するものに✓を付けてください。）

- 農業、林業 漁業 鉱業、採石業、砂利採取業 建設業 製造業
- 電気・ガス・熱供給・水道業 情報通信業 運輸業、郵便業
- 卸売業、小売業 金融業、保険業 不動産業、物品賃貸業
- 学術研究、専門、技術サービス業 宿泊業、飲食サービス業
- 生活関連サービス業、娯楽業 教育、学修支援業 医療、福祉
- 複合サービス事業 サービス業 公務
- その他 (.....)

Q2. 新たな芸術工学府（以下、芸術工学府）では、拡大するデザイン領域に対応する力、課題解決能力、横断的な知識及び芸術的感性を基盤とする「高次のデザイナー」の育成をはかります。このような人材の社会での有用性について5段階でお答えください。（該当するものに✓を付けてください。）

1 2 3 4 5
有用である ○ — ○ — ○ — ○ — ○ 有用でない

Q3. 「新しい専攻、新しいデザイン教育」における4つの特色について、企業等の立場からの評価について、5段階でお答えください。（該当するものに✓を付けてください。）

1 2 3 4 5
評価できる ○ — ○ — ○ — ○ — ○ 評価できない

Q4. 芸術工学府（修士課程）のカリキュラム上の特色について、企業等の立場からの評価について、5段階でお答えください。（該当するものに✓を付けてください。）

1 2 3 4 5
評価できる ○ — ○ — ○ — ○ — ○ 評価できない

（裏面に続く）

Q5. 芸術工学府（博士後期課程）のカリキュラム上の特色について、企業等の立場からの評価について、5段階でお答えください。（該当するものに✓を付けてください。）

1 2 3 4 5
評価できる ○ — ○ — ○ — ○ — ○ 評価できない

Q6. 芸術工学府で開設する専門に特化したサーティフィケート・プログラム（履修プログラム）のうち、「クリエイティブリーダーシッププログラム」についてお聞きします。貴社の社員の方を学生として受講させると想定した場合、プログラムの魅力について5段階でお答えください。（該当するものに✓を付けてください。）

1 2 3 4 5
魅力がある ○ — ○ — ○ — ○ — ○ 全く魅力的でない

Q7. 芸術工学府では、試験区分（一般入試、社会人入試、国際コース入試）を一本化し、異なった文化的・社会的背景もつ多様な人材の受入れと、将来のデザイン分野を先導できる基本的資質を備えた個性（一芸に秀でた能力など）豊かな者の選抜をはかります。このような入試制度に関する企業等の立場からの評価について、5段階でお答えください。（該当するものに✓を付けてください。）

1 2 3 4 5
評価できる ○ — ○ — ○ — ○ — ○ 評価できない

Q8. 今後、芸術工学府の修了生を採用する可能性についてお答えください。（該当するものに✓を付けてください。）

採用したい 採用の可能性はある 採用の可能性はない

Q9. Q8で「採用したい」または「採用の可能性はある」と回答された方にお伺いします。芸術工学府の修了生を採用する場合、どのような知識・能力を期待しますか？（該当するものに✓を付けてください。）

専門知識 複数分野にまたがる知識 企画・開発能力 課題解決能力
 分析能力 芸術的感性 リーダーシップ 英語力
 その他（.....）

Q10. 芸術工学府について、ご要望・ご期待等がございましたらご記入ください。（自由記述）

()

アンケートは以上です。ご協力ありがとうございました。なお、ご回答いただいた情報は統計的な処理を行い、そのままの形や企業名が特定できる形で公表することは一切ございません。アンケートにつきご不明な点がありましたら、下記担当係あてにご連絡ください。

【問合せ先】九州大学芸術工学部事務部 総務課 企画・広報係（大橋キャンパス管理棟2階）
TEL：092-553-4442 / E-mail：gkjimubu@design.kyushu-u.ac.jp

2021.1.27

留学生向けアンケート/ Questionnaire for international students

学生の皆様、下記アンケートへの回答を2月22日(月)までをお願いいたします。

所要時間は5分ほどです。

この結果は、九州大学における外国人学生のために環境改善のために利用されます。

皆様のご協力に心より感謝申し上げます。

Please take a few minutes to fill out this questionnaire by February 22.

Your answer will be utilized only for the improvement of international students at the Kyushu University.

Your cooperation would be highly appreciated.

Q1. あなたが通っている大学を教えてください。

Q1. What is the name of the university you are attending?

Q2. あなたは学部生ですか、大学院生ですか？

Q2. Are you an undergraduate or graduate student?

学部生/ Undergraduate student

大学院生/ Graduate student

Q3. あなたは、九州大学芸術工学部または九州大学大学院芸術工学府が主催するサマープログラムやワークショップや大学説明会などに参加したことがありますか？

Q3. Have you participated in summer programs, workshops, university information sessions, etc. held by the Graduate School of Design, Kyushu University?

はい/ Yes

いいえ/ No

Q4. Q3で「はい」と答えた方に伺います。プログラム等に参加して九州大学大学院芸術工学府の修士課程に進学してみたいと思いましたが？

Q4. This question is for those who answered "Yes" in Q3. After participating in the program, etc., did you think that you would like to enter the master's program of Graduate school of Design, Kyushu University?

ぜひ進学したい/ I would like to enter

条件が整えば進学する/ It depends on the conditions

進学に関心がある/ Interested

進学しない/ Not interested

Q5. Q3で「はい」と答えた方に伺います。プログラム等に参加して九州大学大学院芸術工学府の博士後期課程に進学してみたいと思いましたが？Q5.

This question is for those who answered "Yes" in Q3. After participating in

the program, etc., did you think that you would like to enter the doctoral course at the Graduate school of Design, Kyushu University? *

ぜひ進学したい/ I would like to enter

条件が整えば進学する/ It depends on the conditions

進学に関心がある/ Interested

進学しない/ Not interested

Q6. 九州大学大学院芸術工学府では、入学試験や授業等を全て英語で行い、日本語能力を問わず修士学位が修得できる制度を導入する予定です。このような制度が整えば、九州大学大学院芸術工学府修士課程に進学したいと思いますか？

Q6. The Graduate School of Design, Kyushu University is planning to introduce a system in which all entrance examinations and classes will be conducted in English, allowing students to earn a master's degree regardless of their Japanese language ability. If such a system is established, would you like to enter the master course at the Graduate School of Design, Kyushu University?

ぜひ進学したい/ I would like to enter

条件が整えば進学する/ It depends on the conditions

進学に関心がある/ Interested

進学しない/ Not interested

Q7. 九州大学大学院芸術工学府では、入学試験や授業等を全て英語で行い、日本語能力を問わず博士学位が修得できる制度を導入する予定です。このような制度が整えば、九州大学大学院芸術工学府博士後期課程に進学したいと思いますか？

Q7. The Graduate School of Design, Kyushu University plans to introduce a system that allows students to obtain a doctor's degree regardless of their Japanese proficiency by conducting all entrance examinations and classes in English. Did you consider going on to the doctoral course at the Graduate School of Design, Kyushu University?

ぜひ進学したい/ I would like to enter

条件が整えば進学する/ It depends on the conditions

進学に関心がある/ Interested

進学しない/ Not interested

Q8. 日本への留学を考えた時に、問題となるのはどのようなことですか？

Q8. What are some of the problems when you think about studying in Japan?

教育環境の充実（入学試験、授業の英語での実施等）

/ Educational environment (Entrance exam/ English Class, etc.)

経済的支援の充実（大学独自の奨学金等）

/ Financial support (Scholarship program, etc.)

就職支援の充実（大学による組織的なサポート等）

/ Employment support

その他 / Other

その他：

Q9. ご質問やご要望がございましたら、ご記入いただければ幸いです。

Q9. We would appreciate your informing us of any questions and requests you may have.

ご協力ありがとうございます。お寄せいただいた個人情報は、九州大学内で留学生の環境改善のためにのみ使用され、お客様の許可なく第三者に開示することはありません。

Thank you for your cooperation. The personal information submitted will only be used within Kyushu University to environmental improvement for international students, and we will not disclose the information to third parties without your permission.

アンケートにつきご不明な点がありましたら、下記担当係あてにご連絡ください。

If you have any questions about the questionnaire, please contact the person in charge below.

国立大学法人九州大学芸術工学部事務部 総務課 企画・広報係

E-mail : gkjimubu@design.kyushu-u.ac.jp

Kyushu University Administrative Office (Design)

General Affairs Division

Planning and Public Relations Section

E-mail : gkjimubu@design.kyushu-u.ac.jp

教 員 名 簿

学 長 の 氏 名 等						
調書 番号	役職名	フリガナ 氏名 <就任(予定)年月>	年齢	保有 学位等	月額基本給 (千円)	現 職 (就任年月)
-	学長	イハシ タツロ 石橋 達朗 <令和2年10月>		医学博士		九州大学学長 (令和2.10～令和8.9)

教 員 の 氏 名 等													
(大学院芸術工学府芸術工学専攻 修士課程)													
調書 番号	専任等 区分	職位	フリガナ 氏名 <就任(予定)年月>	年齢	保有 学位等	月額 基本給 (千円)	担当授業科目の名称	配当年次	担 当 単位数	年 間 開講数	現 職 (就任年月)	申請に係る大学等 の職務に従事する 週当たり平均日数	
1	専	教授 (学府長)	タニ マサカズ 谷 正和 <令和4年4月>		Doctor of Philosophy (7/19)		芸術工学特別研究Ⅰ 芸術工学特別研究Ⅱ 芸術工学演習 環境人類学特論 環境デザインプロジェクトA 環境デザインプロジェクトB スタジオプロジェクトI-A スタジオプロジェクトI-B スタジオプロジェクトII-A スタジオプロジェクトII-B スタジオプロジェクトIII-A スタジオプロジェクトIII-B スタジオプロジェクトIV-A スタジオプロジェクトIV-B	1前①～② 1後③～④ 1後④ 1前①～② 1前①～② 1後③～④ 1前① 1前① 1前② 1前② 1後③ 1後③ 1後③ 1後④ 1後④	4 4 4 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2	1 1 2 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	九州大学 芸術工学研究院 教授 (平15.10)	5日	
2	専	教授	イトウ ヒロユキ 伊藤 裕之 <令和4年4月>		博士 (文学) ※		芸術工学特別研究Ⅰ 芸術工学特別研究Ⅱ 芸術工学特別研究Ⅲ 芸術工学特別研究Ⅳ 芸術工学演習 視覚心理学特論 メディアデザインプレゼンテーション演習 スタジオプロジェクトI-A スタジオプロジェクトI-B スタジオプロジェクトII-A スタジオプロジェクトII-B スタジオプロジェクトIII-A スタジオプロジェクトIII-B スタジオプロジェクトIV-A スタジオプロジェクトIV-B	1前①～② 1後③～④ 2前①～② 2後③～④ 1後④ 1前② 2後③ 1前① 1前① 1前② 1前② 1後③ 1後③ 1後③ 1後④ 1後④ 1後④	4 4 4 4 4 1 2 2 2 2 2 2 2 2 2	1 1 1 1 2 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	九州大学 芸術工学研究院 教授 (平15.10)	5日	
3	専	教授	イノウエ シノブキ 井上 滋樹 <令和4年4月>		博士 (芸術工学)		芸術工学特別研究Ⅰ 芸術工学特別研究Ⅱ 芸術工学特別研究Ⅲ 芸術工学特別研究Ⅳ 芸術工学演習 サスティナブルデザイン スタジオプロジェクトI-A スタジオプロジェクトI-B スタジオプロジェクトII-A スタジオプロジェクトII-B スタジオプロジェクトIII-A スタジオプロジェクトIII-B スタジオプロジェクトIV-A スタジオプロジェクトIV-B	1前①～② 1後③～④ 2前①～② 2後③～④ 1後④ 1後③ 1前① 1前① 1前② 1前② 1後③ 1後③ 1後④ 1後④	4 4 4 4 4 1 2 2 2 2 2 2 2 2	1 1 1 1 2 1 1 1 1 1 1 1 1	九州大学 芸術工学研究院 教授 (平29.4.1)	5日	
4	専	教授	イハラ ヒロユキ 伊原 久裕 <令和4年4月>		博士 (芸術工学)		芸術工学特別研究Ⅰ 芸術工学特別研究Ⅱ 芸術工学特別研究Ⅲ 芸術工学特別研究Ⅳ 芸術工学演習 グラフィックデザイン特論 メディアデザインプレゼンテーション演習 スタジオプロジェクトI-A スタジオプロジェクトI-B スタジオプロジェクトII-A スタジオプロジェクトII-B スタジオプロジェクトIII-A スタジオプロジェクトIII-B スタジオプロジェクトIV-A スタジオプロジェクトIV-B	1前①～② 1後③～④ 2前①～② 2後③～④ 1後④ 1前② 2後③ 1前① 1前① 1前② 1前② 1後③ 1後③ 1後④ 1後④ 1後④	4 4 4 4 4 1 2 2 2 2 2 2 2 2	1 1 1 1 2 1 1 1 1 1 1 1 1 1	九州大学 芸術工学研究院 教授 (平15.10)	5日	

13	専	教授	コトウ(カリ) カコ 近藤(笠利) 加代子 <令和4年4月>	博士 (工学) ※	芸術工学特別研究Ⅰ 芸術工学特別研究Ⅱ 芸術工学特別研究Ⅲ 芸術工学特別研究Ⅳ 芸術工学演習 共生社会デザイン論 スタジオプロジェクトI-A スタジオプロジェクトI-B スタジオプロジェクトII-A スタジオプロジェクトII-B スタジオプロジェクトIII-A スタジオプロジェクトIII-B スタジオプロジェクトIV-A スタジオプロジェクトIV-B	1前①～② 1後③～④ 2前①～② 2後③～④ 1後④ 1前① 1前① 1前② 1前② 1後③ 1後③ 1後④ 1後④	4 4 4 4 4 1 2 2 2 2 2 2 2 2	1 1 1 1 2 1 1 1 1 1 1 1 1 1	九州大学 芸術工学研究院 教授 (平15.10)	5日
14	専	教授	シカ ショウ 須長 正治 <令和4年4月>	博士 (工学)	芸術工学特別研究Ⅰ 芸術工学特別研究Ⅱ 芸術工学特別研究Ⅲ 芸術工学特別研究Ⅳ 芸術工学演習 色彩科学特論 メディアデザインプレゼンテーション演習 スタジオプロジェクトI-A スタジオプロジェクトI-B スタジオプロジェクトII-A スタジオプロジェクトII-B スタジオプロジェクトIII-A スタジオプロジェクトIII-B スタジオプロジェクトIV-A スタジオプロジェクトIV-B	1前①～② 1後③～④ 2前①～② 2後③～④ 1後④ 1後③ 2後③ 1前① 1前① 1前② 1前② 1後③ 1後③ 1後④ 1後④	4 4 4 4 4 1 2 2 2 2 2 2 2 2 2	1 1 1 1 2 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	九州大学 芸術工学研究院 教授 (平15.10)	5日
15	専	教授	タノチ カズキ 竹之内 和樹 <令和4年4月>	工学博士 ※	芸術工学特別研究Ⅰ 芸術工学特別研究Ⅱ 芸術工学特別研究Ⅲ 芸術工学特別研究Ⅳ 芸術工学演習 メカニクスデザイン特論 メディアデザインプレゼンテーション演習 スタジオプロジェクトI-A スタジオプロジェクトI-B スタジオプロジェクトII-A スタジオプロジェクトII-B スタジオプロジェクトIII-A スタジオプロジェクトIII-B スタジオプロジェクトIV-A スタジオプロジェクトIV-B	1前①～② 1後③～④ 2前①～② 2後③～④ 1後④ 1前① 2後③ 1前① 1前① 1前② 1前② 1後③ 1後③ 1後④ 1後④	4 4 4 4 4 1 2 2 2 2 2 2 2 2 2	1 1 1 1 2 1 1 1 1 1 1 1 1 1	九州大学 芸術工学研究院 教授 (平15.10)	5日
16	専	教授	タノチ ケンイチ 田上 健一 <令和4年4月>	博士 (工学)	芸術工学特別研究Ⅰ 芸術工学特別研究Ⅱ 芸術工学特別研究Ⅲ 芸術工学特別研究Ⅳ 芸術工学演習 建築計画特論 環境デザインプロジェクトA 環境デザインプロジェクトB ストラテジックアーキテクトプロジェクトA ストラテジックアーキテクトプロジェクトB グローバル・アーキテクト・プロジェクト スタジオプロジェクトI-A スタジオプロジェクトI-B スタジオプロジェクトII-A スタジオプロジェクトII-B スタジオプロジェクトIII-A スタジオプロジェクトIII-B スタジオプロジェクトIV-A スタジオプロジェクトIV-B	1前①～② 1後③～④ 2前①～② 2後③～④ 1後④ 1前① 1前①～② 1後③～④ 1前①～② 1後③～④ 2前①～② 1前① 1前① 1前② 1前② 1後③ 1後③ 1後④ 1後④	4 4 4 4 4 1 2 2 4 4 4 2 2 2 2 2 2 2 2	1 1 1 1 2 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	九州大学 芸術工学研究院 教授 (平15.10)	5日
17	専	教授	ツルノ レイジ 鶴野 玲治 <令和4年4月>	博士 (工学)	芸術工学特別研究Ⅰ 芸術工学特別研究Ⅱ 芸術工学特別研究Ⅲ 芸術工学特別研究Ⅳ 芸術工学演習 コンピュータグラフィックス特論 バーチャルリアリティ特論 メディアデザインプレゼンテーション演習 スタジオプロジェクトI-A スタジオプロジェクトI-B スタジオプロジェクトII-A スタジオプロジェクトII-B スタジオプロジェクトIII-A スタジオプロジェクトIII-B スタジオプロジェクトIV-A スタジオプロジェクトIV-B	1前①～② 1後③～④ 2前①～② 2後③～④ 1後④ 1後③ 2前① 2後③ 1前① 1前① 1前② 1前② 1後③ 1後③ 1後④ 1後④	4 4 4 4 4 1 1 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2	1 1 1 1 2 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	九州大学 芸術工学研究院 教授 (平15.10)	5日

教員名簿-5

22	専	教授	ヤコウ マサト 矢向 正人 <令和4年4月>	博士 (学術)	芸術工学特別研究Ⅰ 芸術工学特別研究Ⅱ 芸術工学演習 民族音楽学特論 音響設計特別講話 輪講 スタジオプロジェクトI-A スタジオプロジェクトI-B スタジオプロジェクトⅡ-A スタジオプロジェクトⅡ-B スタジオプロジェクトⅢ-A スタジオプロジェクトⅢ-B スタジオプロジェクトIV-A スタジオプロジェクトIV-B	1前①～② 1後③～④ 1後④ 1後③～④ 1前①～② 1前①～② 1前① 1前② 1前② 1前② 1後③ 1後③ 1後④ 1後④ 1後④	4 4 4 0.7 0.1 2 2 2 2 2 2 2 2 2	1 1 2 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	九州大学 芸術工学研究院 教授 (平15.10)	5日
23	専	准教授	アサヒロ カズオ 朝廣 和夫 <令和4年4月>	博士 (芸術工学)	芸術工学特別研究Ⅰ 芸術工学特別研究Ⅱ 芸術工学特別研究Ⅲ 芸術工学特別研究Ⅳ 芸術工学演習 環境保全学特論 ランドスケープデザイン特論 環境デザインプロジェクトA 環境デザインプロジェクトB ランドスケープデザインプロジェクト スタジオプロジェクトI-A スタジオプロジェクトI-B スタジオプロジェクトⅡ-A スタジオプロジェクトⅡ-B スタジオプロジェクトⅢ-A スタジオプロジェクトⅢ-B スタジオプロジェクトIV-A スタジオプロジェクトIV-B	1前①～② 1後③～④ 2前①～② 2後③～④ 1後④ 1後④ 1前② 1前①～② 1後③～④ 1前①～② 1前① 1前① 1前② 1前② 1前② 1後③ 1後③ 1後④ 1後④	4 4 4 4 4 1 1 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2	1 1 1 1 2 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	九州大学 芸術工学研究院 准教授 (平15.10)	5日
24	専	准教授	アサヒ マサヒ 麻生 典 <令和4年4月>	博士 (法学)	芸術工学特別研究Ⅰ 芸術工学特別研究Ⅱ 芸術工学特別研究Ⅲ 芸術工学特別研究Ⅳ 芸術工学演習 知的財産法1 知的財産法2 SD特別プロジェクトⅠ SD特別プロジェクトⅡ(ストラテジックデザイン) SD特別プロジェクトⅢ(ソーシャルデザイン) SD特別プロジェクトⅣ(アントレプレナー) スタジオプロジェクトI-A スタジオプロジェクトI-B スタジオプロジェクトⅡ-A スタジオプロジェクトⅡ-B スタジオプロジェクトⅢ-A スタジオプロジェクトⅢ-B スタジオプロジェクトIV-A スタジオプロジェクトIV-B	1前①～② 1後③～④ 2前①～② 2後③～④ 1後④ 1前② 1後③ 1前①～② 1後③～④ 1後③～④ 1前① 1前① 1前② 1前② 1後③ 1後③ 1後④ 1後④	4 4 4 4 4 1 1 1 1 2 2 2 2 2 2 2 2	1 1 1 1 2 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	九州大学 芸術工学研究院 准教授 (平25.4)	5日
25	専	准教授	イシイ タツロウ 石井 達郎 <令和4年4月>	修士 (芸術工学) ※	芸術工学特別研究Ⅰ 芸術工学特別研究Ⅱ 芸術工学特別研究Ⅲ 芸術工学特別研究Ⅳ 芸術工学演習 映像表現史特論 メディアデザインプレゼンテーション演習 スタジオプロジェクトI-A スタジオプロジェクトI-B スタジオプロジェクトⅡ-A スタジオプロジェクトⅡ-B スタジオプロジェクトⅢ-A スタジオプロジェクトⅢ-B スタジオプロジェクトIV-A スタジオプロジェクトIV-B	1前①～② 1後③～④ 2前①～② 2後③～④ 1後④ 1前① 2後③ 1前① 1前① 1前② 1前② 1後③ 1後③ 1後④ 1後④	4 4 4 4 4 1 2 2 2 2 2 2 2 2	1 1 1 1 2 1 1 1 1 1 1 1 1	九州大学 芸術工学研究院 准教授 (平15.10)	5日

26	専	准教授	イノ ヒロシ 伊藤 浩史 <令和4年4月>	博士 (理学)	芸術工学特別研究Ⅰ 芸術工学特別研究Ⅱ 芸術工学特別研究Ⅲ 芸術工学特別研究Ⅳ 芸術工学演習 時間生物学 バイオマテリアルエンジニアリング スタジオプロジェクトI-A スタジオプロジェクトI-B スタジオプロジェクトII-A スタジオプロジェクトII-B スタジオプロジェクトIII-A スタジオプロジェクトIII-B スタジオプロジェクトIV-A スタジオプロジェクトIV-B	1前①～② 1後③～④ 2前①～② 2後③～④ 1後④ 1前① 1前② 1前① 1前① 1前② 1前② 1後③ 1後③ 1後③ 1後④ 1後④	4 4 4 4 4 1 1 2 2 2 2 2 2 2 2	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	九州大学 芸術工学研究院 准教授 (平23.10)	5日
27	専	准教授	イノウエ コウヘイ 井上 光平 <令和4年4月>	博士 (工学)	芸術工学特別研究Ⅰ 芸術工学特別研究Ⅱ 芸術工学特別研究Ⅲ 芸術工学特別研究Ⅳ 芸術工学演習 視覚環境知能設計特論 メディアデザインプレゼンテーション演習 スタジオプロジェクトI-A スタジオプロジェクトI-B スタジオプロジェクトII-A スタジオプロジェクトII-B スタジオプロジェクトIII-A スタジオプロジェクトIII-B スタジオプロジェクトIV-A スタジオプロジェクトIV-B	1前①～② 1後③～④ 2前①～② 2後③～④ 1後④ 1後④ 2後③ 1前① 1前① 1前② 1前② 1後③ 1後③ 1後③ 1後④ 1後④	4 4 4 4 4 1 2 2 2 2 2 2 2 2 2	1 1 1 1 2 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	九州大学 芸術工学研究院 准教授 (平15.10)	5日
28	専	准教授	イノウエ トシオ 井上 朝雄 <令和4年4月>	博士 (工学) ※	芸術工学特別研究Ⅰ 芸術工学特別研究Ⅱ 芸術工学特別研究Ⅲ 芸術工学特別研究Ⅳ 芸術工学演習 建築構法計画特論 環境デザインプロジェクトA 環境デザインプロジェクトB スタジオプロジェクトI-A スタジオプロジェクトI-B スタジオプロジェクトII-A スタジオプロジェクトII-B スタジオプロジェクトIII-A スタジオプロジェクトIII-B スタジオプロジェクトIV-A スタジオプロジェクトIV-B	1前①～② 1後③～④ 2前①～② 2後③～④ 1後④ 1前② 1前①～② 1後③～④ 1前① 1前① 1前② 1前② 1後③ 1後③ 1後③ 1後④ 1後④	4 4 4 4 4 1 2 2 2 2 2 2 2 2 2	1 1 1 1 2 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	九州大学 芸術工学研究院 准教授 (平15.12)	5日
29	専	准教授	ウエダ カズオ 上田 和夫 <令和4年4月>	博士 (文学) ※	芸術工学特別研究Ⅰ 芸術工学特別研究Ⅱ 芸術工学特別研究Ⅲ 芸術工学特別研究Ⅳ 芸術工学演習 聴覚心理学特論 音響設計特別講話 輪講 スタジオプロジェクトI-A スタジオプロジェクトI-B スタジオプロジェクトII-A スタジオプロジェクトII-B スタジオプロジェクトIII-A スタジオプロジェクトIII-B スタジオプロジェクトIV-A スタジオプロジェクトIV-B	1前①～② 1後③～④ 2前①～② 2後③～④ 1後④ 1後③～④ 1前①～② 1前①～② 1前① 1前① 1前② 1前② 1後③ 1後③ 1後④ 1後④	4 4 4 4 4 2 0.1 2 2 2 2 2 2 2 2 2	1 1 1 1 2 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	九州大学 芸術工学研究院 准教授 (平15.10)	5日
30	専	准教授	ウヅマ タクシ 牛尾 剛聡 <令和4年4月>	博士 (工学) ※	芸術工学特別研究Ⅰ 芸術工学特別研究Ⅱ 芸術工学特別研究Ⅲ 芸術工学特別研究Ⅳ 芸術工学演習 メディアサービス特論 メディアデザインプレゼンテーション演習 スタジオプロジェクトI-A スタジオプロジェクトI-B スタジオプロジェクトII-A スタジオプロジェクトII-B スタジオプロジェクトIII-A スタジオプロジェクトIII-B スタジオプロジェクトIV-A スタジオプロジェクトIV-B	1前①～② 1後③～④ 2前①～② 2後③～④ 1後④ 1後③ 2後③ 1前① 1前① 1前② 1前② 1後③ 1後③ 1後④ 1後④	4 4 4 4 4 1 2 2 2 2 2 2 2 2 2	1 1 1 1 2 1 1 1 1 1 1 1 1 1	九州大学 芸術工学研究院 准教授 (平15.10)	5日

31	専	准教授	オノマ ヒロ 大島 久雄 <令和4年4月>	文学修士 ※	芸術工学特別研究Ⅰ 芸術工学特別研究Ⅱ 芸術工学特別研究Ⅲ 芸術工学特別研究Ⅳ 芸術工学演習 演劇学特論 メディアデザインプレゼンテーション演習 スタジオプロジェクトI-A スタジオプロジェクトI-B スタジオプロジェクトII-A スタジオプロジェクトII-B スタジオプロジェクトIII-A スタジオプロジェクトIII-B スタジオプロジェクトIV-A スタジオプロジェクトIV-B	1前①～② 1後③～④ 2前①～② 2後③～④ 1後④ 1前① 2後③ 1前① 1前① 1前② 1前② 1後③ 1後③ 1後③ 1後④ 1後④	4 4 4 4 4 1 2 2 2 2 2 2 2 2	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	九州大学 芸術工学研究院 准教授 (平15.10)	5日
32	専	准教授	オノ ナホ 小野 直樹 <令和4年4月>	博士 (工学)	芸術工学特別研究Ⅰ 芸術工学特別研究Ⅱ 芸術工学特別研究Ⅲ 芸術工学特別研究Ⅳ 芸術工学演習 画像情報処理システム設計特論 メディアデザインプレゼンテーション演習 スタジオプロジェクトI-A スタジオプロジェクトI-B スタジオプロジェクトII-A スタジオプロジェクトII-B スタジオプロジェクトIII-A スタジオプロジェクトIII-B スタジオプロジェクトIV-A スタジオプロジェクトIV-B	1前①～② 1後③～④ 2前①～② 2後③～④ 1後④ 1後③ 2後③ 1前① 1前① 1前② 1前② 1後③ 1後③ 1後④ 1後④	4 4 4 4 4 1 2 2 2 2 2 2 2 2	1 1 1 1 2 1 1 1 1 1 1 1 1 1	九州大学 芸術工学研究院 准教授 (平15.10)	5日
33	専	准教授	カト ユキ 加藤 悠希 <令和4年4月>	博士 (工学)	芸術工学特別研究Ⅰ 芸術工学特別研究Ⅱ 芸術工学特別研究Ⅲ 芸術工学特別研究Ⅳ 芸術工学演習 日本建築史特論 西洋建築史特論 環境文化特論 環境デザインプロジェクトA 環境デザインプロジェクトB スタジオプロジェクトI-A スタジオプロジェクトI-B スタジオプロジェクトII-A スタジオプロジェクトII-B スタジオプロジェクトIII-A スタジオプロジェクトIII-B スタジオプロジェクトIV-A スタジオプロジェクトIV-B	1前①～② 1後③～④ 2前①～② 2後③～④ 1後④ 1後③ 1後④ 1後③～④ 1前①～② 1後③～④ 1前① 1前① 1前② 1前② 1後③ 1後③ 1後④ 1後④	4 4 4 4 4 1 1 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2	1 1 1 1 2 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	九州大学 芸術工学研究院 准教授 (平28.8)	5日
34	専	准教授	カワハラ カズヒロ 河原 一彦 <令和4年4月>	博士 (芸術工学)	芸術工学特別研究Ⅰ 芸術工学特別研究Ⅱ 芸術工学特別研究Ⅲ 芸術工学特別研究Ⅳ 芸術工学演習 音響信号処理特論 音響設計特別講話 輪講 スタジオプロジェクトI-A スタジオプロジェクトI-B スタジオプロジェクトII-A スタジオプロジェクトII-B スタジオプロジェクトIII-A スタジオプロジェクトIII-B スタジオプロジェクトIV-A スタジオプロジェクトIV-B	1前①～② 1後③～④ 2前①～② 2後③～④ 1後④ 1前①～② 1前①～② 1前①～② 1前① 1前② 1前② 1後③ 1後③ 1後④ 1後④	4 4 4 4 4 2 0.1 2 2 2 2 2 2 2 2	1 1 1 1 2 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	九州大学 芸術工学研究院 准教授 (平15.10)	5日
35	専	准教授	サトウ トシキ 齋藤 俊文 <令和4年4月>	修士 (数学)	芸術工学特別研究Ⅰ 芸術工学特別研究Ⅱ 芸術工学特別研究Ⅲ 芸術工学特別研究Ⅳ 芸術工学演習 コミュニケーションデザイン論 ライフスケープデザイン 人間生活デザイン特論 ※ スタジオプロジェクトI-A スタジオプロジェクトI-B スタジオプロジェクトII-A スタジオプロジェクトII-B スタジオプロジェクトIII-A スタジオプロジェクトIII-B スタジオプロジェクトIV-A スタジオプロジェクトIV-B	1前①～② 1後③～④ 2前①～② 2後③～④ 1後④ 1前① 1前①～② 1前① 1前② 1前② 1後③ 1後③ 1後④ 1後④	4 4 4 4 4 1 4 2 2 2 2 2 2 2 2	1 1 1 1 2 1 2 1 1 1 1 1 1 1	九州大学 芸術工学研究院 准教授 (平18.4)	5日

36	専	准教授	チジマ トシ 鯉島 俊哉 <令和4年4月>	博士 (工学)	芸術工学特別研究Ⅰ 芸術工学特別研究Ⅱ 芸術工学特別研究Ⅲ 芸術工学特別研究Ⅳ 芸術工学演習 音響工学特論 計算音響学 音響設計特別講話 輪講 ホール工学技術特論 ※ スタジオプロジェクトI-A スタジオプロジェクトI-B スタジオプロジェクトII-A スタジオプロジェクトII-B スタジオプロジェクトIII-A スタジオプロジェクトIII-B スタジオプロジェクトIV-A スタジオプロジェクトIV-B	1前①～② 1後③～④ 2前①～② 2後③～④ 1後④ 1前①～② 1後③～④ 1前①～② 1前①～② 1後③～④ 1前① 1前① 1前② 1前② 1後③ 1後③ 1後③ 1後④ 1後④ 1後④	4 4 4 4 4 2 2 0.1 2 1 2 2 2 2 2 2 2 2	1 1 1 1 2 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	九州大学 芸術工学研究院 准教授 (平15.10)	5日
37	専	准教授	ジヨウ カズヒコ 城 一裕 <令和4年4月>	博士 (芸術工学)	芸術工学特別研究Ⅰ 芸術工学特別研究Ⅱ 芸術工学特別研究Ⅲ 芸術工学特別研究Ⅳ 芸術工学演習 音響芸術特論 サウンドデザイン特論 聴覚文化論特論 音響設計特別講話 輪講 生体模倣工学 スタジオプロジェクトI-A スタジオプロジェクトI-B スタジオプロジェクトII-A スタジオプロジェクトII-B スタジオプロジェクトIII-A スタジオプロジェクトIII-B スタジオプロジェクトIV-A スタジオプロジェクトIV-B	1前①～② 1後③～④ 2前①～② 2後③～④ 1後④ 1前①～② 1後③～④ 1後③～④ 1前①～② 1前①～② 1後③ 1前① 1前① 1前② 1前② 1後③ 1後③ 1後④ 1後④	4 4 4 4 4 2 0.7 2 0.1 2 1 2 2 2 2 2 2 2	1 1 1 1 2 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	九州大学 芸術工学研究院 准教授 (平28.3)	5日
38	専	准教授	スキモト ミツカ 杉本 美貴 <令和4年4月>	博士 (学術)	芸術工学特別研究Ⅰ 芸術工学特別研究Ⅱ 芸術工学特別研究Ⅲ 芸術工学特別研究Ⅳ 芸術工学演習 コネクティッドデザイン デザインイノベーション SD特別プロジェクトⅠ SD特別プロジェクトⅡ (ストラテジックデザイン) SD特別プロジェクトⅢ (ソーシャルデザイン) SD特別プロジェクトⅣ (アントレプレナー) スタジオプロジェクトI-A スタジオプロジェクトI-B スタジオプロジェクトII-A スタジオプロジェクトII-B スタジオプロジェクトIII-A スタジオプロジェクトIII-B スタジオプロジェクトIV-A スタジオプロジェクトIV-B	1前①～② 1後③～④ 2前①～② 2後③～④ 1後④ 1後③ 1後④ 1前①～② 1後③～④ 1後③～④ 1後③～④ 1前① 1前① 1前② 1前② 1後③ 1後③ 1後③ 1後④ 1後④	4 4 4 4 4 1 1 1 1 1 2 2 2 2 2 2 2 2	1 1 1 1 2 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	九州大学 芸術工学研究院 准教授 (平24.4)	5日
39	専	准教授	セノ タケル 妹尾 武治 <令和4年4月>	博士 (心理学) ※	芸術工学特別研究Ⅰ 芸術工学特別研究Ⅱ 芸術工学特別研究Ⅲ 芸術工学特別研究Ⅳ 芸術工学演習 心理学的思考法特別演習 メディアデザインプレゼンテーション演習 スタジオプロジェクトI-A スタジオプロジェクトI-B スタジオプロジェクトII-A スタジオプロジェクトII-B スタジオプロジェクトIII-A スタジオプロジェクトIII-B スタジオプロジェクトIV-A スタジオプロジェクトIV-B	1前①～② 1後③～④ 2前①～② 2後③～④ 1後④ 1後④ 2後③ 1前① 1前① 1前② 1前② 1後③ 1後③ 1後④ 1後④ 1後④	4 4 4 4 4 1 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2	1 1 1 1 2 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	九州大学 芸術工学研究院 准教授 (平24.12)	5日

40	専	准教授	カガ マサキ 高田 正幸 <令和4年4月>	博士 (工学) ※	芸術工学特別研究Ⅰ 芸術工学特別研究Ⅱ 芸術工学特別研究Ⅲ 芸術工学特別研究Ⅳ 芸術工学演習 音響環境学特論 音響設計特別講話 輪講 スタジオプロジェクトI-A スタジオプロジェクトI-B スタジオプロジェクトII-A スタジオプロジェクトII-B スタジオプロジェクトIII-A スタジオプロジェクトIII-B スタジオプロジェクトIV-A スタジオプロジェクトIV-B	1前①～② 1後③～④ 2前①～② 2後③～④ 1後④ 1後③～④ 1前①～② 1前①～② 1前① 1前② 1前② 1後③ 1後③ 1後④ 1後④	4 4 4 4 4 2 0.1 2 2 2 2 2 2 2 2	1 1 1 1 2 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	九州大学 芸術工学研究院 准教授 (平15.10)	5日
41	専	准教授	カトリ チカ 高取 千佳 <令和4年4月>	博士 (工学)	芸術工学特別研究Ⅰ 芸術工学特別研究Ⅱ 芸術工学特別研究Ⅲ 芸術工学特別研究Ⅳ 芸術工学演習 景観生態学特論 環境デザインプロジェクトA 環境デザインプロジェクトB ランドスケープデザインプロジェクト スタジオプロジェクトI-A スタジオプロジェクトI-B スタジオプロジェクトII-A スタジオプロジェクトII-B スタジオプロジェクトIII-A スタジオプロジェクトIII-B スタジオプロジェクトIV-A スタジオプロジェクトIV-B	1前①～② 1後③～④ 2前①～② 2後③～④ 1後④ 1前① 1前①～② 1後③～④ 1前①～② 1前① 1前① 1前② 1前② 1後③ 1後③ 1後④ 1後④	4 4 4 4 4 1 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2	1 1 1 1 2 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	九州大学 芸術工学研究院 准教授 (令元.10)	5日
42	専	准教授	タムラ リョウイチ 田村 良一 <令和4年4月>	博士 (工学)	芸術工学特別研究Ⅰ 芸術工学特別研究Ⅱ 芸術工学特別研究Ⅲ 芸術工学特別研究Ⅳ 芸術工学演習 デザインマネジメント デザインマーケティング デザインプロジェクトマネジメント ブランドビジネスデザイン デザイン産業事情1 デザイン産業事情2 SD特別プロジェクトⅠ SD特別プロジェクトⅡ(ストラテジックデザイン) SD特別プロジェクトⅢ(ソーシャルデザイン) SD特別プロジェクトⅣ(アントレプレナー) スタジオプロジェクトI-A スタジオプロジェクトI-B スタジオプロジェクトII-A スタジオプロジェクトII-B スタジオプロジェクトIII-A スタジオプロジェクトIII-B スタジオプロジェクトIV-A スタジオプロジェクトIV-B	1前①～② 1後③～④ 2前①～② 2後③～④ 1後④ 1前① 1前② 1後④ 1前② 1後③ 1後④ 1前①～② 1後③～④ 1後③～④ 1後③～④ 1前① 1前① 1前② 1前② 1後③ 1後③ 1後④ 1後④	4 4 4 4 4 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 2 2 2 2 2 2 2 2	1 1 1 1 2 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	九州大学 芸術工学研究院 准教授 (平15.10)	5日
43	専	准教授	トクビサ タロウ 徳久 悟 <令和4年4月>	博士 (政策・デザイン)	芸術工学特別研究Ⅰ 芸術工学特別研究Ⅱ 芸術工学特別研究Ⅲ 芸術工学特別研究Ⅳ 芸術工学演習 HCIデザイン アート・シンキング SD特別プロジェクトⅠ SD特別プロジェクトⅡ(ストラテジックデザイン) SD特別プロジェクトⅢ(ソーシャルデザイン) SD特別プロジェクトⅣ(アントレプレナー) スタジオプロジェクトI-A スタジオプロジェクトI-B スタジオプロジェクトII-A スタジオプロジェクトII-B スタジオプロジェクトIII-A スタジオプロジェクトIII-B スタジオプロジェクトIV-A スタジオプロジェクトIV-B	1前①～② 1後③～④ 2前①～② 2後③～④ 1後④ 1後③～④ 1前② 1前①～② 1後③～④ 1後③～④ 1後③～④ 1前① 1前① 1前② 1前② 1後③ 1後③ 1後④ 1後④	4 4 4 4 4 2 1 1 1 1 1 2 2 2 2 2 2 2 2	1 1 1 1 2 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	九州大学 芸術工学研究院 准教授 (平31.4)	5日

44	専	准教授	ナカムラ ミヤ 中村 美亜 <令和4年4月>	博士 (学術)	芸術工学特別研究Ⅰ 芸術工学特別研究Ⅱ 芸術工学特別研究Ⅲ 芸術工学特別研究Ⅳ 芸術工学演習 アート&リサーチ 文化政策 スタジオプロジェクトI-A スタジオプロジェクトI-B スタジオプロジェクトII-A スタジオプロジェクトII-B スタジオプロジェクトIII-A スタジオプロジェクトIII-B スタジオプロジェクトIV-A スタジオプロジェクトIV-B	1前①～② 1後③～④ 2前①～② 2後③～④ 1後④ 1前① 1後④ 1前① 1前① 1前② 1前② 1後③ 1後③ 1後④ 1後④	4 4 4 4 4 1 1 2 2 2 2 2 2 2 2	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	九州大学 芸術工学研究院 准教授 (平26.4)	5日
45	専	准教授	ニシダ(希) ヒロコ 西田(希) 紘子 <令和4年4月>	博士 (音楽学)	芸術工学特別研究Ⅰ 芸術工学特別研究Ⅱ 芸術工学特別研究Ⅲ 芸術工学特別研究Ⅳ 芸術工学演習 民族音楽学特論 音楽社会文化特論 言語学特論 音響設計特別講話 輪講 スタジオプロジェクトI-A スタジオプロジェクトI-B スタジオプロジェクトII-A スタジオプロジェクトII-B スタジオプロジェクトIII-A スタジオプロジェクトIII-B スタジオプロジェクトIV-A スタジオプロジェクトIV-B	1前①～② 1後③～④ 2前①～② 2後③～④ 1後④ 1後③～④ 1前①～② 1前①～② 1前①～② 1前①～② 1前① 1前① 1前② 1前② 1後③ 1後③ 1後④ 1後④ 1後④	4 4 4 4 4 0.7 2 1 0.1 2 2 2 2 2 2 2 2 2	1 1 1 1 2 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	九州大学 芸術工学研究院 准教授 (平23.4)	5日
46	専	准教授	ハヤシ(希) ユリコ 早瀬(古木) 百合子 <令和4年4月>	博士 (工学-科学)	芸術工学特別研究Ⅰ 芸術工学特別研究Ⅱ 芸術工学特別研究Ⅲ 芸術工学特別研究Ⅳ 芸術工学演習 国際環境政策特論 環境デザインプロジェクトA 環境デザインプロジェクトB スタジオプロジェクトI-A スタジオプロジェクトI-B スタジオプロジェクトII-A スタジオプロジェクトII-B スタジオプロジェクトIII-A スタジオプロジェクトIII-B スタジオプロジェクトIV-A スタジオプロジェクトIV-B	1前①～② 1後③～④ 2前①～② 2後③～④ 1後④ 1前①～② 1前①～② 1後③～④ 1前① 1前① 1前② 1前② 1後③ 1後③ 1後④ 1後④	4 4 4 4 4 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2	1 1 1 1 2 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	九州大学 グローバル イノベーション センター 准教授 (平25.5)	5日
47	専	准教授	ヒラマツ ヒロ 平松 千尋 <令和4年4月>	博士 (生命科学)	芸術工学特別研究Ⅰ 芸術工学特別研究Ⅱ 芸術工学特別研究Ⅲ 芸術工学特別研究Ⅳ 芸術工学演習 分子生物学 スタジオプロジェクトI-A スタジオプロジェクトI-B スタジオプロジェクトII-A スタジオプロジェクトII-B スタジオプロジェクトIII-A スタジオプロジェクトIII-B スタジオプロジェクトIV-A スタジオプロジェクトIV-B	1前①～② 1後③～④ 2前①～② 2後③～④ 1後④ 1後③ 1前① 1前① 1前② 1前② 1後③ 1後③ 1後④ 1後④	4 4 4 4 4 1 2 2 2 2 2 2 2 2	1 1 1 1 2 1 1 1 1 1 1 1 1 1	九州大学 芸術工学研究院 准教授 (平25.9)	5日

48	専	准教授	フクシマ アキコ 福島 綾子 <令和4年4月>	博士 (工学)	芸術工学特別研究Ⅰ 芸術工学特別研究Ⅱ 芸術工学特別研究Ⅲ 芸術工学特別研究Ⅳ 芸術工学演習 文化財学特論 環境人類学特論 環境デザインプロジェクトA 環境デザインプロジェクトB スタジオプロジェクトI-A スタジオプロジェクトI-B スタジオプロジェクトⅡ-A スタジオプロジェクトⅡ-B スタジオプロジェクトⅢ-A スタジオプロジェクトⅢ-B スタジオプロジェクトⅣ-A スタジオプロジェクトⅣ-B	1前①～② 1後③～④ 2前①～② 2後③～④ 1後④ 1前①～② 1前①～② 1前①～② 1後③～④ 1前① 1前① 1前② 1前② 1後③ 1後③ 1後④ 1後④	4 4 4 4 4 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2	1 1 1 1 2 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	九州大学 芸術工学研究院 准教授 (平18.2)	5日
49	専	准教授	フジ トモキ 藤 智亮 <令和4年4月>	博士 (芸術工学)	芸術工学特別研究Ⅰ 芸術工学特別研究Ⅱ 芸術工学特別研究Ⅲ 芸術工学特別研究Ⅳ 芸術工学演習 人間生活デザイン特論 ※ 機能工学デザイン ライフスケープデザイン スタジオプロジェクトI-A スタジオプロジェクトI-B スタジオプロジェクトⅡ-A スタジオプロジェクトⅡ-B スタジオプロジェクトⅢ-A スタジオプロジェクトⅢ-B スタジオプロジェクトⅣ-A スタジオプロジェクトⅣ-B	1前①～② 1後③～④ 2前①～② 2後③～④ 1後④ 1前① 1前② 1前①～② 1前① 1前① 1前② 1前② 1後③ 1後③ 1後④ 1後④	4 4 4 4 4 0.1 1 1 4 2 2 2 2 2 2 2 2	1 1 1 1 2 1 1 2 1 1 1 1 1 1 1 1	九州大学 芸術工学研究院 准教授 (平15.10)	5日
50	専	准教授	ホール マイケル Hall Michael <令和4年4月>	博士 (芸術工学)	芸術工学特別研究Ⅰ 芸術工学特別研究Ⅱ 芸術工学特別研究Ⅲ 芸術工学特別研究Ⅳ 芸術工学演習 環境リスクマネジメント スタジオプロジェクトI-A スタジオプロジェクトI-B スタジオプロジェクトⅡ-A スタジオプロジェクトⅡ-B スタジオプロジェクトⅢ-A スタジオプロジェクトⅢ-B スタジオプロジェクトⅣ-A スタジオプロジェクトⅣ-B	1前①～② 1後③～④ 2前①～② 2後③～④ 1後④ 1前② 1前① 1前① 1前② 1前② 1後③ 1後③ 1後④ 1後④	4 4 4 4 4 1 2 2 2 2 2 2 2 2	1 1 1 1 2 1 1 1 1 1 1 1 1	九州大学 芸術工学研究院 准教授 (平18.4)	5日
51	専	准教授	マツグマ ヒロユキ 松隈 浩之 <令和4年4月>	博士 (芸術工学)	芸術工学特別研究Ⅰ 芸術工学特別研究Ⅱ 芸術工学特別研究Ⅲ 芸術工学特別研究Ⅳ 芸術工学演習 シリアスゲームデザイン1 シリアスゲームデザイン2 SD特別プロジェクトⅠ SD特別プロジェクトⅡ (ストラテジックデザイン) SD特別プロジェクトⅢ (ソーシャルデザイン) SD特別プロジェクトⅣ (アントレプレナー) スタジオプロジェクトI-A スタジオプロジェクトI-B スタジオプロジェクトⅡ-A スタジオプロジェクトⅡ-B スタジオプロジェクトⅢ-A スタジオプロジェクトⅢ-B スタジオプロジェクトⅣ-A スタジオプロジェクトⅣ-B	1前①～② 1後③～④ 2前①～② 2後③～④ 1後④ 1前① 1前② 1前①～② 1後③～④ 1後③～④ 1後③～④ 1前① 1前① 1前② 1前② 1後③ 1後③ 1後④ 1後④	4 4 4 4 4 1 1 1 1 1 2 2 2 2 2 2 2 2	1 1 1 1 2 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	九州大学 芸術工学研究院 准教授 (平15.10)	5日

52	専	准教授	マツメ アカネ 松前 あかね <令和4年4月>	博士 (知識科学) 法務博士 (専門職)	芸術工学特別研究 I 芸術工学特別研究 II 芸術工学特別研究 III 芸術工学特別研究 IV 芸術工学演習 デザイン認知論 リーガルデザイン 人間生活デザイン特論 ※ スタジオプロジェクト I-A スタジオプロジェクト I-B スタジオプロジェクト II-A スタジオプロジェクト II-B スタジオプロジェクト III-A スタジオプロジェクト III-B スタジオプロジェクト IV-A スタジオプロジェクト IV-B	1前①～② 1後③～④ 2前①～② 2後③～④ 1後④ 1前② 1前② 1前① 1前① 1前① 1前② 1前② 1後③ 1後③ 1後④ 1後④	4 4 4 4 4 1 1 0.3 2 2 2 2 2 2 2 2	1 1 1 1 2 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	九州大学 芸術工学研究院 准教授 (平29.9)	5日
53	専	准教授	マヤマ オサム 丸山 修 <令和4年4月>	博士 (理学)	芸術工学特別研究 I 芸術工学特別研究 II 芸術工学特別研究 III 芸術工学特別研究 IV 芸術工学演習 統計情報学 スタジオプロジェクト I-A スタジオプロジェクト I-B スタジオプロジェクト II-A スタジオプロジェクト II-B スタジオプロジェクト III-A スタジオプロジェクト III-B スタジオプロジェクト IV-A スタジオプロジェクト IV-B	1前①～② 1後③～④ 2前①～② 2後③～④ 1後④ 1前① 1前① 1前① 1前② 1前② 1後③ 1後③ 1後④ 1後④	4 4 4 4 4 1 2 2 2 2 2 2 2 2 2	1 1 1 1 2 1 1 1 1 1 1 1 1 1	九州大学 芸術工学研究院 准教授 (平15.10)	5日
54	専	准教授	ヤマウチ カツ 山内 勝也 <令和4年4月>	博士 (芸術工学)	芸術工学特別研究 I 芸術工学特別研究 II 芸術工学特別研究 III 芸術工学特別研究 IV 芸術工学演習 音環境評価特論 サウンドデザイン特論 音響設計特別講話 輪講 スタジオプロジェクト I-A スタジオプロジェクト I-B スタジオプロジェクト II-A スタジオプロジェクト II-B スタジオプロジェクト III-A スタジオプロジェクト III-B スタジオプロジェクト IV-A スタジオプロジェクト IV-B	1前①～② 1後③～④ 2前①～② 2後③～④ 1後④ 1前①～② 1後③～④ 1前①～② 1前①～② 1前① 1前① 1前② 1前② 1後③ 1後③ 1後④ 1後④	4 4 4 4 4 2 0.7 0.1 2 2 2 2 2 2 2 2	1 1 1 1 2 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	九州大学 芸術工学研究院 准教授 (平27.4)	5日
55	専	准教授	ヨシカ トカス 吉岡 智和 <令和4年4月>	博士 (工学)	芸術工学特別研究 I 芸術工学特別研究 II 芸術工学特別研究 III 芸術工学特別研究 IV 芸術工学演習 建築構造学特論 環境デザインプロジェクト A 環境デザインプロジェクト B スタジオプロジェクト I-A スタジオプロジェクト I-B スタジオプロジェクト II-A スタジオプロジェクト II-B スタジオプロジェクト III-A スタジオプロジェクト III-B スタジオプロジェクト IV-A スタジオプロジェクト IV-B	1前①～② 1後③～④ 2前①～② 2後③～④ 1後④ 1後③～④ 1前①～② 1後③～④ 1前① 1前① 1前② 1前② 1前② 1後③ 1後③ 1後④ 1後④	4 4 4 4 4 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2	1 1 1 1 2 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	九州大学 芸術工学研究院 准教授 (平15.10)	5日

56	専	准教授	シナカ エキス 吉永 幸晴 <令和4年4月>	博士 (工学)	芸術工学特別研究Ⅰ 芸術工学特別研究Ⅱ 芸術工学特別研究Ⅲ 芸術工学特別研究Ⅳ 芸術工学演習 音響イメージング特論 音響設計特別講話 輪講 スタジオプロジェクトI-A スタジオプロジェクトI-B スタジオプロジェクトII-A スタジオプロジェクトII-B スタジオプロジェクトIII-A スタジオプロジェクトIII-B スタジオプロジェクトIV-A スタジオプロジェクトIV-B	1前①～② 1後③～④ 2前①～② 2後③～④ 1後④ 1後③～④ 1前①～② 1前①～② 1前① 1前② 1前② 1前② 1後③ 1後③ 1後④ 1後④ 1後④	4 4 4 4 4 2 0.1 2 2 2 2 2 2 2 2 2	1 1 1 1 2 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	九州大学 芸術工学研究院 准教授 (平15.10)	5日
57	専	准教授	レミン ジェラード バスティアン Remijn Gerard Bastiaan <令和4年4月>	博士 (芸術工学)	芸術工学特別研究Ⅰ 芸術工学特別研究Ⅱ 芸術工学特別研究Ⅲ 芸術工学特別研究Ⅳ 芸術工学演習 聴覚生理学特論 時間知覚特論 サウンドデザイン特論 音響設計特別講話 輪講 スタジオプロジェクトI-A スタジオプロジェクトI-B スタジオプロジェクトII-A スタジオプロジェクトII-B スタジオプロジェクトIII-A スタジオプロジェクトIII-B スタジオプロジェクトIV-A スタジオプロジェクトIV-B アカデミックイングリッシュ	1前①～② 1後③～④ 2前①～② 2後③～④ 1後④ 1後③～④ 1後③～④ 1後③～④ 1前①～② 1前①～② 1前① 1前① 1前② 1前② 1前② 1後③ 1後③ 1後④ 1後④ 1後④ 1前①	4 4 4 4 4 2 2 0.7 0.1 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2	1 1 1 1 2 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	九州大学 芸術工学研究院 准教授 (平26.4)	5日
58	専	講師	イマサ トモ 今坂 智子 <令和4年4月>	博士 (工学)	芸術工学特別研究Ⅰ 芸術工学特別研究Ⅱ 芸術工学特別研究Ⅲ 芸術工学特別研究Ⅳ 芸術工学演習 環境化学特論 環境デザインプロジェクトA 環境デザインプロジェクトB スタジオプロジェクトI-A スタジオプロジェクトI-B スタジオプロジェクトII-A スタジオプロジェクトII-B スタジオプロジェクトIII-A スタジオプロジェクトIII-B スタジオプロジェクトIV-A スタジオプロジェクトIV-B	1前①～② 1後③～④ 2前①～② 2後③～④ 1後④ 1後③～④ 1前①～② 1後③～④ 1前① 1前① 1前② 1前② 1前② 1後③ 1後③ 1後④ 1後④ 1後④	4 4 4 4 4 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2	1 1 1 1 2 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	九州大学 芸術工学研究院 講師 (平15.10)	5日
59	専	講師	ジヤン エヴァン 張 彦芳 <令和4年4月>	博士 (芸術工学)	芸術工学特別研究Ⅰ 芸術工学特別研究Ⅱ 芸術工学特別研究Ⅲ 芸術工学特別研究Ⅳ 芸術工学演習 ソサエタルデザイン プロデューサー原論 SD特別プロジェクトⅠ SD特別プロジェクトⅡ (ストラテジックデザイン) SD特別プロジェクトⅢ (ソーシャルデザイン) SD特別プロジェクトⅣ (アントレプレナー) スタジオプロジェクトI-A スタジオプロジェクトI-B スタジオプロジェクトII-A スタジオプロジェクトII-B スタジオプロジェクトIII-A スタジオプロジェクトIII-B スタジオプロジェクトIV-A スタジオプロジェクトIV-B	1前①～② 1後③～④ 2前①～② 2後③～④ 1後④ 1後④ 1前① 1前①～② 1後③～④ 1後③～④ 1後③～④ 1前① 1前① 1前② 1前② 1前② 1後③ 1後③ 1後④ 1後④ 1後④	4 4 4 4 4 0.5 1 1 1 1 1 1 2 2 2 2 2 2 2 2	1 1 1 1 2 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	九州大学 芸術工学研究院 講師 (令元.10)	5日

60	専	講師	シムラ タカキ 西村 貴孝 <令和4年4月>	博士 (芸術工学)	芸術工学特別研究Ⅰ 芸術工学特別研究Ⅱ 芸術工学特別研究Ⅲ 芸術工学特別研究Ⅳ 芸術工学演習 生理人類学特論 人間生活デザイン特論 ※ スタジオプロジェクトⅠ-A スタジオプロジェクトⅠ-B スタジオプロジェクトⅡ-A スタジオプロジェクトⅡ-B スタジオプロジェクトⅢ-A スタジオプロジェクトⅢ-B スタジオプロジェクトⅣ-A スタジオプロジェクトⅣ-B	1前①～② 1後③～④ 2前①～② 2後③～④ 1後④ 1後④ 1前① 1前① 1前① 1前② 1前② 1後③ 1後③ 1後④ 1後④	4 4 4 4 4 1 0.1 2 2 2 2 2 2 2 2	1 1 1 1 2 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	九州大学 芸術工学研究院 講師 (令2.3)	5日
61	専	助教	アキ ナオキ 秋田 直繁 <令和4年4月>	修士 (芸術工学)	芸術工学特別研究Ⅰ 芸術工学特別研究Ⅱ 芸術工学特別研究Ⅲ 芸術工学特別研究Ⅳ 芸術工学演習 コンテクストデザイン ライフスケープデザイン 人間生活デザイン特論 ※ スタジオプロジェクトⅠ-A スタジオプロジェクトⅠ-B スタジオプロジェクトⅡ-A スタジオプロジェクトⅡ-B スタジオプロジェクトⅢ-A スタジオプロジェクトⅢ-B スタジオプロジェクトⅣ-A スタジオプロジェクトⅣ-B	1前①～② 1後③～④ 2前①～② 2後③～④ 1後④ 1前② 1前①～② 1前① 1前① 1前① 1前② 1前② 1後③ 1後③ 1後④ 1後④	4 4 4 4 4 1 4 0.1 2 2 2 2 2 2 2 2	1 1 1 1 2 1 2 1 1 1 1 1 1 1 1	九州大学 芸術工学研究院 助教 (平25.4)	5日
62	専	助教	イムラ トシユキ 稲村 徳州 <令和4年4月>	Master of Science (特リス) Master of Arts (特リス)	芸術工学特別研究Ⅰ 芸術工学特別研究Ⅱ 芸術工学特別研究Ⅲ 芸術工学特別研究Ⅳ 芸術工学演習 ソサエタルデザイン リーンスタートアップ演習1 リーンスタートアップ演習2 リーンスタートアップ演習3 リーンスタートアップ演習4 SD特別プロジェクトⅠ SD特別プロジェクトⅡ (ストラテジックデザイン) SD特別プロジェクトⅢ (ソーシャルデザイン) SD特別プロジェクトⅣ (アントレプレナー) スタジオプロジェクトⅠ-A スタジオプロジェクトⅠ-B スタジオプロジェクトⅡ-A スタジオプロジェクトⅡ-B スタジオプロジェクトⅢ-A スタジオプロジェクトⅢ-B スタジオプロジェクトⅣ-A スタジオプロジェクトⅣ-B	1前①～② 1後③～④ 2前①～② 2後③～④ 1後④ 1後④ 1前① 1前② 1後③ 1後④ 1前①～② 1後③～④ 1後③～④ 1後③～④ 1前① 1前① 1前② 1前② 1後③ 1後③ 1後④ 1後④	4 4 4 4 4 0.5 0.5 0.5 0.5 0.5 1 1 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2	1 1 1 1 2 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	九州大学 芸術工学研究院 助教 (平28.6)	5日
63	専	助教	イモト マサキ 岩元 真明 <令和4年4月>	修士 (工学)	芸術工学特別研究Ⅰ 芸術工学特別研究Ⅱ 芸術工学特別研究Ⅲ 芸術工学特別研究Ⅳ 芸術工学演習 環境デザインプロジェクトA 環境デザインプロジェクトB スタジオプロジェクトⅠ-A スタジオプロジェクトⅠ-B スタジオプロジェクトⅡ-A スタジオプロジェクトⅡ-B スタジオプロジェクトⅢ-A スタジオプロジェクトⅢ-B スタジオプロジェクトⅣ-A スタジオプロジェクトⅣ-B ストラテジックアーキテクトプロジェクトA ストラテジックアーキテクトプロジェクトB グローバル・アーキテクト・プロジェクト アーキテクト・インターンシップⅠ アーキテクト・インターンシップⅡ 建築インターンシップ	1前①～② 1後③～④ 2前①～② 2後③～④ 1後④ 1前①～② 1後③～④ 1前① 1前① 1前② 1前② 1後③ 1後③ 1後④ 1後④ 1前①～② 1後③～④ 2前①～② 1通 2通 2通	4 4 4 4 4 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 4 4 4 3 3 4	1 1 1 1 2 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	九州大学 芸術工学研究院 助教 (平28.4)	5日

64	専	助教	加味ト 功仔 川本 陽一 <令和4年4月>	博士 (工学)	芸術工学特別研究 I 芸術工学特別研究 II 芸術工学特別研究 III 芸術工学特別研究 IV 芸術工学演習 熱環境学特論 環境デザインプロジェクトA 環境デザインプロジェクトB スタジオプロジェクトI-A スタジオプロジェクトI-B スタジオプロジェクトII-A スタジオプロジェクトII-B スタジオプロジェクトIII-A スタジオプロジェクトIII-B スタジオプロジェクトIV-A スタジオプロジェクトIV-B	1前①～② 1後③～④ 2前①～② 2後③～④ 1後④ 1後③～④ 1前①～② 1後③～④ 1前① 1前① 1前② 1前② 1後③ 1後③ 1後④ 1後④	4 4 4 4 4 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2	1 1 1 1 2 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	九州大学 芸術工学研究院 助教 (平24.4)	5日
65	専	助教	外ノリ オ 工藤 真生 <令和4年4月>	博士 (デザイン学)	芸術工学特別研究 I 芸術工学特別研究 II 芸術工学特別研究 III 芸術工学特別研究 IV 芸術工学演習 視覚記号特論 メディアデザインプレゼンテーション演習 スタジオプロジェクトI-A スタジオプロジェクトI-B スタジオプロジェクトII-A スタジオプロジェクトII-B スタジオプロジェクトIII-A スタジオプロジェクトIII-B スタジオプロジェクトIV-A スタジオプロジェクトIV-B	1前①～② 1後③～④ 2前①～② 2後③～④ 1後④ 1前① 2後③ 1前① 1前① 1前② 1前② 1後③ 1後③ 1後④ 1後④	4 4 4 4 4 1 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2	1 1 1 1 2 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	九州大学 芸術工学研究院 助教 (令2.4)	5日
66	専	助教	クヤマ ヒロシ 栗山 斉 <令和4年4月>	博士 (美術)	芸術工学特別研究 I 芸術工学特別研究 II 芸術工学特別研究 III 芸術工学特別研究 IV 芸術工学演習 現代アート実践 スタジオプロジェクトI-A スタジオプロジェクトI-B スタジオプロジェクトII-A スタジオプロジェクトII-B スタジオプロジェクトIII-A スタジオプロジェクトIII-B スタジオプロジェクトIV-A スタジオプロジェクトIV-B	1前①～② 1後③～④ 2前①～② 2後③～④ 1後④ 1前① 1前① 1前① 1前② 1前② 1後③ 1後③ 1後④ 1後④	4 4 4 4 4 1 2 2 2 2 2 2 2 2	1 1 1 1 2 1 1 1 1 1 1 1 1	九州大学 芸術工学研究院 助教 (令2.2)	5日
67	専	助教	チコホ トモヒロ 迫坪 知広 <令和4年4月>	修士 (芸術工学)	芸術工学特別研究 I 芸術工学特別研究 II 芸術工学特別研究 III 芸術工学特別研究 IV 芸術工学演習 コネクティッドデザイン デザインイノベーション SD特別プロジェクト I SD特別プロジェクト II (ストラテジックデザイン) SD特別プロジェクト III (ソーシャルデザイン) SD特別プロジェクト IV (アントレプレナー) スタジオプロジェクトI-A スタジオプロジェクトI-B スタジオプロジェクトII-A スタジオプロジェクトII-B スタジオプロジェクトIII-A スタジオプロジェクトIII-B スタジオプロジェクトIV-A スタジオプロジェクトIV-B	1前①～② 1後③～④ 2前①～② 2後③～④ 1後④ 1後③ 1後④ 1前①～② 1後③～④ 1後③～④ 1後③～④ 1前① 1前① 1前② 1前② 1後③ 1後③ 1後④ 1後④	4 4 4 4 4 1 1 1 1 1 1 2 2 2 2 2 2 2 2	1 1 1 1 2 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	九州大学 芸術工学研究院 助教 (平28.8)	5日

68	専	助教	サカイ ケンイチ 澤井 賢一 <令和4年4月>	博士 (情報理工学)	芸術工学特別研究 I 芸術工学特別研究 II 芸術工学特別研究 III 芸術工学特別研究 IV 芸術工学演習 人間情報工学 人間生活デザイン特論 ※ スタジオプロジェクト I-A スタジオプロジェクト I-B スタジオプロジェクト II-A スタジオプロジェクト II-B スタジオプロジェクト III-A スタジオプロジェクト III-B スタジオプロジェクト IV-A スタジオプロジェクト IV-B	1前①～② 1後③～④ 2前①～② 2後③～④ 1後④ 1前① 1前① 1前① 1前② 1前② 1後③ 1後③ 1後④ 1後④	4 4 4 4 4 1 0.1 2 2 2 2 2 2 2 2	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	九州大学 芸術工学研究院 助教 (令2.4)	5日
69	専	助教	シムラ ヒロユキ 下村 萌 <令和4年4月>	学士 (芸術工学)	デザインと日本A デザインと日本B	1前① 1前②	2 2	1 1	九州大学 芸術工学研究院 助教 (令2.6)	5日
70	専	助教	サカイ モトヒデ 関 元秀 <令和4年4月>	博士 (理学)	芸術工学特別研究 I 芸術工学特別研究 II 芸術工学特別研究 III 芸術工学特別研究 IV 芸術工学演習 数理モデリングA 【隔年】 数理モデリングB 【隔年】 スタジオプロジェクト I-A スタジオプロジェクト I-B スタジオプロジェクト II-A スタジオプロジェクト II-B スタジオプロジェクト III-A スタジオプロジェクト III-B スタジオプロジェクト IV-A スタジオプロジェクト IV-B	1前①～② 1後③～④ 2前①～② 2後③～④ 1後④ 1前① 1前② 1前① 1前① 1前② 1前② 1後③ 1後③ 1後④ 1後④	4 4 4 4 4 1 1 2 2 2 2 2 2 2 2	1 1 1 1 2 1 1 1 1 1 1 1 1 1	九州大学 芸術工学研究院 助教 (平成29.10)	5日
71	専	助教	ゼミソン ダリル スティーブソン Jamieson Daryl Steven <令和4年4月>	Doctor of Philosophy in Music (イギリス)	芸術工学特別研究 I 芸術工学特別研究 II 芸術工学特別研究 III 芸術工学特別研究 IV 芸術工学演習 作曲学特論 民族音楽学特論 言語学特論 音響設計特別講話 輪講 スタジオプロジェクト I-A スタジオプロジェクト I-B スタジオプロジェクト II-A スタジオプロジェクト II-B スタジオプロジェクト III-A スタジオプロジェクト III-B スタジオプロジェクト IV-A スタジオプロジェクト IV-B	1前①～② 1後③～④ 2前①～② 2後③～④ 1後④ 1後③～④ 1後③～④ 1前①～② 1前①～② 1前①～② 1前① 1前① 1前② 1前② 1後③ 1後③ 1後④ 1後④	4 4 4 4 4 2 0.7 1 0.1 2 2 2 2 2 2 2 2	1 1 1 1 2 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	九州大学 芸術工学研究院 助教 (令2.3)	5日
72	専	助教	トウキョウキキ コロ 藤(北崎) 紀里子 <令和4年4月>	修士 (芸術工学)	芸術工学特別研究 I 芸術工学特別研究 II 芸術工学特別研究 III 芸術工学特別研究 IV 芸術工学演習 グラフィックデザイン特論 メディアデザインプレゼンテーション演習 スタジオプロジェクト I-A スタジオプロジェクト I-B スタジオプロジェクト II-A スタジオプロジェクト II-B スタジオプロジェクト III-A スタジオプロジェクト III-B スタジオプロジェクト IV-A スタジオプロジェクト IV-B	1前①～② 1後③～④ 2前①～② 2後③～④ 1後④ 1前② 2後③ 1前① 1前① 1前② 1前② 1後③ 1後③ 1後④ 1後④	4 4 4 4 4 1 2 2 2 2 2 2 2 2 2	1 1 1 1 2 1 1 1 1 1 1 1 1 1	九州大学 芸術工学研究院 助教 (平15.10)	5日

73	専	助教	ナガツ ユイロウ 長津 結一郎 <令和4年4月>	博士 (学術)	芸術工学特別研究 I 芸術工学特別研究 II 芸術工学特別研究 III 芸術工学特別研究 IV 芸術工学演習 アーツマネジメント スタジオプロジェクトI-A スタジオプロジェクトI-B スタジオプロジェクトII-A スタジオプロジェクトII-B スタジオプロジェクトIII-A スタジオプロジェクトIII-B スタジオプロジェクトIV-A スタジオプロジェクトIV-B	1前①～② 1後③～④ 2前①～② 2後③～④ 1後④ 1後④ 1前① 1前① 1前② 1前② 1後③ 1後③ 1後④ 1後④	4 4 4 4 4 1 2 2 2 2 2 2 2 2	1 1 1 1 2 1 1 1 1 1 1 1 1 1	九州大学 芸術工学研究院 助教 (平28.4)	5日
74	専	助教	フノ ミル 冬野 美晴 <令和4年4月>	博士 (文学)	芸術工学特別研究 I 芸術工学特別研究 II 芸術工学特別研究 III 芸術工学特別研究 IV 芸術工学演習 マルチモーダル・コミュニケーション特論 ※ メディアデザインプレゼンテーション演習 スタジオプロジェクトI-A スタジオプロジェクトI-B スタジオプロジェクトII-A スタジオプロジェクトII-B スタジオプロジェクトIII-A スタジオプロジェクトIII-B スタジオプロジェクトIV-A スタジオプロジェクトIV-B	1前①～② 1後③～④ 2前①～② 2後③～④ 1後④ 1前② 2後③ 1前① 1前① 1前② 1前② 1後③ 1後③ 1後④ 1後④	4 4 4 4 4 0.8 2 2 2 2 2 2 2 2 2	1 1 1 1 2 1 1 1 1 1 1 1 1 1	九州大学 芸術工学研究院 助教 (平25.9)	5日
75	専	助教	ムカミ ヤス 村上 泰樹 <令和4年4月>	博士 (情報科学)	芸術工学特別研究 I 芸術工学特別研究 II 芸術工学特別研究 III 芸術工学特別研究 IV 芸術工学演習 福祉音響学 音響設計特別講話 輪講 スタジオプロジェクトI-A スタジオプロジェクトI-B スタジオプロジェクトII-A スタジオプロジェクトII-B スタジオプロジェクトIII-A スタジオプロジェクトIII-B スタジオプロジェクトIV-A スタジオプロジェクトIV-B	1前①～② 1後③～④ 2前①～② 2後③～④ 1後④ 1後③～④ 1前①～② 1前①～② 1前① 1前① 1前② 1前② 1後③ 1後③ 1後④ 1後④	4 4 4 4 4 2 0.1 2 2 2 2 2 2 2 2 2	1 1 1 1 2 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	九州大学 芸術工学研究院 助教 (令2.10)	5日
76	専	助教	キノト コキ 森本 有紀 <令和4年4月>	博士 (芸術工学)	芸術工学特別研究 I 芸術工学特別研究 II 芸術工学特別研究 III 芸術工学特別研究 IV 芸術工学演習 コンピュータサイエンス特論 メディアデザインプレゼンテーション演習 スタジオプロジェクトI-A スタジオプロジェクトI-B スタジオプロジェクトII-A スタジオプロジェクトII-B スタジオプロジェクトIII-A スタジオプロジェクトIII-B スタジオプロジェクトIV-A スタジオプロジェクトIV-B	1前①～② 1後③～④ 2前①～② 2後③～④ 1後④ 1前① 2後③ 1前① 1前① 1前② 1前② 1後③ 1後③ 1後④ 1後④	4 4 4 4 4 1 2 2 2 2 2 2 2 2 2	1 1 1 1 2 1 1 1 1 1 1 1 1 1	九州大学 芸術工学研究院 助教 (平28.8)	5日
77	専	助教	ヨシムリ リイ 吉村 理一 <令和4年4月>	修士 (文学)	芸術工学特別研究 I 芸術工学特別研究 II 芸術工学特別研究 III 芸術工学特別研究 IV 芸術工学演習 マルチモーダル・コミュニケーション特論 ※ メディアデザインプレゼンテーション演習 スタジオプロジェクトI-A スタジオプロジェクトI-B スタジオプロジェクトII-A スタジオプロジェクトII-B スタジオプロジェクトIII-A スタジオプロジェクトIII-B スタジオプロジェクトIV-A スタジオプロジェクトIV-B	1前①～② 1後③～④ 2前①～② 2後③～④ 1後④ 1前② 2後③ 1前① 1前① 1前② 1前② 1後③ 1後③ 1後④ 1後④	4 4 4 4 4 0.3 2 2 2 2 2 2 2 2 2	1 1 1 1 2 1 1 1 1 1 1 1 1 1	九州大学 芸術工学研究院 助教 (平30.6)	5日

86	兼担	講師	ツチヤ ジェン 土屋 潤 <令和4年4月>	博士 (工学)	芸術工学特別研究Ⅰ 芸術工学特別研究Ⅱ 芸術工学特別研究Ⅲ 芸術工学特別研究Ⅳ 芸術工学演習 環境材料学特論 環境デザインプロジェクトA 環境デザインプロジェクトB スタジオプロジェクトI-A スタジオプロジェクトI-B スタジオプロジェクトII-A スタジオプロジェクトII-B スタジオプロジェクトIII-A スタジオプロジェクトIII-B スタジオプロジェクトIV-A スタジオプロジェクトIV-B	1前①～② 1後③～④ 2前①～② 2後③～④ 1後④ 1後③～④ 1前①～② 1後③～④ 1前① 1前① 1前② 1前② 1前③ 1後③ 1後④ 1後④	4 4 4 4 4 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2	1 1 1 1 2 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	九州大学 芸術工学研究院 講師 (平30.11)	5日
87	兼担	助教	モトムラ ユキ 元村 祐貴 <令和4年4月>	博士 (感性学)	芸術工学特別研究Ⅰ 芸術工学特別研究Ⅱ 芸術工学特別研究Ⅲ 芸術工学特別研究Ⅳ 芸術工学演習 脳・行動生理学特論A 脳・行動生理学特論B 人間生活デザイン特論 ※ スタジオプロジェクトI-A スタジオプロジェクトI-B スタジオプロジェクトII-A スタジオプロジェクトII-B スタジオプロジェクトIII-A スタジオプロジェクトIII-B スタジオプロジェクトIV-A スタジオプロジェクトIV-B	1前①～② 1後③～④ 2前①～② 2後③～④ 1後④ 1前① 1前② 1前① 1前① 1前① 1前② 1前② 1後③ 1後③ 1後④ 1後④ 1後④	4 4 4 4 4 0.5 0.5 0.1 2 2 2 2 2 2 2 2	1 1 1 1 2 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	九州大学 芸術工学研究院 助教 (平29.4)	5日

教 員 の 氏 名 等												
(大学院芸術工学府芸術工学専攻 博士後期課程)												
調査 番号	専任等 区分	職位	フリガナ 氏名 <就任(予定)年月>	年齢	保有 学位等	月額 基本給 (千円)	担当授業科目の名称	配当年次	担 当 単位数	年 間 開講数	現 職 (就任年月)	申請に係る大学等 の職務に従事する 週当たり平均日数
1	専	教授 (学府長)	タニ マサカズ 谷 正和 <令和4年4月>		Doctor of Philosophy (7/19)		リサーチ研修Ⅰ リサーチ研修Ⅱ リサーチプロジェクトⅠ	1前①～② 1後③～④ 1前①～②	2 2 2	1 1 1	九州大学 芸術工学研究院 教授 (平15.10)	5日
2	専	教授	イシイ ヒロユキ 伊藤 裕之 <令和4年4月>		博士 (文学) ※		リサーチ研修Ⅰ リサーチ研修Ⅱ リサーチプロジェクトⅠ リサーチプロジェクトⅡ リサーチプロジェクトⅢ	1前①～② 1後③～④ 1前①～② 2前①～② 3前①～②	2 2 2 2 2	1 1 1 1 1	九州大学 芸術工学研究院 教授 (平15.10)	5日
3	専	教授	イノウエ シゲキ 井上 滋樹 <令和4年4月>		博士 (芸術工学)		リサーチ研修Ⅰ リサーチ研修Ⅱ リサーチプロジェクトⅠ リサーチプロジェクトⅡ リサーチプロジェクトⅢ	1前①～② 1後③～④ 1前①～② 2前①～② 3前①～②	2 2 2 2 2	1 1 1 1 1	九州大学 芸術工学研究院 教授 (平29.4.1)	5日
4	専	教授	イハラ ヒサユキ 伊原 久裕 <令和4年4月>		博士 (芸術工学)		リサーチ研修Ⅰ リサーチ研修Ⅱ リサーチプロジェクトⅠ リサーチプロジェクトⅡ	1前①～② 1後③～④ 1前①～② 2前①～②	2 2 2 2	1 1 1 1	九州大学 芸術工学研究院 教授 (平15.10)	5日
5	専	教授	ウカイ テツオ 鞆飼 哲矢 <令和4年4月>		修士 (工学)		リサーチ研修Ⅰ リサーチ研修Ⅱ リサーチプロジェクトⅠ リサーチプロジェクトⅡ リサーチプロジェクトⅢ	1前①～② 1後③～④ 1前①～② 2前①～② 3前①～②	2 2 2 2 2	1 1 1 1 1	九州大学 芸術工学研究院 教授 (平21.8)	5日

調査 番号	専任等 区分	職位	フリガナ 氏名 <就任(予定)年月>	年齢	保有 学位等	月額 基本給 (千円)	担当授業科目の名称	配当年次	担 当 単 位 数	年 間 開 講 数	現 職 (就任年月)	申請に係る大学等 の職務に従事する 週当たり平均日数
6	専	教授	オオイ ナオキ 大井 尚行 <令和4年4月>		工学博士		リサーチ研修Ⅰ リサーチ研修Ⅱ リサーチプロジェクトⅠ リサーチプロジェクトⅡ リサーチプロジェクトⅢ	1前①～② 1後③～④ 1前①～② 2前①～② 3前①～②	2 2 2 2 2	1 1 1 1 1	九州大学 芸術工学研究院 教授 (平15.10)	5日
7	専	教授	オカタ ヨシト 尾方 義人 <令和4年4月>		博士 (工学)		リサーチ研修Ⅰ リサーチ研修Ⅱ リサーチプロジェクトⅠ リサーチプロジェクトⅡ リサーチプロジェクトⅢ	1前①～② 1後③～④ 1前①～② 2前①～② 3前①～②	2 2 2 2 2	1 1 1 1 1	九州大学 芸術工学研究院 教授 (平20.4)	5日
8	専	教授	オモト アキラ 尾本 章 <令和4年4月>		博士 (工学)		リサーチ研修Ⅰ リサーチ研修Ⅱ リサーチプロジェクトⅠ リサーチプロジェクトⅡ リサーチプロジェクトⅢ	1前①～② 1後③～④ 1前①～② 2前①～② 3前①～②	2 2 2 2 2	1 1 1 1 1	九州大学 芸術工学研究院 教授 (平15.10)	5日
9	専	教授	オホツヨシ 包清 博之 <令和4年4月>		博士 (農学)		リサーチ研修Ⅰ リサーチ研修Ⅱ リサーチプロジェクトⅠ	1前①～② 1後③～④ 1前①～②	2 2 2	1 1 1	九州大学 芸術工学研究院 教授 (平15.10)	5日
10	専	教授	カフシゲトキヒロ 籙本 時彦 <令和4年4月>		博士 (芸術工学)		リサーチ研修Ⅰ リサーチ研修Ⅱ リサーチプロジェクトⅠ リサーチプロジェクトⅡ リサーチプロジェクトⅢ	1前①～② 1後③～④ 1前①～② 2前①～② 3前①～②	2 2 2 2 2	1 1 1 1 1	九州大学 芸術工学研究院 教授 (平15.10)	5日

調査 番号	専任等 区分	職位	フリガナ 氏名 <就任(予定)年月>	年齢	保有 学位等	月額 基本給 (千円)	担当授業科目の名称	配当年次	担 当 単 位 数	年 間 開 講 数	現 職 (就任年月)	申請に係る大学等 の職務に従事する 週当たり平均日数
11	専	教授	キム デウ 金 大雄 <令和4年4月>		博士 (芸術工学)		リサーチ研修Ⅰ リサーチ研修Ⅱ リサーチプロジェクトⅠ リサーチプロジェクトⅡ リサーチプロジェクトⅢ	1前①～② 1後③～④ 1前①～② 2前①～② 3前①～②	2 2 2 2 2	1 1 1 1 1	九州大学 芸術工学研究院 教授 (平15.10)	5日
12	専	教授	コカ トオル 古賀 徹 <令和4年4月>		博士 (文学) ※		リサーチ研修Ⅰ リサーチ研修Ⅱ リサーチプロジェクトⅠ リサーチプロジェクトⅡ リサーチプロジェクトⅢ	1前①～② 1後③～④ 1前①～② 2前①～② 3前①～②	2 2 2 2 2	1 1 1 1 1	九州大学 芸術工学研究院 教授 (平15.10)	5日
13	専	教授	コトウ(祐利) カコ 近藤(笠利) 加代子 <令和4年4月>		博士 (工学) ※		リサーチ研修Ⅰ リサーチ研修Ⅱ リサーチプロジェクトⅠ リサーチプロジェクトⅡ リサーチプロジェクトⅢ	1前①～② 1後③～④ 1前①～② 2前①～② 3前①～②	2 2 2 2 2	1 1 1 1 1	九州大学 芸術工学研究院 教授 (平15.10)	5日
14	専	教授	スガ ショウジ 須長 正治 <令和4年4月>		博士 (工学)		リサーチ研修Ⅰ リサーチ研修Ⅱ リサーチプロジェクトⅠ リサーチプロジェクトⅡ リサーチプロジェクトⅢ	1前①～② 1後③～④ 1前①～② 2前①～② 3前①～②	2 2 2 2 2	1 1 1 1 1	九州大学 芸術工学研究院 教授 (平15.10)	5日
15	専	教授	タケノチ カズキ 竹之内 和樹 <令和4年4月>		工学博士 ※		リサーチ研修Ⅰ リサーチ研修Ⅱ リサーチプロジェクトⅠ リサーチプロジェクトⅡ リサーチプロジェクトⅢ	1前①～② 1後③～④ 1前①～② 2前①～② 3前①～②	2 2 2 2 2	1 1 1 1 1	九州大学 芸術工学研究院 教授 (平15.10)	5日

調査 番号	専任等 区分	職位	フリガナ 氏名 <就任(予定)年月>	年齢	保有 学位等	月額 基本給 (千円)	担当授業科目の名称	配当年次	担 当 単 位 数	年 間 開 講 数	現 職 (就任年月)	申請に係る大学等 の職務に従事する 週当たり平均日数
16	専	教授	タノエ ケンイチ 田上 健一 <令和4年4月>		博士 (工学)		リサーチ研修Ⅰ リサーチ研修Ⅱ リサーチプロジェクトⅠ リサーチプロジェクトⅡ リサーチプロジェクトⅢ	1前①～② 1後③～④ 1前①～② 2前①～② 3前①～②	2 2 2 2 2	1 1 1 1 1	九州大学 芸術工学研究院 教授 (平15.10)	5日
17	専	教授	ツルノ レイジ 鶴野 玲治 <令和4年4月>		博士 (工学)		リサーチ研修Ⅰ リサーチ研修Ⅱ リサーチプロジェクトⅠ リサーチプロジェクトⅡ リサーチプロジェクトⅢ	1前①～② 1後③～④ 1前①～② 2前①～② 3前①～②	2 2 2 2 2	1 1 1 1 1	九州大学 芸術工学研究院 教授 (平15.10)	5日
18	専	教授	トモタリ ミカ 知足 美加子 <令和4年4月>		博士 (芸術学)		リサーチ研修Ⅰ リサーチ研修Ⅱ リサーチプロジェクトⅠ リサーチプロジェクトⅡ リサーチプロジェクトⅢ	1前①～② 1後③～④ 1前①～② 2前①～② 3前①～②	2 2 2 2 2	1 1 1 1 1	九州大学 芸術工学研究院 教授 (平15.10)	5日
19	専	教授	ハラ ケンジ 原 健二 <令和4年4月>		博士 (工学)		リサーチ研修Ⅰ リサーチ研修Ⅱ リサーチプロジェクトⅠ リサーチプロジェクトⅡ リサーチプロジェクトⅢ	1前①～② 1後③～④ 1前①～② 2前①～② 3前①～②	2 2 2 2 2	1 1 1 1 1	九州大学 芸術工学研究院 教授 (平16.1)	5日
20	専	教授	ヒライ ヤスキ 平井 康之 <令和4年4月>		博士 (芸術工学)		リサーチ研修Ⅰ リサーチ研修Ⅱ リサーチプロジェクトⅠ リサーチプロジェクトⅡ リサーチプロジェクトⅢ	1前①～② 1後③～④ 1前①～② 2前①～② 3前①～②	2 2 2 2 2	1 1 1 1 1	九州大学 芸術工学研究院 教授 (平15.10)	5日

調査 番号	専任等 区分	職位	フリガナ 氏名 <就任(予定)年月>	年齢	保有 学位等	月額 基本給 (千円)	担当授業科目の名称	配当年次	担 当 単 位 数	年 間 開 講 数	現 職 (就任年月)	申請に係る大学等 の職務に従事する 週当たり平均日数
21	専	教授	マエダ ケイジ 前田 亨史 <令和4年4月>		博士 (医学) 博士 (芸術工学)		リサーチ研修Ⅰ リサーチ研修Ⅱ リサーチプロジェクトⅠ リサーチプロジェクトⅡ リサーチプロジェクトⅢ	1前①～② 1後③～④ 1前①～② 2前①～② 3前①～②	2 2 2 2 2	1 1 1 1 1	九州大学 芸術工学研究院 教授 (平27.4)	5日
22	専	教授	ムラモト リシ 村木 里志 <令和4年4月>		博士 (学術)		リサーチ研修Ⅰ リサーチ研修Ⅱ リサーチプロジェクトⅠ リサーチプロジェクトⅡ リサーチプロジェクトⅢ	1前①～② 1後③～④ 1前①～② 2前①～② 3前①～②	2 2 2 2 2	1 1 1 1 1	九州大学 芸術工学研究院 教授 (平15.10)	5日
23	専	教授	ヤコウ マサト 矢向 正人 <令和2年4月>		博士 (学術)		リサーチ研修Ⅰ リサーチ研修Ⅱ リサーチプロジェクトⅠ	1前①～② 1後③～④ 1前①～②	2 2 2	1 1 1	九州大学 芸術工学研究院 教授 (平15.10)	5日
24	専	准教授	アサヒロ カズオ 朝廣 和夫 <令和4年4月>		博士 (芸術工学)		リサーチ研修Ⅰ リサーチ研修Ⅱ リサーチプロジェクトⅠ リサーチプロジェクトⅡ リサーチプロジェクトⅢ	1前①～② 1後③～④ 1前①～② 2前①～② 3前①～②	2 2 2 2 2	1 1 1 1 1	九州大学 芸術工学研究院 准教授 (平15.10)	5日
25	専	准教授	アサヒノ マサヒ 麻生 典 <令和4年4月>		博士 (法学)		リサーチ研修Ⅰ リサーチ研修Ⅱ リサーチプロジェクトⅠ リサーチプロジェクトⅡ リサーチプロジェクトⅢ	1前①～② 1後③～④ 1前①～② 2前①～② 3前①～②	2 2 2 2 2	1 1 1 1 1	九州大学 芸術工学研究院 准教授 (平25.4)	5日

調査 番号	専任等 区分	職位	フリガナ 氏名 <就任(予定)年月>	年齢	保有 学位等	月額 基本給 (千円)	担当授業科目の名称	配当年次	担 当 単 位 数	年 間 開 講 数	現 職 (就任年月)	申請に係る大学等 の職務に従事する 週当たり平均日数
26	専	准教授	イシイ タツロウ 石井 達郎 <令和4年4月>		修士 (芸術工学) ※		リサーチ研修Ⅰ リサーチ研修Ⅱ リサーチプロジェクトⅠ リサーチプロジェクトⅡ リサーチプロジェクトⅢ	1前①～② 1後③～④ 1前①～② 2前①～② 3前①～②	2 2 2 2	1 1 1 1	九州大学 芸術工学研究院 准教授 (平15.10)	5日
27	専	准教授	イトウ ヒロシ 伊藤 浩史 <令和4年4月>		博士 (理学)		リサーチ研修Ⅰ リサーチ研修Ⅱ リサーチプロジェクトⅠ リサーチプロジェクトⅡ リサーチプロジェクトⅢ	1前①～② 1後③～④ 1前①～② 2前①～② 3前①～②	2 2 2 2	1 1 1 1	九州大学 芸術工学研究院 准教授 (平23.10)	5日
28	専	准教授	イノウエ コウヘイ 井上 光平 <令和4年4月>		博士 (工学)		リサーチ研修Ⅰ リサーチ研修Ⅱ リサーチプロジェクトⅠ リサーチプロジェクトⅡ リサーチプロジェクトⅢ	1前①～② 1後③～④ 1前①～② 2前①～② 3前①～②	2 2 2 2	1 1 1 1	九州大学 芸術工学研究院 准教授 (平15.10)	5日
29	専	准教授	イノウエ トモオ 井上 朝雄 <令和4年4月>		博士 (工学) ※		リサーチ研修Ⅰ リサーチ研修Ⅱ リサーチプロジェクトⅠ リサーチプロジェクトⅡ リサーチプロジェクトⅢ	1前①～② 1後③～④ 1前①～② 2前①～② 3前①～②	2 2 2 2	1 1 1 1	九州大学 芸術工学研究院 准教授 (平15.12)	5日
30	専	准教授	ウエダ カズオ 上田 和夫 <令和4年4月>		博士 (文学) ※		リサーチ研修Ⅰ リサーチ研修Ⅱ リサーチプロジェクトⅠ リサーチプロジェクトⅡ リサーチプロジェクトⅢ	1前①～② 1後③～④ 1前①～② 2前①～② 3前①～②	2 2 2 2	1 1 1 1	九州大学 芸術工学研究院 准教授 (平15.10)	5日

調査 番号	専任等 区分	職位	フリガナ 氏名 <就任(予定)年月>	年齢	保有 学位等	月額 基本給 (千円)	担当授業科目の名称	配当年次	担 当 単 位 数	年 間 開 講 数	現 職 (就任年月)	申請に係る大学等 の職務に従事する 週当たり平均日数
31	専	准教授	ウヅマ ナトシ 牛尼 剛聡 <令和4年4月>		博士 (工学) ※		リサーチ研修Ⅰ リサーチ研修Ⅱ リサーチプロジェクトⅠ リサーチプロジェクトⅡ リサーチプロジェクトⅢ	1前①～② 1後③～④ 1前①～② 2前①～② 3前①～②	2 2 2 2 2	1 1 1 1 1	九州大学 芸術工学研究院 准教授 (平15.10)	5日
32	専	准教授	オシマ ヒサ 大島 久雄 <令和4年4月>		文学修士 ※		リサーチ研修Ⅰ リサーチ研修Ⅱ リサーチプロジェクトⅠ リサーチプロジェクトⅡ リサーチプロジェクトⅢ	1前①～② 1後③～④ 1前①～② 2前①～② 3前①～②	2 2 2 2 2	1 1 1 1 1	九州大学 芸術工学研究院 准教授 (平15.10)	5日
33	専	准教授	オノ ナキ 小野 直樹 <令和4年4月>		博士 (工学)		リサーチ研修Ⅰ リサーチ研修Ⅱ リサーチプロジェクトⅠ リサーチプロジェクトⅡ リサーチプロジェクトⅢ	1前①～② 1後③～④ 1前①～② 2前①～② 3前①～②	2 2 2 2 2	1 1 1 1 1	九州大学 芸術工学研究院 准教授 (平15.10)	5日
34	専	准教授	カト ユキ 加藤 悠希 <令和4年4月>		博士 (工学)		リサーチ研修Ⅰ リサーチ研修Ⅱ リサーチプロジェクトⅠ リサーチプロジェクトⅡ リサーチプロジェクトⅢ	1前①～② 1後③～④ 1前①～② 2前①～② 3前①～②	2 2 2 2 2	1 1 1 1 1	九州大学 芸術工学研究院 准教授 (平28.8)	5日
35	専	准教授	カハラ ヒコ 河原 一彦 <令和4年4月>		博士 (芸術工学)		リサーチ研修Ⅰ リサーチ研修Ⅱ リサーチプロジェクトⅠ リサーチプロジェクトⅡ リサーチプロジェクトⅢ	1前①～② 1後③～④ 1前①～② 2前①～② 3前①～②	2 2 2 2 2	1 1 1 1 1	九州大学 芸術工学研究院 准教授 (平15.10)	5日

調査 番号	専任等 区分	職位	フリガナ 氏名 <就任(予定)年月>	年齢	保有 学位等	月額 基本給 (千円)	担当授業科目の名称	配当年次	担 当 単 位 数	年 間 開 講 数	現 職 (就任年月)	申請に係る大学等 の職務に従事する 週当たり平均日数
36	専	准教授	サイノウ トシミ 齋藤 俊文 <令和4年4月>		修士 (数学)		リサーチ研修Ⅰ リサーチ研修Ⅱ リサーチプロジェクトⅠ リサーチプロジェクトⅡ リサーチプロジェクトⅢ	1前①～② 1後③～④ 1前①～② 2前①～② 3前①～②	2 2 2 2 2	1 1 1 1 1	九州大学 芸術工学研究院 准教授 (平18.4)	5日
37	専	准教授	チジマ トシヲ 鮫島 俊哉 <令和4年4月>		博士 (工学)		リサーチ研修Ⅰ リサーチ研修Ⅱ リサーチプロジェクトⅠ リサーチプロジェクトⅡ リサーチプロジェクトⅢ	1前①～② 1後③～④ 1前①～② 2前①～② 3前①～②	2 2 2 2 2	1 1 1 1 1	九州大学 芸術工学研究院 准教授 (平15.10)	5日
38	専	准教授	ジヨウ カズヒロ 城 一裕 <令和4年4月>		博士 (芸術工学)		リサーチ研修Ⅰ リサーチ研修Ⅱ リサーチプロジェクトⅠ リサーチプロジェクトⅡ リサーチプロジェクトⅢ	1前①～② 1後③～④ 1前①～② 2前①～② 3前①～②	2 2 2 2 2	1 1 1 1 1	九州大学 芸術工学研究院 准教授 (平28.3)	5日
39	専	准教授	スキト ヨシカ 杉本 美貴 <令和4年4月>		博士 (学術)		リサーチ研修Ⅰ リサーチ研修Ⅱ リサーチプロジェクトⅠ リサーチプロジェクトⅡ リサーチプロジェクトⅢ	1前①～② 1後③～④ 1前①～② 2前①～② 3前①～②	2 2 2 2 2	1 1 1 1 1	九州大学 芸術工学研究院 准教授 (平24.4)	5日
40	専	准教授	セノウ タケル 妹尾 武治 <令和4年4月>		博士 (心理学) ※		リサーチ研修Ⅰ リサーチ研修Ⅱ リサーチプロジェクトⅠ リサーチプロジェクトⅡ リサーチプロジェクトⅢ	1前①～② 1後③～④ 1前①～② 2前①～② 3前①～②	2 2 2 2 2	1 1 1 1 1	九州大学 芸術工学研究院 准教授 (平24.12)	5日

調査 番号	専任等 区分	職位	フリガナ 氏名 <就任(予定)年月>	年齢	保有 学位等	月額 基本給 (千円)	担当授業科目の名称	配当年次	担 当 単 位 数	年 間 開 講 数	現 職 (就任年月)	申請に係る大学等 の職務に従事する 週当たり平均日数
41	専	准教授	タカガ マサキ 高田 正幸 <令和4年4月>		博士 (工学) ※		リサーチ研修Ⅰ リサーチ研修Ⅱ リサーチプロジェクトⅠ リサーチプロジェクトⅡ リサーチプロジェクトⅢ	1前①～② 1後③～④ 1前①～② 2前①～② 3前①～②	2 2 2 2 2	1 1 1 1 1	九州大学 芸術工学研究院 准教授 (平15.10)	5日
42	専	准教授	タカトリ チカ 高取 千佳 <令和4年4月>		博士 (工学)		リサーチ研修Ⅰ リサーチ研修Ⅱ リサーチプロジェクトⅠ リサーチプロジェクトⅡ リサーチプロジェクトⅢ	1前①～② 1後③～④ 1前①～② 2前①～② 3前①～②	2 2 2 2 2	1 1 1 1 1	九州大学 芸術工学研究院 准教授 (令和元.10)	5日
43	専	准教授	タムラ リョウイチ 田村 良一 <令和4年4月>		博士 (工学)		リサーチ研修Ⅰ リサーチ研修Ⅱ リサーチプロジェクトⅠ リサーチプロジェクトⅡ リサーチプロジェクトⅢ	1前①～② 1後③～④ 1前①～② 2前①～② 3前①～②	2 2 2 2 2	1 1 1 1 1	九州大学 芸術工学研究院 准教授 (平15.10)	5日
44	専	准教授	トクサ タロウ 徳久 悟 <令和4年4月>		博士 (政策・経済)		リサーチ研修Ⅰ リサーチ研修Ⅱ リサーチプロジェクトⅠ リサーチプロジェクトⅡ リサーチプロジェクトⅢ	1前①～② 1後③～④ 1前①～② 2前①～② 3前①～②	2 2 2 2 2	1 1 1 1 1	九州大学 芸術工学研究院 准教授 (平31.4)	5日
45	専	准教授	ナカムラ ミナ 中村 美亜 <令和4年4月>		博士 (学術)		リサーチ研修Ⅰ リサーチ研修Ⅱ リサーチプロジェクトⅠ リサーチプロジェクトⅡ リサーチプロジェクトⅢ	1前①～② 1後③～④ 1前①～② 2前①～② 3前①～②	2 2 2 2 2	1 1 1 1 1	九州大学 芸術工学研究院 准教授 (平26.4)	5日

調査 番号	専任等 区分	職位	フリガナ 氏名 <就任(予定)年月>	年齢	保有 学位等	月額 基本給 (千円)	担当授業科目の名称	配当年次	担 当 単 位 数	年 間 開 講 数	現 職 (就任年月)	申請に係る大学等 の職務に従事する 週当たり平均日数
46	専	准教授	ニシダ(希) ヒロコ 西田(希) 絢子 <令和4年4月>		博士 (音楽学)		リサーチ研修Ⅰ	1前①～②	2	1	九州大学 芸術工学研究院 准教授 (平23.4)	5日
							リサーチ研修Ⅱ	1後③～④	2	1		
							リサーチプロジェクトⅠ	1前①～②	2	1		
							リサーチプロジェクトⅡ	2前①～②	2	1		
							リサーチプロジェクトⅢ	3前①～②	2	1		
47	専	准教授	ハヤシ(7&キ) ユリコ 早瀬(古木) 百合子 <令和4年4月>		博士 (エレクトロニクス)		リサーチ研修Ⅰ	1前①～②	2	1	九州大学 グローバル イノベーション センター 准教授 (平25.5)	5日
							リサーチ研修Ⅱ	1後③～④	2	1		
							リサーチプロジェクトⅠ	1前①～②	2	1		
							リサーチプロジェクトⅡ	2前①～②	2	1		
							リサーチプロジェクトⅢ	3前①～②	2	1		
48	専	准教授	ヒヤマ チヒロ 平松 千尋 <令和4年4月>		博士 (生命科学)		リサーチ研修Ⅰ	1前①～②	2	1	九州大学 芸術工学研究院 准教授 (平25.9)	5日
							リサーチ研修Ⅱ	1後③～④	2	1		
							リサーチプロジェクトⅠ	1前①～②	2	1		
							リサーチプロジェクトⅡ	2前①～②	2	1		
							リサーチプロジェクトⅢ	3前①～②	2	1		
49	専	准教授	フクシマ アキ 福島 綾子 <令和4年4月>		博士 (工学)		リサーチ研修Ⅰ	1前①～②	2	1	九州大学 芸術工学研究院 准教授 (平18.2)	5日
							リサーチ研修Ⅱ	1後③～④	2	1		
							リサーチプロジェクトⅠ	1前①～②	2	1		
							リサーチプロジェクトⅡ	2前①～②	2	1		
							リサーチプロジェクトⅢ	3前①～②	2	1		
50	専	准教授	フジ トモキ 藤 智亮 <令和4年4月>		博士 (芸術工学)		リサーチ研修Ⅰ	1前①～②	2	1	九州大学 芸術工学研究院 准教授 (平15.10)	5日
							リサーチ研修Ⅱ	1後③～④	2	1		
							リサーチプロジェクトⅠ	1前①～②	2	1		
							リサーチプロジェクトⅡ	2前①～②	2	1		
							リサーチプロジェクトⅢ	3前①～②	2	1		

調査 番号	専任等 区分	職位	フリガナ 氏名 <就任(予定)年月>	年齢	保有 学位等	月額 基本給 (千円)	担当授業科目の名称	配当年次	担 当 単位数	年 間 開講数	現 職 (就任年月)	申請に係る大学等 の職務に従事する 週当たり平均日数
51	専	准教授	ホル マイケル Hall Michael <令和4年4月>		博士 (芸術工学)		リサーチ研修Ⅰ リサーチ研修Ⅱ リサーチプロジェクトⅠ リサーチプロジェクトⅡ	1前①～② 1後③～④ 1前①～② 2前①～②	2 2 2 2	1 1 1 1	九州大学 芸術工学研究院 准教授 (平18.4)	5日
52	専	准教授	マツマ ヒロユキ 松隈 浩之 <令和4年4月>		博士 (芸術工学)		リサーチ研修Ⅰ リサーチ研修Ⅱ リサーチプロジェクトⅠ リサーチプロジェクトⅡ リサーチプロジェクトⅢ	1前①～② 1後③～④ 1前①～② 2前①～② 3前①～②	2 2 2 2 2	1 1 1 1 1	九州大学 芸術工学研究院 准教授 (平15.10)	5日
53	専	准教授	マツマ アサネ 松前 あかね <令和4年4月>		博士 (知識科学) 法務博士 (専門職)		リサーチ研修Ⅰ リサーチ研修Ⅱ リサーチプロジェクトⅠ リサーチプロジェクトⅡ リサーチプロジェクトⅢ	1前①～② 1後③～④ 1前①～② 2前①～② 3前①～②	2 2 2 2 2	1 1 1 1 1	九州大学 芸術工学研究院 准教授 (平29.9)	5日
54	専	准教授	マクヤマ オサム 丸山 修 <令和4年4月>		博士 (理学)		リサーチ研修Ⅰ リサーチ研修Ⅱ リサーチプロジェクトⅠ リサーチプロジェクトⅡ リサーチプロジェクトⅢ	1前①～② 1後③～④ 1前①～② 2前①～② 3前①～②	2 2 2 2 2	1 1 1 1 1	九州大学 芸術工学研究院 准教授 (平15.10)	5日
55	専	准教授	ヤマウチ ケイ 山内 勝也 <令和4年4月>		博士 (芸術工学)		リサーチ研修Ⅰ リサーチ研修Ⅱ リサーチプロジェクトⅠ リサーチプロジェクトⅡ リサーチプロジェクトⅢ	1前①～② 1後③～④ 1前①～② 2前①～② 3前①～②	2 2 2 2 2	1 1 1 1 1	九州大学 芸術工学研究院 准教授 (平27.4)	5日

調査 番号	専任等 区分	職位	フリガナ 氏名 <就任(予定)年月>	年齢	保有 学位等	月額 基本給 (千円)	担当授業科目の名称	配当年次	担 当 単 位 数	年 間 開 講 数	現 職 (就任年月)	申請に係る大学等 の職務に従事する 週当たり平均日数
56	専	准教授	ヨシカ トモズ 吉岡 智和 <令和4年4月>		博士 (工学)		リサーチ研修Ⅰ リサーチ研修Ⅱ リサーチプロジェクトⅠ リサーチプロジェクトⅡ リサーチプロジェクトⅢ	1前①～② 1後③～④ 1前①～② 2前①～② 3前①～②	2 2 2 2 2	1 1 1 1 1	九州大学 芸術工学研究院 准教授 (平15.10)	5日
57	専	准教授	ヨシカ ユキス 吉永 幸靖 <令和4年4月>		博士 (工学)		リサーチ研修Ⅰ リサーチ研修Ⅱ リサーチプロジェクトⅠ リサーチプロジェクトⅡ リサーチプロジェクトⅢ	1前①～② 1後③～④ 1前①～② 2前①～② 3前①～②	2 2 2 2 2	1 1 1 1 1	九州大学 芸術工学研究院 准教授 (平15.10)	5日
58	専	准教授	レイジン シェーラト バスティアン Remijn Gerard Bastiaan <令和4年4月>		博士 (芸術工学)		リサーチ研修Ⅰ リサーチ研修Ⅱ リサーチプロジェクトⅠ リサーチプロジェクトⅡ リサーチプロジェクトⅢ	1前①～② 1後③～④ 1前①～② 2前①～② 3前①～②	2 2 2 2 2	1 1 1 1 1	九州大学 芸術工学研究院 准教授 (平26.4)	5日
59	専	講師	イマカ トモコ 今坂 智子 <令和4年4月>		博士 (工学)		リサーチ研修Ⅰ リサーチ研修Ⅱ リサーチプロジェクトⅠ リサーチプロジェクトⅡ リサーチプロジェクトⅢ	1前①～② 1後③～④ 1前①～② 2前①～② 3前①～②	2 2 2 2 2	1 1 1 1 1	九州大学 芸術工学研究院 講師 (平15.10)	5日
60	専	講師	シヤン エンファン 張 彦芳 <令和4年4月>		博士 (芸術工学)		リサーチ研修Ⅰ リサーチ研修Ⅱ リサーチプロジェクトⅠ リサーチプロジェクトⅡ リサーチプロジェクトⅢ	1前①～② 1後③～④ 1前①～② 2前①～② 3前①～②	2 2 2 2 2	1 1 1 1 1	九州大学 芸術工学研究院 講師 (令和元.10)	5日

調査 番号	専任等 区分	職位	フリガナ 氏名 <就任(予定)年月>	年齢	保有 学位等	月額 基本給 (千円)	担当授業科目の名称	配当年次	担 当 単 位 数	年 間 開 講 数	現 職 (就任年月)	申請に係る大学等 の職務に従事する 週当たり平均日数
61	専	講師	ニムラ カキキ 西村 貴孝 <令和4年4月>		博士 (芸術工学)		リサーチ研修Ⅰ リサーチ研修Ⅱ リサーチプロジェクトⅠ リサーチプロジェクトⅡ リサーチプロジェクトⅢ	1前①～② 1後③～④ 1前①～② 2前①～② 3前①～②	2 2 2 2 2	1 1 1 1 1	九州大学 芸術工学研究院 講師 (令2.3)	5日
62	専	助教	カワモト ヨウイチ 川本 陽一 <令和4年4月>		博士 (工学)		リサーチ研修Ⅰ リサーチ研修Ⅱ リサーチプロジェクトⅠ リサーチプロジェクトⅡ リサーチプロジェクトⅢ	1前①～② 1後③～④ 1前①～② 2前①～② 3前①～②	2 2 2 2 2	1 1 1 1 1	九州大学 芸術工学研究院 助教 (平24.4)	5日
63	専	助教	クニノリ マコ 工藤 真生 <令和4年4月>		博士 (工学)		リサーチ研修Ⅰ リサーチ研修Ⅱ リサーチプロジェクトⅠ リサーチプロジェクトⅡ リサーチプロジェクトⅢ	1前①～② 1後③～④ 1前①～② 2前①～② 3前①～②	2 2 2 2 2	1 1 1 1 1	九州大学 芸術工学研究院 助教 (令2.4)	5日
64	専	助教	クリヤマ ヒロシ 栗山 蒼 <令和4年4月>		博士 (美術)		リサーチ研修Ⅰ リサーチ研修Ⅱ リサーチプロジェクトⅠ リサーチプロジェクトⅡ リサーチプロジェクトⅢ	1前①～② 1後③～④ 1前①～② 2前①～② 3前①～②	2 2 2 2 2	1 1 1 1 1	九州大学 芸術工学研究院 助教 (令2.2)	5日
65	専	助教	シライ ケンイチ 澤井 賢一 <令和4年4月>		博士 (情報理学)		リサーチ研修Ⅰ リサーチ研修Ⅱ リサーチプロジェクトⅠ リサーチプロジェクトⅡ リサーチプロジェクトⅢ	1前①～② 1後③～④ 1前①～② 2前①～② 3前①～②	2 2 2 2 2	1 1 1 1 1	九州大学 芸術工学研究院 助教 (令2.4)	5日

調査番号	専任等区分	職位	フリガナ 氏名 <就任(予定)年月>	年齢	保有 学位等	月額 基本給 (千円)	担当授業科目の名称	配当年次	担 当 単 位 数	年 間 開 講 数	現 職 (就任年月)	申請に係る大学等 の職務に従事する 週当たり平均日数
66	専	助教	モトヂ 関 元秀 <令和4年4月>		博士 (理学)		リサーチ研修Ⅰ リサーチ研修Ⅱ リサーチプロジェクトⅠ リサーチプロジェクトⅡ リサーチプロジェクトⅢ	1前①～② 1後③～④ 1前①～② 2前①～② 3前①～②	2 2 2 2 2	1 1 1 1 1	九州大学 芸術工学研究院 助教 (令元.10)	5日
67	専	助教	ジェミソン ダリル スティヴン Jamison Daryl Steven <令和4年4月>		Doctor of Philosophy in Music (イギリス)		リサーチ研修Ⅰ リサーチ研修Ⅱ リサーチプロジェクトⅠ リサーチプロジェクトⅡ リサーチプロジェクトⅢ	1前①～② 1後③～④ 1前①～② 2前①～② 3前①～②	2 2 2 2 2	1 1 1 1 1	九州大学 芸術工学研究院 助教 (令2.3)	5日
68	専	助教	フユノ ミハル 冬野 美晴 <令和4年4月>		博士 (文学)		リサーチ研修Ⅰ リサーチ研修Ⅱ リサーチプロジェクトⅠ リサーチプロジェクトⅡ リサーチプロジェクトⅢ	1前①～② 1後③～④ 1前①～② 2前①～② 3前①～②	2 2 2 2 2	1 1 1 1 1	九州大学 芸術工学研究院 助教 (平25.9)	5日
69	専	助教	ムラカミ ヤスキ 村上 泰樹 <令和4年4月>		博士 (情報科学)		リサーチ研修Ⅰ リサーチ研修Ⅱ リサーチプロジェクトⅠ リサーチプロジェクトⅡ リサーチプロジェクトⅢ	1前①～② 1後③～④ 1前①～② 2前①～② 3前①～②	2 2 2 2 2	1 1 1 1 1	九州大学 芸術工学研究院 助教 (令2.10)	5日
70	専	助教	モリス ト 森本 有紀 <令和4年4月>		博士 (芸術工学)		リサーチ研修Ⅰ リサーチ研修Ⅱ リサーチプロジェクトⅠ リサーチプロジェクトⅡ リサーチプロジェクトⅢ	1前①～② 1後③～④ 1前①～② 2前①～② 3前①～②	2 2 2 2 2	1 1 1 1 1	九州大学 芸術工学研究院 助教 (平28.8)	5日

調査 番号	専任等 区分	職位	フリガナ 氏名 <就任(予定)年月>	年齢	保有 学位等	月額 基本給 (千円)	担当授業科目の名称	配当年次	担 当 単 位 数	年 間 開 講 数	現 職 (就任年月)	申請に係る大学等 の職務に従事する 週当たり平均日数
71	専	助教	ヨシムラ リイ 吉村 理一 <令和4年4月>		修士 (文学)		リサーチ研修Ⅰ リサーチ研修Ⅱ リサーチプロジェクトⅠ リサーチプロジェクトⅡ リサーチプロジェクトⅢ	1前①～② 1後③～④ 1前①～② 2前①～② 3前①～②	2 2 2 2 2	1 1 1 1 1	九州大学 芸術工学研究院 助教 (平30.6)	5日
72	専	助教	ロー ピン ヤップ Loh Ping Yeap <令和4年4月>		博士 (工学)		リサーチ研修Ⅰ リサーチ研修Ⅱ リサーチプロジェクトⅠ リサーチプロジェクトⅡ リサーチプロジェクトⅢ	1前①～② 1後③～④ 1前①～② 2前①～② 3前①～②	2 2 2 2 2	1 1 1 1 1	九州大学 芸術工学研究院 助教 (平29.9)	5日
73	兼担	教授	ヒグチ シゲカズ 樋口 重和 <令和4年4月>		博士 (芸術工学)		リサーチ研修Ⅰ リサーチ研修Ⅱ リサーチプロジェクトⅠ リサーチプロジェクトⅡ リサーチプロジェクトⅢ	1前①～② 1後③～④ 1前①～② 2前①～② 3前①～②	2 2 2 2 2	1 1 1 1 1	九州大学 芸術工学研究院 教授 (平21.4)	5日
74	兼担	准教授	イケダ ミホ 池田 美奈子 <令和4年4月>		修士 (美術)		リサーチ研修Ⅰ リサーチ研修Ⅱ リサーチプロジェクトⅠ リサーチプロジェクトⅡ リサーチプロジェクトⅢ	1前①～② 1後③～④ 1前①～② 2前①～② 3前①～②	2 2 2 2 2	1 1 1 1 1	九州大学 芸術工学研究院 准教授 (平15.10)	5日
75	兼担	准教授	サカベ ヒロコ 皆我部 春香 <令和4年4月>		博士 (芸術工学)		リサーチ研修Ⅰ リサーチ研修Ⅱ リサーチプロジェクトⅠ リサーチプロジェクトⅡ リサーチプロジェクトⅢ	1前①～② 1後③～④ 1前①～② 2前①～② 3前①～②	2 2 2 2 2	1 1 1 1 1	九州大学 芸術工学研究院 准教授 (平21.4)	5日

専任教員の年齢構成・学位保有状況										
大学院 芸術工学府 芸術工学専攻(修士課程)										
職 位	学 位	29歳以下	30～39歳	40～49歳	50～59歳	60～64歳	65～69歳	70歳以上	合 計	備 考
教 授	博 士	人	人	人	12人	6人	人	人	18人	
	修 士	人	人	人	1人	人	人	人	1人	
	学 士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	短 期 学 大 士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	そ の 他	人	人	人	人	人	人	人	人	
准 教 授	博 士	人	2人	13人	14人	3人	人	人	32人	
	修 士	人	人	人	2人	1人	人	人	3人	
	学 士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	短 期 学 大 士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	そ の 他	人	人	人	人	人	人	人	人	
講 師	博 士	人	1人	人	2人	人	人	人	3人	
	修 士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	学 士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	短 期 学 大 士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	そ の 他	人	人	人	人	人	人	人	人	
助 教	博 士	人	6人	6人	1人	人	人	人	13人	
	修 士	人	3人	2人	1人	人	人	人	6人	
	学 士	人	1人	人	人	人	人	人	1人	
	短 期 学 大 士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	そ の 他	人	人	人	人	人	人	人	人	
合 計	博 士	人	9人	19人	29人	9人	人	人	66人	
	修 士	人	3人	2人	4人	1人	人	人	10人	
	学 士	人	1人	人	人	人	人	人	1人	
	短 期 学 大 士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	そ の 他	人	人	人	人	人	人	人	人	

(注)

- 1 この書類は、申請又は届出に係る学部等ごとに作成すること。
- 2 この書類は、専任教員についてのみ、作成すること。
- 3 この書類は、申請又は届出に係る学部等の開設後、当該学部等の修業年限に相当する期間が満了する年度における状況を記載すること。
- 4 専門職大学院若しくは専門職大学の前期課程を修了した者又は専門職大学又は専門職短期大学を卒業した者に対し授与された学位については、「その他」の欄にその数を記載し、「備考」の欄に、具体的な学位名称を付記すること。

専任教員の年齢構成・学位保有状況

大学院 芸術工学府 芸術工学専攻(博士後期課程)

職 位	学 位	29歳以下	30～39歳	40～49歳	50～59歳	60～64歳	65～69歳	70歳以上	合 計	備 考
教 授	博 士	人	人	人	12人	6人	人	人	18人	
	修 士	人	人	人	1人	人	人	人	1人	
	学 士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	短 期 大 士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	そ の 他	人	人	人	人	人	人	人	人	
准 教 授	博 士	人	2人	13人	14人	2人	人	人	31人	
	修 士	人	人	人	2人	1人	人	人	3人	
	学 士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	短 期 大 士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	そ の 他	人	人	人	人	人	人	人	人	
講 師	博 士	人	1人	人	2人	人	人	人	3人	
	修 士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	学 士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	短 期 大 士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	そ の 他	人	人	人	人	人	人	人	人	
助 教	博 士	人	5人	5人	人	人	人	人	10人	
	修 士	人	1人	人	人	人	人	人	1人	
	学 士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	短 期 大 士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	そ の 他	人	人	人	人	人	人	人	人	
合 計	博 士	人	8人	18人	28人	8人	人	人	62人	
	修 士	人	1人	人	3人	1人	人	人	5人	
	学 士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	短 期 大 士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	そ の 他	人	人	人	人	人	人	人	人	

(注)

- この書類は、申請又は届出に係る学部等ごとに作成すること。
- この書類は、専任教員についてのみ、作成すること。
- この書類は、申請又は届出に係る学部等の開設後、当該学部等の修業年限に相当する期間が満了する年度における状況を記載すること。
- 専門職大学院若しくは専門職大学の前期課程を修了した者又は専門職大学又は専門職短期大学を卒業した者に対し授与された学位については、「その他」の欄にその数を記載し、「備考」の欄に、具体的な学位名称を付記すること。